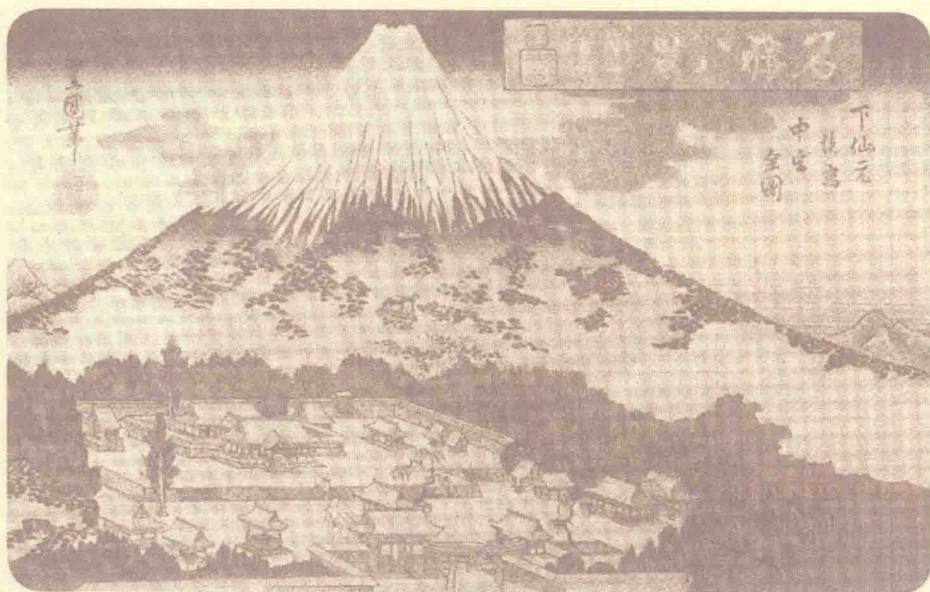


日本漢文史籍叢刊

第五輯

地理

六



上海交通大學出版社
SHANGHAI JIAO TONG UNIVERSITY PRESS

第六册目錄（總第126册）

山川　名勝　古迹

平山陳平 著

駿河風土歌

明治七年（一八七四）静岡足田正喜刻本

據明治七年（一八七四）

靜岡疋田正喜刻本影印

三省堂平山陳平著
晁塘菊池基書

挿畫
訓蒙

駿河風土歌

静岡　西田正喜藏版

緒言

國有風俗講地利者不可不識焉地有沿革讀歴史者不可不察焉是古昔盛時所以令國司貢風土記也豈唯　皇朝江漢野有死麕意同風異東山黍離沿革不一豈尼輯之以教後世乃風土沿革不可不識也必矣我　國家戊辰龍興之後沿具畢張文章輩出著書之夥奚啻汗牛充棟而未有言及國風者客歲濵松内田氏始有遠江風土歌之作其意太善惜乎專述今日之盛而不及沿革雖既得隴又不可望蜀然畢竟未完璧矣柳風

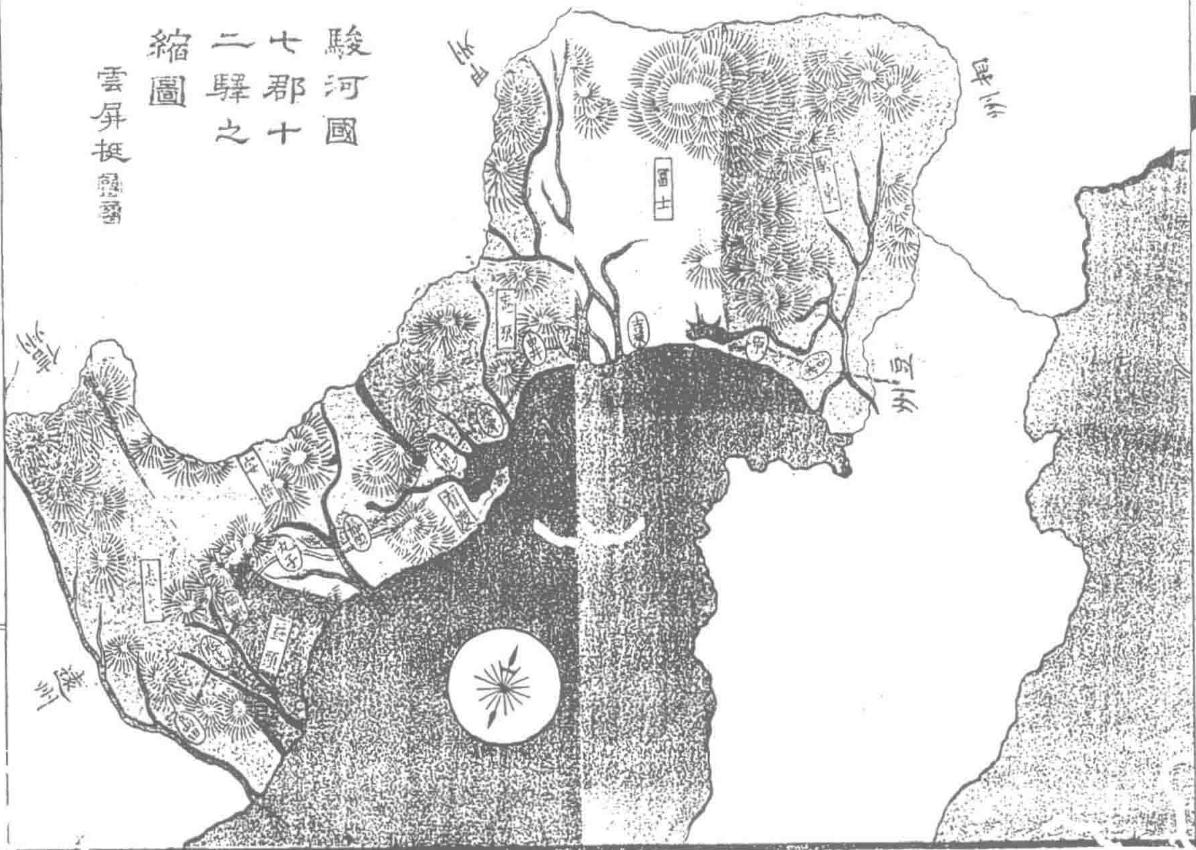
土廣、漢難索、沿革久遠、雜沂、顧予之雷
林菲識、豈得盡其、蘊、所謂非曰能之、願
學焉者也、作駿河風土歌、
明治七年七月旬一日、書于靜岡三省堂錢荷
池邊、

權大講義平山陳平識

駿河風土歌上

静岡　平山陳平著

此國を古寄する。駿河の國と名つけしそ。管下に三つの川ありて。西の果よりは大井川。中に安倍川。東には。富士川流る。此三つの。流れ早くて。旅路悩ます。難を當る。ぬるくなし水を。壽るこ地川



北心とて。す駿河の國と
締すなり。北の堺ハ甲斐
の根や。路を嶮し足
曳乃。山梨縣の管轄
所。南ハ直に蒼海原。

霞罩たる春の夕。伊
豆の山々ほのみえて。棹
歌遠く聞ゆ也。東ハ伊豆
と界して。足柄縣の支
配なり。西ハ所謂大

井川。渡までを遠つ淡
海の國。濱松縣の管ハ
なり。國乃形ハ圓なく。
縱長くして横狭し。
北乃堺ハ多留嶺。長

峯嶺山嶮しく。南ハ清水
乃港まで。八里餘を
ハかりとなん。東西里程
二十四里。郡ハ七つ駿
東と。富士と庵原と

有渡郡。安倍志太益頭
邨数は八百二十九と邨を
七の大區と定めら龍。
小區乃部分ハ四十五區。
其類を申乃謂まで。⦿
又別三万八百と四十六々
餘あまりと云ふや。歳額の
米数は石まで九千と九千
九石の餘。金額ハ三十六
万と六千九百三十圓。左

數の總計七萬と。五百八
十六石まで。人口三十七
萬も。二千六百七十四戸
まあ是れ。此数ハ年ごと
變るも。其なまとも。去年よ
今年よ。回ふ自よ。開まさ
ゆく世の後。後継に。家も
人数を。孫榮え。倍する
程よ到り。教め。すいも
只凡を記せの。季候

き候は穏やかなり。冬暖かにて春寒く。雪稀にして風多し。全國都て肥饒なる饒沃なり。只於て安倍西一郡は。甲斐と

駿河風土歌上　七

隣りて山峻く。土質甚劣りに料。嗚呼造物主は仁なる哉。不は瘠土に住副ひて。住ば茧の其来しを。摘て

製する茶の如きは。日に月に盛んにて。今は皇國の弱麗しき地。産物とせられて様もなる。寶や山渓に園となりて。丘

駿河風土歌上　八

陵を園と變じ。狐兎の栖を處ことに。開き拓きて時雨降る。神無月の初めつかた。咲揃ふ茶の花なる。黄金白銀

誰欽世代宇治の里を
塞なす利。北ハ高山ハ續
地。甲州路を萬澤越。
成島篠坂大城越信州
路なる高遠越或ハ都揉

龍爪山。錯ふ嶽愛鷹
山。從身ハえらむれとも此國の。
人ハ見えし高ふ雖
し。如何ふさまハ大八
洲。庶しゃ以下ふ為らぬ

孝霊天皇

無く。多々見なる所ら始
靈山乃。良位ふ從ひえ
まれ見なり。抑此靈山
八每與。黒田乃菴原の
宮ふ御宇。天皇の大

御代よ此山現れ出
しと。本朝通鑑ふ見えたる
此ぞ。昔山邊乃赤人ふ
天地の開けし時ゆと詠る
名歌ふと合し。書紀ふ

また古事記にも見えされハ。其ハ信とも定めかたし。歌人紀貫之。古今集はしかきに。今も富士の山を。烟立たず成りしと

あれバ。むかしハ常に立昇る。烟も空を焦かしたる。言や英語の皇國語の火山かのよそて。なかりき。今とて再度

燃出る。事なしとぞ云雖し。此山近く住人ハ。心清く道紀事に

なん。山乃高さ英尺よりて。千四百十七丈

三小國に蹯りてよて。十三州より見ゆるや。交開けさり日本。世に称らしき大山とて。そこてまや我しる越ハあらす。

聴けや印度の喜馬拉耶。高さ二千八百丈。亜墨利加洲の安得ハ高さ二千二百丈。何れも之ハ中々に、吾が芙蓉に、誇る足らぬを、千度眺らし、必ず詠まる。有功卿の、雨歌を、白扇影を倒しま、に吟しきん。文山隠士の詩をも思ひ出



瑶玉芙蓉。抑霊地
山なれハ利河流ある
以て三大河。印まを名
阿部藁科川。朝比奈
川や青木川旦乃川ある

運送ハ。便利を多し
其中ニ。彼富士川へ
積下す。甲州舟ある其
國の産物。製物積入
まいる。鰍澤より十八里。

箭より早く落来て。
三時の程ニ岩淵へ。
着ハ八里ある吉まつら。
此便阿るも又不便あるも。
鹽積入まいて峠萬斯崎ら。

三筋乃纜ニ牽戻る。
行建石や焼石。富士
川端橋水深し。嗚呼
旱日背を曝し。玉
なす汗ニ力氣あん。

ゑらひ集めし舟賃に。
起る烟も細くとも末。
是自主乃世渡りなるや
又安倍川も昔より。逆
浪する急流なれは。
霖雨の度に水溢れ。
舟をも流し橋を墮し。
旅客の患多かりし
今茲明治の七乃
とし。其の縣下北一

義人自己乃貨財を費
して造り出す橋。
梁是。其長さ二百間。
幅二間余にて二ヶ處の。
橋臺建り今より八。大
洪水にいかさまれも河
旅の患無る通ひ。況
橋の北南。堂飛の
霄閣乃空珠ら霞哉
す。文九夏三伏の暑絶

日を。戸残の幣を浮誘
引ふ。奈良乃小川にあ
らく孫せ。袂原まて思ふ
雉ん。沼ち浅畑柏原。
水族肥て蓮香し。富
士の根近く来て見れる。
言や浮世をまつ糸
乃。瀧も名高く世ゝ
聞え。騒人墨客士の歡ふ
供物利。東海道ハ嶋

田より。藤枝岡部丸子
驛。静岡江尻興津由
井。蒲原越えて吉原よ。
原よ沼津よ。十二驛。加茶
渡しまる電信機。唐土
乃古言に。空飛鳥に
玉章をと。寄せしと云る
寓言あ利。扨今ハ居乍ら
是なる文。なり一の積ふ便り眼
の前に。百里乃急を通

須まと。開ゆく世に生
まれ来。青人艸の幸
福まて。昭代の賜や。
社乃數も多くの中に。
掛巻もあやに畏き此の

花咲耶姫を。以て祭
られし國幣中社。淺間
乃社を始めとし。縣社
さ若くわふ静岡乃。と
ときはなる地。静機山の。

麓に祭り奉る。神部淺
間乃名古屋乃。社。吾
妻なる下つ毛の國や。
官幣社と仰かる。
東照宮の。御影を寫

須久能の社。其所郷
社許多あり。寺數
も千餘ヶ寺。中にも
淨土の寶臺院。臨
濟宗の臨濟寺。昔

名高き関なりし。名の
みのこれる清見寺。三
保の松原田子の浦風
景云む方もなし。全國
乃廳ある静岡縣の中央
にあり。官員甚多くあら
須。實にや只其人を何程
也。古人もいへる冗官なき
政の非。奏任官をも合
參事。次に列なる三

等の屬に史生縣掌
と。判任凡四十名。朝な
夕な怠らず。出納
租税庶務聽訟上に
遊惰の冗官なかれ。
下に不勤の區長
なし。能く情を汲意哉
通し。冤枉愁苦を
去む。士族も凡七千人
ものし幕府の世盛よ。

御旗本より可兵よ以て。三百年乃安楽を。生れ合ふ事以川となく奢侈淫佚乃風俗ふ。色よふけ流飛鳥川。昨日の淵も今日の瀬と。変る憂き果を行路難。實ハ山なとも比ねも須。求人情乃反覆なる須。即造化の妙手段。

駿河風土歌上　廿五

錦衣玉食迷楼飛閣も。身を苦しめる基を出。勤倹をなす中ニぞふ。艱く辛苦を安んなり。農工商をもれなくに。各〳〵乃職業を勵ミ。勉めるものを中よかの縣乃黎民も。米穀多く洋那少し。開化を遂地理縦と余所の眼より

駿河風土歌上　廿六

さも見ゆ通りなれど。倩思(つらつらおもふ)
へば然ハあらじ。凡物(およそもの)
皆順序あるを急(きう)に趨(はし)り
て躐くハ。ならへて浮世(うきよ)の
動ひたる鯉。牛の歩(あゆみ)乃

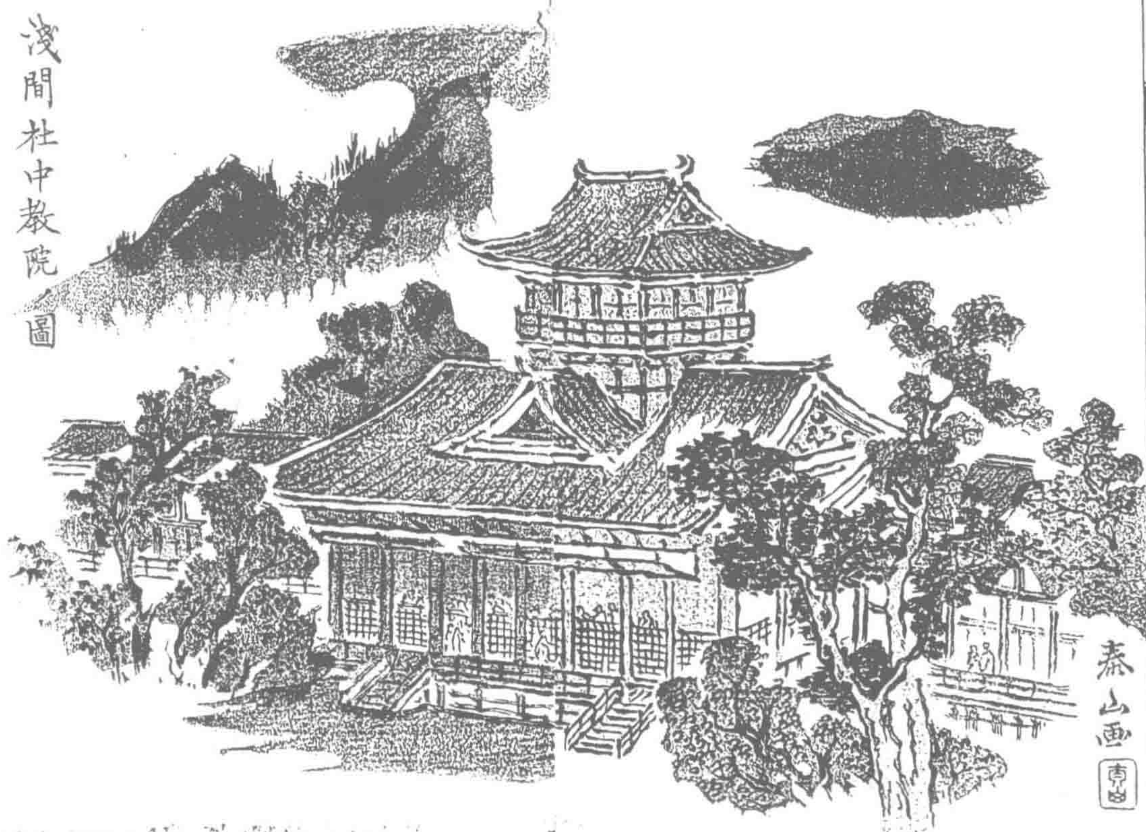
遅(ちそく)くこそ。八(やつ)智恵(ちゑ)あら
て心の雖。趣(おもむき)く開化(くわいくわ)ふ
こゝろさわきたる。容貌(ようばう)まゝあり
似(ふ)て非(ひ)なる。文(ぶん)冥(めい)怪化(くわいくわ)
とは芙まくのミ。唯(たゞ)教(をし)ふ

所ふ如くとて。文教(ぶんきやう)兩
部の学(がく)校よ日に月(つき)に
に熾(さかん)也。一乃大區の治
津ゟ悉。北亜墨(ま)利(り)加(か)の
何某(なにがし)を雇(やと)ひ來まて中

學校教師(まなびやし)と成(な)し。四大
區乃静岡町へハ龍動(ろんどん)
の大學免許(めんきよ)のマグド
ナルト氏雇(やと)ふて教(をし)ふる
洋学校語(ご)学(がく)の生徒(せいと)

冬日歳月至り。文跡乃
文字手よ熟し。蟹行
乃書耳よ盈川。況や
遍ての小学校。津々浦々
の果迄てを。漏らぬ事
無く設立。りは嬉
蜑の兒を。杣木樵まで
男の童を。諳んじ事
誦む単語篇。勧善
訓蒙。仮名。史略。加減

乗除の洋算よ。級紙
争ふよ業競。石筆
の鋒磨くらむ。中教院
吉志川原の。浅間の社
内へ設ある建。皇祖
神四柱を。拝殿の中央
へ。新よ祭り奉り月よ
六度の説教に。伎夫
嚚婦を諭須る。大
中講義よ訓導よ。



袮子を釋氏も尊らしと。進て勵む三条教憲。十一兼題十七説。探題講究明かし。嗚呼雙六の賽加茂川の水。今をむかしに世まならぬ。僧侶を一度奮發して御國恩乃萬分一。報ひ奉る世としなりぬ。

白河天皇在天の御
魂を歓ばしめ給ふらむ。
實に有難き御代なり
けり。

駿河風土歌上

駿河風土歌下

静岳　平山陳平著

抑國中乃産物も一の大區を廣く挙ん。沼津の鮮魚ハ海老一。或ハ鯿鯆白根箸。御厨大豆名を高し。二乃大區ハ是富士郡草。寺國生布也。紫川海苔。精進川ニ

山葵ハ峰。三の大區ハ奥津鯛。伊左布半切。和田島橋八。四乃大區ハ是三保砂糖。或ハ三穂海苔甘藷。静岡塗もの細工。五の大區ハ是世に名ある安倍乃紫茶も広まりて全國周智の左束紙。有東

木山葵ハ産物乃。一つなり安倍六七の区。名も藤枝島田米。世にしるし在五中将の縁。にも人よみ詠ましき跡。

宇都の山邊の蔦葉。細工。あまたよりまさりき。製物もあり。新製物ハ静岡乃。勸工三所まで押出したる。賤機織まで

澳國乃博覧會に名を得たり。桑こそ業まて夫木業に。富士乃東蚕の新綿ハ。高根の雪に色に増りぬ。

詠まれし頃も中頃よ。此業絶へありしを。維新の御代に從ひて民の開化を進む。まも再起る養蠶術。

崇神天皇

全國競進むなり利し。以
きや歴史を根據よし
なし。諸家乃雜誌を
渉獵し。硯ふ墨をと
るこの数や。二千年來の

駿河風土歌下　五

沿革を。研ふ述んと
す。抑按ずるに駿河の國は。
東海の要路よして。大和瑞
籬宮御宇　天皇乃
大御代より。駿河國の

景行天皇

名古書よ見えき。纏向
の日代乃宮に。御宇
天皇の大御代ふ。日本武尊。
東夷御征伐の時。こ乃
國の中央より。當給ひ

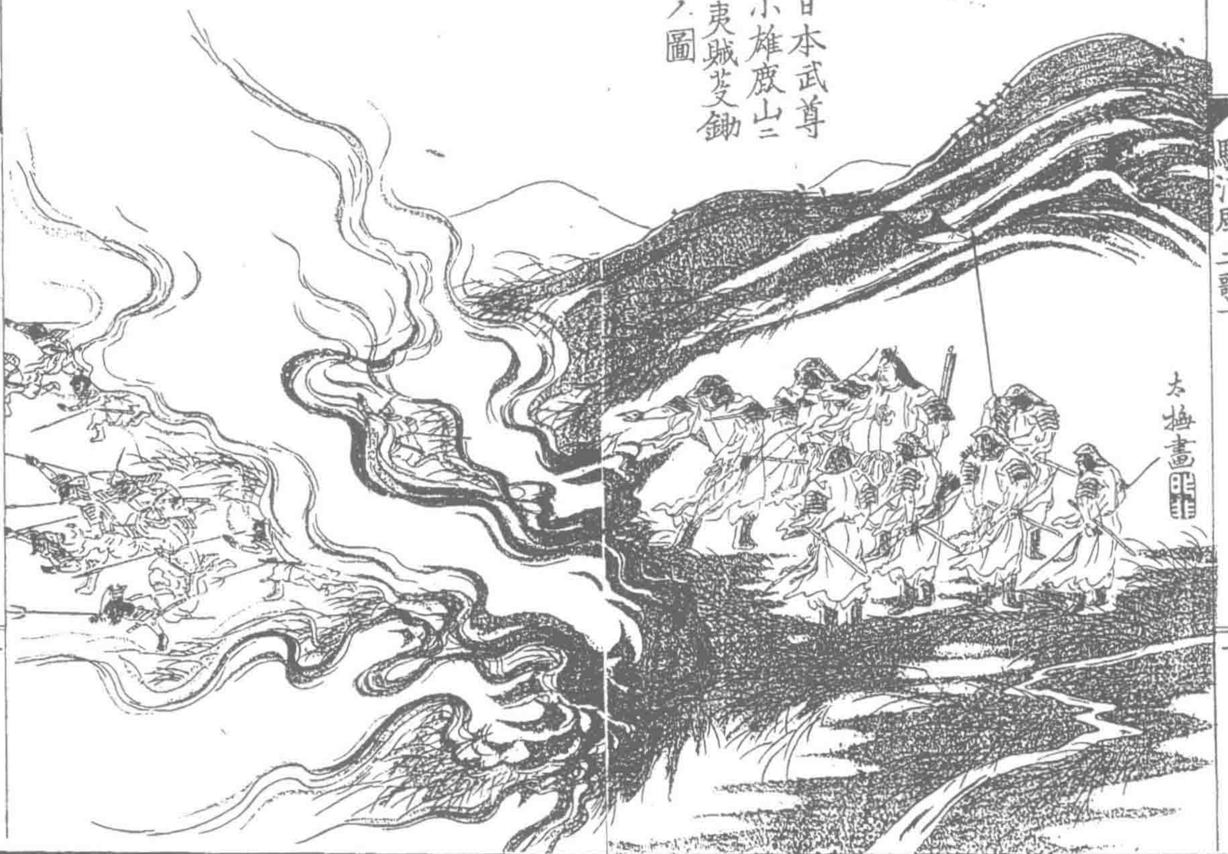
駿河風土歌下　六

叢雲の寶劍拔き賊
軍を薙拂ひ給ひ
より。燒津草薙の名ハ
今も存せり。其後御
代々乃　天皇。國ル

天武天皇

造ち宇治をしめ給ひ。遥よ年経て飛鳥の浄見原。天皇の九年に駿河国を割て伊豆国を置と見えた。

嵯峨帝乃御代初めちもえん。弘仁の十三年ふじの国に配所し絶し。新羅の夷狄叛きて。民草を殺せし



事に好学。一条天皇
の永祚元年前の
関白藤原頼忠の卿
薨し時。謚を廉
義と賜ひ。駿河公に

封ぜらる。而て光
臨荘蕁して。安徳
天皇幼弱に在まて。
平清盛政を専らに
将し治承年中。源

頼朝伊豆に起り。関
左の国々伐従ひて。
威を鎌倉に震ひ
しもの是。清盛是を
伐んと将す。維盛

忠度知度して数
萬乃軍勢引率し。
士の富士川に陣
取りて。水鳥乃羽
音に驚き。今かへ其てを

たちまち敗軍して笑を
後世に留めけり。
幾程もなく平氏
滅ひ。　後鳥羽天皇
の建久四年に頼朝

まつり富士の根に
狩ありし時曾我兄弟
乃仇討あり。今も口
碑に傳ふる事。駿東
郡愛鷹山に像を

ここに名を留めし武
名も青史に赫しけり。
二代将軍頼家の時。
其侫臣梶原景時。
西國に奔らんとせし事。

諸國を過りし時豪族
吉香某の為に殺され。狐
崎にて討もしたる。我
一の何に勢ゐ所ゆゑ
景時か馬蹄の跡とて。

今も山脈に残りけり。その頃また頼家の叔父。阿野法橋全成當國にあり。土御門天皇の建仁三年。故ありて誅せられけり。子阿野冠者時元も。此國に住居しける。鎌倉三世滅亡の時。おのつき源氏の嫡流なりけり。

駿河風土歌下　十三

實朝の後を継んとて。北条義時に滅されき。かくて世運衰へ傾き。御裳川の流れまで。有るかなきかに衰へて。倍臣國命を取りけり。時に。三浦の義村。此國の司たりき。其子若狭守泰村。北条時頼に滅されき。

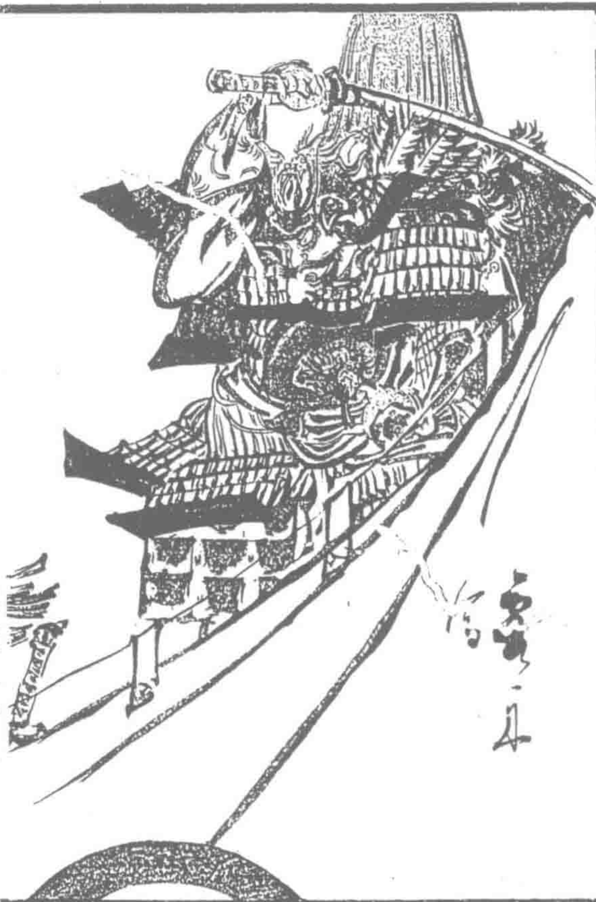
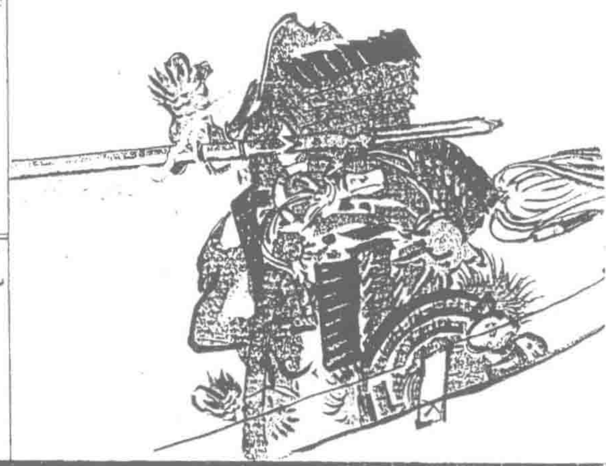
駿河風土歌下　十四

後醍醐天皇中興ましまし。功臣を賞し給ひし時。脇屋右衛門佐義助を。駿河の守護職に任ぜられ給ふ。天日嗣川に分れしころ。北朝の指揮として尊。今川貞世入道了俊。此國を守護せしよし経。足利家乃七頭なりき。

武者頭の一人なりき。其養子仲秋を。教諭せし誓紙乃存く。今を梓にちりばめて。児童の耳に聴しめり。嗚呼悲しき此の如き甚しき縁。先教を忘却し。文道すり學者をうしなひき。父義元を驕奢乃始く。子の氏真ハ蹴ふに溺れき。

正親町天皇乃。永禄の
三つのとし。五月十九日乃
事とかや。尾張國桶
狭間の戦ひ。織田信長
乃不意をうち給ひ。総大将
義元を。毛利秀高に
手に掛られ。世臣宿
将戦死多く。大敗績
まて義元の首を織
田家へ奪取られし。旗

をさすがの今川様の大龍
山臨済寺へ葬りまし
まつる今を程ある年五
月乃今川忌日のありを
降らぬことのなかりしを
子乃氏真は。父の仇
討むともせず。文目
春に遊び盤踊。飲や
歌へや一寸先は。闇
夢の世や三年の夢。

今川義元桶峡殊死戦之圖

覚て甲斐なる甲斐の領主。武田信玄に攻撃され。其身も相模に食客。名家忽ち滅ひてまた程。かくて後も亦

模の北条氏政と甲斐の武田信玄と。冨士川東西の地を争ひて。沖津蒲原薩埵山合戦中も何あらそ

おゐ。強壮なる疲れ。老
弱ハ死す。實る世の中
ハ戦争程。天理を背
く物あらん。天正元
年夏四月。武田信玄

病卒し。其子勝頼家
を継ぐ。逆政暴斂民苦
しむ。織田公大ひに怒
討せんと。同じく十年
春二月。三道より甲

州へ進撃す。三河
乃領主徳川公。先鋒
國を經て。小河内
路より甲州の。万沢口
へ討入りけり。そもそも洪徳

川公は。當國と舊縁
あり。そもそも今川義元
乃。蔵なりし時。竹千代丸
と申す七歳なりしが。
人質として此國へ。十

年餘りの星霜を送らせられしの地也。今に猶舊蹟多し。大龍山有り。「手接乃梅あり。手習せし。硯文庫を残り

たり。去る程に武田滅び。此国を織田にしより。徳川公の領據られ。豊國明神相模なる。北条氏を

討滅し。東照宮を関東へ移封し時此國を。中村式部一氏「宛行はれ藩國有り。慶長五年秋九

月。関ヶ原乃役了る此国再徳川氏の。領地と成りて東照宮於。終焉の地となりける有り。後水尾天皇

此。寛永二年春正月。三代将軍大猷公の弟なりける忠長卿を。此國に封ぜられて。駿河大納言とぞ申しける。幾

程もなく罪ありて上野國高崎へ追放せられ。此國長く征夷府の直隷となりしも。こゝに慶安四つのとし。

江戸の城下を騒がせて。謀叛を起し事成らず。まゝの町にて屠腹し。逆賊由井乃正雪とて由井の里なる商

人乃子にて有りける程寺町乃。正雪邸乃名を聞し。来友の交群飛て。他の國よりも絶て無紀。蚊蜻蛉も

呼ふ雛鳥を西雪晴
蛉と名つけしを。家に
陰悪乃報ひなる事。
其後國乃干戈に
争無く。府中の番士

三十人。與力二十騎
同心百人幕府譜第
乃牙兵の中より城代
一名命せられ。三河の
加番よ掛川番よ。百日

監察乃町奉行。代る
／＼に守衛ありく。星
霜爰に二百年。伏土
の民も期せしも。著
るも常に然かなき。

發より柔情回備乃。
風俗も京少ありに。
去る程に
今上の御代新に成。
明治改元乃とし。

赫怒東征し給ふ時。
人民簞食壺漿し
て。王師を迎へ奉る。
其の後。介冑狼藉の
中にありて。其の城下

も浪風動の後。舊縁
あれば潤ひ名なる德
川三位中将に再ひ
此地を賜はりて。數
萬の士族も寄る。護

河の國は白波を静
岡藩と一變し再
變して縣と成る。
故領主は東京華族
士族を携へて出仕

して。登庸せらる
者多し。御代も静かに
静岡の人の心をしる
操の。山は叢に生ふる。
青人艸も芽出さ



駿河風土歌下

可程以李。

岳塘京池基書

官許明治七年第十月

權大講義平山陳平著述

靜岡　疋田正喜藏板

駿河風土歌

諸國發

東京　山中市兵衛
同　稲田佐兵衛
同　三家村佐平
西京　田中治兵衛
大坂　柳原喜兵衛
尾陽　片野東四郎
三州　稲岡佐橘
信州　竹内禎十郎
同　高見甚左衛門
遠州　伊勢屋太右衛門
同　白木屋健次郎
同　松屋好三郎
豆州　小西又三郎

成島柳北 撰

柳橋新誌

明治七年（一八七四）東京府奎章閣刻本

據明治七年（一八七四）
東京府奎章閣刻本影印

紀元二千五百卅四年第四月刻行

成島柳北戲著

柳橋新誌

東京　奎章閣發兌

嚮者何有仙史見示此卷。受而讀之。茫乎不知解也。自以爲余遊屐未遍之由。恬不爲怪。既而墨陀之花。二州之月。綾瀨之風。真乳之雪。舩必聘妓。櫻擷喚酒者。殆將七八年焉。於是乎以爲粗得箇中趣矣。而再閱之。茫乎如初。恍然自失。於戲仙史其仙乎。何其才之浩博無遺

其文之奇幻無窮。殆人于五里霧中而不見津涯也。抑凡骨如余。果不可窺真僊境耶。涉歎久之。仍恐後人之復迷津筏也。贈以一言。曰。不具仙骨。勿讀此卷。

己巳年己巳月己巳日己巳時。伴鷗醉漁書

柳橋新誌序

往日有靜軒居士者著江戸繁昌記備摸八百八街之景狀賭場劇區無所不載無所不說其文極詼諧而其事則明詳使讀者臥知其地之所有雖有諳熟闤都風俗之人亦不能附益一事也然其距今過二十年物換俗移地之熱閙冷索相變者不為少矣往時新地深川之妓院綺羅為業者今乃索然無踪神明芳坊之孌童肆與娼樓相抗者亦寥乎斂影其他各處之繁華日衰月瘠能及古者鮮矣若芳原品川亦比當日所說則減五六分嗚呼使居士觀方今之狀乃將愕然而驚慨然而嘆不知其人尚存否然此大都之繁華奚其可掃地而盡矣徵于古而盛于今者亦有焉柳橋是也柳橋何因而然因深川之廢也凡物太盛而頓衰者靡不復興矣譬諸將家猶新田氏歟乃今之柳橋亦深川之死灰再燃者而其盛殆踵其舊云噫今而不記其盛乃亦過五年十年安知凋零不如今日余也狂愚一書生凹硯秃筆僅糊其口者無居士之才無居士之學加之赤貧如洗未曾一日遊其境而驗其實焉足記之然喜聞蕩子之說話覩市街之圖冊得窺其槩畧遂偷一夕之閑而記

文之鄙俚事之猥褻使正人君子讀之乃將唾而棄焉然正人君子所能記者固不俟余記之正人君子所不能記者而余輩所當記也蓋記余所知者耳所不知者亦將有狂愚若余者而附益焉

安政屠維協洽之歲早梅將綻之月何有仙史書於鎖春樓之南軒

柳橋新誌初編

藤野潔

橋以柳為名而不植一株之柳舊地誌云以其在柳原之末命焉而橋之東南有一橋傍有老柳一樹人呼為故柳橋或岳其橋有柳則從昔之柳橋而今之柳橋則後架而奪其名者其說與地誌齬焉按故柳橋之正稱曰難波橋而知者少矣彼此錯考則地誌之說似當夫柳橋之地乃神田川之咽喉也而與兩國橋相距僅數十歩故江都舟楫之利以斯地為第一而遊舫飛舸為最多矣其南赴日本橋八町渠芝

浦品川者北向淺草千住墨陀橋場者東則本所深川柳島龜井戸之来往西則下谷本郷牛籠番街之出入皆無不過此者而遊五街娼肆觀三場演劇及探花泛月納涼賞雪之客亦皆取水路于此故船商之戸舟子之口星羅雲屯非他境所及而釣艇網舸之徒亦居其間橋之東西連兩國橋之南北各戸之舟舫舳艫相銜楫櫂相撃其數不知幾千艘而盛夏之候遊客麕至揺揺泛去日夕不見一葉接岸可謂盛矣至若酒樓之莊麗甍瓦相映茶肆之瀟洒幟簾互飄炙鰻店芬香襲鼻屠豚舗鮮血汚屨餅店之餅可以継過黄河之水果舗之果可以彈盡齊閭之禽鮓舗麪舗曰何曰何所欲無不得飽者而朝所具者暮則乾乾賣盡焉飲食之客来于此者其夥可知也而斯地之繁華超于往日者則非此而在彼彼者何曰歌妓也江都歌妓之多而佳者以斯地為冠芳原品川固皆貯歌妓然以娼為主妓則為之役耳劇街亦為觀客設而非專重之竟所以不能及此也其他若新橋芳坊麴坊仲街松井街者僅比斯地十之二三而已蓋柳橋之妓其粧飾淡而有趣其意氣爽而不媚世俗所謂飲神田上水江戸兒之氣象者而存

深川餘風也起乗于他方亦以是非耶聞十年前其貧不甚多近歳月増日滋或三十或五十今茲春夏之際則至一百三四十名土人云未曾有之盛也而酒樓朝招船舗夕邀至熱閙之日無一人空手在家者蓋妓之售技一歳内以二三五六七之月為最正四八次之而聲譽頗噪者雖三冬寥索之時亦不曠一日云夫都下當今之習士也商也皆自詐曰貧矣困矣不知有何人能遊斯地而使為如此之盛耶告子有言曰食色性也斯地富斯二者宜哉客之源源而来昏昏而耽焉夫子嘗稱於水曰水哉水哉易云

舟揖之利以濟不通斯地亦富斯二者宜哉客之来耽者亦稱嘆於此而不通之人亦能得為通矣豈不盛乎

船商之家俗稱曰船宿船宿之住斯地者分于四區一則在橋之東岸及南路者曰丹波曰上總曰日野曰伊豆曰升田曰中村曰尾本曰吉川曰藤本曰飯村曰若竹曰新上總曰山田曰竹屋謂之柳橋表街一則在橋之西岸者曰信濃曰寄玉曰三浦曰相撲曰福吉曰新若竹謂之柳橋裏岸一則在橋之東南米澤街者曰福吉三浦播磨相撲長島謂之米澤表

街一則在其南故柳橋之側者曰伊勢鈴木海老芳野桔梗二見尾張柏屋謂之米澤裏岸又稱故柳橋岸此四區土俗謂曰四岸合三十三戸傳稱米澤街之地往昔有津令之船宿皆當時護津者繼業有年而松吉大黒二家近歳産傾而去始欠舊貫而柳橋裏岸之福吉則代松吉開業者云四岸之相結也如親戚然患難相援吉凶相問若二岸有爭二岸解之一岸有曲三岸議之故舟子為姦一岸逐之者三岸亦拒之而若橋北之藤岡八幡桐屋者不與其盟也船宿之為家有貧富冷熱之異而大抵伯仲家必有

樓樓有内外小者外樓耳家人皆棲止於下迎客于樓其畜舟子上食四五人下食一二人皆繫屋船猪牙二三艘而有上家造舟託諸船宿者謂之邸船其艫插條鐵以為識各建其家章幟得着紙障如官船便而有威故船宿自造而假士名者亦有焉遊舫之最大者俗謂之屋形稍小者謂之汁翻各扁其名曰某丸是則非其定業家不能造也若小松屋之小出丸明石屋之岩戸丸者大都内僅有七艘耳夫遊者尚洒落與便利者觀月納涼載妓齎酒一屋船而足矣何須屋形之徒莊大而太迂緩乎彼則充濃粉膩

腰之妃嬪逍遥于水上之用供佞佛媚僧之翁媼修施餓鬼講之役耳但輕舸則夜闌意急疾赴三谷溝之客可以換街輿之脚者任舟則暮春潮退撈蛤于品江之日亦可以扶屋船之役者共不可廢也船宿各家執其家政應接賓客者其妻也世俗所謂女天下者余亦目為女将軍女将軍毎家倫俐口給無有一撲愚者蓋擇之耶将習而熟耶主翁乃日外出叫盧喝梟或聽俚講落語若有爭闘走而解説之否則坐睡于茶爐錢匣之間耳客之来船宿者其趣不一有事而借舟者有焉乘而遊娼郭劇場者有焉假而

碁者博者瞴者話者有焉招妓呼酒者有焉而船宿
所貴者則妓客而已夫屋船之價雖係水路遠邇而
不出三四銖上猪牙閃牙而飛荷足窮足而行僅是
四五百錢而止雖日出數艘亦不足以為有贏況碁
博聽話之防火丁伍長爺僅投其席價茶錢去者乎
故所以妓客為貴也貴中之貴稱曰米櫝以能使其
家飽饜耶余恐身為船宿米櫝之人自已家中之米
櫝不以乾乾空了名則船宿而其實以妓為業有許
客與妓偕宿者呼之謂妓宿亦可聞深川之盛也船
宿誘客與芳原稱引手茶屋者同致而此則傳其風

而計出其右者也客至女将軍趨而邀之口巧眼捷
直看取了其貧富與慧愚富與愚是彼之所欲也何
也慧則難欺貧則少利至愚而鉅富是真奇貨可居
者即時遣人酒肆送来酒殽殽頓列酒頻沸女将侍
抔杓話一話笑一笑曰頃日新妓揭名幾個某艶色
某絶技請試一招嬌舌衔花滑唇説春客心酔不能
不頷焉若舊識客有狎妓者来則招之不待其頷也
妓至開障必唱請怨二字就席必唱今夕奉謝四字
先拜客次拜女将既而妍臉獻媚嬌絃表情女将在
傍使舵于其間抑揚鼓舞其妙不可口可謂不愧其

業矣客魂飛神揚不知手之舞之足之蹈之遂探懐
抛金于妓及女将若干而後絃益添嬌杯益加妙若
豪客則併妓之従者家之嫗婢皆受其纏頭客與妓
相識不特絃歌酒肉上者則女将為之媒也如此者
則五節二季為妓有贈而船宿亦必受賜有力者則
若天王祭蛭子祭之時亦衣于妓席于船宿是所謂
米櫝官家者蓋一船宿而才有一人耳其他勸客舟
行伴妓烟火也上卯也皆於平常船價之外因利亦
多矣凡妓之被酒樓船宿招者得其身價于客二方
金而二百錢為謝二方而四百三方而六百船宿取

肴于酒肆者亦二銖而獲三百錢許其既獲諸客復
獲諸妓復獲諸酒肴其利幾許耶所以獲之者則一
女将三寸滑舌鋒耳余聞諸浮屠氏曰叫喚地獄有
熱鐵鉗能抜取詐人之舌未知果能抜得他滑舌麼
又聞往昔巴姫能揮薙刀斫敵将于萬人中未知姫
之刀及能敵他舌鋒麼中庸云白刄可蹈也嗚呼姫
之刀及雖銛余能蹈之若他舌鋒則一蹈即脚滑臂
痺骨亦脱氣亦呆軟軟痿痿與海鼠一般可畏矣哉
酒店隔三里腐店距二里此是荒村僻邑之人家當
今大都内陋巷小衢猶十歩一店百歩一樓松江之

鱸杭州之酒可坐而食飲況繁華如斯地者乎酒樓之夥亦冠于都下曰川長曰萬八在橋之北曰梅川曰亀清曰河内曰柳屋在橋之南平三也深川也草加也皆張帘于米澤街之側而柏屋中村青柳三樓亦咫尺隔水耳其他若丸竹若松和泉佐小松亭小店子肆指不暇僂也就中酒肴最佳者川長也柏屋次之萬八河内中村等家則俗稱貸席者而為石軍道子之書畫會陶朱猗頓之醵金會及歌舞插花之師開業試技者假以牓逞募衆也聞與代藩士始來于都者必先飲於梅川若青柳云以其名播世已久

歟然梅青二戶近時漸衰而酒肴味殊不能及龜清之徒矣鮓鋪則有安宅與兵中川鰻肆則有玉甚山口舟沿客若一拍手則珍羞芳饌舉乎而陳凡酒樓各家晨起使店丁赴日本橋而買魚歸而邀客客不知而夙至乃辭曰河岸未歸矣故客之來始于巳牌有士有商有豪農有良工醫生數頭西瓜堆席宮娃一團石臼登梯長劍横側鳶肩鳥舌而飲者西海新來之藩士也占閑室狐睨鼠顧而食者東山持戒之僧侶也各樓饗客其法一也先供茶菓而酒羹疊膾也炙魚也以次陳之陶椀羹為殿飯則任客之飡不食焉雖有音美粗惡之異一口之價最下而一銖上而四銖耳夏月客至酒前不浴不快故設浴室皆雅潔不若混堂褻而穢也為客製浴衣各染其家章若名浴衣而飲爽涼可賞而可以曝衣襦之汗蓋浴室最佳者柏屋也且四時沸湯風雪之日可以融凍酕醄之夕可以解酲非若他樓唯為炎熇設焉其既浴矣又既飲矣不可以莫妓招妓于酒樓與船宿同致但至留客宿妓之計則無有焉余聞諸一友人梅龜二樓客有船宿之風蓋主人為不知而使婢為其媒其或然要不如船宿便而密也酒樓之法客携妓

而來則為妓設其饌所就我家而招者則不設焉而妓在酒樓不敢醉飽用意謹飭接其主婆及群婢勞於接客否則曰彼兒驕矣彼婆婪矣目以饕婦嘲以擬客至議口評鼻為牛為馬而不敢復招雖有知已客來命之或否以不在焉故妓往往請客拋婢以一片金如然則敬其客而親其妓昨議為牛馬者今乃如姉妹主婆面前稱其慧他客席上亦說其美嗚呼人情翻覆唯金而已金也能變痴為慧化醜為美故聖人說易曰乾為金又曰乾道變化妙哉其取象也金之利用大矣哉夫士而有祿商而有業豈莫可食

之衆可飲之酒乎而故就市撲費金于酒食又費于妓又費于婢其費可知也其食所嗜可矣其溺所愛猶可而耽湎之情遂至以其所愛及其所不愛者也可笑而已雖然這般可笑之事亦非余輩赤貧書生所得為也孟軻氏之言曰食前方丈侍妾數百人吾得志弗為也軻也道不行矣言不聽矣縱令欲得此樂而不能也故有斯言耳若使軻也實得其地則安知其喜而不寐耶若夫余亦得為這可笑之事則將風顛雀躍至死不悔奚暇患他人可笑乎而今援毫費紙記人之可笑亦是出於囊橐懸罄憐己羨人之

情耳是亦可笑是亦可笑

均是娼妓也賣色而不賣藝者俗呼謂女郎賣藝而不賣色者呼謂藝者往時深川之妓則鬻之以二通證書而許兼賣色藝者也謂之女郎藝者而可柳橋之妓賣藝者也非女郎也而往往賣色者有焉何也以有深川遺風然耶而深川則公賣焉此則私賣焉公者常而易為私者變而難為是其所以不同也凡人嫖女郎也可以與聯招藝者也可以聽其技而不可與聯矣而與其不可聯之人聯使賣其不敢賣之色謂之轉馬按以使他轉移其定業若轉了蹯伏不動之石也或云轉推倒之意謂屹然執節者失所守而仆也未知孰當俟考證儒家之定說矣夫轉妓也似易而難似難而易何也彼所不敢賣而我使之賣焉犯公禁而為私姦其難一也我悅彼之容技則彼亦擇男子之才貌與女郎不論客之美惡而勉侍牀笫者異矣其難二也彼所不肯則我不得強成事強之即去人家主翁於其婢亦然況水中浮萍無所適依者乎其難三也善哉俳歌者有句云萍花今日開他岸乃可以證是所謂似易而難者也彼亦人也豈無情哉我以情而遇以情而說彼不能不動矣其易

一也彼皆長于嬌絲溜哇之間慣於風月烟花之遊與人家孃子深嚴自守者不同其易二也當今宵壤間無男無女所好所欲者唯黃金而已一事一物緣之則金衡之亦金金而不吝則除却王后鄭婦二流之外何等女子有不到手者哉況貧窶鬻身如彼輩者乎其易三也川柳家之詞云守宮讓效佐渡壤守宮俗為媚藥者佐渡壤謂金也亦可以證是所謂似難而易者也知此三難三易之理者始可與語轉妓之法已矣然徒知其理諳其法而無其具則亦難能為焉轉妓之具有三曰才曰貌曰金而金為重矣其

徒有才貌而無金則計難得而施譬猶無器械而戰
必不克焉然有金而無貌則彼愛金而轉也非愛我
也金在則親金盡則離譬猶釣魚人餌竭魚即散焉
有金而無才則亦詐偽百出貪惏萬方我懵々焉而
不知唯欲充其意不久而財盡產傾而已譬猶喫鴉
片烟者甘其味不覺其毒遂以斃焉故曰三具不備
則雖知其理諳其法亦難為焉若夫兼有此三具而
能悟得三難三易者則當使柳橋一百餘名妓駢枕
戀死而已何啻一轉再轉也哉可謂風流壇上之飛
將軍紅粉界裏之活佛矣此是世間不多有之人請

評其次有金與才者雖無貌亦足以為一大快遊焉
有金與貌者雖無才亦可以得彼愛而為貴客焉無
金與才而有貌者無金與貌而有才者並是下等不
可為者也試擧二者才者猶可為也貌者不可為也
何也曰貌死物也才活物也死物不能變而活物能
變焉夫無器械而戰其敗必矣雖然陳渉之徒鉏耰
棘矜起于草莽一朝打破彊秦三十六郡清太祖僅
以遺甲十三副興于北韃竟奪據支那四百餘州豈
非應變而動觀時而發遂成其志耶善哉子輿氏之
言曰可使制挺以撻秦楚之堅甲利兵矣其如此則

雖無器械亦可以有為矣若夫遊客囊底二三銖金
亦猶清祖之遺甲陳渉之耡矜也若能應變觀時而
謀其功則焉知些々乏金能使彼妓不敢說虛誕八
百話而誠意奉承一府轉來不待如深草少將九十
九夜往而挑之也哉而後益磨我才銛鋭我舌鋒使
彼所攫于外者以捧送於我則我器械亦可以大蓄
焉是謂之成功其如此則與彼打破三十六郡奪據
四百餘州其事雖有大異而其趣則一也呼之謂飛
將亦可矣命之謂活佛亦可矣是無他特以其才耳
故曰無金與貌而有才者猶可為也蓋此等評論為

有名茂書發之耳及凝々折腰妓則一擧手而毬轉
飴黏何有于講理說法乎哉嗚呼客之招妓者太多
矣有聽技者有耀豪者有為勸酒者有為饕人者何
必人々樂其轉者已矣哉而今反覆論說之者則非
誨淫誘蕩之意也蓋柳橋所以致今日之盛者即是
賴轉之一字耳矣故記其盛則轉之論說不能不審
也讀者莫嘲而可矣
人有長幼之序則妓有大小之別大妓即藝者而小
妓俗呼謂御酌以其不彈三絃徒侍御杯杓也大妓
之定價晝夜八銖若自辰及子乃或加四銖一漏刻

問招之亦四銖小妓則其半也謂之半妓亦可客於
定價外有投謂之花花之為言華也謂華其莚也花
亦大抵四銖于大妓二銖于小妓衣服之制亦有別
大妓曳衣于地左手摂其衽行謂之左衽其帶全帛
俗稱全帯者袙衣白其襟小妓則搴束于腰而不曳
帯之面背異其帛謂之合肚帯袙衣紅其襟大妓所
職絃歌也其技有長唄有富本有常盤津而清元居
多而宴席上所彈者止于短哇新詞小妓雖有善彈
者不許其彈以僭奪大妓之業也故皆學舞凡小妓
不論年歯之先後必姉事大妓而大妓於舩宿女將

亦必以姉稱之蓋酒席上大妓彈而小妓舞可以備
觀也而小妓之舞大妓之彈有巧有拙不可一同視
也蓋十個中巧者三拙者七美者多拙醜者多巧醜
者以手謀沽故專攻之美者以面謀沽故疎于手客
亦取面者七而取手者三故拙者多利巧者少利而
有技色共下而亦能沽者可謂奇矣余嘗質于友人
以此奇曰聘妓以技與色耳若兩失之則何所取不
若在家弄娨子不須費財友人咥曰吾子知其一未
知其二者繁華都内遊客幾許而人心各異有悦其
色有賞其技有愛其氣有好其風者色與技固所重

也而妓之喜任俠而不吝其財重然諾而不辱其人
者蓋室婦閨女所不夢視也姿容潔而粧飾淡進退
動止不失其地言辭應對不瀆其時則亦非妾婢所
企及者是妓所獨有而他人無得而能者也容技而
空者之流以此非耶余聞此解宿疑頓釋既而復生
一疑曰藝者而無藝者猶有所取然世之儒者也医
者也亦是着者字之人儒而不知四子六經為何道
医而不解素問靈樞為何方者亦往々有焉此二者
與藝者而無藝者一般是亦有所取耶尋思推究忽
焉拊髀曰無有焉無有焉不須復質諸人也夫修身

齊家之講若無所用則不如彼短哇新詞以悦人耳
兵補陽調陰之匙若不辨其治則不如彼鼓興勸醉
之象撥矣可笑而已吁嗟濟世播敎之士司命救夭
之人而却有愧于婀娜纎弱之女可勝哀哉聞曩時
之妓往々巧諸技有吹笛撾鼓者有善俳歌闘碁者
有以脚為舞以喉為簧者若拇戰則無一人之不巧
今乃否僅撫三絃耳拇戰亦皆極拙至有不全解者
而近歳拳戯若藤八来来三拍之手亦無不可抗對
者云噫儒之於文章詩賦医之於鍼灸物産亦皆無
及古者就彼論此寔使人涙哉一哀一笑又一涙而

記之則非以罵人亦以自罵耳矣
橋之南右衕為同胡衕乃妓之巣穴其北而裏岸南
而廣巷櫛比而居街居有表裏熱者居表冷者居裏
其為家貧富有差然不太異其趣外掩格子戸内安
方火桶桶潔無塵鐵瓶倣鴛鐵瓶翟灌暖灰鶴鶴妓
在桶側於倦晝眠大抵妓皆驕恣懶惰斷不為女工
調絃歌塗脂粉之餘才為一事然至拜祀神佛乃皆
勤焉作棚設神位有金毘羅有帝釋天有不動尊随
其所禱而異棚上必安一莖金陽物而繫小繩於其
傍柱貼紙縛之纍々而下蓋客所纒頭插諸帶歸而

裸其金貼其紙以縛之也謂如此則能招其伴其意
蓋誇人以能售耳妓之事佛者倍於事神必主其宗
祖而妓家十之九則日蓮宗也崇敬之牢固比常人
羸一着蓋自己平素所為詐譎貪婪罪業甚重故欲
假祖師之力死後不陥地獄而已余謂彼身即地獄
別有地獄乎彼雖為日蓮宗而其魔方幻術雖耶蘇
宗不能及也凡妓家有父者十之一有夫者百之一
大槩妓與母二人而居猫若猧児養一併三口而妓
善狐媚母貉而衣猫也猧也必道母子皆吾族何獨
獣視我也入獣之穴與獣狎者謂之獣亦可而為獣

者亦多哉客至老嗠急呼酒殽談笑逞謔或賛客之
服飾態度或説児之戀々瞻望離以家之窮乏喃々
喋々興熟酒凋乃促客上樓而睇樓則孃子粧飾之
處奩具伍列若無樓家太虧便及客欲睇時老絡稱
有事而出避之云蓋狎客在家則雖有他樓之招辭
以疾若不在余友愛笪子嘗語余曰就妓家而遊迺
勝船宿酒肆之多費多眼然亦有所不足妓貪可忍
而婆貪不可忍況有婆而帯姫者是最可怖者然不
可一概論妓之引客於家有利其財謀擬却船宿而
逞己欲者有愛其人欲不令徒失貲於船宿而求締

好者而妓宅之遊比諸他樓費少而事密情濃而交
久矣可謂佳策故妓亦非洞察其人之身上意内則
不引焉而婆亦有貪不貪猾不猾之異豈可槩視乎
貪猾者多假母也否者必生母也而假多而真少何
也使弟児侍人杯杓承其顔色甚則使之與娼婦同
業寔所不忍非貧寠無為者不為也夫少艾而為娼
妓者老而不能守家事夫故又買窮人之児使之為
吾舊業者有焉其他買女為妓以為生者甚多是所
以假多於真也假母之於客也禽視之以女為囮務
謀有獲真母之於客也或狎視之至徇情而遺利故

假者淆濁眞者否二者之得失亦大矣蓋斯地與花
街固禁買女子以售故假者亦公言兒爲養女儕
酒家皆稱酌人一家畜數人皆以姉妹稱或異家稱
云大妓之年紀自十七八至三十小妓則十二三至
二十而自稱其齡常縮二三歲甚者七八人々皆縮
不知帶下叢茸芳草一摩而判春色瀟闌韻端淪消
微波難隱覺秋風晴起可一覧耳假母之買女子爲
妓也自幼養之則其價低而其期久仍教之歌舞襲
之衣服至成立則可以擅利也其伎藝罨熟而年紀
恰好者則非二三十金而限一二歲乃不能得焉或

半價買之鴇母與妓中分其利者謂之敲分如此者
鴇母客視之妓亦不母事之也凡客贖妓而爲妻若
妾者其價從其姿色技藝與冷熱而軒輊多而一百
金寡而二三十圓至權貴富豪不論其計而假母貪
惏無厭而眞母否以情故也曼翁板橋雜記云親母
則取費不多假母則勒索高價人情無涑而可知矣
親母或併其衣服器物亦送之至義母則剝其皮裸
而沽之故眞猶可愛而假可最惡也況乎假者不知
其誰氏女乞兒之兒耶抑王侯之種耶贖之爲妻妾
何等意思傳云買妾不知其姓則卜之噫彼徒果能

卜之歟齋戒沐浴卜諸家廟則禮也懷二十四錢走
問柳原嚴君平亦卜也余嘗見一卜者爲人筮贖妓
遇蒙䷃之蠱䷑曰勿用取女見金夫不有躬无攸利
此其不久而奔乎蒙昧而不明也蠱壞而有事也不
明以信其欺壞則生變況此女唯利是視豈能守家
以終乎余從傍問曰此女子其種貴賤如何卜者曰
坎爲馬巽爲臭艮爲毀折不知個是那處臭馬骨少
頃叩首曰坎正北方之卦也此是小塚原上之馬骨
而已余聞而大笑退而竊疑彼徒貴財狂奔而贖此
馬骨不知何等所用既而讀本草云馬骨辟瘟疫氣

一咸終囊佩之男左女右始悟馬骨亦有所用昔郭隗
告燕昭王曰古之人君使涓人買死馬骨五百金然
則彼徒所贖馬骨價百金豈爲高價哉豈爲高價哉
酒樓船舖之招妓也非直命妓宅而迎焉命妓之家
二戸有焉曰岡崎屋曰立花屋共在同朋街即芳原
郭内稱見板者聞芳原出妓之家書妓名於小板揭
之有娼樓之招則見其板而出之故謂之見板柳橋
之地與花街有別其舊制呼大妓稱酌人小妓稱給
仕三四年來小妓揭名亦盜稱酌人而給仕之名竟
泯矣然至藝者之稱不能僭奪也故岡崎立花二戸

亦不得稱見板蓋名否而實同者也其業養備奴都
俗稱人宿者故又有飛脚屋之名蓋養人以給妓之
從价岡崎立花合三十人許其他雖有業焉者亦微
酒樓若川長柏屋亦自養奴而所專業焉者二戸而
已妓及酒樓船舖皆呼二戸為箱屋呼其奴曰回箱
又曰箱北里歌妓使奴負三絃以箱故有箱屋回箱
等之名斯地之妓不得公携三絃箱皆以袱裹之併
更衣負之故三絃皆接莖也而箱名徒傳稱耳蓋箱
奴陪妓妓得一席價而予百五十錢小妓則二銖而
一百錢一人陪三四名則勞同而利多故不憚從少

而喜從衆酒樓船舖招妓某樓命岡崎某樓命立花
各有所定屬於奴亦皆有愛惡某奴淳良某奴饒舌
品評而使之妓亦然顧負各異奴之陪妓也將彈絃
則為接莖懸線方更衣則為熨裳斂帶與傅母一般
遇雨即歸取傘迨暮即走點燈東奔西馳亦唯命而
妓有狎客奴必識之如此者客亦愛而昵之妓亦親
之倍他否則揚發其猥事罵詈不可沮顧負之異蓋
因之艱窘夫農者邦之本工商雖賤皆有業矣牛也
馬也亦資運輸負重度遠皆為人用狗吠盜猫捕鼠
亦各有職也奴輩果何為者乎七尺之軀于偲之髯

而甘為賤女子役結纓理屐以媚其意僅利數百錢
其辱何如人而殆不若猫狗者余想奴輩死而入地
獄雖欲為牛首馬頭之鬼亦當難焉可憫哉狎客之
直遊妓宅者奴輩靡由獲利故皆憎忌之而狎客若
舟行拉妓亦有不情奴者云蓋酒樓船舖招妓指其
名而命則奴走其家否則奴輩之邀向而出之故奴
亦不為無威福也余讀稗史往時名妓與奴私者頗
多而今則亡唯有周冷窮困欲賴奴力出售者而與
之私則衆妓嘲之謂茶人其甘為茶人者則以患磑
茶也

妓之不遭招而在家謂之磑茶未知何典故疑其閒
暇無聊可以擁臼磑茶之謂耶柳柳州詩云日午獨
覺無餘聲山童隔竹敲茶臼其事雖不同趣亦似者
熱者春夏盛鬧之候則一月出五六十席雖及三冬
磑茶甚希矣席價謂之玉玉之稱根于北里北里之
娼記客數者呼謂玉薄此亦傳稱耳妓等每相問本
月獲玉幾顆曰三十曰五十競誇其多皆欲玉而忌
茶俗稱侮弄人曰茶之蓋原于此歟冷者盛時猶患
茶況寥索之天則至不能糊口故秋風一起皆鎖戸
晦迹而去迨花笑柳眠之日復出而售土人稱此輩

為外被妓外被之為物暖則脱冷則着彼輩與此相
反故云此地之妓春夏則有百餘名而秋冬則減其
半以有外被也外被之外有鸊鷉妓此則不掲名而
售技者妓等不齒也鸊鷉水鳥出没波間而食魚者
以彼亦出没于正妓間而謀利故命焉蓋妓之掲名
捧饗金於閭中伍長輩若干及酒樓船宿箱屋亦有
所贈加以服飾之費算非三十金許則不能故為鸊
鷉者亦多矣妓之名聲大鳴者一歳所得超一百金
若宜富然而皆窮之其故何也雖有所収亦有所出
所得一方而為己有者三銖而二李五節亦有所為

奪自家飲食比常人亦太奢况身上之衣帯乎簪釵
乎費于屐費于帨費于紅粉所費至多於所得故妓
家不借人財者鮮矣凡妓更新衣有定期春首也上
巳也四月朔也端午也五月念八日也天王祭也七
夕也九月朔也重陽也蛭子祭也而中等以下不能
必歴更此期其俗端午着單衣而念八日之夜例張
烟火戯於州橋南謂之開河是日始着縐絺與常
人家端午已着絺綌異制焉妓之製新服也衣一襲
帯一條内衣稱長襦袢者一領此以深紅色為上乗
春色稍謝者白之為可用間色或纉畫之者却覺無

風致小妓則別製腰帯皆有更衣一具酒間必起更
之故一新衣服其價豈啻五七圓金雖典售而購新
轉表而為裏其費亦大故各擁狎客以逃斯勞矣夫
狎客則不得傍觀而不援其費也板橋雜記云衣衫
皆客為之措辦巧様新裁出於假母形之短長稱之
大小隨時變易見者謂是時世粧崇禎距今過二百
年地之相去數萬里而風情酷肖可謂奇矣而近時
服飾之美月加歳長至今春殊甚大妓之飾逈出命
婦儒人之上小妓亦僣擬大妓頭上簪釵玳瑁燦然
至大妓更揷玳瑁長笄蓋妓揷笄則北里之制而他

方之妓不得爾而華奢之極遂至不為其所不得為
者則不已且他妓在客席唯歌舞耳不能若北里加
之以鼓以笛也而今茲春夏之際一妓揣鼓於柳橋
北岸某樓而有船宿爭攫之事芳原人聞之責其僣
業併制服飾過度諷之官閭長等恐令妓節其服飾
帯不許用金線徽其笄併減簪鈿之數若小妓唯許
揷銀釵一枚且禁初更後應客招蓋防私事也客之
遊芳原者先来柳橋而飲拉妓而赴北郭一再宿者
亦多北郭人常憤柳橋妓私事漸盛有害于我也責
撾鼓華飾之際遂立其制妓之舟行送客者僅得至

三谷溝而不許入郭云頃歳北郭月令柳橋日熟懵
妬之積計至若此固宜也而衣服之華夜深之招禁
出僅二十三旬而又復如故是則非妓輩不畏官而自
恣也蓋大都繁華之勢所以使然者豈得遏止焉哉
俚語云女郎之赤心烏卵之方形必無焉若有則晦
夜亦出圓月矣嗚呼娼妓亦人也豈無赤心乎但浸
于鄭衛風聲之中熟於詐偽貪猾之事習與智長化
與心成而至如此耳然歌妓與娼婦自有間也妓之
有氣概而不喜媚淑良而不好淫蕩者往々有焉
何得不撿其實比諸晦月方卵乎然妓之淫蕩無藉

愛俳優者而費財喜防火丁而託身竟私奔而壞了
一生者固多矣世人徒見有斯輩而不察淋行儁才
絶勝妬妻悍妾者在于其間也亦宜矣蓋取絲歌之
趣杯杓之歡則非大妓不可若論其材質必欲求淋
良者則宜擇小妓小妓質美而年十五内外其涂䰎
習未深學詐術未熟而未破瓜者亦有焉多情之客
若能撫攏得之則可謂花柳塲裏之至樂也其懷之
以情激之以義則竟無生貪冒反覆之計必矣而大
妓易轉貪故也小妓難轉不貪故也或曰小妓少趣
大妓多趣是言至當然使取杯杓上之趣亦何用論

赤心之有無哉取興騰歡洽而足矣世人論赤心則
其意在枕席上耳若然則非淋良者不足如淋良者
則可求諸小妓不可求諸大妓也且先既落于小妓
亦不出三四年為大妓則杯杓枕席豈不両全乎余
哀風流子弟不擇其人而擧事一敗塗地歡轄而孽
長財竭而名壞者戯書之以貽情痴者亦是一婆心
而已金陵名妓李十娘語余澹心言曰兒雖風塵賤
質非好淫蕩者流如夏姫河間婦也苟兒心所好雖
相莊如賓情與之洽也非兒心之所好雖勉同枕席
不與之合也噫柳橋之妓夥矣若深求之則無一人

彷彿十娘者乎哉
開府以来都下名妓容姿絶倫技藝畢給而傳名稱
史留迹演劇者亦無算焉今則否彼此伯仲一無超
群技萃之出於其間矣而現今猶可稱者獨二州橋
東之阿菊也彼雖非有傾國之色絶世之技以纖々
女手之力大營戸閣高樓于墨水之西扁曰有明樓
有明之名頗播都内豪士冶郎無不一醉於此樓者
如川口平岩二樓稍就其下而彼以女主主之其秩
氣才力亦似可取雖有所倚賴而成此計然非尋常
折腰妓所企及也其他未聞有一女子能超衆於此

上者柳橋之盛也至矣何無一人才氣雄拔鳴名于都内者乎余曼翁列金陵珠市名妓作其小傳佳人之跡百世不朽余今欲記柳橋紅裙以準擬之而未詳有一個行實可記者乃徒列所聞之名十之七八于左而已後之情痴如余者若索其事作其傳以繼曼翁之擧則有一以使脂粉色長不朽一以可徵斯地繁華於後日者矣所列於此者不關容色之美醜技藝之巧拙隨聞乃記阿一阿三阿金阿榮阿幸阿弓阿豊阿兼阿文阿紺阿花阿竹阿里阿山阿六阿百阿萬阿久阿鹽阿梅阿伏阿濱阿紋阿玉阿蝶阿

琴阿德阿常阿柳阿綱阿槙阿相阿絹阿縫阿鶴阿華阿蓑阿歌阿芳阿時阿線阿半阿蓮阿元阿滿阿國阿瀧阿浪阿雪阿色小勝小春小繁小鶴小萬小蝶小花小照小德小鐵金八久米八米八玉八富八竹二菊二駒吉榮吉常吉長吉米吉三吉甚吉龜吉倉吉春吉淺吉斧吉梅吉美代喜久喜佐佐濃伊嘉都和延玉伊呂波豐美佐等大妓也阿中阿清阿緋阿花阿里阿藤阿奴阿歌阿龜阿吹阿房阿豆小糸小芳小玉小金小路小綸小松小藤小島政吉久吉三吉千吉種吉里吉駒吉八重勘八權助金太郎等小妓也蓋其優劣等級則人々見得而別矣安得私斷其品評乎將來若有作其傳而晰其迹者則評論自有所定矣

此編成于己未仲冬故列於此者皆戊午己未間之人而若阿兼菊二小照梅吉者數名皆小妓至今茲庚申而爲大妓者及米八延玉之徒亦皆新掲名在今年者此等皆係庚申新秋追補而記焉而若金八常吉者其落籍在午未之際阿豊榮吉之輩亦今年從良此等皆存而不削也

吁嗟余記柳橋之繁華也說歌妓之遊遨也而徒鑿

其隱事露其醜狀是何等叙風景可謂今古無情人也其獲罪于才子佳人亦可知耳然余竟非眞無情人也極多情人也多情而爲無情之言乃亦有所思也有所思也夫多情之事何可與彼蚩々蠢々之徒語哉風流之遊亦何得與彼齪々營々之輩偕哉其可偕可語者則唯天地間第一等達士古今來第一流才子而已達士也才子也安可多得焉故爲此無情之言以欲使彼蚩々齪々者飜悟外面菩薩内心夜叉之理而知見爲極樂世界者卽是無間地獄而一旦幡然翻了其流連耽溺之念以得全其身保其

家耳矣雖然浩々宇内豈無一个達士才子乎若使此編誤落其人之手乃亦將目余以蚩々之徒耶余亦當何辭以對之耶夫風月之情事花柳之遊趣似痴而不痴近俗而不俗其訣在自得之歟至倫杳子蘭菊之兼竊珠於瓊瑤之淵則雖非周孔之遺訓亦焉可得瞋目張鬚勃々爾而遠之若暴慢鄙倍哉若使人臣如謝安石談笑中能挫百萬鞭箠以存社稷則足矣何得可否其東山之遊嬉乎使文士如白居易博識宏辭名照史籍詞賦傳於海外亦足矣於其不能忘情何有所損乎今之君子者其論太緻其行

大絞而未嘗知風流情趣為何物而又不雜悍婦驕妾之害甚過於嬌歌妙舞之人也故閨帷不修而動為蕩子冶郎鄙笑者亦多矣哉夫花柳之遊其来也久矣故名妓艷姬之跡與英將忠士同傳千載者無慮數百名非有多情人記而存之耶蘊小々之心與西陵松栢表貞毛惜々之節與淮海波瀾爭清綠珠於崇不負其恩紅拂於靖真知所存想蓮香坐臥也蜂蝶慕其香風高玲瓏唱詩也其音交玲瓏顧媚之迷樓巧迷了詞客薛濤之彩牋能呈彩于書閣如葛蕊芳之烈操李湘真之雅致則全然不似女子也我

邦往昔所謂白拍子者亦妓也若千手鼓琵琶慰重衡於羈館靜女奏舞不屈賴朝于幕府皆是千古之情事百世之雅談使聞者恍然惝然神飛魂飃而淚其美泣其情者世滿人凝風致如是者今也則亡雖然人性無古今人情未變木石今之才子佳人亦猶古之才子佳人耳至風月花柳之遊則豈無彷彿往昔者乎若夫春風解凍宇氣漸佳江東莊々之梅南枝北枝齊開携窈窕于暗香間擁娉婷於疎影傍紅裳離披奪花神之魂翠袂鏗鏘和鶯兒之簧買醉柳島取興墨塘況又桃紅李白爛熳之天別現出一簇櫻

雲江流逈碧膾殘閃銀金樽醉夕蘭槳泝晨大妓五六人雛妓六七人左提右挈春服競新加有鬪花拾翠之嬉風詠而忘歸雖不知夫子之與否而優點也之為兵鳥兎疾奔三春樂事倏忽如夢裏覩綠樹滿園子規啼雨談昨遊于綺窓說蓄情於幽宇嬌悶數句梅霖方霽恰是開河烟戲之夜二州橋頭萬之茶肆千之酒舍新帘齊颺彩燈相射東船西舫柁擊櫂摩數里大江不見一碧波或放館舫于中流擬漢武汾河之遊或輕舸尋絃歌去恍有香山潯陽之愁絲竹徹曉談笑無歇橋下洲外涼飈砭骨城中三伏熱不

覺為何物身清心爽真是伴嫦娥入蟾窟博望仙槎未必向天河發也七夕星會之夜柳橋乃人間烏鵲橋織女善彈不暇織雲綃牽牛賣牛而飲酣醉連宵連宵合歡不似天上一歲一會期太遲也況乎中秋天朗氣晴有登樓逞興之庾公有泛舫嘯歌之袁郎月逾白風逾清加焉芳醑佳殽加焉嬌絃哀筑牽尾松下繫纜而酌百本杙邉鼓枻而行既而秋[illegible][illegible]老霜氣凄涼訪菊于墨東之園觀楓於真崎之林[illegible]遊之花視為富貴相停車帷中見顏如舜英迨[illegible][illegible]窶之候則俗子傖父履跡已絶而得意之遊可以作

也陋妓拙孃售技方息而至情之事可以適也風凍霰凘之夜綺樓有春情夢正暖酒氣常薰不知二州橋上月影東毀人余疑孫臨定情之歡韓香謝客之親必在斯辰也天明兵屋瓦皚然於是乎注酒於瓶安爐于船以為墨堤觀雪之遊豈有興盡而還乎至若年華將除人情忽忙之際適別開分歳之宴豫締春遊之契吁亦快矣余忖度千古才子佳人之心想像徃昔甘心得意之遊豈得與此間有霄壤之異耶夫風花雲月之變態絲竹肉之妙趣一悲一歡一顰一笑之綢繆可以詩也可以畫也雖然亦焉可與彼蚩々獃々徒揮其財而炫豪不問其趣唯美是誕者語此等之事乎哉噫後之才子佳人以余為無情人耶抑亦以為多情人耶戲記臆語以問焉若夫山川風月綺羅絃歌之遊多々益善豈有盡于此哉況其妙籌奇訣則在人々膣子裏而存焉寔非筆墨所得而形狀也噫

柳橋新誌終

附録　劉仙客所著算法珍書第二帙所載

何有仙史嘗著柳橋新誌全篇六千七百廿字、字々金玉、蓋仙史之著此編也、所費不下貳千金、設如有人以二千金買此編、不知一字之値幾何錢、求之術如左

一金即一両、通作六十錢、置六千七百廿字為一率、以二千金通銀百廿貫匁為二率、以一字為三率、求得四率、應問

荅　一字之値銀十七匁八分六厘二毛有奇、

成島柳北戲著

柳橋新誌二編

柳橋新誌題詞

燈火樓臺醮晚潮湘簾深祕笑嬌嬈四時無日不
三月十歩有華爭一橋才子聲名歸白傳美人色
藝靡紅綃秦淮情事揚州説也入新篇添笑條
竹枝聲在水樓閒春入嬌波洗碧灣柳線織成鶯
羽色雲鱗疊得鯉魚斑板橋記裡多紅袖畫舫錄
中妝翠鬟或亦明窗脩儀史欲將彤管寫眉山

三溪菊池純草　雪江關敬書



序

余與何有仙史一飲於柳橋巳樓而列僂指既經三載頃日仙史郵寄其所著柳橋新誌二編曰我今爲無用之人故著無用之書以自樂耳抑子亦好無用之辯者盍爲我一言題之余受而讀之行文諧謔使人嘻嘻笑而不已然細玩其味則寓諷刺于其間者有焉悼感慨于其中者有焉不特令讀者知柳橋之遊趣如何也併知東京今日之事情如何也不特知東京今日之事情如何也推知海内將来之形勢如何也其可不謂之一大奇書乎然仙史固自以爲無

用之書而世之讀之者亦必以爲無用之書則謂之一大無用之書亦無不可也仙史才鋭學博而不肯撿束任意而行世或識仙史之才之學而未識其志操卓然其事業亦有可稱者也仙史往歳失職于泮林窮臥于家當時人皆輕視之龜崖相公獨奇其才舉而用之仙史將于陸軍也恩威兼行雖悍鷙之士皆服其制馭至若三兵習泰西之法一新其制則仙史之力居多矣當幕朝之末帑藏空竭仙史統轄金穀之權内外費用畢給而海陸將士亦頼而無饑色矣仙史亦知生財之道歟戊辰變後仙史致仕而隱于市放逸自汙然視其在窮阨困戚之地襟懷爽然毫無憂色其亦有所過人者非耶噫仙史抱有用之材而自棄著無用之書以自樂者其情豈不哀乎雖然仙史棄其有用而樂其無用者仙史之所以爲仙史也余不得不爲讀此書者一言之而仙史視余文必嗤而曰老奴饒舌又復以無用之辯俗了我書則余將甘受其嗤焉

明治辛未暮春碧雲山人識于芙蓉峯下僑居

六十老人堯田大島信書

柳橋新誌二編

余曾著柳橋新誌距今既十有二年當時自以為善記其新而讀者亦或喜其新焉爾來世移物換柳橋遊趣一變而新誌亦既腐矣德川氏西遷之後東京府內朱門粉壁變為桑茶之園者不鮮而柳橋妓輩依然不失其業操管絃馳逐于風流塲中比諸幕吏鬼脫鼠伏而偷生者豈不優哉蓋王政一新而柳橋亦一新而未有好事者記其新也聞頃日有偷刻我柳橋新誌者而風流子弟多買讀之余慨方今維新之日讀彼既腐之書也作柳橋新誌二編

慶應以降百貨之舖皆耗其產之半而割烹家獨擅潤屋之富者何也府內人口減其半而遊客倍其數之故也人口減而遊客倍者何也人人樂王化之美而不為後世子孫之計獲一錢則食獲一楮則歡故也柳橋酒樓皆殊勢於往日河長梅川爭盟于橋之南北萬八亦將一振衰頹之氣龜清柳屋拓新境于新柳街而旗幟添色蓋新柳街梂築一成而柳橋繁華益加焉大中村（船宿有中村故土人呼此樓云大中村）災後起一大巨閣稱霸於水東而柏屋青柳亦修繕而覓雄若深川柳光幾稱大橋皆以廉制勝有信亭之友白髮松中巷之小環蒸共以奇鳴柳升之以甘味陷客則託其甘而免其苦也余知其味故不欲歡其醨也各樓競華鬪美冷熱互換而巴屋興於其間頃年各樓氣燄徒熾動華其飾而不美其實貴其價而不用意于客者多矣若欲燿豪揮快則宜就中河龜柏梅柳之樓而飲若論割烹之真味則二州之樓無出於巴屋之右者巴屋之叟可謂今之易牙耳余方春風秋月之佳候酌于二州之樓者有年而味見賓客之盛

如今日建築之美亦如今日也蓋非有使之為這盛美之人安能得如茲乎余謂方今權貴皆孟嘗而客皆馮驩歟何其爭求食之美也而柳橋諸樓不特春申平原之徒珠履寶劍而至寔使齊楚燕趙之主亦親枉駕於其門噫亦盛哉

四區之船宿亦有沿革其於表街也尾本竹屋鎖戶而三河系中村代之新七總亦改稱松葉其於裏岸也福吉去而丸屋出馬新若竹移家于故柳橋而米澤街之播磨變為翁屋其他雖貧富冷熱相移皆仍舊貫而升田伊豆鈴木三家盛閙猶冠于四區夫酒

樓船宿雖不異趣于曩昔而酒殽之價舟舫之價皆
四五倍于十年前者因金貨濫惡而楮幣代之耳固
不足為怪也或問仙史曰當今柳橋之妓大小二百
餘名殆倍于古而船宿酒樓獨不增其戶各家聘妓
之多寡照諸舊簿則亦相伯仲者其故何也仙史曰
柳橋往日之妓無姿色則有技藝無技藝則有才識
三者無一而與婢子同致者甚希矣今則否無姿無
藝無才徒粉其面錦其身而是妓之稱者十之七八
不啻有眼之客鄙而遠之雖傖父痴漢亦或疑其妓
而不妓故揭名月餘未嘗一招者往々有焉故雖妓

藉日殖而不使各樓能倍其利也蓋頃年商賈罷弊
閭巷失產者無數皆百計求活故女兒鼻目稍具而
彈得宵待曉怨一曲者爭入妓藉是妓而不妓者日
殖之原也夫無姿無藝者自知無由于獲客故濫轉
巧術唯利之視其風一播雖中等以上頗有名聲者
亦漸染其習噫柳橋聲妓之風一壞而其醜不可言
也然則柳橋雖加其盛於往日而其實可謂大衰者
歟柳客亦有罪焉不知遊戲有其道不辨風流為何
物沈湎耽溺不問其為妓與不妓喜濫轉以為戀已
信巧術以為愛已者甚多偶有淑良而不輕浮能存

柳橋往時之遺風者則皆罵以為痴頑不解事之老
婆夫客而如此則安能得遏妓輩之日趨淫風乎哉
往昔北里雖盛柳橋雖熱未聞有名公鉅卿一遊以
嘗其情味蓋文政天保以還幕府禁網極嚴雖麾下
之士遊則有譴　矣朝矯其弊赦小過舉賢才正其
大綱修其大典如擁花抱柳瑣末之事釋而不問故
駟馬高蓋有時而三顧燕小之家彼公子王孫在深
闈中畢生不能入狹斜之鄉者一朝放縱任其所之
若野鶴出籠而飛洪水决堤而進其快可知也校書
幇間捧媚而來朶頤而候一酌百金一彈千金真是

一曲紅綃不知數者夫通下情解人事者莫遊若也
貴介搢紳寓深意于遊戲以察閭巷之情態則於為
治不為無益且若泰西諸國帝王同遊于民庶若花
旗聯邦貴賤不殊等皆是所謂文明開化者頃歲本
邦日除舊弊力新政教可不謂美事乎雖然徒以酒
樓之遊娼妓之樂為文明開化之道者余不肯左其
祖也

某候酷愛某妓情不啻膠漆余兩識其人而兩忘其
名候將歸其國不堪眷戀之情發駕之日竊命侍臣
寄書于其妓々一讀欲絕藏諸其懷旦暮不釋珍之

如拱璧。余一日偸讀其書。文曰。

愛卿別後無恙否。孤自別卿之日。情思恍惚。卿之容姿常彷彿于目。卿之私語每往來于懷。綿々之恨不知有絶期。卿其察諸。晝則揭卿之寫影。夜則誦卿之手書。孤身雖與卿離。魂猶在卿側。墨水之遊。二州之宴。回顧一夢。悽然愴然。卿其察諸。袒衣一領此是家制。雖重臣所不輕與者。孤以卿之故。壞制贈之。請秘而不語人。至囑々々。且孤有關心之事。窃恐雲雨長留痕。熊蛇或入夢。若然可投書。侍臣速々告知。孤來歳東行。必贖卿身。作離宮以

偕老矣。嬌絃于高閣。泛遊舫於曲池。豈不樂乎。孤誓不渝此。盟卿其察諸。情緒不悉。只此寄知。

慎名不具

余讀了不覺潸々涕下也。樂譜所傳。在納言謫居須磨浦。鍾情于松風村雨者。其事凋雅。其情悽惋。千載之下。聽其曲。觀其舞。猶使人愀然催泣。近世風俗薄醨。人心狡黠。断無情事肖古者也。今讀此書。宛然有古人情痴之風。何其思之切而哀也。余好觀演劇。每嘆賴兼高尾之事。三段一刀。渭水流血。何等殺風景。寔不可與此侯之情事同日而語焉。

有漸進。曰一六休暇。大張宴。蓋一六之日。倣泰西日曜日之制。各省皆閉。官員休沐。或設盛宴。或泛遊舫。酣暢以慰平日鞅掌之勞。妓輩每侍杯杓。不特識其名姓邸宅。併知官爵之高低。俸禄之多寡。如職員錄官位表。靡不熟諳。一日余飲某樓。隣席有二妓侍客。甲語乙曰。卿宜設一大牢以饗。乙曰。有何緣故。甲曰。聞情郎頃日拜其官。即是奏任第一等。俸起三百。可賀可賀。大圜之錦繡。九利之珊瑚。唯卿所欲。大牢々々。卿宜分福。乙掉頭曰。否々。彼雖進步于雲途。其實因阿東而得。脅肩諂笑。雖妾所慙。且彼性鄙吝。出遊

之日。於舟子箱奴。不投一楮。動使人剖肚。以拭其臀。況彼擧止倨傲。每婢視人。寔不可忍。縱令彼自賀。於妾何賀。乾魚一串。亦不欲買。姉其諒諸。且姉不聞乎。裏岸校兒攜山手大將。玩矣三月。償了宿債三百圓。真是强腕後生可畏者。妾常謂。真情要情。假情要利。若要利。則宜擇勅任以上。否則知事華族。彼奏任判任。雖貴未足以飽吾曹之腹焉。言未畢。樓外有人高叫曰。三劇俳優給金表。妓忙呼苗奴曰。榮叟請買取彼官員月給表來。

一書生入學校。頗通英語。一夕飲柳光亭上。與妓言。

半用英語妓曰郎君獨識英語奴輩不解是甚無趣
願教奴以英語書生意甚得曰卿才子卿才子若學
之數月必為大家僕於英語無所不通不知卿欲所
學何先妓曰儕輩相呼用常語似無風致願郎君先
教以奴輩之名書生曰妙々妓問阿竹曰蠻蒲問阿
梅曰吱啉問阿鳥曰弗得問阿蝶曰洒孛應荅如響
妓又問美佐吉書生俯首百考不得又問阿茶羅書
生益困拭汗於其額曰今者僕不携辭書近日將懷
英語箋一部来以荅卿等百般之問
金銀注銅多而物價騰金銀變楮而物價逾騰矣而

妓之身價獨同于往昔故纏頭不得不倍於古也方
今客之投大妓二方為下一圓為上雖小妓亦在一
二方之間若或遵舊制投妓以一方投雛以二銖則
皆罵其吝夫百物之價皆騰四五倍妓等衣食亦不
得不然則纏頭獨同諸往日豈理也哉若以吝為智
則不如不遊也妓之獲纏頭于客盡付諸鴇母之手
則非復我有故偷攫以充私費三而攫一五而攫二
雖真母子不攫者鮮矣有一雛妓未熟狡猾之風一
日聞先輩之説始悟攫之妙急攫一楮而歸鴇母性
聡察家無匿楮之地千思萬慮忽生一計認樓簷少

壞処竊挿楮于板間自謂神智妙算真是萬全之策
一日驟雨乍晴雛妓在家鴇母出浴妓欲出楮買餳
扶屋板引楮々濕而中斷妓錯愕失色偸持其半片
問隣嫗曰一方楮中斷猶可値二銖否聞者笑而憫
之

某藩武弁數名置酒于某樓般妓排列絃歌沸騰興
太高氣太旺隊長特令招所愛之妓不至屢促諸樓
婢々曰令寵今日陪客舟行歸期或慢公宜擇他隊
長怫然按鐵扇而曰西京之妓若遇押客之招則辭
他席速々来侍柳橋何獨無律如此婢曰東西殊風

異俗且柳橋校書或有私事而不同西京之公然不
忌也隊長怒氣勃發大喝曰賎婢何多言失敬失敬
（方今通語）取巨盃擲婢之面上誤中燈臺鏘然一聲盃碎
燈滅婢愕而逃隊長將執刀追之衆皆吃驚壯腕遮
前纖手拖後且慰且謝震雷漸收怒浪僅定婢脱而
到廚下語庖丁曰當今之客多是狂暴使酒吐無道
理之論或擲碗碟或抜刀斫柱毎使人憤悶不堪酒
般價加其二三分而奪之未足為快真是被髮夷人
可攘可攘仙史氏曰太平久矣則士風怠惰干戈之
後士氣自壯戊辰以来殺氣未平項荘項伯動劍舞

于青樓亜父雖老亦時怒而碎玉斗其勢難當近来酒席有新法獻盃于人多擲而送之其掌上李太伯挑李園亭云飛羽觴而醉月當今士人好古者多所謂新法亦取典故于此飛字耶蓋飛觴飛盃古則古新則新奇則奇達則達畢竟生破額傷眼之變所謂罍亦易碎者寧如遵常禮而獻酬哉余聽諸老妓焉一妓按絃而歌曰其章裯及菊此是官家章客聽而嘆曰廣哉熙々乎曲而有直體其天朝之徳乎比隆于周文而有大雅之音妓又歌曰其章洛陽花此是權郎章客不懌曰權十者俳優也俳優者乞食也卿

以乞丐與天子並歌何等不経妓徐答曰君不知歌曲之事乎妾聞溱洧桑中者民間淫奔之詩也聖人採而列之雅頌之前君不咎聖人而咎妾何等不経且君不見大友之章乎與薩侯一様夫薩侯者三藩之首而天下之所畏也然未聞薩侯令大友避而變其章也薩侯不怒于俳優而君獨怒于妾何等不経客赧然而退仙史氏曰頃歳柳橋之妓私於俳優者多而與角觝者私者亦不尠矣三代吉之於訥升小花之於田之助阿㻶之於高見山同成其志者也千吉委身于相生而死相生為之哭十日夫俳優者粧飾妖艶麗之姿婀娜之態與女子一般妓輩眷戀思慕若固不為無理若夫力人状貌魁偉筋骨鐵打有如雷公者有如夜叉者而與俳優同為紅裙之情客余大怪之蓋有所謂四十八手而善擒之耶抑亦如相撲膏薬有粘着力而然耶余将問諸西洋窮理諸先生矣

兩雛妓從混堂歸手携炒豆一嚢且嚙且歩甲語乙道妹昨宵可怖之事乙道何甲道昨陪翁屋之客遊墨陀拾翠而嬉乍見断髪士人二個各騎大馬来其疾如風衆皆四避妹狼狽殆為彼所蹴頼喜介翁之

援僅免可怖可怖乙道可怖哉頃聞天王橋畔騎人踏殺一娼眼睛迸出騎人烟遁而不獲可憎哉自拭其目視道鶴龜々々（女兒禳詞）甲道方今騎人何故無律或跣而騎或屐而騎有執傘而来者有懐手而来者奇々怪々與曲馬一様且颷奔電馳不叫於稠人中而過何其無状也往日觀公子之乗馬惸々粛々可謂真士人且今之断髪状與吏人一般可憎可憎乙道妹家有春畫本三冊阿姉秘而不示昨會阿姉不在妹偸覧一過中有標致如訥升者有獰悪如仲蔵者其髻如鼠尾者有馬如糞船来藁者有馬然徹頭

撒尾不見一個斷髮丈夫與女子寢者妹窈窕斷髮
人不嘗幹好事歟甲道胡亂休說卿不記乎隹節之
客亦斷髮頭顱彼甚滔洗衆姉皆猷馬妹謂斷髮人
比諸平人却是好色與剽嫖所扮法界坊一様湊屋
斷髮之客亦是可厭的動迫人剝裳可厭々々嫩舌
兲滑喃々喋々乍見囊底綻裂炒豆霰迸甲錯愕道
叱壞矣乙道此是罵斷髮之詞哩
妓而有犬猶酒中注水其味薄而不醇妓而有兒猶
酒中加糖其味重而不洌往時妓之孕者皆懷羞怍
之心有尋樂打胎者有從良脫籍者頃年風習一變

妓等産兒與人家一般多倩乳母育之賓客席上亦
公然話之恬乎無愧亦怪也哉一妓既孕有狎客十
人不審其父爲誰乃招一客告其孕客曰卿擁數客
何獨目我又問一客答曰卿擁數客何獨目我歷問
十客答如出一口妓甚惑焉乃禱清正公之祠曰妾
有娠而不識其父願神諭其人清正之神夢見而曰
汝有十夫均同枕席神亦不辨其主爲誰汝腹內之
兒當自識其父汝其問諸妓醒而悟夜深無人妓盥
漱焚香坐而撫其腹俯而窺其陰從容語曰神有命
使汝語我以汝父之名汝其告其實忽肚裏有聲曰

阿孃何疑阿孃有十夫兒體則係十人協力所造一
人造首一人造腹有造胸者有造背者兩人造兩手
兩人造兩脚臀與陽莖亦各分造之故兒父有十人
也豈得歸諸一人耶而兒之十指別有造之者阿孃
忘之耶妹入阿孃之室而徒染指於阿孃之鼎者往
往有焉是吾指之父也
一妓長于口短于才人皆命曰饒舌兒又曰無眼娘
一日與衆妓侍某公之宴酒闌妓從容問公曰聞公
卿之在西京也皆造合花牌以爲業不知殿下亦曾
造之耶公愕然無語少頃答曰往時諸子閑散不知

或戲造之歟縱有焉亦官爵迫在孤之左者耳近來
國家多事無復一人爲這様閑事者必矣妓拊膝曰
解矣々々近來坊間花牌甚乏價亦隨貴阿爺每嘆
之妾亦不知其故今者奉承殿下之詰宿疑氷解夫
生之者寡用之者衆則牌恒不足價之貴亦宜哉滿
座皆捏汗于其掌
士人二個穿錦袴佩金刀對飮某樓酒數行談及宇
內形勢竟論郡縣封建之得失辨駁移刻而不決口
角吐火舌頭噴血酒冷殽爛而不顧也數妓侍坐傍
聽而倦妓起而如廁一妓從之相會廊下甲曰今日

之客何等、帰漢酒亦不飲、殽亦不食、睹々半日談不可解事、奴性不喜所謂議論者、聽之則懊悩欲瞑、乙頗有氣力、曰、阿姉休悶、奴將壓彼兩痴、乃相携反席、而個舌戰猶劇、乙進離坐於兩客之間、擧一大白、而問曰、公等所論果何論、客曰、僕等所論天下之政體郡縣封建之利害得失、卿等何聞焉、乙屬盃曰、公等何謬也、夫郡縣封建之得失、秦漢以来先哲論而悉遣、今復何所公等呶々之言哉、妾聞米國有共和之政、極公極明極正極大、雖唐虞之治不能過焉、公等宜棄古人糟粕、兩廢郡縣封建之説、而倣共和之美、

矣、且夫遊也者最要共和而樂、今公等既在酒樓、置酒肉而不食、擲管絃而不奏、空論妄言、使妾等伺隅催睡、可謂之共和而樂耶、公等真不知遊者、妾將為大統領、一振此衰頽之勢、請先吸此罰盃於是二客大慚、兩首並肯而謝曰、謹奉女王殿下之令、

聞頃日有客贖一妓去、余不識其客而識其妓、妓名阿辰、年紀十七八、以余眼看之、姿色在中等之上、技藝在中等之下、問其贖金、曰、七百圓、余一驚欲倒、夫十餘年間、柳橋校書未有獲七百金而從良者也、阿辰者後進也、揭籍未滿一歳、而邂逅于若此豪客、可謂至幸矣、而不特阿辰之幸、乃亦為柳橋生一片光彩者、嚮昔阿幸（今大辛）辭五百金之聘于本阿弥氏、本阿弥氏慚之、擇名聲在阿幸之右者、而獲阿金、當時人皆称本阿弥之豪、而服阿幸之達、以為一美談、以今視之、五百之聘、五百之辭、奚足為豪且達乎、蓋非人材有軒輊也、世態有變移故也、方今聲妓位于上等者、皆一月所獲、緊五六十金、比諸往年、有霄壌之異、壬戌之夏、余與柳春三戲作柳橋二十四番花信評、阿金比海花、阿幸比櫻花、阿久李花、小勝杏花、美

代海棠、阿紺桃花、阿兼菊花、阿清牡丹、小繁拒霜、阿竹蓮花、菊壽紫薇、梅吉藤花、政吉燕子花、千吉芍藥、阿蓮水仙、小照躑躅、其他増吉小糸阿常三代吉阿軽久吉阿角阿直、亦各比衆芳、而當今存者、唯阿幸菊壽政吉（今称阿郁）阿蓮四人耳、阿清千吉久吉三個、既載艶名于鬼録、餘皆四散、不知其所在者亦多、噫嘻、十年之久、一浮一沈、一枯一榮、豈獨紅裙而已也哉、

似輦而非輦、似轎而非轎、乘者仰而踞、推者俯而奔、鐵輪木軌、轆轤作聲而来者、人力車也、一酒樓上數妓憑欄而觀、一妓顧左右曰、陋哉車也、近来此車遍

満街衝東幌西轊喝々怪事往時遊客皆倩街輿街
輿之為物便而快輿夫亦健捷連叫皷勇其聲清亮
能使人遊意勃發真是江戸児之氣象不似此車醜
陋殆與乞児膝行車一轍也方今客多捨輿而取車
論其價耳何其鄙也老妓在側笑一笑曰卿妙齢未
知氣運之變往年都内觀候伯之往来傔従如雲雙
槍在前鞍馬在後張威競華今則否単騎奔馳簡易
為風倹素是尚却是美事聞官家頃日捨鉅万金以
造識路将通蒸氣車蒸氣車之疾一瞬十里一刻百
里如憤潰往還一飯時限月大坂長崎可一日而至

即漢土天竺亦可三日而達真是所謂妙々車也一
妓忙問曰天竺可往耶曰然曰然則妾将駕其車遊
銀河之岸而一觀牽牛織女之會合若何一妓揶其
背曰休焉卿之美貌往則被牽牛一瞥戀着奴恐織
女吃醋必建留車柵于烏鵲橋與両國橋一般大笑

大笑

天心月高楼丁鎖楼水面風涼舟子眠舟夜發蕎麥
鐵錚之鈴已遠茶飯豆腐黯淡之燈全滅叩街栫矣
狗亦無聲一小楼内酔客在床欲睡不睡欲語不語
如有懊悩氣一妓悄然端坐于枕頭客向壁吹煙撃

唾壺一哼説此曰但米僕為汝貴多少思慮為汝擲
多少金銭縷々中情亦吐盡明白昨来又説此挂注
妾懇切説諭而汝不肯汝亦不解事弐何其執拗之
甚現今天地間不有一人如汝守愚師古者汝若惜
然換愚則不持汝受了便宜慾嘗亦得老境之樂汝
蓋思諸妓俯首而默雙眼堆涙皓歯嚼袖良久而曰
主公何故注心于醜悪如妾者屡賜懇誨妾豈木石
也弐寔感公之情荷公之恵奉謝無辞而所以不肯
奉命者抑亦有故具以告妾雖委身于淤泥団不願
與娼婦同業経歌賣興以養母耳妾父元武弁食禄

五白父没而兄嗣兄少而勤文武之業略知忠孝之
道往年之變都下洶々同僚数百皆錯愕失措妾兄
獨發憤忘食建言於執政者三而不行忼慨之餘遺
言于妾以託老母與同志之士走東陲百戦不撓竟
死節于鋒鏑之間爾来親戚奔竄不知所在朋友亦
去而不顧妾獨與母惸々無依邸宅没于官器什
殲于賊飢寒日迫而無計可支以妾幼時辛習歌舞
来此掲猎忍耻賣醜頼諸君之恵以僅衣食于母妾
今從命定享無涯之福老母亦安送餘生焉雖然獨
奈況父兄之名何奈辱祖先之霊何主公幸諒諸言

終一掬紅淚向自家膝上滴々揮来時聞隣猫捕鼠々聲送哀其音忡々

滄海暗麑白帆懸知是載柑南紀船此是舊詞曲近来變其聲新其手以彈之舞之其調從而繞其音佻而雅輪其兩手而舞蹇其一足而跳亦一奇觀今盛行于宴席世傳紀文者侵颶渡海鬻南紀之柑以獲大利漸々貨殖陶朱之富竟冠于大都彼好俠斜之遊極豪窮奢軼前人而壓後世雖兒童于今識紀文之名可謂一快男兒矣方今東京商戸無一有氣燄者可知其產日耗其財日匱雖力飾外而內情不

免狼餒噫亦衰哉而横濱開港以来商賈與外國互市雖有失策破產者而赤手而往三五年間大興其家者亦不為少也當今柳橋商而善遊者横濱之客居多後進之妓頗有名聲若阿俊小鳴者亦皆為賓人所贖去聞前年濱之一商產傾將鎖戸而去適會楮幣之行百方借金以買楮一朝獲利三万轉後買米則米騰買油則油貴當今家產及十万之上云余謂横濱互市益昌則豪奢之徒亦將益覺治遊而天亦將出如紀文者乎夫亞孛英佛之船載百貨陸續而来則南紀柑船何復足歌乎何復足舞乎

袁子才守硯詩云摩挲不釋相愛憐劇於十五真嬋娟凡愛憐二字可下之少婦而不可下之二十以外之女然熟于遊練于情者而擁三五二八之丫鬟畢竟無些風致與夫涅孩兒一般非笄年以上稍嘗情味之甘酸者則不足與語也今之人或夫孩兒而責其不鮮甘酸或猥以愛憐二字揷諸老妓股間可謂兩失其道者夫投百文之錢于溝中猶淘乎作聲若夫不問其味不認其情徒貴財于娼妓者亦有何益豈若取彼家中所在金穀器財一併擲之大洋則溪然作一大響也彼失金于欺騙之語破產于耽酒之

心者謂之痴漢柳又有人多年往来于花柳之郷洲囊不蓄一點風流情懷揷詐弄術倒奪財於娼妓之懷者謂之惡漢痴漢固可笑而惡漢亦可憎也夫痴與惡其是過不及可謂善于遊者乎若能執其中于痴惡之間而不失其財不醜其名者則是風流場裏之盟主吾亦無間然矣

一妓有二狎客一商而一士士人有婦而商家未娶妓屬意于商而不能絶好于士頃日決意將從良于商一夕與士人酌酒熟將寢妓曰妾蒙君之眷顧久矣死生不忘妾欲長執箕帚以事君而妾母不許母

生長于商家不願與士流結親且君有令配在故國縱令妾學紅拂以成其願恐銀瓶繩絶玉簪中折却是煩君耳賈人某久愛妾毎招以侑酒彼未嘗一回説妾以挽席之事頃日倩人請母以娶妾母既諾焉妾不能拒也妾不忍不請君而去今告以實所以不騙君也願君快飲一盃快眠一夕以為永訣君若患遊時久好耦則幸有新妓掲名者嬌艶可愛妾為君媒以報恩情君意若何士人艴然作色曰卿曾與僕誓在天比翼在地連理僕亦鼓刀以獻誓于神今卿背盟食言棄僕以嫁情郎僕何忍黙而遣之且僕

心肯之若此雙刀何若彼神祇何卿若果往則僕亦有策從此有精兵十大隊僕将指揮而追卿家若何妓曰君亦無理妾今賣身以活妾賣君買所謂貴物買品妾唯君命之從妾一朝脱籍則雖賤一家孃子也辨亦随意嫁亦随意自由自在君何關焉縱令貴藩之兵有何十隊将奈妾何且各藩所以養兵豈為大少参事成私情張私威而用哉若兵来而迫妾乃将一走鳴諸官不知君之藩雖大君之兵雖強安能得抗王家哉錦旗一出亦潰而已唖然大笑下階而去

俚曲詞云吹兮水風颺兮箔。多情要見舫裏客盛夏之天紅日将傾水色逾緑長風一道来於南浜遊舫數百作隊向二州水心驀進来青々之簾清冷翻風金絃響空紅羅映波使人神爽氣蘇有出焦熱地獄而入清涼世界之想也蓋往時遊舫之制士船着障市船着簾輓近其制一壊各舫皆廃簾作障雪晨鎖暖風夕蘘春雖似便宜而青々之簾清冷翻風之快不可復得也去年故柳橋前泛一大船鑑而不動中設筵席割烹于艙内如小酒樓遊客皆繋舟而上呼酒命殽酒亦冽殽亦美其船扁曰柳船々々之名一

時鳴于都然舟舫忙于熱而閑于寒秋風颯然柳船亦廢矣昔者軒轅氏之造舟楫也蓋取諸渙今人造舟也所取不一取諸花取諸月取諸酒食取諸娼妓不知後来別造何様奇船以供遊戯耶余不得預筭諸今日也

一客坐而待酔而候燈影欲滅復明酒味似酸又苦孑身吊影快々不樂婢来慰道本日一六各楼盛開衆校書皆忙然析已報戒想令寵早晩帰来請暫忍諸客道待久矣肩頭血凝你招按摩師来婢諾而去乍見瞽人及階客道某在此瞽坐客背撲々拍肩軟

々握腕。瞽道尊筋頗硬定感時氣徐々解結而可客
道國手頃日有新聞耶瞽道無焉江戸亦太衰矣客
道何以知之瞽道世人皆道衰亦極矣而奴眼不能
視其衰然奴亦有一事以證其衰者客道有何證瞽
道奴日出售手每歸家嗅其履必有糞臭乃濯其齒
近来嗅履聞臭甚罕想街衢狗矢亦少夫狗口既減
人口之減可知也非衰而何客道有理々々瞽道近
年此地猫員（都俗戲稱瞽奴曰猫以三絃皆張猫皮也）日殖亦猶狗之減
耶奴宅四隣皆猫窩聞往年同間左次平者巡四國
而為狙今一坊女兒皆坐而為猫何其術之捷也

奴思公亦愛猫者聞近来猫價頗騰買一隻必貫一
圓金謂曰聞金于猫豈不信乎今日猫之盛可驚小
猫不論獨莫大猫有一百五十名試以一名一日值
一圓計之一月之金四千五百圓噫亦盛哉奴之先
師諦西撿校有遺訓曰神佛不可信其道衣食不可
擇其義視戚勿相愛朋友勿厚交夙興夜寐火於爪
以莫於金唯利是貪則一生安樂真是至言奴輩不
肖不敢守遺訓至今亦貧不附半文錢人而不若猫
者每嗅隔壁猫輩所食之鱣香以飯耳忽聞婢自階
下報道令寵来瞽忙道猫話畫于此尊筋亦頗弛速

々就寢而可
二少年滿身龍文悅而不帶立於二州橋上倚欄臨
眺橋下遊舫蟻聚奏絲竹于涼風洗盃盤於清瀬真
是一區歌吹海甲顧乙道寄生那邊怪獸喧騷擾人
當今聲妓大行全賴士人好之甚也本地溺臭妓近
来皆驕傲與儒人尊俎一般動不人視人所謂聲妓
瞽妓口自說歸来也以良家子聞得愕了到底猫耶
猫耶君休道紋染俗衣亦是客之纏頭訊得不迸哩
乙道置諸近来彼等獲錢多故奢侈為風卷毛髻上
漫插金釵可惜可惜早晚遇拐兒抽了醜臉上泣

那臉蜂兒亦不肯螫其態可見甲道否々彼輩鄙吝
夜帰常微着釵併諸生卷而懷之何其黠也乙道汝
不聞乎去年房八婆開書画會于中村樓當日諸先
生皆臨為賓客之盛賀金之夥近来無比人皆稱其
會曰滅法會豈不妙乎余屢往彼宅未曾見彼學墨
舐毫如所謂漢字者而為書画會先生真是不可忍
議妓而為書画先生者古今希有後来妓而為官
者生于世間亦不可測也相視而大笑乍見巡邏兵
隊整々荷銃叱咤而来両個匆忙下橋而去
天寶後聞三千妃嬪非不美非不麗而明皇獨戀々

下太真者何也蓋傾國絶世之尤物與碩德奇才之
士一般一生能得撞着幾人耶余歷算十年間所識
柳橋紅裙其色藝皆相伯仲未見一個佳人一笑百
媚使多少粉黛無顏色者也然強而求之其中一人
有焉其名曰阿清麗質天成沈靜寡言望之瑩然義
玉接之温然春風余初見之友人永芳山之家年紀
三五余有詩云

夭桃花上露無聲深鎖仙扃夢不驚他日劉郎若
相訪丹脣一笑始相迎

阿清之名一時傾倒教坊而常苦多病壬戌之秋麻

疹盛行阿清亦病在床數旬竟不起年僅十七芳山
弔之詩云

國色古今相遇稀多情涙盡血沾衣夕陽人弔孤
墳下野菊香殘老蝶飛

余次其韻以哭之

舊情欲説聽人稀涙滴當年舊舞衣借問嫦娥何
處去夢魂長向月中飛

芳山亦隔月而殁噫才子佳人天不假之年真可痛
哉近来老輩中獨有阿園々々少時與阿栄並立雙
美之名久冠于二州往時柳橋妓風與新橋金春諸
地無太異而輓近服飾聲調一變尚清高幽雅其致
不同他方者蓋自二人始焉蓋阿園色藝両全加之
中年故自抑損不驕于客善誘導後進是以人皆賢
之可謂妓中君子也後進中名聲傾鳴者推阿鳥為
首阿鳥中蓄其才而外圓其行事親孝順接人温淑
未嘗見其発怒于聲色亦良妓也阿園既落藉于客
朧阿鳥亦從良于今春不知方今以阿誰為群芳之
魁乎哉余未得其公論也余昔與竹西坡飲于故柳
橋某楼題詩其壁云

嬌歌侑酒酔烏秋無限歓情卻惹愁門柳蕭疎炎
人去他年追感在此楼

距今僅七八年而西坡老病流離于北地當時紅裙
皆凋落如晨星余亦託餘生於風塵中毎過故柳橋
仰見老柳樹愴然感舊有桓氏金城之嘆嗚呼遊人
多矣其孰同斯感者其孰同斯嘆者

二州繁華之地柳橋挟斜之郷文士墨客多俗視之
然清夜更闌各戸人定之時泛舟水心南望江口北
観墨河則皎月射波金龍忽奔涼風吹衣羽客欲翔
漁火数點明滅于緑莎洲外酒燈一穂黯淡於画楼
簾内其境華而不俗其景幽而不惨真是三都第一

風流之地。況又酒美魚鮮。名媛麗姝。按絃調舞。飄颻宛轉。激人神融。氣暢以一洗襟懷万縷之愁也。若使香山樊川之徒一遊此地。必當裁長歌製新詞以賛其勝。鳴其奇矣。世之俗視之者。亦唯見其皮相而不認其真耳。余曾作二州雜詩數篇。今録其二以為證

絃歌惱殺幾多人。此地繁華世絶倫。簾影横樓烟曖々。櫓聲近岸水粼々。梅薫羅袖梅川夕。柳映金絃柳屋春。姉妹新粧争嫵媚。風流誰學李湘真。

秦淮山水未嘗遊。其勝想當輸二州。明月長臨才子宴。清風常満美人舟。迸空煙火揺銀漢。倚閣凉

衫映白鷗。此際好呼坡老帰。為君一掃十年愁。

余曩昔與晴蕪揚江諸子。毎會飲于二州。當時所見女兒年皆十歳前後。蛾眉未知画。鼻涕垂口。端把泥孩蠢然遊戯者。今皆成立。褰紅裳按金絃。其態度可見。其歌曲可聴。余為之悽然有所感也。夫業精于勤。荒於嬉。昌黎言諸千載之前。蓋娼妓者賤女子也。歌舞者小技也。然勉勵學之。則數歳而足以養其生矣。今夫執國之大政者。賜高爵食大禄。赫々有權炎々有威。而禮教未立于國。德澤未流于民者。何也。非其人庸劣不勝其職也。因人々樂昇平之澤。偸一日之安。急于擧賢。使䏻而御取阿諛之臣失節之士矣。是無他。非不勤于為治。而放擲為風之故耶。當徳川氏之季世。非無儁才卓識之人。而政教頽廢不振者。其失亦在放擲二字也。夫古今為治者。未有不成于力行而壊于放擲者矣。放乎擲乎。在位君子其戒諸。余亦放其心擲其業。漠然不顧者。早晩將乞食于道路

余有大慙于賤女子也哉

仙史草此編之際。一客偸讀之。蹙頞攢眉而曰。子之書無益於世教。而徒罵詈人。作無用之文以觸世之怒。子何故為狂愚若此之事也。子其有悔乎。仙史笑

曰。吾固無用之人。何暇能為有用之事。且吾所罵者皆世之風流罪過也。而吾之罵人。亦是吾之風流罪過也。世人若以風流之贖罪吾。吾風流之筆。吾將甘服其罪。何其辭之。且世人孰無風流罪過。唯有公之與冢之異耳。若有一個道學先生。乗殷之輅。服周之冕。右援唐典。左繙明律。侃々誾々。來責吾風流罪過。則吾將對之曰。君講道學。吾好風流。唯是半文借貸不相及也。不翼君涉吾事何。故彼若又曰。爾著文章不善。讀者無以解意味。不佞是嘆。記事妄誕而不實。不佞是疑。吾亦將對曰。文之不善。無學之故也。敢不

乞正。記事之不實。君其問諸柳橋。吾亦何恐之有。昔静軒翁著繁昌記。當時幕吏怒其誹謗之語。繫翁于獄。焚其書。鳴其罪。竟逐之。世笑其吏之局量偏隘。而翁之書猶行于今。爲且子不聞乎。泰西諸國所刻新聞紙者。多是誹謗罵詈之言。而君主不罪。官吏不咎。君子不怒。小人不怨。爭而讀之。以博聞見。以知警戒。爲吾書則亦新聞紙。而無用者耳。子何慮之過也。客默而退。出戸而曰。癡愚無藥。

柳橋新誌二編尾

後序

今夏予偶奉職事。而在東京。一日友人来。而示何有仙史所著柳橋新誌二編。且曰。柳橋十年前情態。既盡于初編。當今則亦有冷熱易地者。故此編以記其變。請君披而知之。余喜而一讀。其筆力跌蕩。行文奇絶。加之以解頤之論。以摸寫方今人情。若使樂廣潘岳之徒讀之。必將棄其筆硯。而却退瞠若乎車塵之間也。夫仙史者。舊友也。予具知其爲人。而今視斯書。則如冒色蕩子然。如沈湎冶郎然。仙史多而育於儒林之巢。啄於文苑之餌。朝翔韓柳之域。暮棲歐蘇之塒

既而伸翼於九萬里之天者。若此著。則亦大鵬之一羽。鶖鶩之一翰也耶。予賦性尫弱。加之有嚴父之訓戒。足不蹈市街之間。若繁華地方。耳聞其情態而已。今頼仙史之著而得知其槩略。是亦非藉鵬鶖之羽翰。以爲其遊觀乎。曩者仙史嘗題霸廷廳壁曰。君看著諧謔如此書。以自適其猶孫臏刖足。而説兵。司馬遷係獄。而著史之類乎。於是有感于仙史之心。而題區々蕪言。者誰。東鄙之狂生桂閣子也。

辛未芒種後八日書于江東龍涎窩于時芍藥盛開

風谷滿簾

清泉白石山人篛書



柳橋新誌



明治七年第二月刻成

發售書肆　京橋銀座三丁目　山城屋政吉

岡田有邦 撰

新潟雜記

明治二十年（一八八七）新潟縣刻本

據明治二十年（一八八七）

新瀉縣刻本影印

岡田有邦著

新潟雜記　全二冊

櫻井氏藏版

花前日醉遊

甲申鞠秋為

毗山岡田有邦先生

舉人王仁壽書

對鷗閑處圖

乙酉八月

桂湖居士隸

卓然獨起脫時流自比謫仙三十秋箪食屢空寧改樂圖書漸積更忘憂百年富貴真難得一日清貧最易求青眼平生何所見山端明月水邊鷗

明治十八年乙酉晚春

對鷗閑處主自題



茲因予於着新潟雜記二巻。以出。且請題言。噫則凡從之沿革至花柳之情態。纖悉細詳無不記載也。目録之次。状筆力駿逸。伯仲静軒。而宛轉流暢則過之。至於予於當塗遊吾以為學也。於詞章則特長者也。官暇巧遊筆業。出稿不已。者之所干。

明治十八年六月

津齋井部元題并書

新潟雜記序

山人說山水。客話水者。各言其所自得而已。豈傍人之所能解乎。予飛驛之山人也。飛驛之爲國也。攢峯擁四境。密林蔽逕路。麕鹿走郊坰。鳥雀窺窓戶。故不讀詩而多知艸木禽獸之名。雖然如揚州之鶴。解語之花。未嘗知之也。越之新潟者。古称風流之仙都。廣厦櫛比。層樓崖峩。絲竹如沸。歌舞雲起。遨遊此間者。日費万錢。如其地位。則瀕北海。八千八水合流而朝海。七十四橋臥波而蘸影。八百八家之花。送靈麝之香。且越多生女。新潟又爲其淵藪。衆娃粲然。爲翠猶牡丹与芍藥駢莖。海棠與木蓮接枝。紅辨白葩。重疊錯雜。鬪妍争美。以故飲酒之莚。鬪茶之席。必聘妓。觀花賞月之客。亦莫不携妓。蓋花依妓而添艶。月依妓而加光。地亦依妓而致繁華也。予自移籍本地。已六年矣。故聊輯録所見聞。題曰新潟雜記。如其真呆妙趣。豈山人之所能解乎。應自有其人矣。

時明治十八年乙酉晚春也

耕山岡田有邦自題

藤井蘊齋曰、僅僅一百餘言、可充一部新潟志、

新潟雜記卷上

新潟　岡田有邦　著

越之新潟、大馬頭也、古名舟江、居本邦五港之一焉、信濃川、自信濃來、合八千八水而注海、極便于舟楫、船舶輻湊于川口者、帆檣林立、欸乃之聲、日夕不絶、街衢縱橫、井然如碁格、控信川為渠、豎三橫五、以界坊、架一百三十餘橋、植數百千株柳、翠影毿毿、可以遮日光、可以避暑熱、舟行其間、使人為汴河之想矣、遊人士女、畫舫笙歌、日費萬錢、視之三都、亦不甚讓也、

渡邊湞村曰、方今到處有所謂不景氣之嘆、日費万錢、如豪客其人、蓋有之矣、吾未見之、

往時、寺門靜軒、著新潟富史、森春濤、著新潟竹枝、而富史為祝融氏之所奪、坊間纔見蠹餘耳、頃者、清客王治本、亦有舟江雜詩之著、余亦倣顰、著新潟繁昌記一卷、此外紀述寥寥矣、

漁村曰、所貴乎妓者、在色容與技藝耳、言語之不雅、抑末也、何足深咎、

蘊齋曰、僕亦取其色、言語之卑俚不問而可也、靜軒漁村二子之評確當矣、

越多生女而多美、妓溫柔、似京師女郎、唯土語之不雅、則趙璧微瑕也、靜軒新潟富史、有言曰、西施生於越、真妃生於蜀、音吐必不齊、魯吳王猶亡國、明皇亦覆天下、吾豈害色乎、可謂確言矣、

蘊齋曰、余竊評本地之妓、古街之妓、如牡丹天香國色、宜種富貴之園中、毘沙門寄附之妓、如麗春、其色雖美、品甚劣、宜為旗亭茶肆園圃之觀、寺坊則如木槿、不過為野人籬落中之物耳、有客、謂余曰、子評古街之妓、以比花王、則無天下出于越妓之右者耶、余曰、否否未也、嘗評兩京之妓、謂東京如梅、西京如海棠、梅花則其品清高、其韻飄逸、可以立君子之門墻、可以

本地青樓中人、分色妓藝妓二種、色妓但薦寢席而已、藝妓妙擅歌舞、侍酌侑醉、然不能為房裡之樂也、色藝聚居、以古坊為第一、寄附毘沙門二坊亞之、居寺坊者、唯色妓而已、

古坊一帶、半妓居、紅樓夾道、廣廈連甍、向夕、燈火星繁、笙歌雷沸、遨遊其間者、車馬如織、轔轔之聲、徹旦不絕、煙花之盛、風月之美、以及色藝之精妙、衣飾之麗、都三府遊郭、亦不過之也、

寄附毘沙門兩坊、舊待舩客、

栽高士之園林、海棠則勝脂濃林、晩粧逞媚、可以植王侯之階庭、可以傍才人之書窓。其品雖讓於梅花、自有風韻不可掩者。若牡丹則有天然國色、而未免糞培之氣。何能比梅花与海棠。雖然是皆名花、未遽易軒輊也。不知余之月旦果當否。客曰當矣。
坂口五峰曰、藝妓亦

而開場、今則為一區之妓院、然歌舞之風趣、服飾之樣、以及容姿音吐、比之古坊妓女、則有妃嬪與媵嬙之別云。

寺坊隔一水、多寺院、故名焉。娼妓至夜間皆靚粧炫服、列坐肆頭、客有見而悦者、即留宿焉。頃讀精華堂刊新潟才人詩、有三浦鳩村一絶、甚逼真境。其詩云、後頭娼戸前頭寺、一水中分

上三

可為夸裡之樂、唯非富貴子弟風流才人、不能知其趣耳。
蘊齋曰、所以破戒杜多之多。
又曰、越女以容色名于天下久矣、兄先皴其藝者何哉。
小崎藍川曰、新潟之妓、歌舞甚拙、唯山却為所長、於歌舞、僕未能信也。
蘊齋曰、經王何者、有此艶福、不知酬之果

兩種情、樂土不知真孰是。按謌聲接讀經聲、

本地之妓、其所長在歌舞絃竹、次之、而其操二十五絃者、則寥寥無聞矣。蓋以調高而無胡乱者、故歟。頃者瞽師左久者、自東京來、其人善彈琴、衆娃靡然學之。妓風漸向于上位云。

寺坊有經王殿、妓錯認為月下氷人、修福者朝夕不絶。毎歳以六月二十二日、為

以何福。
蘊齋曰、今日豈有此事。
五峯曰、空囃喧嚷可厭、而俗人以為豪擧、可笑。
漁村曰、往時或然、今日豈其然乎哉。

賽會、士女游觀、熱閙雜遝、冶服盛粧、結隊相翱翔、或云邂逅相遇、適我願、定情於其間者多。

開歳二日、妓盛粧、衣飾鬪美、宮商相和、以祝歳首、謂之空囃。各樓之繁華、以此時為極矣。聞本日妓粧、擧體一新、纔不脱皮、豫裁之於客歳中、紋理染色、極費工夫、競取時樣、走人京師、託織造所、歳言將暮、脚力窮

上四

蘊齋曰、所謂前門禦狼、後門進虎者。

日力、爭刻致之、其最快者、賞之以數金、照遲速、賞有等差云。

情之不可以已、一顧脂粉、則猶狂蝶慕花、終欲移于家庭、專春色。然風雨嫉花、青帝猶不能制也、況於人乎。聞妓落籍、多得之於豪農鉅商、拉去收別荘、則已矣。或畜之坊内、為外宅、則騙主而養雛妓、陽稱助生理、陰謀自恣矣。押客情郎、窺

又曰、其顏可愛、其心可悪、僕若他日得志、寧欲營山莊閑置之、呵呵、

藍川曰、春翁竹枝、有湟于甄屖三十六、中人資産百城傾、句、此實錄也、

隙而進、妓乃得縱意於其所愛、不得拖鬼胎、是本地之恒例也、

妓之涅齒、亦得於豪客、以爲一岳之名譽、衣飾一新、錦繡盡美、大開壽宴、觴客、餉層餅樂籍中、是爲恒例、壽儀之腆、大抵及千金云、

坊坊無處不脂粉、樓樓無時不絲竹、燕歌之聲、遏巫山之雲、趙舞之影、欺章臺之柳、使人爲遊於仙都之想、

藍川曰、聞近日清商寓本地者、釀酒獲奇利、外人狡獪、真可憎、

漁村曰、狀得妙、

秦淮之情吏、揚州之風流、亦不如本地也、

本地自古無釀酒家、皆仰諸他方、而白雪金剛、爲北越第一矣、又自羽州大山來者極美、不讓冊釀、

小千谷多製縐絺、謂之越後縮、其薄如蟬翼、而不粘于體、最爲佳品矣、盛夏衆娃新裁爲衫、宛如宓妃著鮫綃出洛水也、

本地有游園、稱白山公園、多

蘊齋曰、解語之花、與无語之花、一時並開、可謂一大奇觀矣、但恨近日無解語之花勝無語之花者耳、

又曰、此館而開書畫會、何等殺風景、後段唯有拉妓往觀焉數

植花樹、以供游觀、南園之候、梅花咲、桃李綻、紅櫻媚、海棠醉、牡丹芍藥取次占春、北地則花信不能應曆、二十四番、一時開落、及花候、衆妓爭游觀、蓮步生香、柳腰飜風、與群芳鬪艷於一園中、三春之行樂、莫盛於此時矣、

園中有燕息之所、稱偕樂館、時開書畫之會、或張送別之宴、游客常不絕、館臨蓮

頗文纔不竄、

蘊齋曰、僕嘗有詩、其一聯云、古松寸許龍鱗古、新竹尺餘鳳尾新、蓋亦實事、

池、夏秋之交最佳、錦雲爛爛、潤香襲衣、遊人追花候、拉妓往觀焉、冶容艷態、兩不相讓矣、

暮靄抹一百三十餘橋、街燈照二百四十餘坊、毎坊張夜市、士女雜遝、而古坊殊爲盛矣、花師爭搬來花卉、謂之草花市、奇花異草、淡紅濃紫、千嬌萬態、四時無不春風矣、

沿渠而植柳、千枝罩春夜之

烟萬條遮夏晚之月時繫載妓舟柳依妓而添色妓依柳而加艷裊裊娜娜互鬬其腰肢矣

盛夏則載妓趁涼信川一帶微波皺紗碧水凝藍脂粉之香悩河伯絲竹之聲動龍城至夜則燈火万點倒射水底恰如衆星隕來浮沈于波間也納涼士女集水濱爭撲飛螢長袖飄風紈扇映月涼味與遊趣合

漁村曰當是時還使與楮幣數張則其病頓愈矣其效豈是寶丹之類

蘇川曰此評先得吾意

蘊齋曰丹釀之未發覺者被之以艸薦故東京之俗亦呼之被

爲夏晚之清賞矣

娼妓之厭客者受身值而不許佗儇使客通夜守空房乃狹斜之常態也本地之娼妓不然若厭客則推病而去鴇母不敢尤客亦不得怒顧比之使客通夜守空房則其情有可恕焉

非娼非妓而密鬻春者有焉謂之被薦所謂私窠子是也不詳其昉於何時代又不知依何典故名焉蓋潛

薦与此同名異物因憶世間同其名而異其實者頗多有非寡婦而称八百八孀者焉有肉食妻帶而稱僧者焉然商賈而稱官吏愚氓而称尹長者吾未聞之也若使夫子生于今世將不遑正其名也

藍川曰醜俗可厭不可无矯正策

伏鞘晦而不顯其形影之謂耶粧姿如處女而尚有可春戀之娇態是以其盛頡頏於色妓云

似娼而非娼似孀而非孀者謂之後家蓋過嫁期而失良媒月下冰人不省者是也故剃眉涅齒守空房與寡婦一般邦俗呼寡婦爲後家故亦以彼名此耶古有八百八孀之称其盛可想矣聞昔者無有娼妓寡

婦無依者陪酒奉情是爲土妓之起本而後家之名所由出也

狹斜樓主十之九爲婦女而亦有如主翁者或有客誘樓主者不敢尤想有所謀而然也歟閱崔氏教坊記云蘇五奴妻張以娘善歌舞有邀迓者五奴輒隨之前人欲得其速醉多飲酒五奴曰但多与我錢喫䭔子亦醉不煩酒也今呼鬻

漁村曰、京妓淡粧、越妓凝脂粉、作者謂之擬京樣、吾不信、
蘊齋曰、予嘗日本地之妓称鵺妓、蓋以東京其頭髮、西京其衣飾、而別帶一種之土風、似賴政所射怪鳥故也、
五峯曰、非東京非西京、總是新潟之妓譬

妻者、為五奴自藕始、乃如彼主翁亦五奴之類也、
本地之妓、其粧飾古與京都女郎一般、今則專擬東京、然就熱忿冷、即越女之本色也、忍呵責執情實者無有焉、雖然渠亦人也、豈皆無情者哉、不以禍福悛蘭質、不以死生渝蕙心者亦復有焉、土俗却目為花風病而嘲之、是其所以致無有也、

上九

如今詩者、唐宋各有其長、而拘門戸之見者、揚彼抑此、一意摸倣、必期逼肖、不知其捨性靈、尚格調、是明人之所以多僞詩也、
漁村曰、越女入東京、其價倍蓰焉、蓋以其性輕嫖、能接客也、京妓不然、一意撰客、以為趨舍、所謂居養之所使、然固不可誣也、
蘊齋曰、妓之多情、與婦之不妬、各非其本

七月七日、各坊製一大燈、數人舉移、播鼓取勢、闐肆廢市、排宴觴客、晝間用山棚代燈、夜分殊雜遝、人影闐街、鼓聲轟天、徧行坊市之間、遂出海濱而罷、謂之湊祭、祭住吉神云、然祭者蓋名耳、其實出浮圖氏盂蘭盆之說、漢土所謂燈節之類也、
本地之俗、中元張燈、稱照祖先冥途、夜中展墓、此夜男

色也、反之者、則受嘲、固其理、
五峯曰、菱湖詩題曰、夜自寶珠津歸柳原村途中即目、蓋在越中時作也、非指新潟、

女結隊而踏歌、謂之盆踊、喧嘩雜遝、徹旦、以其蕩人心、為官所禁、今則斂影矣、卷菱湖有一絕、可以徵古、其詩云、幾隊花燈掛半空、歌聲笑語月明中、膝頭古墓無人祭、一點秋螢照露叢、
金陵名妓李十娘、語余澹心言曰、兒雖風塵賤質、非如淫蕩者流、學夏姬河間婦也、此言誠有道理、雖非好

上十

蘊齋曰、佳人薄命、才子特蹇、千古一大恨事、擲佗於風塵中者、豈獨此妓而已、讀到此、不覺大息、
又曰、忘其名、信可惜、蓋今猶掲籍否、
五峯曰、世有如十娘其人者、則余將不厭為情死、而耕山却忘其名、竟是無情男子、

淫蕩者、亦有不得已而棲棲于風塵中者、余知其妓而忘其名、惜哉、
烟花場、必有稱幇閒者、而助酒興媒紅情、如本地則無如此徒、教客不飽遨遊也、蓋越女天質艷麗、加以歌舞超妙、花顏柳態、置人於春風中、是其所以不須幇閒也、
孫氏北里志曰、多有遊情者於三曲中、為諸妓所豢養

必號廟客於本地絕無如此事而僅有之不能其全終始也

白山祠傍枕信川有酒肆稱延壽亭青松蔽門碧波蘸欄歛峯角巒當窓呈秀水光與山色映盃盤閒小妓舞大妓謠漁唱答棹歌松籟入琴徽晚風吹水涼氣透簾使人爲坐廣寒宮裡閒覓裳羽衣想真爲納涼第一之地矣

蘊齋曰桒田碧海信可慨

白山祭典爲春秋兩度而秋時殊熱閙妓盛粧衣飾鬪美千艷萬嬌結伴賽神紫袖飄鸞錦帶曳霞羅織張碧鬆展鳴玉顧眄翱翔賽唯託名而已

東帶信川北面於海有一行樂場稱毘沙門坊酒樓連軒娼婦聚居焉宴秋之交商舶輻輳遊客麕至絃聲鼓韻日夕不絕古有蓮池起亭于其中客追茗候聘

藍川曰日和山俗甚僕欲呼做晴臺不知適否

蘊齋曰數字日和山之景尽此矣

妓開宴自遠望之真如展採蓮之圖云今則無矣

坊北瀬海有小丘俗呼日和山設露臺採張商舶謂之船見臺佐山可撫信水可掬輿羽之山隱約上掌回首街市聚眉閒有亞樓青帘高揭以待遊客客携妓至此度舞曲彼戰豁拳亦行樂之一場也

寺坊之西稱大畑坊有酒肆二一曰行形亭一曰堀田

漁村曰依山築園地形已得宜矣而酒之芳烈魚之鮮美亦與東京八百善之調理相伯仲

五峯曰行形亭園池之上有西湖柳一株傍構小亭翠影籠簾清邃可愛頃日往遊則見大閣巍然俯臨池水雖有壯宏之觀大損風致俗人強解事者往往如斯

樓搭起數樹待客松樹爲林奇草異木春華夏秀庭園之勝爲本地第一矣遊客携妓而至松韻和絃聲空翠滴紅衣別有風趣焉向夕懸燈數千奪嫦娥之影自遠望之疑星宿聚于林端也

大畑坊之後有丘安穀神祠松柏蔽堂宇甚幽邃娼妓日賽猶與漢土祭白眉神一般前時春夏之交割烹

漁村曰、夜間有柳陰引袖之白鬼、可不戒哉、

蘊齋曰、過譽所謂出墨池上靈山者、

五峯曰、鰛魚價賤而味美、尤可入吾輩貪士之口、

家、就祠側起棚、青帘招客、今則漸衰矣、

寺坊或称脱奔巷、纔隔渠有寺院、故改稱之、青樓連檐、娼妓招客、繁華亞古坊、沿渠而植花樹楊柳、舟行其間、香芬襲人、翠色滴衣、使佳人添一層之艶、

春風始暖、堅氷既泮、漁人網鰛魚、觀者齎至、於是酒肆就海濱起棚、風帘飄雲、芳烟罩海、嬌客拉裊釵來笑

語紛劇、綺羅成叢、地轉沙漠境、開佳麗、亦為遊春之一勝焉、

西風吹荻蘆、秋水浮寒光、鱖魚祊上、漁舟爭先下網、銀鱗刺潑、士女往觀、恰如楚人競舟於汨羅、或有客之載妓觴舟中、而水邑和嬌歌紅塵中、生紅塵外之清趣焉、

鱖魚祊上鯯者、謂之祊魚、以尺論價、一尺抵二十金、方

藍川曰、善狀、

五峯曰、蟹之大者、謂鱈場蟹、亦他邦所以也、其味尤美、比之東京車蝦、更優幾等、

俗之結習、猶東京於祊松魚、

每朝近郊農民、擔來野蔬、張露店販之、謂之朝市、蔬菜皆帶郊野之露氣、甚覺清鮮也、漁人亦搬來魚蟹鬻之、銀鱗潑刺、蠏蟻跛扈、其新鮮纔離水耳、沽者手籃而至、一一論其價、市中囉唄、妓亦至、一洗海棠之餘睡云、

本地人力車、每車繫數鐶於

蘊齋曰、八字形容得妙、

五峯曰、春翁亦有詩云、故國青山不得回、此間松蓋斷碑苔、招魂壇上淚如雨、血肉進香千里來、讀之使人感愴、

背後、車轔轔、轉鐶鏘鏘鳴、使人為遊仙之想、森春濤有詩云、雲帷半捲佩環鳴、有女同車朝玉京、徐自木樨香裏去、遊仙一夢出虚聲、

常盤岡有招魂社、祭戊辰之役死王事者、紫幕深垂、以護忠魂、華表高聳、以表義名、使人肅然起敬、每祭連二日、晝奏能樂、夜揚火戯、觀者自四方集、肩摩轂擊、

漁村曰、淫奔之俗、不可無矯正、

徃來似織、嗔咽重沓、無立錐之地、其繁昌與白山祭禮伯仲焉、

本地不許色妓濫出郭外也、近有犯禁冒入歌筵而蒙罰者、清客王治本有詩云、全是錦雲堆裡仙、生來薄命總堪憐、風流底事干官怒、錯抱琵琶上舞筵、

北山浄光寺、北越名刹也、舊在鳥屋野、明曆中始移本地、順德帝北巡駐驛

蘊齋曰、倒枝竹到処有焉、何足奇、但士人抵死佞鸞宗、則可謂奇之最奇者矣、然則其奇不在彼、而在此耳、

此寺、賜宸翰及御製歌、今猶見存、又有稱鸞公倒枝竹、是爲北越七奇之一矣、啓龕之時、士女雲集、嗔咽于山門焉、

真城院有二開士像、衆娃爭賽地藏、香火無虛日、觀音則雕棟丹剎、寶帳塵封、不復見賽之者也、蓋女子奉觀音、諸方一般、而此獨舍此媚彼、余不知其有何因緣而然也、

漁村曰、聞此等女子、往往衒色街頭、遇人輙含皇曳尾而去、何等獸行、

酒樓皆以蓮藕充下物、清客王治本曰、蓮實藕片、最是佳品、東京人未有生食者、今新潟咸以供客、与吾邦全、又其賞美色香呆、稱三絕、

商家之女子、跣足褰裾、以紅襻結兩袖、手提籃、夏盛白雪、秋盛青豆、行賣之、土音溫柔、甚可愛矣、

地宜柳、皆高大、沿渠駢影、使人步隋堤之想、最可於納

蘊齋曰、此篇引古今人詩多矣、僕以此詩爲壓卷、五峯曰、本土無所謂八百八樓、蓋從八百八嬌轉來也、才人逞才往往杜撰至此、人唯震鴨涯之名、而不議焉耳、又曰、細膩風光耐人尋思、所以傳唱一時、唯揚州留一夢五字凡率、頃讀五山堂詩話、方知三年留一笑

涼、賴鴨崖曾遊此地、留一絕云、柳梢眉月夜微濛、江入渠流曲曲通、八百八樓涼似水、撳簾七十二橋風、

靜軒新潟富史載柏木如亭詩二首、其一云、八千八水歸新潟、七十四橋爲六街、海口波平呑湊舶、沙頭草軟受遊鞋、苍顏柳態令人艷、魚膾蟹螯閒酒懷、莫道揚州留一夢、此間何恨骨長埋、

之誤也、

又靜軒詩云、八千餘水合走洋、七十多橋分界坊、人居稠密何熱鬧、商帆輻湊自四方、絲邑鼓韻際晚轟歌吹之海脂粉鄉、嬌模嬌樣嬌紅粧、坊中多半是女郎、就中有種老娼妓、所謂八百八家嬭、嬭婦淡粧娘濃抹、嬋娟鬪媚綺羅香、洞房春曉鴛鴦被、流連莫箇不倒囊、誰憐老客情況冷、且呼一盃潤枯腸、孤枕支醉梦易驚、絲聲猶攪月三更、

上十七

藍川曰、亀井算略全歐西筭法、而更便者、惜世少知之、

徃時、龜井津平者、受筭法於百川氏某、別立門戶、是稱龜井筭、又曰百川流、乘除之法、比世所用極簡、本地之人、至今皆用此法、妓亦學之云、

新潟雜記卷上

渡邊漁村曰、菓名越之雪者、越之名產也、其名蓋本諸此、予嘗有詠雪詩云、晨起宿奇觀、階前珠万斛、人從軒下過、堆雪高於屋、

新潟雜記卷下

新潟　岡田有邦著

越之於雪、他州不見其比、至沍寒、積及五六尺、而如本地、壓盈尺耳、土人掃集堆積、笞覆其上、而藏焉、待盛夏而掘出之、宛如碎崑山也、

盛夏則本地之俗、相競浴海、乃稱年中不受邪氣、就中以土旺牛日、爲最有効驗矣、此日、以朝自未明至日

藤井鳩齋曰、余讀長恨歌、知唐天寶之俗、不重生男重生女、而本地之俗、今日亦然、蓋其意皆在養成錢樹子、巳萬里之異域、千載之遠、同其俗、豈不亦奇哉、
又曰、文人不解事、概如此、

出、夕自斜陽至日沒、爲浴度、士女集海濱、政爲與鰮漁之時、一般之肴焉、

北戶錄曰、娼許和子、入宮能變新聲、臨卒謂母曰、阿母錢樹子倒矣、因謂本地妓母、大概假母、眞母亦間有之、然不知論子道、其心唯在養成錢樹子而已、

文人稱本地之橋數、或呼七十二橋、或呼七十四橋、予問之古老、以七十二橋爲

小崎藍川曰、文人非不解事、其呼爲七十二橋若七十四橋者、不過謂數之多耳、
坂口五峯曰、七十四橋是也、其爲七十二橋者、從七十二峰之例耳、古人詩文中用數字者、概有定例、如十二樓、二十四橋、三十六灣、七十二峰、是也、後人妄意增裁、即不成語、
漁村曰、實况、

是、其爲七十四橋者、蓋擬揚州二十四橋耳、今則至一百三十三橋云、

我友銀田石牛、嘗遊本地、有新潟詞七闋、皆爲佳作、其一云、風吹翠箔鈴聲送、花擁紅欄香影堆、爲慰空房蕭瑟夜、寫眞鏡裡寫郎來、

寄居有蓮池、廣袤數百步、至花候紅瓣白葩、葳蕤婀娜、半開含露、如獻媚、滿開噴香、如呈笑、爭娟闘艷、近視

漁村曰、七十二橋增、至一百三十三橋、八百八孀亦當至八千八百孀、橋猶然、况於人乎、呵呵、
蘊齋曰、或言八在湯數爲大陰、故本邦擧大數、必以八、所謂八握鬚、八岐蟒蛇、八頭

之、如接漢宮三千之佳麗、遠望之、如鋪蜀紅萬匹之錦、暉朝曦映夕陽、潤香襲人、惜哉、地僻而知者少矣、

岙所謂八百八孀、存名耳、靜軒新潟富史曰、八百之稱、会不詳其由、或言取八千八水、或言不過稱數之多、与呼菜肆日八百同、余曰、八千八水之稱亦然、与東都八百八坊一般、

七修類藁曰、西湖盛起於唐、

烏之類也、然則八百八孀與八千八水、皆謂其數之多耳、非必有孀婦八百八人、河水八千八流也、此言似有理、未免穿鑿、

縕齋曰、詩字刪何如、

至南宋建都、則遊人士女、畫舫笙歌、日費万錢、盛之至矣、時人目爲銷金窩、我新潟亦不得不爲一銷金窩也、

世稱飄客者、謂寄跡于花柳之間、如物之飄流而無定之徒也、本地則呼唯調戯娼妓、不費一錢而過者、謂飄客、其名全而其實異矣、

鱸松塘亦嘗滯遊迹、有一絕、蓋詠孀婦詩也、遠山剗却

藍川曰、余亦刪詩字爲可、

漁村曰、未強如予者、亦不得不抵掌贊成、

縕齋曰、余亦不得不批、

藍川曰、比之延壽亭縱觀川身、似輸一着如何、

雙眉黛斜把牙梳掠鬢雲、司馬琴心何須挑當壚侑酒有文君、

面於信川而有一大酒樓、曰大川樓、信川之水與羽之山、皆爲庭中之物、眼境頗寬、此樓宜于月、宜于雪、又宜于雨、而獨憾無花耳、然換之以解語花、則稱雪月花皆宜之樓而可也、

信濃川發源於飛驒、經信濃合八千八水、而走海、汽船

下三

縕齋曰、逐璧作争珠似可、

數十、往復如織、汽笛之聲、日夜不絕、亦可徵本地之繁昌矣、

寄居有諏訪祠、例祭爲八月十八日、此夜少年相集、揚烟火、霹靂一聲、黄龍逐璧而降、白蛇噴火而昇、金烏數千、翔白烟中、銀星幾萬、聚黒雲外、奇狀異態千變万化、不可名狀、自古火戯之盛、稱本地最第一矣、

伊太利亞之俳優數人、演技

下四

漁村曰、獨遺古街精養軒如何、

藍川曰、前年有鳥清樓推爲酒樓之巨擘、今則家道大衰零落

於本地、不得利而去、其主幹某者、獨止而開牛肉店、其人頗解國語、懇待遊客、生理漸盛、而爲一大酒肆、亭榭之規模、酒肴之風味、皆擬其國風、自稱西洋料理、本地開此業、實以斯人爲鼻祖、次之者、爲滋養軒、今東西樹旗幟、

本地稱大酒樓者、有五、在大畑坊者、爲行形亭、爲堀田樓、在西堀坊者、爲鶴清、在

為一妓院矣、
蘊齋曰、昔者積翁名書林以嵩山房、而嵩山房之名高于世、作者今評酒樓亦以嵩山、余知嵩山樓之名價自此益高于世、余不得為主人不賀焉、

新路者、為鍋茶屋、在大川坊者、為大川樓、或人曰、着是擬五山、以鍋茶屋、即為嵩山、

大川坊之北、有達那垂之津、兩岸繫渡舟數隻、一船去、則一船來、去者與來者、舳艫相啣、楫櫂相擊、其往還之繁、他之所不見也、

夏秋之交、船舶輻輳於河口、帆檣如林、至夜舷燈列星、影映水中、自遠望之、恰如

漁村曰、就度撿之狀態、作者何不詳述之、呵呵、
又曰、詳述非難、蓋畏出板條例也、
藍川曰、至彼脫奔巷之娼妓、余未知果有此光景乎否也、好笑、

電光之掣金蛇、亦一奇觀矣、

大畑坊、有撿娼妓梅毒之所、稱驅梅院、每月數回、娼妓就而受撿、其行者與歸者、來往如織、或馳騎車、或鳴蠟屐、載者與步者、爭婀娜鬪嬋妍、隊隊吐彩、步步生香、政與蓮華之觸風、牡丹之帶露一般、

稅關在綠坊、規模擬洋風、巍然聳雲霄、森舂濤有詩云、

藍川曰、家屋之結構或然、至曰妓女之麗都他樓皆不及、余未能信、
蘊齋曰、東字伏後奴、

繁富堪徵、入港船、帆檣林立、碧山前、無端忙煞海關吏、收稅今年多去年、

妓院在上位者四、其在古坊者、曰鶴揚樓、曰灣月樓、曰綿治樓、其在西堀坊者、曰漆屋樓、家屋之結構、妓女之麗都、他樓皆不及也、

距本地東半里許、有村曰關屋、即湯浴之塲也、自中春及晚秋、浴客麕集、有酒店彥峯當窓而聳、信水橫門

蘊齋曰、與捨美妻妾而寵阿嬖者一般、
漁村曰、須比老人即我師也、如其詩出一

而流、屋後皆松林、翠色滴裳衣、自為山中之趣、誠近郊銷夏之地也、時有遊客携妓來、終日高臥、笑老謝安者、

又里許、有平島、達弥彥之驛次也、有酒亭、雖不甚壯麗、亦足買一醉焉、飽大牢者、往往就此亭而宴、雖僻地、其名周乎州郡矣、

本地方言、呼少年謂兄也、尊不知依何典故、蓋中人以

時之戯作、不思流傳于坊間、
蘊齋曰、兄也尊入詩俗甚、
蘇川曰、方言呼少婦謂姉魔、他方所未聞也、作者遺之何、
五峰曰、俗言入詩、不必俗、要在運用何如耳、

下之尊稱也、浿北老人一絶云、士女相携、棨作群、趁涼街上欲黄昏、阿娘早認胷知面、團扇遥招兄也尊、

近年倣東京閑河之例、浮舟於信川、揚烟火、縱沖天、流星浴水、遊船畫舫、紅燈連、萍實電光射金波、舳艫相啣、楫櫂相撃、士女雑遝、水濱無立錐地、夏晩之繁華、無盛於此時矣、

常盤岡、有錬兵場、廣袤約一

萬歩、至演習之日、喇叭粛、而兵士慎約束、號令嚴、而進退如手足、或縱或横、或方或圓、臨機應變、人健而如虎、馬駿而如龍、旗影飄、劍光閃、萬銃齊發、猛聲轟天、白烟抹地、望其人馬、則如叱雷霆而飛行雲中也、今以兵營轉新發田、不能目撃此壯觀也、

劇場有二、其在古坊者、曰滌座、其在厩坊者、曰永樂座、

蘊齋曰、信川與鴨河、其清濁有涇渭之別、則其質之美悪、可従知也、所同其質云者、

繁目互不相譲、青幟紅幕、各繍負贔二字、以表名望、若夫暮靄抹柳、街燈點星、觀者為群、爭欄寓目、士忘帽落、女不知釵脱也、大抵優人聘之長岡、間有聘於東京者、終年不過兩三度也、

信川之水、與鴨河之水、同其質、雖不甚清、亦適茶、以故茶人誇称不已、市中所飲、皆此水也、或有鑿井者、混

所謂茶人之誇稱耳、雖然信川一帯之水、新潟五萬餘民命之所係、微此濁流、吾亦不免早晩上枯魚肆也、其利害豈暇擇清濁哉、

濁不可飲、獨在旭臺及寄居者、甚清而可供飲用而已、

本地富魚蝦固也、獨乏鰻鱺、大抵自奥州至、所謂客魚、味乏、値貴、但得於信川者、味極美、而得極少、土人謂之大川鰻、余好鉤之、其大者不下三尺也、

信川至冬、出稱八眼鱣者、漁父捕來上市、其状酷肖鰻鱺、而味不及之遠矣、然略

堪為下物又乾食之能治眼病云

市街之西有村曰寄居農人開圃種四時之蔬最有名於蕪菁俗呼曰寄居蕪甘脆無比矣今則蔬圃漸廢家屋漸構為一條之坊市如其寄居蕪唯存名耳

近日清人以書畫詩文遊本地者有數人焉酒樓之扁額妓院之屏風無到處不見其筆蹟坊間亦有販之

蘊齋曰信然信然

蘊齋曰呉俊明吾雖未詳其履歴意善俗画一畫工耳恐不及館卷二先生

者耳食者雖珍襲之足觀者甚稀矣

土俗之喭曰杉樹與男子不成長於新潟蓋有名於本地者柳樹與美女也想杉直而柳曲男子剛而女子柔是則曲直不並立剛柔難相敵之謂乎

我言杉樹与男子不成長於新潟者非真不成長不得成長其人物也自古至今有名於世者獨有呉俊明

藍川曰余將云新潟人物有館機卷大任耳如呉俊明柳其末也

五峰曰儒家有虎山北海學藝德行亦足可傳也

藍川曰徐秋濤美人譜有云美人艷処自十三歲以至二十三只有十年顔色今作者乃曰越女艷処分

耳如館機卷大任柳其末也

每朝有擔野花行賣之者紅紅白白楚楚粲粲猶帶郊野之露氣目足一洗睡眸賣花之聲蓋與鸞兒呼醒曉眠一般頗有佳趣焉

予嘗評越女艷處分之三等只有二十年顔色自十三歲以至十七歲譬猶花之初放婀娜可愛是為第一等自十八歲以至二十四

之三等只有二十年顔色余欲袒左右肩也呵呵

歲譬猶花之正開妖嬌可喜是為第二等自二十五歲以至三十三歲譬猶花之爛熳是為第三等雖則近零謝亦有一種可憐之情態也

往時摩沙耶巷有鐘樓創於貞享四年云今僅存口碑耳余適閲新潟冨史載稱寛庵者之詩足以徵當時其詩云寶爐猶煖裊雲直背翠帳中鸞睡濃一枕驚回

藍川曰、無驕色不洒落、其然豈其然哉、
蘊齋曰、任亦重矣、果能否、吾未能保證、

今
合歡梦、摩沙耶巷五更鐘、鍊兵場北、有號砲所、霹靂一聲、以報正午、或驚胡蝶之芳夢、不必破鶯鶯之美睡、

每
月至日曜日、見處女結隊而遊歩市中、即女子師範學校生徒也、素艶而無驕色、端麗而不洒落、眞可愛、他日矯正淫風者、其在是等之女子歟、

古
坊有混堂、稱新湯、構造之

五峰曰、近時有開浴室於大畑通者、曰群鶴池、湯泉已清、命名亦佳、

壯麗、浴室之清瑩、爲本地第一矣、亞之者、乃爲藤之湯、各以在狹斜之中央、衆娃粲爲群、使人追想華清宮之盛時焉、

相
生坊、有琴平祠、祠傍皆妓樓、至例祭之夜、妓盛粧、裳衣欺雲、容姿羞花、冶艷妖麗、無見而不喜者、然而妓媚賽者、賽者顧妓、或有相生眷戀之情、互結偕老之契者云、是所以坊名之由

而起也歟、

夏
秋之交、以船舶泊於河只、乃有掉小艇行賣菓實者、船客爭沽之、水上乍開小市焉、或云、不翅開小市、或寵解語花、

青
柳橋畔、有一茅店、自古以賣餅爲業、世謂之青柳團子、始遊本地者、雖劉伯倫之流亞、亦無不試一喫者云、

除
夜、計算一家之歳入出、掃

五峯曰、水仙王不知所指、

室、而賽白山及神明之祠、謂之八參、即丑牌賽詣之義也、元旦、正服又賽、此日禁掃室、蓋吐故納新之謂歟、

文
人之遊本地者、無不作詩、作詩必詠柳與妓、此二種勝他處可知也、野田笛浦亦留二十八字、萬株垂柳翠雲長、隔岸紅樓半夕陽、錦樣風華人似織、一杯誰薦水仙王、

藍川曰、今日則有廣商館、有弘商所、有弘商館、名字異而其實皆今觀商場、

今稱學校坊地、古有酒肆、曰三獻茶屋、土人買醉例擲三文錢去、因曰三文、酒値之賤可驚也、後人送客就此閑離筵、因改獻云、今則雖沒迹、猶存口碑、足以致古也

近日、商人聯合、開一大商場、修廊曲直、連肆而賣百貨、謂之勸商場、買者爲群、論價擇物、其熱閙不可言也、向夕紅燈千點、懸之於檐

五峰曰、余亦有新正一律曰、樹上明霞曙色開、僻村何處放春回、厨憑慧婦幸藏酒、莊借故人欣有梅、海外客投紅刺去、山中書帶白雲來、間身未免趁常例、沈擬拜年過旭臺、録以博粲、

西田敬軒曰、雙聯絶佳、見卿之老成、

下、使人爲入不夜城之想焉

松筠挿門、正服拜年、是我朝一般元日之禮也、如本地、則不翅邦人、外客亦猶倣之、叩門祝歲首、其盛可想、余有新年口占一首、雖不入格、姑録及北地從來春色、晩街頭雪壓阻東君、履痕點點印蝌蚪、鳥跡連連綴篆文、外客祝詞交鴂舌、醉人名刺帶微醺、吾儕何

井部健齋曰、結末含蓄多少意思、

蘊齋曰、家翁呼阿爹爹、家婦呼阿隆隆、女兒呼丹穉、北地之俗往往然也、但豚豚之稱、余始聞之、或恐遂爲豚犬耳、

以答新歳、羨見梅花發異芬

白山祠畔、有一大老松、枝幹蜿蜒、酷肖龍蛇焉、俗謂之蛇松、又稱服其皮能瘳瘧、遐邇爭覓之

方俗呼家翁謂阿爹爹、呼家婦謂阿隆隆、男兒謂豚豚、女兒謂丹穉、余不詳其義、蓋中人以下之尊敬親愛之稱也

礎坊有白勢氏之邸宅、金碧

藍川曰、以聖駕北巡、爲終筆、可謂得體矣、

輪奐、邸内寛宏、而亭榭點綴、回廊曲直、觀臺聳雲際、高樓抽林梢、控信川於庭中、鑿池沼而放鳧鷺、異木奇石、以逞山川之風致、雖公侯之邸、亦或不過焉、明治十一年、聖駕北巡、駐驆于此三日、恭惟、聖上北巡、前古未曾有之盛典、可謂千載之一遇矣、白勢氏而蒙斯榮、豈非累世積德之所致耶、然則爲其子

孫者、宜聿脩厥德、無墮家聲、以傳斯榮於萬世也、

關李茨陵　書

新潟雜記卷下

南摩羽峰曰、岡田氏之美擧、不可不贊也、

水谷輿嶺君、嘗北遊、余訪之新潟旅館、以本書及新潟志供於一粲、因有二十八字之贈、姑錄及、

一見欸然呼酒杯、風流豈啻歎奇才、健毫能補治功闕、新記全州勝事來、

新潟雜記逸序

小原鐵心嘗評三都歌妓曰、東京妓、竹外梅花、西京妓、雨中海棠、浪華妓、月前梨花、各地新樣奇粧、雖有時乎不同、然一時之評、亦足以徵今之不異於古矣、越之新潟、妓流之淵藪也、獨怪當時鐵心之評不及於此、抑爲千羊之革、不如一狐之腋乎、近世妓風汚卑、日趨淫靡、三都皆然、況於新潟乎、新潟之妓、皆柔佞嫵媚、凝濃色飾錦繡、一目粲然、美則美矣、雖然淫媟成風、恬然無恥、若喚起鐵心於地下、而使其見新潟之妓流、當何如評焉、予先試評之曰、風後牡丹、不知鐵心首肯否、頃者、友人岡田畊山、著新潟雜記、予瀏覽之、酒樓妓院、神祠佛閣、凡可足記者、一網盡之矣、予復何贅、姑擧其尤物者、以書之卷末、如其他、抑末也、不知畊山亦以爲如何、

明治十八年初夏第二日曜、題於新潟客寓、時庭前薔薇花盛開、香氣可愛也、

渡邊漁村　識

城裡繁華二百春、揚州佳麗見今真、樓
頭歌吹柳梢月、應有腰錢跨鶴人、
芳譽自古遍京城、憐刹蘭身絶世清、一
咲越州多少士、纔教女子漫成名、
斗室炷香坐碧鐘、勝遊未得玉人憐、柴
扉斜掩黄昏雨、消遣閑愁是此篇、

右岡田有邦君所著、新潟雜記、其事實其筆艷、讀之使人有遊秦淮之思、覽畢題七絶三首於卷末、但恐夜光之名珠、纔玷其價爾、明治十八年七月中澣、　柏田虎山題

水谷與嶺曰、三首流麗巧緻、而無鄙俚猥雜之失、可謂温柔敦厚、能得詩人之風神者也、

又曰、十六字亦是可爲一首之看、

明治十九年十二月廿五日版權免許
同　二十年七月　出板

編輯人　新潟區營所通二番町第百二番戸　岡田有邦

出版人　新潟區本町通六番丁第廿二番戸　櫻井產作

賣捌書肆

東京　覺張榮三郎
仝　和田篤太郎
長岡　松田周平
仝　目黒十郎
高田　藤屋直三郎
三條　樋口屋小左衛門
加茂　番場吉次郎
白根　中野長藏
中條　村山長太郎
新發田　中澤屋仁太郎

新發田　大瀧九右衛門
水原　西村六平
仝　西村錬次郎
新潟　小林二郎
仝　本間東三郎
仝　井筒駒吉
仝　林富吉
仝　佐藤庄八
仝　斤桐賢三
仝　上野又吉

彫刻人　水原町　太田敬太郎

谷文晁 著

日本名山圖會

大阪府文榮堂舊刻本

據大阪府文榮堂舊刻本影印

日本名山圖會

江戸　谷文晁先生著　全三冊

唐土名山之画圖ハ諸書ニ出てことゝといへとも我邦の名山を真写せるものハいまだなし是のミか[illegible]谷文晁先生常に山水を好ミ年ころ名山勝地を尋探せられし[illegible]此書ハ川[illegible]天下の名山奇峰[illegible]探捌の細密に画出し[illegible]精妙を盡し[illegible]画家初学の規則とすべき鑑[illegible]名山圖會と題す

書肆　千鐘房主人誌

叙

川村翁之長壽七十而親瘵自官者歳不下百數而不以自醫其膏肓痼疾是可咲也凡翁腔腹間所梏結沉滯泉石烟霞凝而成癖者乃山岳圖非尋常藥餌之可除也今試延致之名利之場奔競之衢蕩之以聲色提之以榮位寵辱以摩其膏瀉盡以刺其髓攻治以千日之功則何爲余恐其癖塊不能除十之一也而今不思所以抽筋換腸者更使谷文晁圖天下名山勝區

輯以爲三卷朝夕觀以毒之余不知
翁膏肓可愈之期也既不能自憫
毒又欲畢以毒因病人於是何說
也凡淪此病者爵祿不可以榮之
錢財不可以利之威武不能屈錯
姫不能蠱也癡也髭頑卒迂僻爲

天下棄物矣今欲相毒因病人相寧
而爲之是不亦可哭乎翁與南部
人也家貧無儋石之貯性又羸弱不
能出巖棲谷飲躬耕自給肩一囊來棲
口都下既又不能勝疲請之領張其
居數里之外雖遍以權要王公之嚴

不肯移寸步刀圭之餘尚反古人於陳
編以自慰不欲爲棄物而世不肯
棄之衣食所適又不能自棄世且
驚此而嘲也不然則稱乃竊喬岳
而在天雲之表矣安能自折而往來乎
市塵間當其疾大發亂也賴闕拂

亂不能自排於是爲此不得已之舉
以順適於己且遇一日是亦可憫已余
雖與翁異業而其心詎有與翁相
似者今是篇事能無感焉於其
屬序也其哭翁憫翁者乃所以自哭
自憫也於其圖成也亦不能遽捨

取而閲之則山〻〻秀而峙者爲某〻
州鎮水之瀦而流者爲某〻所浸
瞑坐而想之烟霞之變幻泉石
之奇怪恍如來耳目前使人
忘身在塵縁片時者乃公翁賜
也其因之而〻孩猶蓋深有公翁
其將如之何
壬戌孟夏東讀篠邨彥叙

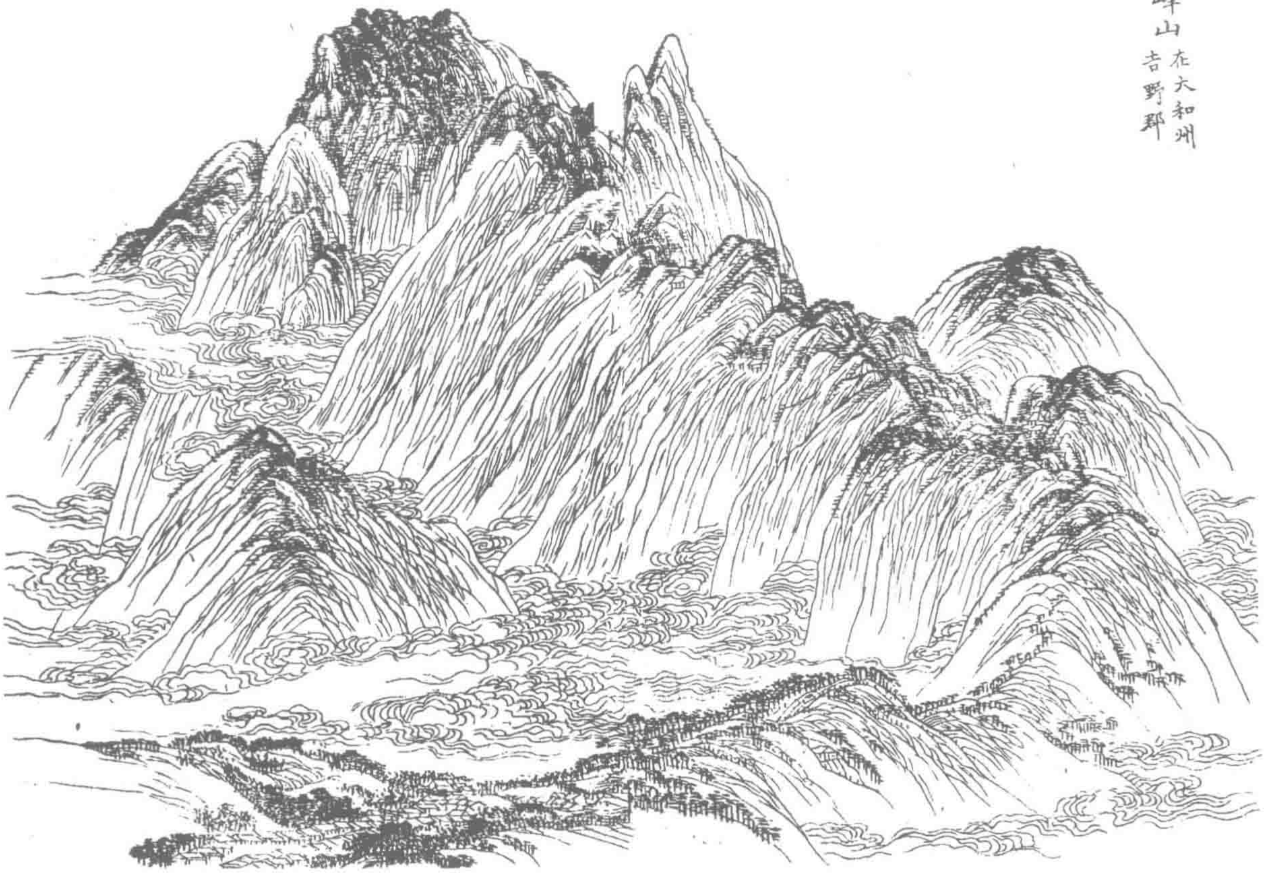
跋

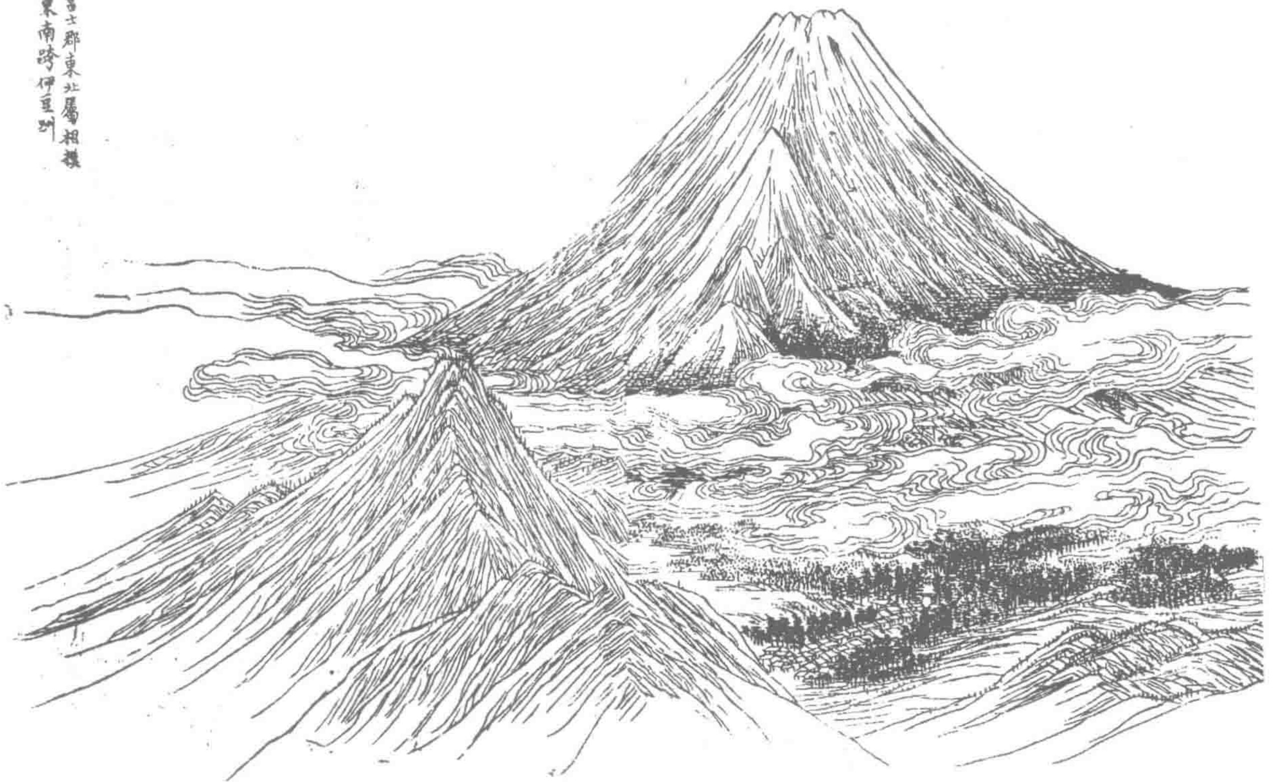
古今難得者唯間々如山嶽之遠衆水之清花中之色詩賦之趣雖善説者不能下一語唯其遊者知之今人徒慕聞之名求聞之似於是品藻畫圖涉攬群書以爲聞寄意玄靈脱跡塵氛以爲得焉又其次者貪生而又畏死故祝延與求亂世此等皆買之皮毛者也何關神情其夫聞得之自然者深得之深者淺於古人所以可備閑之嘆也余從弱冠有此癖喜誦讖古杭之言因讀未曾見書歴未曾到之山水如獲至寶嘗異味一跋

奇快難以語人也又曰遊山者須藉同調地主茲要丘壑爲僧策杖扶蔡唯意所適一境在旁勿使錯過一步未了莫憚向前寧緩毋速寧困無逸到頭而無所得勿中道而生厭怠携友勿太多多則意趣不同資糧勿太堅上略意與中敗勤於見解之奴布鼓其勇富厚好事之主時借其力勿偕酒人勿攜高伴每到境界切須領略時置筆於所備遺忘此遊山之大都也此數之興余所癖好比相符雖然余孤貧業無閒暇身世勝具何以當之若在窮鄉

俯懷輪歸絶跡之處埋沒不稱
者亦多矣故非傀奇特偉清
高絶塵之士則徧不能足跡於天
下也余所經歴僅十得五六耳余
畏友谷文晁与余同病而素好遊
圖至如山水者寶擁鄭虔筆且
訓之高手也蓋親至其地寫真景
未亦不爲少今併寫此峯嗚呼
世之與余同病者誰居余將從滕
而語得其自往者者昔
文化元年甲子秋日
南部川元善
莊士　葉生秀義書

余自幼好山水遍遊四方每遇名山大川必圖而收焉
蓋以山巒奇勝得之于天造者其風象自有無
畫之意味也錦城先生性与余同癖平居所慣
玩一山一水非真則不喜凡海内山水諸勝悉圖而
藏以展之静室中為臥遊歡娯者亦數十幅多
皆余所寫贈也壬戌夏以編百餘景以成冊子
額曰名山圖　文化元年九月刻成　文晁識


金峰山
在大和州吉野郡


在駿河州富士郡東北屬相模
甲斐二州東南跨伊豆州

妙儀山 在上毛州 甘樂郡



浅間山 在信濃州 佐久郡



磐梯山 在陸奥州會津郡



吾田多良山 在陸奥州安達郡二本松城西



巖鷲山 在陸奥州南部磐手郡盛岡城西



鳥海山 在出羽州由理郡



金剛山　在河内州石川郡東大和州界



高野山　在紀伊州伊都郡



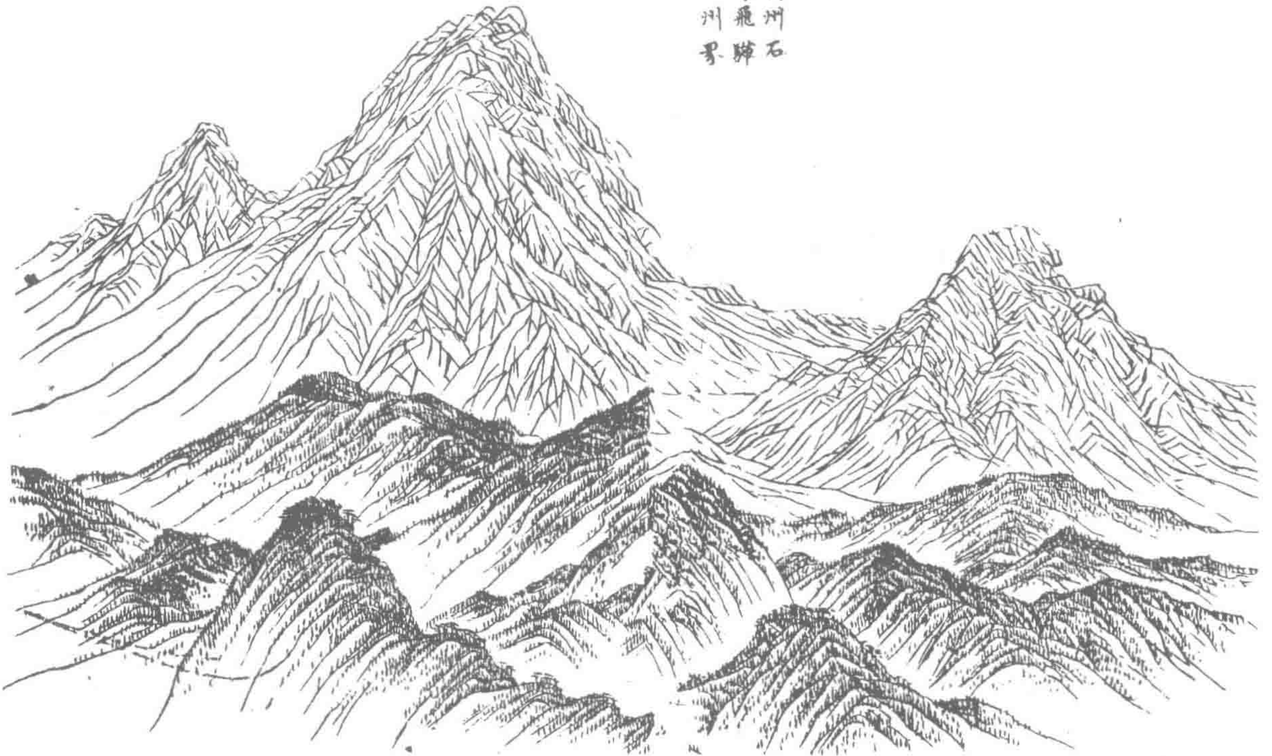
比叡山

在近江州滋賀郡東屬山城州



白山

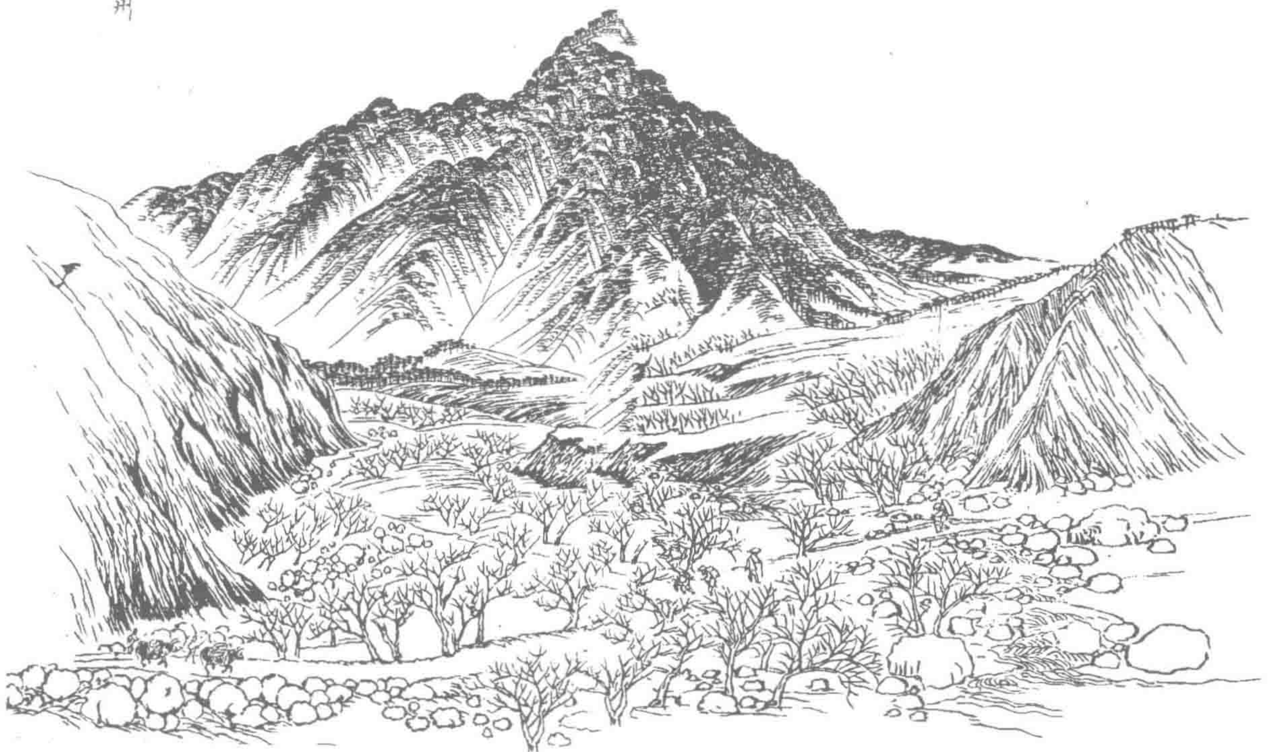
在加賀州石川郡跨飛騨越中一州界



秋葉山在遠江州周知郡



駒嶽在信濃州筑摩郡



御嶽
在信濃州
筑摩郡



七時雨山
在陸奥州南部
鹿角郡



愛宕山 在山城州愛宕郡



膽吹山 在近江州栗本郡



大山

在相模州太住郡



那須山

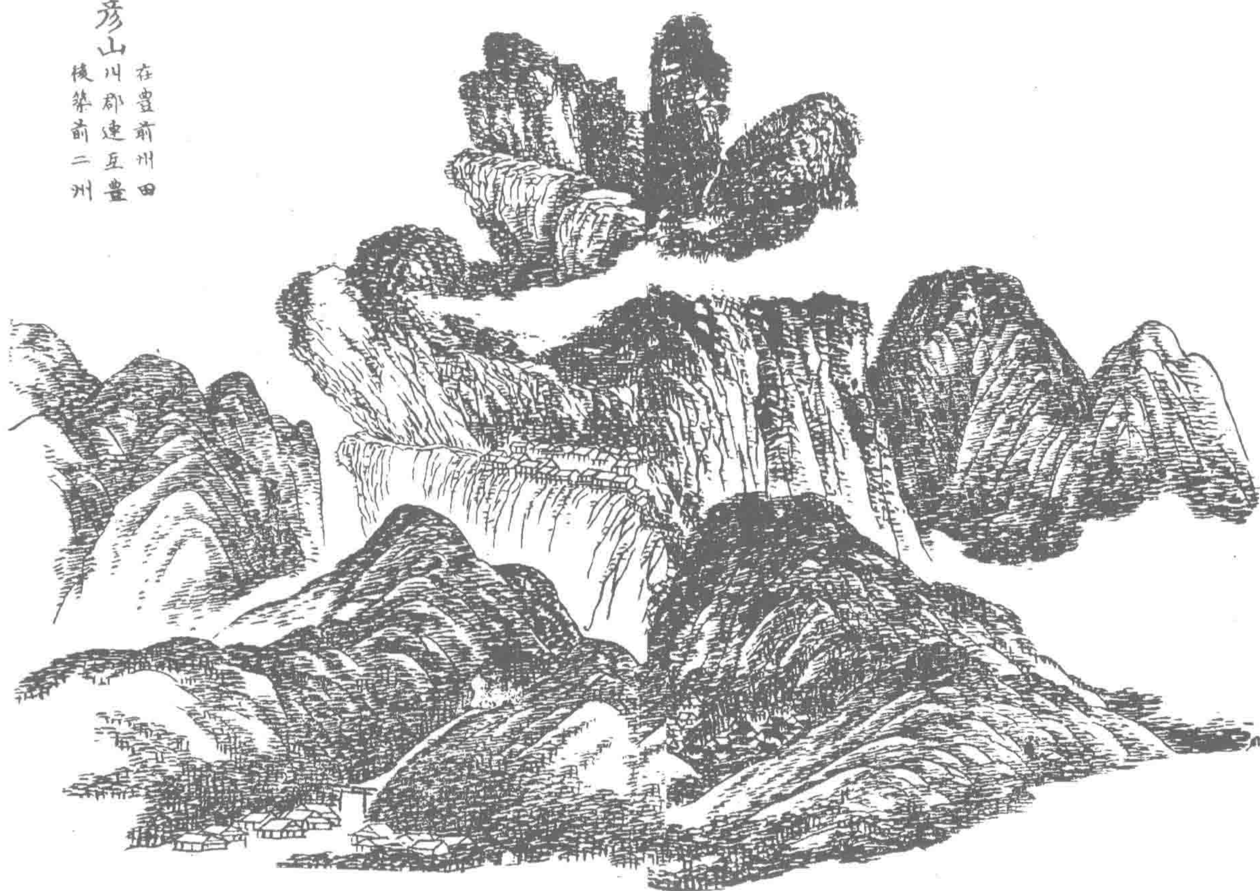
在下野州那須郡



天城山 在伊豆州田方郡



彦山 在豊前州田川郡連亘豊後筑前二州



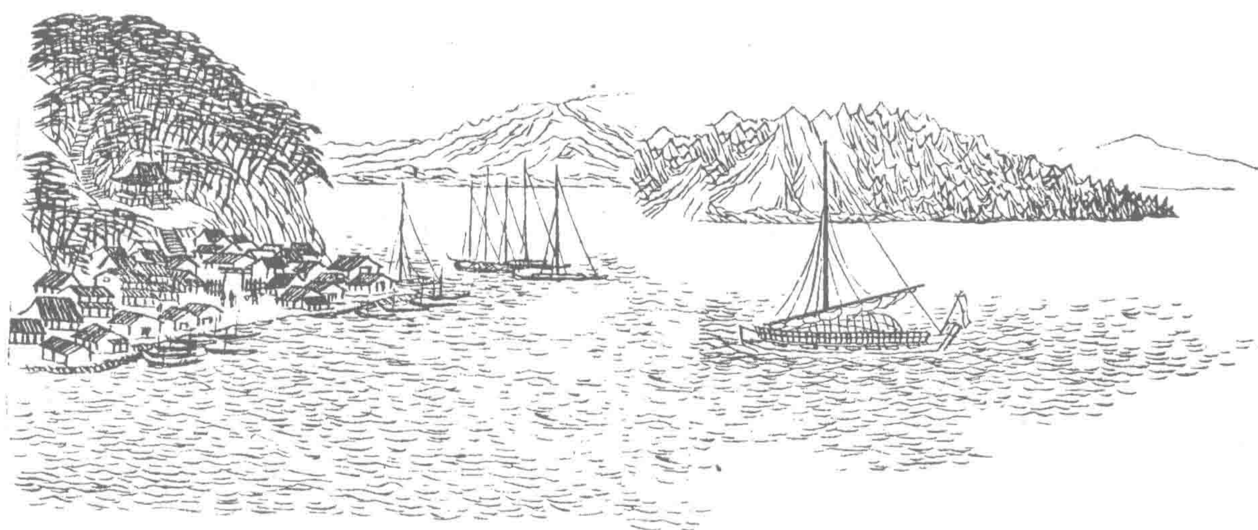
笠置山
在播磨州



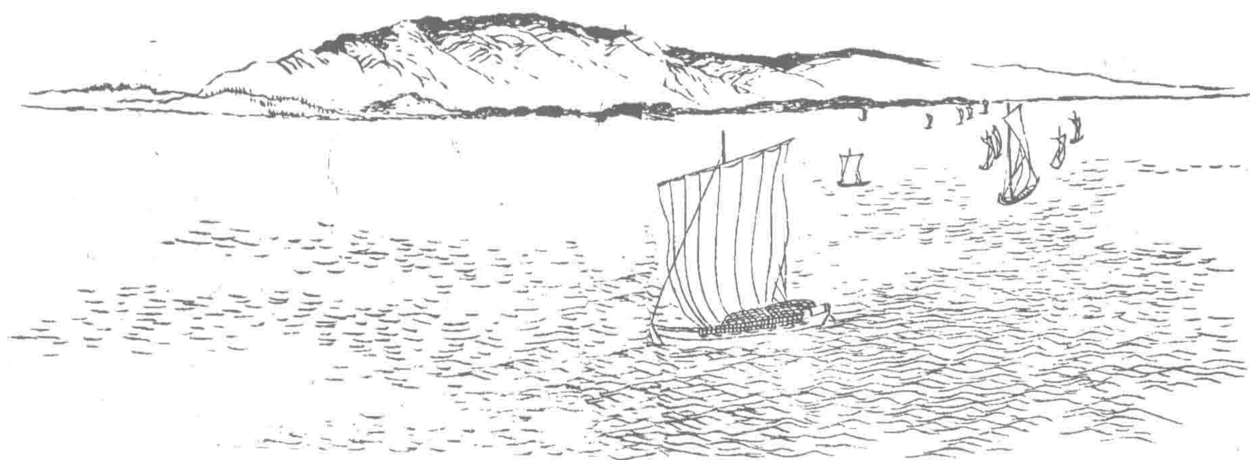
葛城山
在河内州石川郡
東屬大和州



鋸山在安房州平郡



加納山在上総州



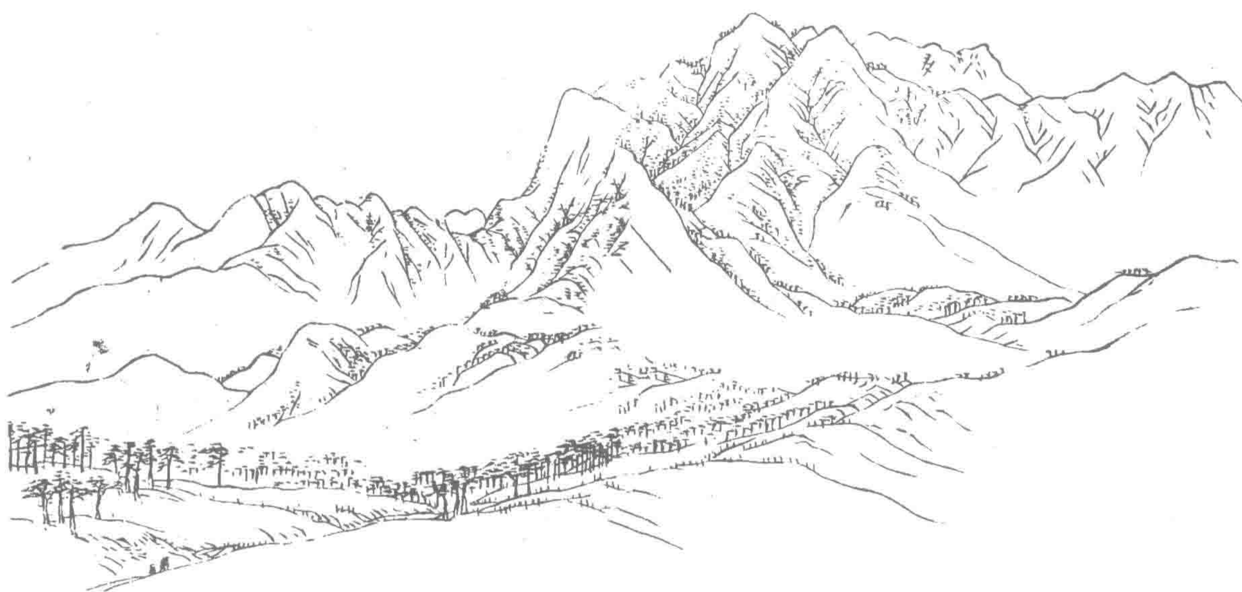


中嶽石門　在上野州片岡郡



碓井嶺　在上野州碓井郡

天岳　在伊賀州名張郡



筥根嶺　在相模州足下郡



日光山　在下野州河内郡



無終山　在紀伊州日高郡



大苅田山 在陸奥州苅田郡



半田山 在陸奥州信夫郡



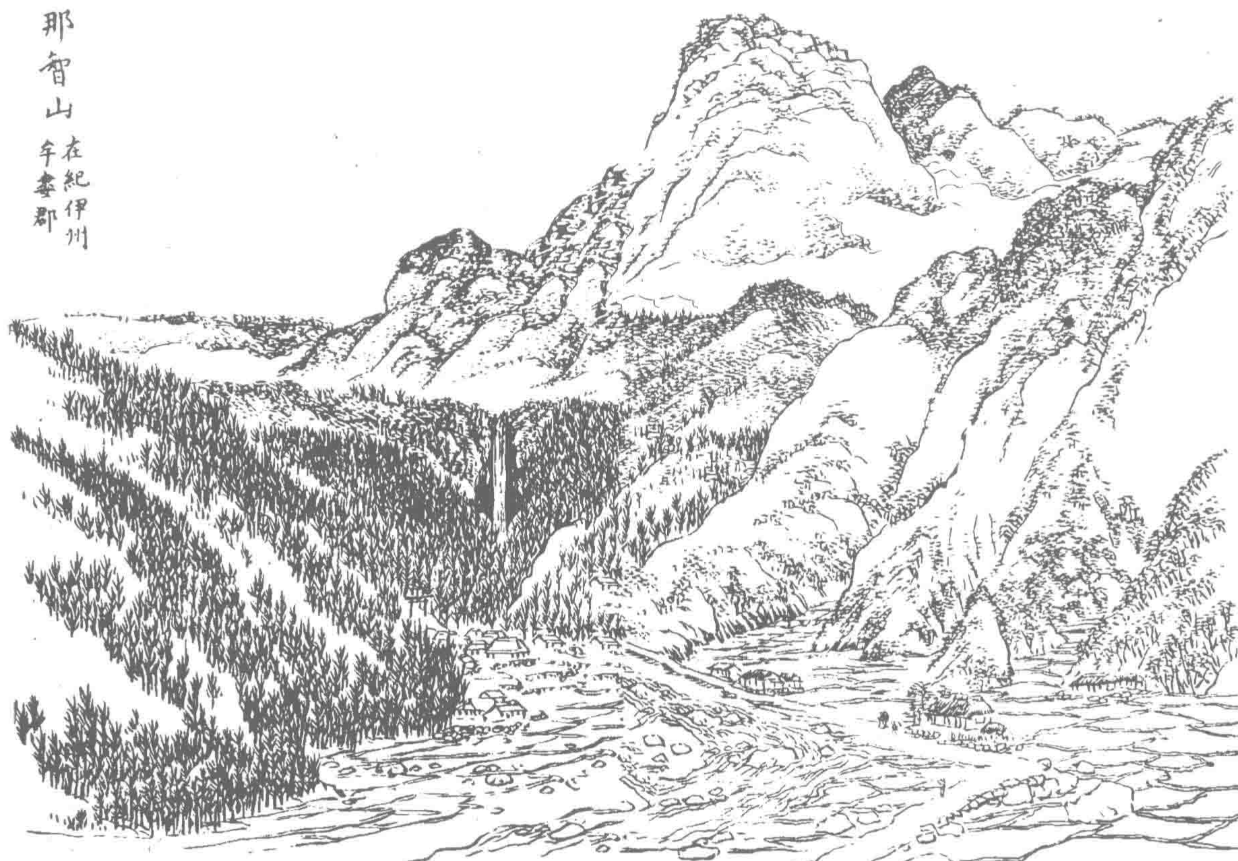
三上山

在近江州
蒲生郡



那智山

在紀伊州
牟婁郡



象頭山在讚岐州那加郡



書寫山在播磨州志加磨郡



春日山

在大和州
添上郡



摩那山

在攝津州
有馬郡



足高山 在駿河州富士郡



多度山 在伊勢州朝明郡



鳳来寺山 在參河州設樂郡



足柄山 在相摸州足上郡



二上山

在大和州
葛下郡



八岳

在甲斐州
山梨郡



先山

在淡路州津和郡





南昌山

在陸奥州紫波郡




卧釜山
在陸奥州北郡


御駒岳
在陸奥州和賀郡
経塚

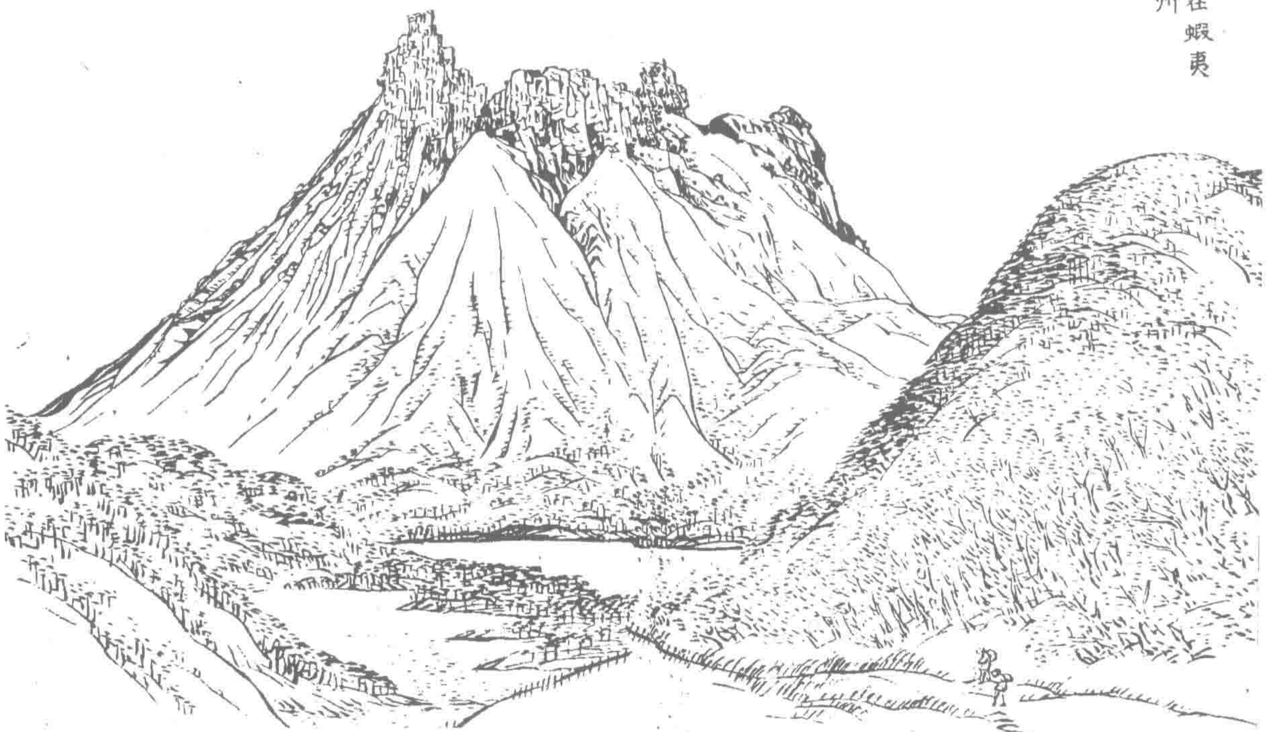
早池峯

在陸奥州閉伊郡



内浦岳

在蝦夷州



臼岳
在蝦夷州



惠山
在蝦夷州



玳瑁涉

在蝦夷州



志利邊津山

在蝦夷州



赤城山

在上野州那邊郡



惠奈山

在美濃州惠那郡



金華山

在陸奥州牡鹿郡





百丈岳

在伊勢州員弁郡

六甲山　在攝津州武庫郡



立山　在越中州新川郡





佛通寺山 在安藝州豐田郡



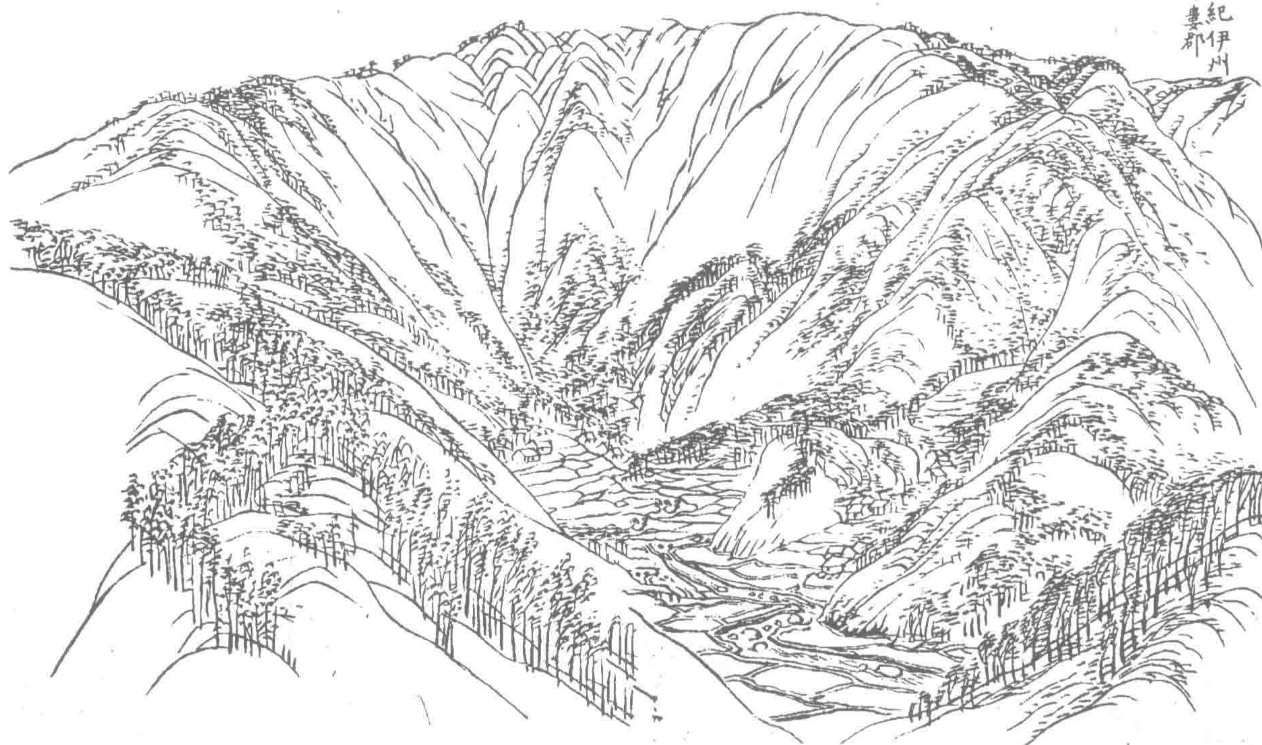
雲仙岳 在肥前州高來郡


巖木山
在陸奥州津軽郡


霧島山
在日向州那珂郡
東霧島山

雲鳥嶺

在紀伊州牟婁郡



筑波山

在常陸州筑波郡



武光山

在武藏州秩父郡



清水山

在丹波州氷上郡



阿蘇山　在肥後州阿蘇郡

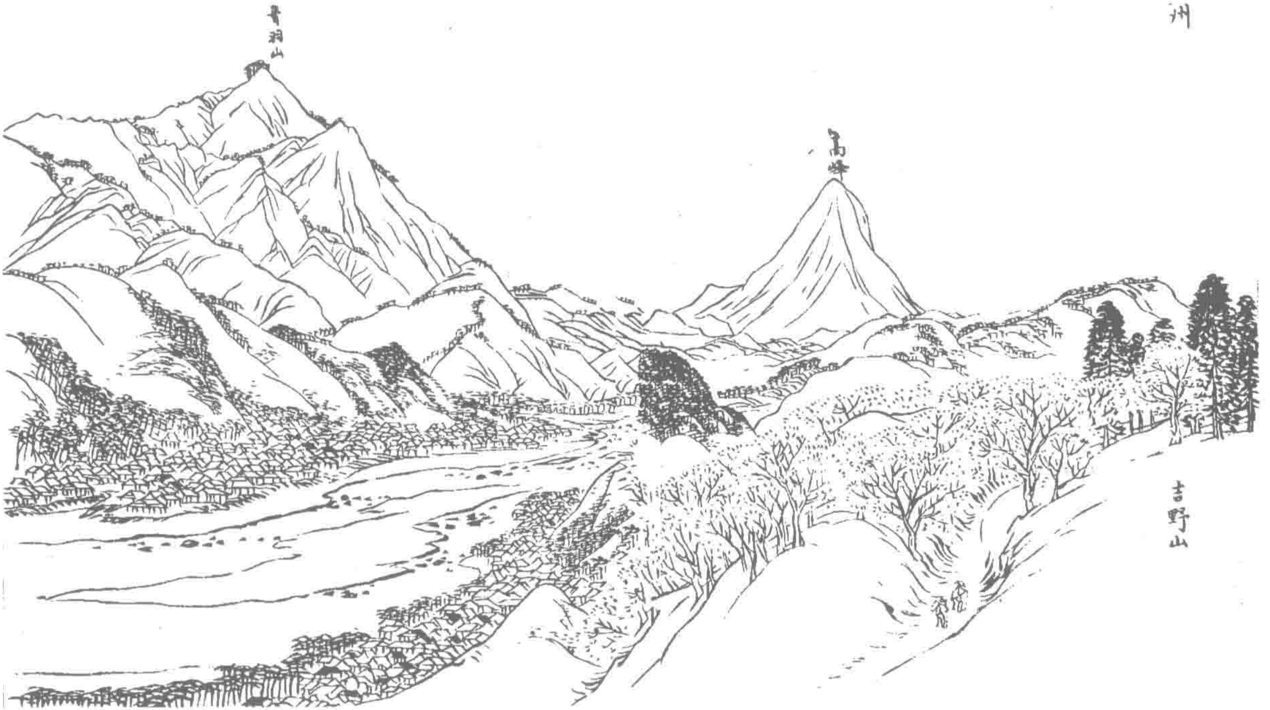


備中山　在備中州都宇郡



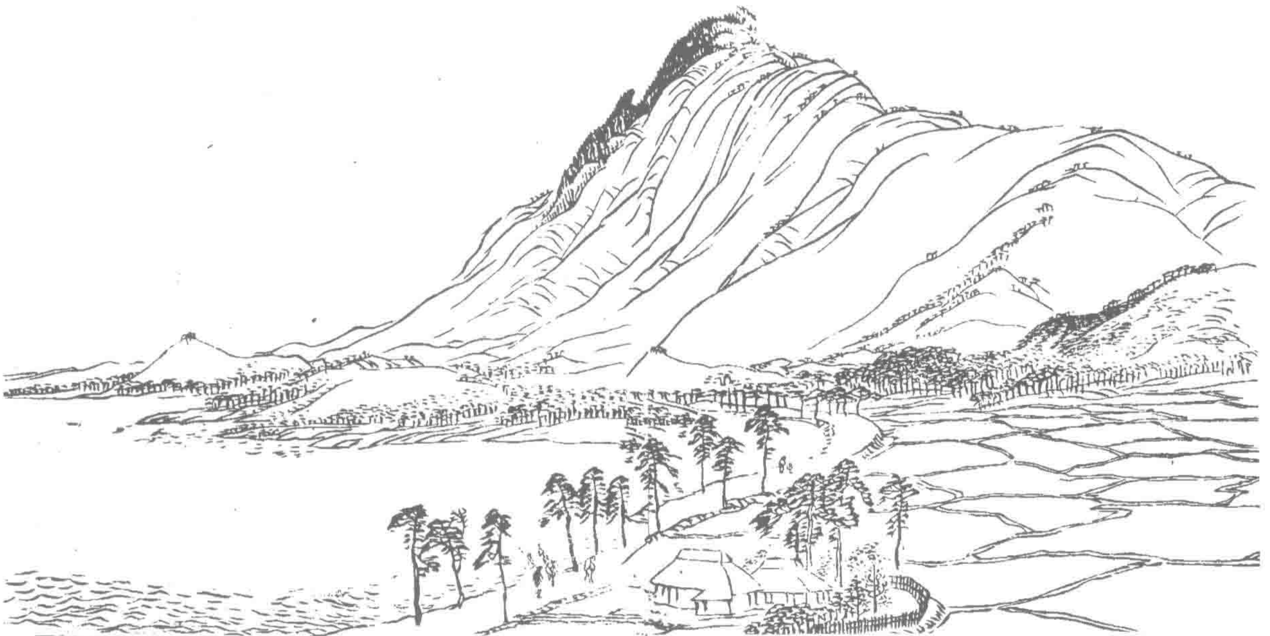
高峰

在伊勢州飯高郡



朝熊山

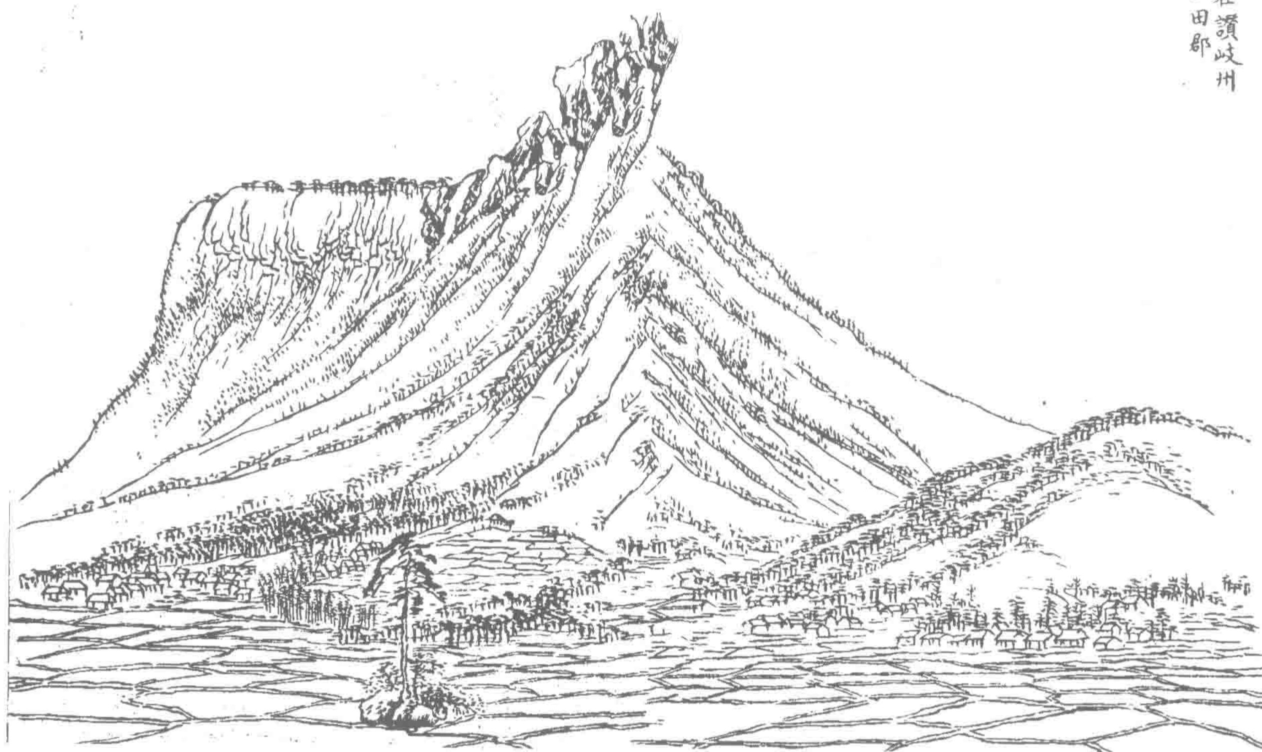
在伊勢州度會郡



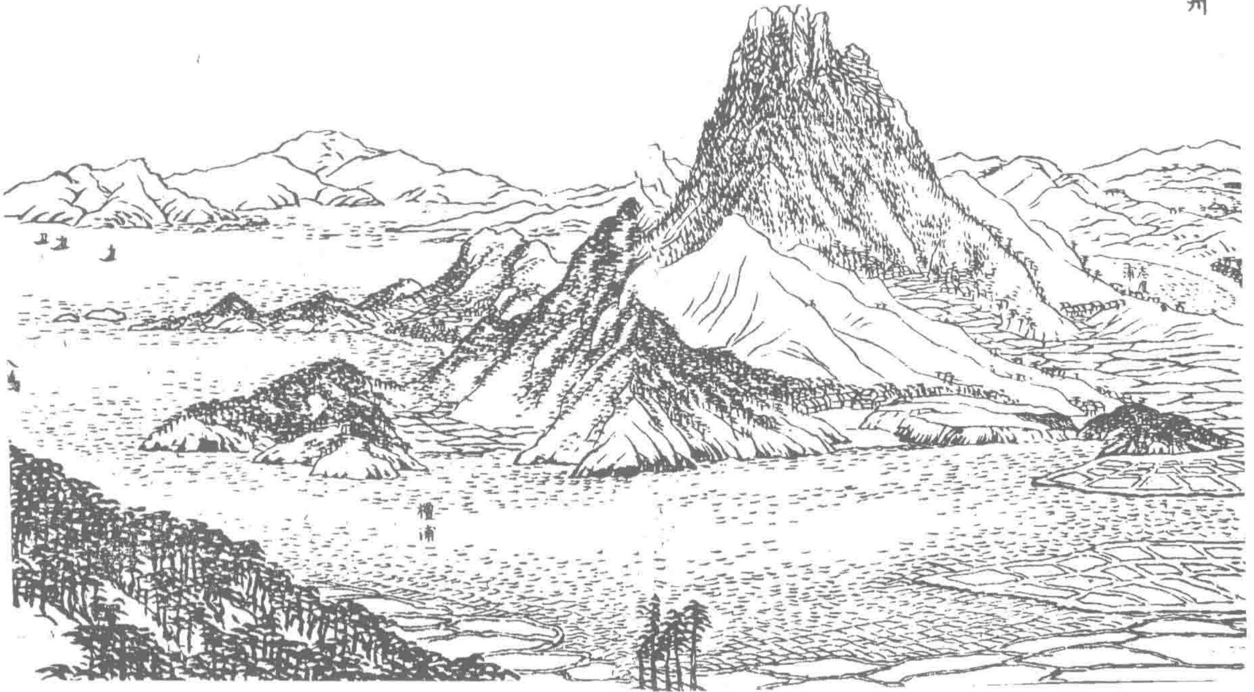
比良山
在近江州志賀郡



屋嶋山
在讃岐州山田郡



五剱山　在讃岐州三木郡



朝日岳　在陸奥州白川郡



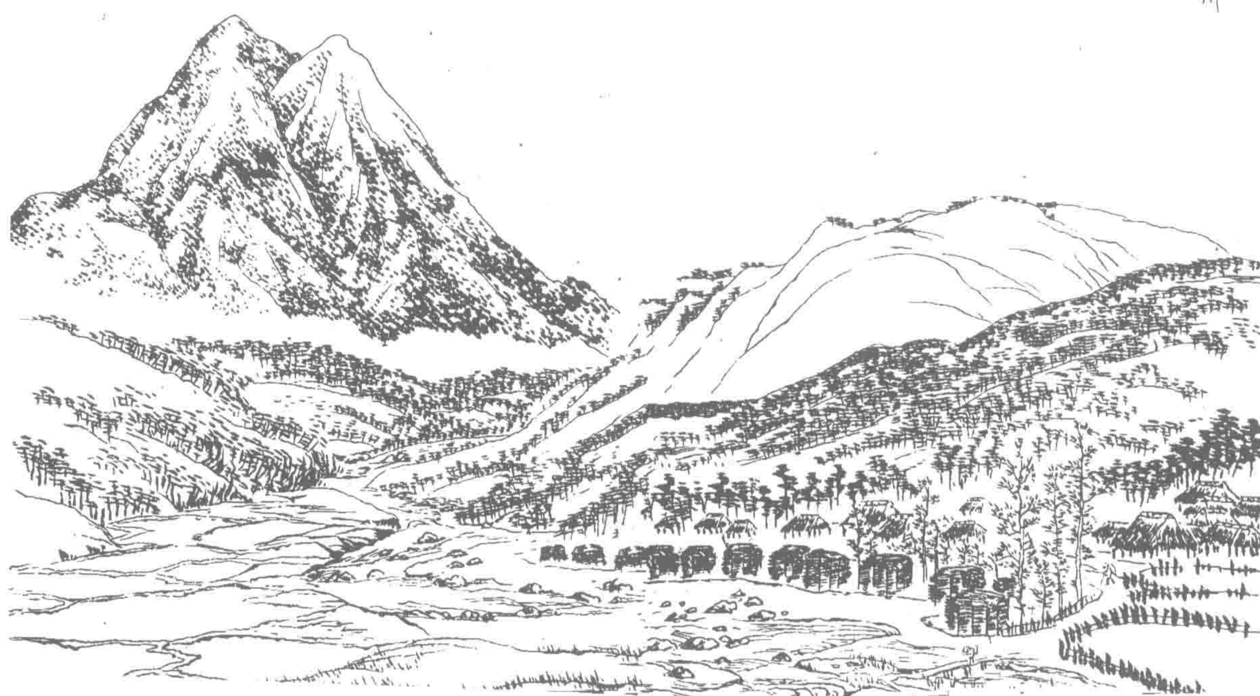
榛名山

在上野州群馬郡

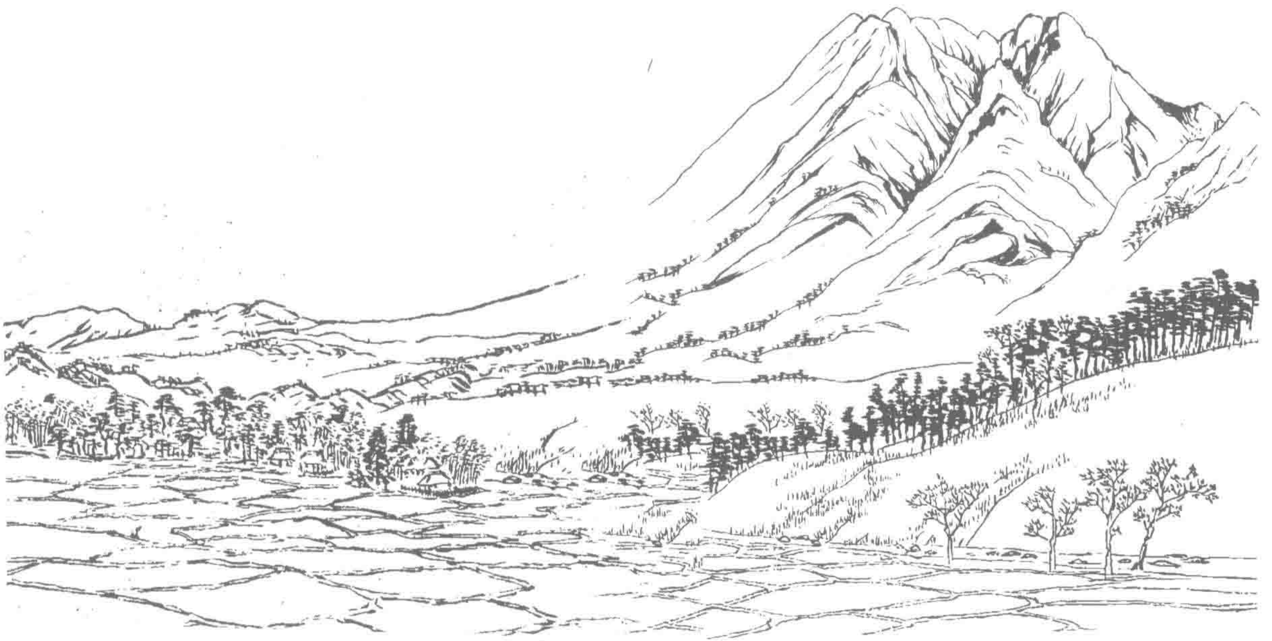


二股山

在陸奥州岩瀬郡



高原山 在下野州鹽谷郡



鹽原山 在下野州鹽谷郡



吉野山

在大和州吉野郡



小野岳

在陸奥州大沼郡



米山 在越後州頸城郡



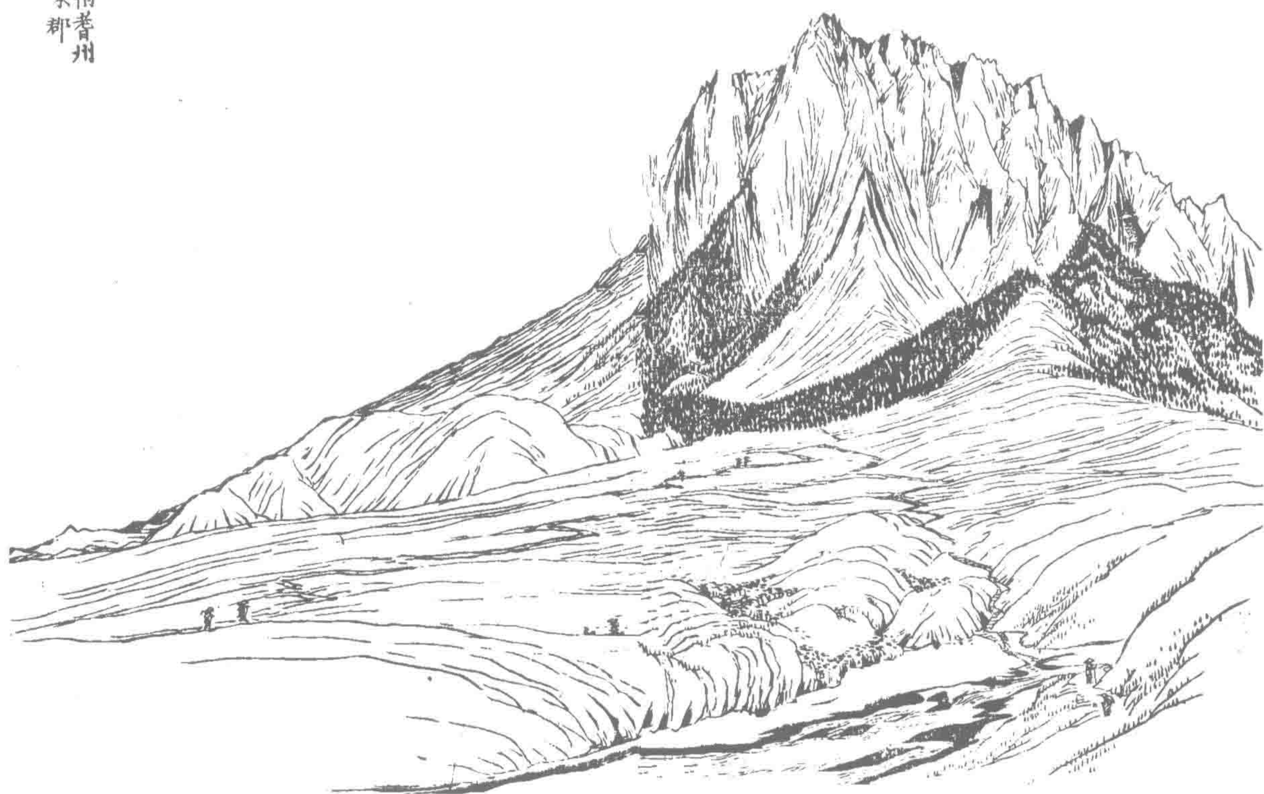
御岳 在薩摩州櫻嶋



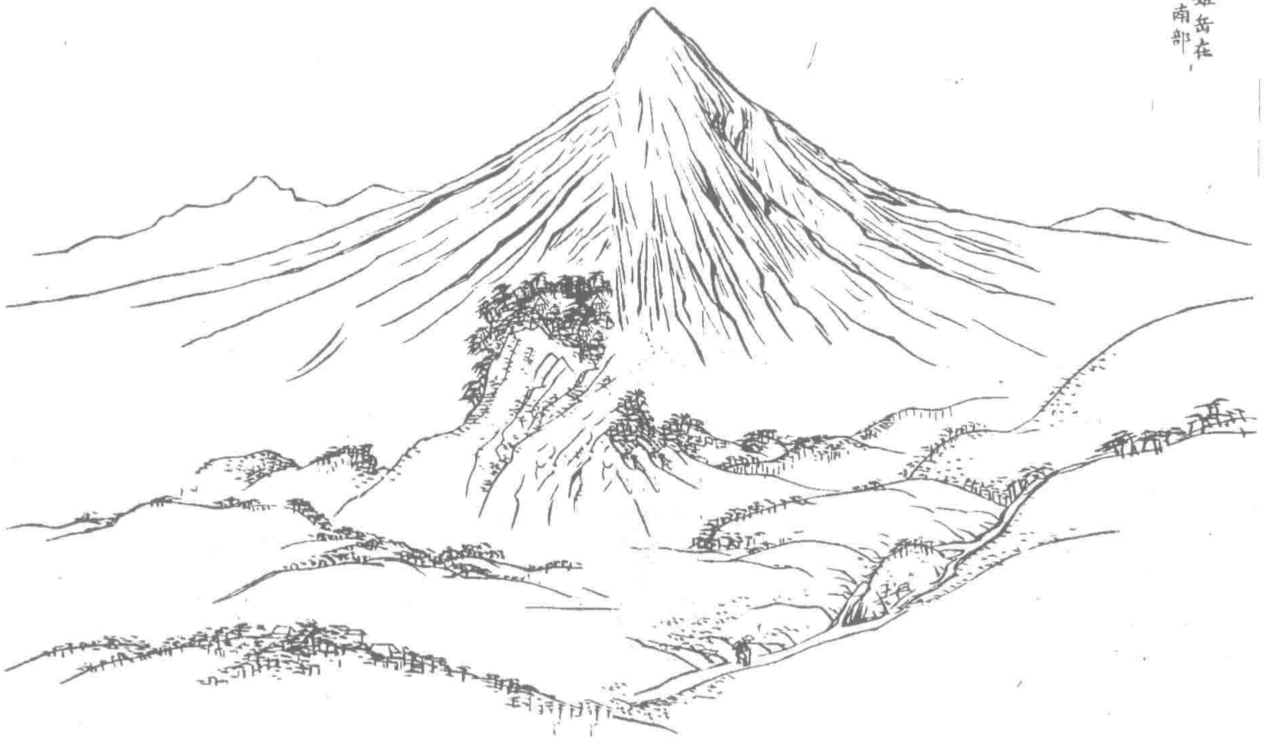
雄鹿山
在出羽州秋田郡



大山
在伯耆州久米郡




磐手山
在奥州、南部


玉東山
一名姫岳在奥州南部、

向者家君之輯名山圖如南部盤手山乃谷文晁擬其弟元旦東遊途中所圖而寫焉後余從家君遊南部從城下望之與所圖頗不類城下之人亦疑圖之非其真蓋元旦之所圖郡山驛而所望也然盤手者為一邦之鎮宜以城下所望為正及姬嶽亦南部名山而前圖逸之因又請文晁更為之圖以附卷末爾

文化丁卯冬日　　男　川村博謹識

皇漢洋今古書類自家積年蒐兌セル者ト其集
藏書ニ充棟載車ノ夥キノミナラス品位精ヒ價
程清廉以テ四方君子ノ愛顧ヲ待ツ

文榮堂藏版

阪府書林
東區南久寳寺町四丁目十九番屋敷
前川善兵衛

菊池元習 著

三山記略

天保十四年（一八四三）思玄亭刻本

據天保十四年（一八四三）
思玄亭刻本影印

西皐菊池元習博甫氏著

三山記略

附渦陽陵興

思玄亭藏

三山紀略序

和紀二州多佳山水而熊野金峰最著昔余嘗學於京師也近鐵諸勝時或探搜若二州之勝固願一游然以其曠濶且深恐廢日妨業未遑及焉而亦不屑屑於此甚心曰他日幸得所業成緒首還鄉之途則當迂廻其程涉歷二州遵海至攝州買舟而西直㰱首一映耳何料遘一疾有人誤傳其劇於鄉以貽二親感馳書督歸甚急是以倉皇

治任而叢不敢省所涉覽以淹晷刻既悔而沈於職勢不得越疆出遊焉後繆膺幕辟非公事不得過六合川一步拘束滋甚焉二物之遊永絶望矣菊池博甫頃游熊野其幽

序

巖峭壑滋溪浚盤凡神奇秀異之區領覧殆遍作記一卷山情水態條分而縷析之標曰三山紀略携而示余且徼序熊野與金峯相距不遠山勢聯屬唯隔一水而金峯以花海名熊野以

靈窟名其致雖異至超妙瓌詭之觀焉稱雖兄弟今讀斯卷覺神秀之氣扶輿輪囷蓬勃逼人可不出戶庭而盡其勝槩余於三山者之在京師近而遠今之在闕左遠而近寓目焉豈亦足

序

以酬宿志耶仍使博甫更得請數旬之告窮討金峯摘其蘊思悔以見示則吾願畢矣姑著此意贅諸首簡

文化六年小除古賀樸書

三山記畧序

畫家摸山寫水遺其嶂巒之疊樹石之蔚江海之緲卑者爲喬所覆邃者爲遠所障或向背異趣隱顯焉渺加之雲霞變幻雖縈礴之能手常苦其貌象之難

序

矣文人記據録遊精之繁冗可厭粗之脫漏可惜對一卷觀一句心費有餘頌語不適爾且屬事涉險俚則比辭失雅馴美譽過當體則實景難虛飾雖英俊之才子時憂其斟酌之難

矣難哉難哉不能吾筆畫吾意曷得令驚人目愜於人心乎噫畫與文皆假也將假寫真固不足奪造化自然之妙有也須男元習以三山記畧請敍余回是乃難之又難者也

序

夫然岳之據奇拔甲於寰宇其遊也謹爾假篆之儀語之所謂千巖競秀萬壑爭流八字盡矣他腐語陳言重十百徒汙名山而已元習回然則慶之乎回既踏其勝睹其奇

豈可跂之而上乎蜀吐華
茹實以拙代雅粘記其不可
後者存以自娯乎何難之
有巨海之一滴猶或可歴人
之渴想也試示之未遊者余
則既遊者也然余也以從

公駕故鞅掌役々不遑寢食
往返百餘里嘗得片詞隻句
爾後偸間展紙命筆恍如
醉夢不能復集思徒貽耻山
川之靈豈謂之遊可也乎今
讀此記俯仰之間如再入其

序

境瞭然吾心與吾目謀而神
了解於此也竟併彼能乎
才子所痛與拙文巧拙難易
而皆忘焉只喜爾處日之餘
業資吾老懶臥遊耳爲書
簡端

文化改元甲子秋日
衡嶽珠人識
桃華仙史書

那智瀑圖

天下語瀑布以熊野那智山爲第一矣余嘗挺
其地觀瀑布實過所聞距今殆二十有餘年
每憶其奇觀宛在目睫偶應池敬所需援筆寫
其概千尋飛流固非尺幅寸毫之所盡焉觀者
窺其一斑而可也

天保十四年癸卯秋九月

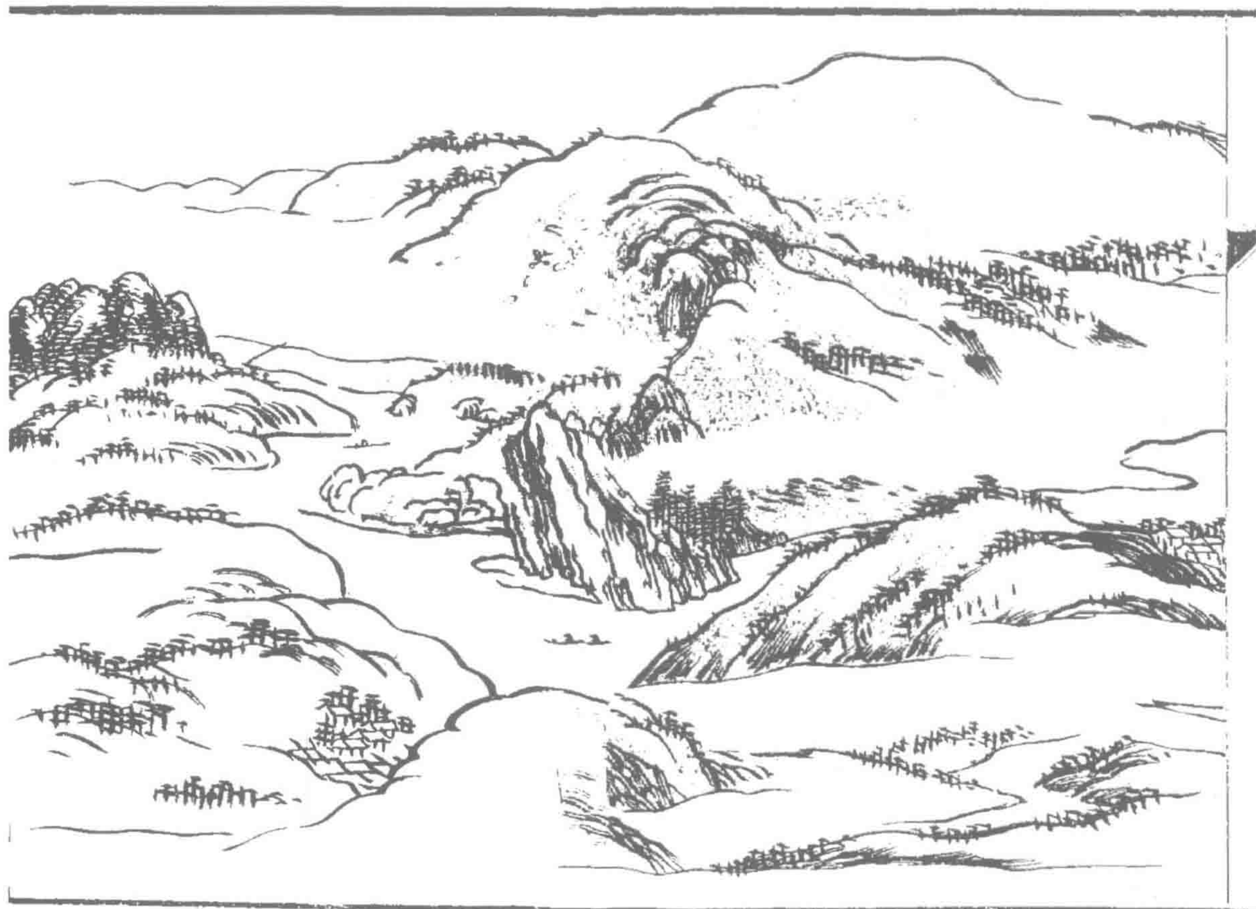
八十翁鶩湖源維誠畫并識

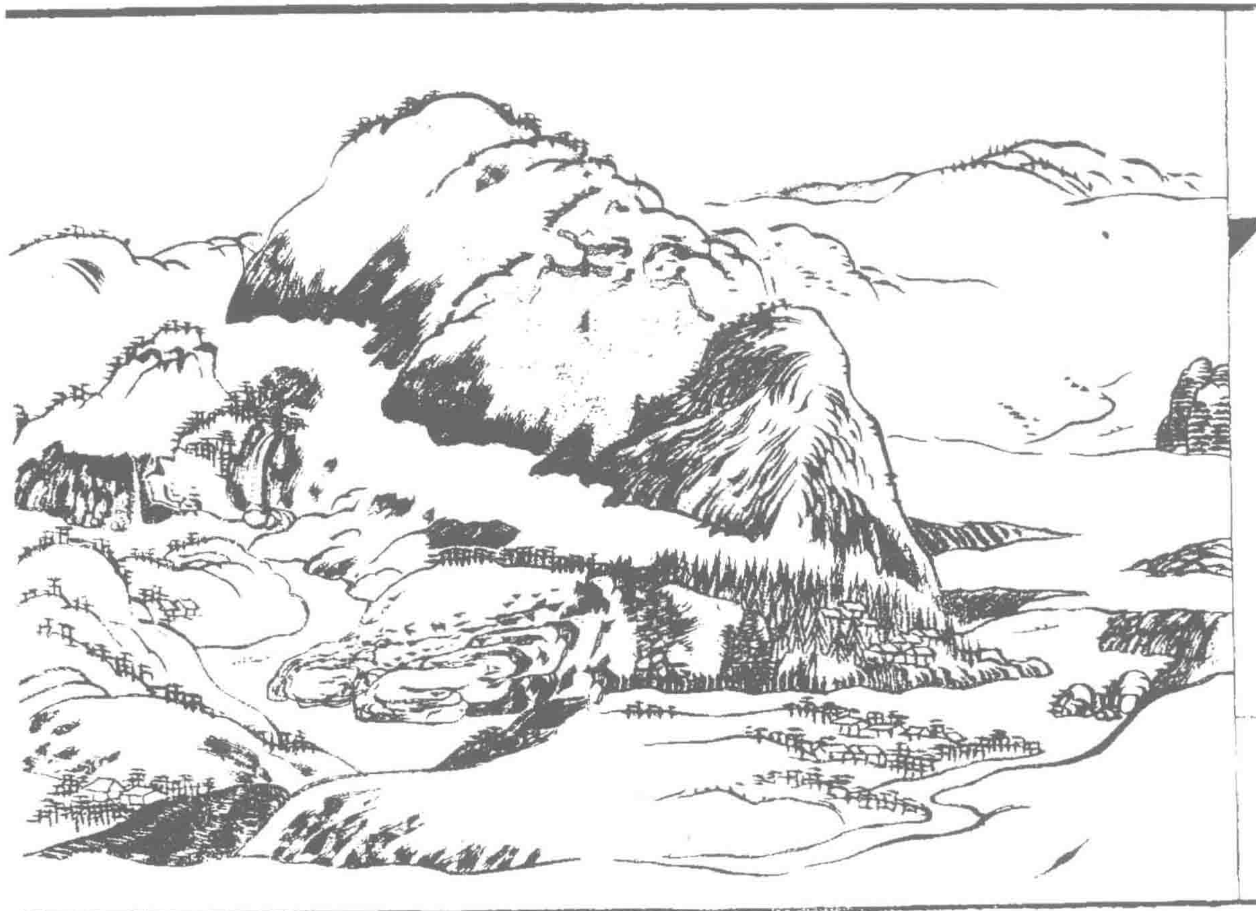


九里峽圖

熊野山川之美甲于天下而九里峽為最
最長去留邑君遊茲土記其勝槩者詳
矣谷文晁氏亦遊焉亦畫其勝槩二子之
於九里峽也最為得意焉於是乎欲合
刻以貽同好属序於余余因評之曰使斯
圖也不藉下峽之勢則其奇逸邁往未必
能如此也使斯文也非逆流而上熟覽精









察則其揚寫周備未必能如此也蓋画以遂勝文以畫勝二子一上一下所遇既然亦与境會而應手者固當如此也昔王右丞能詩善畫如輞川圖古今傳以稱絶矣其卷也各逞其所長而右提左挈者若出一手然可不謂絶美乎絶美而合刻此足擬古之所謂天生神物絶當合者耶

仁井田好古識

家君在日謀合刻其九里峽記與谷文晁画請序於仁井田南陽序成而刻未果而逝今斯卷也收文晁氏畫則不能無感於昔日焉因併錄舊序云

遷識

三山記畧

紀藩　菊池元習博甫著

熊野以靈區聞也舊矣蓋紀之爲州分七郡而牟婁最大西北際大嶺東南濱于海本新二宮與那智山鼎峙乎其奧號曰熊野三山三山去州府五十餘里其道路往還所經奇勝頗多而余在東都弱冠已聞其勝而未得往遊焉甲寅秋我　公畧地遵海南到熊野遂有事于三山因命有司撿其耆老及力田孝

悌者賜以錢帛米粟等家君適扈從以董其事余遂聞其盛擧手舞足蹈恨不能奮飛耳丙辰三月余始入紀欲遊熊野事故不果今茲壬戌之夏家君復陪駕到于紀余亦從焉會侍醫藤伯英𡨴英彥兼良夫三子將告暇謁熊野神兼觀瀑布于那智山要余與偕於是余喜可知也

發州府至印南

四月二十八日黎明出郭門至紀三井寺三子尋至杖屨飄然遊興勃如乃謝送徒而行歷黑江日方二村廬舍聯絡農商頗富過名高浦路始崎嶇藤白之山麓也聞昔鈴木三郎重家產于此其遠裔今尚在云路岐左則藤白右則冷水有王子祠是爲熊野一之華表三山險遠難到古者以此祠爲遙拜之處云是日將詣慶德山乃右一徑縈山其頂臨冷水浦人家呼欲譍遠眺則紀泉衆巒環匝如假山阿淡諸島皆爲庭池中物時維麥秋黃雲斷續頃刻煙霧蒼然乍晴乍陰下抵浦雨霏霏至抵濱中得慶德山龍騰屏巖峰秀谷深萬松欝茂瑞氣氤氳佳城名藍不問而可知也乃入門内蕭灑有寺曰長保長保元年

一條帝所　勅建自我　龍公受封南州遂爲歷世公兆所在焉始得望其　廟貌敬拜而退將踰宮原山至有田蓋間道也土人猶畏其難加以驟雨從僕皆痛作氣而上仄徑無人跡披榛莽捫蔦蘿屢迷失路僅至其頂則雲霧如晦不辨崖谷山風方厲下前溪稍晴路亦坦樹皆橘柑量以谷云綠葉素英香氣襲衣不問而知爲有田也抵道邨日已夕渡有田川踰絲鹿保津寓湯淺村翌過廣邑至川瀨邨上鹿脊

山古松夾徑右瞰深溪其徑紆回六七十步為一盤毎盤益左凡三十盤而窮焉其巔樹密不能遠眺為之憮然題詩而去路漸下過原吾原谷以南山多豬土間有溪田茅舍亭午至日高湫然沃野一望數里麥隴黃熟自茨木村東過田間有蛇塚妬女舊事人口所膾炙也余笑謂同行曰吾儕非狄梁公豈避妬女之祠乎過小松原諳道成寺門扁曰天音山吉招提也渡日高川眺望頗佳渇鹽屋阪西北小井埼出海數里東南野島薜浦等漁村夕陽益佳下海磯過

山徑至于印南山耕海漁商賈亦雜居

鉛山

鉛山之境枕海被山田疇闢焉黎庶邑焉往昔民以貢鉛為業今以耕漁代之俗稱湯崎以地有溫泉也遠近來浴者四時不絕六泉瀕海曰館泉曰濱泉曰源泉相去二三十步西南依岸而茅茨覆之者曰碕泉天然石槽喝然如五石之瓠泉從槽罅涌溢而無硫黃臭瑩然如鑑淡泉淺而濁容或濯足耳礦泉在東北巖下潮撲偪室余遊千疊巖素聞其勝也旅館之南得藥王堂西越溪陟罡下則海瀅多怪石大者可坐數百人就視之全巖如一大豬石風雨所撲潮汐所齧狀類龍首頷下可避雨者為龍口巖雲紋芝形者為芝雲巖尤為魁奇其餘翔擊拏攫呀然森立亦有名號者不可枚舉會夕陽映射風濤忽起滄溟萬里瞬息來去如百千白馬蹴雪而奔騰餘勢盤巖巖益奇乃知木玄虛海賦其言之不虛觀海之壯於是乎極矣南崖石劈為壁者十餘丈壁有坑數處云是金礦之舊也潮來皆沒導者曰暮夜鸛鵜集坑內

土人懸綆下崖乘暗承之聞者心悸次日遊雞渡自右岸下步亂石間左顧百武許一巨巖屹立中空如洞右入松林踰小阜廓然一境對內灣小嶼數四突出于其中爭獻奇勝白日已西微風不搖縠波自文隔岸諸山蒼翠倚疊皆倒景于煙波夕陽之間東北見甲邊城於一帶松汀外左循岸行巨石為門高五丈許橫稱之其左連丘右礎沒海既入門數步又得一門大如前出則波上奇巖名唐嶼如垣如屏有三總布帆過其外者宛然窓欞中物其巨可知也日已

下崦嵫乃歸路過七曠山下白沙如雪步步迷人谷
掬其沙而還于旅寓旅寓主人和佐氏名長視南海
袛先生七境詩巻詩奇技書亦遒勁余曰鉛山七境
之目自昔有之乎意者先生創之也丹臒其山錦繡
其林文人之遊往往皆然巻尾云享保十八年孟夏
下浣去今已五十有餘年其樂則同不可及者文耳
廼書所得詩二首與之所謂七境者銀砂步金液泉
芝雲石龍口巖平草原藥王林行宮址是也相傳
齊明帝以下數　帝嘗浴於此宮址尚存焉蓋灘渡

以巧麗顯千疊巖以奇雄勝未能判優劣此遊余等
得意甚獨良夫得家書告故今午而歸風景亦為之
索然初自印南浦架舩達鉛山其舟中景勝不少不
遑悉載焉

踰富田山至安居邨

五月三日辭鉛山赴片田溪昧爽命舟于津頭津曰
無風又有不知纜之稱共取舩行平穩之意云望中
諸嶼有圓山贅岸蒼涯神島江津良八百八洲等之
目須臾達片田潮通溪間幽境可愛舍舟過田間揭

富田川有村曰九十澗有寺曰草堂屢渡澗流足指
漸仰是為富田山上里餘至半嶺東南連山重疊西
顧則鉛山昨遊之諸勝歷歷可數漸陟層巒瘦嶂無
復遠眺降則山益深樹益茂綠霧四合獮猴哀鳴頻
動旅思土人云此山獮猴家多或數百為群能知雨
候天陰必嘯遂下溪底水晶花滿徑叢叢如雪忽有
一泉從右峯來瀨錯徑面流左來右廻或十步而揭
或二十步而砭凡揭澗流者三十餘處卒得石溪溪
澗而涸澗水至此不復知其所之意其為伏流乎石

溪之偏見茅茨參差又多牧牛近村皆以養犢為業
云踰阪甚峻下而得安居谷拔並木生生名昌哲三
世業醫與藤崗二子共談家學僮僕謹朴款待可喜
是夜雨

安居谷

安居谷向背皆山斜帶一川有邨曰安居曰寺山曰
中島安居為大僅八十家二村各四之一耳里正鈴
木某来謁曰邨在山麓田圃瘠薄且乏水特有一川
歷東北山間而来近西村外然地高水卑不可激汗

上流雖高小山連亘阻隔山趾皆石壁故不能得其
灌漑也他無泉脉三村常苦旱近與二三父老請于
官欲鑿石壁引上流以為旱歳之利經営四年于今
工未告竣也頗往觀之余從之並川行三百武許得
銀杏樹扶疎隠然絜之數十圍自樹下右折尚並川
而行稍入山間左削山趾作徑作溝溝與徑曲折相
隨石角刺足歩歩極難如是者可五百武得鑿口於
左壁下礦徒數人據崕掩茅以居焉里正曰所謂上
流為此石壁所阻故將通鑿以注于溝約計日用工

七人三年可成中間石骨甚堅今此洞深八十餘歩
奏功未可知因令人執炬以照洞中余雖未能審其
地形理或然吁民艱於稼穡粒粒辛苦有司所宜用
心也於是意倦不欲復就来路見小舟繫岸下里正
倩一樵夫棹之石清水淺紺碧澄瑩両岸山影可俯
而拾偶有子規啼聲如裂竹甚可人意稍忘疲倦還
至銀杏樹下歩歸安居邨有寺曰大圓又有孝子祠
日暮不能探而止

　自佛嶺至古座浦

自富田南至新宮一路稱曰大邊地右海左山毎踰
一嶺必有港有浦浦極而又得嶺嶺舒而闊則為川
澤為岡阜為田疇為村落漸入佳境應接不暇自安
居谷攀佛嶺藤竹翳徑少上忽復軒豁東北隆然形
如帽曰三前山云其麓有三邨三村仰山無向背南
一峯頭尖而如負瘤曰病瘤峰數百歩度連岡岡多
松近時所植十年之利可謀也既躋巓里餘而下其
峡多巨石多古松處處掲澗流得周參見浦一島中
立無所倚蒼蒼然壓海門者曰稲積山土人云海口

多暗礁其大者為亀巖若誤觸之巨舩即破摧矣踰
一阜道右有清人尤廷玉之墓明和中福州商舩漂
泊商客十數名廷玉其一也病死有司命葬焉碑陰
文祇園餐霞先生所書又數里其間島曰雛曰蝦曰
魚鷹曰汐吹曰白砂嶮為馬轉為注子為輪深道迷
往往見村婦束樵蘓戴之頭上雖兒女亦然忽見不
辮男女又吹煙不用管巻木葉代之僻落光景可想
也得長柄嶺一徑如面壁猱貫上三百武流汗洽背
喘氣薄喉又少紆餘則及巓鳥道排虚清飇吹袂冷

然有真人御風之想南望大洋空水相涵其在海灣
而如迎我揖者為沖島為黑島為夷島為繪洲其餘
見老津江佳江田數浦潮觀岬等洲嶼砂尾短長出
沒連綿乎數十里遥者戴青松帶白砂遠者襯霞揜
雲愈出愈奇譬之巧造盆景者將晶屑玉塊布置羅
列瑠璃盤上也又數百步路漸下得見老津巨巖百
尺亭亭然高峙為高閣者夷島也其下亂石為黿為
鼉為蛟龍者縱橫錯陳乃跨其脊鞭其背遂進升階
上有小祠松蘿蔓翳無他奇觀不如遠望之為佳也

又得江澄橋橋頭望繪洲乎蒼波之上萬松連翠丹
崖如霞最綺最麗洲於諸島如楊太真為三千之冠
也又下海巖間晡時投江佳浦日夕猶望繪洲令人
婉變忘疲明日戴星發自里浦經和深和差江田甲
弁等數浦踰一溪寂幽藹多藥卉往往見覆盆子百
合花蜀葵之屬時聞清香余屢入谷覓幽蘭不得而
止午時抵在田浦踰小山下海邸奇石萬數不可勝
記其稍西屹如兗者曰筆島東行百步一巨巖塞
途大數丈其下缺為路可通車馬過之竦然又歷二
阪得一村曰東雨時微雨東來偶副其名得錦浦浦
西傍山北行數百步山裂川出已涉崖徑如綫側身
而陟左肩摩壁右趾臨淵百步許漸下東瀉曰錦俤
浦與錦浦相對其間數里抱海如湖連嶠林薄如隄
如塘邨落點綴乎其際紫翠映波雲錦散文錦俤之
名真不虚矣得串本鄉出潮觀岬過橋柱浦抵古座
浦而宿

潮觀岬

自串本鄉迤邐而出數百武其村曰上野上野以南

地漸纖脩而一丘欝然者為潮觀岬右有古神祠過
祠而少下灌木夾徑如馬鬣碧崖千仞潮汐所蕩擊
也起出馬頭則大洋茫乎不辨天地其東南別有潮
頭一道奔迅而來勢如河決衆濤自卷以避似辟易
者余一覽爽然還爾自失土人曰是黑潮也其潮時
亦出下逆流向巽位者為下潮反之為出潮大率出
潮則寡漁獲下潮多漁獲其上下或三四年或八九
年而一變焉此年則出潮也疇昔余遊千疊巖以為
極觀海之雄矣今登此岬非復尋常奇觀之可比所

謂海之靈變。委輸廣大。包括乾坤。神之所宅也。吾藩封極南之地。窮於此矣。自此至那智。至新宮。皆東行云。

橋柱浦

自串本至古座。其浦曰橋柱。南如巨鼇負山而逃。任公之釣者。為大島。松樹蓊欝。屋宇一簇。耕稼佃漁。民各安業。島與浦相距里餘。其閒奇巖三十許。直立並植。矗矗出水者。曰橋柱巖。浦亦以此名焉。其巖形皆雄拔秀傑。大者數十仞。小者數丈。望之如巨靈架長橋而未竣功。其枯撅朽柱。列峙以存者。其名實不誣矣。觀者莫不吐舌歎奇。噫上古之時。海中一帶連山。為洪濤狂波。所衝擊嚙食。特存其骨者乎。將乗舟以遊橋柱下。俄風伯動色。櫂夫皆憚。乃循浦陸行。渡河而宿古座邑。是日重五。館人以蒲酒慰旅況。余問曰。聞古座川之上流。有藍瀨邑。其地有大巖。貝原翁窮天下之奇勝。以此為海內第一之大巖云。距此幾里。館人曰。距此三里。其山原為一巨石。大不可知。蓋石山戴土者。散其上。草樹蕃茂。唯嶮峭不可登耳。舟而

傍石以廻。殆里許。其平處。壁立如削。縱七十仞。横二百七十五歩。無一縫罅。無一凹凸。其色灰黑。望之嶄然如鐵壁。實奇觀也。川流雖駛。小舟可以遡游也。乃約其游。翌有雨。遂不果而止。

泰地浦

六日衝雨發。將至泰地浦。適玉川生來投刺。其父灝齋先生隱于醫。好書博涉。嘗著日本通鑑二百餘卷。手寫一部。獻我　公。今年七十。老益健云。輿夫在門。不遑綏語。匆匆謝去。此行也。藤岡二子。年皆六旬餘。大率日在輿。余幸有勝具。每遇佳勝。輙不自覺山谷之嶮也。日從僕一名及導者。時先時後。或坐石哦詩。或班荊圖地形。甚適也。是日以雨故。余亦就籃轝路。稍東行。轝足低昂。數里。其所過曰下田原。曰浦神。曰玉浦。浦產玉。卵色。玄。或小或大。有銜乎石中者。有墜乎砂上者。好事者。往往得而翫之云。至下里浦。捨輿。蓑笠行縢。數百歩。過八咫鏡野。渡太田河。途見野老里婦。提竹籃或小笆者。其中皆鯨肉也。問之則曰。嚮昔泰地浦。捕得二大鯨。踰二阪。下則泰地浦。其海面

乃捕鯨之處云其邑人煙密稠富饒爲海鄉之最俗
不事耕織短綣不袴以便涉游至舩主漁長有禺食
之家云邑著姓和田生出迓同游未至余先往觀浦
會漁人解鯨魚已割肉特餘頭顱骨孔大甕又備丘
結茅連巨竈置大鍋煎熬皮及骨以取膏油溝潦爲
殷鮮腥成炯所謂頭顱成嶽流膏爲淵吾始知其非
溢也泰地岬出海里所壤頗寬衍有神祠有燈臺故
俗又謂之燈明埼又有望鯨樓一擧火臺二導者云
守者日在樓上而候海門見橫海之突兀則煽煙于

此若鯨西則小煽于東大煽于西其東也反之於是
漁者各手銛乂以乘艢舸其疾如飛箭猶軍艦爭先
登也或西刺或東擲或南張網於海面一皆如約束
凡捕鯨始于十月至春三月而終岬之右爲神取埼
與此相伯仲左仰則妙峰那智衆峯岝崿乎雲際黛
色千里乍隱乍見茫不可辨時風烈濤起雨師與海
若進退鬪激奇壯不可言還而投和田生館館頗宏
敞酒饌亦具和田氏之先慶長中避亂于此與其族
謀遂以漁起家主人年尚少其祖父松翁頗讀書有

雅韻談稍熟因出一石砮以示曰是昔年鯨肉中所
得之物也或云爲挹婁女真之物乎觀之其質青黑
長二寸有餘形類我邦之鏃蓋挹婁女真即古肅愼
氏之國也其俗至今猶用石砮乎書以俟博雅又示
海鯨圖解曰向所割之物名曰末古得此鯨則必不
待三日而雨意或避大洋風雨而來海口乎或鼓海
氣以爲雨乎余觀其圖讀其解鯨形大同小異黑肌
白文眼細嘴長合吻類鴨喙頭顱半身頭上皆有噴
水之孔其大者如丘長大與圍闊相似類止於六七

品其所用勿論皮肉牙齒乃至骨鰓鰭鬚諸筋腹之
屬一無所棄可謂漁利之大者矣其明日阻風雨午
稍晴至向島島距浦甚近凡船工鍛冶之徒皆居焉
乃就觀捕鯨之具其船取輕捷制與常摸異狹長尖
底外髹以黑漆而丹青龍蛇花卉之屬用八櫓可載
十餘人其搪網一目六七尺踈大恢恢其所謂逆鬚
鎗頭者凡八九其小曰乙曰早曰角曰中又有如劍
者有如戟者有如屠刀者皆其柲白幹長丈餘而繫
苧繩於柄端繩之長短幹之輕重亦從乂之小大各

有制。別有巨叉短柄重數十斤。命曰萬。漁者秉單舸。淩駭浪。擲之以逞技。其勇可知也。嚮導者為語捕鯨之始末。亹亹可聽。其言曰。漁人各有所長。其能投乙叉者。高翻於天。倒刺于海。或及於二三十步。蓋捕鯨之戶。古座三輪二浦。亦各為部。而此地為冠。若在兩場。見之。則先刺乙叉者為幟。是為其部獲矣。其摚網非所以羃之。施之海塞。其前面則鯨猶豫不敢觸焉。其用叉自乙次第至於萬叉止矣。鯨固有強弱。或有用數叉獲者。或有背數十叉逸者。若觸鰭尾一撥則

舩忽粉韲。漁人遭其危。輙自投海。復乘他舟以為常也。嗚呼。漁人於海。未始見水者乎。觀已畢。右登高處。導者指示曰。其聳而雄摯者。為鷲巢孤松。秀巖頭者為千鳥松。某為刀瀧。某為寺島。相傳平維盛潜匿于此。竟隱熊野山中。即今之小松某。清水某。實為其亂皆藏平氏古兵器。其遠者為字久井。稍邇而海為灣者為勝浦。島之觀亦竊矣。又雨色歸館。館東十步為松翁居。石門頗奇。是其曩祖所鑿云。導者名孫十次和田氏同族也。翌猶雨。乃決策雨行。主人知其不可止。令櫂夫議渡。云外浦未可渡也。森浦則可耳。便從其言。主人具輕捷舩二艘。每舩各八艣。破波駛快。逸興飛揚。所觀綠嶼奇巖。不可停瞬。食頃達勝浦。蓋去泰地浦四里。而去森浦二里。是以其奇勝僅得半也。大抵奇偉麗潤。可擬灘渡之諸嶼。而雄快過之。唯不見其晴景為憾耳。揭天滿河。經河關井關等村落。至那智山麓。

那智山。

那智之山。結根雄偉。盤屈乎東西。膠葛乎南北。前對

妙法之嶺。後據雲鳥之嶮。其頂為帽子巖。側有風穴屛岩瓶石劔淵等諸勝。而北嶺劈為巨谿。谿中大巖壁立。瀑布乃懸焉。望之三四里之外。如白虹之懸於雲端。初至其麓。曰市野時。雨始歇。雲霧澹濘。山容未了了。既而度溪橋。過華表。滿山皆杉。森森摩天。濃翠欲滴。皆數百千年之物也。漸上漸峻。猛聲喧豗。振山谷聞。問之曰。瀑轂隨風而至也。石磴萬級。得山門。門扁曰日本第一大靈驗所八字云。是　桓武帝所　勅賜。二金剛像高瘦古拙。僧雲慶所造。入門上右。睚數

百步有黄冠羽流家乃投宿法如精舍歇霧未晴惟聽瀑瀫益吼雷轟霆震又如波濤之鳴洞非響所聞之比也余意興横生便欲往觀瀑布同遊亦從北行下崕嶒屼差杉駢植夾徑往益下樹益喬瀑聲益猛而谷稍稍闢有佛堂及小亭上亭仰瀑布靄氣噴散削壁千仞赭緑相交如一片石無有縫罅同遊一口絶叫稱快徐望若蜿蜿乎白龍下於雲間定視則紛紛乎若亂綿霏霏乎為飛玉少選滂沛濆薄銀浪奔注莫可名狀也自余出州府山行海宿旬有餘日峯巒之挺聳島嶼之清麗無不駭目然未嘗得一懸泉也既觀此瀑布而益知造物者含畜變幻不可思議矣吾十年之夢想渙然氷釋薄暮還精舍尚與同遊稱其奇壯不置也翌日天晴復往益極其奇兩壁三十歩許植杖臨溪瞻仰崖上十仞之樹如箸其高不可測水霧沾衣清冷徹骨令人心神爽快不知倦矣朝晷已高割愛而去遂謁十二所神廟廟在半嶺連甍環爲繚垣周爲丹畫雖漫漶盛飾尚可觀側有大悲閣及鐘樓莊嚴亦具傳者曰在昔　仁德帝時神

放異光於山東　帝勅祀立廟于此因一號光峯又花山法皇嘗駐蹕三年其宮址尚存山上故稱御山白河帝亦有祭瀑布之事實是仙區神臯而帝王舊蹟矣又聞巓上猶有瀑布數仞數丈者同遊憚嶮余亦不敢強何則我輩於山水深搜遠窮或後所得不及前所得興盡意倦而後敗者往往有之況乃一朝得遂十年之志願吾不欲貪多於今日之遊也蓋吾藩稱多名山水而無如牟婁牟婁之勝那智山瀑布最為奇絶凡山不帶水則雖有勝猶不憮人水不據山則滾滾長流耳二者相待而后能擅其美也夫那智之勝若山若水幽邃宏大可謂備矣

自妙法山至木本浦

從那智神廟後上蹊百步有二路一北至雲鳥其一西南迂上里餘達妙法山妙法與那智異稱而其實一脉也此遊以觀瀑布為主既窮其奇未能屬饜心猶在背後忽有先登踞石吁快哉者余知其語聲為英彥喜躍就之則那智峰巒盡為金碧瀑布與日華相照光彩爛然如積雪映朝陽而崩頹但見其狀不

聞其響。可知相隔之遠也。而其大依然與嚮所仰觀不異。余益歎壯大。既得阿彌陀寺。松蘿覆門。苔蘚埋徑。堂中安古佛。有僧守之。又有洪鐘。近時所鑄。無足記也。皆曰。妙法無奇。寺門之南。漸下百武許。得一平岡。眼境豁然。牟婁數十里山河島嶼。靡迤重疊。綿絡環匝。悉現杖屨之下。如佛所謂在兜率天宮諦觀下界。余於是始知妙法果有奇矣。盤桓多時。製一幅圖收之。東下峻阪。蹤不可止。左得銅山。多舊礦鐵砂銅石。錯落于徑。上人云。是為長野之山。四十年前猶出

銅。工賈相雜。廬舍鱗次。今則寥寥三戶耳。又經諸林字。久井。佐野。三輪崎。數里抵新宮。新宮即水野大夫所邑也。過其野。入其市。望其城。亦紀南一都會也。是日伯英先擇逆旅。吾就休焉。翌日昧且。拜新宮祠。將詣花窟。北行離邑。過河。行堤上里餘。又渡河者三。曰湊。曰市木。曰志原。得有馬村。忽見一山突起於松林西。同行皆駭。即花窟巖也。其巖南面。立縹樹植于巔。斧劈斑斑。淺而不透。從三四十仞。衛亦稱爲一巖。北向對立。大居其半。窟不立神廟。唯建華表。今人向起

敬。二巖間。如行斷崕。如入巨窟。書記所載。葬伊奘冊尊之處是也。故事祭神。必以花。花窟之名。其因此乎。穿出東則巖形愈大。其背北旋。漸為土山。望之亦猶漆城蕩蕩。不可登也。余見奇巖已夥。未有如斯偉傑者也。東北道于海濱。石數丈者。往往而在。濱盡得木本村。阡陌稍廣。市街相通。亦一富鄉也。里長來見。乃問以近縣之勝。曰。近而土人所口者。為產田神祠。為有馬城墟。在海者為魔島。為鬼城。凡熊野中稱古址廢墟者。其時世綿邈。多不可詳。稍遠為大馬頽。其

山有鸚鵡石。其傍諸山產蘭及藥草。仙茅最多。又生一種臭艸。近時識者目以為茜也。余忽憶家君愛蘭之事。蓋吾家所養數種。其青莖。魚魫。金稜邊。青紫寒蘭者。皆此山中所產云。里長曰。山谷鉛多蘭。至其佳種。非入窮谷深林。則難得。乃贈以一草曰。比入馬嶺所得者。為鷄尾蘭。其葉狀副名。細莖小白花。亦蘭之種類也。余便齎歸獻之　公所以充藥畝之種。其餘呈之家君。明日雨甚。一行就輿。取原路還新宮。晚逆旅主人乞書。伯英書草行大字。余則華小詩二三首

併與之。邂逅金叔狄。叔狄名巽顧邑之老儒也。蓋其五世祖。自朝鮮歸化云。

熊野河

熊野河一稱九里峽。其源出大和。七八里而入紀浸。巴渊無音虽田。二水亦會于此。奔流漸壯。又四里而與北山河合。南走蛇渊。其勢益大。竟爲新宮河。東注于海。十二日將湖峽。賃舩二隻於新宮城下。其一我輩三人。提壺觴茶具。兼之其一僕從行李。舟子各二人。挽百丈者凡六人。昨雨河水洪。午始淂上。舩碧流

湯湯。涼颸吹面。兩岸松蘿。落影可拾。東辭先奇。引一篙迎之。至檜枝村。挽行者喚邨夫相代。盖峽上村村。分界遞代爲役云。忽見輕煙映山翠。云造炭處。杜宇一聲。飛過前峰。仰見之。已失雲際。我江都之居。盛夏厭此鳥之喧。客遊千里。偶聽之。始覺惹旅情。行不能三里。而泊大蟠蛇渊。奇巖出焉。又有白絲泉。纖纖可愛。峽西之村曰淺里。其境幽寂。岡巒四合。草樹際天。東坡所謂如大環者也。民可百家。居于環中。乃止岍投宿農家。亭憑爽塏。村中桑麻田園。一覽無遯。隱此夜風月清涼。岩巒愈高。潯溪愈響。皆喜出於意外。質明還上舩。解纜中流。滌釜烹茗。清香爽然。未知與中泠水何如耳。忽驚左崖斷巖昂然。皆為異狀。舩少轉。奔流自右滙注。得飛雪泉。飛瀑亂石。望之如柳絮翻溪。群鷺集崖間。自是二里許。兩岸屈曲。壁立斗絕。潭渊湛碧。亦時爲灘。其灘多暗石。川路屢如窮。而又通。余誦李青蓮荊門剡中諸什。以賞其奇。舟子指右峰云是爲龍門。爲仙人林。又稱飛鉢。昔者有泉岳上人者。隱此山中。天子嘉其道。應屢徵不出。今號其地曰

宣使返所。漸過其峯下。水霧俄合。蓬窗朦朧。是時百丈過葦石間。唯聞簌簌汰舟聲。左崖望葵泉。霧猶隱半。頃刻散而爲一帶白雲。上遮崖隴。紫翠間日光少漏。霞彩霏霏。來撲眉睫。又得飛瀑者左右各二。有走下岩鐔者。有迸瀑古松梢者。有吐爲三級者。又爲素練者。舟中抵掌稱快。水激鏗然。四山皆鳴。不啻笙簧鼓節。耳目應酬不暇。既而兩崖稍闢。躑躅花盛開。紅緑縫岩隙。左嶺奇峻。又淂小懸泉。不讓前所見。過和氣村。噉日稍升。舩漸北嚮。左山本熊城。日足等村落。

右楊枝郷平遠為濱竹樹葭葦蒼翠彌望至此萬頃汪汪空濶洶湧即北山河所注合也船揚帆尚用百丈北滙遠望九十村折而左見廬舍于垂楊之際為川合村挽行里餘得一攢峰名撞木山崖下綠樹欝葱一大奇石突然横出形如繖軸船循左壁而避之得數屋郷皆枕巒前嶺際見樵徑見茅舍皆有画意艫艱左石淺湍急舟行太難時見下峡之舟如鳧鷗逐魚之狀将及高山村激水嚙洲盡挽夫縮百丈上船撤帆四篙屢溯屢流屢石衝瀬而始穩復得挽路

于左崖過筌川郷是為巴淵少右轉則本宮廟背岸也上陸日已哺夫峡中山暉川媚鮮麗多趣灑落有韻譬之畫即南北合派妙處石皴法樹點式泉谿嶂峯之位置亦無不悉具益悟古人以造化為藁本之意矣若夫世俗之所艷稱浮屠達摩洪鐘屠刀肉著俎肝骨等諸巖余則無取焉

二宮

詣新宮後五日謁本宮蓋二宮祭天七地五諸神也其廟皆立之山下華表一樓門三禮殿一宮祠十二雜舍數十周以丹垣其正殿共向巽位棟楹之刻畫梁桷之輪奐庭壇之高廣亦皆相如大率延袤三百餘步前是明和庚寅之冬本宮災爾後假廟以安神比年經營咸復舊觀価如方成奕奕日新今茲秋九月将有遷宮之禮藩士熊澤友之以司農屬官來幹土木之事故得聞其詳爲考記　崇神帝五十五年戊子創本宮　景行帝五十八年戊辰建新宮郷始山有廟則少後焉而地城市郷落被以二宮之名若曰本宮邑新宮城是也余登神倉山觀飛鳥河寶徐

福祠皆詩以記之蓋徐福入海求蓬萊遂留熊野口碑所傳舊矣不但我邦稱之也歐陽公有句曰徐福行時書未焚逸書百篇今尚存又僧絶海曽入明太祖問徐福之事答以詩亦可以證矣

湯峰

湯峯在無音里西有寺曰東光其傍容舎皆矮陋廬于凹凹間有二溫泉其一出自精舍園中一則湧於西塔下窪處晨昏外煙若蒸甑崕畔為二室高者注之低者激之以灌其室湯極熱野菜豆麥浸之皆

可帰也故浴者和水始得入麻痺脚弱尤有驗云留宿二夜步月浴泉旅懷為暢

還州府

朝辭湯峯還本宮村北行可二百步而左折雲氣出岫暗濛如霧細路一條廻山腰路轉而攀峻阪下深谷者二踰三越嶺得湯川郷循川行仄路益阨隘荊樾益茂谿溪多七葉樹大者殆百圍又上一嶺喬木千尋蟠欝凌霄茅菼一字是為嵓神盖山中多神宇一村一祠凡稱王子祠者九十有九是亦其一云余

時憊乃憩其廡下援筆題曰茅菼不伐土階三尺惟神所棲冥冥赫赫書罷而下谷又直上自前面遂踰頂歷熊瀬小廣二山宿近露村夜雨寒如冬明發度溪流登相坂行度山脊宿雲滿目宛如曉雪新晴余奇之植杖凝矚山日漸升一二峯巒隱顯争英英之中須臾遽然消散則亂峰百千如濤頭導者指示西北嶺云某位為龍神某位為高野為無果芝川而鍛川路皆下數里上汐見嶺盖自新宮歷本宮至田邊山行數日程是稱中邊地歸者至此而始望海行者過此不復覩海故汐見之勝最顯云又歷三栖萬呂等里落遂達田邊田邊者土腴民饒安藤大夫所邑也邑多木工其製器材咸用七葉樹素質可愛他州所少也又有古屋谷谷中産奇石大小皆具峯巒之狀可為盆翫或硯山但其拔俗者難多得又有鸚璣貝者奇品百餘種皆海濱所産云其明自南部過千里浦浦國風所詠也又徑岩白切目等郷落至印南浦復故路宿原谷翌歸府與藤岡二子謁官長於還舍余則辞家君時衆客滿座琴酒相歡留府五日告

暇東歸以五月二十四日發辞別家君於官舍盖以家君之歸在明春　公駕述職之時也此行也過京攝歷江濃入信踰木曾出上毛六月九日得還家有人曾說天下之嶮曰信之木曾猶易紀之熊野則實嶮焉余今而知其言不誣也盖余遊至木本浦而止聞其東北猶二十里以達於勢其郷大者曰尾鷲曰長島其嶮曰八木山曰大杉山曰大臺山以翰屏於紀西北堺云吾友呂隆年以官事屢抵熊野嘗語余曰遊者多自州府越中邊地至于本宮而新宮而那

智歷太邊地而還夫下峽舟疾易失其奇且海濱背南則諸勝咸屬左顧不如反之而逆行順還也余乃從其言故得盡其奇勝記以告後遊者爲

享和二年壬戌秋九月記

男　遷編次

孫　純校字

先考此記請里古賀翁序之衡嶽祖考亦有題辭　遷嘗欲梓之不果已而先考捐館今　遷襲家居剥職今已四十餘年矣而未嘗不耿々于懷也客歲壬寅春從　公駕至紀二子　敏從爲　敏解後素因欲使追先考游蹤寫其勝緊有事不果時老公在西濱別館一日拜謁焉　老公談次及三山之事　退而進覽此記　老公惜其委于蠧魚辱賜剞劂之資恩命優渥感喜交集乃如校讐將授剞劂氏但　敏未能寫真以合刻是爲遺憾耳藩士鷲湖翁嘗遊三山寫其真以秘篋中因乞其圖中那智瀑泉者併刻之嗚呼　老公恩眷之懇　遷不肖曷以得之先考而有知亦應拜賜於九原翁先考從弟善畫年已八十健筆不衰云

天保癸卯蒲月

男　遷謹識

孫　泰定敬書

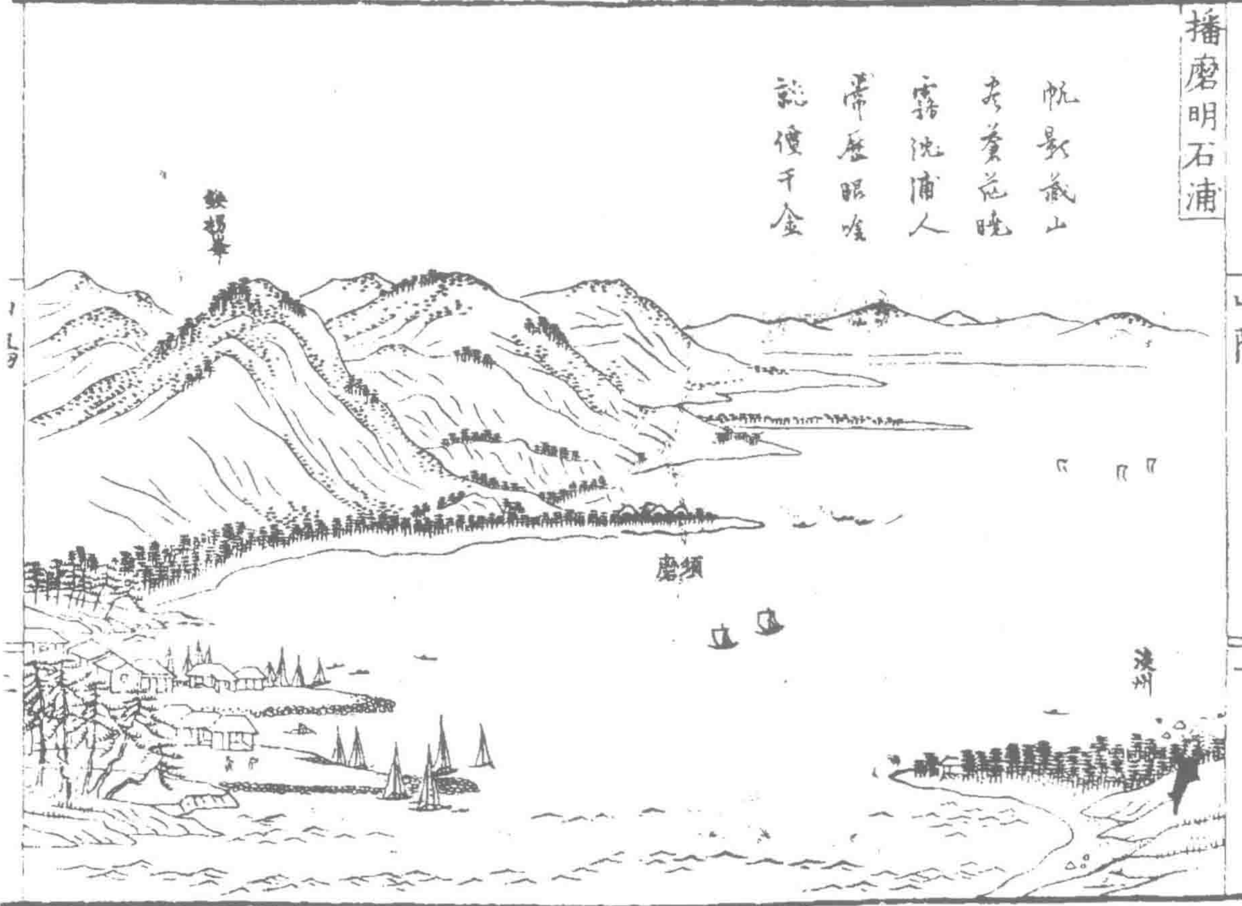
淵上旭江　著

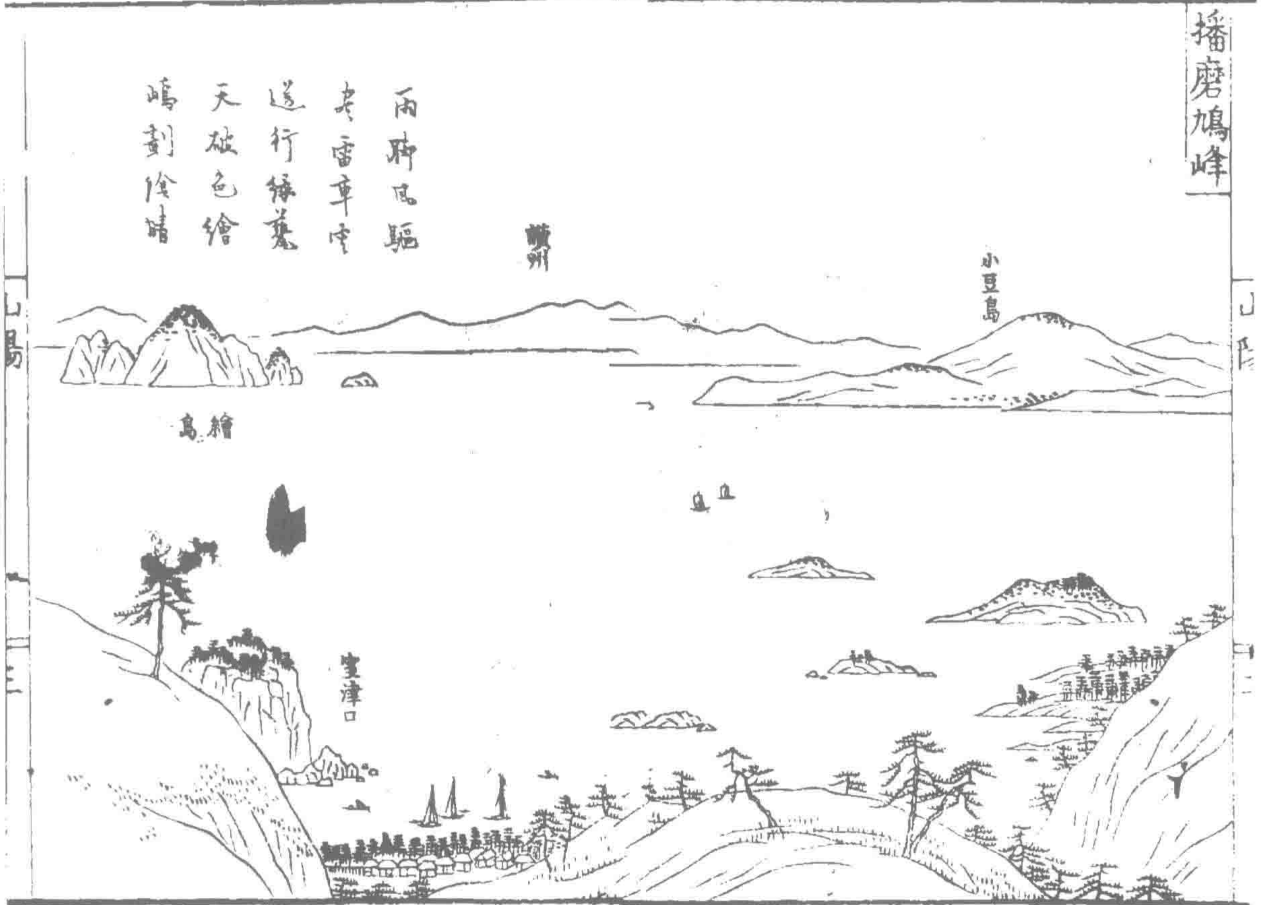
山水奇觀前編

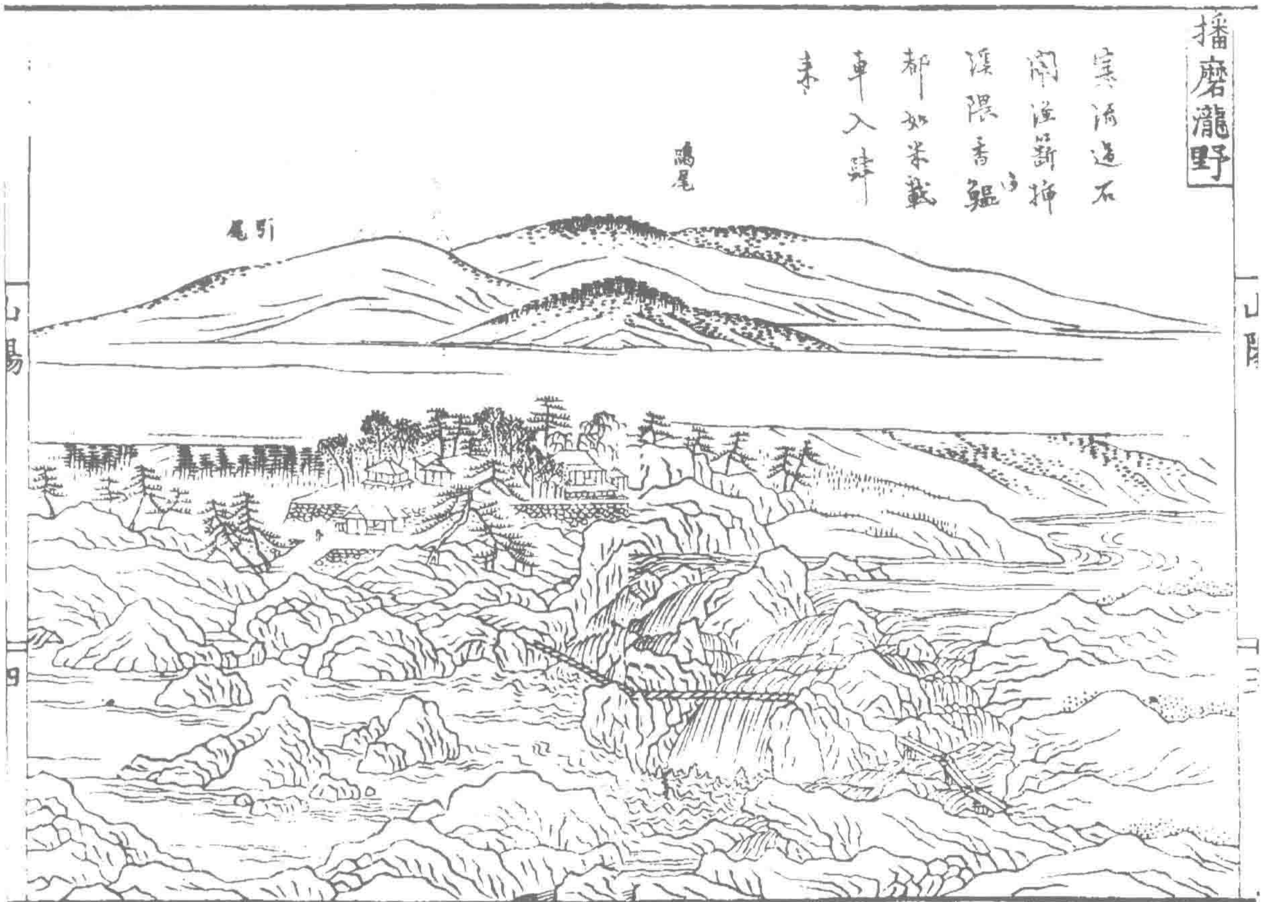
舊刊本

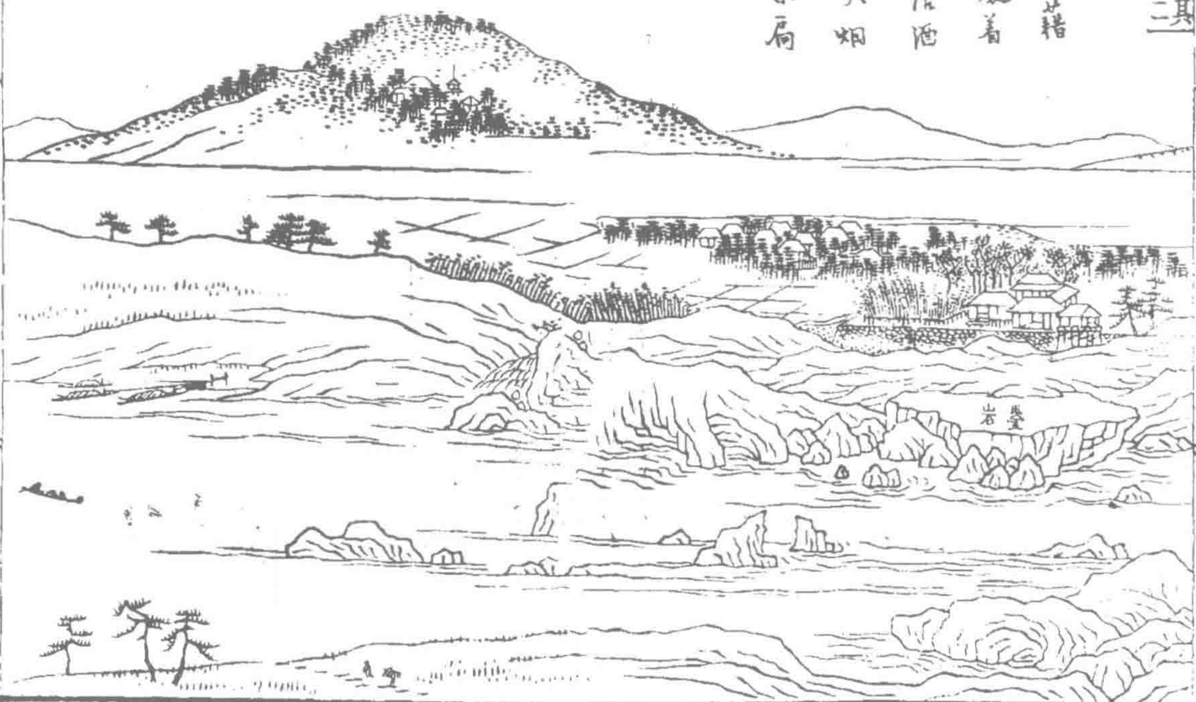
據舊刊本影印

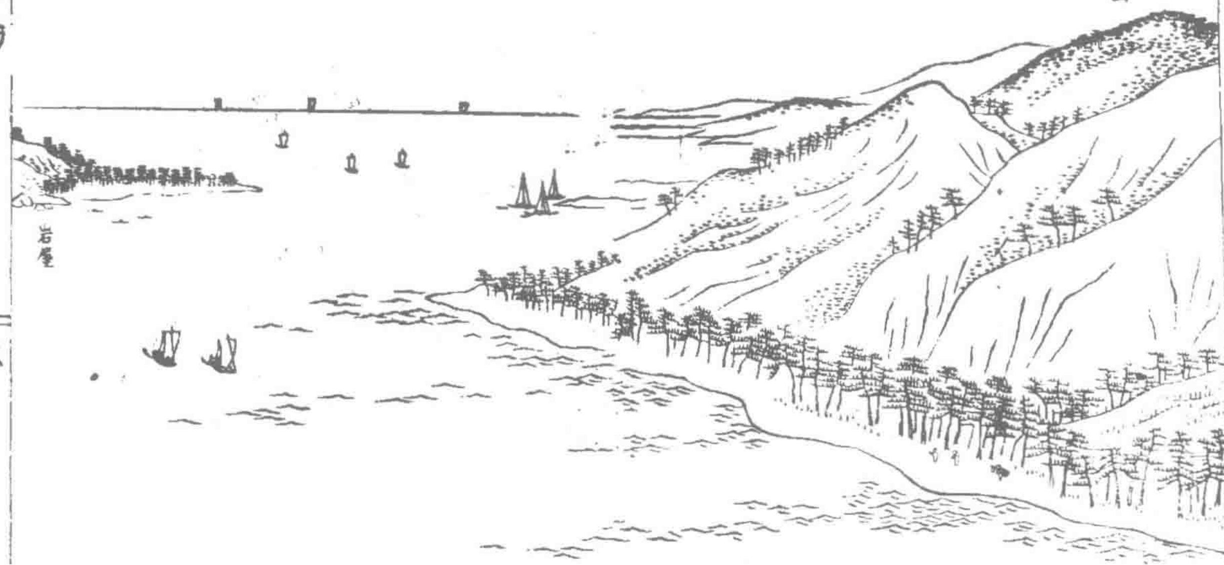
山陽奇勝

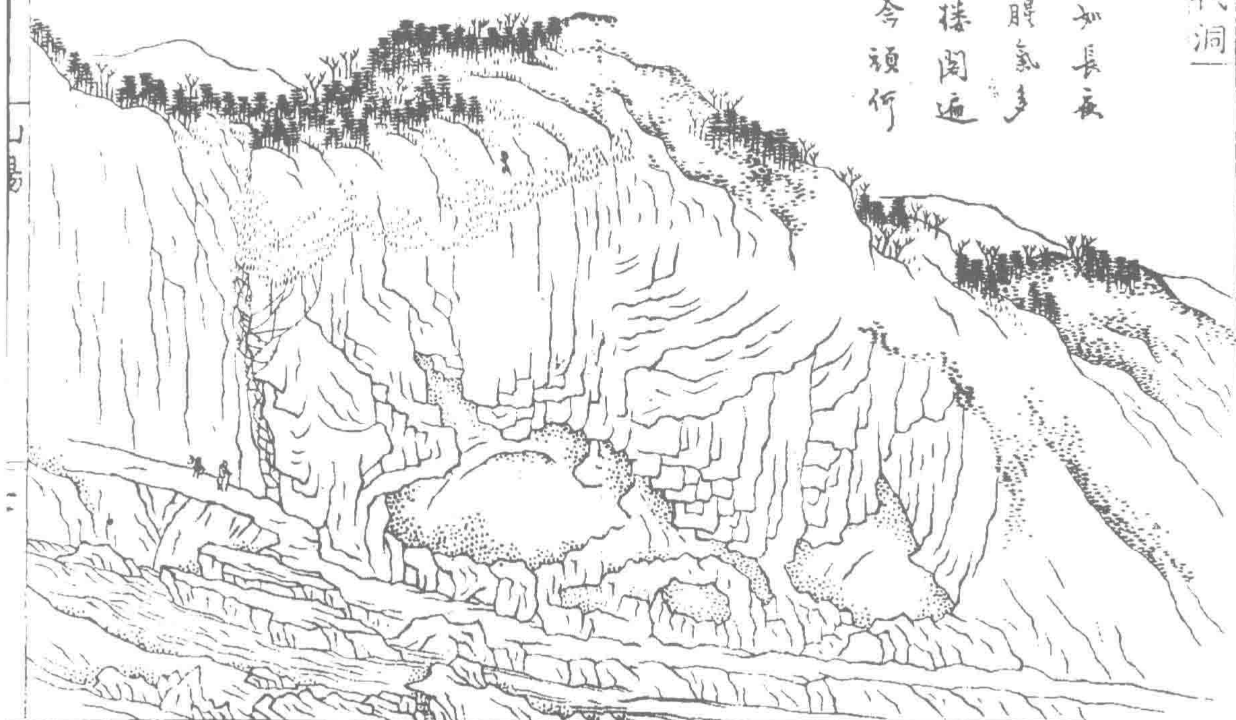



播磨鳩峰
讃州
小豆島
繪島
室津口
山陽


播磨瀧野
鵯尾
山陽


播磨滝野 其二
溪山人藉
刹好慶着
護亭沽酒
促燈火烟
昏扉未扃
五峯山
岩臺
山陽
五
四


播磨舞妓濱
娥媚美佳
景松抄夕
霞曈仙姬
應舞散衣
拼挂梢裾
鉢伏山
岩屋
山陽
六


美作神代洞
窅渺如長夜
恍行腥氣多
人間樓閣遍
空洞奈頑何
山陽
六


美作山伏谷
夏木黃鸝
歇陰々積
雨天溪痕
三尺漲快
著一篙船
地藏巖
津山川
山陽
七

備前龍口山

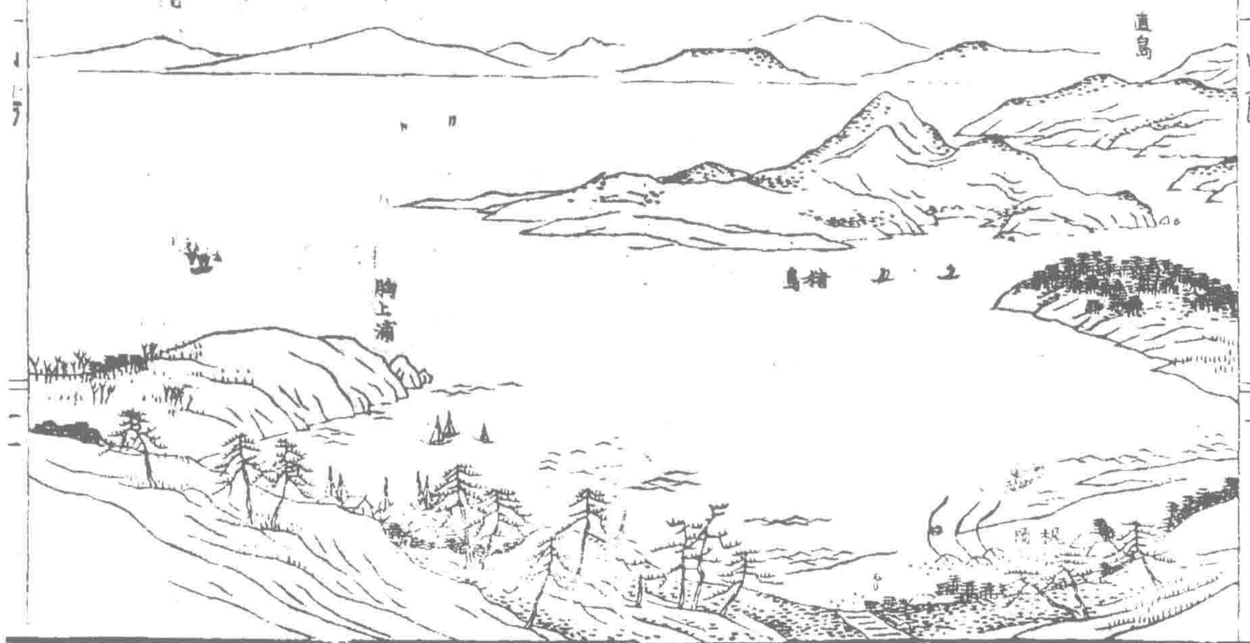
烏啼山色曉
雜樹蔭溪流
茅屋猶酣睡
有人已挽舟

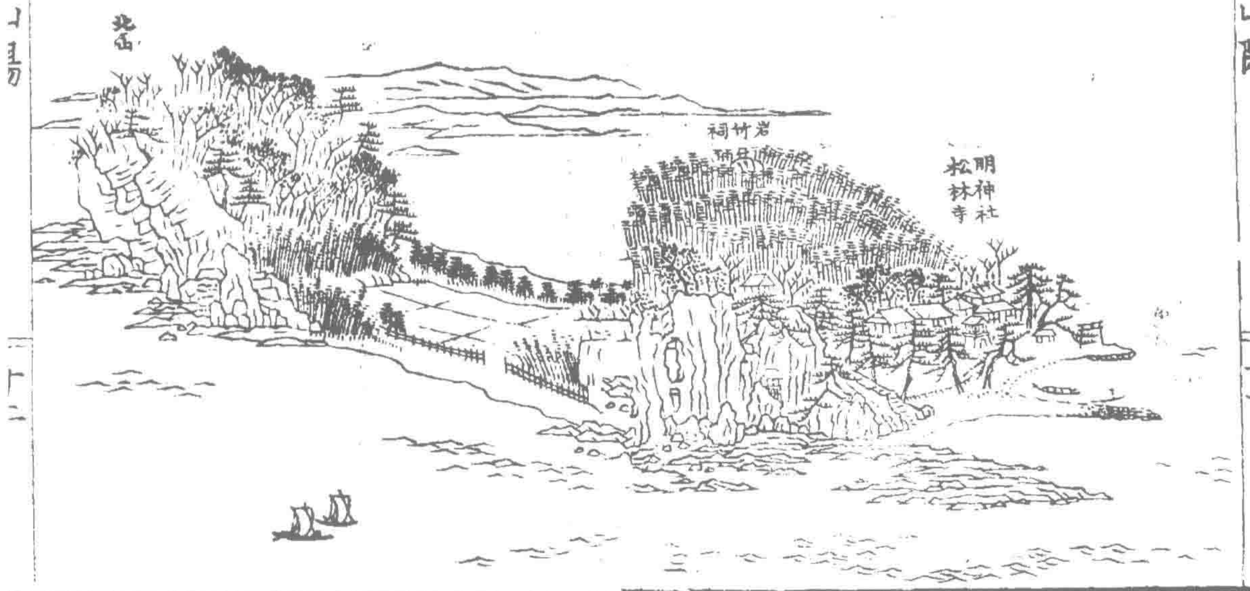
古城墟
夫婦岩
武佐川

備前龍口山 其二

日出藪
風細雨
餘行露
清溪上
景堪畫
此中人
不饒

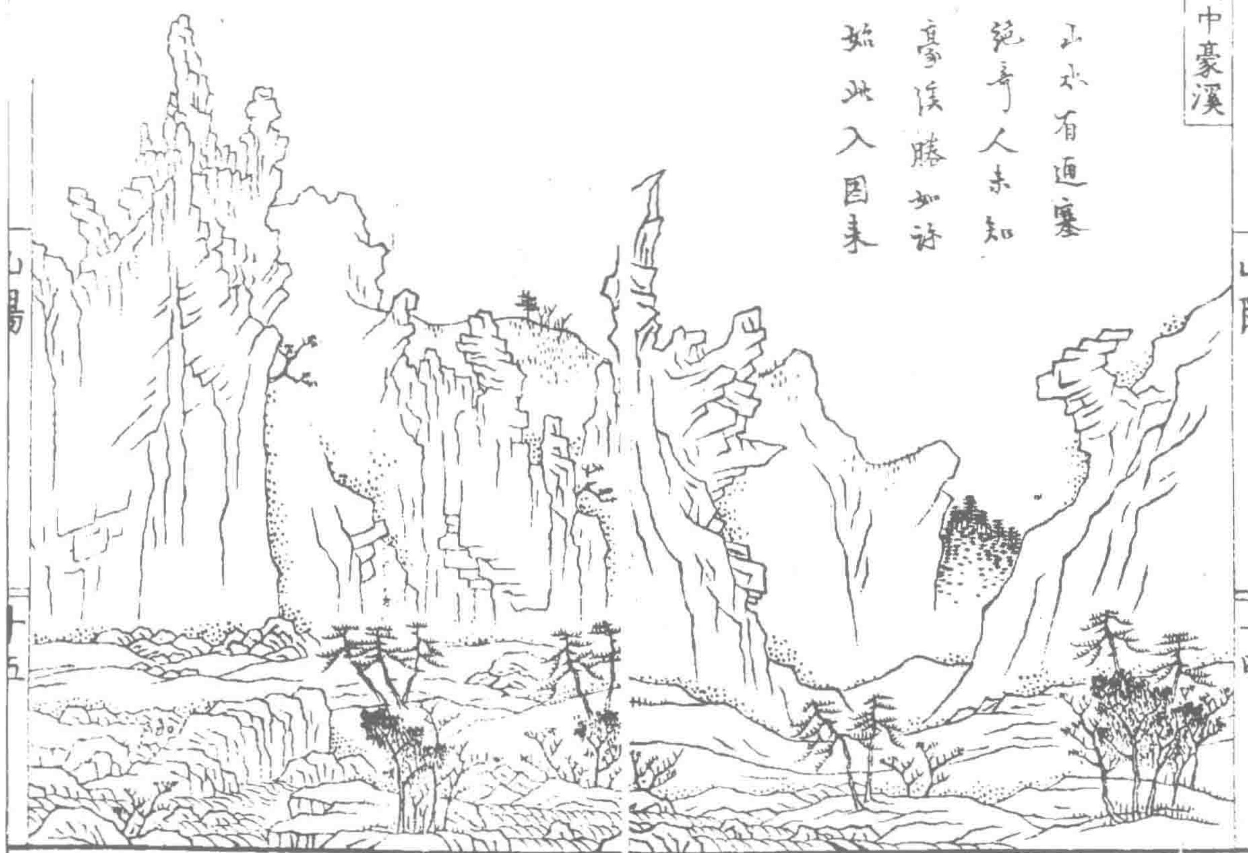
地藏岩
矢津山
中原

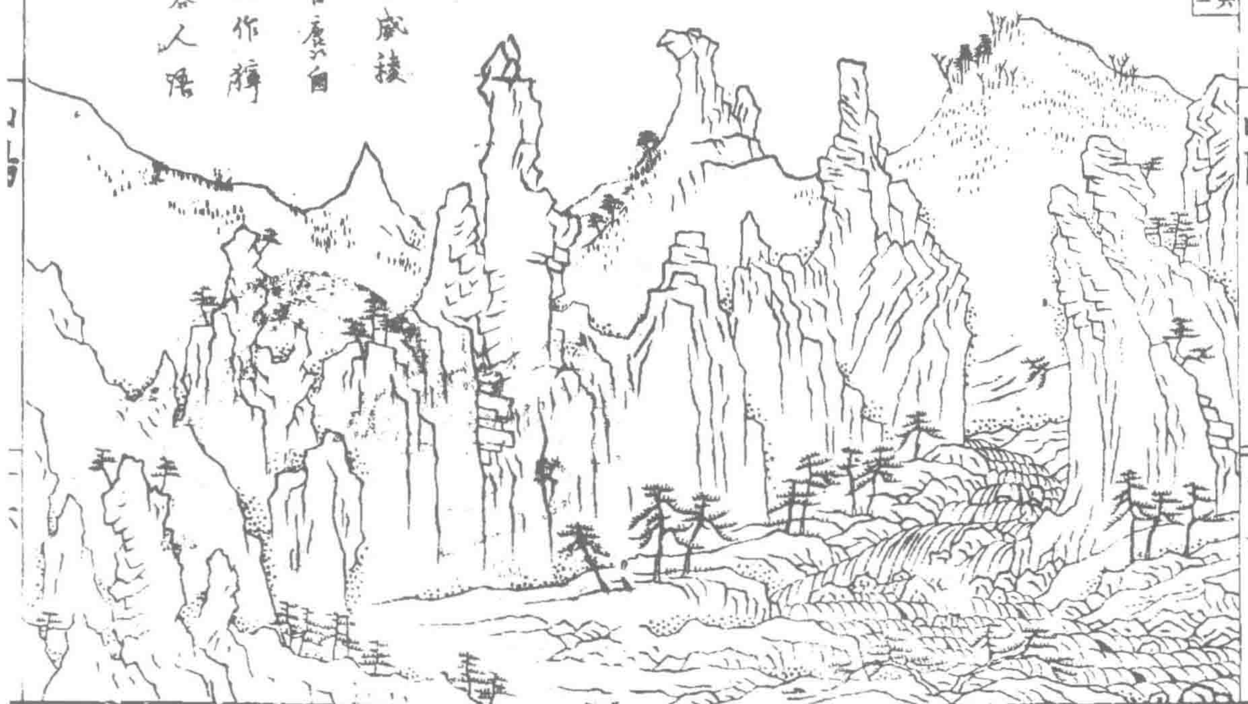

備前兒島山坂
直島
胸上浦

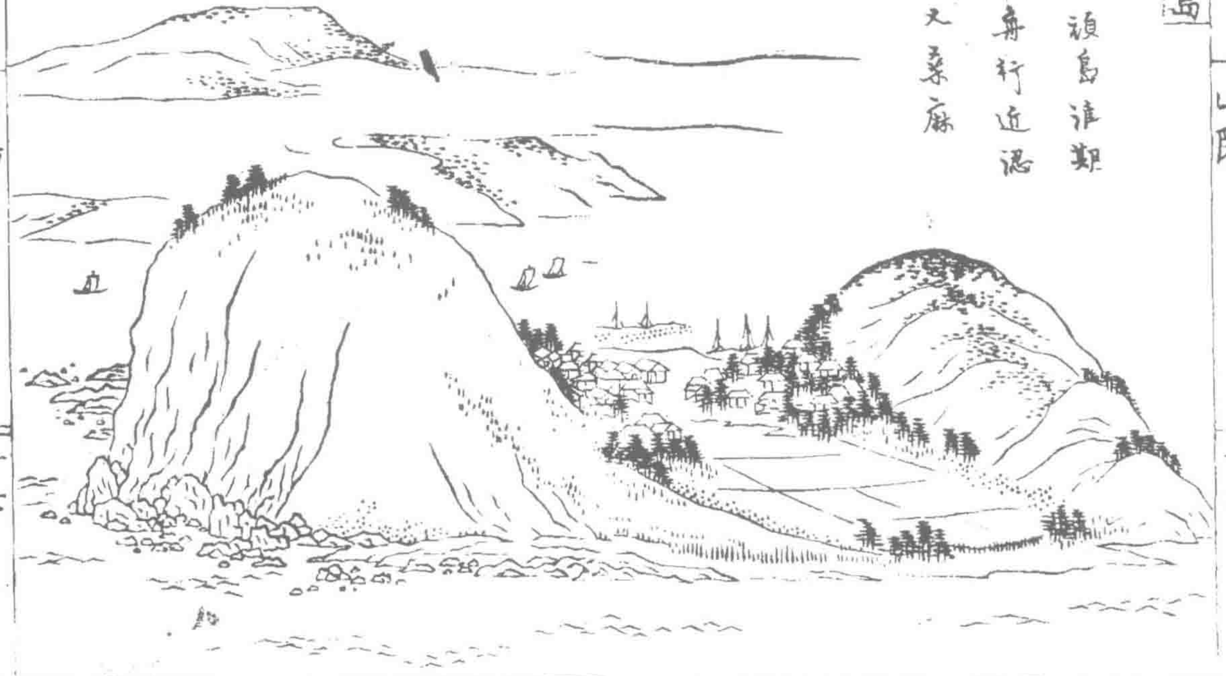

備前高島
岩竹祠
明神社
松林寺

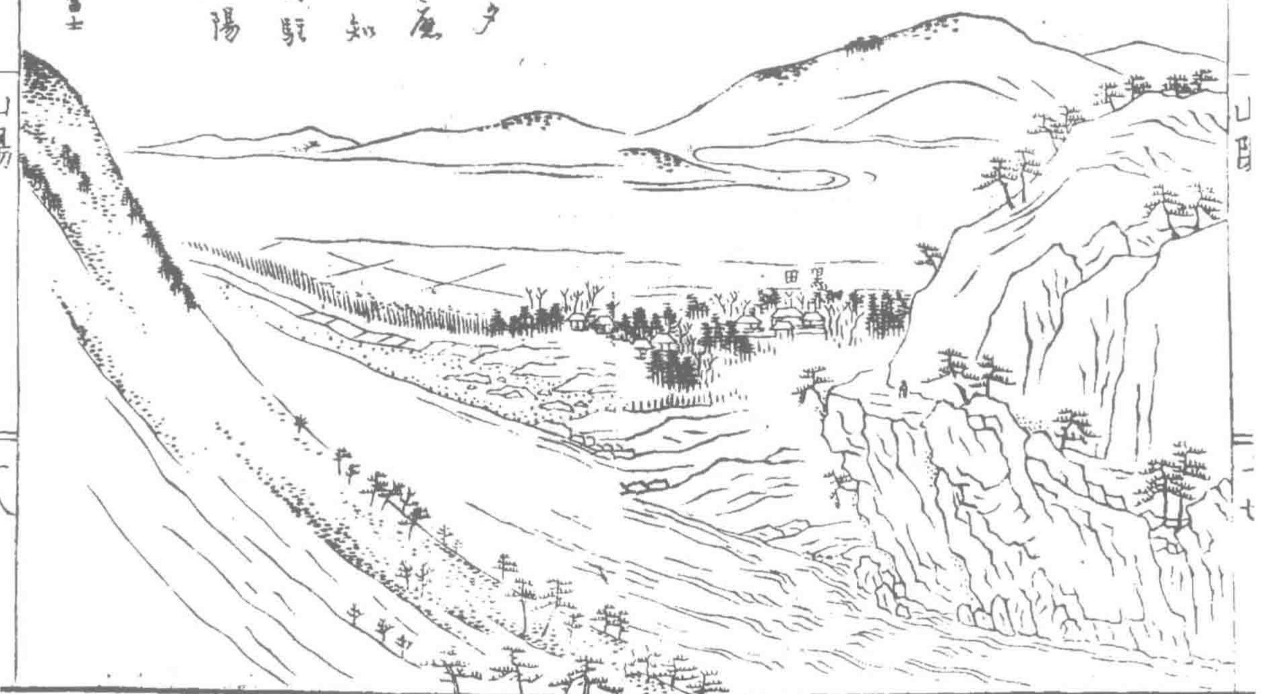

備前藤戸渡
賺得一漁翁
公終渡海雄
曲鉤成底用
只解釣人功
粒江山
天城

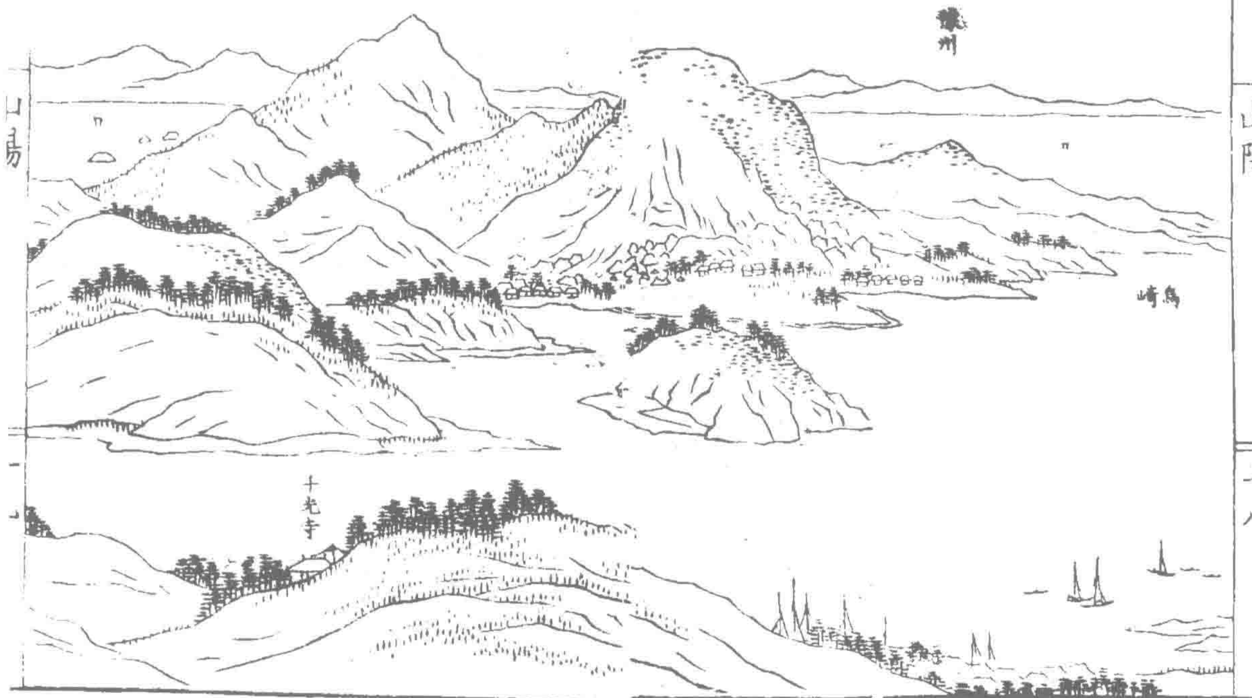

備中倉敷
寒潮追
景落哀
雁鎖蒼
烟暗處
忽燈火
初知有
泊船
東紀島
妙見山

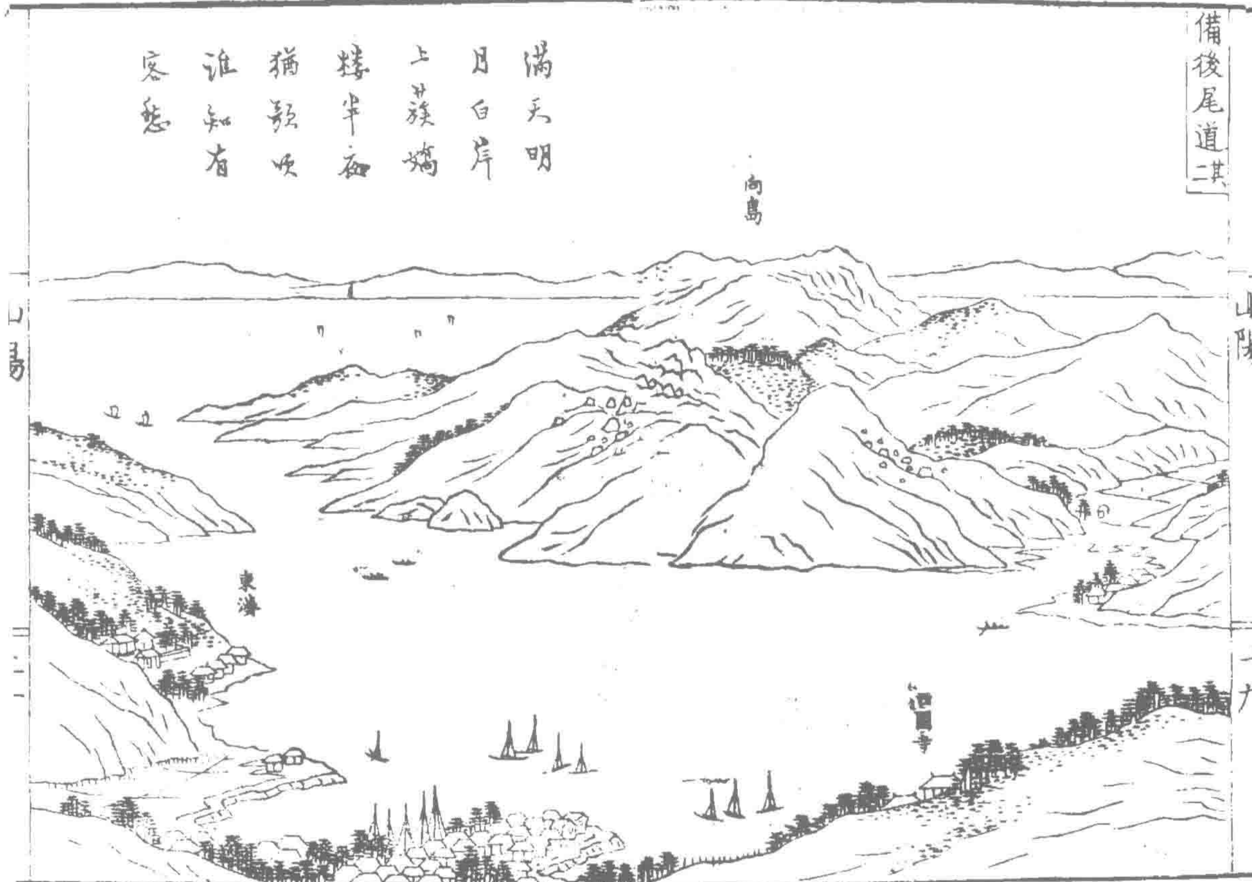

備中豪溪
山水有通塞
絕奇人未知
豪溪勝如許
始此入図来
山陽
十五
山陽
十四


備中豪溪其二
石勢太威稜
不肯容人
山陽
山陽


備中鹽飽牛島
遠望唯頑島誰期
中有家舟行近認
得雞犬又桑麻
笠島
山陽


備中酒津川
山容朝夕
慣居見應
尋處不知
更何好駐
杖立夕陽
小富士
山陽


備後尾道
浦口環
山轉泊
舟近暮
鴉不知
風浪悪
一夜似
歸家
山陽
十八
千光寺


備後尾道其二
滿天明
月白岸
上蔟嫣
樓半夜
猶歌吹
誰知有
客愁
山陽
十九
向島
東濱
西國寺

備後鞆津

海東推第
一如眼精
神亭月工
濤聲壯高
樓人倚欄

西舟祇
順風東
舟許逆
風大悲
迷下手
或恐欠
圓通



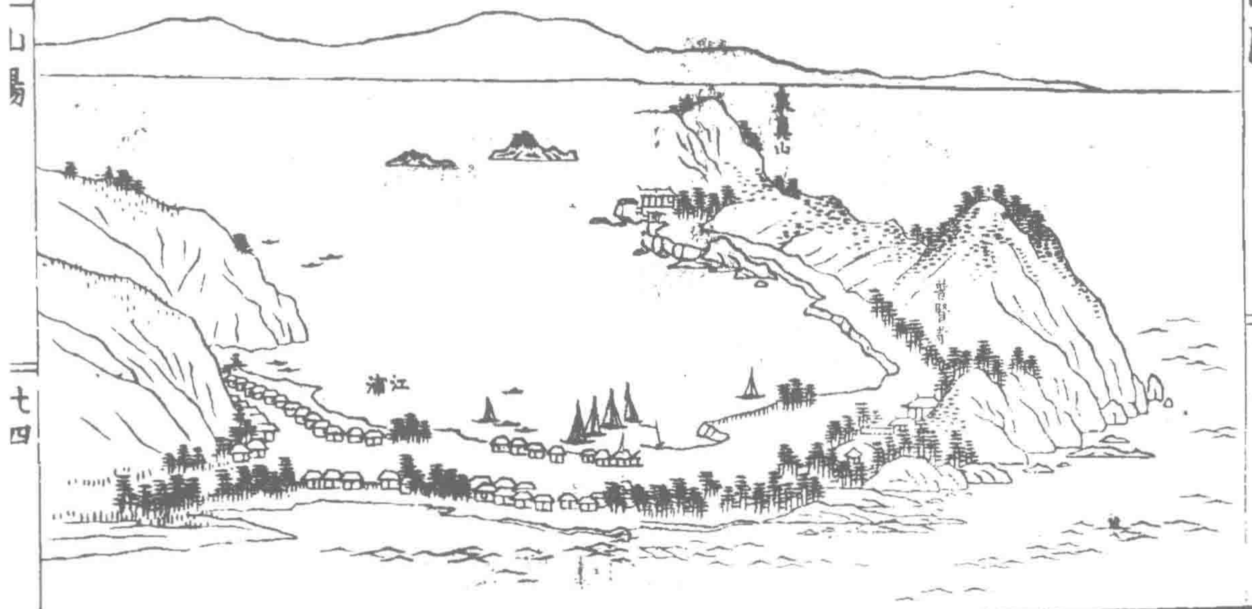
安藝音戸

水利鑿山
通削山似
鬼工扁来
人破膽走
賊真英雄



周防室積

三千煩悩海
小妹亦知非
受戒一宵老
可憐騎象帰



周防祇園山

片雲無過
雨忘却載
蓑笠只為
貪魚多満
身不道湿



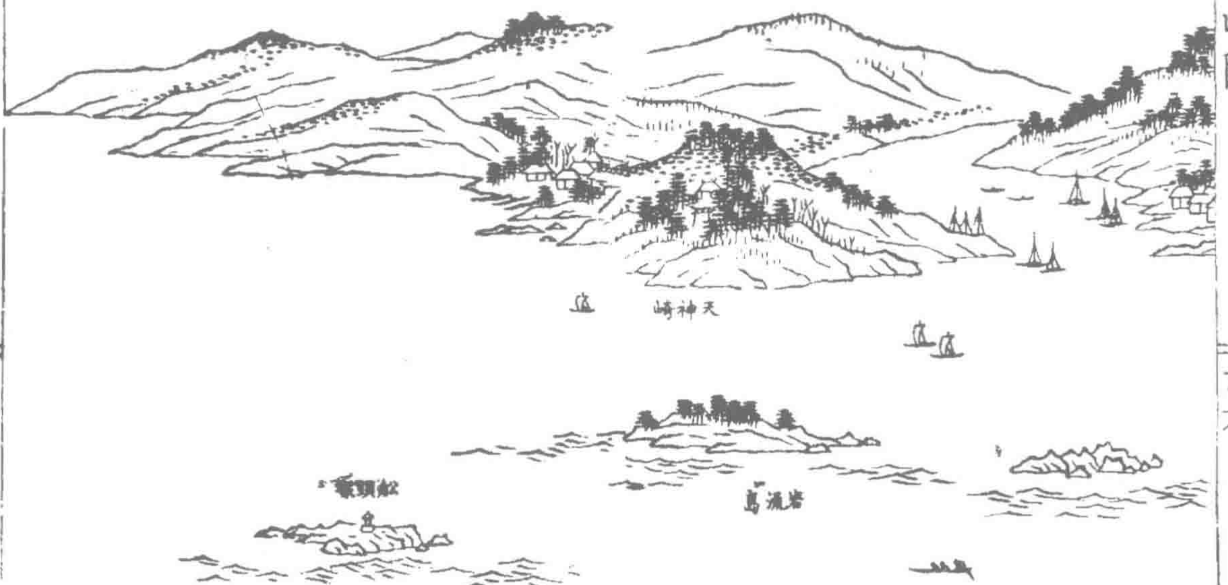
長門赤間關

一段傷心
豪奢潮落
日中舟人
莫嘈雜天
子在嵩宮



長門赤間關其二

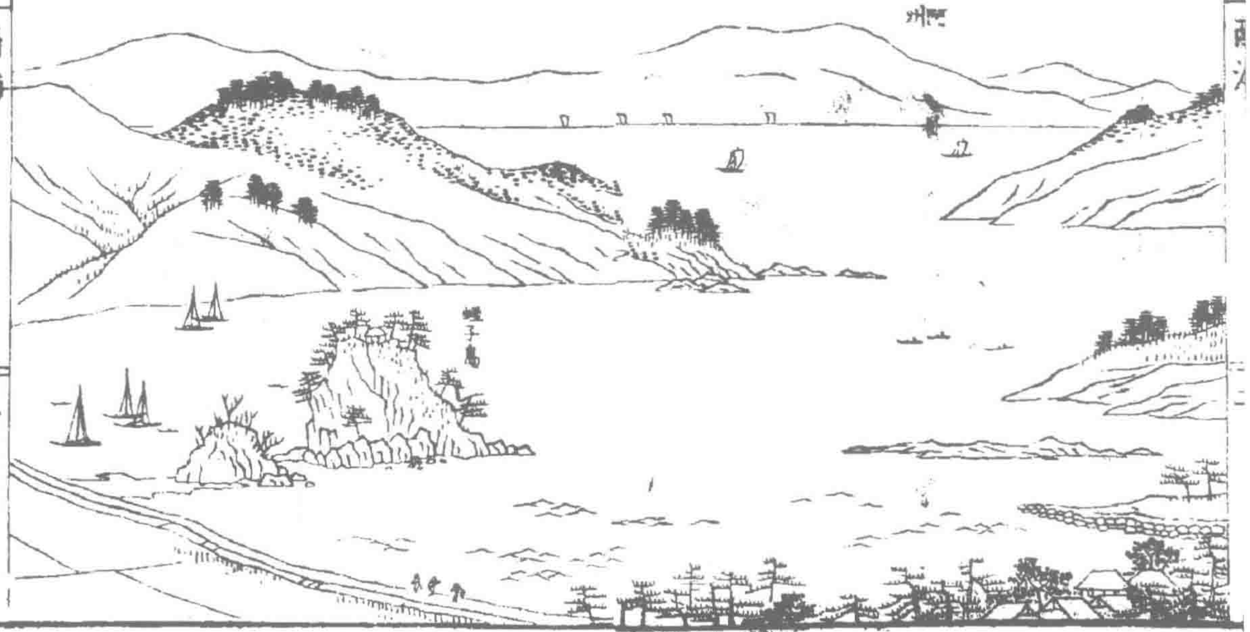
剩島名多
顯舟中指
點々紛々
説剩客高
枕不曾聞



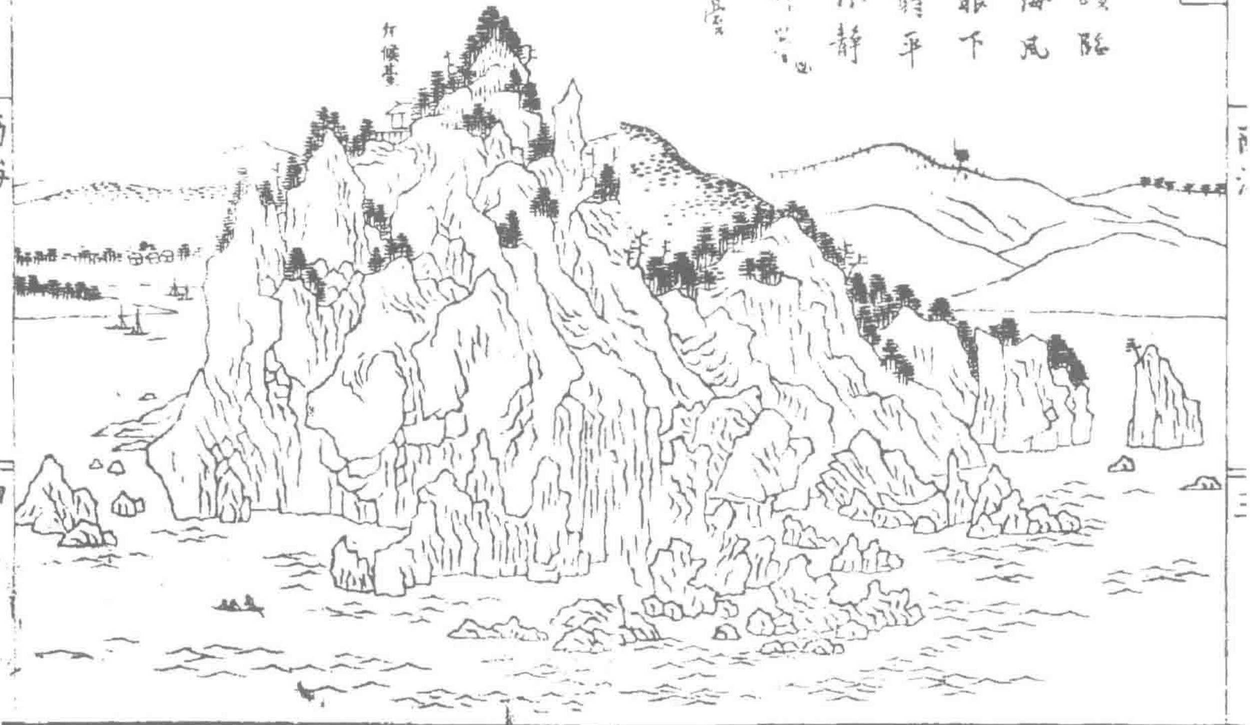
南海奇勝



紀伊下津浦

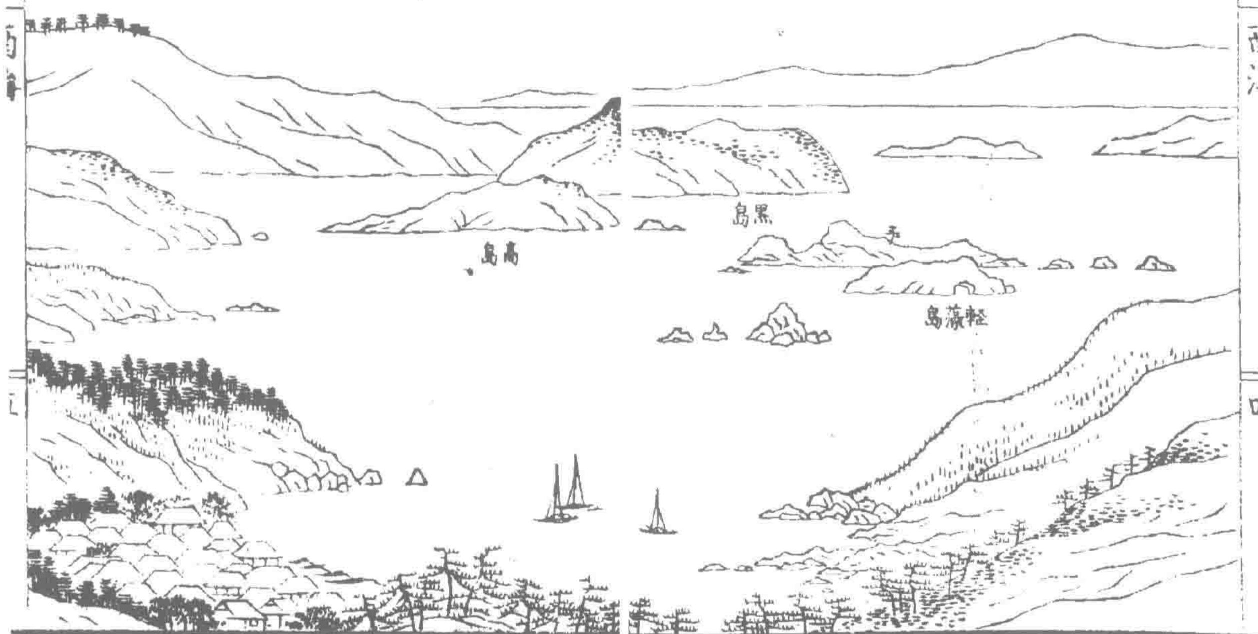


紀伊宮崎



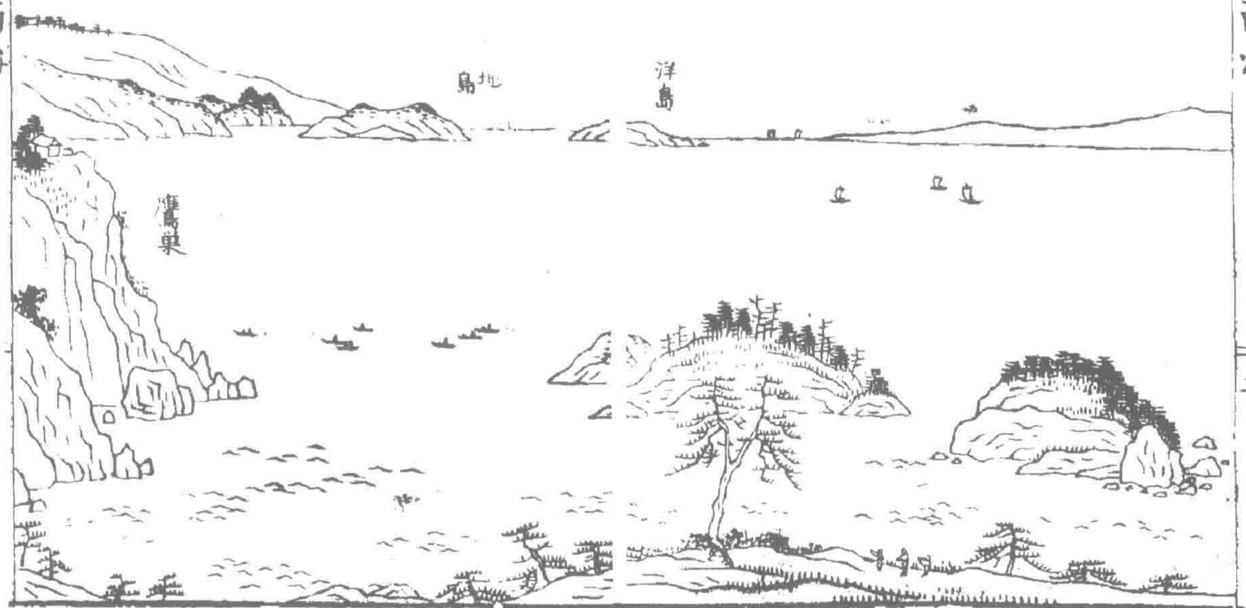
紀伊須原

春樹陰々
晴晩潮帶
雨生居人
似去吞雜
犬家各巖



紀伊雜賀

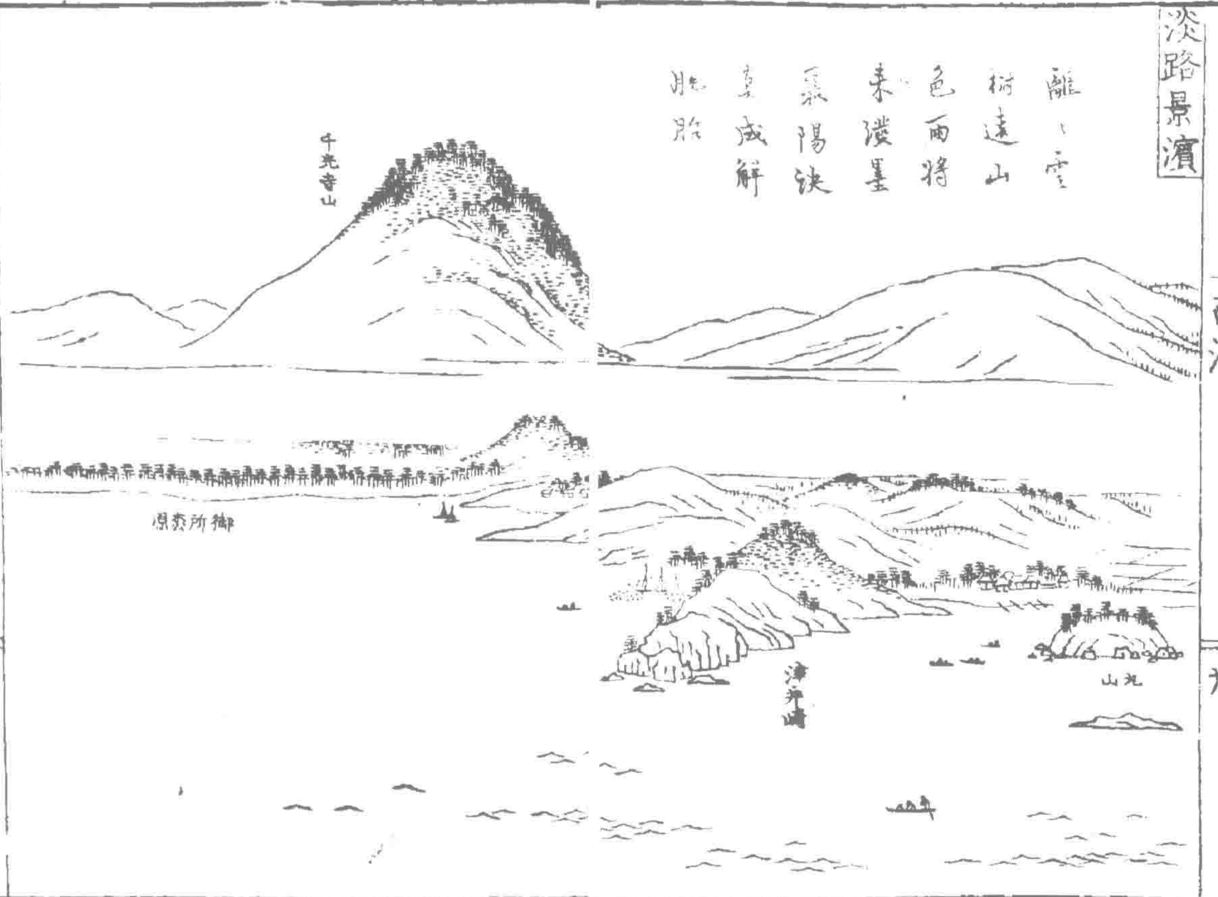
山水不知
名似追春
夢行村人
爲余説便
睹得圖經

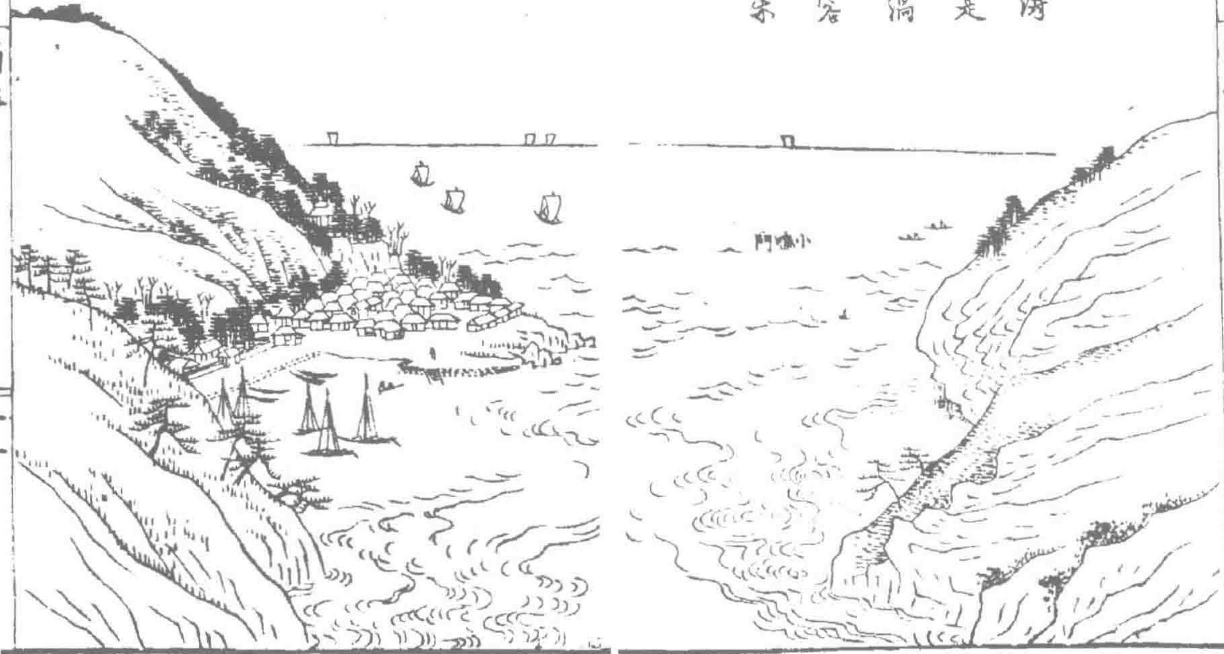


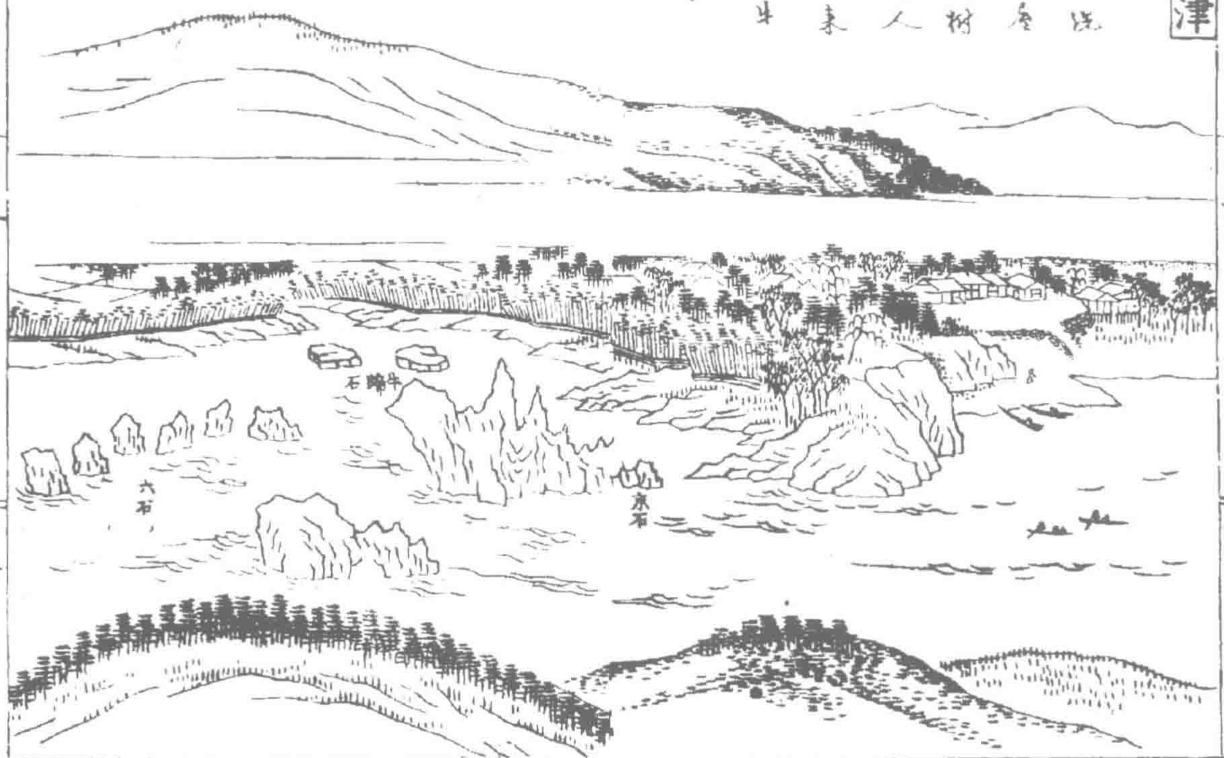

紀伊友島
觀音窟


紀伊加太浦
淡州
沼島
友島


淡路五色濱
煤烟多媚石
五雲襯海涯
如何地名佛
峯自丧漁家
江浦
佛崎


淡路景濱
離々雲
樹遠山
色雨將
來潑墨
氣陽決
景成解
脫胎
千光寺山
御所泉原
津井崎
丸山


阿波北泊
峡東雲涛
湧景奇是
檝師盤渦
船欲没客
易眺然来
小鳴門


阿波岩津
過雨洗
烟埃岳
頭新樹
碧何人
撑艇来
水漲牛
歸石
牛歸石
六石

阿波鳴門

一面沙如雪風恬海色空山邊多散馬嘶向夕陽中



阿波鳴門 其二

冒利何爲身輕身不自惜濤洄狼虎猛然有打魚船

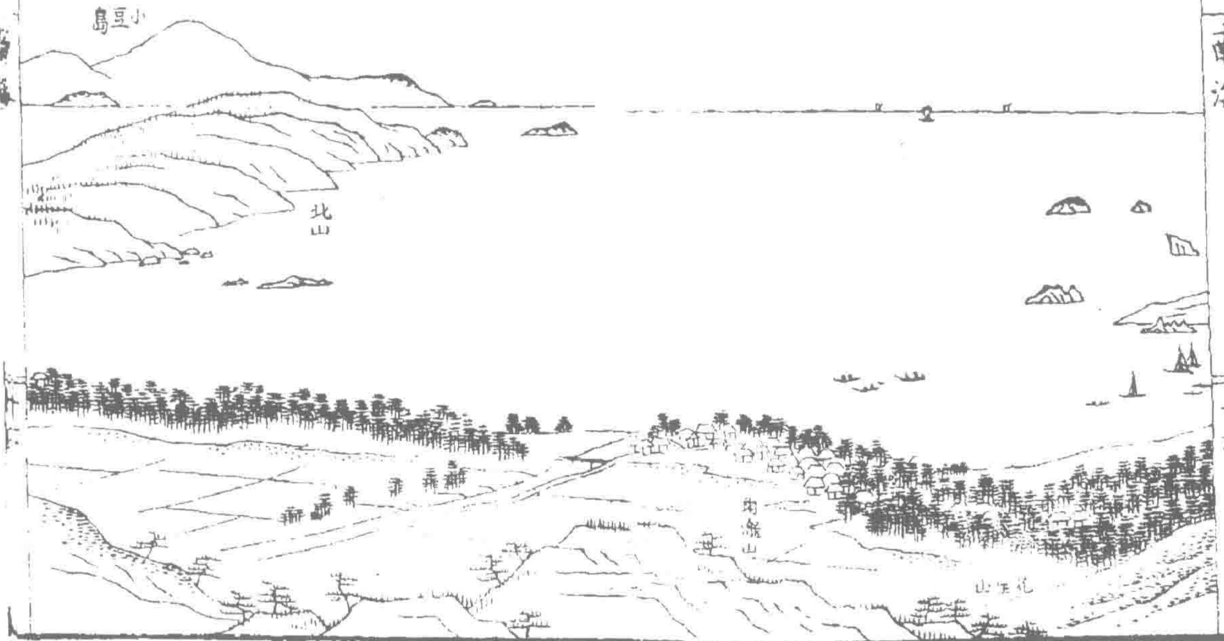



讃岐引田浦
荻多
漁舍斜
日浦村
烟縣山
晩炊熟
妻子候
帰船
巽山
弁天島
洋島
安堵村
南海
西海
十四


讃岐名古嶋
海畔奇巖秀
来畫趣多
鶴羽浦
南海
十五

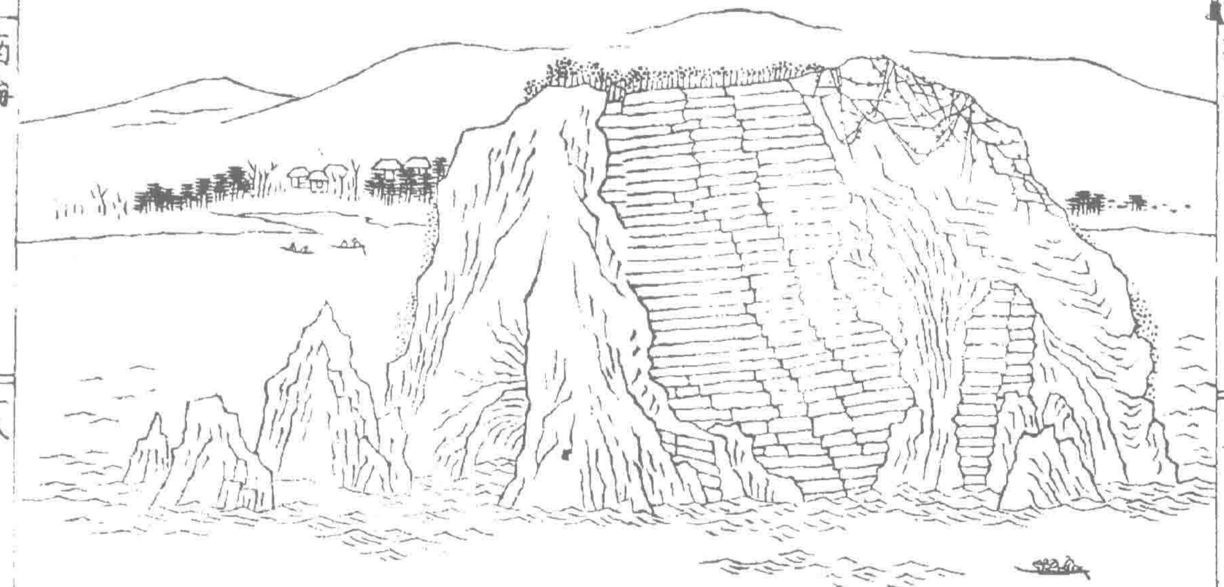
讃岐津田浦

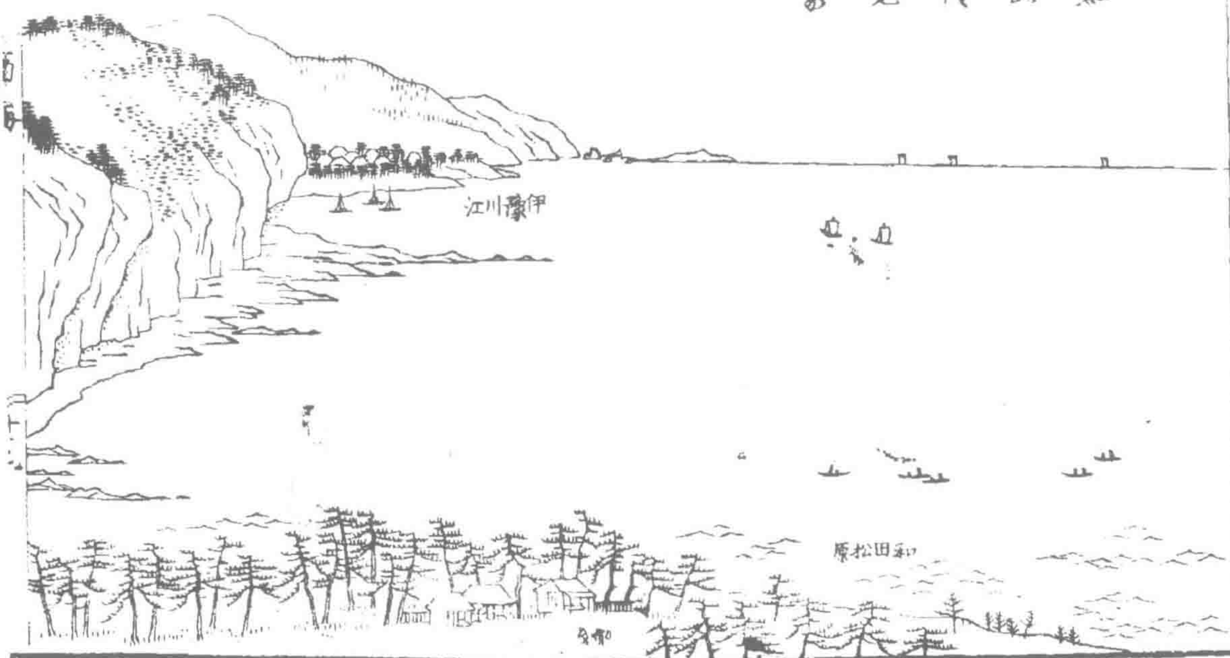
浦遶紅
仙洗翠
際遠帆
開應有
暮晴親
沙菌壁
一杯



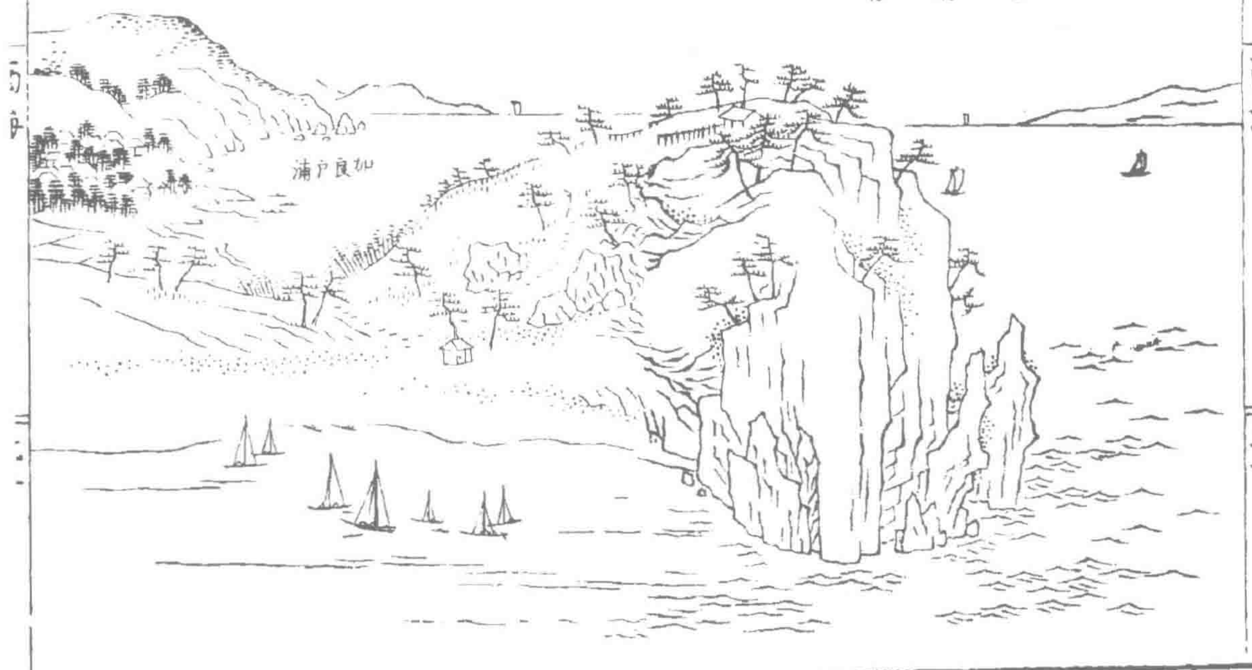
讃岐絹嶋

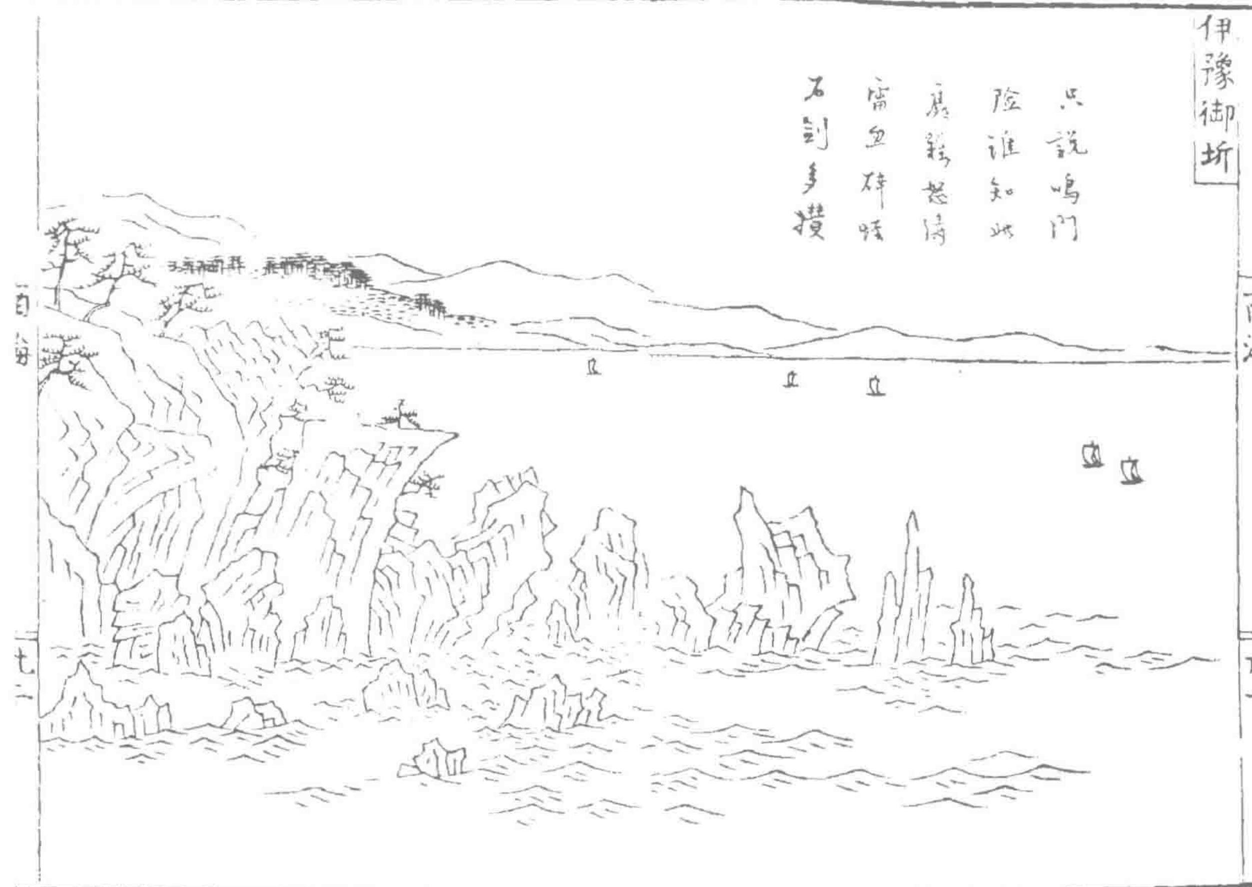
佳景迎人
媚江山暮
色稠重々
繒數卷何
若黄縷頤

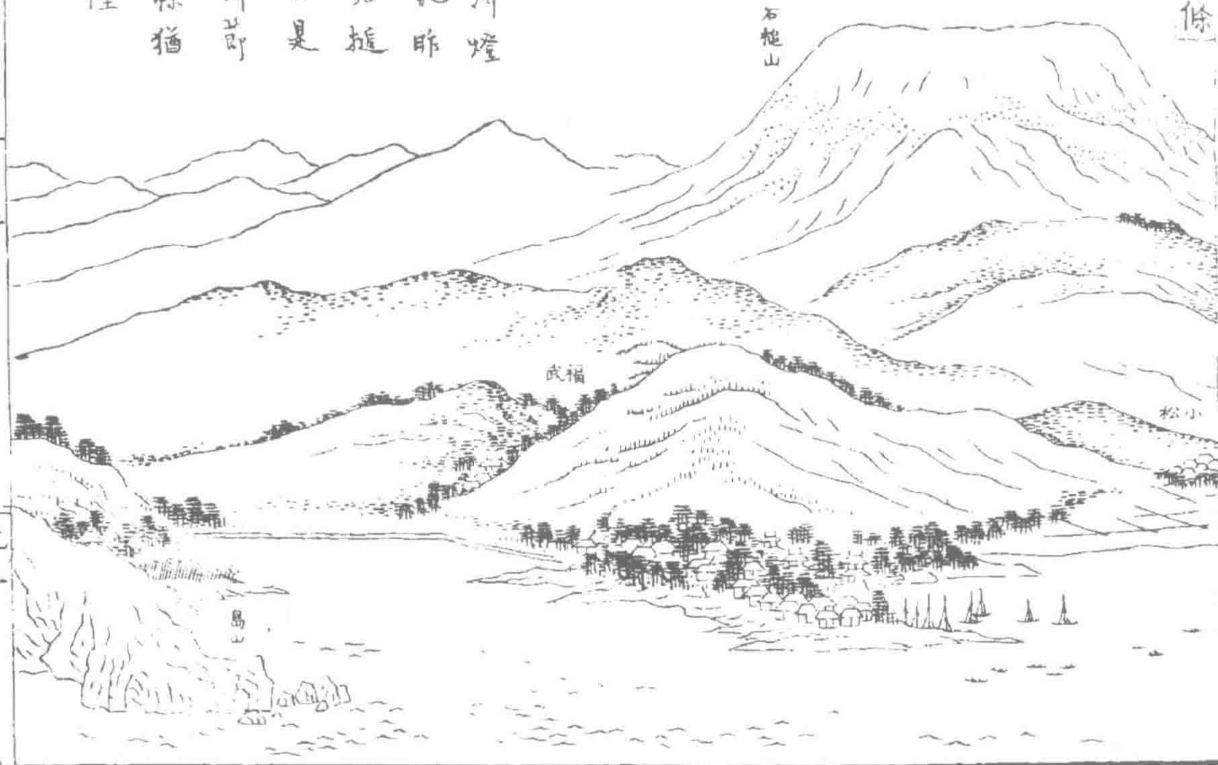


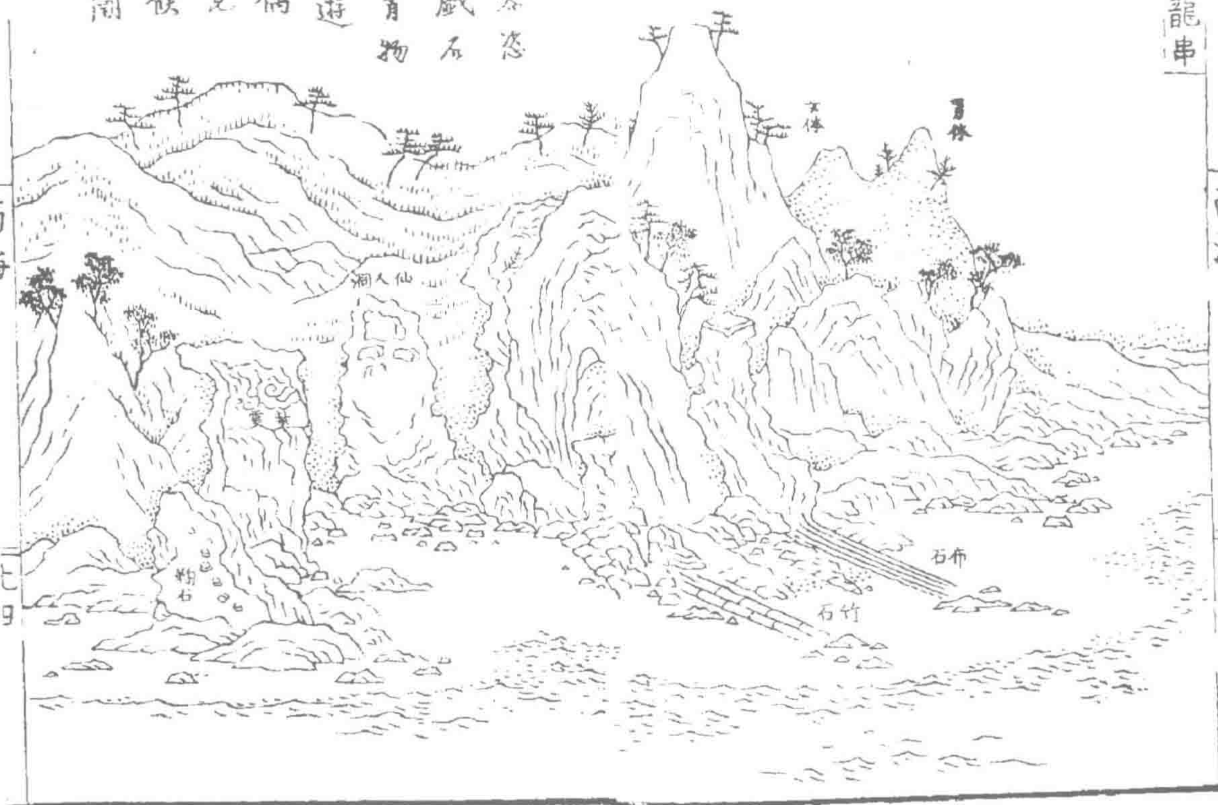

讃岐姫濱
伊豫川江
和田松原

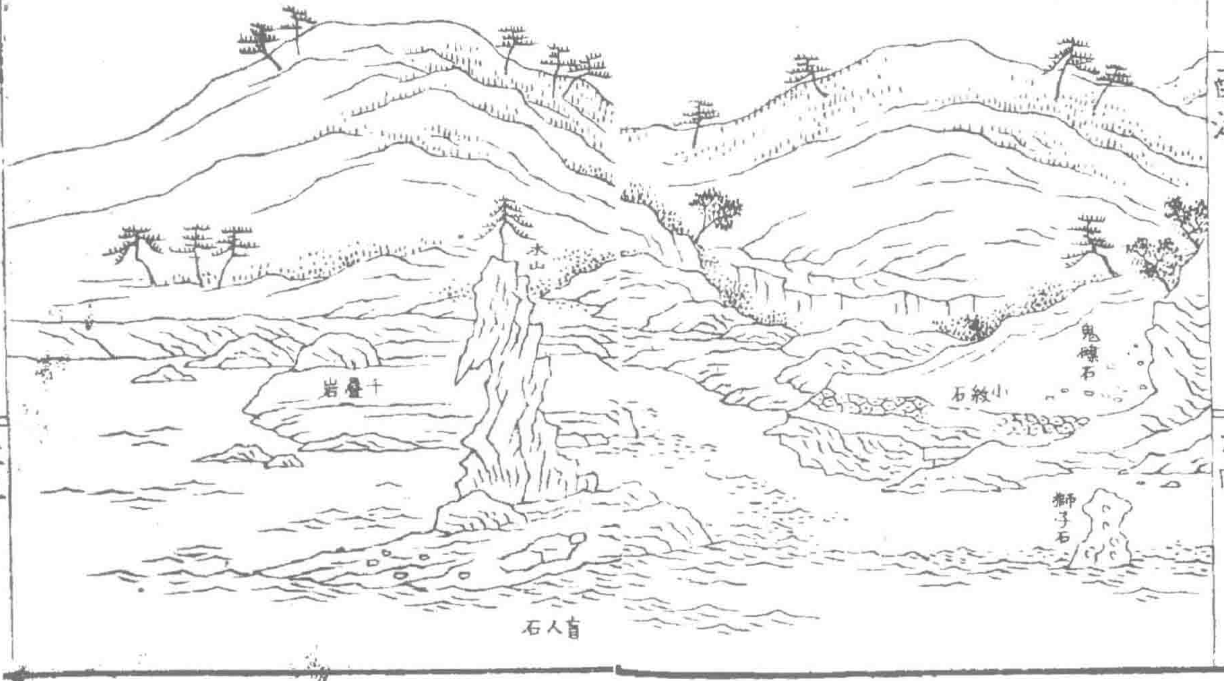

小豆島毘沙門洞
大日堂
大師堂


豐島宮狹門
風死帆無力
篙移影更遲
停舟白鷗外
暫待暮潮回
加良戶浦


伊豫御圻
只說鳴門險
誰知此處艱
怒濤當面碎
峻石到多攢


伊豫西條
人歸燈
下説昨
上石槌
山正是
試絹節
重縣猶
覚慳
石槌山


土佐龍串
化窓恣
遊戲石
形肖物
奇遊
人偶
來見
多候
思闊
時
女体
男体


土佐龍串　其二
有球何
可哀者
布豈帳
衣縱被
狻猊怒
免遣鬼
礫圍
水山
十疊岩
小紋石
鬼礫石
獅子石
盲人石

西海奇勝

旭江先生著景縮圖

日本勝地山水奇觀　全部十二冊

前編　山陰山陽　南海西海　四冊　出来

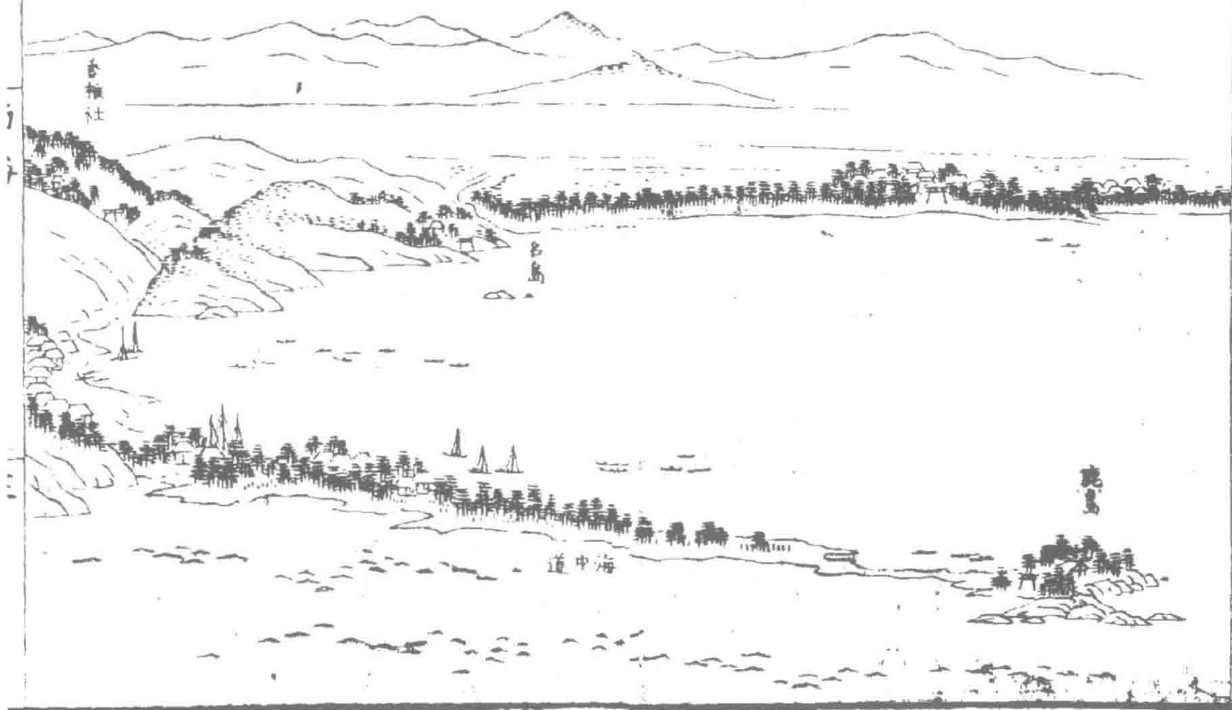
續編　五畿東海　東山北陸　四冊　嗣出

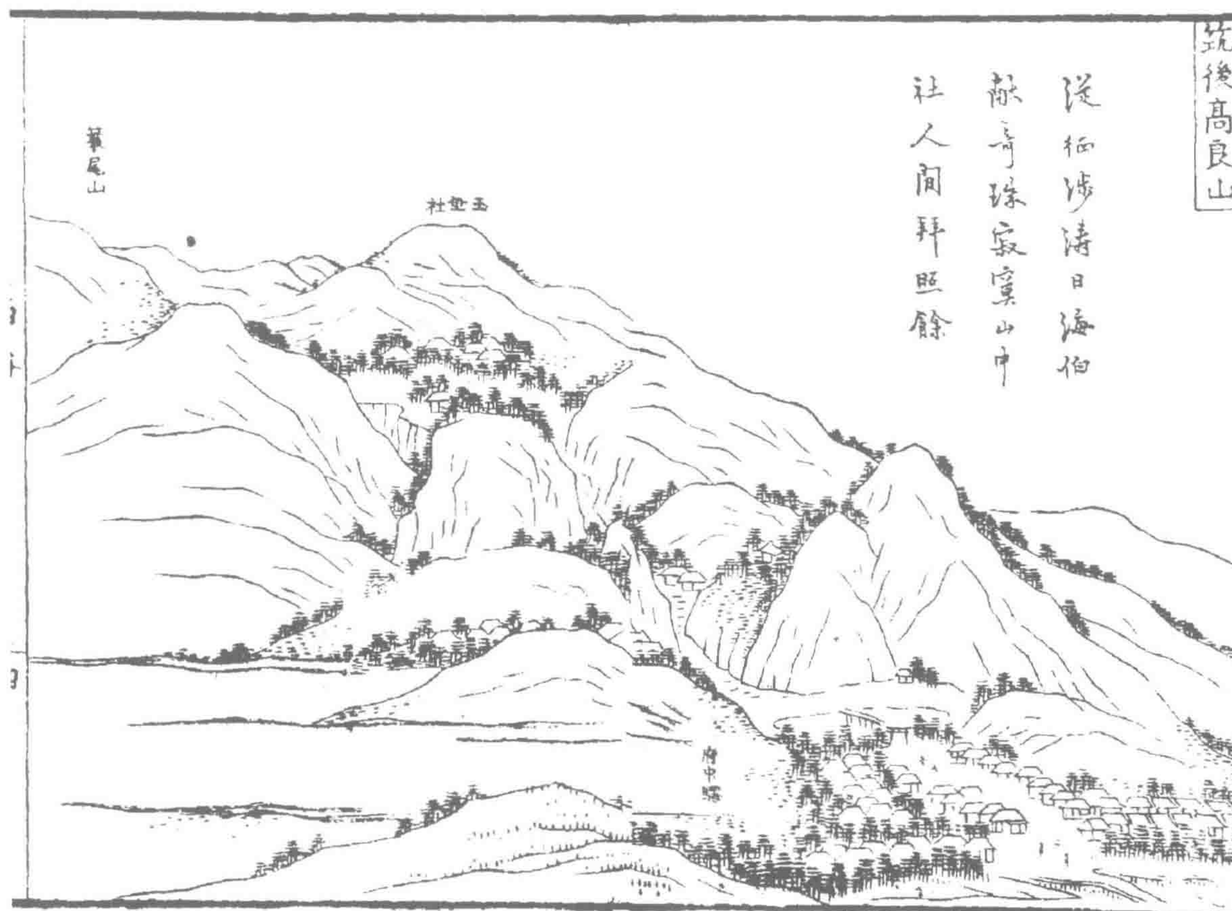
拾遺　五畿七道　合輯　四冊　近刻

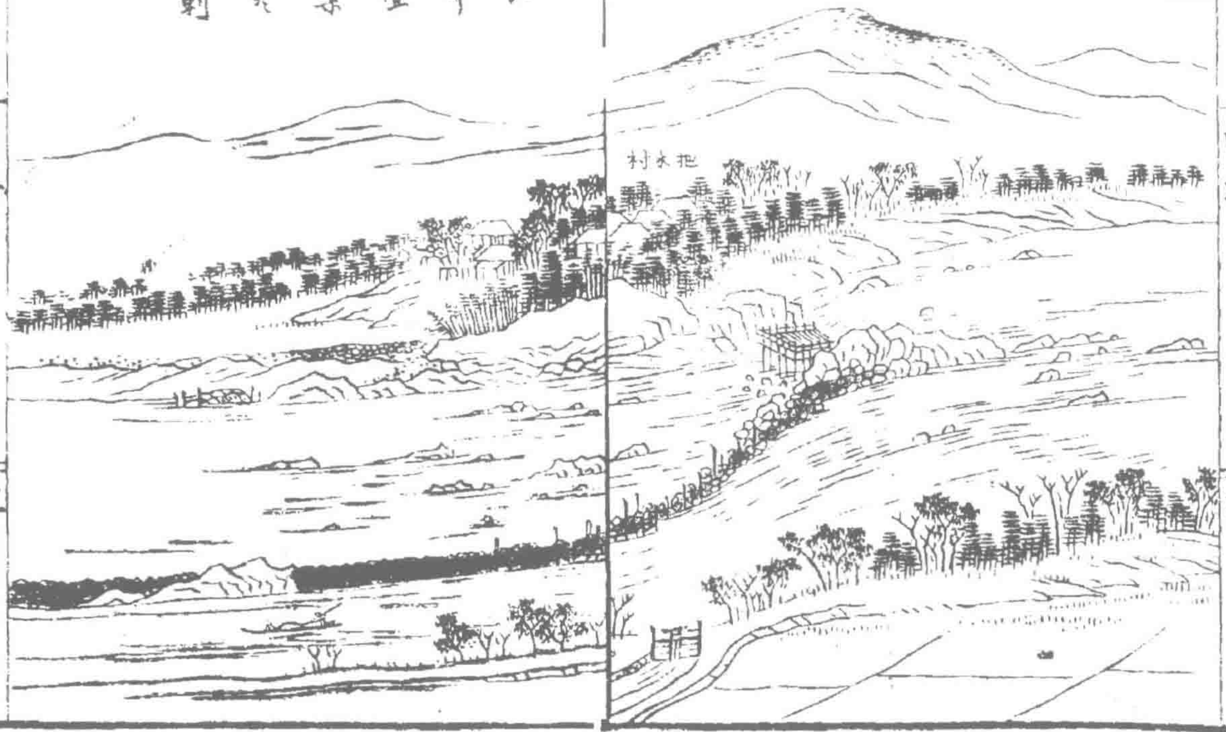
筑前生松原

蒼然松韻
声滿面前
叙多浪起
淒乎萬近
帆勢帯過

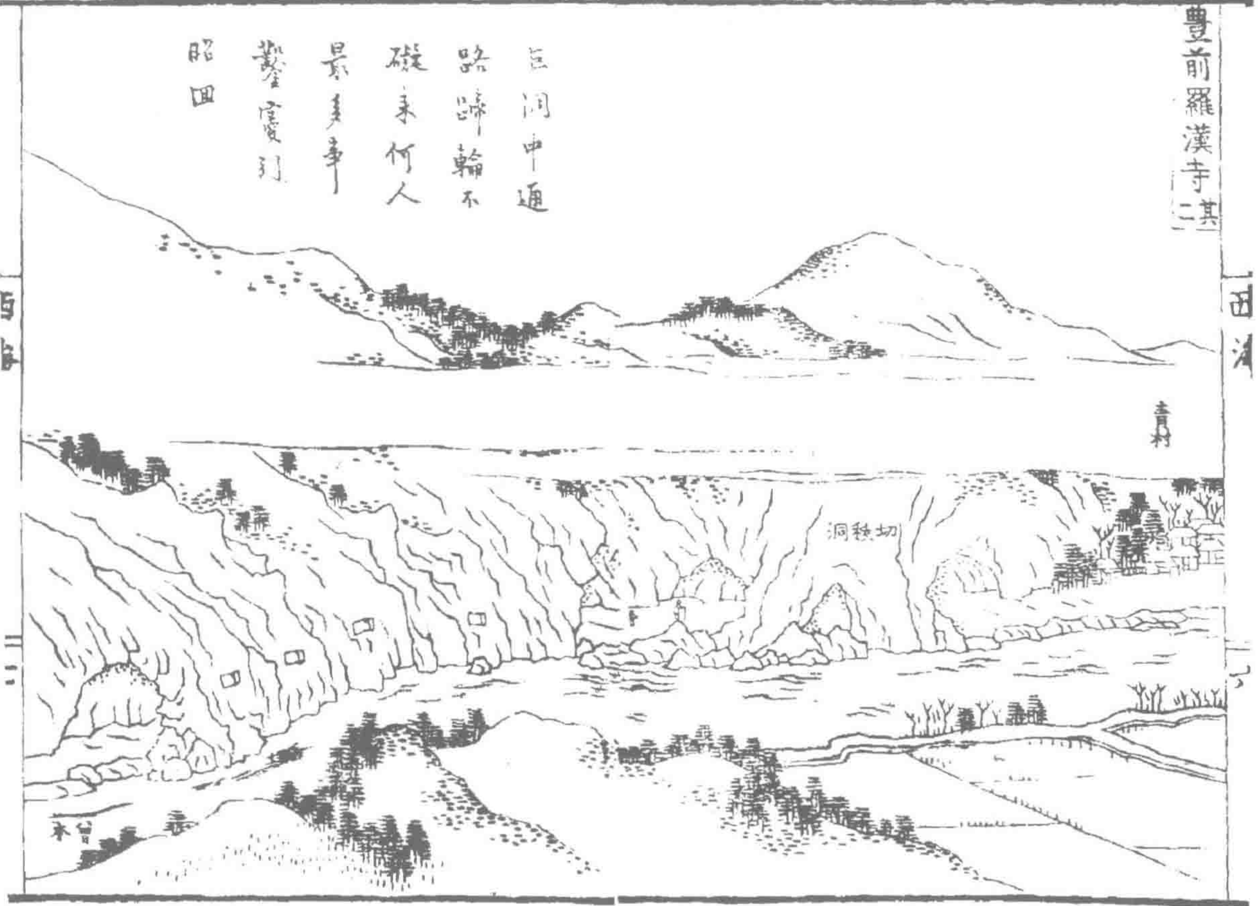


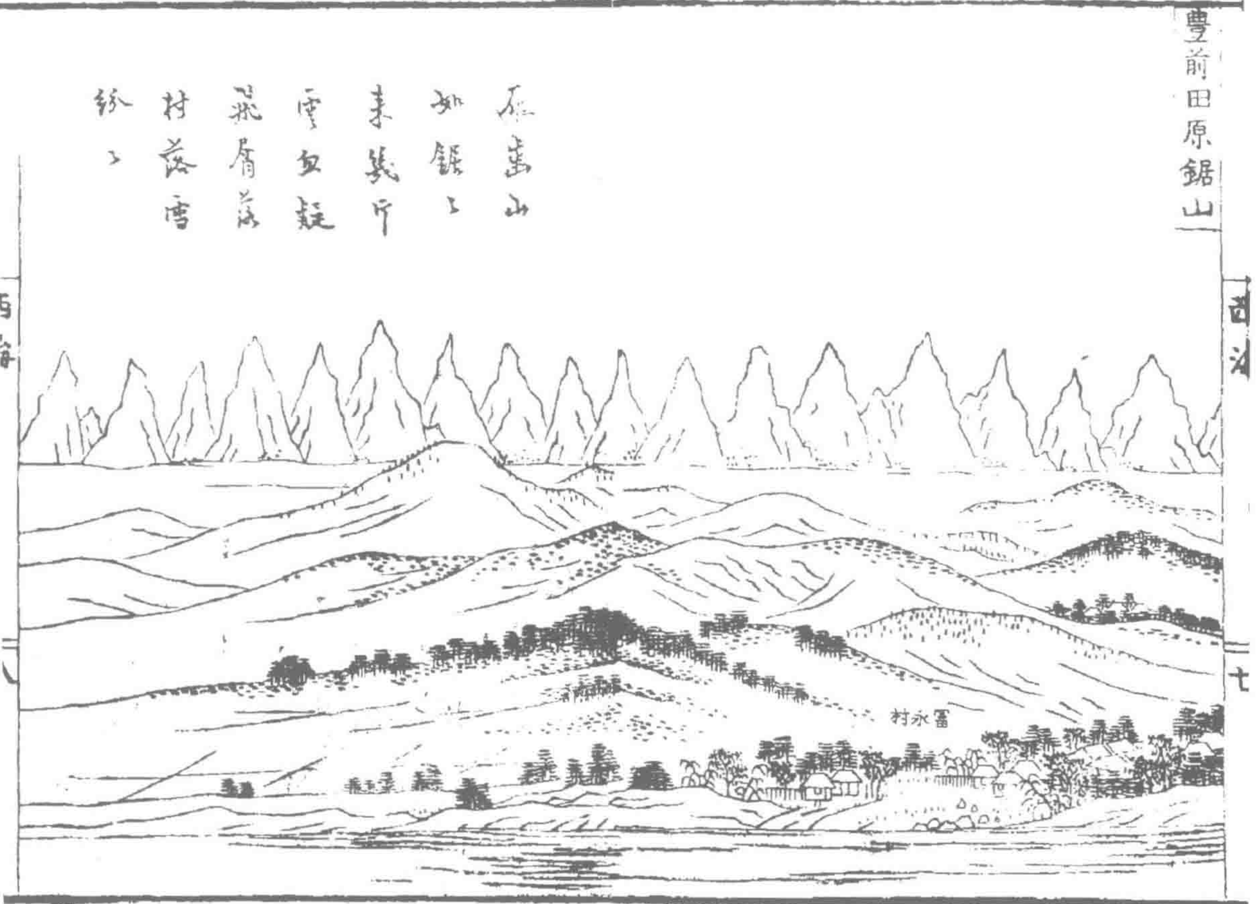

筑前筥崎
幾處春
松好天
橋底三
保滿帆
筥崎寄
又被畫
圖悩
香椎社
名島
海中道
西海

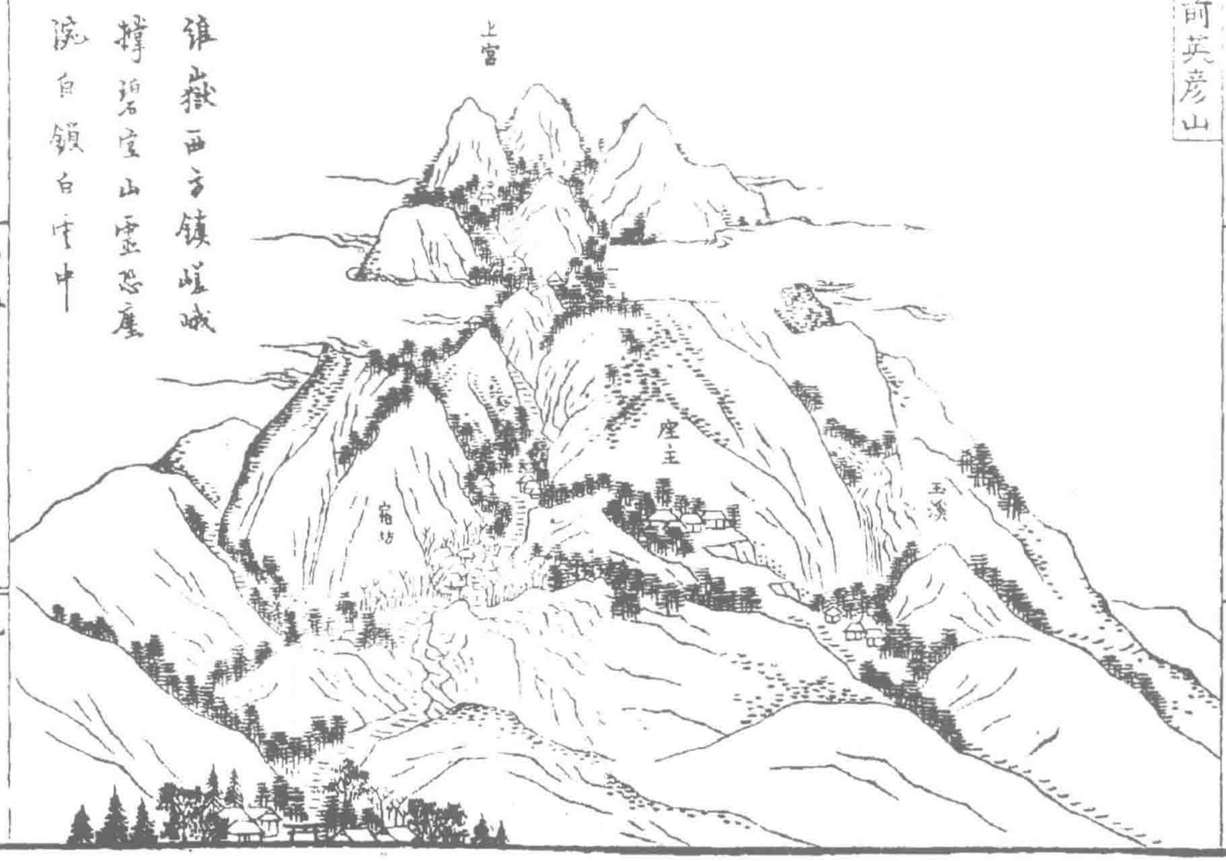

筑後高良山
從栖涉濤日海伯
獻奇珠寂寞山中
社人間拜照餘
玉垂社
府中驛
西海

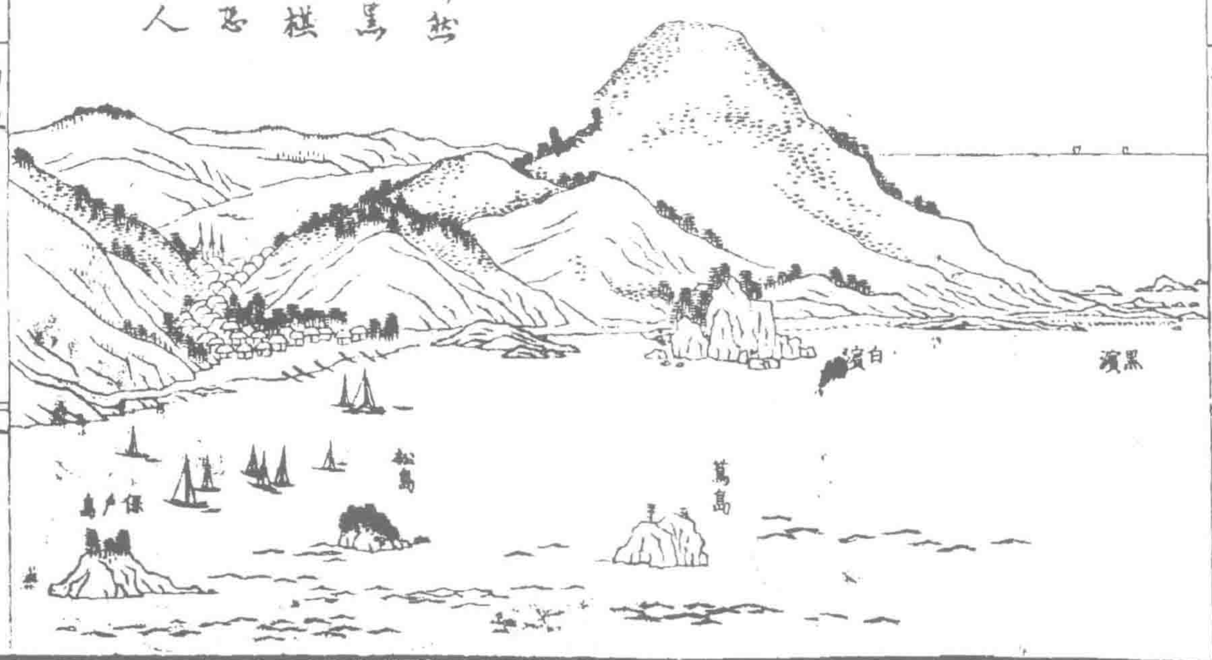

筑後簗瀬
枇水村

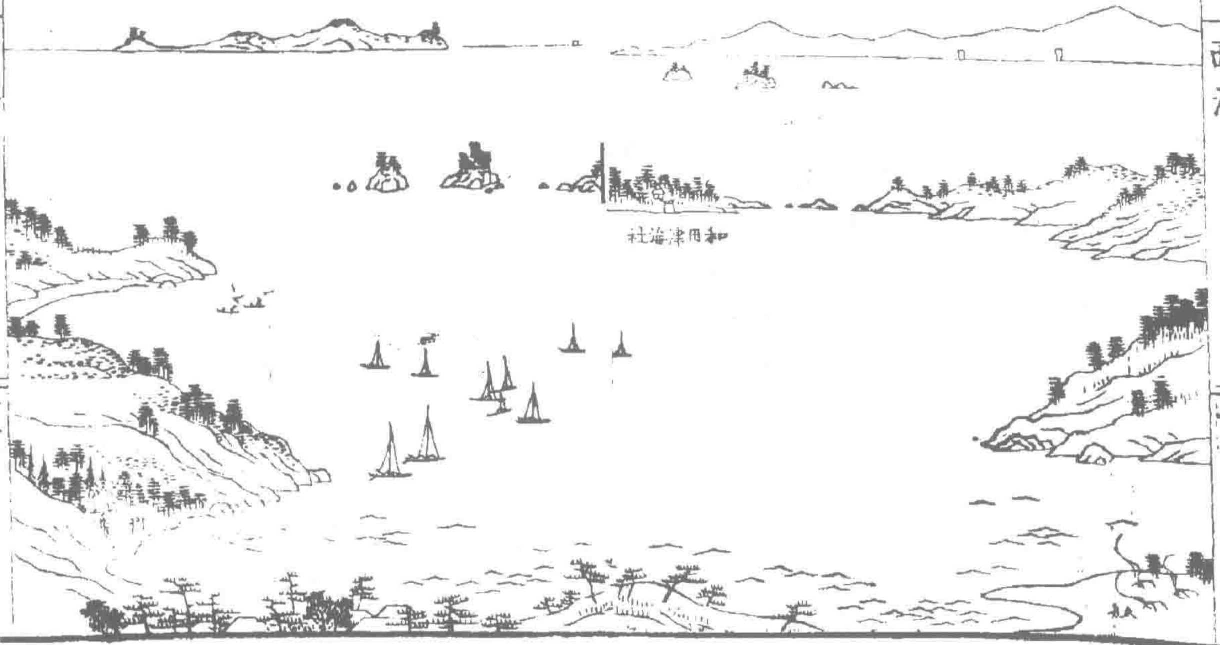

豊前羅漢寺
拈花嶺
石梁
摩尼殿


豐前羅漢寺其二
冨永村


豐前田原鋸山
冨永村

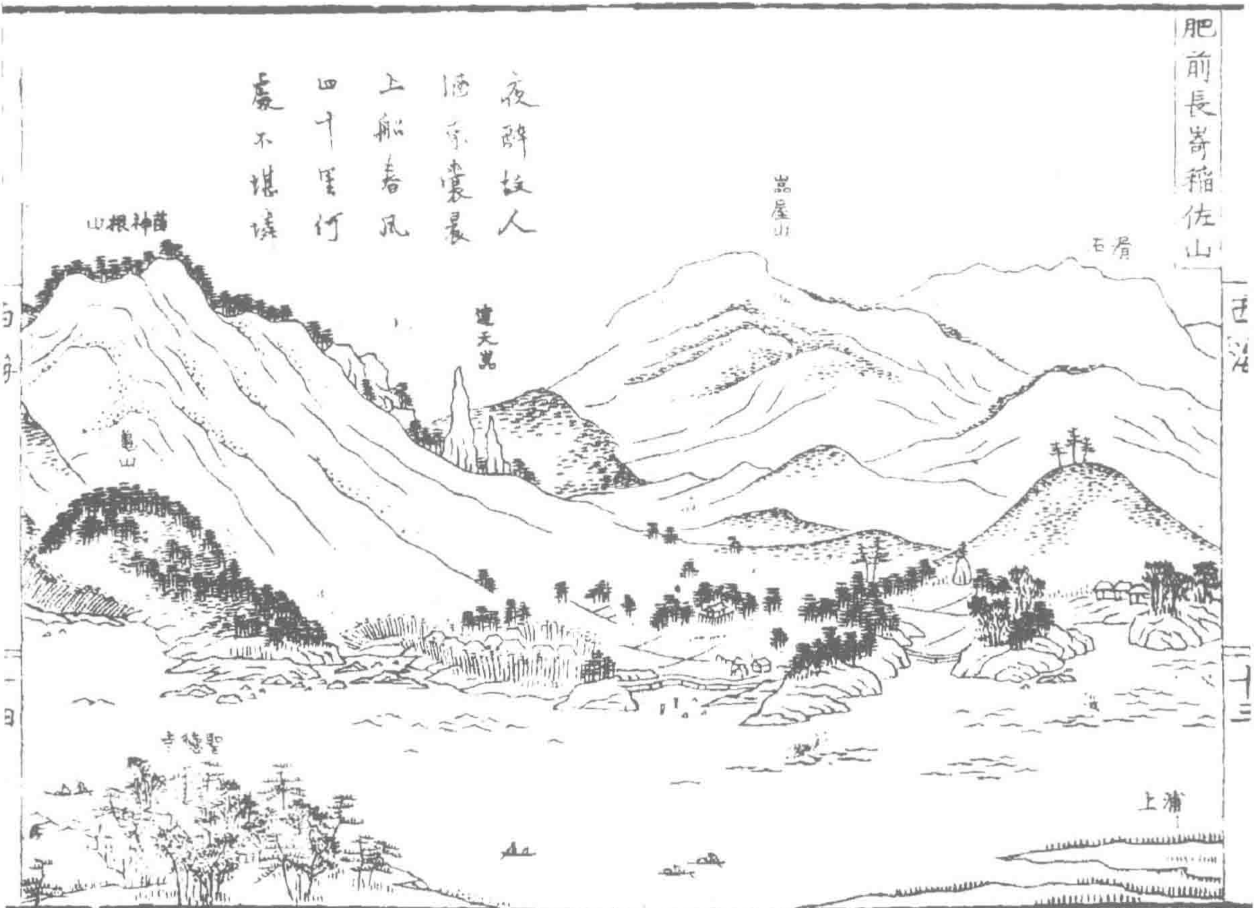

豐前英彦山
雄嶽西方鎮崔嵬
上宮
座主
玉溪
宿坊
西海

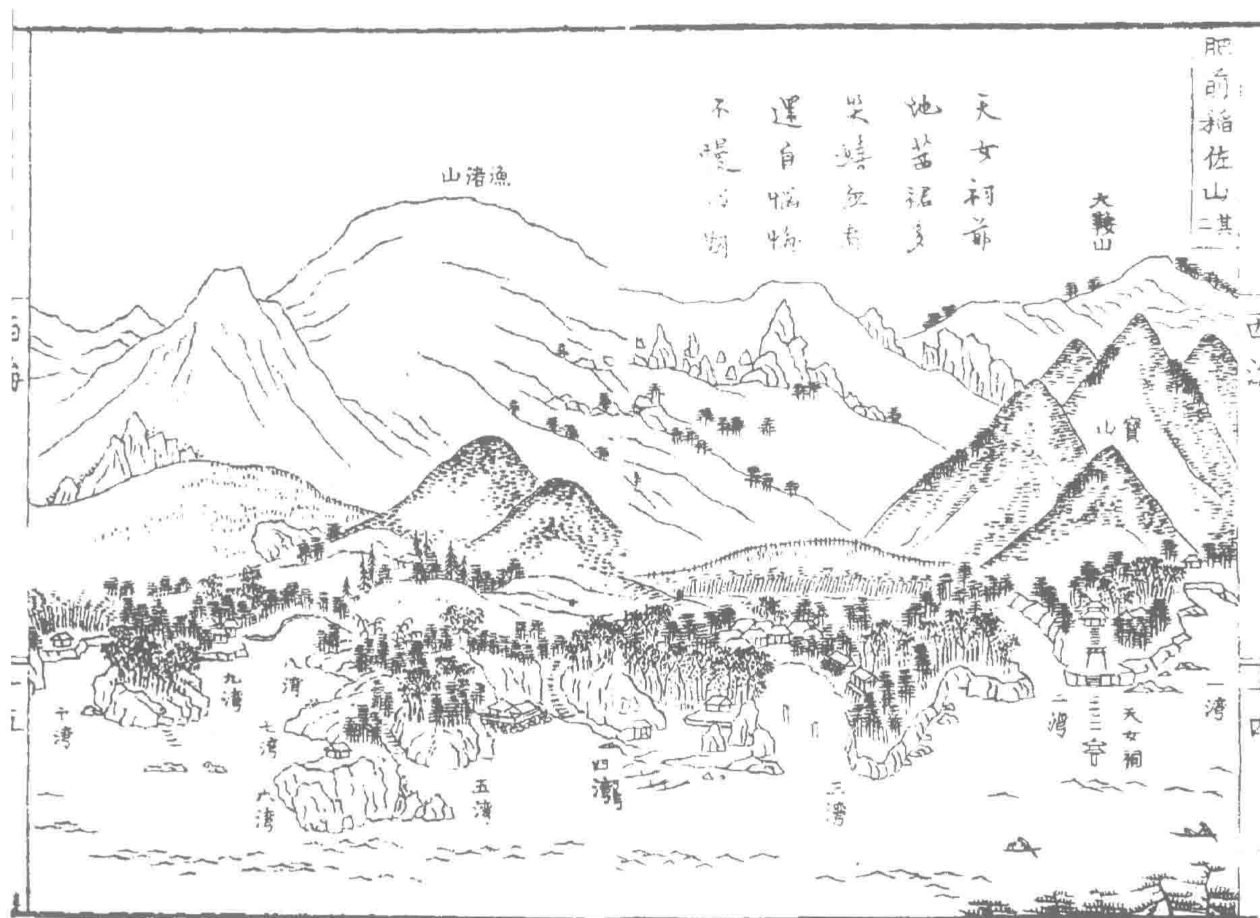

豐後佐賀關
妙造渾然
白濱
黒濱
松島
鵜島
保戸島
西海


豐後臼杵下江
鹽烟薄
籠浦南
檣集晚
置小舟
忽擺去
乞水向
人家
和田津海社

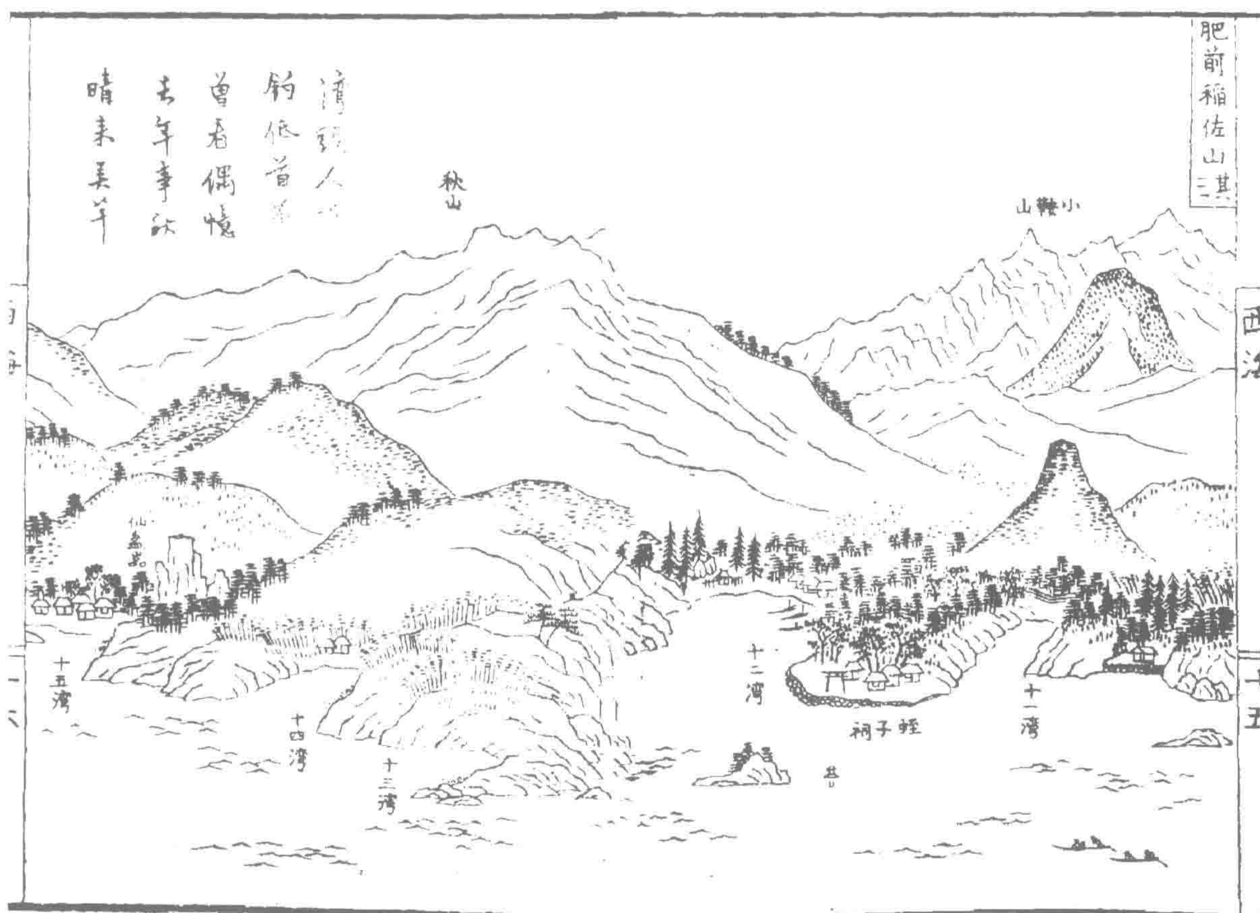

豐後蓑崎
夜泊那
郭々潮
聲落月
遲如何
家夢短
不直半
炊時
妙見山
大隅
小隅
荒手山


豊後日田釜淵
巖際泉迸落雪頭處々渦欲流々不得幾度轉回過
高瀬村


肥前長崎稲佐山
夜醉故人酒家裏晨上船春風四十里何處不堪墳
箱根山
岩屋山
普天岩
聖福寺
上浦

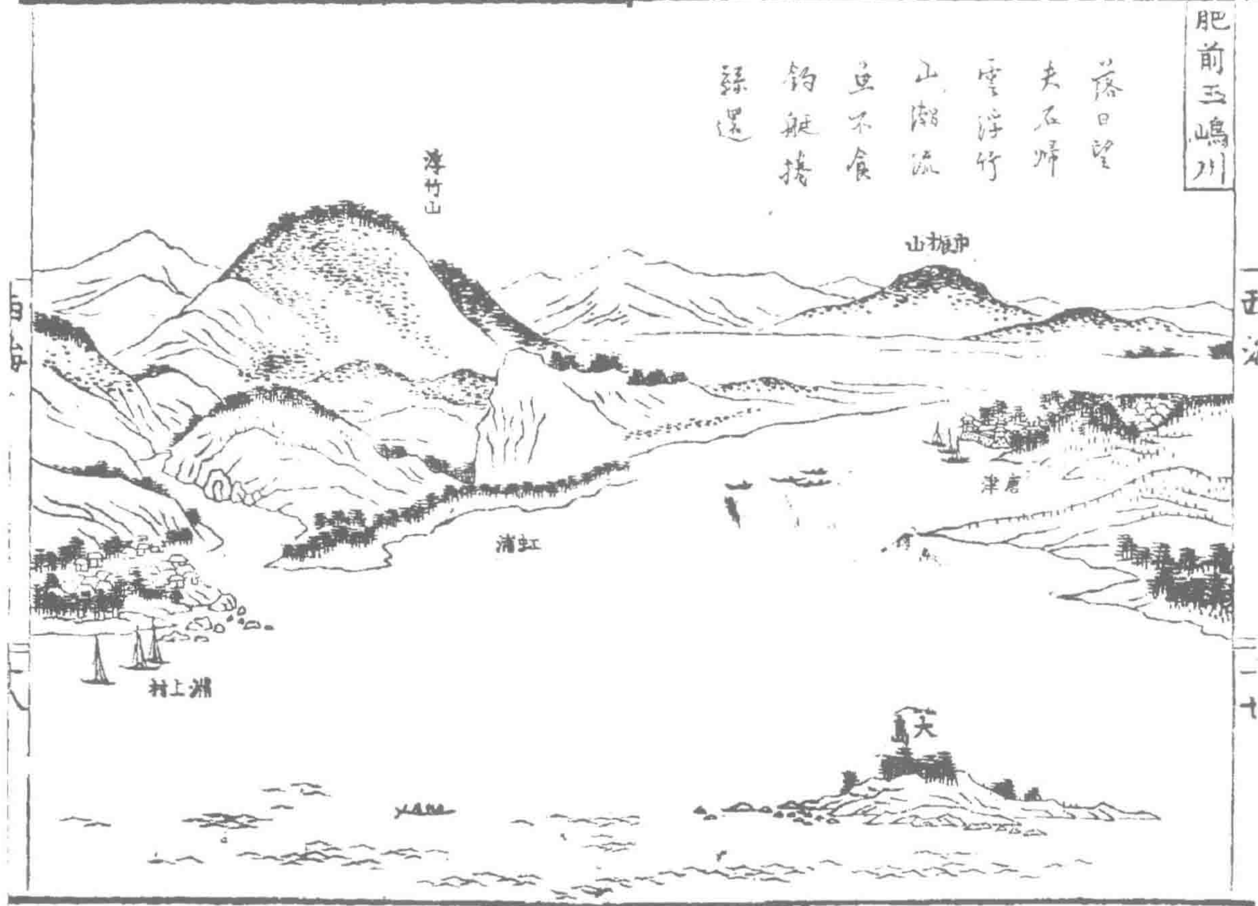


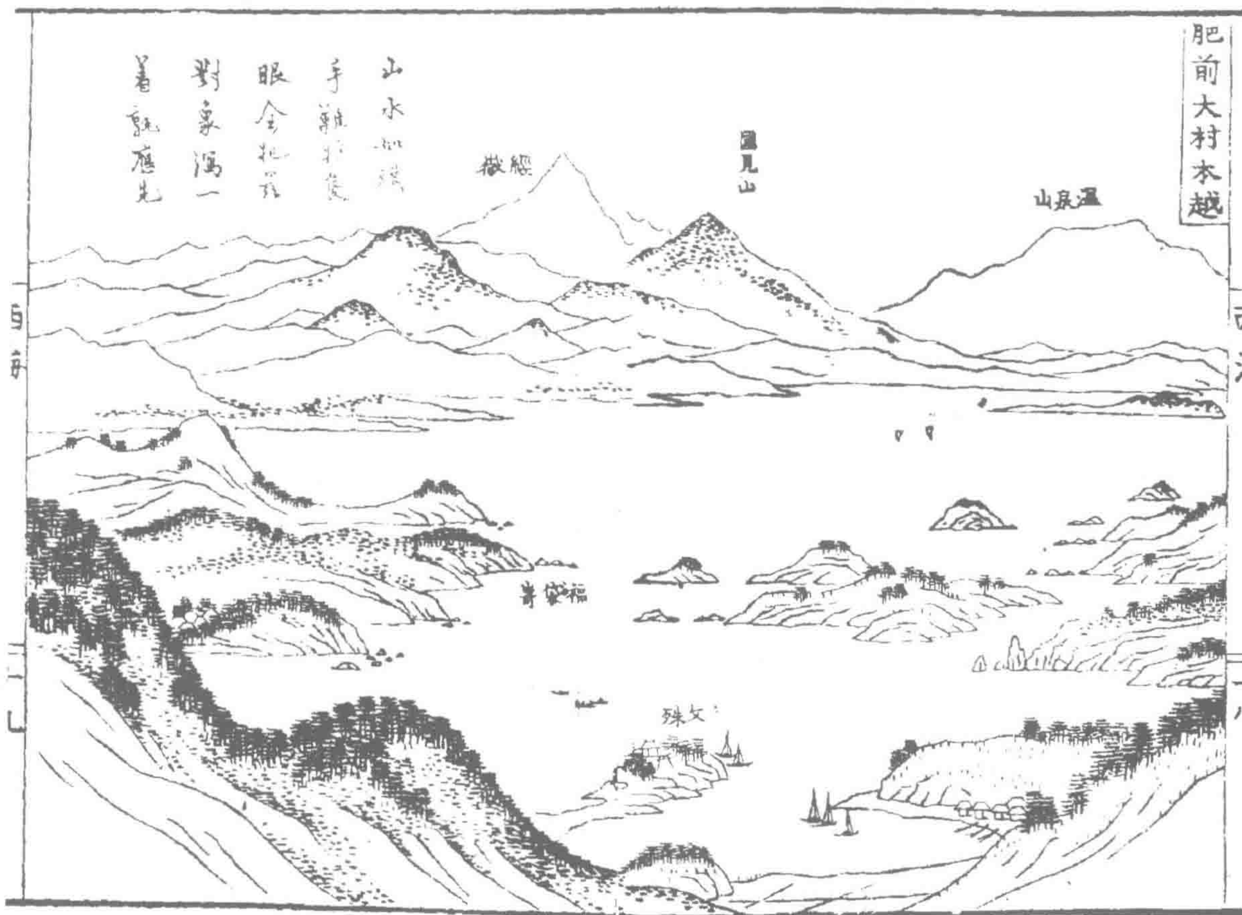
肥前稻佐山其二
漁渚山
大鞍山
寶山
天女祠
一灣
二灣
三灣
四灣
五灣
六灣
七灣
八灣
九灣
十灣

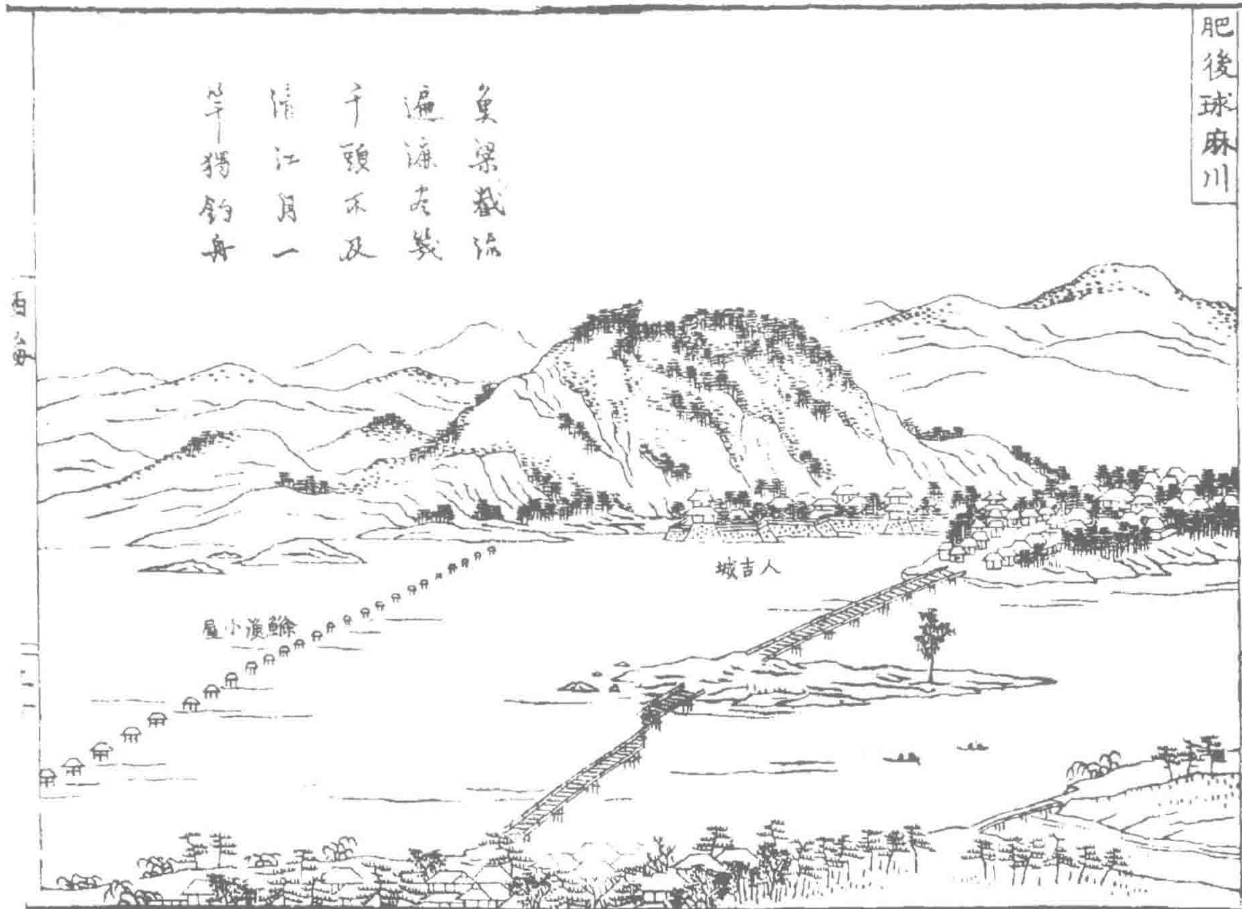


肥前稻佐山其三
秋山
小鞍山
十五灣
十四灣
十三灣
十二灣
十一灣
蛭子祠


肥前稚佐山 其四
湾々送
懐盡稍
到尾湾
逆山色
渓前則
不堪却
望多
天門山
十八湾
十七湾
十六湾
小蔵山


肥前玉嶋川
落日望
夫石帰
雲浮竹
山潮流
魚不食
釣艇捲
録還
浮竹山
唐津
虹浦
淵上村
大島


肥前大村本越
温泉山
文殊


肥後球麻川
人吉城


肥後阿蘇山
一看應無錯好
峰學博山何人
補香得烟篆不
曾閑
休所
本坊
本社


日向飫肥大島
傾山雪浪
白風峭御
帆難好浦
如意每入
懷分外安

日向飫肥大島 其二

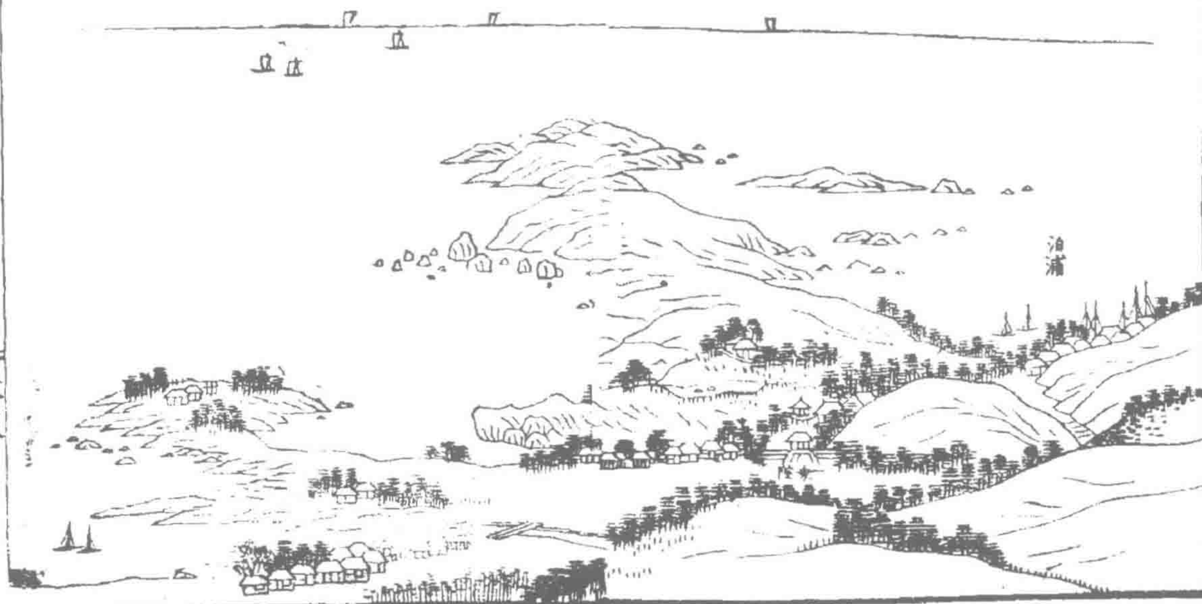
正是晚炊鷄
推篷喚釣船
罾新魚尚活
得意不論錢

大隅櫻島

地踞中山近
人乘馬艦來
落帆停浦口
看去嶋烟移

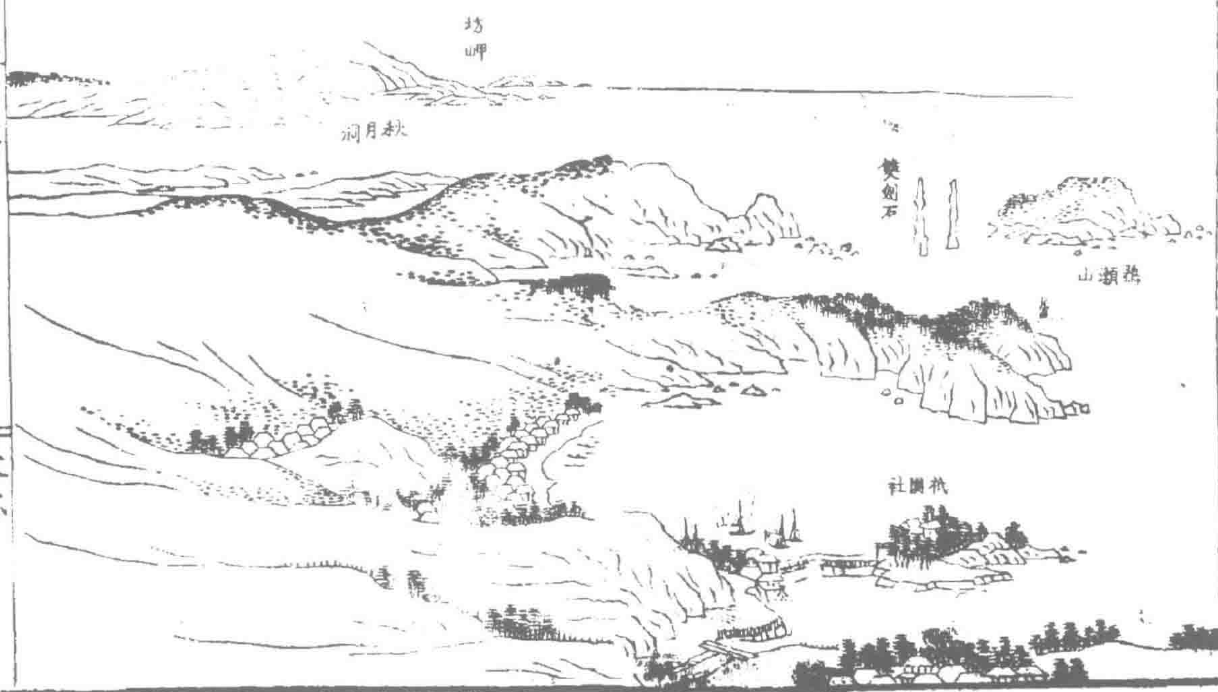
薩摩坊津

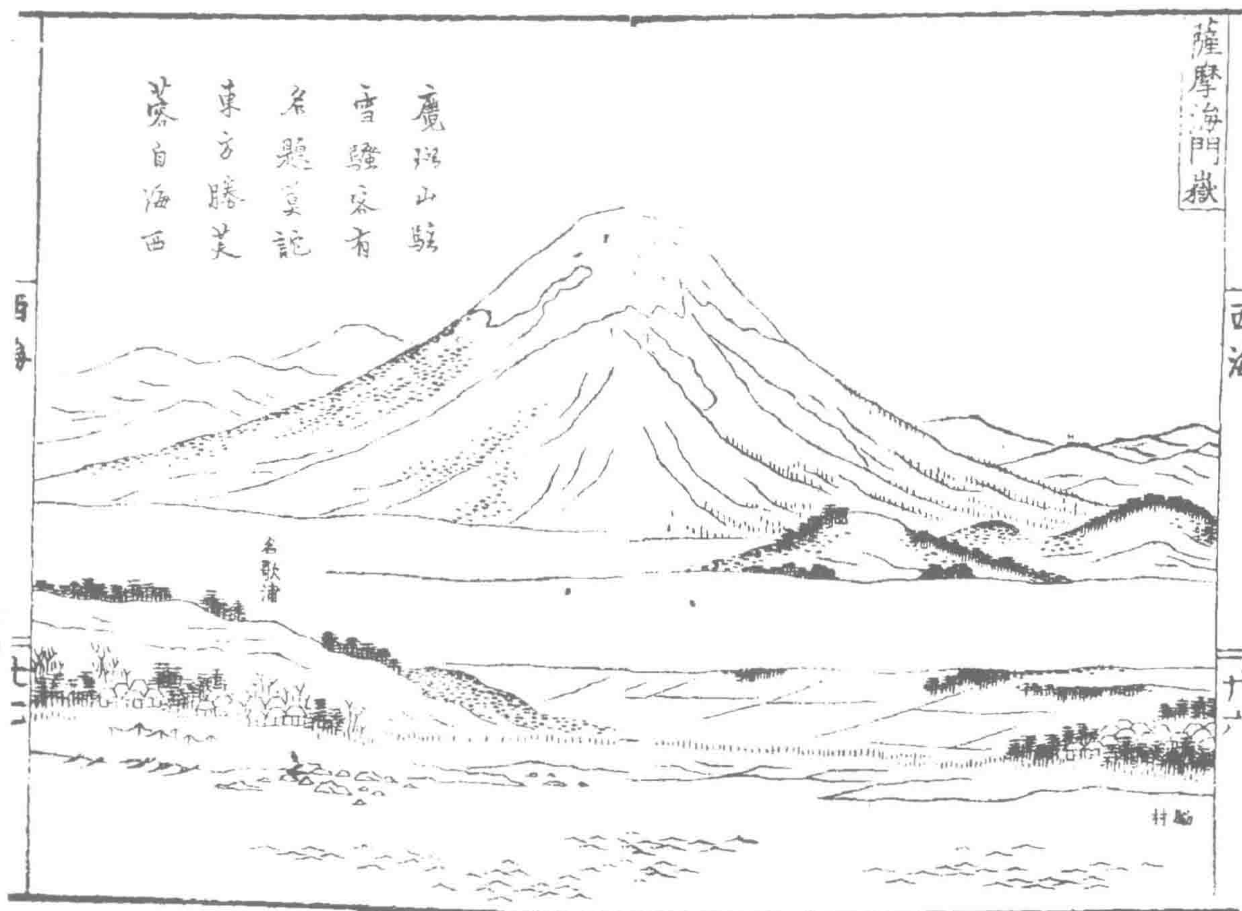
鵜頭巖右系寺畔望来奇畫納多濃墨爲極此中矣



薩摩坊津 其二

予聞如秋月海々露始空扁舟直穿過似形向蟾々




薩摩海門嶽
雪巔容有
名騷莫記
東方勝芙
蓉自海西
名歌浦

關口隆正 著

日本形勝叢談

明治三十六年（一九〇三）京都鉛排本

據明治三十六年（一九〇三）
京都鉛排本影印

探勝談古

明治壬寅冬日

霞山　近衛篤麿

日本形勝叢談序

國之有體猶家有其風歟蓋士家自有士之風農家自有農之風商家自有商之風巫祝道僧自有巫祝道僧之風故巫祝道僧之風不可以施於工商之家工商之風不可以行於士農之家士農之風不可以移於工商巫祝道僧萬國皆有所建之體所習之俗以成一大聚域故其言語不同好惡自異猶農商百家各殊其風是皆自然之勢而不可彊焉耳我皇國獨立東海之表建國之體夐絕萬國風俗之美夙稱海外古先王猶不自足也嘗取諸韓取諸隋唐以潤飾文物典章而建國之體愈鞏風俗之美益著明治中興百度維新更取法於泰西以賚昭明之治於是乎唱漢學者喜西籍者各從其所好浮慕冥信至於欲舉國體風俗而摹倣彼是徒見人之財而欲用之見人之田而欲耕之而不知我之田之財更有愈於彼者也是關口士播之所以有此著乎今讀其書先述國體國號國疆等事以至各地名勝且徵諸和漢典籍照諸士僧遺蹟以擴充其義國體之所關風俗之所存悉發揮而闡開之反覆丁寧如手提之而口授之其嘉惠後進裨益東亞者可知矣頃者介吾友八田君允卿請序余嘗一與士播相見于鴨川之上乃嘉其志叙而還之

明治卅五年十一月

正三位勳貳等子爵長岡護美撰

敘

頃者無改子來示其著日本形勝叢談請予題言以不文辭弗聽曰不肖嚮獻山田長政傳謬蒙稱賛乃今不能然乎因語之曰予家世居駿府長政嘗贈暹羅盔於我高祖以傳子孫予幼時父老每指之云我邦民臣而爲海外國王者獨有斯人耳汝能記之既長涉獵內外書史頗識偉績奇功然或以爲伊勢人或尾張人予未之能信矣及讀吾子之傳詳叙其產于駿河之事迹且明當時文部省以及脩史局並稱其博引傍搜精確可證自時厥後凡傳長政者大抵皆無不據于此予也以同其鄉心竊喜之故稱賛焉耳抑予蒞任斯都已閱一年山川風物盡收在於吾心目間矣是此叢談亦使予得喜且賛焉夫猶長政傳之取信於天下乎奈何無改子嬰然而起曰吁是一語而可願錄以弁卷首乃書與之無改子名隆正字士璠關口氏亾友默齋君義子

京都府知事從三位勳二等大森鍾一識

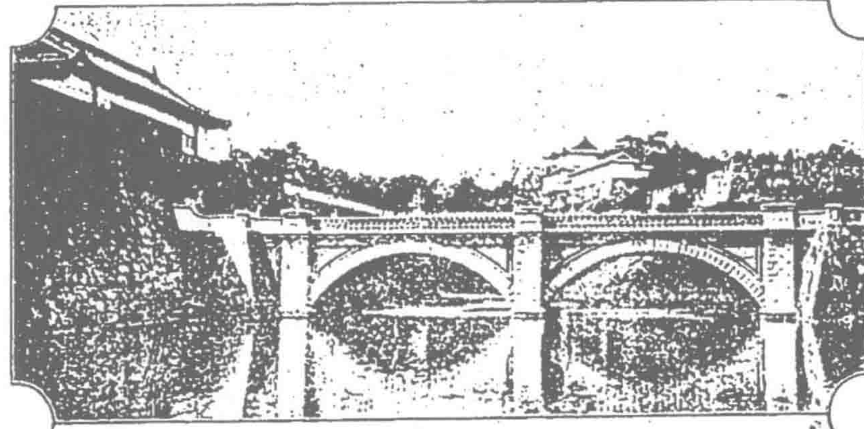
序

泰西諸國形勝之地必有風土記類具載其地方沿革人口多寡疆土肥瘠物產優劣工藝精粗等項以供四方遊客之便故未入其境也先通險夷梗概而後親過山川耳目所觸心會意得感慨於是乎益起矣幽興於是乎益深矣我京都府自有史乘而還山河之形冠於全國矣名區遺蹟無不存焉況於工業之精技藝之美亦莫盛于今日耶近取譬之秦省乎遠望岐山又渡渭水而不知殷周之所以廢興與秦漢之所以存亾則阿房未央之跡於我何感之有霸橋褒城之趾於我何慨之有若夫延安之火油興安之銅壙漢中之密蠟鹿茸乳香等物產捨而不問嗒焉無知輒曰我遊觀秦漢古都矣人孰信其言哉蓋泰西人來游京都歲不下數千人通歐語者能爲東道又著指南之書以計其便宜然余未聞漢譯以須於同文同種之人常以爲憾矣關口士璠頃著日本形勝叢談來請余序余雖未通讀之然信其非尋常地誌之比必爲彼風土記類也乃爲之序時

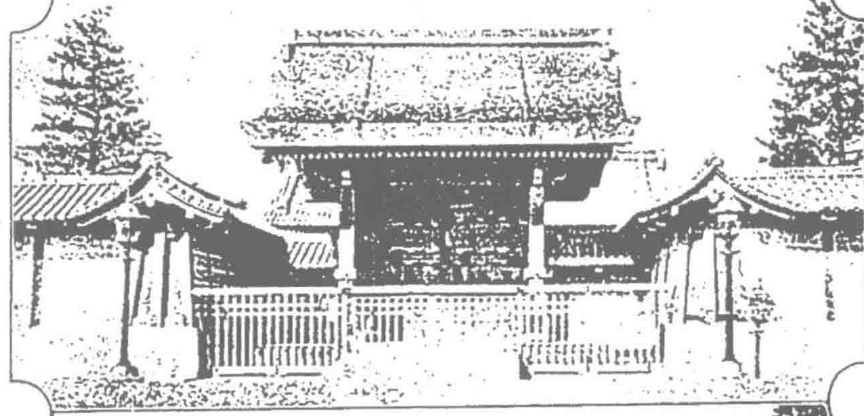
明治三十五年

天長節前一日

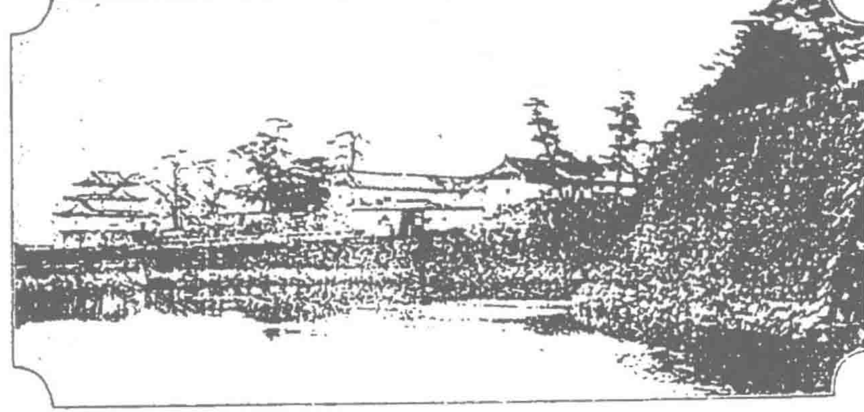
京都帝國大學総長正四位勳三等法學博士木下廣次撰



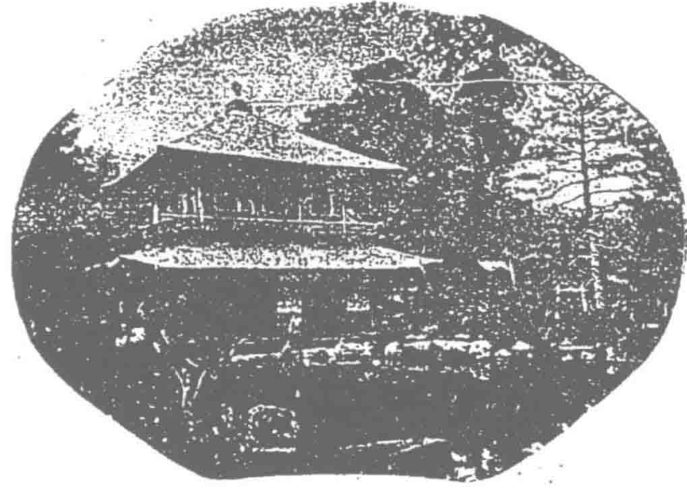
東京二重橋



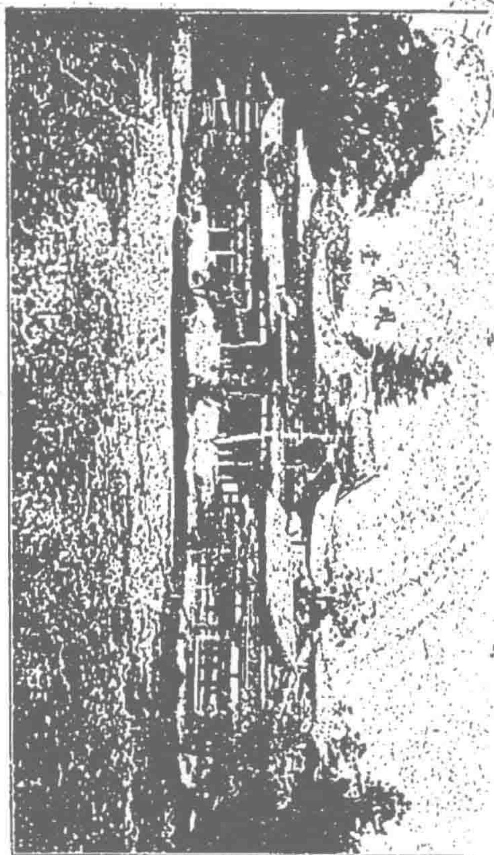
京都御所

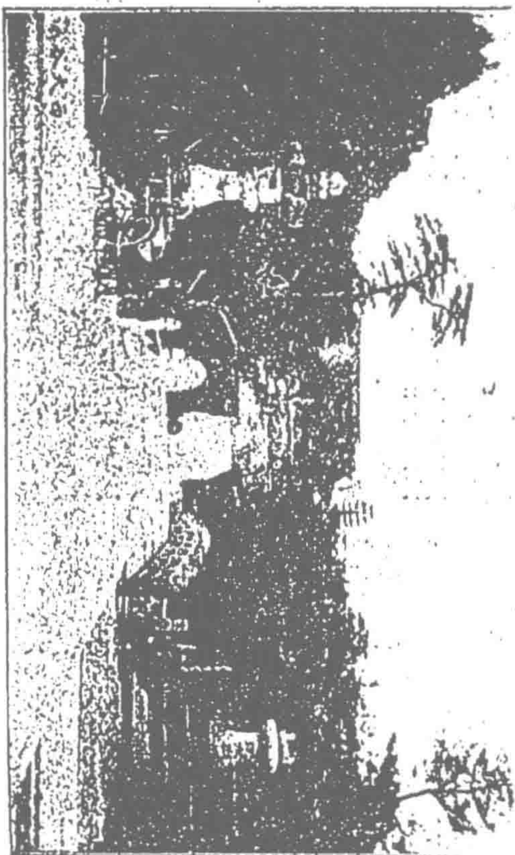


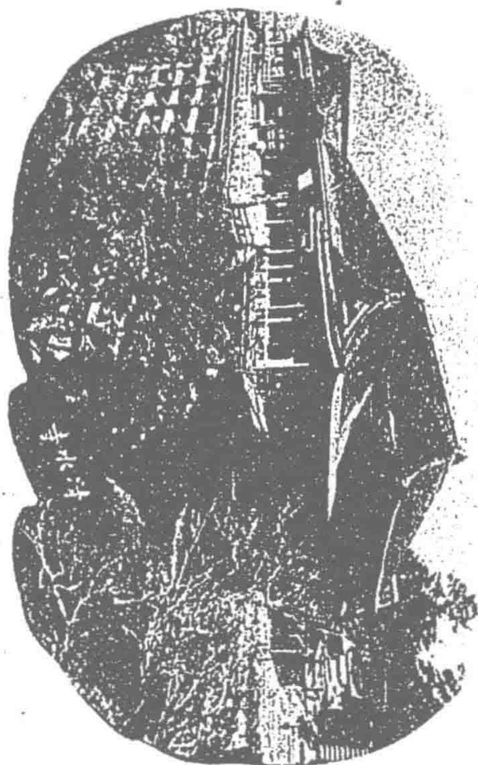
大阪城

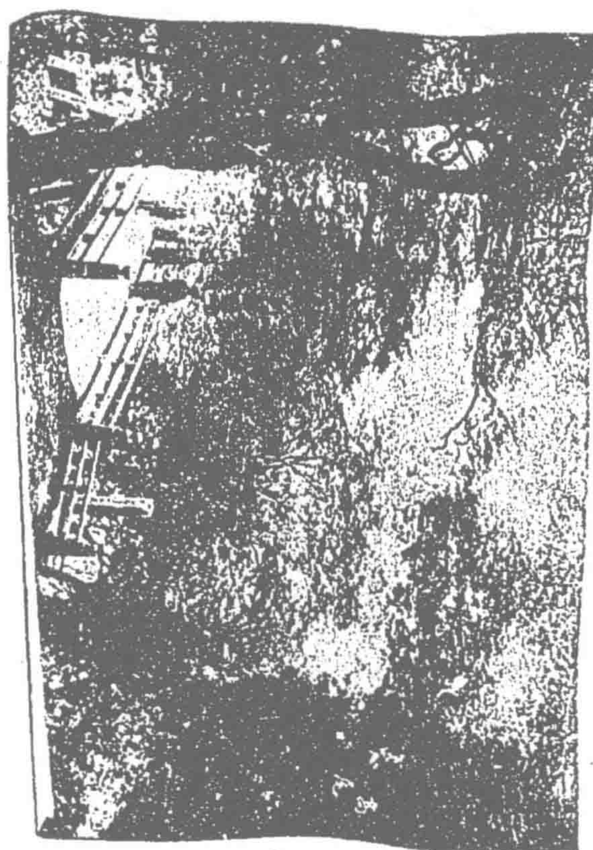


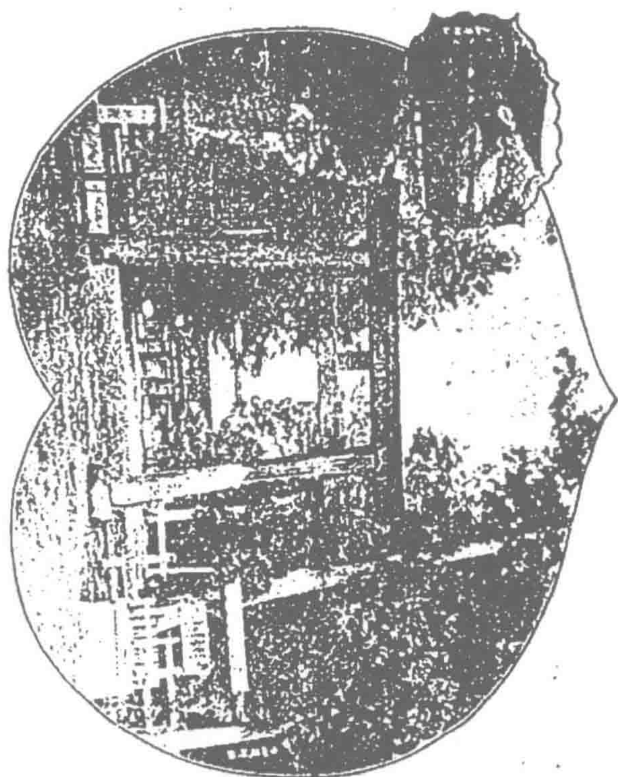


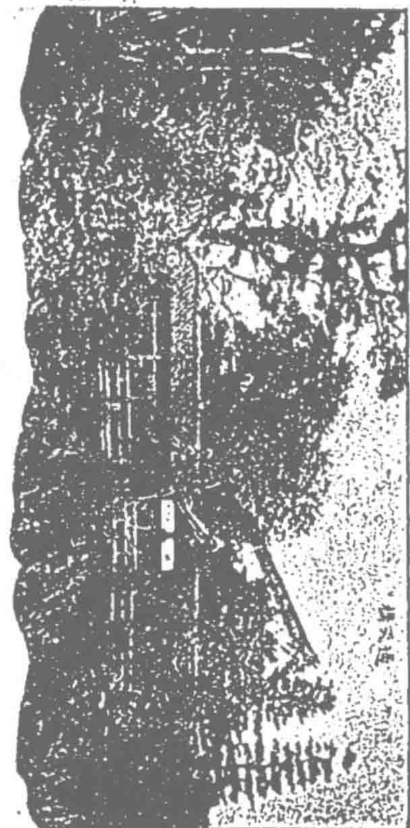




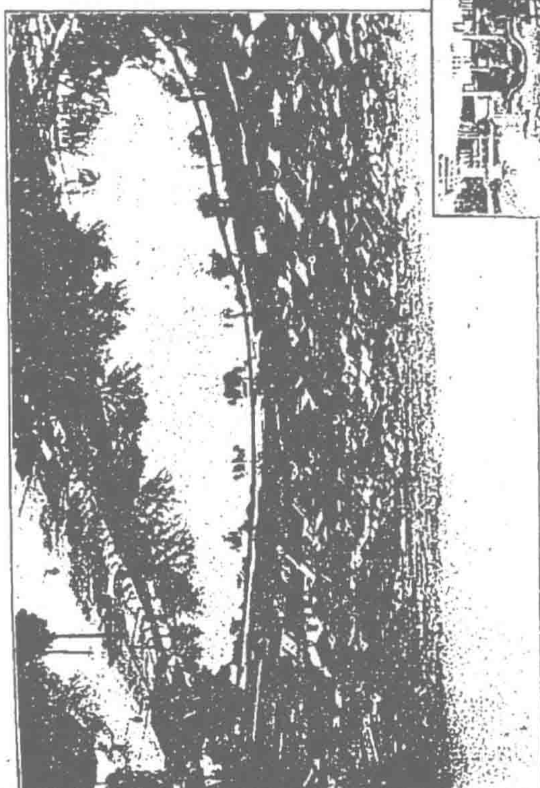


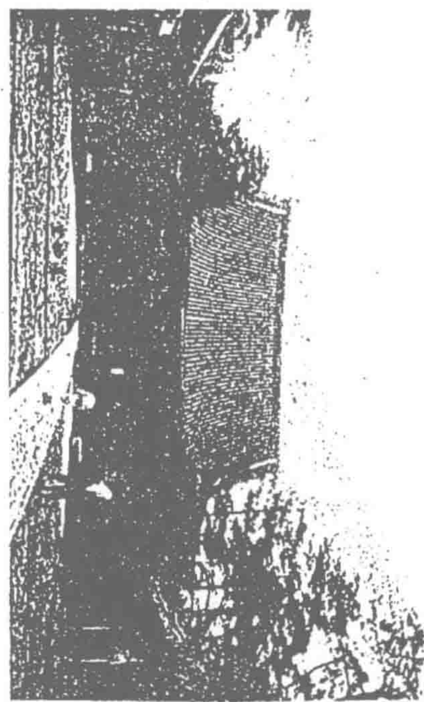






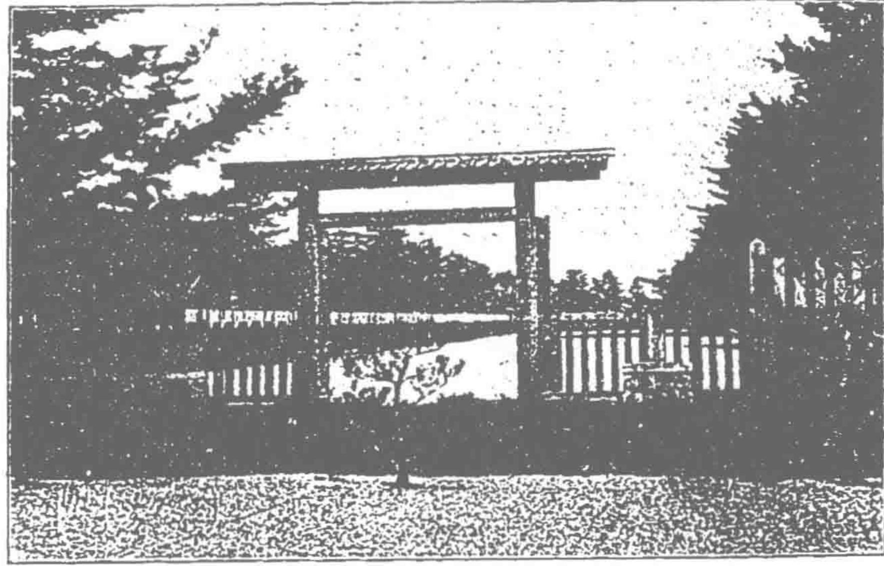




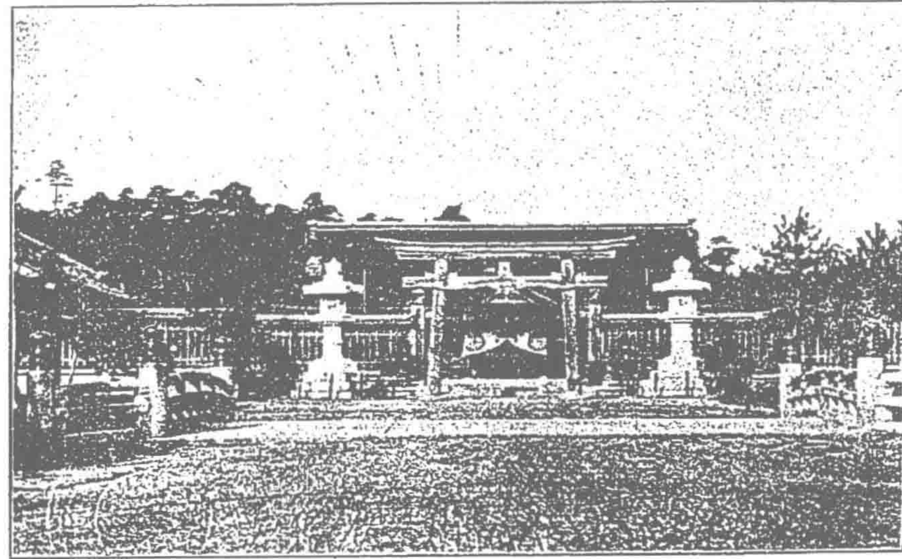


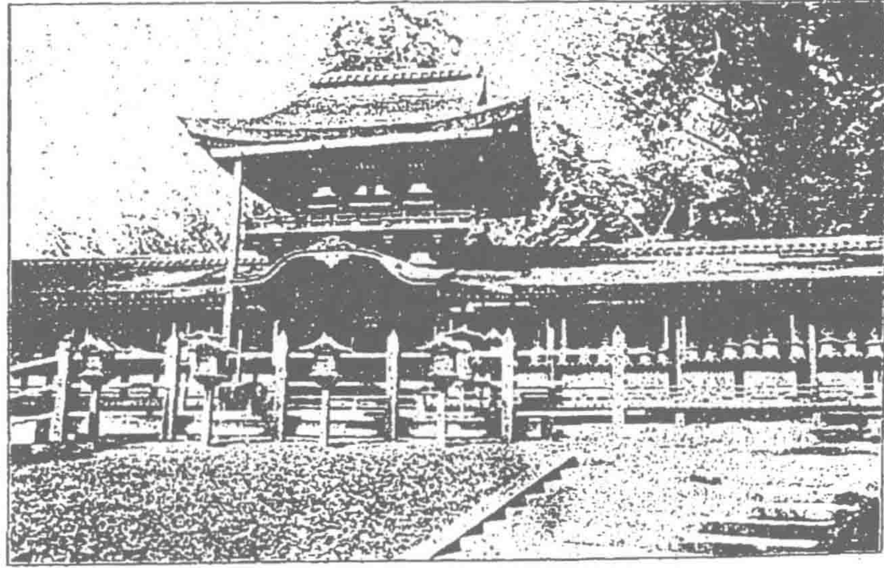
眞如堂

神武天皇陵

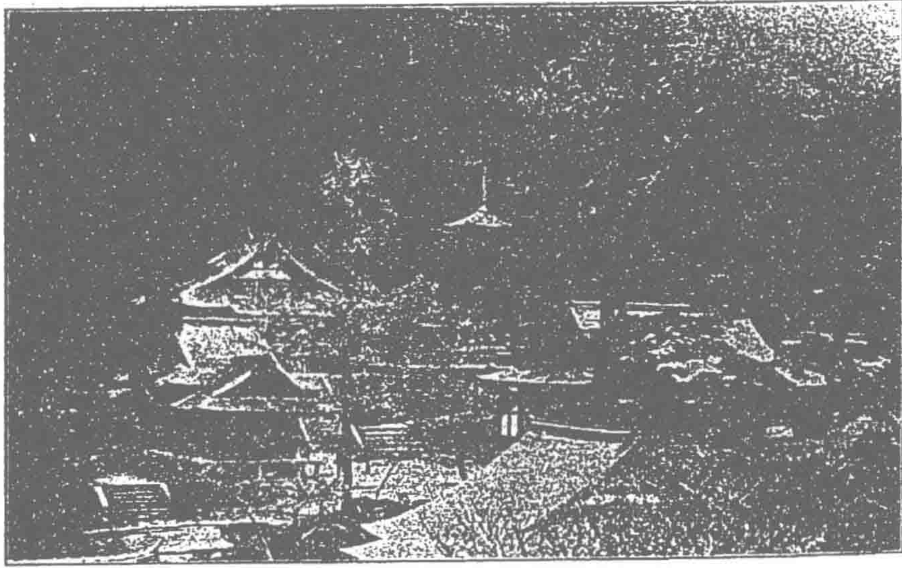


橿原神社

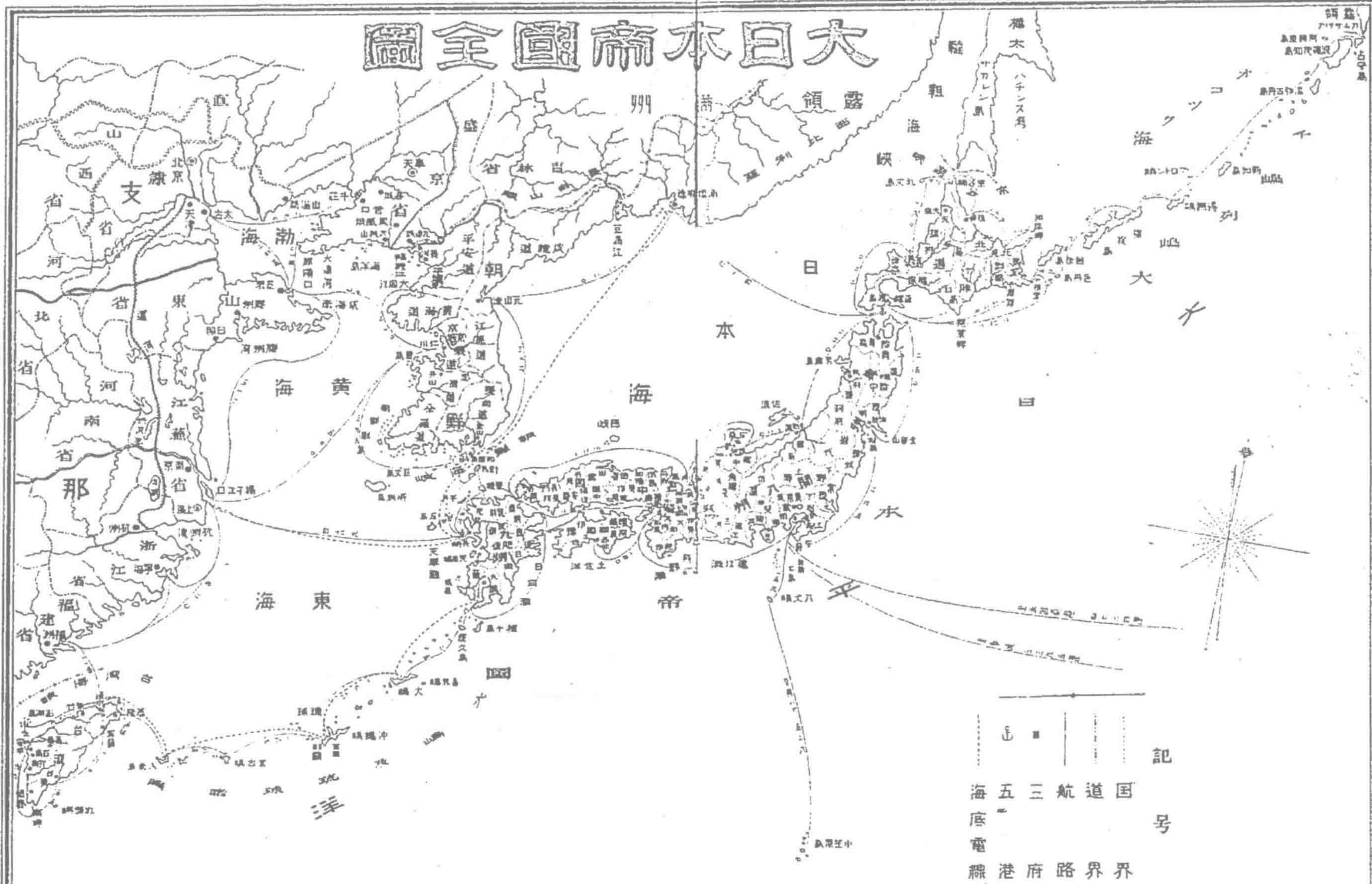




春日神社



法隆寺


大日本帝國全圖
記号
国界
道界
航路
三府
五港
海底電線
日本海
黄海
渤海
東海
支那
朝鮮
露領
樺太
韃靼海峡
オホーツク海

凡例

一 本編題曰叢談唯從吾意之所趣走筆敘去詳畧不一且憾家乏書史不能博引傍捜將俟他日有所集成編末附載滄海一粟集古十種漢譯舊稿亦以爲叢談之一斑

一 本編各條事要意達事通文章乃古今相雜字句乃雅俗相半文體亦不一定招大方之嗤笑必矣然至徵引考證都係平生手錄不獨形勝一事讀者當自知之

一 各條註脚來入漢土詩文自唐宋至元明清初蓋取不多傳於世者今世黃某日本雜事詩類既行坊間何須余収錄而後知焉哉

一 本編不敢敬避廟諱又無擡字闕畫等事是等義例我邦亦嘗行之而至今代主實禮廢虛儀大抵文書未必拘泥故莫視印行體裁爲不知臣子之禮也然事關皇家苟不下筆自謂敬之至也

一 東亞帝系對照表要俾覽者明我皇統以及三韓帝系其下附載西洋各國則欲見世界趨勢之概要耳如他各表皆宜與本編而相參照事理自明白矣

一 本編素係今夏公暇起稿初無上梓之意友人八田君允卿夙爲東亞同文會京都支部幹事見之大喜捐貲力任其事余亦限期脫稿隨印附諸活版未出三旬前編告成君之功實居多若夫疎漏杜撰之譏余受而弗辭敢請博雅君子指教

壬寅仲冬於京都高瀨西岸寓居

隆正識

日本形勝叢談前篇

目次

東亞帝系對照表

國	記事
本邦	夫天地未剖陰陽未分渾沌如鷄子溟涬而含芽萘其清陽者薄靡而爲天重濁者淹滯而爲地精妙之合摶易重濁之凝堨難故天先成而地定然後神聖生其中焉故曰開闢之初洲壤浮漂譬猶游魚之浮水上也於是有國常立尊又稱天御中主神是謂神代又有天神七代地神五代之稱天御中主神孫十五世曰神武天皇
漢土	位于亞細亞之東南一大國也三皇五帝之後數千年帝王之擴奪邦國之隆替相纘不絕每其革命版國愈擴其表而之大居于亞細亞洲三分之一世界中同其版者獨有魯細亞耳
朝鮮	介在于日本漢土之間初無君長有神人降于檀木下是爲檀君名王儉國號朝鮮後周武王封箕子謂之箕子朝鮮又有衞滿者代立謂之衞滿朝鮮既分爲三韓或屬日本或屬漢土近代始爲獨立國詳載本表
印度	建國之始古史無徵其地東通漢土西至波斯北至回部南至印度洋中貫印度河爲佛教所自始漢時身毒天竺即其地也
波斯	亞西里亞與印度之間皆古波斯之地漢時稱爲安息今波斯偏隅而已相傳閃之裔金希德始居于此
小亞細亞	挪亞避水於阿米尼阿譯言高地在小亞細東境今土耳其之東也地高氣燄滋生日衆析居西土漸開諸國
巴比倫（亞西里亞・西里亞）	洪水後閃之子但居西里亞阿奴居亞西里亞其地北爲阿米尼阿東爲亞西里亞南爲阿剌伯西爲西里亞西里亞一名密所頗退米阿譯言兩江中一名倍打乃郎譯言高平原在大格里司江由弗拉的江之間近大格里司江者爲亞西里亞近由弗拉的江者爲巴比倫今皆東土耳其地
巴勒士登	上古大國舊史無攷相傳挪亞之孫開倫始造開倫城徙居于此漢之拂菻即其地也今爲土耳其之猶太
希利尼	上古時歐羅巴草昧未開人獸雜處小亞細亞人踰海峽而西始知有希利尼之廣土厥後昏濛漸啓彊宇日擴分立諸國統名希臘即西土耳其之地今希臘乃西南海濱一隅而已西曆紀元前二千四百年間有發頓踞拉地庵久與恩百里夕古里爭戰至是遷於昔西恩云
埃及	洪水初平含之裔密四來牽局徙於阿非利加之北境始建地維司城又名挪阿門是時又有徙來西亞比居于此者均爲埃及之始祖稱爲厄日多即今之土耳其之麥西

（波斯・小亞細亞・巴比倫・巴勒士登・希利尼・埃及）西曆紀元前四千四年間開闢天地既生人物有亞當子孫相傳千有餘年該隱嗣立無道天降洪水人畜蕩然迨挪亞嗣立日漸繁庶有子三人曰閃曰含曰雅勿分王其地爲西洋諸國之祖

帆足萬里曰五大洲中風氣之闢止有二處尤早其一波斯以西如德亞厄日度諸國敎

漢土
東周
平王

二
一

法文物多相依倣其一漢土也漢土在亞細亞東邊與西洋諸國相去絕遠自爲一區教法文物皆由創作無所踏襲彝倫之敎爲萬國所宗亦得東方發生之氣也佛經載天地始闢有光音天人降居地上因食地膩身光乃滅不能復飛是爲生民之祖西人論開闢亦然是荒唐之言無識耳然西人所推以爲萬國生民之祖者諸厄纂高盞民苦久役逃散各成一國聚當夏禹時則西洋風氣之開當稍後於漢土伏羲始作書契古書不傳書二典皐陶謨禹貢是夏史所記舉四時昏中

第一代　神武天皇（奠都大和）（御陵大和畝火山）

星可以徵天亦其大較耳關筴簿以斯載書史之作美惡最古美惡之前亦有一二書史其所載怪誕不可據信美惡當殷湯時在二典後四百年本邦建國古無文史年紀莫可推考然在殷周間可知天照大神都于日向其弟素盞鳥尊暴戾放之於北方乃將其子五十猛命濟海往朝鮮以其地枯瘠還到出雲娶稻田姬其子大己貴與少彥名謀更經

桓王　莊王　僖王　惠王　襄王　頃王

希臘與埃及通商

亞孟爲猶太王

三

四

營中國神武帝幼時聞其地之美欲繼皇祖遺業經營中國東征遂平定天下凡百四十四國啓一國造云云議論稍當故採擇焉雖然余每怪漢土學者喜引古書論述世界建國等事以我爲附庸彼論之則我亦毀之本編所載亦不外於此或有少補史籍乎然余復謂是等語徒害彼此心意而無益於友交國際方今之時固當講究脣齒輔車互相擁護以與西洋各國聯縱揚鞭馳騁於全地球上之策耳非以古侮我以今輕彼之日也余昔著清韓通論東洋年表後罹災火都歸燼灰今所以特製此表者其意在於連衡三國矣嗚呼余豈好辯哉

第二代　綏靖天皇（御陵大和桃花鳥田山）

第三代　安寧天皇（御陵大和畝火山）

匡王　定王　簡王

靈王　魯襄公二十二年庚戌十一月庚子孔子生於魯昌平鄉陬邑即靈王二十一年也

景王　二年戊午釋迦牟尼佛卒或曰五年辛酉釋迦牟尼佛生于印度

羅馬國始強

埃及法老尼谷爲王侵亞細亞

第四代 懿德天皇

第五代 孝昭天皇（御陵大和博多山）

第六代 孝安天皇（御陵大和王手岡）

敬王 魯哀公十六年壬戌四月己丑孔子卒年七十三卽敬王四十一年也

元王

貞定王

考王

威烈王

安王

烈王

顯王

愼靚王

赧王

五

第七代 孝靈天皇（御陵大和片岡烏坂）

秦人徐福來朝歸化

第八代 孝元天皇（御陵大和劍池）

第九代 開化天皇（御陵大和率川）

〔東周〕惠公

〔秦〕始皇帝

二世皇帝

子嬰

〔漢〕高祖

惠帝

高后

文帝

景帝

羅馬與猶太立約

希臘亡

六

第十代 崇神天皇（御陵大和山邊勾岡）
始置四道將軍任那國始入貢

第十一代 埀仁天皇（御陵大和菅原伏見）
三十年辛酉漢元始元年即爲西洋紀元第一年

武帝
昭帝
宣帝
元帝
成帝
平帝

【新羅】都慶州今慶州朴氏十王昔氏八王金氏三十八王合五十六世共曆九百九十二年
赫居世 朴氏名赫居世號居世干
南解王 號次次雄或云慈充

【高句麗】都卒本扶餘今成川高氏二十八世共曆七百五年
東明王 姓高氏名朱蒙本姓解生於遼東句麗山下以爲國號朱蒙古作鄒牟王
瑠璃王 古作孺留名類利

【後百濟】都慰禮城今稷山朱氏三十世共曆六百七十八年
溫祚王 名溫祚高句麗始祖朱蒙之子徙都漢山滅馬韓

羅馬與西班牙戰
埃及亡
白里登興即英吉利古名
日耳曼人攻羅馬
敎王耶蘇降誕

七

第十二代 景行天皇（御陵大和山邊道上）
新羅王子歸化
禁殉死以土偶代之

孺子嬰
後漢 光武帝
倭國奉貢
明帝

儒理王 號尼師今
脫解王 昔氏南解王長女婿得金閼智養爲子改國號雞林
婆沙王 朴氏儒理王第二子

太武神王 古作大朱留王名無恤
閔中王 太武神弟名邑朱
慕本王 名憂
太祖王 名宮瑠璃孫

多婁王
已婁王

西曆二十九年耶蘇被釘于十字架二日復生
第二世紀

八

第十三代 成務天皇（御陵大和盾列池）移都近江滋賀 定諸州郡境

和帝 殤帝 安帝 順帝 冲帝 質帝 桓帝 靈帝 獻帝

祇摩王 逸聖王 阿達羅王 伐休王 昔氏仇鄒之子脫解之孫

次大王 名遂成太祖弟遇弑 新大王 名伯固次大弟 故國川王 名男武

蓋婁王 肖古王

第十四代 仲哀天皇（御陵河內惠賀）都于大和後崩于長門行宮

攝政 神功皇后 新羅主波沙寐錦惶遽不知所爲面縛來降誓日設令太陽出自西鴨綠江逆流無闕朝貢不乾舟楫獻馬梳馬鞭於天庭之隸後世子孫若渝此盟天神地祇共殛罰云云高麗百濟亦與新羅隣皆望風降曰永稱西藩不絕朝貢

昭烈帝 西晉 武帝

奈解王 伐休之孫 助賁王 伐休之孫 沾解王 賁王之弟 味鄒王 金氏仇道之子閼智出於金櫝故姓金氏

山上王 名延優國川弟 東川王 名憂位居移都平壤 中川王 名然弗

仇首王 我史作貴須 古爾王 肖古之子

第三世紀

第十五代 應神天皇（御陵河内惠賀藻伏岡）
都于大和
百濟王使其子直支來聘入侍于朝貢良馬直支通經典帝問之曰汝國有博士賢於汝者乎對曰有王仁者一國之秀也

第十六代 仁德天皇（御陵和泉百舌鳥耳）
移都攝津
百濟王枕流死子阿華年少叔父辰斯簒位我乃遣紀角等責辰斯失禮背道國人殺辰斯以

惠帝
懷帝
愍帝
東晋 元帝
明帝
成帝
康帝

儒禮王 昔氏助賁王之子
基臨王 助賁之孫
訖解王 奈解之孫

西川王 名藥盧
烽上王 名相夫被廢
美川王 名乙弗西川孫
故國原王 名斯由移都丸都

責稽王
汾西王
比流王
契王

第四世紀

謝角等因立阿華而歸後阿華卒帝召阿直支曰汝還國嗣位發兵護送之阿直支死子久爾辛立年幼其母與執政臣嬖誣帝聞其政亂召之云云而其年代與我史不相合也余間信彼史頗有錯簡矣、

第十七代 履仲天皇
都于大和

第十八代 反正天皇
移都河内

穆帝
哀帝
簡文帝
孝文帝
安帝

奈勿王 金氏味鄒王之姪
實聖王 閼智裔孫

小獸林王 名丘夫
故國壤王 名伊連小獸弟
廣開土王 名談德古作國岡上廣向土境平安好太王又曰大武神王十七世孫我姓氏錄云難波連高麗國好太王之後也又作鵲香岡上

近肖古王 比流二子
近仇首王
枕流王
辰斯王 枕流弟
阿莘王 我史作阿華
腆支王 我史作阿直支

第五世紀
荷蘭國興

第十九代 允恭天皇
都于大和
遣使新羅徵善醫者

第廿代 安康天皇
（御陵大和菅原伏見）

第廿一代 雄略天皇
（御陵大和丹北高鷲原）
吳使來聘
吉備田狹爲任那國司
高麗與新羅戰新羅乞援於日本府乃派兵大破高麗軍

恭帝
〔宋〕武帝
少帝
文帝
孝武帝
前廢帝
明帝
後廢帝

訥祇王
號麻立干後用此號者多

慈悲王

長壽王
移都平壤

久爾辛王

毗有王

蓋鹵王
名慶司又餘慶

文周王
移都熊津

三沂王

法蘭西國興

凡大利人自西班牙海地中海徙于亞非利加

白里登亨基司建國于根的國號英吉利

西地人滅西羅馬更國號日意大利

西班牙自立爲國

第廿二代 清寧天皇
（御陵河內坂門原）

第廿三代 顯宗天皇

第廿四代 仁賢天皇
（御陵大和磐杯岡）

第廿五代 武烈天皇

第廿六代 繼體天皇
（御陵攝津三島藍野）
梁使司馬達來

〔齊〕高帝
武帝
明帝
和帝
〔梁〕武帝

炤智王

智證王
名智大路奈勿王曾孫
定國號新羅始稱王

法興王
名源宗

文咨王

安藏王

東城王
名牟大

武寧王
名斯摩又名餘隆

第六世紀

五百九年

日耳曼與法蘭

第廿七代 安閑天皇（御陵河内古市高屋）
第廿八代 宣化天皇（御陵大和百鳥坂岡）
第廿九代 欽明天皇（御陵大和檜隈坂）
吳人智聰來
肅愼人漂到佐渡肅愼唐曰韎鞨宋曰女眞
百濟來獻佛像經論
百濟僧曇惠及道深來

簡帝
元帝
敬帝
〔陳〕武帝
文帝

眞興王 名彡麥法興王之姪

安原王
陽原王
平原王

聖王 名明穠移都泗沘國號扶餘
威德王 名昌

東西剖分
羅馬與波斯戰
匈奴侵東羅馬
土耳其人始至亞細亞洲

第三十代 敏達天皇（御陵河内磯長原）
新羅入貢獻佛像百濟王子日羅來朝
第卅一代 用明天皇
百濟僧惠慈率惠聰來貢
第卅二代 崇峻天皇（御陵大和檜隈坂）
第卅三代 推古天皇（御陵河内磯長山田）
始遣使于隋
吳僧智藏歸化
百濟僧蠡景道琛等來朝

宣帝
〔隋〕

眞智王 名金輪眞興二子
眞平王 名伯淨眞智之孫

嬰陽王

惠王 名季明威德二子
法王 名宣

英吉利以耶蘇教徒亞爲丁爲教會監督

第卅四代 舒明天皇（御陵大和押坂）始遣使于唐、後二十代、往來不絕

始渡僧正僧都檢校僧尼

第卅五代 皇極天皇（御陵筑前廣庭岡）

第卅六代 孝德天皇（御陵河內磯長大坂）移都攝津 僧道照如唐

煬帝　恭帝　（唐）高祖　太宗　高宗

善德王 名德曼眞平王之長女

眞德王 名勝曼眞平王弟國飯之女

武烈王 名春秋眞智孫滅百濟

榮留王

寶藏王 降于唐

武王 名璋

義慈王 名義慈降于新羅

第七世紀 羅馬國大亂 法蘭西以巴黎爲都所 波斯王求援支那

第卅七代 齊明天皇（御陵大和越岡）都于大和 新羅伐高麗高麗乞援遣兵大與 唐兵戰于高麗 耽羅國始來貢

第卅八代 天智天皇（御陵山城宇治山科）移都近江 唐使郭務宗至對馬

第卅九代 弘文天皇（御陵近江長良山）

第四十代 天武天皇（御陵大和檜隈安古）都于大和 筑紫獻唐民三十口處之遠江

第四十一代 持統天皇 唐人奏踏歌

文武王 名法敏滅高勾麗

神文王 名政明

孝照王 名理洪

羅馬王讓遷都于西羅馬親伐意太利

英吉利薩生王始信耶

第四十二代 文武天皇 始行釋典 琉球諸島交來朝貢 粟田眞人爲遣唐使

第四十三代 元明天皇（御陵大和奈保山）

第四十四代 元正天皇 吉備眞備阿部仲麻呂等爲留學生如唐 遣使靺鞨國後稱勃海國

第四十五代 聖武天皇 移都山城又都于大和 大野東人始築多賀城 令諸生習漢語 勃海入貢

第四十六代 孝謙天皇 遣唐使大伴古麻呂爭禮於唐朝廷

睿宗 玄宗

聖德王 名隆基後改興光孝昭之弟

孝成王 名承慶

景德王 名憲英孝成之弟

第八世紀

蘇教於是諸國從此教多者

丹麥高母爲王

東羅馬焚藏經三万卷

意太利攻羅馬教王請援法蘭西

第四十七代 淳仁天皇（御陵淡路三原） 尊崇孔子用文宣王謚

第四十八代 稱德天皇（御陵山城高野）

第四十九代 光仁天皇（御陵大和田原） 阿部仲麿卒于唐 唐賓晋卿歸化賜姓諸村叙從五位任大學頭兼安房守

第五十代 桓武天皇（御陵山城柏原） 移都山城長岡後移今京都 留學士習唐音 遣藤原葛野麿等于唐僧最澄空海義眞等從之 大春日淸足在唐娶李氏携歸邑 崑崙奴漂至參河始植綿種 最澄建延曆寺

代宗 德宗 順宗

惠恭王 名乾運

宣德王 名良相奈勿王十世孫

元聖王 名敬信奈勿王十二世孫

昭聖王 名俊邕元聖之孫

哀莊王 名淸明後重熙

第九世紀

阿剌伯人譯希臘天算格致之書

法蘭西始與英國戰自此常擾海濱諸國

二

日本	中國	新羅
第五十一代 平城天皇（御陵大和楊梅）	憲帝	憲德王 名彥昇昭聖之弟
第五十二代 嵯峨天皇（御陵山城嵯峨）空海建金剛山寺	穆帝	興德王 名秀宗後改景徽憲德母弟
第五十三代 淳和天皇（御陵山城大原）	敬帝	僖康王 名悌隆元聖曾孫
第五十四代 仁明天皇（御陵山城深草）藤原常嗣爲遣唐使小野篁副之太宰大貳藤原衞上表請新羅人不許入境內僧圓仁歸自唐	文宗	神武王 名祐徵元聖曾孫
	武宗	文聖王 名慶膺
	宣帝	

英國始以耶蘇生日紀年

阿剌伯建書院於各郡招才藝智巧之士咸集其中

阿剌伯豢土耳古人爲兵自此國權漸替

三

日本	中國	新羅
第五十五代 文德天皇（御陵山城田邑）僧圓珍如唐唐商晁暉從之	懿宗	憲安王 名誼淸神武之弟
第五十六代 淸和天皇（御陵山城水尾岡）僧圓珍還自唐	僖宗	景文王 名膺廉僖康之孫
第五十七代 陽成天皇 嵯峨廢太子高岳薨于西域勃海使來貢	昭宗	憲康王 名晸
第五十八代 光孝天皇 菅原道眞上書請罷遣唐使		定康王 名晃憲康之弟
第五十九代 宇多天皇 春海貞吉卒本唐舞師也		眞聖王 名曼定康之女弟
		孝恭王 名嶢憲康庶子

天主教始分東西一曰基利司敎一曰臘丁教俄羅斯人以兵船二百伐東羅馬

英國創造戰艦編練兵民分設省府重修政令又始建博物書院又以五等爵封勳成刑行律例

第六十代 醍醐天皇
渤海使裴璆來朝
交易唐物使當麻有業献孔雀
新羅全州僧甄萱遣使請歸化却之

第六十一代 朱雀天皇
呉越人來聘献羊

後梁 太祖
末帝

後唐 莊宗
明宗

閔帝
廢帝

晉 高祖

神德王
朴氏名景暉阿達羅王遠孫

景明王
名昇英

景哀王
名魏膺景明之母弟

敬順王
名傅金氏文聖後孫降於高麗

高麗 太祖
姓王氏名建金城太守隆之子泰封王弓裔擁松嶽畋亂將士推戴爲王都松嶽今開城府王氏三十六世共曆四百七十五年

第十世紀

西班牙回教人大興學校來學匠衆

英國始作鐘

第六十二代 村上天皇
呉越王錢弘俶遣蔣袞献書右大臣藤原實頼勅實頼賜答書及砂金武萬両我邦將相與外國人主使命往復蓋始于此

第六十三代 冷泉天皇

第六十四代 圓融天皇
僧奝然如宋

出帝

漢 高祖
隱帝

周 太祖
世宗
恭帝

太宗

惠宗
名武

定宗
名堯太祖二子

光宗
名昭太祖三子

景宗
名伷

荷蘭所織毛布逓販多

阿剌伯始織緞

法蘭西王與日耳曼戰于挪林

第六十五代 花山天皇

第六十六代 一條天皇

僧寂照如宋

第六十七代 三條天皇

第六十八代 後一條天皇

女眞賊船五十餘艘來寇對馬遂至筑前太宰帥藤原隆家等拒戰破之賊遂逝逃南蠻入寇薩摩人擊却之

眞宗

仁宗

成宗 名治太祖之孫

穆宗 名誦

顯宗 名詢太祖之孫

德宗 名欽

第十一世紀

俄國毀邪神像令民盡從耶穌教違者殺無赦

歐羅巴各國始用阿剌伯數目字

俄國更定律例

第六十九代 後朱雀天皇

第七十代 後冷泉天皇

宋張守隆來。僧成眞如宋

流筑前清原守武于佐渡以其私如宋也

張守隆歸化命居但馬

第七十一代 後三條天皇

僧成眞如宋

第七十二代 白河天皇

新羅遣使求良醫却之

宋商孫忠來

僧成尋在宋以宋主命獻金字法華經等後成尋寂于宋

英宗

神宗

靖宗 名亨顯宗二子

文宗 名徽顯宗三子

順宗 名勳

宣宗 名運文宗二子

英國征服各屬地俱歸統轄擧挪變人爲官令民習挪發語編造版圖丁冊

法國沿吏侵擾挪變境

第七十三代 堀河天皇
前太宰權帥伊房私遣使契丹貶位奪官

第七十四代 鳥羽天皇
宋主付商人孫俊明鄭淸等獻書

第七十五代 崇德天皇（御陵讚岐白峯）

哲宗　徽宗　欽宗　高宗

獻宗 名昱

肅宗 名顒初名熙宣宗之弟

睿宗 名俁

仁宗 名楷

挪威來訴王終

西班牙羈用爲葡萄牙侯

第十二世紀

家古人日漸開拓邊疆

葡萄牙始自立國

第七十六代 近衛天皇（御陵山城鳥羽）

第七十七代 後白河天皇（御陵山城法性寺）

第七十八代 二條天皇（御陵山城香隆寺）

第七十九代 六條天皇

第八十代 高倉天皇
宋明州刺史上書献物後白河法皇報以染革三十張沙金壹百兩
僧榮西如宋　源爲朝遁入琉球

第八十一代 安德天皇（御陵長門赤間關）
其子舜天爲王

孝宗

毅宗 名晛

明宗 名晧仁宗次子

俄國遷都于甫剌地馬侯及反爲臘丁所據

至是輔臣魯剌丁攻取其地

俄國議除封建諸侯鬥之威謀叛

法國王始至英國

意太利郎罷自立爲民主之國

第八十二代 後鳥羽天皇（御陵山城 鳥羽） 鎌倉開府 源頼朝	第八十三代 土御門天皇 源頼家 源實朝	僧俊仍如宋	第八十四代 順德天皇 藤原頼經	宋陳和卿歸化	第八十五代 仲恭天皇 北條氏執權
光宗	寧宗				
神宗 名旼後改晫仁宗三子	熙宗 名韺	康宗 名貞又名祦	高宗 名瞰初名瞋又改晊		

阿剌伯的學者阿大剌著天算書百六十種今多散佚

第十三世紀

元太祖自蒙古往伐俄國

第八十六代 後堀河天皇	第八十七代 四條天皇 僧圓爾如宋	第八十八代 後嵯峨天皇 藤原頼嗣	第八十九代 後深草天皇 宗尊親王	宋僧道隆來	第九十代 龜山天皇 惟康親王	宋僧兀庵來朝	元兵大擧來寇我兵鏖戰元兵生還者纔三人
理宗	度宗						
（元）太祖	太宗	定宗	憲宗	世宗			
元宗 名禃初名倎							

波斯降于蒙古蒙古又伐印度克沙闍生之國

英國始造馬口鐵

法國詔毀猶太經

蒙古攻波斯波斯王奔非洲

法國始巴黎斯城設國會

英國始製凹式凸鏡

英國始定公議堂章程

法國人築誌禁止娶妾

英國始禁娶二妻

二九　三〇

第九十一代 後宇多天皇
宋僧祖元歸化爲圓覺寺主

第九十二代 伏見天皇（御陵山城深草）
久明親王

第九十三代 後伏見天皇
元僧一山齎元主書北條貞時怒流一山于伊豆後宥之爲圓覺寺主

第九十四代 後二條天皇（御陵山城北白川）

第九十五代 花園天皇（御陵山城十樂院）
守邦親王

足利氏遣使于明　北條氏亡

恭宗　端宗　帝昺

成宗

武宗

仁宗

忠烈王　名昛初名諶元

忠宣王　名璋初名謜

忠肅王　名燾宣王第二子

意太利始用眼鏡

第十四世紀

三一

三二

第九十六代 後醍醐天皇（御陵大和吉野）
護良親王
成良親王

北朝

光嚴天皇（御陵丹波常照寺）

室町覇府 足利尊氏

光明天皇（御陵攝津勝尾寺）

第九十七代 後村上天皇（御陵河內檜尾）
足利義詮

懷良親王遣使于明

崇光天皇（御陵山城伏見）

英宗

明宗

文宗

寧宗

順宗

忠惠王　名禎

忠肅王　復位

忠惠王　復位

忠穆王　名昕惠王長子

忠定王　名眡惠王庶子

土耳其人始至歐洲日耳曼王征意太利圍羅馬城
瑞典新定律法
東羅馬伐韃靼
意太利凡尼克始造沸鐵法
日耳曼人蘇華脫司始知造火藥之法

英國與法國戰始用火礮
丹麥人始用大火礮
英國始作自鳴鐘

後光嚴天皇（御陵山城深草）
足利義滿
義詮遣僧中津妙佐于明
後圓融天皇（御陵山城深草）
明亦使僧仲猷無來聘
第九十八代 後龜山天皇（御陵河內百重原）
僧如瑤與胡惟庸謀事覺被刑
第九十九代 後小松天皇（御陵山城東山泉涌寺）
足利義持
足利道義遣僧祖阿等于明受其封冊
朝鮮遣使來聘請修隣好

〔明〕太祖
倭寇山東浙江等地
遣使日本伐安南討交趾

恭愍王
名顓肅王二子
恭讓王
辛禑 旽之子
辛昌 禑之子
名瑤○朴彭年成三問李塏柳成源河緯池兪應孚六人死節國人爲撰六臣傳

法國始作大自鳴鐘于公廨
歐洲始用礮守城

〔朝鮮〕李氏定都漢陽
第一代 康獻王
諱旦字松軒父諱子春仕高麗

第百代 稱光天皇
足利義量
朝鮮戰艦千三百艘來寇對馬擊却之
明使呂淵來義持大論其父誤國
體使僧西堂却之

惠宗
太宗
仁宗
宣宗

至榮祿大夫
纂經濟六典 築都城征對馬 鄭道傳作亂
第二代 恭靖王
諱曔字光遠
朴苞作乱 日本琉球來聘
罷兵
第三代 定聖王
諱芳遠字元正
贈高麗忠臣 設申門徒 設鑄字所 設四學寵外戚封君作號牌錮庶孼通顯
禁讖緯書
第四代 莊憲王
諱裪字元正
始開經筵 征對馬島 立奬子廟 設集賢館 築都城 行養老宴 纂三綱行實 制頒祿法 纂治平要覽

第十五世紀

英國始作火藥
葡萄牙始建都于立士本

第百一代 後花園天皇（御陵丹波山國）
足利義敎
足利義勝
足利義政
義敎遣使于明　朝鮮來聘
足利義政屢遣使于明求銅錢等物
對馬島主宗貞盛與朝鮮約互市

英帝
景帝
英宗 復位

第五代 恭順王 諱珦字輝之 禁度僧　纂高麗史　纂東國兵鑑
第六代 恭懿王 諱暐 李澄玉謀反　琉球國來聘
第七代 惠莊王 諱瑈字粹之 廢四郡　李施愛作亂　日本國來聘
第八代 懷簡王 諱暲字原明

羅馬城設大書房
日耳曼始創刻銅板法
法國始設額兵

第百二代 後土御門天皇（御陵山城東山泉涌寺）
足利義尚
足利義植
足利義澄
僧周鳳著善隣國寶記三卷
僧等揚如明　等揚卽雪舟善畫
第百三代 後柏原天皇
足利義晴
宗義盛遣兵伐朝鮮
遣商船于明

憲宗
孝宗
武宗 王守仁上疏論事謫貴州
世宗

第九代 襄悼王 諱光字明照 纂武定寶鑑
第十代 康靖王 諱娎
第十一代 燕山君 諱㦕
第十二代 恭徽王 諱懌字樂天

第十六世紀
俄國始伐蒙古 家古人之在俄者日斬衰落
俄國伐瑞典
俄國始遣使十耳其通好
荷蘭文魯始造開花砲彈
葡萄牙始尋得北米海之元林蘭又遣使支那征服安南之東京
葡人立埠于印度可陳友錫蘭
英人始作照相回光鏡
西班牙麥者耶始地球圓證
葡商立埠于廣東之澳門又始通暹羅始尋得非利賓島
攻取南亞美利加之智利

三七

第百四代 後奈良天皇
足利義輝
琉球來貢
大內義隆與書朝鮮曹判裵顯又
遣使于明
葡萄牙人來多褹島始傳鳥銃

第百五代 正親町天皇
足利義昭
足利氏亡
織田信長
南蠻來信長建南蠻寺又築安土城
大友義鎭遣其臣植田玄佐于明
玄佐在明病卒

倭陷平海衞却之
穆宗
毀天下書院
神宗

第十三代 榮靖王
諱峼

第十四代 恭顯王
諱峘字對陽
倭亂

第十五代 昭敬王
諱昖夫人鄭氏
尼子湯介寇邊 竹島倭寇
通信日本倭人平秀吉等率
二十五万衆入寇

英國始分天主耶蘇兩敎始與印度通商
葡人丙安往日本
葡王與日本立通商之約始自支那携回犧樹

第十七世紀

三八

第百六代 後陽成天皇
豐臣秀吉
豐臣秀頼
豐臣氏亡
江戶開府
德川家康
德川秀忠
英蘭兩國船舶來泊界浦
允許京都角倉茶屋諸氏駿河太
田邊諸氏及大阪堺諸賈貿易海
外
秀吉陷朝鮮
禁耶敎
山田長政經暹羅入暹羅
秀吉遣使高山國卽暹羅

第百七代 後水尾天皇
德川家光
嚴禁耶蘇敎
安南呂宋交奉書
仙臺支倉往羅馬國
長崎爲互市場

光宗
熹宗
韃靼入寇

〔清〕太祖
愛親覺羅氏諱
弩爾哈

第十六代 光海君
諱琿昭
倭入朝鮮

第十七代 恭良王
諱琮昭

英國始與印度通商始購茶始設官銀號
荷蘭立埠於南洋以分葡人之利
意太利天文家格里劉作寒暑表
英人始設東印度公司
荷蘭與日本通商
英人始由印度至日本
英人水師始來駐防印度
荷蘭英法三國始通商支那
日本遣使于印度敎會堂
日本通使于羅馬敎王
法國始分遣使臣駐友國之京
俄國與法國通商

鄭芝龍等歸化
陳元贇歸化爲長門客卿
暹羅國使來
伊斯巴尼亞使至于薩摩
朝鮮來聘
塔加沙古使理加來貢塔加沙古卽今亞灣
長政爲暹羅國王
琉球來朝

第百八代 明正天皇
島原亂起

第百九代 後光明天皇
德川家綱
琉球入貢

第百十代 後西院天皇
明僧性瑫歸化後爲萬福寺主

思宗
福王
唐王
永明王
明亾

第二代 太宗 諱皇太極 國號清
第三代 世祖 諱福臨

第十八代 憲文王 諱淙號松堂 與淸國和
第十九代 宣文王 諱淏號竹梧
第二十代 昭休王 諱棩字景直王后張氏

法國始作馬車
荷蘭始設洋行于廣東

明鄭成功乞援兵
明儒朱之瑜歸化

第百十一代 靈元天皇
德川綱吉
淸人魏九官等四人歸化
僧興儔歸化卽心越禪師

第百十二代 東山天皇
德川家宣

第百十三代 中御門天皇
德川家繼
德川吉宗
朝鮮使來新井君美爲之接伴
減蘭淸商舶之數
琉球入貢
交趾獻象
幕府命淸商及荷蘭商舶定出入歲額

第四代 聖祖 諱玄燁
第五代 世宗 諱胤禛

第三十代 顯義王 諱焞字明普王后金氏
第卅一代 德文王 諱昫字輝瑞王后金氏
第卅二代 至行王 諱昤號光叔王后金氏

荷蘭始作水龍皮管
英國始建觀象臺于倫敦
俄國始作行海兵艦
英國始置刀刃於火鎗之上

第十八世紀

第百十四代 櫻町天皇
德川家重

第百十五代 桃園天皇
德川家治
琉球來貢

第百十六代 後櫻町天皇
琉球入貢
俄人至阿波

第百十七代 後桃園天皇
宗義功設互市舘於朝鮮釜山浦

第百十八代 光格天皇
德川家齊
琉球入貢
朝鮮使來
俄國使至長崎
俄國寇蝦夷地
置松前奉行

第六代 高宗
諱弘曆
禁水滸傳毀板又禁扮演

第七代 仁宗帝
諱顒琰
傳牛痘傳鴉烟

第廿三代 思悼世子
諱愃字允寬

第廿四代 温亘王
諱繹字聖敬

第廿五代 文成王
諱祘字亨運
傳牛痘傳鴉烟

第廿六代 淵德王
諱玜號純齋王后金氏

第十九世紀

日耳曼雲格林始試電氣

意太利約罕以電氣醫病

俄國始種牛痘
法國布施始作測日儀

華盛頓始立美利堅國與法國和

法國拿破侖出
美利堅商船至支那始購茶
法國始造紡紗機器
美國始種木棉又始開銀號
英人取錫蘭
美國禁英人入國境後與英人戰克之
美國禁買黑奴
美國始用火輪船渡海
美與英始設火輪公司
美人毛司造電報新式

四一

第百十九代 仁孝天皇
德川家慶
英國船來長崎 英船亦來
琉球入貢
荷蘭使來
美利堅船至浦賀

第百廿代 孝明天皇
德川家定
德川家茂
德川慶喜
琉球入貢
奉還大政中興業成
英人來傳牛痘
美國使臣來 開橫濱港 頒五國條約

第百廿一代 今上天皇
遷都武藏東京

林則徐爲廣東總督燒阿片

第八代 宣宗帝
諱旻寧
英人陷定海廣東等

第九代 文宗帝
諱奕詝

第十代 穆宗帝
諱載醇

第十一代 今帝
豫名載湉

第廿七代 體元王
諱昊字德寅號敬軒王后金氏

第廿八代 體健王
諱奐字文應號元軒王后趙氏

第廿九代 熙倫王
諱昇字道升全溪大院君三子
夫人廉氏

第四十代 今王
豫名熙字聖臨號誠軒興宣大院君次子

第廿世紀

萬歲萬萬歲

四二

國疆畧表

行政區域 府縣	市町	國郡	陸軍	海軍	通商各口
五畿八道及臺灣總督府			拾貳師團	五鎮守府 二要港	
京都府	京都	山城 丹波五郡 丹後五郡	第四師團	第四海軍區 舞鶴鎮守府	宮津
奈良縣	奈良	大和			
大阪府	大阪	河內 和泉 攝津七郡			大阪
東海道					
三重縣	津	伊賀 伊勢 志摩 紀伊二郡	第三師團		四日市
愛知縣	名古屋	尾張 三河			武豐

府縣	市町	國郡	陸軍	海軍	通商各口
靜岡縣	靜岡	遠江 駿河 伊豆四郡			清水
山梨縣	甲府	甲斐			
神奈川縣	橫濱	相模 武藏三郡	近衞師團 第壹師團	第一海軍區 橫須賀鎮守府	橫濱
東京府	東京	武藏九郡 伊豆七島 小笠原島			
埼玉縣	浦和	武藏十七郡 下總一郡			
千葉縣	千葉	安房 上總 下總八郡			
茨城縣	水戶	下總 常陸六郡			
東山道					
滋賀縣	大津	近江			

縣	縣廳	國郡	師團
岐阜縣	岐阜	美濃 飛彈 三郡	
長野縣	長野	信濃	
群馬縣	高崎	上野	
栃木縣	宇都宮	下野	
宮城縣	仙臺	磐城三郡 陸前十三郡	第二師團
福島縣	若松	磐城十一郡 岩城	
巖手縣	盛岡	陸中十七郡 陸前一郡 陸奥一郡	
青森縣	弘前	陸奥八郡	第八師團
山形縣	山形	羽前十二郡 羽後一郡	

縣	縣廳	國郡	師團
秋田縣	秋田	羽後八郡 陸中一郡	
南海道			
和歌山縣	和歌山	紀伊八郡	
德島縣	德島	阿波	
香川縣	高松	讚岐	
愛媛縣	松山	伊豫	第十一師團
高知縣	高知	土佐	
山陽道 山陰道			
兵庫縣	神戶	攝津 播磨 但馬 六郡 丹波二郡 淡路	第十師團 神戶

岡山縣	廣島縣	山口縣	鳥取縣	島根縣	北陸道	福井縣	石川縣	富山縣
岡山	廣島	山口	鳥取	松江		福井	金澤	富山
美作 備前 備中	備後 安藝	周防 長門	因幡 伯耆	出雲 石見 隱岐		若狹 越前	加賀 能登	越中

第五師團　第九師團

第二海軍區　呉鎮守府

絲崎 宇品　下之關　濱田　敦賀　七尾　伏木

新潟縣	西海道	福岡縣	大分縣	佐賀縣	熊本縣	長崎縣	宮崎縣	鹿兒島縣
新潟		福岡		佐賀	熊本	長崎	宮崎	鹿兒島
越後 佐渡		筑前 筑後 豐前 六郡	豐前 豐後 二郡	肥前 十郡	肥後	肥前 壹岐 對島 六郡	日向 九郡	日向 大隅 薩摩 一郡

第十二師團　第六師團

第三海軍區　佐世保鎮守府　竹敷軍港

新潟　博多 門司　口之津 唐津　三角　長崎 鹿兒 佐須奈 嚴原

沖繩縣	北海道廳	臺灣總督府
那覇區 首里區		
琉球	渡島 後志 石狩 天鹽 北見 膽振 日高 十勝 釧路 根室 千島	臺北 基隆 宜蘭 深坑 桃仔園 新竹 苗栗 臺中 彰化 南投 斗六 嘉義 鹽水港 臺南 蕃薯寮 鳳山 阿猴 恒春 臺東 澎湖
	第七師團	臺灣第一守備混成旅團 臺灣第二守備混成旅團 臺灣第三守備混成旅團
	第五海軍區 室蘭鎮守府	澎湖軍港
那覇	函館 小樽 室蘭 釧路	淡水 基隆 安平 打狗 澎湖

四九

五〇

●文教略表

教育		
文部省直轄	帝國大學	東京 京都
	高等師範學校	二
	女子高等師範學校	
各地方廳直轄	師範學校	四八
	女子師範學校	五
	農學校	五〇
私立	三田大學	
	早稻田大學	
	高等女學校	八

農學校
高等商業學校　二
高等學校　八
醫學專門學校　五
高等工業學校　二
外國語學校
美術學校
音樂學校
盲啞學校

宮內省直轄
學習院

商業學校　七三
中學校　一八五
醫學校　三
工業學校　三三
尋常小學校　二、六五一
尋常高等學校　三、二五一
高等學校　一、四六八

內務省直轄
警察監獄學校

專門學校　三五
實業補習學校　四
徒弟學校　六
中學校　三〇
技藝學校　一四
盲啞學校　五
政治法律各種學校　一、〇四四
尋常小學校　三六二
尋常高等學校　一二一
高等學校　七

遞信省直轄
商船學校

華族女學校

陸軍省直轄
大學校　東京青山
戸山學校
士官學校
軍醫學校
砲工學校
砲兵工科學校
騎兵實施學校
野戰砲兵射擊學校
要塞砲兵射擊學校

海軍省直轄
大學校　東京築地
兵學校　廣島縣江田島
機關學校　神奈川縣橫須賀
軍醫學校
砲術練習所

郵便電信學校

臺灣總督府直轄
國語學校
醫學校
師範學校
小學校　一三

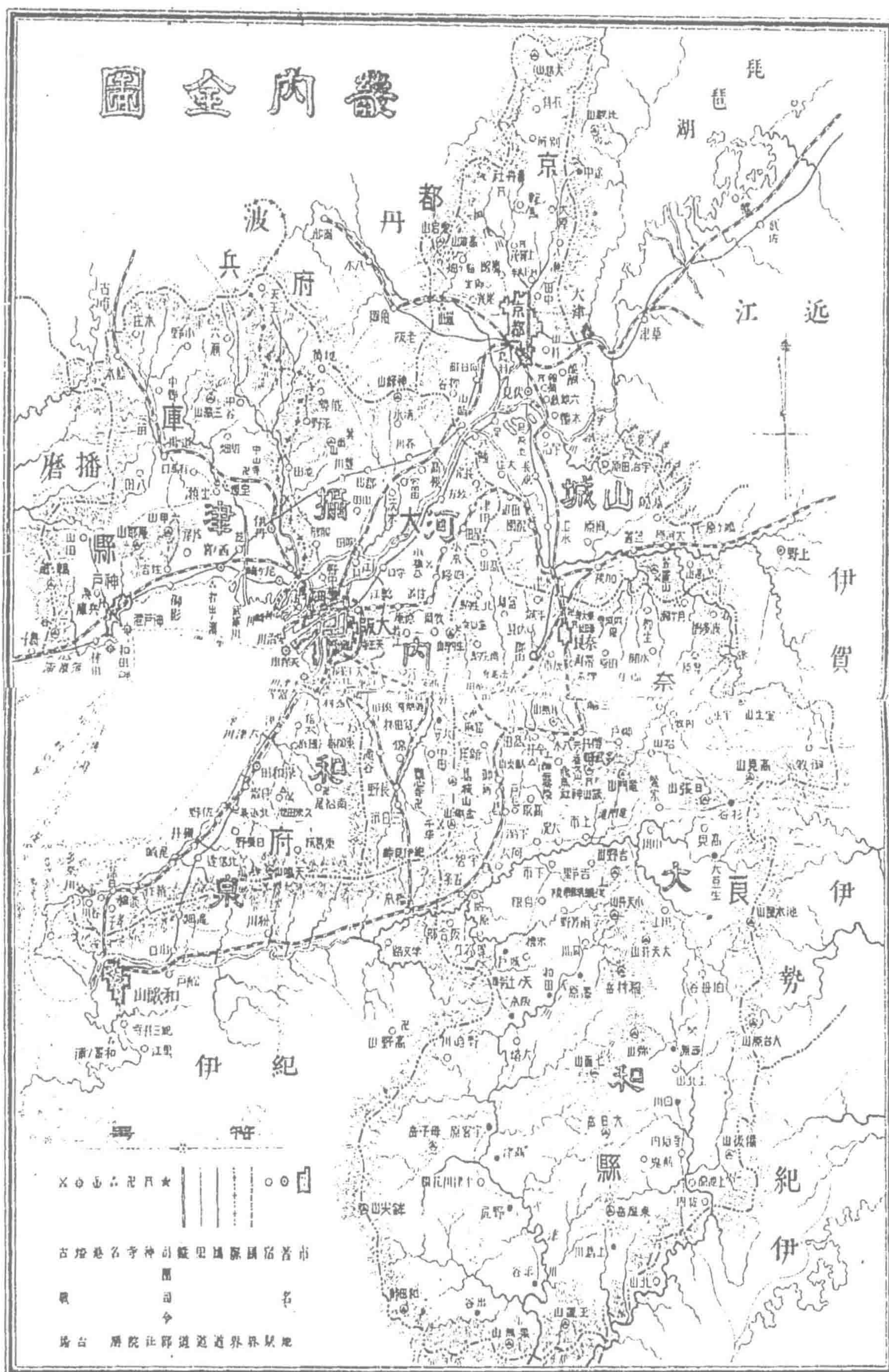
中央幼年學校	
東京陸軍地方幼年學校	
名古屋幼年學校	
大阪幼年學校	
廣島幼年學校	
熊本幼年學校	
憲兵練習所	
水雷術練習所	
機關術練習所	
主計官練習所	
公學校	一三〇
國語傳習所	二

五三

宗教

宗教	名稱	數
神道	神宮 內宮 外宮	二宮
	官幣大社	四一社
	官幣中社	二九
	官幣小社	三
	別格官幣社	二二
	國幣中社	四八
	國幣小社	二五
	府縣社	四九六
	鄉社	三、四六五
	村社	五二、四一三
	無格社	一三五、三六六
佛教	天台宗	四、八〇二
	眞言宗	一二、七六八
	淨土宗	八、三三二
	臨濟宗	六、一三三
	曹洞宗	一四、一〇一
	黃檗宗	六〇五
	眞宗	一九、二〇三
	日蓮宗	五、〇六〇
	時宗	五二〇
	融通念佛宗	三五七
	法相宗	四五
	華嚴宗	二
耶蘇教	舊教	
	新教	
	希臘教	
	諾利七斯托教	
	由呢鐵利阿母教	
	嘎托利哭教	

五四


畿內全圖
京都府
兵庫縣
攝津
播磨
丹波
山城
近江
琵琶湖
伊賀
河內
大阪府
和泉
奈良縣
大和
伊勢
紀伊

日本形勝叢談

静岡　關口隆正著

總論

方今之時。男子生焉。志于四方。坐火車踰大山。駕輪船渡重洋。環行地球。揣摩天體。豈不[illegible]觀。大快事哉。雖然。徒見山岳聳空。蒼海無涯。都邑繁華。樓閣櫛比之狀。而不知古今治亂。國家隆替。地理險夷。物産多寡之概也。既歸鄉國。漠然茫乎。無一所得。輙誇傍人曰。予也。西自英法諸國。以至南北兩米。遂東過日本矣。因問其山海形勢。國家推遷。乃曰。吾不知也。嗚呼。昔者。司馬長卿之跋涉名山大川也。豈夫如此而已矣哉。蓋我邦之於漢土。書同其文。人同其種。往來交通。非一朝始于今日。然漢土建國尤尚矣。彊域亦曠矣。自古。上下尊大成風。自稱中國。又曰中華。凡成國於亞細亞洲中者。皆盡稱屬國屬島。而呼我曰東夷。東夷之史。不足讀也。東夷之文。不足誦也。

經之侮之。比至近世。通商各國。遂締盟於我。我邦士庶。固知漢土國勢。又能通其史書。故我之賦游禹域者。則必徵諸典籍。俯仰低徊。無往而不自得焉。歸朝家居。小之。則可以養吾文氣。而補史乘之闕也。大之。則可以鑒彼國風。而改教化之弊也。頃者。清韓志士。亦有所深覺悟於世界大勢。乃知唇齒輔車之不可一日忽諸。王公大人。碩儒書生。接踵而至。載筆而來。或視我軍國政事。或察我殖産興業。或留學焉。或諷詠焉。當是之時。我邦賢士夫。推誠致禮。厚待優遇。無所不至。賦詩屬文。以通其情。重譯交臂。以表其意。可謂無復遺憾焉耳。雖然。余竊謂世界各國。星羅碁布。一國自有一國之體。一邑自有一邑之誌。而況我邦皇統一系。萬古不易。自異於彼革命成國者耶。古史舊物。亘二三千年之久。山河之固。原野之饒。一勺之水。一拳之石。無盡不存典故來由焉。若夫寺觀祠廟。尤關係於漢韓兩國。亦云夥矣。譯官不能具語之。詩章不能詳述之。歐米人。夙稱我邦。曰世界之大公園。遠來遊者。日加一日。善歐文者。略

二

譯我邦地勢風俗名勝舊跡。裝成册子。以便觀覽。然余未聞以漢文行之。有供於清韓兩國遊客者。常以爲憾。乃不自揣。論著此書。題曰形勝叢談。余嘗聞之。顧寧人者清國名儒也。追長卿之跡。載書漫游。車轍遍於禹域。其著書等身。盡皆裨益於教化政治經濟地理之學。且遠及海外。異聞奇話。亦無不具載焉。然則。方今之世。倘有崑山若其人乎。或將有所採擇於此書也。其論國體國號等各篇。間援漢韓書史。彼此參照者。蓋有微意在焉。

國體

粤稽我邦開闢之初。有神。曰天之御中主尊。勅伊弉諾伊弉册二尊。曰。有豐葦原千五百秋瑞穗國。汝往治之。後更稱大八洲。至大日孁尊。天下大治。是爲天照大神。（伊勢大廟、所奉祀即此神也、）當是之時。天命既明。斯道既備。而無教之之名。有載之之器。曰八阪璽。曰八握劍。曰八咫鏡。稱曰三種神器。（宮中所奉祀也、）天祖授之皇孫曰。視之。猶視吾也。寶祚之

隆。當與天壤無窮矣。辛酉之歲。神武天皇。卽位于大和國橿原宮。（周惠王十七年、唐書有主明樂美御德之稱、即譯天皇二字也、）是爲人皇第一代。元年爲紀元第一年。（至今代、稅世一百二十二代、算歲則二千五百六十三年、）自時厥後。聖子神孫。世世相受。至第十六代應神天皇。（即位十六年、乙巳漢土西晉武帝、太康六年、三韓則新羅第十四世儒禮王元年、高句麗第十三世西川王二十一年、後百濟第八世實稽王二十年、）韓人來貢論語十卷。（史云、百濟王使阿直岐來朝、阿直岐通曉經典、皇子稚郎子師之、帝更徵王仁、明年王仁來獻論語十卷千字文一卷、）帝曰。果有是哉。據神器。設名教。曰。璽之渾然如天者。仁也。劍之斷物制宜者。義也。鏡之正邪自明者。信也。比及通好隋唐。尊崇儒術。釋奠先聖。益施其教。愈弘其道。遂以仁義。爲脩身治國之大本。而尙視百工技藝之不足以扶翼政教。博搜海外各國。取長補短。文物具備。駸駸乎進。未嘗休也。至今代。軫念臣民逐末忘本。乃敕大小學校曰。朕惟我皇祖皇宗。肇國宏遠。樹德深厚。我臣民克孝克忠。億兆一心。世濟厥美。是我國體精華。而教育淵源。亦實存于此。伏惟。道者。一而已矣。何有東西相異之理。譬猶日月之麗於天。有人于斯。指日月曰。是我有也。孰不笑其愚哉。夫我邦之於漢土。

人同其種。書同其文。而唯異其國體。與文學耳。今試舉其一端。帝王則曰唐虞。曰三代。詩書則有火於秦。有黃老於漢。每遇革命。斯道漸衰。其學乃變。或喜詩章。或究性理。或專修考據之學。徒誦其言。不行其道。我則不然。皇統連綿。萬世一系。君義臣忠。父慈子孝。學士躬行實踐。故雖縱非無學術變遷。亦如漢土之迹。然二千年之久。未嘗有問鼎輕重等之徒也。或嘗問我國體。與國教。余乃對之。曰。我邦上古。所以稱瑞穗者。以其夙有稻也。（伊勢大廟、今尚藏神代犁鋤諸器、）今近取譬之。漢土。有八寶飯。夫飯本也。松仁香蕈筍尖荸薺瓜蔬之類。末也。本末相須。攙梅燮理。而後。初成其味之美也。苟捨其本。而取其末。則失其本體。豈可謂之飯哉。我邦列聖。或崇儒術。或奉釋教。又尚遍求西洋學藝。猶飯之於松仁香蕈筍尖等八寶也。宋應星曰。五穀則麻菽麥稷黍。獨遺稻者。以著書聖賢。起自西北也。余謂不然。非遺之也。漢土西北一帶地方。固無稻也。其有稻者。自南方始矣。而其輸種仔於彼者。即我也。然則。我之輸於彼者。不啻稻種。聖

人之教。亦焉知無失於彼而存於我也哉。或憮然。有不喜之色。然亦不能論難攻擊也矣。

國號

我邦初稱瑞穗國。又稱大八洲。及皇祖即位于大和。總稱全國。曰大和。邦讀呀媽托。猶漢土天子。起於周。天下則曰周。起於漢。則曰漢也。而傳漢字之後。用日本二字。充之。又讀呀媽托。其加大字。尊之也。蓋我邦建國東方。居於震位。實陽氣之所發也。故致書於隋。曰。日出處天子。致書日沒處天子。無恙。日出處天子。即謂日本天子也。尚書云。宅嵎夷。曰暘谷。暘明也。日出於谷。而天下明。亦日所出之謂。抑日本之稱。基於此云。後儒不察。妄爲之說曰。樂浪中。有倭人。分百餘國。（前漢書地理志）曰日本國者。倭之別種也。（唐書）曰日本乃小國。爲倭所併。故冒其號。又曰。嵎夷。史記作郁夷。古郁與倭通。如周道倭遲。韓詩。作郁夷。即倭國也。水戶儒員青山延于曰。東夷倭云。中元二年。

我垂仁天皇八十七年、丁巳、即漢土光武帝倭奴國。奉貢朝賀。使人自稱大夫。國之極南界也。又魏志倭人傳。有伊都國。日本紀所謂伊覩國。即今筑前怡土郡。是也。伊都倭奴。國音相通。據此。則是時遣使者。伊覩國造。國造、後世所謂國守也而非朝廷所遣。明矣。近世。筑前人。有得古印者。文曰委奴國王之印。蓋漢時之所授也。委倭古字通用。後世以倭。爲音和。爲日本總稱。謬也。余亦嘗謂凡曰倭者。盡係漢儒之所用。而非我之所稱也。且自両漢。至隋唐。雖交通稍開。然彼土人士。未有通我國地理者。只知有我九州。而不知有四國中國及本洲也。明人嘗以九州一國守。爲日本天子。又稱我邊氓之侵彼疆者。曰倭寇。所謂倭寇者。九州逋逃之徒。尤居其多。故彼視九州。以爲日本全國。亦不足怪。明史云。平秀吉。薩摩魚買子也。豐太閤、尾張人、詳載本編豐國神社條下嗚呼。何其妄哉。朱明之世。尙且爲然。況於隋唐耶。又況於両漢耶。然彼之稱曰倭者。亦非無故。韻書云。倭。烏禾切。女王國名。我邦。固稱神國。太古曰天神之世。次曰地神之世。地神首。爲天照大神。即女神也。至人皇之世。遣使于魏者。神后皇后之時也。神后攝政、三十八年、戊午、魏明帝、景初二年、魏志云、倭女王、卑彌呼、遣大夫詣京都、貢獻、是也致書于隋者。推古天皇也。推古帝、八年、庚申、隋文帝、開皇二十年、是皆女帝也。於是。漢人或以謂日本世爲女王。故用倭字乎。日本書紀纂疏云。舊說。吾邦之人。初入漢。漢人問。謂汝國名如何。答曰。謂吾國耶。漢人即取吾字之國訓。命之曰倭。要之。世俗以倭字。爲同於大和。尤非也。青山氏說。先獲我心者。今不復贅焉。

國疆

我大日本帝國。在於亞細亞洲域。東南控太平洋。西北隔海。接於韓清俄三國境。周圍七千零二十九里。面積。二萬四千七百九十四方里。我一里、六倍於彼里程一里、故七千里、實爲五万里許、二万方里、爲十二万里許、莊子曰、鵬之徙南冥也、水擊三千里、摶扶搖而上者、九万里、今以我里程、推算之、未必可謂爲遠矣而其國土成於五大島。以及群小島嶼。五大島者。本洲也。四國也。中國也。九州也。北海道也。千島也。群小島嶼者。謂佐渡。隱岐。壹岐。對馬。淡路。伊豆七島。小笠原。五島。平戶。天草。大嶋。種子島。屋久島。琉球。

臺灣。澎湖等也。（余近著臺灣歷史歌、略叙其沿革、且論琉球臺灣、往古爲我屬島、現行于世）今又按查通國地脈。起于中。而左右降。中最隆。東北亞之。西南最纖。王化興西南。而漸東北。至成務天皇（即位元年、乙亥、後漢順帝陽嘉四年、）隔山河而分國縣。隨阡陌以定邑里。凡爲國。壹百四十四。文武天皇（即位元年、丁酉、唐中宗嗣聖十四年）又因山海形勢。分爲六十六國（宋文博日本國賛）孰分彼土此土、相去幾咫尺爾、蕞蕞六十六州、渺渺三千餘里云云（明宋濂詩）六十六州王一姓、千年猶效漢衣冠）曰山城。大和。河內。和泉。攝津。凡五州。稱畿內。神武天皇即位大和以還。列世天子。大抵奠都于此。畿內之南得國八。曰播摩。美作。備前。備中。備後。安藝。周防。長門。稱山陽道。其北得國八。曰。丹波。丹後。但馬。因幡。伯耆。出雲。石見。隱岐。稱山陰道。大和之南。得國一。曰紀伊。紀伊之西北海。得國一。曰淡路。其西南得國四。即四國也。曰阿波。讚岐。土佐。伊豫。合稱南海道。南海之西。得國九。即九州也。曰。豐前。豐後。筑前。筑後。肥前。肥後。日向。大隅。薩摩。稱西海道。及桓武天皇。定都山城。（即位元年、甲戌、唐德宗貞元十年）自山城之背。緣北海而東北上。得國七。曰若狹。越前。加賀。能登。越中。越後。佐渡。稱北

陸道。自大和。緣南海而東上。得國十五。曰伊賀。伊勢。志摩。尾張。參河。遠江。駿河。甲斐。伊豆。相摸。武藏。上總。下總。安房。常陸。稱東海道。自其北東上。定國八。曰近江。美濃。飛彈。信濃。上野。下野。陸奥。出羽。稱東山道。明治元年。（清穆宗同治七年戊辰）分陸奥爲五國。曰磐城。岩代。陸前。陸中。陸奥。又分出羽爲二。曰羽前。羽後。二年。置北海道。分蝦夷地爲十國。曰渡島。後志。石狩。天塩。北見。膽振。日高。十勝。釧路。根室。於是。一畿八道。爲國八十五。爲郡六百七拾貳。封建制廢。郡縣治興。所謂行政區劃者。則三府。一廳。四十三縣也。府縣置知事。廳乃長官。並皆統轄國郡政治。隸於內務省。二十八年。臺灣一島。復歸我版圖。特置總督府。自與三府。異矣。二十九年。置縣三。曰臺北。臺中。臺南。置支廳十又二。曰淡水。基隆。宜蘭。新竹。苗栗。鹿港。捕里社。嘉義。雲林。恒春。臺東。澎湖。縣隸於府。支廳屬於縣。三十年。除宜蘭。臺東。澎湖外。盡廢支廳。增設新竹。嘉義。鳳山。三縣。更置辨務署七十八。自是厥後。王化漸洽。政令益行。再改地方

官制。三十四年。廢縣。置廳凡二十。日臺北。基隆。新竹。深坑。桃仔園。苗栗。臺中。南投。彰化。斗六。嘉義。臺南。鳳山。蕃薯寮。鹽水港。阿猴。恒春。宜蘭。臺東。澎湖。直隸於總督府。蓋欲使臺灣。如北海道廳也。是爲國疆之大要。餘當與地圖略表對照矣。

始通漢土

往古邈矣。載籍不備。我之通漢土。未能詳知其始於何時也。然孔子既知東海。有君子國。故曰。君子居之。何陋之有。又曰。道不行矣。乘桴浮海。解者。援吳越春秋。言是孔子游于吳。東望日本之時也。故漢人稱我邦。曰君子國。尙矣。唐玄宗曰。禮義之國也。（曲江集所載國書、或曰、是文、張九齡奉詔所作云、）王維曰。海東諸國。日本爲大。服聖人之訓。有君子之風。正朔本乎夏時。衣裳同乎漢制。宋太宗曰。古之道存焉。（宋史）然而。交通之啟見史書。實始于秦云。神皇正統記云。秦始皇好仙。遣使求長生不死之藥。因附五帝三王遺書。是爲第七代孝靈天皇七十二年事。（秦始皇二十八年癸未）歐陽修作日本刀歌云。俾聞其國居大島。土壤

二

三

沃饒風俗好。其先徐福詐秦民。採藥淹留丱童老。百工五種與之居。至今器玩皆精巧。前朝朝貢屢往來。士人往往工詞藻。徐福往時書未焚。逸書百篇今猶存。（文忠公全集）元鄭思肖歌云。東方九夷倭一爾。海水截界自區宇。地形廣長數千里。風俗好佛頗富庶。土產甚夥幷產馬。紺來中國通商旅。徐福廟前秦月寒。猶怨舊時嬴政苦。明太祖亦召我僧中津於英武樓。（中津夢窗國師弟子、詳載本錄）問徐福事。中津賦詩以答。曰。熊野峯前徐福祠。滿山藥草雨餘肥。只今海上波濤穩。萬里好風須早歸。太祖喜。賡其韻曰。熊野峯前血食祠。松根琥珀亦應肥。昔時徐福求仙藥。直到如今竟不歸。宋濂爲跋其詩文。又豐存叔作謙齋記曰。徐市避秦航海。携詩書以去。實出坑焚之前。歐陽公所謂令嚴不許傳中國者。是也。近世有陳資齋者。曰。日本人皆嬴姓。畢姓者。徐福配合之童男女也。徐福所居之地名徐家村。其塚在熊指山下。（誣妄謬說）要之。徐福之來。固無可疑。而其來也。猶孔子乘桴浮海乎。蓋徐福豫知秦之不可永保天下。藉口仙藥。以謀飛遯也。

至其曰許秦氏。及畢姓者。徐福配合之童男女也。未讀我書者之言。不足深咎。我邦。有姓氏錄者。甄別姓氏。分爲三。一曰神別。天神之後也。二曰皇別。出自皇族者也。三曰蕃別。謂漢韓歸化人等後也。姓秦者。卽其一也。又古語拾遺云。秦公祖弓月。率百廿縣民。歸化。秦酒公娶秦氏。掌機織事。故秦讀曰哈打。謂機也。（詳載本篇太秦廣隆寺條下、近世、尾張儒員、有綦毌者、刊行春秋左傳校本、）故畢姓者。豈止徐福後也哉。熊指。卽熊野誤。而徐福塋。在紀伊國。東牟婁郡新宮東。（詳載本篇高野山條下、）又無徐家村名。陳氏之言。盡出謬傳。然德川氏之初。（明末清初）文運隆盛。儒者心醉漢學。爭倣其俗。惡我複姓。改爲單姓。荻生徂徠。字曰茂卿。乃省物部姓。曰物茂卿。至於其甚。則不敢鑿我國体。以我國祖。爲吳泰伯後裔。（林某所著本朝通鑑）譬猶今代汨沒西學者。動輒說歐米文化。而不復以我道。介於其懷也。是古今學士之通弊也。嗚呼。博覽東西之群籍。深察世界之大勢。辨內外。量輕重。明大義。正名分。眞能講究聖賢正道者。方今天下。果有幾人乎。

一三

始通三韓

朝鮮之於我。僅隔一葦帶水耳。故其所關係。自古尤密矣。史云。崇神天皇。六十五年。戊子。（漢元帝竟寧元年）任那國始入貢。然朝鮮史籍。無任那國。獨有伽倻國。屬今慶尙道。余嘗作任那辨。按査古今地勢。論斷彼所謂伽倻國。卽爲我所謂任那國。及後讀高勾麗古碑。果有追至任那加羅句。（吾友中村伯寅、著高勾麗古碑徵、曰、高勾麗廣開土王碑者、在鴨綠水北洞溝、舊埋地中、至二三百年前 而始見云、石高三丈、廣約其半、四面皆有文字、大字深刻、字體奇古、類漢隷、而南方者、凡十有一行、西者十行、北者十有三行、東者九行、總爲四十有三行、每行四十有一字、計一千七百六十有三字、而殘損剝泐、不可得而識者、一百八十有二字、存片形者十有二字、近者、淸國盛京鎭將、遣工打搨、閱歲未就、會有我陸軍員弁、巡遊過焉、投金獲之、歸而納於秘閣、珍幅在博物舘 好古之士、因得覩之、云云、又古碑百濟作百殘）於是。益信我史之正。而喜余見之不差也。蓋自任那國一入貢後。新羅百濟高麗。無歲不來朝。至仲哀天皇。（後漢獻帝）征服三韓。當是之時。三韓實爲我屬國。（後漢書云、韓有三種、曰馬韓、辰韓、弁韓、馬韓在西、有五十四國、北與樂浪、南與倭接、然我所謂三韓、謂新羅百濟高麗也、）我不獨載之史冊。古碑云。倭以辛卯年。來渡海。破百殘新羅。以爲臣民。天下郡國利病書亦云。日本屬國有五十餘國。如新羅百濟。皆屬焉。又與

一四

地勝覽云。濟州本耽羅國。耽羅國記云。厥初有三神人從地湧出。曰良乙那。高乙那。夫乙那。曰遊獵荒僻。皮衣肉食。一日。見紅帶紫衣人。載青衣處女三。及駒犢五穀種。航海而至。曰。我日本國使也。吾王生三女。知西海中。降神子三人。將開國。而無匹。故送此三女。三那以歲次。分娶之。播五穀。牧駒犢。日就繁庶。高乙那十二代孫高厚。高淸。昆弟三人。造舟渡海。泊於耽津。時新羅國稱極盛焉。太史奏客星見南方。異國人來之象也。及厚等至。王嘉之。稱厚曰星主。以其動星象也。令淸出袴下。愛如已子。稱曰王子。又號其季。曰都內。國號耽羅。今濟州牧鎭山北麓。有毛興穴。即三乙那湧出處也。徵諸我史。往古。有素戔嗚尊渡韓等事迹。然則。當時我邦之於三韓。豈止屬國云哉。明儒或曰。日本被箕子之化。或曰。予惟日域。本箕子之遺。嗟夫妄誕之言。今不辯焉。而自明矣。後世李氏朝鮮第十世主。曰康靖王。（我文明三年辛卯、即明成化七年）宰相申叔舟將死。王問其所欲言。對曰。請勿與日本失和矣。叔舟之言。吁亦偉矣。（叔舟嘗著東國記）今距其

死。既踰四百餘年。其間。失和則其國危焉。不失和則其國安焉。夫朝鮮介在三大强國間。惴惴焉。唯不奉事大之道。是懼。抑以接其壤。親之乎。又以隔其海。疎之乎。開口輙曰。輔車相依。又曰。同文同種。而其心苟存猜疑。不推誠締交。則世界各國。盡其敵國也。豈獨一葦帶水之邦也哉。留心當世者。盍少鑑叔舟之言焉。

文學宗教

我邦固以武興矣。而大義存焉。故又稱尚義尚武之國也。夫既曰國則有道。有道則有文。文者。載道之具。世界各國。孰謂有無道無文之國哉。我道初稱神道。文則有神代文字。假名文字之類。然我邦之以文學教化。潤色政法者。始於得經秦韓。終於通好隋唐。而集大成之者。乃有儒教與佛法也。以是。後世総稱神儒佛三道。（寰宇記云、日本初無文字、唯刻木結繩、後頗重儒書、有好學能文者、尤信佛法、有五經書、及佛經、白居易集、此記頗得眞、然曰無文字者、亦未通我國情也）蓋百濟初貢魯論。皇子稚郎子好學。博通墳典。大與儒教。後閱二百六十八年。欽明帝之時。（即位十三年壬申、梁元帝永聖元年）百濟又獻金銅

（注）[illegible]……不復足怪。於是。自改法律令。至宮室衣冠。盡倣唐制。官分文武。初有文臣武士之別。菅原。清原。大江諸氏。世掌學政。拜文章明經諸博士。而後世儒家。講經世學者。鮮矣。屬文賦詩。應酬唱和。互相誇耀。翺翔朝廷之上。無復以天下爲己任也。而奉佛法者。或奉天台。或唱眞言。切說福田利益。奔走於朝野間。拓山架水。更業殖產。天子尊奉之。爲建伽藍。士民歸依之。喜捨淨財。佛法漸盛。儒教稍衰。而武士者。武斷鄉曲。除暴平亂。當是之時。天子擁虛器。公卿耽詩歌。舉朝流於文弱。軍國政事。專委武門。於是。封建制成。朝廷遣使漢韓學典。絕矣。

一六

一七

佛像及幡蓋經論。上表。讚述其功德無量。詔下群臣。議之。皆奏不宜也。獨大臣蘇我稻目尊崇之。廐戶皇子。亦嘗讚法華勝鬘二經。有所得焉。藉以定憲法。設制度。又創建寺觀於諸國。號國分寺。廐戶皇子。世所謂聖德太子也。後又閱五十六年。推古帝。始遣使于隋。既而隋亡唐興。更置遣唐使。當是之時。留學生及僧侶。游學于唐者。大抵無虛歲。其行也。解纜浪華。（即今大阪）取途三韓。越渤海（今所謂遼東半島）過登萊（今清國山東省登州萊州二府地方）遂至長安。（今陝西省）其歸朝也。交說漢土文物之美。（今引隋唐書、[illegible]）

源頼朝開府於鎌倉。三世而亡。北條氏九世。居執權職。自宋孝宗淳熙十三年、至元順宗元統元年、凡百四十八年 足利氏十三世。拜將軍職。自元順宗至元四年、至明神宗萬曆元年、凡二百三十六年 此間。禪宗尤盛行于世矣。僧侶參預機務。論議政事。此時、親鸞日蓮二僧、前後相繼而起、不喜渡海遠求佛蹟、特創日本宗旨、詳載本編各條、故北條足利二氏之遣使漢土。每用此輩。儒教亦歸其手。足利學校。金澤文庫之類。實建於此時云。北條時宗之防禦元寇、足利義滿之受明封冊、以及足利學校等事、詳本編各條中 抑又儒教不獨爲爾。先是。僧徒唱本地垂跡說。以我國神。爲諸佛出現。曰八幡大菩薩。曰稻荷大明神。曰熊野大權現。是類。不勝枚舉。則曰。其本則三世諸如來。十地大薩陲也。於是。神道云者。萎靡不振。纔藉祝史之口。以傳其一端耳。足利氏衰。群雄割據諸國。稱戰國之世。周防大內氏、出雲尼子氏、遣使朝鮮、而九州悍猛之民、遠征漢土、彼所謂倭寇是也、 織田豐臣二氏。相繼而起。大亂初平。自明神宗萬曆貳年甲戌、至三十年壬寅凡、貳十九年 時天主教。亦入自西洋。然我邦益得講究築城放礮。天文水利之術者。未必不由於此徒之力也。我邦城樓、稱天主臺、始於織田氏築城安土云、 九州諸侯。多奉其教者。或將圖不軌也。觀光日本云、阿母辣國王、(即大村氏)阿打母國(即大友氏)斐蘭朶(即平戶松浦氏)阿拉瑪王(即有馬氏)亞瑪放撒島主

(即天草氏)撒騣瑪國人(即薩摩國也)是等諸氏、皆九州牧伯也、而逮各撒瑪本一樵子、忽躋大寶、立爲總王、天主聖教、初不禁止、後即下令、嚴禁奉教、定以十字之刑、棣福撒瑪及登王位、後暴虐不堪、圖滅聖教、凡奉教者、不論親疏、不分貴賤、強之背教、不背者、問罪遂竄、朝中倘有教友、若即查明、以便拘拿究辦、時查得十六大臣云云、其曰逮各撒瑪者、即太閤様、而謂我豐臣秀吉也、我邦有關白職、關白致仕、乃稱太閤、様字亦尊稱、猶言閤下閣下、棣福即大夫平、然據伐高麗等事、則知其與逮各同人也、今通覽其書、如混說織豐德三氏時代者、蓋侯伯之奉教者、欲藉以舉兵、覬天下也、高山長房、稱右近、歷事織豐二氏、見禁令漸嚴、乃遁逃海外、避其嫌疑、不知所終、若夫天草之亂、當在本編詳說 及我德川氏起。東照公以賢明之資。考既往察將來。遠謀深慮。尤重儒術。召聘藤原惺窩林羅山等。講經讀史。刻書行世。儒教亦大興矣。然於佛教。不肯度外視之。如僧天海。常參帷幕。既嚴海禁。獨允准漢土荷蘭二國商舶。往來貿易於長崎港。而令西洋人無復至我國界。只恐布其教也。既公老于駿河。屢召蘭人。親問海外各國之狀勢。以供政教之資。蓋近世洋學之行。實胚胎于此。第二世台德公襲職。更禁天主教。驅逐其徒。第三世大猷公之時。教徒作亂于嶋原。公大怒。遣兵討滅之。令無遺孽。第五世常憲公。右文之主也。創建聖廟。又設學校。養材於此。取士於此。諸侯伯亦爭傚之。天下翕然。四方嚮學。中江藤樹。野中兼山。伊東

仁齋。新井白石。熊澤蕃山。荻生徂徠。柴野栗山。鴻儒碩學。彬彬輩出。二百六十四年于玆。或曰。不敢讓於彼康熙乾隆之盛也。蓋非誣言。明治中興。王政復古。百度維新。廢封建爲郡縣。詔不使神佛混淆焉。學制亦屢變矣。乃分學校。爲大中小。以謀教育之洽於天下。而宗教則任於各自信仰。於是。萬機整然。全歸畫一。是爲我文學宗教。變遷推移之大要。雖然。我邦亘千萬世。終始貫通。未嘗澌滅者。獨有東方一大正氣焉耳。卽是義也。何關於儒釋與天主教哉。(元丁復扶桑行)扶桑之國人、寧殺不受辱、豈不謂、死亦何短、生亦何長、身在義所耻、身死義不忘

江戸處士淸水赤城。名正德、字俊藏、赤城其號、又濟菴、隱居講道、終生不仕、四男一女、伯曰正巡、繼家、仲曰正則、善槍劍法、其子正熾、事德川氏、叔曰正順、冒大橋氏、明治廿四年、贈從四位、季曰正春、亦事德川氏、女適村田氏、淡菴漫錄云、遭遇明主、輔翊廟謨、用其道、以康濟天下、此學問之極功、學者之宿志、斯爲遂矣、然是古今希有之事、千載奇遇、不可必得也、其次則讀先王之書、行聖人之敎、以天下之善人爲友、聞天下之善言爲樂、賦詩屬文、以寓胸懷、此人生一大快事、吾亦得與焉、況風月召我以煙景、山水假我以淸音、行無所牽、止無所抗、以此終吾生、不知榮枯得失爲何等物也、總可附之一笑、又曰、大丈夫志乎學者、雖無其位、固當以天下事、爲已任也、如此、則其學不安乎小成矣、然亦不可有奇激釣聲譽之行也、古語云、士大夫、當有憂國之心、不當有憂國之語、元丁翁云、士無求用於世、惟求無愧於世、余居常思此二語、以自勵、可謂至言矣、以儒爲業。又善兵法。每誡子弟曰。儒者。濡也。濡萬物也。

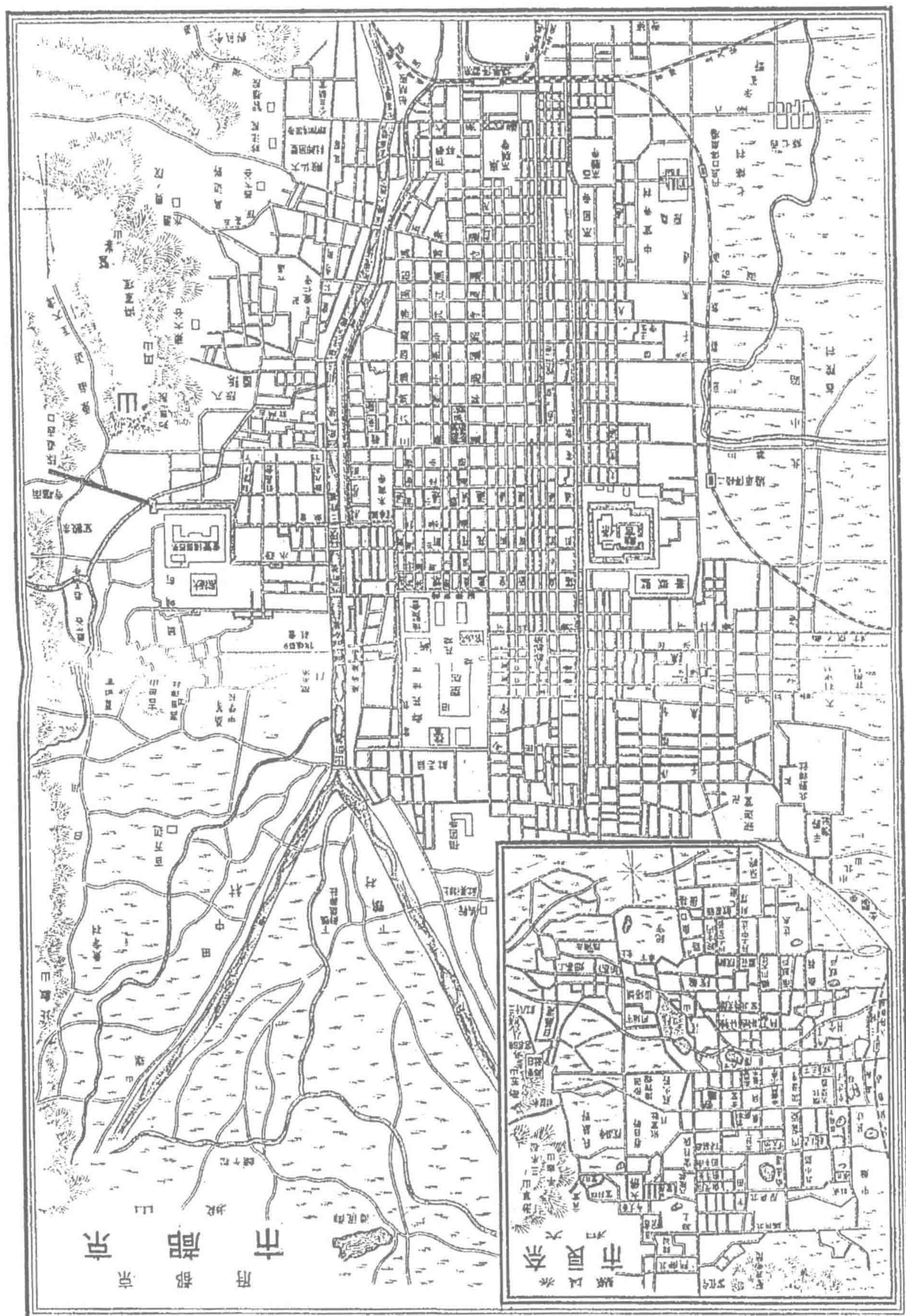
故退則獨善其身。進則兼濟天下。然凡亂國家者。亦儒生也。無他。空論其文。不實行其道也。若彼趙宋。尤爲其顯著矣。嗚呼。方今之時。豈止趙宋哉。淸韓志士。亦不可不深察焉。夫儒生之固守舊株者。不喜脩新智者。脩新智者銳進。守舊株者姑息。故方其去舊就新。取長捨短。擬議政法。討論學術之時。枘鑿不相納。意思相背馳。守舊者在朝。則脩新者不被用。必降在野。在野則不平之氣。鬱勃四方。凝結生不平之徒也。於是乎。朋黨起。朋黨起則軋轢生。軋轢生則人人唯知有其黨。不知有其國。爭權競勢。上下離亂。內訌之不能禁。外侮之不能禦。而後國家危焉。余又嘗聞之西儒。曰。俄國不喜其國人之游學海外。通觀世勢。歸朝之後。黨與結托也。然而志士出游四方者。歲不下數百人。嗚呼。閉鎖港口。不敢交通各國。獨守其國。則止。苟不然。將有大成之國。豈得如此。況於崇尊孔子之國耶。我邦。明治之初。守舊者退。脩新者進。頃之。新舊交用。遂成今日文明之昭代。雖固出於國體之異乎各國。與列聖德澤。入人之深

也。然亦焉知無不由於宿儒諸生。夙奉名教。明大義正名分者之多也哉。孔子者。大聖人也。而問禮於老子。又曰。乘殷輅。服周冕。樂則韶舞。又曰。殷因於夏禮。所損益。可知也。周因於殷禮。所損益。可知也。然則。能觀世變。與之推移者。是之謂聖人乎。宋儒喜講性理學。曰。變化氣質。其所謂變化者。豈獨人生自脩之法哉。國家亦爲然矣。唯要不失其本性也。泰山不讓土壤。故大。河海不擇細流。故深。方今學者。不可無此氣概也。夫是古非今。實學者之通弊也。可不戒焉哉。余故曰。不以其人。而廢其言。可矣。

京都府

夫三府者。謂東京府。京都府。大阪府也。世有爲說者。曰。東京。政治之地也。京都。歷史之地也。大阪。商工之地也。而東京現爲首都。宜先起筆於此耳。然本編今特所以京都爲先。大阪爲次。東京亦次之。專據五畿八道之舊例。而不遵照行政區域者。無他。京都。歷代都邑之遺蹟。多存。大阪則設第五回萬國博覽會之處所。且清韓游客。自西晉東。探勝沿途。準據舊例。尤爲便宜。故有斯變通耳。讀者諒諸。

輿警。人皇第五十代。桓武天皇。延曆三年。唐德宗興元元年甲子遷都山背。經營宮城。於長岡上。而土地狹隘。不足以表萬乘之尊也。和氣清麻呂奏請更相葛野地方。十二年。唐貞元九年癸酉正月十五日。勅大納言藤原小黑麻呂。左大辨紀古佐美。及沙門賢璟。前往踏查。旣置造宮職。庶民子來。宮殿漸成。十三年。唐貞元十年甲戌十月廿二日。自長岡。遷新都。十二月八日。詔曰。此國形勢。山河襟帶。自然成城。宜改山背爲山城也。子來之民。謳歌之徒。


京都市
京都府
奈良市
奈良縣

異口同辭。稱平安京。今當從之。明年。大極殿成。十五年。（唐貞元十二年丙子）正月朔日。天皇御太極殿。百官朝賀。今溯查都城疆域。北自一條。南至九條。東自京極。西至西京極。南北壹千七百五十三丈。東西壹千五百零四丈。正南設門。曰羅城門。四方築雉牆。開濠渠繞之。城中有堀川。大宮川。洞院川等。道路則東西大路。分爲九條。小路二十又六。南北一貫。以朱雀大路。劃爲中央道。廣二十八丈。其東曰左京其西曰右京。兩京亦各分大路四條。小路十一。其坊三。曰北邊。桃花。銅駝。兩京無復不異。其他。教業。永昌。宣風。淳風。安衆。崇仁。陶化。七坊。屬於左京。豐財。永寧。宣義。光德。毓財。延嘉。開建。七坊。屬於右京。方四十丈爲町。四町爲保。四坊爲條。條有坊令。坊有坊長。專掌坊間庶務。東西有市司。司商賈事。又置左右京職。辦理都下一切事宜。防鴨河使。掌治水工事。而命盜逃姦。欵竊雜犯。盡歸彈正臺。及檢非違使。稽察處斷。凡三百年。平安之都。最極其盛。至藤原氏。以外戚擅政權。搆造第宅。建立寺觀。平安之繁

華。歸鴨川而東漸。於是。京白河之稱。起矣。藤原氏衰。源平二氏迭興。兵亂交起。平氏奏請遷都攝津福原之後。延曆舊規。亦云壞廢。既而平僨源起。有承久之役。北條氏置探題于兩六波羅。（探題、官名、有六波羅探題、九州探題等）有南北朝之戰。足利氏置幕府于室町。應仁亂後。海內分裂。群雄角逐。龍戰虎鬪。爭鹿中原。京師每爲其要衝。第宅寺觀。大抵皆罹兵燹。遂失昔日平安之觀。壹百年于茲。織田豐臣二氏。屢脩理皇城等。大興土工。整革坊市。王公之宮。諸侯之邸。擁其四邊。商賈輻輳。而德川氏。開府江戶。尤致力於京師。宮殿寺閣。益加宏壯。更置京都所司代。（所司代、官名、市尹之類）施安民勸業之政。天明八年。（淸乾隆五十三年戊申）正月。京師大火。延燒皇城。光格天皇。詔德川第十一世將軍。專倣古制。再造宮殿。老中職松平定信董役。儒員柴彥輔亦與焉。二年而成。天皇大喜。賜御製詩。曰。遙慕周文囿。不羡漢武臺。舊章一是率。新築本非催。百工忽告竣。鑾駕自東回。拭目向城池。城池亦善哉。兩殿應規矩。四門総雀鬼。燕雀繞檐集。櫻橘挾階栽。豈其爲

逸謀。講禮共徘徊。委佩群僚會。將幣九州來。素心既已足。起臥感鹽梅。欣然歌思勁。乙夜蒲言裁。後閱六十三年。宮中失火。安政三年。(淸文宗咸豐六年丙辰)幕府奉旨。復再經營之。遂致中興大業。德川第十五世將軍納旌鉞。天子躬親政。明治元年。(淸穆宗同治七年戊辰)八月廿七日。今上天皇。行卽位禮。今紫宸殿。是也。於戲懿哉。於戲盛哉。明年。遷都江戶。改名東京。蓋自延曆甲戌。建平安京。至於明治己巳。實爲壹千零七十六年矣。餘詳本編各條。

山城(讀曰阿媽斯羅) 往昔作山代。又山背。後改今字。東南接近江伊賀大和。西北界河內攝津丹波。三面皆山。蜿蜒逶迤。繞東北西。唯缺南方一面。土地平坦而膏腴也。全國十八郡。戶數。拾壹萬零九百又奇。人口四拾九萬七千貳百餘名。

京都市(讀曰氣約屋托、) 市役所。在寺町通御池北。今世。施行市町村制。盖大於村者。謂之町。大於町者。謂之市。而京都市袤廣。東西貳里貳町。南北壹里又半。分爲二區。

三條通北(通者、謂通路、後倣此、)曰上京區。戶數貳万七千七百又奇。人口拾壹万九千三百餘名。其南曰下京區。戶數三万六千八百又奇。人口拾四万壹千七百餘名。是其大略也。後倣此(賴旭莊詩)奠都千秋又萬秋、西人莫說夏商周、叡山北峙皇基固、鴨水南通王化流、滿地伽藍多古跡、一天烟雨入新愁、佛威更助昇平觀、輻輳扶桑六十州、(明宋濂詩)伊水西流曲似環、宮闕遙映鶴龍山、六十六州王一姓、千年猶效漢衣冠、

御苑內 舊稱御築地內。築堤劃地之謂。往時。諸王大臣第宅建焉。明治遷都之後。更爲遊園。栽培樹木。総稱御苑內。東西六町。南北拾壹町。面積貳拾五萬坪許。(地積六尺四方曰坪、我六尺即漢度三十六尺餘也、)苑南。池沼橋梁。別爲一佳境者。卽九條公之第趾(明宋濂詩)藤橘源平族四家、迦城甲第競紫華、治書省內多官使、貲騍紛紛駿五花、其自註云、藤橘源平、國中四大姓、治書省、乃官署名、有尙書侍郞郞中主事、及鴻臚卿丞之屬、其印文曰太政官印、海外詩文亦足以想見當時狀也、

內裏 又曰禁裏。謂皇居也。在御苑中央。週圍女牆。門五。南曰建禮。(又稱南門、正門也、)東曰建春。(又日之御門)西曰宜秋。(又公卿門)曰談天(俗稱盜所門)北曰朔平。紫宸殿。在建禮門內。更繞女牆。門三。曰承明。曰日華。曰月華。從此三門。以至階下。淸涼殿。常御殿。小御所。御學問

所。准后御殿等。在焉。今不能詳記之。(栗山詩)上苑西風送桂香、承明門外月如霜、何人今夜長生殿、一曲霓裳奏御觴、大宮御所。皇太后宮殿。在內裏東南。仙洞御所。往時。上皇宮殿。在大宮御所南。安政元年。(咸豐四年)罹災。池沼園林。幽邃閑雅。今尚存。

祐井　在朔平門東北。舊屬公卿中山氏邸。今上降誕處所。清泉湧出。號曰祐井。蓋據皇儲時稱祐宮。前京都府知事槇村正直君建碑。詳記其事。以傳不朽。

相國寺　號萬年山。又稱相國承天禪寺。在今出川御門北。臨濟派之本山。而爲京都五山第二。至德元年。(明太祖洪武十七年、甲子、)足利義滿所創建也。(義滿事載金閣寺條下)命僧妙葩。爲其開祖。妙葩固辭。追請其師夢想國師。爲開山第一世。而自居第二世。妙葩號春屋禪師。後小松天皇。崇信甚厚。賜號曰智覺普明國師。任諸山僧錄司。僧錄司之職。始於此。嘉慶二年。八月十三日寂。年八十二。(明洪武廿一年戊辰)寺屢罹災。然其什寶。存至今。亦不少。陸信忠筆十六羅漢。米南宮墨蹟。奉加帳壹卷。異國通船印鑑十三通。是其

充也。(明宋濂有日本夢窓正宗普濟國師碑銘、今摘其要、以供參考、曰、日本有高行僧夢想禪師、諱智曤、姓源氏、勢州人、宇多天皇九世孫、父某、母某氏、無嗣、默禱觀音大士、夢吞金色光而孕、歷十又三月始生、九歲出家、十八爲大僧、禮慈觀律師、受具足戒、尋學顯密二致、既夢遊中國疎山石頭刹、一龎眉僧持達摩像授之、曰爾善事之、既寤、拊髀嘆曰、洞明吾本心者、其唯禪觀乎、遂更名疎石、字夢想、謁無隱範公於建仁寺、云云、其嗣法上首、天龍曰志玄、曰妙葩、建長曰慈永、南禪曰通徹、曰周澤、所度弟子、載名于籍者、一萬五千有餘、云云、今案、天龍建長南禪、皆京都寺號、餘散各寺條下、又明使僧道彝、和中津詩序云、建文壬午、秋、余使日本、一見萬年山中、沐以僧游爲懷、數相詢慰云云、此所謂萬年山中者、即相國禪寺也、又(祝允明詩序)答日本使姓橘名省佐、相國寺僧、曰、日邊來處幾何時、閒說占申復到寅、遙仰北辰趨帝座、郤經南甸駐行麾、詩名愧動雞林客、國歸欣參鷲嶺師、回首山川渾渺邈、只看明月慰相思、)

惺窩先生塋　墓在塔頭林光院。先生名肅。字斂夫。惺窩其號也。細野氏。下冷泉爲純卿之子。幼好學長不倦。戰國之末。天下無復說道者。先生首唱宋儒性理學。林羅山。其高足弟子也。世稱儒家中興祖。惺窩文集。刊行于世。元和五年(明神宗萬曆四十七年己未)九月十二日卒。年五十九。明治廿六年。贈正四位。

同志社　在相國寺門前。新島襄所創設也。襄。群馬縣人。夙游米國。奉耶蘇教。多歷年所。既歸本朝。與內外同志謀。私立普通。神學。政法等各學校。因稱同志社。社者。

文社學社之義也。

上御靈神社　在鞍馬口。神社者。祠廟也。御靈者。謂往昔諸王大臣。寃枉就死。爲祟之神靈也。有上下二社。下御靈社。在寺町通丸太町南。其所奉祀之神。曰早良親王。曰伊豫親王。曰藤原吉子。曰文屋宮田麻呂。曰橘逸勢。曰藤原廣嗣。曰吉備眞備。曰菅原道眞。朱雀天皇。天慶二年。(晉高祖天福四年庚子) 勸請建立云。(逸勢善書、眞備博學、皆留學于唐、而道眞爲我邦文學之神、事詳載北野神社條下、)

盧山寺　在寺町廣小路南。初在安居院大宮。今盧山寺町。是也。開祖曰元三大師。兼學台密淨律四宗。稱與願金剛院。中興住持。曰住心。時有一僧來。曰。我唐僧惠遠也。乃書盧山二字。示之。因更稱盧山天台講寺。有巨勢金岡筆普賢像。張思恭筆觀音像等什寶。(唯賀詩)拾得自身無價寶、稷々降雨不須求、世間琛貝都難並、倒用楼拈得自由、其序云、日本盧山天台講寺照探侍者、奉王命來覲天朝、被寵資還國、道經鄞山、以字見請、予字之曰大用、朋爲吾宗之闡法人也、就書偈以俟進、是爲永樂二年、正月十三日、唯寘、號惟菴、時居竺住山云、

梨木神社　奉祀贈右大臣從一位藤原實萬公之處。公三條氏。夙懷尊王大志。竊謀抑壓幕府。連罹奇禍。未嘗屈撓。遂爲明治中興之礎。嗣曰實美公。克繼父志。輔化鴻業。世稱明治第一勳臣。明治十八年。建祠于梨木町。三條氏邸趾。因稱梨木神社。

護王神社　在烏丸通下長者町。奉祀贈正一位和氣清麻呂。及贈太政大臣藤原百川兩公之處。嘉永四年。(淸文宗咸豐元年辛亥) 賜號護王大明神。初在高雄山神護寺。明治七年。(淸穆宗同治十三年甲戌) 十二月。勅列別格官幣社。遷座於此。二公誠忠大節。赫耀青史。今不復贅。(梁川星巖詩)徵公天日不能中、公乃當朝第一功、千歲君臣存道義、優恩詔下表誠忠、

革堂　在寺町通竹屋町。寺號行願。屬延曆寺。開祖曰行圓上人。九州人。遊京師。每戴寶冠。服革衣。世呼革上人。其堂曰革堂。安置十一面觀音像。長八尺許。初在一條通新町西。今革堂町是也。

飯田忠彦墓　在河原町二條北。專修寺里坊。忠彦字子邦。周防人。少通經史。兼修武藝。仕有栖川王府。擢爲侍臣。著日本野史貳百九十餘卷。以繼水戶大日本史。萬延初。（咸豐年末）爲覇府所嫌忌。被囚。既放。又連坐梅田雲濱事。忠彦憤慨屠腹而死。時文久元年（淸咸豐十一年）五月二十七日也。年六十三。明治二十四年。四月。贈正四位。

本能寺　在寺町通押小路南。日蓮宗。勝劣派之本山。開祖曰日隆。又號慶林坊。初妙顯寺僧日齊。始興勝劣派。至日隆。更建一寺。爲勝劣派本山。（日蓮宗又稱法華宗。日蓮上人之所首唱也。與眞宗。盛行于天下。詳載本國寺條下）往昔。寺在六角南油小路東。今本能寺町。是也。織田右府之遇弑也。（天正十年壬午六月、（明萬曆十年）織田信長次本能寺。其臣明智光秀襲之。詳載建勳神社條下）即是處也。寺什有張瑞圖七絶等。

鴨川　又作加茂川。其源有三。一發百井嶺。過大原八瀨高野。一發小鹽山。過鞍馬貴船。一發丹波國境。東流至中津川。會貴船川。更至加茂。相合高野川。因稱河合。或曰糺川。又自二條三條。至大和橋西。復合白川。自四條五條七條。至桂川。更相

灑會。流至淀橋下流。合宇治川。遂經大阪入海。厥水淸冷。自古有名。又每年盛夏炎熱。設凉棚於四條橋下。稱曰四條納凉。（後藤松陰詩）熱鬧笙歌夾岸聲、紅燈燦爛夜三更、可憐鴨子川頭月、閑却消凉幾夜明、

三條大橋　長五十六間。幅四間又半。（六尺曰一間、淺度三丈六尺、）天正十八年。（明萬曆十八年庚寅）豐太閤。命增田長盛等。架之。橋欄柱頭。有所謂擬寶珠者。（銘云磐石之礎、入地五尋、切石之柱、六十三本、云云）用紫銅。鑄造之。往時。此地。爲往來交通之要衝。故建一大標木。揭示至於傍近諸國之里程。分京都。於上下兩區。亦是爲經界。而客舍之多。蓋莫過於此地。

疏水運河　明治十八年。（淸光緒十一年甲申）一月。起工。二十五年。竣工。凡閱八年。又新開運河。至二十七年。全成。是爲京都一大事業。實係前京都府知事北垣國道君之所唱導經畫。今摘記其要。曰。疏水運河云者。導引近江琵琶湖水。於京都市內也。山城近江。相距數里。大津市東北。有三保崎。穿山鑿巖。掘濠開隧。循三井寺山麓。至逢坂山。其長一千三百四十餘間。是爲第一隧道。其西口。卽滋賀郡藤尾村也。自

藤尾村繞山。達山城日岡山。是爲第二隧道。其長貳千貳百七十三間餘。既過其隧。而至南禪寺南。分爲二路。曰幹線。曰支線。幹線過寺前。西折過白河。自丸太町橋。南會鴨川新運河。支線則循山北進。過若王子鹿谷淨土寺。至白川村。西過高野加茂川底。過京都市北。遂入堀川上流小川頭。隧道凡六。第一二三。屬幹線路。第四五六。屬支線路。幹線路。自三保崎。至鴨川東岸。長六千壹百零七間。支線路。自第四隧道北口。至小川頭。長四千零三十八間有奇。而其計利於今日。流澤於萬世者。舉其尤大者六。曰。藉水力。用機器也。水力電氣、即是。曰。便水利。行舟楫也。曰。偏僻郡邑。灌漑甚便也。宇治紀伊愛宕葛野四郡地方是也。曰。設水碓於各處也。曰。市街引水。一則補井。一則供防火之用也。曰。掃除溝渠。常期清淨。不使濁氣浮動。以講衞生之道也。頃者。市民相謀。建設北垣君銅像。於此地方。以表其偉功。不亦宜哉。

帝國大學　在吉田町北。又稱京都帝國大學校。直隸文部省。係明治三十二年開設。

其各專門科學。不異於東京大學也。病院則在聖護院町。

大極殿　自桓武天皇延曆十三年。遷都平安。至明治廿八年。實爲壹千壹百年。於是。京都市民。捐貲相謀。擬古大極殿。建之。有蒼龍樓。白虎樓。龍尾壇。應天門等。又稱紀念殿。欲永使後世。不忘其遺澤流風焉耳。

平安神宮　在大極殿北。奉祀桓武天皇之處也。勅賜號平安神宮。列於官幣大社。按史。皇祖都于大和而還。列聖皆居奈良。世謂南都。至於天皇。始遷都於山城。稱長岡宮。今葛野郡上羽村、有長岡之宮趾、俗呼曰御所屋敷、時延曆三年也。唐德宗興元元年甲子 十三年。唐貞元十年甲戌 更大經始宮殿於其東方。十八年。落成。唐貞元十五年己卯 乃稱平安宮。勅賜神號。蓋據此云。

聖護院　在聖護院町。初稱常光院。後改聖護院。天台宗。開祖曰智證大師。仁壽中。仁壽元年辛未、唐宣帝、大中七年、遊于唐。既歸。建止觀堂。以繼其師最澄之志。又爲本院開祖。詳載延曆寺條下、僧正增譽。住持此院。爲熊野三山別當職之後。法親王世襲住職。專掌天台修驗

法。今乃廢矣。

金戒光明寺　在岡崎町。號紫雲山。淨土宗鎭西派之本山。開祖曰源空上人。美作人。父名時國。爲久米押領使。年甫九歲。爲僧。號法然房。年十八。登比叡山。從西塔黑谷慈眼房叡空。兼脩諸宗。有所自得。更名源空。承安五年。（宋孝宗淳熙二年甲午）三月。創唱淨土宗。時年四十三。時有紫色雲。起自石上。因爲山號。又初居西塔黑谷。後移於此。因稱新黑谷云。當是之時。天皇延見內殿。受一乘圓戒。由是。淨土念佛。大行於世。建曆貳年。（宋寧宗嘉定五年壬申）正月二十五日寂。年八十。後閱三百九十八年。元祿十年。正月。（清聖祖康熙三十六年丁丑）東山天皇。勅賜圓光大師。自時厥後。賜東漸慧成弘覺慈教等謚。屢矣。寺中有鎧池鎧松。皆蓮生房之舊跡。蓮生房。俗姓熊谷。名直實。事源賴朝。有軍功。後削髮。爲源空弟子。又有昭堂。淺野長晟夫人德川氏之廟。夫人卽東照公女。

西雲院　開祖曰宗巖。朝鮮人也。文祿征韓之役。被虜。來于京師。爲僧。修淨土宗學。創建此寺。

山崎闇齋墓　名嘉。字敬義。又號垂加。京師人。初奉程朱之學。後又學神道於卜部氏。後世稱山崎派。門人甚多。淺見絅齋。佐藤直方。其高足弟子也。天和二年。（清聖祖康熙廿一年壬戌）九月十六日卒。年六十八。

眞如堂　又稱鈴聲山。眞正極樂寺。天台宗。屬延曆寺。開祖曰戒算上人。永觀二年。（宋太宗雍熙元年甲申）奏請白河離宮。更創寺觀。安置慈覺大師所作阿彌陀像。天喜元年。（宋仁宗皇祐五年癸巳）正月廿七日。寂。年九十一。後屢移轉。又罹兵燹。寺什有張思恭筆普賢像。

大興寺　號靈芝山。俗曰芝藥師。藥師像。係運慶作。坐像長三尺五寸。十二神將。則立像。長三尺許。又有關羽像。世傳。足利尊氏。遣僧于元。求百戰百勝之軍神。元乃贈此像云。

神樂岡　俗稱吉田山。南北四丁。文明十六年。（明憲宗成化二十年甲辰）卜部兼俱。初移齋場所於此。卜部氏世掌神祇之事。世稱神道家。齋場所者。卽齋戒沐浴之處。

大元宮　茅茨蓋屋。擬上古式。扁額之大者。題曰。日本最上。日高日宮。嵯峨天皇宸筆。其小者。曰大元宮。後土御門天皇宸筆。

八神殿　古者。所奉祀於神祇官之神。曰高皇產靈神。曰神皇產靈神。曰玉積產靈神。曰生產靈神。曰足產靈神。曰大宮賣神。曰大倉津神。曰事代主神。外宮宗。在八神殿西。內宮源。在其東。二宮扁額。係足利義政夫人藤原氏筆。（名富子）日本國中總攝社。自山城國。至對馬國。共計三千壹百三十貳社也。

第三高等學校　直隸文部省。明治廿二年落成。時稱第三高等中學。二十七年。七月。更稱第三高等學校。教授專門學科。

銀閣寺　在淨土寺町。舊稱慈照寺。禪宗。屬相國寺。文明貳年。（明憲宗成化六年庚寅）足利義政。

設別墅于此池。開池庭。興樓閣。閣二層。閣中用銀塗之。與其祖義滿所建之金閣。東西相對也。十一年。十一月。（成化十五年已亥）讓職其子義尙。而老。削髮爲僧。廣集書畫器玩于海外諸國。旣薨。釋謚曰慈照院殿。以遺命。廢墅爲寺。追請夢想國師。爲開祖。寺號乃取於其謚。義政者。足利氏第八世將軍也。屢致書朝鮮國王。又遣僧永嵩全密惠光等。求喜捨淨財。以及經典。後又遣使于明。僧妙茂爲正使。慶瑜副之。時文明七年。乙未。八月廿八日。卽明成化十一年也。（朝鮮國王李㻋奉書日本國殿下貴國與敝邦、雖阻滄海、世講隣好、自寡人卽位、亟遣信使、益致殷勤、禮宜報聘、肆於年前冬拾月、遣命知中樞院事宋處儉、大護軍李宗宜、齋大藏經一部、法華經貳部、金剛經貳部云云、李㻋、卽李氏、朝鮮第七世主、惠莊王也、）義政又喜茶事。後世所謂抹茶式也。式亦始於禪僧。東求堂東有一室。爲義政茶宴之處。書畫庭園。及僧顯常之慈照禪寺記等。今不載於此。宜就該寺。親見親聞焉耳。

（詣銀閣寺詩）高閣相當大字峯、林園一帶白雲封、睟間遺墨極神妙、獨有消才勝祖宗、

月待山　月待者。待月出之義。俗稱大文字山。以山面畫大字也。昔者。僧空海創造

之。至中世絶。義政命相國寺僧橫川再造之。尋年。舊曆七月十六日。里人負薪登山。點火其上。燦然忽現大字。亦奇觀也。(皆川淇園詩)何人巧思點山成、村炬秋輪一夕明、巨笙飛丹光的皪、稍薪焚翠勢崢嶸、烟含遠影浮兔水、雲伴昏黑落鳳城、游賞由來片時散、空餘孤月照三更、

南禪寺　在粟田口北。號瑞龍山。又稱太平興國南禪禪寺。臨濟派五山之第一。開祖曰大明國師。名普門。號無關。弘安年中。(元世祖至元年間)龜山上皇建離宮于此。怪物出沒。詔陰陽頭。卜之。曰。僧正道智。甞住斯地。故爲祟耳。於是。勅東福寺僧無關禳之。無關率祖圓等二十人。禪坐宮中。凡九十日。怪則息矣。上皇嘆稱不措。遂廢離宮。爲寺。無關與祖圓。幷爲寺主。時永仁元年也。(元至元三十年癸巳)後經六百年。有應仁之亂。罹兵燹。不復存舊制也。而至近年。亦災。現有重修再建之事。其什寶不尠。李龍眠筆文珠像。徽宗帝墨畫山水。趙子固墨竹。萬國禎臙脂鴨圖。閻立本筆觀音像。而本邦古畫。多在壁間。最勝光院。卽祀道智之處。道智。太政大臣藤原頁經公子。

爲三井寺長吏。世稱駒僧正。是也。(穎山陽詩)第二橋頭雨後泥、村園門巷路東西、迢人休問南禪寺、一帶青松路不迷、今按南禪寺僧遊于明者多矣、(王陽明送日東正使了菴和尙歸國序)今有日本正使堆雲桂梧字了菴者、年踰上壽、不倦爲學、領彼國王之命、來貢珍於大明、舟抵鄞江之滸、寓館於驛、予甞過焉、見其法容潔修、律行堅巡(中畧)、皇明正德八年、歲在癸酉、五月既望、餘姚王守仁、桂梧謚佛日、住南禪寺、後退居大慈院、院在東福寺、永正中、爲足利氏入明、又(來復龍山大定菴記)日本爲國、居大海之東、其俗崇佛敬僧、精舍伽藍、棋布城內、辟教之美、往往取法中夏、而其禪居皆遵百丈舊制、(中畧)龍山大定菴者、乃南禪住山、在菴禪師退休地、南禪爲海東首刹、非有道者不得與其選、在菴盃爲亞相大夫源公義滿所知云云、又有宗泐爲義堂禪師作空華室歌一篇、書其末云、洪武九年、蒼龍在丙辰、春二月五日、己丑、於龍河傳法正宗室之東軒識、全室叟宗泐、今按、義堂名周信、住南禪寺、捌空華室、室與大定菴、今已墟矣、天授菴。葬開祖大明國師之處也。(夢想國師、亦屢歸法于此、故在天龍寺條下、)

梁川星巖墓　在天授菴後。名緯。字眞逸。星巖其號。美濃人。以儒爲業。最善詩。成一家。夙有勤王之志。安政五年。九月二日卒。(淸咸豐九年戊午)年七十。明治廿四年。四月。贈正四位。配紅蘭亦善詩書。名藉當世。

東岩倉山　在粟田口北。昔者。穿岩於王城四方。藏大乘經。以鎭護焉。倉藏國訓相通。是其一也。山上安大日。世呼大日山。眺望尤佳。龜山後嵯峨二上皇。甞幸于此

云。

粟田口町　徃時。自近江入京都之官道也。道傍有業陶器者。賦土出於大日山。堅牢無比。稱粟田燒。其業至今不衰。近世良工曰木米。姓青木。名八十八。性嗜儒雅。與賴山陽等交遊。篠崎小竹銘其墓。

京都府　在下立賣新町藪內町。明治中興。初置于二條城。後十七年。十一月。移此。現有新築之議。

市立盲啞院　在釜座通椹木町南。明治十一年。創建之。我邦設盲啞院。始于此。

狩野元信墓　在妙覺寺中。元信敘法眼。世稱古法眼。狩野氏。世以善畫。事德川氏。承其統者。曰狩野派。與土佐派。並稱天下。斯地多其墳墓。

西陣　自堀川西。至一條北。總稱西陣。蓋應仁之亂。（明成化初年）細川勝元在京師東。曰東陣。山名持豐在西。曰西陣。今尚存其名。而西陣一帶地方。自古多業花機者。綾羅

錦繡紬緞綢類。至於今代。益極其精。稱西陣織。遂輸海外。投資營業者。四十餘家。其工女。俗稱織子。無慮千百人。世諺云。西陣盛衰。係于京都盛衰。（宋應星曰、凡倭緞制起東夷、漳泉海濱效法爲之、絲質來自川蜀、云云、或傳、此業自天文年間始、余知倚在於其前代也、）

北野神社　在北野右近馬場。奉祀贈太政大臣正一位菅原道眞公之處。公是善卿第三子。母大伴氏。幼好學。善和歌。年甫十一。父命賦詩。課月下觀梅題。公卽吟曰。月耀晴如雪。梅花照似星。可憐金鏡轉。庭上玉房馨。是善驚歎。後從都良香游。（[illegible]香、主計頭貞雄之子、初桑原氏、後改姓都、良香、博聞強記、[illegible]、研覈不分、乃著辨[illegible]論、其文傳至今、又善[illegible]、）貞觀中。（唐懿宗咸通年間）舉文章生。對策及第。元慶六年。（唐僖宗中和二年壬寅）十一月。渤海使裴頲來。公時權行治部大輔事。與島田忠臣接伴。宇多天皇。最信任之。寛平六年。（唐昭宗乾寧二年乙卯）五月。唐使來聘。八月。公爲遣唐大使。右少辨紀長谷雄爲副使。將報之。公時上書。論遣唐使。往往辱國體。及學生僧徒。謀內外輕重也。會唐有李克用之亂。遂廢遣唐使。天皇讓位醍

嗣天皇。公爲藤原氏所忌嫌。被讒。貶爲太宰權帥。時延喜元年。正月也。(唐天復元年辛酉)未嘗忘也。嘗遇重陽。賦詩曰。去年今夜侍淸凉。秋思詩篇獨斷腸。恩賜御衣今在此。捧持每日拜餘香。三年二月。遂薨。年五十九。天曆元年三月。(五代晉高祖開運四年丁未)村上天皇。勅建祠於此。世稱天滿天神。爾後郡國無地而不建之祠。(宋師範天神詩二首)天下梅花主、扶桑文字祖、還个正法眼、雲門答道普。」管君本不假凡胎、直自靈山令上來、五百年間無識者、扶桑佛法一枝梅。又(元薩天錫天滿宮詩)無常說法現神通、千里飛梅一夜松、萬歩夢醒雲吐月、觀音寺裡一聲鐘。(明洪旭詩)日本昔聞北野君、愛梅游酒又能文、謫居西府三千里、一夜飛香渡海雲、今案、所謂渤海使者高麗也、本殿東。祀其子菅中將。其西則配吉祥女。中將名淳茂。克繼父業。延喜八年。(後梁太祖開平二年戊辰)四月。渤海使裴璆來。淳茂爲掌客使。璆頗之子。嘗與公唱和。至是。淳茂亦與璆和。互語先人之事。飲泣不能言云。天德三年。(周太祖顯德六年己未)二月。右大臣藤原師輔。益壯神殿。四時致祭。至今不衰。官祭。八月四日。私祭。十月四日。神寶中有畫卷。題曰北野緣起。藤原信實筆。世稱逸品。信實卽

土佐派祖。

金閣寺　在衣笠山下。舊稱鹿苑寺。禪宗。屬相國寺。應永四年。(明太祖洪武三十年丁丑)足利義滿。設別墅于此地。而老。庭園之景。池沼之幽。盡善盡美。有三層閣。上曰究竟頂。中曰潮音洞。下曰法水院。閣中以金塗之。旣薨。釋謚曰鹿苑院殿。遺命爲寺。追請夢想國師。爲開祖。寺號亦取於其謚。義滿義詮子。足利氏第三世將軍。嘗起第于室町。稱花御所。造四足門。僭擬乘輿。後改名道義。受明朝册。蓋我邦人私受外國封册。獨有此人耳。其子義持。恐辱國體。遣書於明。拒絕之。亦宜矣。(明太祖、屢遣使者、齎詔書、來告開國建大明號、而太宰府不敢聞朝、使者不得入京師而歸、太祖聞我邦君臣皆信佛法、密命天寧寺僧闕仲猷、瓦官寺勒無逸、來諭通好、我不應之也、應永初、筑紫賈人肥富、自明歸、陳兩國通信之利、於是、義滿便以肥富爲使者、始通信、書曰、日本國開闢以來、無不通聘問於上邦、某幸秉國鈞、海內無虞、特遵往古之規法、而使肥富、相副祖阿、通好獻方物云云、其報書云、朕自嗣大位、四夷君長朝獻者、以十百計、苟非戾於大義、皆思以禮撫柔之、玆爾日本國王源道義、心存王室、懷愛君之誠、踰越波濤、遣使來朝、云云、是爲建文四年、二月六日書、卽我應永九年也、明成祖冊安鎭國山碑云、日本王之有源道義、又自古以來、未之有也、朕惟繼唐虞之治、舉封山之典、特命日本之鎭山、號壽安鎭國之山、賜以銘詩、勒之貞石、榮示於千万世、蓋義滿之致仕、在應永元年、則義滿遣使于明、既辭將軍職)

之後也、而甘受國王之稱、其不臣孰莫甚焉、後義持論明使者、曰、夫與鄰國通好、商買往來、安邊利民、非所欲乎、然而、余之所以不肯接明朝使臣者、其亦有說、先君之得病也、卜之云、諸神爲祟、蓋我國自古、不向外邦稱臣、比者、變前聖王之爲、受曆受印、而不却之、是乃所以招病也、於是、先君大懼、易簀之際、以冊書、誓諸神、永絕外國之通問、又無受外國使命、因垂誡子孫、固守毋墜云云、是爲應永廿六年、七月事、明太宗、永樂十七年、己亥也、爲之通譯者、僧周璋也、嗚呼、義滿臨死而悔、抑亦晚矣、自應永九年受其冊、至十五年義滿薨、僅僅七年、然汚我史乘、亘千萬世、未能銷滅也、義滿之罪、可謂大矣、古人論義滿者多、今不復贅、第三世曰西笑和尚。名承兌。豐太閤尤尊信之。慶長中。大泥國使者。來呈國書。豐公命承兌草覆牒。文祿之役。專掌文件。朝鮮使至。乃命筆談。又築耳塚。爲之導師。而譯讀明氏冊封。毅然不肯從小西氏囑一事。載豐國神社條中。

聚樂　西至千本通。東至大宮。北起一條。南接二條。總稱聚樂。天正十三年。(明神宗萬曆十三年乙酉)豐太閤城於此地。曰聚樂城。後陽成天皇嘗行幸焉。後至秀次爲墟。今乃存其名耳。

二條城　在二條堀川西。永祿十二年。(明穆宗隆慶三年己巳)織田信長。始築於此。明智光秀之襲

本能寺也。信長子信忠固守此城。光秀攻陷之城墟。慶長七年。(明萬曆三十年壬寅)德川氏再築之。置城代。(城代官名、凡國有城、諸侯爲其城主、二條則不然、幕府按年遣吏守之、謂之城代、後日城代、倣此、)明治中興。權爲大政官。後爲京都府廳。今屬宮內省。世稱二條離宮。是也。(中井竹山詩)皇畿勢何若、縱目二條城、樹色東西嶽、人煙左右京、興廢幾朝王、感慨一書生、天地秋將盡、臨風意更獃、

神泉苑　往古境域尤廣。延曆十九年。(唐德宗貞元十六年庚辰)八月。桓武天皇臨幸之後。爲歷世天子御遊之地。泛舟於池。奏樂賦詩。後漸荒廢。元和中。(明萬曆末)讚岐僧快雅。愛之不措。脩補其一端。建寺。曰神泉苑護國寺。屬東寺。眞言宗也。今爲公園。(日本瑞龍山重建轉法輪藏禪寺記)忽神降於一比丘曰、我神泉苑善如龍王也、云云、

靑蓮院　在粟田口町植髮堂南。舊稱粟田宮。天台宗。開祖曰傳教大師。(傳教大師卽最澄、詳載延曆寺條下)中興祖曰行玄大僧正。覺快法親王。自一爲院主而還。世勅法親王。爲山門座主。有尊圓親王者。以善書名。(淸人翻刻其書蹟、以載之某法帖、今忘其題名、)明治廿六年。九月。宮殿罹火。現

將再建之。

智恩院　在眞葛原北。曰華頂山大谷寺。淨土宗。鎭西派之本山。開祖曰圓光大師。卽源空上人也。上人事詳黑谷條中 建久二年。宋紹熙二年辛亥 謫于讃岐。承元二年。宋嘉定元年戊辰 赦還。閑居東山大谷。卽是地也。後柏原天皇詔云。宜脩法然上人之御忌。於是。每歲辟忌。稱御忌。賽其塋者甚衆。山門。華頂山扁額。係靈元天皇宸筆。本堂。大谷寺三字。卽後奈良天皇宸筆。勢至堂。智恩教院四字。卽後柏原天皇宸筆。巨鐘。成於寛永年中。明末清初 高壹丈八尺。徑九尺。厚九寸五分。方丈各室。畫皆狩野氏畫。什寶亦多。吳道子淨土經說相圖。李龍眠彌陀三尊。張思恭彌陀三尊。各壹幅。錢舜擧呂紀徐熙等。今一一不能記焉也。

圓山公園　斯地。昔稱眞葛原。至今代。設公園。公對私之意。不獨私之。言官紳庶民。相共遊觀之園囿。孟子所謂古之人與民偕樂。是也。園中。有一大老櫻。已經壹千

年餘。其枝垂下。因稱枝垂櫻。春日張宴其下。以至夜分。尤極雜沓。櫻花事。嘗別有所說。

長樂寺　在圓山南。初天台宗。開祖亦傳教大師。安置千手八臂十一面觀音立像。長壹尺三寸許。世傳。最澄自唐歸朝。海上有龍。首載此像。浮出。過最澄衣袖而去。故最澄自刻蟠龍於其像下。置之。以摸當時之狀云。安德天皇。崩于長門。詳載馬關條下 其母后建禮門院。歸洛。請寺僧印誓。受戒削髮。爲尼。時以天皇御衣。布施。印誓乃製幢幡十六旒。今尙存。

溫泉　在長樂寺內。明治六年。市民醵金。建設三層樓。滿都風物。收在一眸。樓下有浴堂。亦極清潔。

賴山陽塋　名襄。字子成。山陽其號。賴氏。本姓近藤。其先事小早川氏。後移安藝。村名賴兼。因以賴爲氏。 父曰惟寬。號春水。安藝儒官。山陽幼有大志。遨遊四方。善文賦詩。未嘗就仕途。僑居京師。以儒爲業。

日本外史。日本政記等書。風行天下。近世中國人士之起勤王志者。多基於此書云。天保三年。（清道光十三年壬辰）九月廿三日卒。年五十三。明治廿四年。十二月。贈正四位。三子。長曰協。號聿菴。次曰復。號支峰。次曰三樹。號三樹。皆以文學志士。有名於世。三樹。刑死於江戸。大橋訥菴。請屍葬之。後改葬於此。支峰。明治初。爲大學中博士。墓在高臺寺中。支峰有女。養龍三爲嗣。現住京都。

將軍塚　延暦奠都之初。相地東山巓。塐土偶。長八尺。環甲冑。把弓箭。西面而立。以爲鎭護皇城之神。自圓山登。乃七八町。可展其塚。

八坂神社　正門在下河原町。西門在祇園町。古稱八坂鄉。官幣中社。奉祀素盞烏尊。稻田妃。八王子。八王子。謂田心姬。湍津姬。市杵島姬。及天忍穗耳尊。天穗日尊。天津彦根尊。活津彦根尊。熊野樟日尊。世傳。孝謙天皇天平勝寶五年。（唐玄宗天寶十二年癸巳）遣唐使吉備眞備。自唐歸朝。時抵播摩國廣峰。知其垂跡。乃奉崇之。後有神託常

住寺僧圓如。貞觀十一年。（唐懿宗咸通十年己丑）遷座此地。爲守護皇城之神。十八年。（唐僖宗乾符三年丙申）疾疫大行。卜部日良麻呂。卜六月七日。及十四日。率京中男女。送疫神于神泉苑。明年。疫亦行。庶民舁神輿。詣神泉苑。疫乃息。後爲恒例。是曰祇園會。昭宣公藤原基經。尤尊崇之。新建神殿。其形擬紫宸殿。今則每年七月十七日。及廿四日。行祇園會。有俗稱山鉾者。成列巡市。居京都觀美之一。

祇園町　自四條大和大路。至八坂神社樓門下。妓樓娼館。夾道櫛比。又有祇園新地。謂末吉。富永。元吉。清本。橋本。林下等六町也。李娟張態。蜂蝶隨香。絃聲珊珊。日夜不絕。

歌舞練場　在祇園町南。花見小路。謂練習歌舞之處。俗呼都踊。踊卽舞之義。京都。自古稱美人多。西眉南臉。愁姿唬態。亦隨日加多。而風流太守。竊恐斯地漸失高調之妙技也。乃設習練之處。春花開落之日。群芳競妍。寫朱學月。鶯歌燕舞。以供

內外豪客之觀覽。方今美人。甚有之矣。余未見其多也。或曰。美人亦東遷矣。（成島柳北詩）俄然相遇忽相親。一曲鼓吹一枕春。濃艶借來脂粉色。不知也有鬚夫人。

建仁寺　在大和大路南。門前曰建仁寺町。禪宗。臨濟派之本山。居於五山第三。開祖曰千光國師。卽榮西上人。姓賀陽。字明菴。一字葉上。備中國吉備津人。仁安三年。（宋孝宗乾道四年戊子）入宋。從僧虛庵參禪。既歸。文治末。（宋光宗紹熙初）再往于宋。建久二年。（紹熙二年辛亥）歸朝。創建壽福寺于鎌倉。鎌倉。源賴朝開覇府之地。（詳載鎌倉條下）建仁三年。（宋寧宗嘉泰三年癸亥）土御門天皇。勅建寺于京都。賴朝子賴家。獻其土地。既成。號東山建仁寺。建保三年。（宋嘉定七年甲戌）七月五日。寂。年七十五。廟塔曰興禪護國院。其東岡有菩提樹。自宋携回。于今繁茂。寺門三。南曰矢立門。以有箭鏃之痕也。世傳。斯門係往昔平族。宰相教盛第門。有鐘樓。鐘亦係往昔河原院之物。河原院者。左大臣源融所建之別業。別業已廢。鐘亦沈沒鴨川。榮西請官舉之。重而不動。榮西乃命衆曳

縄時。一齊發聲。連呼榮西榮西。鐘遂登岸。後世。引重者。必呼野撤。野撤榮西。國音相通。（太白名山千佛閣記）淳熙五年。孝宗皇帝。親灑宸翰。大書太白名山。以賜天童山景福禪寺。中畧 十六年。虛菴懷敞。自天台萬年來主是刹。百廢具擧。追跡二老。中畧 先是。日本國僧千光師榮西者。憤發願心。欲往西域。求教外別傳之宗。若有告以天台萬年。爲可依者。航海而來。以師爲歸。及遷天童。西亦隨至。居歲餘。聞師有改作之意。請曰。思報攝受之恩。糜軀所不憚。況下此者乎。吾忝國主近屬。他日歸國。當致良材以爲助。師曰唯。未幾。遂歸。越二年。果致百圍之木凡若干。挾大舶泛鯨波而至焉。千夫咸集。浮江蔽河。輦致山中。師笑曰。吾事濟矣。於是。鳩工度材。雲委山積。列楹四十。多日本所致。餘則取於境內之山。始建於紹熙四年。季秋之甲申。才三載告畢。云云。慶元四年。（我建久九年）淸明日。顯謨閣直學士大中大夫提擧江州太平興國宮奉化縣開國男食邑三百戶樓鑰撰。又（日本國千光法師祠堂記）太白名山甲天下。而千佛閣尤爲第一。後世欲過之。其材無及焉。蓋柱植係日本國僧千光法師所致也。詳見大參樓公閣記。宜爲畫像以祠。師諱榮西。備州人。孝靈賀陽氏。六十二世孫。母夢明星感孕。生年十一。出家。延曆寺薙髮染衣。初學俱舍婆沙論。十三受大戒。習天台教觀。掩關八年。以爲未至。誓往西域求道。二十八。航海達四明。游台山萬年寺。禮石橋羅漢。瀹茶現花。又見二靑龍。俄頃。游者現全身。益堅素志。遂居之。會虛庵徹公。移主天童。因與偕行。及建閣卽東還。願有以助之。越二載。大木果至。而閣成。師之力也。師自幼敏悟。晚通唐朝內外典。持律終身。過午不食。本國賜號僧正。廣修佛事。茲不具書。臨終預期。兩手結印。安坐而化。壽七十五。臘六十二。後十年。其徒明全。復來山中。捐楮劵千緡。寄諸庫轉息。爲七月五日忌。設齋取衆。本孝也。全生伊州。蘇姓。傳師之道。教戒亦精。入山三年。示寂於了然齋。火後得堅固子無數。付道元。藏歸故國。併刻于祠。大宋寶慶元年。八月九日。修職郞監臨安府都稅務虞樗記。今按。明全號了然齋。建仁寺僧。千光法嗣。嘉祿元年（宋寶慶元年）入宋。又（附法千光法師書）日本國千光院大法師西。宿有靈骨。頓捨世間。深重恩愛。從佛剃髮。著僧伽梨。洪持此法。不遠萬里。航

海而入我炎宋、探頤宗旨、乾道戊子年、遊天台、云云、是文係其師懷敞虛菴撰、又（日本建長禪寺古先源禪師道行碑）千光院有大善知識、曰榮西和上、以黃龍九世嫡孫、握佛祖正印、唱最上一乘、颷馳霆鞫、逢者靡落、達摩氏之道、藉是以中興、其示寂之時、且曰、吾人滅後五十餘年、禪宗當大興云云、是文係明宋濂撰、（懷敞與榮西詩）不露鋒鋩意已彰、揚眉早箇識情鄉、著衣喫飯自成現、打瓦鑽龜容若忙、若信師姑元女子、無疑日本即南唐、一天月色澄江上、底意分明不覆藏、

安國寺惠瓊塔。在寺東偏。稱惠瓊長老。名瑤甫。東福寺僧。後爲毛利氏所聘。移安藝國。爲安國寺住持。豐公征韓之役。往來韓海。與小西行長等謀。矯命講和。事露。公怒將斬之。爲人所救。關原之役。（詳載關原條下）投石田三成軍。軍敗。爲德川氏所執。斬于鴨川上。後葬其首於此云。惠比壽神祉。奉祀事代主尊之處。千光國師。建設建仁寺。時勸請之。摩利支天堂。開基曰大鑑禪師。名清拙。唐僧也。清拙自唐來。携斯像。面貌白色。服五彩服。坐乘猪背。猪凡七頭。皆以金泥塗之。

六波羅密寺　在建仁寺町東南。又號普陀落山。眞言宗。屬智積院。開祖曰空也上人。（詳載空也堂條下）安置十一面觀音像。昔稱六波羅地藏堂。地藏像。白河法皇親刻之。

藥師則傳教大師作。又有平清盛像。長二尺八寸。保元元年。（南宋高宗紹興二十六年丙子）平氏興甲第于六波羅。謂此地方。承久四年。（宋寧宗嘉定十五年壬午）北條氏遣部將于六波羅南北。留鎭京畿。號兩六波羅。是也。（平清盛等事詳末篇）寺什。董其昌筆桃源圖。陳書公題辭。有名於世。

雙林寺　在南鷲野町。與圓山接。號金玉山。初天台宗。後改時宗。林泉幽邃。歌人多悔跡於此。堂前有西行法師。平康頼。頓阿法師古石塔。皆以善國歌。名垂後世。又有西行庵西行櫻等遺蹟。西行。名憲清。佐藤氏。材兼文武。敍從五位。任左兵衞尉。後翻然而悟。爲僧。改名圓意。漫遊天下。見富貴如浮雲。口吟和歌。以終其身。建久九年。（宋寧宗慶元四年戊午）二月十六日。寂。年七十三。芭蕉堂。安置芭蕉翁像。翁名桃靑。門人半化房蘭更建此堂。有碑詳記之。蓋我邦有稱俳諧歌者。翁實爲其中興祖。大雅堂舊居。秋野氏。名無名。字貸成。大雅堂。其號也。又有霞樵九霞三岳諸號。善書畫喜風流。最多奇行。安永五年。（清乾隆四十一年丙申）四月十日卒。年五十四。

高臺寺　在雙林寺南。號鷲峰山。禪宗。臨濟派。屬建仁寺。開祖曰紹益。號三江。慶長中。(明萬曆年中) 豐太閤夫人淺野氏。創建。祈豐公冥福之處。開山堂。及靈廟。或用夫人車蓋。或用征韓船材。廟中安置豐太閤及夫人像。謚曰高臺院殿從一位湖月禪定尼。寛永元年。(明熹宗天啓四年甲子) 九月六日薨。史云。豐公微時。與淺野長勝友善。長勝養杉原某二女。長女即夫人也。豐公家貧。成婚之夕。夫妻布藁于簀而坐。以瓦缸做盞相酬。長女固知其非常人也。事之甚謹。及豐公得志。雖有所變。皆置之別宮。獨與夫人同居。夫人助公定天下。多所裨益。常戒之曰。願亘人勿忘藁席瓦缸時也。夫人無子。秀頼庶出也。然視之猶其自出。公薨則剃髮。居京師。秀頼乃與生母淀君。居大坂。世稱夫人。曰北廳云。(我邦稱呼、該媽母托哥羅、)

正法寺　在高臺寺東。號靈鷲山。靈鷲山扁額。係弘法大師筆。開祖亦傳教大師。後漸衰。國阿上人。自爲中興祖。改爲時宗。國阿姓箸崎。名國明。爲播磨國箸崎領主。

事足利氏。文和四年。(元順宗至正十五年乙未) 致仕爲僧。時年四十二。應永十二年。九月。寂。(明太宗永樂二年乙酉) 此地。昔稱鷲尾山。後稱靈鷲山。今乃靈山。畧言之也。(岡松甕谷詩)小閣深高望轉遥、夜深殘雨未全消、娟娟斜漢低踈樹、滾滾長流貫畫橋、燭影浮空爭落月、笛聲隔水激廻飈、都人豪侈饒游興、幾處開筵醉翠翹、

靈山招魂場　明治十二年。六月。建設銅碑。題曰靈山表忠之碑。山中有藤本鐵石。梅田雲濱。坂本龍馬。浮田一蕙諸名士。以及殉難義人忠僕等墓碑。而儼在其巓者。爲故內閣顧問木戸孝允公墓。世稱公及故大久保內務卿。西鄉南洲先生。曰明治三大勳臣。(春畝伊藤相公詩)無端歲月易消磨、相公下馬弔碑過、應知往事追懷感、偏向靈山墓畔多、

八坂塔　在高臺寺東南。其曰八坂。北自眞葛原。南至清水坂之稱。坂八。曰祇園。曰長樂寺。曰河原。曰法觀寺。曰靈山。曰山井。曰清水。曰三年。又稱八坂寺。即靈應山法觀寺也。崇峻之朝。(隋開皇初年) 聖德太子。創造五重大塔。埋藏佛舍利三於其塔下。我邦建塔。實始於此。後屢罹災。今存者。係永享十二年重建。(明英宗正統五年庚申)

淸水寺　在淸水坂東。號音羽山。兼行法相眞言二宗。屬奈良興福寺。安置十一面千手觀音立像。長八尺。左右又置地藏菩薩。毘沙門天像。開祖曰延鎭僧都。檀越。卽征東將軍阪上田村麻呂也。世傳。寶龜九年夏。（唐代宗大曆十三年戊午）延鎭泛舟。泝木津川。望見白衣老翁。端坐草庵。延鎭知其非常人。上岸往謁。老翁曰。吾行叡居士也。遲汝來久矣。我有靈木。將刻觀音像也。今欲東行。汝代作之。延鎭乃留居此。已因六年。田村麻呂。欲田獵山中。發奈良。沿木津川。途過延鎭廬。怪問其故。延鎭具語其志。田村麻呂大喜。益勵獎之。桓武天皇。遷都平安。田村麻呂亦從之。以八阪鄉與延鎭廬相距不遠也。乃移居此。因請其像。安置邸中。今田村堂之所在。是也。延曆二十年。（唐德宗貞元十八年壬午）蝦夷叛。（今北海道）田村將軍。奉詔討之。旣平。時有觀音地藏毘沙門諸佛之冥助云。故今尙稱勝軍地藏。勝敵毘沙門。又天皇不豫。詔延鎭禱之。已瘉。任延鎭十禪師。二十四年。（唐順宗永貞元年乙酉）田村將軍奏請大政官符宣。建設堂塔。大

同二年。（唐憲宗元和二年丁亥）平城天皇。詔賜紫宸殿。今淸水寺。卽是也。寺門下。多鬻陶器。曰淸水燒。尤極精巧。有名內外。三重塔。安置大日像。隨求堂。隨求菩薩。釋迦堂。釋迦牟尼佛。成就院。有忍向信海等碑。忍向。淸水寺僧。稱月照上人。長門人。與西鄕隆盛。投薩摩洋死者。信海其徒弟也。並以勤王事。功名蓋世。（展月照墓詩）薩海月沈千古消、千今皎皎影分明、丹心報國三基墓、高與老楓照帝京。地主神社。奉祀大巳貴尊等四神。亦田村將軍。所勸請也。

音羽瀧。在奧院下。飛泉三條。淸冷可掬。凡此地方。春花秋葉。景色可人。溪流縈廻。林巒鬱葱。實一仙境也。

淸閑寺　號歌中山。眞言宗。屬因幡堂。安置千手觀音像。係菅公作。開祖曰紹繼法師。延曆廿一年。創建。世傳。昔者。寺僧眞燕。薄暮倚門。有一少女來過。艶而美。眞燕目送心動。欲交語。故問淸水寺在那邊。女乃歌曰。逢人忽動心。爭得淨滔道。眞燕頓悟。因稱歌之中山云。

鳥部山　又鳥部野。自古。爲埋葬之地。路傍墳塋。累累數百千基。悉數難終。藤原亘經碑。在要法寺。淺見絅齋墓。在通妙寺。他石田勘平。手島堵庵。柴田鳩翁諸儒。今一一不能登載。

豐國神社　奉祀前關白太政大臣從一位豐臣秀吉公之處也。明治十年。光緒三年丁丑創建大佛殿址。正門原係伏見桃山城門。門上揭豐國大明神扁額。後陽成天皇宸翰。有社殿。有拜殿。社後山曰豐國山。舊稱阿彌陀峯。往昔。倚行基創建資皇寺。安置阿彌陀佛像。元弘建武之際。寺墟矣。其墳實葬公柩之地。高數千仞。石磴二百五十級。分爲五層。每層六十二級。其塋。以石爲柵。繞之。凡古者。在關白職而老。稱太閤。於是。世人尊稱豐公。曰豐太閤。山頂平坦之處。俗呼太閤平。公起身微賤。位極人臣。偉績大業。耀海內外。近世西儒。幷秦始皇帝。法國拿破侖。曰世界三傑。蓋非誣言矣。今略叙公姓字。其餘分載各條。公幼字日吉。長稱藤吉。後改

今名。尾張國愛智郡中村人。父曰彌助。無子。與其妻。祈之於天。妻夢日輪入其懷。已而有身。天文五年。明世宗嘉靖十五年丙申正月朔。生一男兒。因名曰日吉。年二十餘。事織田信長。神謀鬼策。功拔諸將。足利氏亡。信長拜內大臣。統一天下。既爲其臣明智光秀所弑。公時攻毛利氏。講和旋軍。與光秀戰于山崎。克之。遂任關白。賜姓豐臣。時天正十三年也。明神宗萬曆十三年乙酉當是之時。天下大治。遣使海外各國。連促朝貢。初公之在山陽道也。請信長攻韓及明。不果。後常思成其志。十九年。讓職其弟秀次。文祿元年。明萬曆二十年壬辰遂興征韓之師。公親督軍于肥前那護屋。連戰連捷。韓請援于明。又大破明軍。沈惟敬者。越人。警黠猾佞。與大司馬石星善。說以和議。星薦惟敬。爲遊擊。多資金帛。往說我軍。投書平壤守將小西行長。卑辭乞和。行長屢却之。終爲其所惑。四年。三月。明萬曆廿三年乙未伏見城成。公徙居。慶長元年。八月。明萬曆二十四年丙申明正使楊方亨。副使沈惟敬。韓使黃愼。朴弘長從之。共至界浦。二

六三

十九日。造伏見。公責之。曰。吾收兵。而汝國未獻三道。今又不使王子來謝再造之恩。乃遣微者辱我。我不許汝入見。二使因行長謝。弗聽。九月二日。使毛利氏列兵仗。延使者入城。公開帷而出。二使稽伏。莫敢仰視。捧金印冕服。膝行而進。行長助之。畢禮。三日。燕使者。既罷。公戴冕。被緋衣。使德川公以下諸將。各被其章服。召僧承兌讀冊書。（承兌者。金閣寺僧）行長私囑之曰。冊文與惟敬說。所或有齟齬者。子且諱之。承兌不敢聽。乃入。讀冊於公之傍。至曰封爾爲日本國王。公變色。立脫冕服。抛之。取冊書扯裂之。罵曰。吾掌握日本。欲王則王。何須髯虜之封哉。且吾而王。如皇室何。乃召行長。詰讓曰。汝敢欺罔我。以爲我邦之辱。吾將併汝與明使者。皆誅殺之。行長出書牘數通爲證。承兌亦救解之。公怒未釋。即夜。命加藤清正等。逐明韓使者。賜資糧。遣歸。曰。若亟去。告而君。我將再遣兵屠而國也。遂下令西南諸道。明年。正月。明使者至明。伴報秀吉受封拜舞。和議全成。因私賞

六四

海外珍寶。號爲日本辯物。已而吳越將吏。上變。報曰。秀吉先鋒加藤清正已據二百艘。上機張矣。明主大恐。因詰方亨得實。乃詰惟敬。惟敬慚謝。於是。戰復大起。我軍亦未嘗敗績也。三年。三月。（明萬曆二十六年戊戌）公攜秀賴及夫人以下。觀花醍醐。張盛宴。五月。公有疾。七月。漸篤。十三日。將瞑。已而張目。曰。勿使我十萬兵。爲海外鬼。言畢而薨。年六十三。德川公以遺命。召還在韓諸將。（明史紀事本末、隱峯野史別錄等書、弄筆記事、尤多兌謬、今不追對照辨明也、故不抄錄焉、唯有明主書冊、傳於今者、一爲萬曆二十三年、正月二十一日、一爲二十五年、五月十六日、豐後儒員龜井道載、名矯、久藏明主封冊、後獻之平戶靜山公（今華族松浦伯祖）公後贈之藩府儒員佐藤捨藏、名坦、字大道、號一齋、其文云、因勅原差遊擊沈惟敬、前去釜山、宣諭爾衆、盡數歸國、特遣後軍都督府僉事署都督僉事李宗城爲正使、五軍營右副將左軍都督府署都督僉事楊方亨爲副使、持節齎誥、封爾平秀吉、爲日本國王、錫以金印、加以冠服、陪臣以下、亦各量授官、用溥恩賚云云、是爲當時副本、明使還棄之、流傳龜井氏者、印有廣運之寶四字、又熊本縣上益城郡總領高本氏、本姓李、其祖曰慈朝、韓人也、再征韓之時、留于豐前、明使欲介慈明以致之京師、遂託是書而去、其文首敘欽差經理朝鮮軍務都察院右僉都御史楊、咨爾平秀吉、云云、又曰爾已六十餘歲、壽命幾何、子未十齡、孤弱何恃、鬪各島之酋、俱覘爾之隙、爲復讎報怨之舉、爾不銷兵綏衆、安安人情云云、前者、傲慢無禮、公之扯裂、固當然耳、後者、陰勸公心、以謀止出師、是惟敬畫策乎、然今使臣捧國主書、不敢親獻之京師、託之一韓客而去、蓋從于前日也、而復命將曰、秀吉拜餌受之、朱明朝廷、無其人、果如此、余又嘗讀別錄所載、豐公復朝鮮書、有言曰、將一超直入大明國、

易吾朝風俗於四百餘州、施帝都敎化於億萬斯年者、在吾方寸中、貴國先驅而入朝、有遠慮無近憂者乎、遠邦小島在海中、後進殺者、不可作許容也、余入大明國之日、將士卒望軍營、則彌可修隣盟也云云

耳塚　在豐國神社前。蓋古所謂京觀之類。征韓之役。獲首千萬。不能致之內地。乃切其耳。或劓之。具記其數。收諸桶中。鹽浸之。以交解。於是。築塚埋之。因稱耳塚。以慰其靈。

方廣寺　在豐國神社北隣。俗稱大佛殿。天台宗。屬延曆寺。天正十四年。（明萬曆十四年丙戌）豐太閤創建。鑄造盧舍那佛巨像。長六丈三尺。慶長元年。六月。地大震。豐公時居伏見。入朝京師。還過寺前。見大佛倒裂。罵曰。我爲若不憚勞費。將使若濟度衆生。今已身且不能保。何負我也。因呼弓射之。後十五年。子秀賴重修之。屢罹災震。今纔存木像者。係天保十五年。（淸道光二十三年癸卯）名古屋志士撰作云。又有巨鐘。高壹丈四尺。重十萬六千貳百五十斤。秀賴命東福寺僧淸韓。撰銘。有國家安康四字。東照公。名曰家康。以爲出於兕咀。遂滋事端。於是。有大阪之役。豐臣氏亡。（詳載大阪條下）

京都博物館　在大佛殿舊域中。明治廿七年。宮內省創設。與東京奈良二館。允許士民縱觀。其裨益于考據學者。蓋不鮮少矣。

蓮華王院　在博物館南。又稱三十三間堂。天台宗。屬延曆寺。長承元年。（宋高宗紹興二年壬子）鳥羽天皇。創建三十三間堂宇。安置觀音像壹千軀。號得長壽院。後至長寬元年。（宋孝宗隆興元年癸未）後白河上皇。亦建三十三間堂。安置千體觀音。號蓮華王院。後罹災。乃合兩院。爲壹堂。稱蓮華王院。今存者。係于文永三年（宋度宗咸淳元年丙寅）再建。南北六十六間。每貳間樹壹柱。所以稱三十三間堂也。世傳。昔者。有新熊野觀音寺僧栴坊者。善射。嘗試射於堂廡下。飛箭直前。不觸梁柱。後世習射者。倣其例。曰通矢。又曰數矢。矢數多寡。記載扁額。揭之楣間。今尙存其跡。

泉涌寺　在伏見街道第一橋東。稱東山。初僧空海。建寺于此。號仙遊寺。及後。左大臣藤原緒繼再建。淸泉涌出焉。仙遊泉涌。國音相通。因改今號。開祖曰正法國師。

名俊芿。字我禪。號不可棄。肥後人。兼修天台眞言禪律四宗。初從天台宗池邊寺僧珍曉。削髮爲僧。受具足戒。于太宰府觀音寺。年三十三。入宋。嗣法北峰。傳受律宗。建曆元年。（宋寧宗嘉定四年辛未）歸朝。時年四十六。修法有驗。士庶崇尊。大和刺吏中原信房。爲寄其采地。貞應中。（宋嘉定年末）賜官符。爲勅願寺。嘉祿三年。（宋理宗寶慶三年丁亥）閏三月八日寂。年六十二。後小松天皇賜諡大興正法國師。降至享保。（淸世宗雍正年間）又賜大圓覺心照國師。（宋僧璘律師爲俊芿贊）、稽首天人大導師、家住海東太宰府、秋中片月爲肺肝、雪後諸峰作眉宇、來杭一萬里慈航、歸降七十州法雨、斯何人也斯何人、日本傳律第一祖、

佛殿。安置釋迦彌勒彌陀三尊。舍利殿。二層金塔中。安置佛牙舍利。傳云。唐僧道宣律師。因佛滅後壹千六百年。受之韋駄天。道宣秘藏白蓮寺。國師徒弟湛海。字聞陽。亦入宋。詣白蓮寺。竊請拜受之。弗聽。湛海歸朝。更載木材。再入宋。脩理白蓮寺。而請求之。寺僧大感其志。與之云。（宋僧法照送海法師還日本詩）海東國主尊台教、重遣僧來聽法華、歸去香風滿衣裓、譜堂日出映朝霞、其序云、淳祐四年、九月望日、書于南湖方丈、後十二年、當寶祐乙卯、再來上天竺、因見舊蹟、相視感歎、余七十一矣、水面萬里、宜爲教門保重、晦岩法照、（宋僧元粹佛牙讚）系衝牛斗

六七

豐城劍、光透波心合浦珠、爭似聖人眞舍利、亘徹塵劫照昏衢、佛牙今在泉涌寺云云、日工集、以法照詩爲唐陸淳送傳教之作、恐非、

觀音堂。世傳唐玄宗。自寫楊貴妃之面貌。以刻觀音木像。祈其冥福。因稱楊貴妃觀音。亦湛海法師。自宋携回者。（宋濂詩）玉環妖血汚袞中、豈有靈祠祀鬼雄、是莫仙山眞縹緲、雪膚花顏主珠宮、註云、國有楊貴祀祠、或謬傳此觀音堂乎、

戒光寺。安置釋迦牟尼佛像。長一丈六尺。其頭與面。係宋人刻。其餘。運慶補之。開祖曰曇照禪師。建保二年。（宋寧宗嘉定七年甲戌）入宋。受具足戒於中峰鐵翁二師。理宗帝召見。奏對稱旨。帝大悅。賜號忍律法師。安貞元年。（宋理宗寶慶三年丁亥）歸朝。正元元年。（開慶元年己未）二月廿二日。寂。年七十三。寺什有大涅槃像。沙門古磵筆。長五丈。幅二丈。比之東福寺藏本。更大矣。又章駄天像畫。筆者未詳。然係六百年前物。蓋佛牙舍利。以其受韋駄天。當時邦人。善畫者。寫之乎。

靈明殿　奉安歷朝天子皇后御牌之處也。世稱月輪御陵者。在泉涌寺後。或曰。月輪山莊。在我禪坊。山莊則昔者九條關白藤原兼實公別業之名。我禪坊。卽泉涌寺也。故與御陵地。自別。御陵今不記載焉。

六八

東福寺　在伏見街道第一橋南。號惠日山。禪宗臨濟派本山。居於五山第四。開祖曰聖一國師。名辨圓。號圓爾。駿河人。年甫十八。初入近江三井寺。剃髮爲僧。更詣大和東大寺。受戒於戒壇。又從下野長樂寺僧榮朝學禪。嘉禎元年。（宋理宗端平二年乙未）入宋。師事徑山寺僧無準。居六年。仁治二年。（宋淳祐元年辛丑）歸朝。關白九條道家公。爲建此寺。其曰東福者。合奈良之東大興福二寺號。各取其一字云。弘安三年。（元世祖至元十七年庚辰）十月十六日寂。年七十九。（宋僧師範附法圓爾上人書）道無南北、弘此在人、果能弘道、則一切處、總是受用處、不動本際、而歷遍南方、不涉別求、而普參智識、如是則非特此國彼國、不隔絲毫、至於及盡無邊香水海、那邊更那邊、猶指諸掌耳、此吾心之常分、非假於他術、如此信得及見得徹、則逾海越漠、陟嶺登山、初不惡矣、圓爾上人傚善財、遊歷百城、參尋智識、決明已躬大事、其志不淺、炷香求語、故書此以示之、丁酉歲十月、住大宋徑山無準老僧書、師範即無準名、丁酉、即我嘉禎三年、宋嘉熙元年也、又（僧道璨送圓爾上人歸日本詩）與盡心空轉海東、定應赤手展家風、報言日本眞天子、且喜楊岐正脈通、又（僧紹曇送日本爾侍者詩）徑山無法與人傳、幾度親遭毒手拳、今日大唐回首去、鼻頭元在口皮邊、世傳、此時諸友作頌送者、二十餘人、今不羅傳于世、可惜哉、先是、有宋人謝國明者、歸化我邦、居筑前博多津、圓爾歸朝之後、聞徑山寺罹災、乃勸國明、寄贈木板千枚、師範復書謝之、其文曰、師範和南手白、日本承天堂頭長老、維時隆暑、綱維道體安穩、去秋、初能上人來收書、且知住持有況、老懷甚喜、又荷遠念、山門興復重大、特化千板、爲助、良感道義、不謂、巨舟之來、爲風濤所鼓、其同宗者多有所失、此舟幸得泊華

亭、又以朝廷爲內地、不詳抽解維、特一方得遂意、今到華亭、已領五百三十片、其三百三十片、尚在慶元、未得入手、餘一百四十片、別船未到、且留能上人、在此少住、後見數目分曉、却津發、其歸方得作書致謝綱使謝丈大檀越也、嘗聞日本教律甚盛、而禪宗未振、今長老既能竪立此宗、常一一依從上佛祖所行、無有不殊勝矣、便中略此布復、未及詳具、約宜爲大法、多多珍愛、是祝、後經十四年、宋僧了惠寄書、其文云、了惠頓首再拜、上覆東福堂上禪師法兄大和尚侍者、即日春事告闌、恭惟孫候有相萬福、了惠繇以道福住山、王臣贊護、辭稱奕奕、遠被中夏、乃知先師左券至歸老手矣、欽羨欽羨、切乞爲師門、益加保護、以永眞風、不宣、天宋寶祐乙卯、三月二十五日、天童初祖比丘了惠頓首再拜、了惠者師範法嗣、是書、師範寂後、了惠復國師也、又隔豐年、東福山叟名慧雲、入宋、嘗見斷橋倫、問祖師西來之意、倫指壁間墨梅、慧雲立呈一偈、倫笑曰、和闍梨得梅意、若梅者、宋僧也、與書慧雲、有言曰、若梅每思勝集時、則朗吟壁間佳偈、如對蒼眉玉色、然濤瀾際天、可望而不可即、此心又當如何、聞師高隱、任道之器偉如、弘法之量温如、雖隻字不能訶候、時於鄉人中、粗知出處大概、適足以慰依豫云云、今通覽此等應酬文詩、其納交求法、互相推讓謙遜也、唯見不如後儒、綸辯華夷、分別內外之甚焉耳、然則、當時僧徒、却勝於儒者乎、創建而還。未嘗罹災。世稱一大舊伽藍。降至今代。佛殿法堂方丈庫裡選佛場等。盡歸烏有。僅存山門開山塔通天橋等耳。遠近莫不愛惜。山門號妙雲閣。扁額係足利義持筆。（義持、義滿子、在前編）閣上安置釋迦及十六羅漢等像。開山塔。號傳衣閣。聖一國師影堂也。通天橋。架洗玉澗。扁額。係普明國師筆。（國師、即春屋禪師、詳載相國寺條下）他有偃月橋。臥雲橋等名勝。此地。每秋霜葉如錦。名通天楓。

都人士遊賞者。尤夥。(賴山陽通天橋詩)橋底停車酒半醺、仰看霜樹亂紛紛、客來卻下玉龍骨、踏過一溪紅錦雲、寺什亦甚多矣。大涅槃像。長三丈九尺。幅二丈六尺。兆殿司筆。逸品之名。藉甚於世。五百羅漢像五十幅。佛祖像。七十幅。亦其筆也。兆殿司者。東福寺僧。不知何許人。名明兆。字吉山。性喜圖畫。朝揮灑。師僧大道戒之。不從。自號破草鞋子。將西遊筑紫。以作佛涅槃像。途逢異人。手授畫卷。有所自得。技愈進志益堅。而家素貧窶。不能得顏料。乃就山後溪澗。碎石淘沙。磨爲五色彩。於是。涅槃像遂成云。後世稱其處。曰繪具谷。繪具者。即顏料也。明兆終身。爲殿司役。因世稱兆殿司。及至近代。兆殿司之名。遠聞于西洋各國。其畫神妙。亦可知焉。寺什又多藏漢土書畫。晉顧愷之筆維摩像。唐禪月筆十六羅漢像。宋閻立本筆釋迦三尊。吳道子筆釋迦文殊普賢像。楊補之畫墨梅。陳季昭黃鶴樓圖。趙子昂書陶淵明像等。不遑枚舉。(岡松甕谷附東福寺龍眠上人詩)問遊過祇苑、勝絕異塵寰、樹色連溪動、苔紋隨地斑、飛甍聳林外、浮拱族雲間、烏下時求食、僧歸又掩關、夙齡欣白社、浪迹負青山、偶厠猊床會、忘情未肯還、

稻荷神社　在伏見街道第三橋南。奉祀五座。曰倉稻魂神。曰素盞烏尊。曰大市姬命。第四座即地主神。第五座。謂五十猛命。大屋津比賣命。柧津比賣命。大歲神。四神皆素盞烏尊之子。元明天皇和銅四年。(唐睿宗景雲二年辛亥)二月。創設。延喜八年。(後梁大祖開平二年戊辰)左大臣藤原時平公。重修。稻荷山。在神社後。相距數町。稻荷。或作飯成。或伊奈利。以國音相通也。(松崎慊堂稻荷社記)素盞嗚尊所生、曰宇迦之御魂神、是能播殖百穀、神代淳質、前神後神、以其功德等、故受其名、亦同也、神至和銅年間、以二月上午、降於王畿伊奈利之山、乃皇國社稷之一守、故延喜式、定著爲名神大、而上下延祀、遍於天下郡國、其祭也報而不祈焉、是正祀也、其以泥狐從祀者、昔神之降於伊奈利山也、山有白狐、窟宅社旁、沾其殘芳賸瀝、奔走先後、益諧穆廟貌、故名曰使者云爾、中世以來、仍牽引竺典所云吒祇尼天、以冐宇迦之御魂、直指白狐、爲稻荷神、而黃妖赤魅、假踞神社、斯民之祈而求福者、無地無之、此謂媚竈而忘天、伋奴而爲主、所謂淫祀之甚者也、余憂斯民之黷神、而正與淫之不判而混也、作此記、云云、山中多狐窟。世俗所謂稻荷神使者。三峯等舊跡。在焉。

五條橋　幅四間二尺。長四十八間三尺。昔者。架於今松原通路。豐臣氏之時。始移於此。此地。舊屬六條坊門通路。世傳。源義經。與僧辨慶。初相見之處。

神宮教會所　在寺町通。綾小路東。明治之初。創設。隷伊勢神宮教院。爲遙拜伊勢大廟之處。

四條橋　幅四間。長五十四間。康治元年。（宋高宗紹興十二年壬戌）是爲架橋鴨川之始云。四條納凉。語詳鴨川條下。

高瀨川　鴨川分派。自二條橋下。凡一町許。西折而南流。過竹田。伏見街道。遂入淀川。慶長十六年。（明神宗萬曆三十九年辛亥）德川氏。將大修理皇宮也。甚難挪撒巨石大木。角倉了以。奉命。開鑿此河云。（高彌雜咏）數條纜曳幾艘舟、野許聲聲灘急流、利澤于今深似水、後人倘憶角翁否、

新京極　此地舊屬寺院地域。明治之初。劃成一區。北自三條通。南至四條通。名新京極。酒樓飯舗開焉。雜劇遊技設焉。甲歌乙舞。彼呼此叫。老幼婦女。連袂而步。遠近行客。曳笻而行。晝夜喧囂。四時雜沓。世人。因併大阪千日寺前。東京淺草寺中。稱三府三熱鬧地。

電燈會社　在高瀨川西。明治廿年。創設。貲金拾萬圓。擦製電光。傳致各地之處。會社者。猶言公司。餘倣此。

六角堂　在六角通烏丸東。稱頂法寺。兼修天台眞言二宗。隷聖護院。開祖卽聖德太子也。本堂安置如意輪觀音黃金像。長一寸八分。其堂形六角。故稱六角堂。

御影堂　在五條通寺町西。稱新善光寺。時宗。天長年中。（唐敬宗文宗間）檀林皇后。詔僧空海。建之。檀林皇后者。謂嵯峨天皇皇后橘氏。尤奉佛法。又稱光明皇后。中興祖曰應阿上人。本尊佛。摸信州善光寺阿彌陀佛像。故稱御影堂。後居坊中者。以製扇子爲業。我俗呼扇子。曰御影堂。蓋基於此云。

長講堂　在下寺町五條南。昔者。後白河法皇所建。稱六條御所之別殿。法皇屢幸此堂。親展亡靈名幀。念佛講經。以祈其冥福矣。因稱長講堂云。法皇以後。天子親王。奉行其例。亦不少也。

京都停車場　卽鐵路車站也。在七條通南。場西接京都鐵道停車場。轉乘則當經島原二條花園嵯峨。前赴丹波地方也。其東接奈良鐵道停車場。轉乘則當經伏見桃山木幡宇治狛里木津等。前赴大和地方也。

本願寺　淨土眞宗。又稱一向宗。開祖曰親鸞上人。初名善信。本姓藤原。父名有範。日野氏。歷仕二條高倉兩朝。爲皇太后大進。母源氏。幼失怙恃。爲伯父範綱所養。年甫九歲。師事青蓮院主慈圓。削髮爲僧。改名範宴。既長。遂極天台宗義。兼修他宗。自謂佛法之要。在於濟度衆生。拘泥宗旨。不察世變。何得道俗解脫之便法也哉。更從源空。脩淨土宗。改名綽空。時年二十九。實建仁元年也。宋寧宗嘉泰元年辛酉關白藤原兼實。夙奉源空之教。亦欲講凡夫往生之道。乃謀得源空弟子。妻以其女。源空輒舉綽空應之。既而源空之謫也。綽空亦流越後。居五年。遇赦歸京。於是。更名親鸞。歷游諸國。二十餘年。元仁元年。宋寧宗嘉定十七年甲申留錫常陸。時著教行信證

六卷。始開淨土眞宗一門。曰王法爲本。曰他力本願。門徒漸進。寺院遍於郡國。其稱眞宗。畧言之也。弘長二年。宋理宗景定二年壬戌十一月廿八日寂。年九十。荼毘于東山。藏骨於大谷。後十年。季女覺信尼。孫如信。相謀建寺于墳塋上。龜山天皇賜號久遠實成阿彌陀本願寺。明治九年。十一月。賜謚見眞大師。五世孫曰蓮如上人。當是之時。王室式微。足利氏政衰矣。群雄割據諸國。後柏原天皇踐祚。蓮如奉獻黃金。初得行卽位禮。乃勅許稱御門跡。門跡者。謂照遵奉待法皇之禮也。於是。門徒愈多。眞宗益盛。然戰國之世。移寺京都大阪間。屢矣。第十世曰顯如上人。名光佐。大與織田氏戰。既和。致大阪。移京師。豐臣氏之伐島津氏也。誘其門徒。通薩摩之道。以功。建寺于六條西。是爲本願寺本山。顯如有三子。長曰光壽。卽教如上人。季曰光昭。卽准如上人。顯如寂。光壽嗣。居三年。豐太閤命光壽。讓弟光昭。光壽遊于四方。關原之役。二人皆通欵德川氏。東照公入京師。光壽迎之

諸勝。皆係石川丈山命名云。（丈山事載詩仙堂條下、又大窪詩佛涉成園十三景詩、及賴山陽記等、世既傳之、今不載焉、）

西本願寺　在堀川通七條北。本堂安置親鸞上人坐像。世傳。上人嘗親刻其像。長二尺五寸許。授之女覺信尼。上人寂後。覺信粉碎遺骨。和漆塗之。俗稱骨肉御影。是也。寺中。經藏。鐘堂。鼓樓。唐門。白書院。黑書院。關雎殿。綺春殿。永安舘。集會所等。輪奐之美。不能詳記。大教校。在臺所門前。扁曰眞宗學庠。明治十一年。創建。

滴翠園　在集會所東。有閣三層。稱飛雲閣。昔者。豐公所建聚樂亭之物。閣中壁畫。狩野元信筆。庭園則有滄浪池。龍背橋。踏花塢。蝴蝶亭。夜光石。黃鶴臺。青蓮榭。嘯月坡。澆花亭。醒眠泉等諸勝。（八景及二十勝文詩、亦不載于此、）

本國寺　在堀川通。松原南。號大光山。日蓮宗一致派之本山。初在相州鎌倉松葉谷。稱法華堂。開祖曰日蓮上人。貞和元年。（元順宗至正五年乙酉）光明天皇。賜地於此。東西

七八

七九

大津。賀大捷。公曰。光壽本當嗣也。乃爲建寺于六條東。令天下門徒。分屬東西。故光壽卽東本願寺祖。而光昭卽西本願寺祖也。若他佛光寺派。高田派。木邊派。興正寺派。出雲寺派。山元派。誠照寺派等類。其源一也。今不載焉。或將於各條下說之。

東本願寺　在烏丸通七條北。慶長七年。（明萬曆三十年壬寅）德川氏賜地四方六町。以建寺焉。本堂安置親鸞上人像。係上野廐橋妙安寺舊藏云。元治元年。（淸同治四年甲子）七月十九日。罹兵燹。至今代。大興土木。以復舊觀。又置別院于海外各國。以謀布教。

涉成園　俗稱枳殼殿。爲東本願寺別第。在上珠數屋町。寬永年中。（明崇德淸天聰）德川將軍所賜。此地。往古。左大臣源融。建河原院之遺址。而挪撤桃山古城木材。構造亭舘。植枳殼。遶外牆。因稱枳殼御殿。庭園幽邃。有滴翠軒。傍花閣。印月池。臥龍堂。五松塢。侵雪橋。縮遠亭。紫藤岸。偶仙樓。雙梅簷。漱枕石。回棹廊。丹楓溪

二町。南北六町。六條判官源爲義邸址。本堂置法華經。立像堂。安釋迦像。方丈曰妙法華院。扁額。水戸義公筆。畫則狩野永德也。上人。幼字藥王麿呂。本姓藤原。父名重忠。稱貫名次郞。母淸原氏。生于安房國小湊浦。年甫十二。學眞言密乘於淸澄寺道善房。延應元年。（宋理宗嘉熙三年己亥）削髮爲僧。稱是性房蓮長。後改今名。周游四方。歷訪賢哲。研究諸宗奧義。遂創一宗。專據妙法蓮華經。因稱日蓮法華宗。時建長五年。（宋理宗寶祐元年癸丑）四月也。歲三十二。旣抵鎌倉。居松葉谷。著立正安國論。見執權職北條時賴。大論佛法正邪。弗聽。謫伊豆國。居三年。遇赦。文永五年。（宋度宗咸淳四年元世祖至元五年戊辰）蒙古使來。益唱立正安國論。屢諫內變外患之可恐懼警戒也。有搆讒者。處斬。時賴子時宗。減死一等。流于佐渡。凡五年。遇赦。知不可復有成於天下也。隱居甲州身延山中。弘安五年。（元至元十九年壬午、是歲元殺文天祥、）十月十三日。寂于武藏國荏原鄕。池上宗仲家。年六十一。後醍醐天皇勅賜大菩薩之號。由是。信徒皆稱日蓮大

菩薩。一致派之外。有勝劣派。又分爲五。曰興門派。曰本成寺。曰妙滿寺。曰八品派。曰本隆派。而一致派亦別開不受不施派。今不載焉。寺什。有稱鵞毳曼陀羅者。曰蓮筆也。而其黃裝。則用楊貴妃袍衣云。

空也堂　又稱紫雲山極樂院。在蛸藥師通。油小路西。時宗。天曆三年。（五代漢隱帝乾祐二年己酉）創建。開祖曰空也上人。名光勝。醍醐天皇皇子。幼有方外志。詣尾張國分寺。削髮爲僧。後登叡山。從慈惠學。居常愛鹿。平定盛夜獵殺之。旣悔。爲有髮僧。剝其皮爲裘。揷其角於杖頭。口誦空也所作和讃。或鳴鐃或鼓瓢。勸化都鄙。稱號念佛。今世所謂鉢叩者。其遺風也。

菅大臣神社　在西洞院通。高辻北。（辻者國字、謂十字街也、）此地。古爲參議菅原是善卿第。是善。卽菅公父。公實生於此。祉南有誕生水。又世所謂飛梅。在其西南隅。（飛梅詩載在北野神祉條下、）

壬生寺　又號寶幢三昧寺地藏院。在綾小路通西端。壬生村。眞言戒律二宗。屬南

都招提寺。開祖曰快賢。藤原氏。關白道兼公族。從智證大師。極天台奧義。正暦二年。（宋太宗淳化二年辛卯）命工定朝。刻地藏佛像。千日乃成。長三尺餘。建堂置之。號小三井寺。永承六年（宋仁宗皇祐三年辛卯）十一月十六日寂。至建保中（宋寧宗嘉定年間）大和人平宗平。更建堂宇僧房。號寶幢三昧院。白川鳥羽後白河順德四帝。嘗幸于此。其名益顯。中興祖曰圓覺。亦大和人。藤原廣元之子。始唱大念佛。又行舞樂。世俗所謂壬生狂言。是也

島原遊廓　在丹波街道西。朱雀野。往昔。此地方係鴻臚舘趾。後屬觀音壽院。天寶遺事云。長安。有平康坊。妓女所居之地。北里志云。平康里。入北門。東回三曲。卽諸妓所居之聚也。我所謂遊廓。卽遊里也。劃其經界。不使他肆廁。居于此之義。東京之芳原。大阪之松島。皆無不然。寛永十八年（明崇德十四年、淸宗德六年辛巳）自魚棚室町。始移於此。會有肥前島原之亂。於是遊客醉人。相戲而言。勇往奮進。當攻島原。以挑戰耳。連呼島原島原。遂以爲名云。嗚呼。行儺之跡。忽爲非禮之地。可笑之語。觚

成不朽之名。名實不相稱。淸濁易相混。世事人爲。千變萬化。豈獨此一地方也哉。

六孫王神社　在八條西櫛笥。奉祀鎭守府將軍源經基公之處。公貞純親長王子。淸和天皇第六之孫。世因稱六孫王。始賜姓源。實爲淸和源氏鼻祖。此地卽其邸址也。又有貞純親王。及多田滿仲祠。承久年間。（宋寧宗嘉定來年）創建。今列鄕社。（經基後有賴朝、始開覇府于鎌倉、與弟義經有隙、義經遁逃奧羽、旣過蝦夷、渡海入滿洲、世傳、義經後裔大奧、以其爲淸和源氏後、國號曰淸、乾隆帝嘗作序文、略述其事、寘之圖書集成中、國人忌而刪去之、故今不傳、近世又著義經再興記、備此異聞、余未之見、）

敎王護國寺　在九條大宮西。俗稱東寺。眞言宗。開祖曰弘法大師。名空海。讃岐多度郡屛風浦人。佐伯氏。父名善通。母阿刀氏。夢僧入懷有身。寶龜五年。（唐代宗大曆九年甲寅）六月十五日生。適丁唐不空三藏入寂之日。於是。世人以空海。爲不空之後身云。年甫十三。從舅氏。讀書屬文。十八。出游京師。著三敎指歸。以表其志。旣請石淵寺勸操爲僧。更受戒東大寺。時年二十二。一夜夢知大和久米道場。藏大毘盧遮那經。乃往得之。遂起入唐求法之志。延暦廿三年。（唐德宗貞元二十年甲申）從遣唐使。至于長

安。親受眞言密法於靑龍寺慧果和尙。時年三十一。居二年。歸朝。奉旨弘教。弘仁四年。（唐憲宗元和八年癸巳）創建寺于京師。原屬鴻臚館。蓋倣漢土賜鴻臚館於不空三藏。以爲精舍之例。今乃分其館爲二。賜右館於空海。號東寺。賜左館於守敏。號西寺。七年。（唐貞元十一年丙申）更賜地紀州高野山。建金剛峯寺。平城嵯峨淳和仁明四帝。及嵯峨皇太后。淳和天皇。皆受其灌。眞如親王。如意尼等。則爲法弟。承和二年。（唐文宗大和九年乙卯）三月廿一日寂。年六十二。後歷八十餘年。醍醐天皇賜謚弘法大師。（唐馬總詩）何乃萬里來、可非衒其才、增學助玄機、土人如子稀、蓋空海嘗作離合詩、與僧維上、會元馬總讀之歎賞、有贈云、（胡伯崇詩）說法四句演毘尼、凡夫聽者盡歸依、天假吾師多技術、就中草聖最狂逸、（朱千乘詩序）送日本國三藏空海上人、朝宗我唐、兼貢方物、而歸海東詩幷序、滄海無垠、極不可究、海外緇侶、朝宗我唐、即日本三藏空海上人也、能梵書工八體、繕俱舍精三乘、去秋而來、今春而往、反掌雲水、扶桑夢中、他方異人、故國羅漢、蓋乎凡聖、不可以測識、亦不可以智知、勾踐相遇、對江問程、那堪此情、離思增遠、願珍重願珍重、元和元年、春、姑洗之月、聊序當時少留云、古貌宛休公、談眞說苦空、應傳六祖後、建化島夷中、去歲辭秦闕、今春赴海東、威儀易舊體、文字冠儒宗、留學幽微旨、玄關護法崇、凌波無際礙、振錫路何窮、水宿鳴金磬、雲行侍玉童、承恩見明主、偏求僧家風、（朱少端詩）禪客祖州來、中華謁帝回、騰空猶振錫、過海素浮杯、佛法逢人授、天書到國開、歸程三萬里、後會信悠哉、（沙門曇靖詩）異國桑門客、乘槎望斗星、來朝逢天子、歸譯竺乾經、萬里洪濤白、

八三

三春孤嶋靑、到宮方奏對、圖像到王庭、（沙門鴻漸詩）禪居一海隔、鄉路祖州東、到國宣周禮、朝天得僧風、山冥魚梵遠、日正蜃樓空、人至非徐福、何由寄信通、（鄭壬詩）承化來中國、朝天是外臣、異才維作侶、孤嶼自爲隣、雁塔歸殊域、鯨波涉巨津、他年續僧史、更載一賢人、又有開成四年、正月廿二日、靑龍寺僧義操、其文云、靑龍寺東塔院傳法灌頂承襲弟子義眞等十人、上信物道具經法等、五鈷鈴一、三鈷杵一、獨鈷杵一、已上三事、故大德惠果先師受持道具、充空海阿闍梨影前供養、云云、開成四年、即我承和六年、己未、距空海死、僅四年也、蓋爲其三年忌辰供養者歟、

大師之在世也。擧國無所不至。布教之餘。穿山塡谷。建置廟宇。開拓蓁莽。繁殖物產。又尤善書札。史云。嵯峨天皇。亦善書。每與空海。競其優劣。一日。天皇手出法帖。曰。是唐人墨跡。朕甚愛之。只恨未知何人筆也。空海曰。是臣在唐時所寫者。天皇以其體異。不信。空海乃裂軸奏覽。卷末書某年某月沙門空海書于靑龍寺。天皇始嘆服。又嘗詔改殿閣諸門號。（弘仁九年、四月、即唐元和十三年、戊戌、）皆題榜之。東西二門。親染宸翰。南門則空海。爲應天門三字。北門則橘逸勢。逸勢。奈良麻呂孫。入居之子。與空海。共遊于唐。唐人呼曰橘秀才。（唐僧曇靖小序云、奉送日本國使空海上人、橘秀才朝獻後却還云云、逸勢事、詳載後編、）法嗣有眞濟眞雅實慧道雄圓明眞如果隣泰範智泉忠延十人。世比之釋迦十大

八四

弟子。而其後分爲六派。又分爲十二派。遂致七十餘流之多。今大別之。曰古義眞言。曰新義眞言。東寺屬古義眞言。門四。南曰南大門。置金剛力士。西曰華蓮。東曰慶賀。北曰八足。金堂則安置藥師佛。豐臣秀頼再建。（秀頼、豐太閤長子、見前條。）倣東山大佛殿。講堂安大日如來。食堂安千手觀音。左右堂中。置夜叉神。係空海作。五重塔。正保元年。（明崇德十七年、淸順治元年甲申）再建。高二十八間六尺。西院。空海影堂也。有大日不動。四天王。般若菩薩。大黑天等像。皆空海所刻云。又安置桓武天皇御牌。三鈷松。在西院前。世傳。空海在唐。投三鈷杵。卜本朝當建寺院之地。得三處。曰山城。曰紀伊。曰土佐。（室生戸山是也、）此松則其杵之所止也。灌頂院。密法傳授之處。寺什。山水屏風一隻。唐憲宗帝所賜之物。尤稱奇品。其餘。不空羂索觀音等古畫佛像。皆盡係壹千年前作云。

下加茂御祖神社　在愛宕郡下鴨村。官幣大社。奉祀二神。曰玉依日賣尊。曰建角身

尊。白鳳五年。（唐高宗儀鳳元年丙子）創建。歷朝崇敬。以至今代。每年。五月十五日。勅地方官致祭。世稱葵祭。始於欽明天皇之時云。懸葵於冠。載花於傘。牛車馬鞍。衣服器仗。盡倣古樣。未曾變易。御手洗川。在神社東。古木鬱葱。曰糺森。三伏不覺其暑。唯有淸氣襲人。肅然身支生粟之概而已。

智恩寺　在田中村。號長德山。俗稱百萬遍。淨土宗。鎭西派之本寺。初係天台慈覺大師創建。爲加茂上下二社之神宮寺。後至圓光大師。改淨土宗。元弘元年。（元英宗至順二年辛未）天下大疫。後醍醐天皇。勅第八世住持善阿。禳之。善阿期七日。念佛號。凡百萬回。既而疫熄。天皇大喜。賜號百萬遍。寺什。有古硯。銘松蔭。宋孝宗帝。贈平相國。相國名淸盛。平氏。安德天皇外祖。爲太政大臣。（淸盛事詳載後條）又十體阿彌陀像佛。僧惠心筆。蝦蟆鐵拐畫。顏輝筆。

詩仙堂　在一乘寺村。石川丈山遺蹟。堂宇今尚存焉。丈山名重之。又號六六山人。

姓源。參河人。事東照公。爲旗下士。大阪之役。建先登第一之殊功。然以其犯軍律。致仕。隱居京洛。詩書自樂。我邦中古。藤原定家公。嘗居于京西小倉山莊。選古今善和歌者三十六人。稱三十六歌仙。丈山乃倣此例。自選漢土善詩者三十六人。請其友狩野尚信。畫其像於四壁。而自隸其詩。在左壁者。曰蘇武。謝靈運。杜審言。李白。王維。高適。儲光羲。韋應物。韓愈。劉禹錫。李賀。杜牧。寒山。林逋。梅堯臣。歐陽修。黃庭堅。陳與義。十又八人。在右壁者。曰陶潛。鮑昭。陳子昂。杜甫。孟浩然。岑參。王昌齡。劉長卿。柳宗元。白居易。盧同。李商隱。靈徹。邵雍。蘇舜欽。蘇軾。陳師道。曾幾。十又八人。於是。稱詩仙堂。與林羅山諸儒交遊。而賦和歌。以述不事王侯高尚其事之志。後光明天皇聞丈山善隸。詔徵其書。京都所司代板倉重宗。重禮師事之。（所司代、官名、市尹之類。）朝鮮權式。稱丈山曰日東李杜。物徂徠亦曰。東方詩傑。寬文十二年。（淸聖祖康熙十年辛亥）五月廿三日。卒。年九十。遺稿有

覆醬集。所藏書多係明版朝鮮板。近代有好事者。刻詩仙堂誌。圖錄書畫琴几尊物。以行于世。（賴春風詩）自爲墓誌瘞孤邱、夙定靑山埋骨謀、封侯不換林泉宮、方識當年第一流。」余嘗謂、當時三河武士、而有文事者、幾希、獨有石川嘉右衛門耳、而今、托名於犯軍律、不賞其功、却聽致仕、固非無謂也、蓋大阪兩役、豐氏君臣、陣亡殆盡、否者則降、雖如天下無可復憂、然京畿地方、一旦事起、不保無擁戴天子、號令四方、因以謀德川氏之徒也、於是、東照公賜擯石川、退居京師、陰視世勢、以備不虞、故無事則止、苟有事則丈山豈可詩書以終其身者哉、公之善用人亦可以見焉、乃賦一詩、云、休言遯世伍漁樵、試看楣間槍壹條、藉口詩仙樂風月、移居洛北護天朝、

圓光寺　在一乘寺村。號瑞岩山。禪宗。隸南禪寺。安置千手觀音坐像。係運慶刻。中興祖曰三要和尙。嘗奉東照公命。移足利學校於此寺中。且賜朝鮮板書二百部。及木刻活字十萬字。我邦活字。實始於此。寺什。趙子昂書七言絕句。八首八幅。尤稱珍品。寺後有東照公廟。僧三要所勸請云。（淡菴漫錄）余少好學、家貧無書、友人越智君、家富藏書、每朝夕於其家、乞借讀之、殆乎十年、以故、其學稍得進矣、不亦幸哉、君家藏本、相傳、昔豐太閤征韓時、其將浮田黃門、所取來以遺其先君某者也、故其藏、韓本居半、而往往世間未曾有者、在焉、寔希世珍、按甲乙剩言云、劉玄子從朝鮮還、言彼中書集、多中國所無者、且其刻本精良、無一字不倣趙文敏、惜爲倭奴殘毀、至圖籍之間、往往以書幅拭穢、亦典籍一大厄會也、由是觀之、我兵入其國、勇悍士卒、蹂躙八道、或

當不免有是等亾狀、若夫浮田氏、雖固非加藤肥州喜學、航海中讀魯論之比、然尙且脫典籍於此厄會、携回遺人、亦可不謂好學之良將也哉、剩言所說、刻本精良、吾未之見、其書迹倣趙文敏、則信有之、越智君名正隆、字子棟、江戸醫官、曲直瀨養安院君男、

修學院　往昔。亦屬僧房。後廢絶矣。僅存村名。後水尾天皇。（明末初清）愛其地勢。特建離宮。俗稱御茶屋。嗣後。歷世天子。屢幸臨焉。分苑爲二。曰上苑。曰下苑。下苑有瞻月觀。藏六庵等亭榭。上苑有隣雲亭。止止齋。窮邃軒等。苑中八勝。曰隣雲夜雨。曰茅檐秋月。曰村路晴嵐。曰修學晩鐘。曰遠岫歸樵。曰松崎夕照。曰叡峯暮雪。曰平田落雁。而今以其爲離宮。不准閑人進門。

御蔭神社　在高野川東。又稱御生山。屬加茂神社。上古御祖大神降臨之地。因奉祀高産靈尊。天照大神二神云。

加茂別雷神社　在上加茂村。官幣大社。奉祀加茂別雷神之處。世傳。玉依日賣尊。遊于石河瀨見小川上云云。卽今鴨川。本社創建。與御祖神社同時。而勅使致祭。

亦同其例。曰上加茂。曰下加茂。以神社之在河流上下。有此稱耳。神林之幽。別社之多。有勝于下加茂者。

八瀨里　在高野村北。壹里許。叡山西麓。八瀨或作矢背。以國音相通也。世傳。天武天皇。（唐高宗咸亨三年壬申）與皇姪大友戰。不利。矢中其背。旣癒。故名其地。

大原女　自八瀨北壹里。至大原鄕。爲若狹街道。此地方婦女風俗。與都人逈別。服黑衣。褰其裳。手脚皆着白衣。束髮垂頸。亦以白手巾包其額。而頭上戴物以行。晋京貿易。茶筐魚鑑。梯楷薪柴等屬。未嘗肩荷背負也。京人呼稱八瀨女。又大原女。自古至今。不改其俗。亦一奇觀。

無音瀑　在大原村。來迎院東。瀑高六丈。幅二間五尺。傍崖徐下。激石無聲。因號無音。流爲二派。注南曰呂川。北曰律川。蓋倣淡土魚山之稱云。

三千院　在呂川北。天台宗。往古。法親王爲座主。或稱梶井宮。或稱梨本宮。又稱

圓融院御門跡。是也。寛和元年。（唐太宗雍熙二年乙酉）花山天皇。勅惠心僧都。創建此寺。其結構自異於他寺院。本堂安置丈六彌陀。左右觀音勢至。皆坐像也。而如意輪坐像。實壹千貳百年前物云。至今代。廢御門跡等稱。只曰三千院。寺什屏風。畫比叡山全圖。御繪所法橋了琢筆。亦足以觀元龜兵燹以前。宏壯觀美之狀。

比叡山　往古。作並枝山。日枝山。日吉山等。以國音皆通也。屹在山城近江國界。其最高處。曰四明嶽。世傳平將門。嘗與藤原純友。同登比叡山。俯瞰皇城。曰。壯哉。大丈夫不當宅此耶。（將門事蹟、載後條下）即爲此嶽。矗立千九百尺。京都宮殿市坊。縮聚於一望中。今猶古也。山上有三塔。曰東塔。號止觀院。在無動寺北。曰西塔。號寶幢院。在東塔北。曰横川。號楞嚴院。在西塔北。昔者源義經僕辨慶。居此。因稱西塔武藏坊。（義經等事、載後條下）山谷嶮隘。僧徒强暴。自保元平治之亂。至南北兩朝之戰。無垢淨土。毎爲修羅場。屢矣。後逢織田氏火攻。寺宇遂墟。而登高放眸。未嘗改觀。琵琶

湖之水。攝河泉之山。巍峨汪洋。亦足以養心目。海外遊客。毎夏避暑於此。而古刹延暦寺。在焉。

延暦寺　又稱一乘止觀院。天台宗之本寺。延暦七年。（唐德宗貞元四年戊辰）桓武天皇。勅建此寺。開祖曰傳教大師。名最澄。姓三津氏。近江滋賀人。年甫十二。從大安寺僧行表。削髮爲僧。十八得度。二十受具足戒。結廬於此山中。坐茹棘臥雨露。誦起信論華嚴經等。後至南都。得玄義文句止觀三大部。晝夜研究。遂通天台奥義。誓弘此法。歸山。創建根本中堂。即一乘止觀院。又號比叡山寺。十三年。（唐貞元十年甲戌）大修供養會。天皇行幸。文武百官。從之。既賜號延暦寺。又分近江正税。以充寺資。年三十八。奏請與僧空海。從遣唐使。至長安。後登天台山。受菩薩戒於國清寺道邃。法要經書於佛隴寺行滿。眞言三部等於越之龍興寺惟象。北宗一派於唐興縣翛然禪師。無往而不自得焉。明年。歸朝。獻經卷貳百三十部等。天皇大喜。詔益弘

其法。新唱天台法華宗。弘仁十三年。（唐穆帝長慶二年壬寅）六月四日。寂。年五十六。後歷四十五年。淸和天皇賜諡傳敎大師。大師之號。始此。（與最澄闍梨印記）最澄闍梨、形雖異域、性實同源、特禀生知、觸類懸解、遠求天台妙旨、又遇龍象邃公、總萬行於一心、了殊途於三觀、親承秘密、理絕名言、猶慮他方學徒不能信受、所請當州印記、安可不任爲憑、大唐貞元廿一年、二月廿日、朝議大夫持節台州諸軍事守台州刺史上柱國陸淳給、又曰、孔夫子云、吾聞西方有聖人焉、其敎以淸淨無爲爲本、不染不著爲妙、其化人也、具足功德、乃爲圓明、最澄闍梨、性禀生知之才、來自禮義之國、萬里求法、視險若夷、不憚艱勞、神力保護、南登天台之嶺、西泛鏡湖之水、窮智者之法門、可謂法門龍象、靑蓮出池、將此大乘、往傳本國、求茲印信、執以爲憑、昨者、陸台州、已與題記、故具所親、爰申直筆、大唐貞元廿一年、五月十五日、朝議郞使持節明州諸軍事守明州刺史上柱國滎陽鄭審則（附法最澄三藏書）比丘僧道邃、稽首頂禮天台大師、竊以法王出世、一音演說、機感不同、所聞益異、故權實之義、授於諸部、大小之文、森然殊流、要其所歸、無越一實、云云、古德相傳曰、昔、智者大師、隋開皇十七年、仲冬二十四日、平旦、告諸弟子曰、吾滅後二百餘歲生於東國、興隆佛法、若有感應、先呈瑞應、則一法鑰投空、倏忽而入空、擧衆雖莫譏、終不知所届、而今聖語有徵矣、遇最澄三藏、不是如來使、豈有堪難辛、然則開宗示奧、以法傳心、化隔滄海、相見杳然、共持佛慧、同會龍華、大唐貞元二十一年、歲次乙酉、二月朔、癸丑、十五日、丁卯、天台妙門道邃（送最澄上人還日本國幷序）過去諸佛、爲求法故、或碎身如塵、或捐軀强虎、嘗聞其說、今視其人、日本沙門最澄、宿植善根、早知幻影、處世界而不著、等虛空而不凝、於有爲而證無爲、在煩惱而得解脫、聞中國故大師智顗、傳如來心印於天台山、遂齎黃金涉巨海、不憚滔天之駭浪、不怖映日之鸑鵬、外其身而身存、思其法而法傳、大哉、其求法也、以貞元二十年、九月二十六日、臻於海郡、謁太守陸公、獻金十五兩、筑紫斐紙二百張、筑紫筆二管、筑紫墨四挺、刀子一、加斑組二、火鐵二、加火石八、蘭木九、水精珠一貫、陸公精孔門之

九三

奧旨、蘊經國之宏才、淸比氷囊、明逾霜月、以紙等九物、達於庶使、返金於師、師譯言請、貨金貿紙、用書天台止觀、陸公從之、乃命大師門人之裔哲、曰道邃、集工寫之、逾月而畢、邃公亦開宗指審焉、最澄忻然、瞻仰作禮而去、三月初吉、遐方景濃、酌新茗以餞行、對春風以送遠、上人還國謁奏、知我唐聖君之御宇也、其詩云、重譯越滄溟、來求觀行經、問鄉朝指日、尋路夜看星、得法心愈喜、乘槎體自寧、扶桑一念到、風水豈勞形、貞元二十一年、巳日、台州司馬吳顗（台州錄事參軍孟光詩）往歲來求請、新年受法歸、衆香隨貝葉、一雨濕禪衣、素舸輕翻浪、征帆背落暉、遙知到本國、相見道流稀、（台州臨縣令毛渙詩）萬里求文教、王春愴別離、未傳不住相、歸集祖行詩、擧筆論蕃意、焚香問漢儀、莫言滄海闊、杯度自應知、（鄉貢進士崔謨詩）一葉來自東、路在滄溟中、遠思日邊國、却逐波上風、問法言語異、傳經文字同、何當至本處、定作玄門宗、（廣文館進士全濟時詩）家與扶桑近、煙波望不窮、來求貝葉偈、遠過海龍宮、流水隨歸處、征帆遠向東、相思渺無畔、應使夢魂通、（前國子監明經林暈詩）求獲眞乘妙、言歸倍有情、玄關心地得、鄉思日邊生、作梵慈雲布、浮杯漲海情、看看達彼岸、長老散花迎、（沙門行滿詩）異域鄉音別、觀心法性同、來時求半偈、去罷悟眞空、貝葉翻經疏、歸程大海東、何當到本國、繼踵大師風、（天台歸眞弟子許蘭詩）道高心轉實、德重意唯堅、不懼洪波遠、中華訪法緣、精勤同忍可、廣學等彌天、歸致扶桑國、迎人擁海壖、（僧幻夢詩）却返扶桑路、還乘舊葉船、上潮看浸日、翻浪欲滔天、求宿學逾日、雲行距隔年、遠將乾竺法、歸去化生緣、法嗣曰慈覺大師。名圓仁。姓壬生氏。下野人。年甫十五。師事傳敎。既詣東大寺。受具足戒。年三十七。入唐。受梵學於宗叡。灌頂於全雅。摩訶止觀於五臺山志遠。金剛界大疏於大興善寺元政。眞言印契於靑龍寺義眞。承和十四年。（唐宣帝大中元年丁卯）歸朝。傳敎之遺業。至此大成云。齊

九四

衜元年。唐大中八年甲戌 爲延曆寺座主。貞觀六年。正月。寂。年七十一。賜謚慈覺大師。
（唐僧樓白送圓仁三藏歸日本國詩）家山臨晚日、海路信歸橈、樹滅浮無岸、風生只在潮、歲窮程未盡、天末國仍遙、已入閩王夢、香花境外邀、又有智證大師。名圓珍。姓殷。義眞弟子。奉旨入唐。尤極台密二門。多所發明。既而歸朝。更開一法門。爲園城寺別當。於是。天台法華宗。分爲二。曰山門。屬比叡山。曰寺門。屬三井寺。卽園城寺。圓珍爲其開祖。事詳載三井寺條下（唐鄕貢進士沈懽、國淸寺止觀堂記）緇者、我大中七年、九月十日、有日本國大德僧、法號圓珍、俗姓殷、自扶桑而來、抵于亘唐福建、旋適五臺、復止天台國淸、傳西域金人之敎、我師幼能拔俗、剃度出家、云云、以十年九月七日、建成矣、法師卽住持此院、苦節修行、以無爲心、得無得法、遂挈瓶錫、告別東歸、卽十二年、六月八日矣、有趙郡李處芳名達、爰來告愳、與師有舊、東望雲外、空增浩然、仰梵宇之寬、斯其功莫大、乃命予、寔錄其事、唯慙不文、咸通二年、五月十日記、按咸通二年、卽我淸和天皇貞觀三年也、初貞元中、最澄創一院於國淸寺、會昌之後、漸毀、圓珍捨財建止觀院、以葺其師之志、令淸觀主之、衆稱其有後、淸觀卽唐僧名、又（今昔物語云）仁壽三年、八月九日、唐商良暉、將歸其國、圓珍同乘其船、風順東駛、十三日、申刻、北風忽起、十四日、辰刻、漂到琉球國、琉球國啖人之地、既而風歇、船亦不搖、岸上有人數十成群、手執刀戈、良暉恐危不措、圓珍乃祈不動尊、忽遇巽風、指乾位行、遂到福建、云云、是此琉球卽隋書所謂大琉球、而今臺灣島也、歷世天子。無不崇尊歸依。醍醐天皇皇孫明救僧正。爲座主後。非法親王。不得襲其職也。於是。靑蓮妙法圓融三院門跡。交出爲座主

云。護良親王。亦嘗爲山門座主。稱大塔宮。事詳末篇。元龜二年。明穆宗隆慶五年辛未 寺院盡罹兵燹。天正十二年。明隆慶十二年甲申 豐太閤再興。寬永年中。明末淸初 大猷公重脩。今存者是也。根本中堂。在東谷。安置藥師佛像。最澄作。一乘戒壇堂。堂下塡敷漢土五臺山土。文珠樓。文珠像倣五臺山刻法。前唐院。慈覺大師廟。淨土院。傳教大師廟。相輪橖。相。視也。相輪者。瞻仰之義。橖。柱也。世傳。此山用橖。不建塔。橖高四丈五尺。凡九層。上層徑八寸。下層徑壹尺六寸。弘仁十一年。唐元和十五年庚子 九月。建立。橖中藏法華經大日經等五十八卷。銘云。爲悅冥道。起斯輪橖。又云。亦塔亦幢。延壽安身。惟經惟咒。護國濟人。靑龍寺在黑谷。淨土宗祖源空嘗在於此。因稱元黑谷。慈惠大師堂。在中堂北。名良源。姓木津氏。近江淺井人。師事理仙。受顯密秘奧。後補天台座主。又爲大僧正。永觀三年。五代太宗太平興國八年癸未 正月三日。寂。世因稱元三大師。安樂院。惠心僧都。嘗居於此。著往生要集。贈之宋四明僧知禮。智禮以菩提樹壹株。報之。其樹今尙存焉。

建勳神社　在船岡山麓。奉祀正二位右大臣織田信長公之處也。公幼字吉法師。其先出於平重盛。（重盛、平相國清盛子、事詳後清盛條下）織田氏。世爲尾張名族。父名信秀。其第二子也。信秀自居古渡城。別城那古野。（即今名古屋市）置吉法師。令林通勝。平手政秀等傅之。甫十三。加首服。名信長。稱三郎。當是之時。足利氏政衰矣。天下諸侯。互相吞滅。信長西征東伐。所向無敵。遂朝京師。視宮闕頽廢。且先修理之。正親町天皇。嘉賞不措。時永祿十二年也。（明穆宗隆慶三年己巳）足利義昭。爲其第十五世將軍。攻信長不克。於是。足利氏亡。天子欲授將軍職。信長固辭。叙正二位。拜右大臣。信長尤憎緇徒兇暴。動輙戡亂天下也。攻比叡山。縱火燒之。又與一向僧。大戰于大坂。互有勝敗。前後五年。初降。既遣其將羽柴秀吉。往攻毛利氏。及聞戰將有利。欲令明智光秀援之。留子信忠等。守二條城。而出安土。入京師。館于本能寺。天正十年。（明萬曆十年壬午）五月十五日。光秀謀反。昧爽。圍本能寺。森蘭丸以下百餘人拒戰不克。信

長自焚而死。時年四十九。信忠聞變。將赴援之。半途而還。嬰二條城。亦自殺。謚曰總見院殿。世因稱總見公。明治二年。詔建神社於此地。賜號建勳。

小野篁墓　在紫野雲林院東。壹町許田畝中。史云篁姓小野氏。參議岑守之子。少喜馳馬。不事學業。嵯峨天皇聞而惜之。曰。斯人之子。而爲弓馬之士。何哉。篁慚悔。折節讀書。弘仁中。及第。後累遷彈正大弼。承和初。藤原常嗣爲遣唐大使。篁爲副使。常嗣駕第一船。篁駕第二船。既發。遭風回棹。常嗣以第二船堅牢。奏易已船。篁忿恚。遂稱病獨留。作西道謠。刺之。頗犯忌諱。遂流太宰府。途上又賦謫行吟七十韻。人咸傳誦。既與唐儒沈道固親善。屢相唱和。道固稱其富艷。後遇赦歸。復爲參議左大辨。世稱野相公。嘗侍河陽舘。天皇示詩一聯。曰閉閣唯聞朝暮鼓。登樓遙望往來船。篁奏曰。御製甚佳。改遙作空。更妙。天皇驚曰。此白居易句也。遙本作空。聊試卿爾。卿詩情乃與居易同耶。時白氏文集始至。獨藏秘府。

世未有睹者也。篁事母至孝。家素清貧。俸入皆施賚故。文章冠絕當時。又善草隸。然爲人不羈。尤好直言。不爲當世所容。人呼野狂云。仁壽二年。(唐宣宗大中六年壬申)十二月薨。年五十一。又傳。篁嘗讀書于下野足利鄉。後人建黌舍於此地。所謂足利學校。是也。(淡菴漫錄)寬政癸丑、秋、余負笈、遊于下毛足利學校、謁寺僧、閱聖像、搜書庫、因問以學校創設之事、僧曰、淳和帝、天長九年、八月五日、參議小野篁、奉勅所創立也、然余撿國史諸書、其事不少概見、其說爲可疑矣、竊謂是必足利氏之所建也、然亦無稽記可徵焉、則以其爲臆說、不敢語人、有年于茲、近閱平維章東海談、引分類年代記云、足利義兼、嘗剏學校於足利、收藏自漢土將來、先聖十哲諸像、祭器經籍等、世推曰足利學校、義兼、義康子、娶北條時政女、生義氏、後經百餘年、罹災、建武中興、足利尊氏謀叛、出奔西海、與菊池氏、戰于多多良濱、時默禱孔廟、遂得勝矣、於是、再造聖廟、以崇奉之、世世不絕祭祀、欲無墜祖先之遺業也、然則其創在足利氏之時、果如余所臆料、然分類年代記、余未審何人作、唯維章博覽、定有所見、姑錄俟博雅、又云、書庫所收、都二百七十二部、大抵百年以來、縉紳諸家所納、惟其中有上杉憲實父子所納、尙書毛詩左傳禮記周易疏、及北條氏康父子所納、禮記文選、皆宋板也、其冊幅頗大、與今世舶來書不同、文字亦多異矣、人或疑其非宋板、然書中避仁宗諱、貞字皆缺畫、又陳眉公妮古錄云、元美公有宋刻前漢書、皆大、官板長尺五寸許、足利本、與此說符、則其爲宋板明矣、近世畿祉徵所刊行、七經考文、是其所由出也、每冊卷末、記其姓名及奉納歲月、細楷可愛、恐係憲實氏康等手寫、又別有古寫本論語義疏、亦三四百年前物、每卷印記藏文庫三字、未詳其何人所藏、或有校行于世者、是其原本也、云云、余亦嘗詣聖廟、門庭坍塌、荊棘寒途、問其藏書之所在、里人曰、在村役塲、相當散佚、往訪村吏、遂不得見之、後數年、有好事者、著足利學校事蹟考、刊行于世、記其

沿革、圖其器物、亦可以供考古之材也、

大德寺　在紫竹大門村。號龍寶山。禪宗。臨濟派之本寺。正中元年。(元英宗泰定元年甲子)後醍醐天皇。勅僧妙超建之。妙超字宗峯。姓紀氏。播磨人。年甫十一。登書寫山。從僧戒信受戒。後詣鎌倉建長寺。師事南浦。參禪。旣歸京師。住雲居寺。赤松圓心父子。爲建一寺于紫野。時有叡山玄慧法師。率其徒九人。來排滅禪宗。於是。辯難論毀。無遺餘力。而不能挫妙超之禪機也。遂執弟子禮。別建方丈。使其徒宗印歸禪。花園天皇。聞之。召見妙超。親問法要。賜號興禪大燈國師。至後醍醐天皇。益加寵榮。宸翰寫高照正燈國師字。賜之。且以大德寺。爲第一祈願之處。稱本朝無雙禪苑。延元二年。(元順宗至元三年丁丑)十二月廿二日。寂。年五十六。諸堂盡係應仁亂後築造。山門經藏鐘樓等。無不具備。連歌師宗長。茶伯千利休。及金森宗和。小堀遠州等。遺蹟尤多。而眞珠庵。卽一休禪師之所居。(一休禪師宗長利休等事、詳載後篇條下、)寺什。

後醍醐天皇筆。和漢朗詠集。牧溪筆。龍虎二幅。吳道子筆釋迦像。是其尤者也。

正傳寺　在西賀村。號吉祥山。禪宗。屬南禪寺。開祖曰宏覺禪師。名惠安。號東岩。播磨人。從悟空禪師。修禪。弘長二年。宋理宗景定三年元世祖元年壬戌、宋僧兀庵來朝。乃往見之。遂建此寺。建治三年。元世祖至元十四年丁丑十一月三日。寂。賜謚宏覺禪師。

鞍馬山　屬愛宕郡。在京都北三里。遙對叡山。老杉蔽山。怪巖橫途。風景亦佳。昔者。天武天皇。與皇姪大友戰。敗績。繫鞍馬於山下。故有此稱云。

鞍馬寺　號松尾山。天台宗。隷青蓮院。始兼戒律眞言。開祖曰唐僧鑑眞和尙。天平寶字八年。唐代宗廣德二年甲辰鑑眞自唐來。既歸化。奉勅搬戒壇於南都東大寺。寶龜中。移居于此。寶龜十年、冬、唐使高鶴林、與新羅貢調使金蘭孫等入朝、鶴林欲見鑑眞、既寂、乃作詩幷序曰、因使日本、願謁鑒眞和尙、既滅度、不覲尊顏、嗟而述懷、上方傳佛教、名僧號鑑眞、懷藏通鄰國、眞如轉付民、早嫌居五濁、寂滅離囂塵、禪院從今古、青松遶塔新、法留千載住、名記萬年春、後閱百四十年。大中大夫藤原伊勢人。亦得毘沙門木像。於北山叢林中。乃建堂安置之。更建觀音堂於其西。會

峯延法師。見紫雲起。自東寺來。乃請為寺主。峯延。東寺十禪寺之一也。距寺西北四町。有僧正谷。世傳。源義經。幼字牛若丸。年甫二歲。居鞍馬寺。稱遮那王。未削髮也。年十一。嘗見諸家系譜。自知其先世。出自清和天皇。其父祖皆為武將也。悵恨久之。於是。晝讀書。夜學劍搏。僧正名壹演。愛其志。密授兵法於此溪谷間。因有僧正谷之稱。義經已長。助其兄賴朝。開覇府于鎌倉。語詳各編。

金峯寺　在出谷村。屬葛野郡。號岩屋山。距京都凡五里。眞言宗。開祖曰役小角。優婆塞也。白雉元年。唐高宗永徽元年庚戌鏟險鑿山。以建一宇。小角。世稱役行者。詳載大和吉野條下天長六年。唐文宗太和三年己酉僧空海。重修。自刻不動佛。安置之。有香水窟。坐禪石。文字窟。護摩洞。飛龍瀑等勝區。分山為三。中央曰金光。左曰蟾塔。右曰靈洞。春花秋葉。風物可人。

棧敷嶽　在岩屋山北壹里。棧敷者。讀曰薩西氣。設棚觀物之稱。世傳。昔者。親王

惟喬。築樓於此。以便眺望。故有此名。攝跨葛野愛宕二郡。接丹波國。登嶺一望。
攝河諸山。呼乃將答。

高山寺　在栂尾。號栂尾山。華嚴宗。隸仁和寺。本堂。安置盧舍那佛像。係運慶刻。開
祖曰尊意阿闍梨。三井寺主。中興祖。曰明惠上人。名高辨。紀伊人。從高尾文覺
上人。得度。又受密乘於尊實興然二師。而學禪於榮西。榮西嘗往于宋。攜茶種歸。
（榮西事蹟詳載建仁寺條下、）明惠請植此地。遂及宇治一帶地方。我邦產茶之業。實始于栂尾云。
寺什。印度製古銅佛。唐制茶甕。銘小柿。篆隸萬象名義六帖。末記永久二年。
六月。敦文王書。寫畢。是爲三十帖中之六。外此。鳥羽僧正畫卷。土佐信實筆華
嚴草紙等。皆希有珍。

西明寺　在栂尾南。號槇尾山。又稱平等心王院。開祖曰智泉法師。空海徒弟。本堂。
安置釋迦佛。明惠所刻。觀音則係聖德太子作。原爲神護寺別院。後大廢頹。中興

一〇三

一〇四

祖曰明忍律師。字俊正。慶長中。擬經朝鮮。至於明國。遍訪律宗高僧。往至對馬。
會嚴禁往來海外令出。十五年。（明神宗萬曆三十八年庚戌）六月七日。寂於對馬豆酘山。

神護國祚寺　在鳴瀧西北。號高尾山。高尾又作高雄。眞言宗。寶龜五年。（唐代宗大曆九年甲寅）
和氣淸麻呂。（淸麻呂事、有所別載、）創建。初號神願寺。天長六年。（唐文宗大和三年己酉）和氣眞綱。仲世等。
與之僧空海。空海更稱神護國祚眞言寺。金堂。安置藥師如來。講堂。大日如來。
皆係空海刻。有古鐘。菅原是善（菅公之父）撰銘。（銘云、晨音在器、霜果惟因、爾祖初業、厥孫遷、宿昔三尺、今日千斤、繼有宏響、功無遂新、山歷萬歲、谷響由旬、閣宣恩夢、叩卽歸眞、慈周世界、威及非人、彫琢懸趣、宗受當仁、）橘廣相撰序。（序云、愛宕之山、神護之寺、三寶既備、六度無虧、唯所有梵鐘、形小音寒、故別林寺少僧都眞紹和尚、始發弘願、有以改鑄、鎔範未成、衣鉢早化、律師越少僧都從五位上、和氣朝臣鼎銘、以和尚之遺志、辭先祖之將墮、以貞觀十七年、八月廿三日、延治工志我部海繼、以銅一千五百斤、今鑄成焉、恐年代久遠、後人不知、仍記於鐘側、）
廣相幼有文名。九歲聽昇殿。及長博學。補文章生。對策
及第。歷仕陽成光孝宇多三朝。近侍左右。涉獵群籍。橫看讀過。嘗覽一切藏經。
七日而畢。渤海使者來朝。賜宴賦詩。廣相與焉。使者嘆稱其詞華富贍。選其貼切。

寬平二年。(唐昭宗大順元年庚戌)五月卒。以侍讀勞。勅贈中納言從三位。而書其序銘者。爲藤原敏行。世稱之三絕鐘。鐘樓亦係京都所司代。板倉勝重重脩。又藏紺紙金泥一切經八十櫃。後白河法皇所納。今尚存其四十五櫃。設色釋迦佛像。亦壹千年前物。(明天倫一彝遊高雄山詩)偶遊神護寺、霜日照幽屏、山色錦屏繞、溪流玉帶回、深林聽鳥語、幽谷看雲飛、並欲忘塵世、誅茅傍翠微、

三尾秋景　高尾槇尾栂尾。俗稱三尾。皆臨淸瀧川。水繞山圍。楓樹千萬。補綴其間。三秋霜葉。織錦成繡。自古有名。(帆足萬里詩)洛外秋風溪有橋、見楓無處杖支腰、晚梢紅老房房路、喃者比丘斫者樵、(岡松甕谷詩四首)欲討秋山勝、輕裝趁霽風、迴巒崎嶇路、絕巘見禪宮、溪漲幾灘碧、楓酣萬樹紅、從誰賞一醉、野店石橋東、一路過溪轉、縈廻陟淺岑、白雲頭頭洞、紅葉弁青林、架巖僧房窄、列嶽佛殿深、客來消淨域、暫得滌煩襟、皇家崇祀典、千載仰明威、跡礎振金策、攀巖拜玉扉、寒禽立霜木、老衲護雲衣、進遊下修坂、喬柯墜夕霏、村家秋釀薄、霜衡未成醺、霧飲淒冷月、風高發曉雲、河聲隨山轉、峯影拔天分、懷望最高頂、靈宮鎖紫氛、

妙光寺　在鳴瀧村。號天長山。禪宗。隸建仁寺。建長中。(宋淳祐寶祐間)內大臣藤原師繼創建。開祖曰圓明國師。名覺心。字心地。往宋。參禪無門。嗣法。旣歸朝。師繼厚禮

迎之。爲寺主。有山門本堂。及印金堂。印金堂者。貼付印金於堂內四方也。永仁六年。(元成宗大德二年戊戌)十月十三日。寂。伏見天皇。賜諡法燈圓明國師。(宋僧無門詩幷序)日本覺心禪人、遠來炷香、請余求語、迅筆贈之、心卽是佛佛卽心、心佛元同亘古今、覺悟古今心是佛、不須向外別追尋、御前薩國禪寺開山選德殿賜對佛眼慧開書、慧開無門名、又曰、人至收書、知得心空元安樂、蒙惠數珠水晶者、金重十二錢、一收訖、山偈奉贈、百八摩尼顆顆圓、遼天鼻孔一齊穿、恒河沙數佛菩薩、每日呼來跳一圈、覺心實爲紀伊興國寺開祖、今特揭於此、

仁和寺　在御室門前。原稱小松鄉。仁和年中。(唐僖宗光啓年間)光孝天皇。創建于小松鄉。稱仁和寺。號大內山。旣崩。寬平九年。(唐昭宗乾寧四年丁巳)宇多天皇。傳位皇太子。繼先皇志。大建七堂伽藍。昌泰二年。(唐光化二年己未)十月十四日。移居於此。世稱寬平法皇。改小松鄉。名御室。以如法皇別宮也。自是厥後。法親王。世住此寺。有總法務宮之職。而御門跡之稱。亦實始於此云。金堂。安置彌陀觀音勢至三佛像。祖師堂則弘法大師。及法皇宸影。有山門鐘樓經藏五重塔等。櫻樹萬株。在於其間。花時遊客。麕集如雲。俗諺云。嵯峨御室花正開。游人何不曳筇來。寺什亦甚多。聖德

太子像。係巨勢金岡筆。孔雀双明王像。張思恭筆。五字文珠像。吳道子筆。不動像。興教筆。他不遑枚擧。（賴山陽詩）旣辰當年意正深、仁和仰詔舊花林、白櫻爛熳不成子、辜負東風培植心、

等持院　在衣笠山麓。距金閣寺僅數町。號萬年山。禪宗。隸天龍寺。開祖曰夢想國師。（國師事、詳載天龍寺條下、）北朝。曆應四年。（元順宗至正元年辛巳）足利第一世將軍尊氏公創建。延文三年。（元至正十八年戊戌）四月廿九日。尊氏薨。年五十四。葬衣笠山下。謚等持院。因爲寺號。等持寺。初在京師室町。後合於此院。（明宋濂日本建長禪寺古先禪師碑）古山源公、議芘城州等持敎寺、爲禪、物論非禪師、無以厭伏衆心、竟迎師主之云云、置足利氏歷世將軍木像。當時。朝廷幕府。共照五山之例。厚禮待之。堂宇亦極宏壯。然屢罹災。今纔存本堂及清漣亭耳。德川氏之末。諸國勃王士起。或拔尊氏義詮義滿木首。梟之三條橋上。曰勁德川氏。而皷舞天下士氣也。明治中興。命毀其廟及書院等。蓋建武初。後醍醐天皇。詔新田足利二氏。攻滅北條氏。遂成中興大業。既而尊氏謀叛。別擁光明天皇。不肯相下。後醍醐天皇。居吉野行宮。遣兵

攻之。互有勝敗。是爲我南北朝之戰。然異於漢土異姓爭國。稱南北朝者。均是皇祖裔孫也。况至後小松天皇。南北歸一。不復論既往。可也。余詣金銀両閣。每苦其遊觀者多。而詣等持院者鮮矣。爲地僻乎。抑爲無可觀者乎。寺什未必爲無之。庭園未必不幽邃。故特論著之。

妙心寺　在木辻村。號正法山。禪宗。臨濟派之本寺。桓武天皇。奠都平安。時此地方。百花競妍。清香滿園。因號花園。初置離宮。花園上皇。尤喜禪學。建武四年。（元順宗至元三年丁丑）捨宮爲寺。詔圓成國師。爲其開祖。更建堂於其東。曰玉鳳院。自居焉。山門佛殿法堂方丈經藏鐘樓等。今猶古也。國師名惠玄。號關山。信濃人。幼遊鎌倉。從廣嚴和尚。得度。後入京師。問法大燈國師。頓悟雲門關字。大燈曰。汝是雲門大師再生也。命號關山。後醍醐天皇。召大燈。乃使關山代之。奏對稱旨。花園上皇。將建一寺。問法嗣第一。爲何人乎。曰慧玄藏主。卽其人也。延文五年。

元順宗至正二十年庚子寂。年八十四。賜諡圓成大師。寺什亦甚衆矣。歷世宸翰。和漢寶器。唐宋元明諸家書畫。另具目錄。可就見焉。

佐久間象山塋　在大法院。象山。名啓。姓平。信濃松代人。事眞田氏。學兼和漢。旁修西學。夙唱開港通商之說。爲時人所不喜。甞從其君。朝京師。有人要擊之於途。遂死。時文久元年。清文宗咸豐十一年辛酉七月十一日也。後經二十餘年。贈正四位。現有象山會。志士相謀香花不絕。

兼好法師遺跡　在妙心寺西。雙岡之東。兼好。本姓藤原。右京大夫。卜部兼名孫。而兼顯子也。爲院北面武士。善射。甞奉旨射殺怪鳥。武名頓揚。又喜文學。後宇多天皇崩。有厭世之志。吟曰。觀世霜山楓葉色。顧身秋露草中風。削髮爲雲水僧。後棲洛東吉田。世稱吉田兼好法師。康永二年。元至正三年癸未移居雙岡。既遊伊賀。觀應元年。元至正十年庚寅二月十五日寂。年六十二。侍童葬分骨于此。所著徒然草二卷。後

世學者。以爲國文之模範。

葛野郡役所　在太秦村。管下戶數五千八百四十五。人口五萬壹千七百八十五人。

廣隆寺　在太秦村。兼三論宗。眞言宗。是爲京都第一舊刹。推古天皇。十二年。隋文帝仁壽四年甲子八月。朔。聖德太子。召秦河勝曰。嚮夕我夢。自是北方十里。有一淨土。諸佛群集。無非汝采地乎。河勝曰。或然。願一行啓。親視其處。卽日命駕。既至。林中有一大桂樹。異香芬郁。又有奇蜂。千萬成群。其聲如念經。太子曰。是也。乃建離宮。今所謂桂宮院。是也。既而還奏。天皇勅河勝。更建寺。曰蜂岡寺。安置新羅百濟諸國所獻之佛像。後改今號。卽河勝之名也。而秦氏卽歸化人子孫。古語拾遺云。秦公祖弓月。率百廿縣民歸化。漢直祖阿知使主。率十七縣民來朝。秦漢及百濟內附之民。各以萬計。降至長谷朝倉朝。秦民分散。寄隸他族。秦酒公。進仕蒙寵。詔聚秦氏。賜酒公。仍率領百八十種勝部。蠶織貢調。充積庭中。因賜姓宇

豆麻佐。今讀太秦。曰屋子媽撒。以是也。或曰。取太子之太。與秦河勝之秦。以冠其寺號。曰太秦廣隆寺云。河勝六世孫。曰道昌。讃岐人。從僧空海。修眞言學。貞觀六年。（唐懿宗咸通五年甲申）清和天皇不豫。勅道昌禱之。卽癒。是爲中興開祖。金堂。安置金銅救世觀音像。推古天皇。十一年。（隋文帝仁壽三年癸亥）百濟國所獻。彌勒佛。則廿四年。（隋煬帝大業十二年丙子）新羅國所獻。而藥師如來像。長四尺五寸。自古。稱有靈驗。係日向明神神刻。今世鑑識家曰。其刻酷肖於波斯國太古物。又如意輪坐像。爲乾漆製。（謂以布及漆製之、乾、干也、）日光佛。月光佛。彫版佛像等。皆盡千年以上古佛。太子堂。安置聖德太子御製木像。歷朝限期。奉寄御衣。太秦殿。祀秦河勝。及淡女呉女二女。傳刺繍織錦等法者。秦讀曰哈打。以國音通機也。（頃聞、大阪府、北河内郡、豐野村、字秦、亦有太秦山河勝寺等遺蹟、府吏踏査其地云云、）桂宮院。在太子堂西壹町許。堂形八角。聖德太子創建。安置金色彌陀像。長四尺餘。隋煬帝贈推古天皇之物。一拜觀之。可知其當時風韻耳。又有太子幼時之像。

亦足以想見天平以前之服裝矣。要之。寺院之舊。佛像之古。莫太秦之若。（空花集）古寺經過感替鑑、殘僧尙説昔年功、三韓大士來傳法、百濟眞人去御風、白晝烟薰金佛像、黄昏鼠上鐵燈籠、祗陀太子千秋後、捨樹恐誰起廢宮、

廣澤池　周圍四町。寬朝大僧正穿堀。以便灌漑。建寺池中央。曰遍照寺山。今廢。纔存趾於其南。稱廣澤山遍照寺。寬朝。宇多天皇孫。（藤原實範詩）對月適逢三五晴、蕭然古寺感方生、最明素擇今宵色、遍照彌知此地名、

大澤池　昔者。嵯峨天皇。建離宮於此。稱庭湖。植櫻楓。春秋景色。使人不厭。築二島嶼。大曰天神島。小曰菊之島。有奇巖。曰庭湖石。

大覺寺　在大澤池西。眞言宗。昔者。稱嵯峨御所。世傳。弘仁二年。（唐憲帝元和六年辛卯）三月。嵯峨天皇。創建堂宇。勅僧空海。修行五大明王秘法。祈造福於國。施惠於民之事。空海乃一刀三禮。以刻其像。嵯峨五大堂。是也。九年。（唐元和十三年戊戌）春。天下大疫。天皇親寫般若心經。所謂紺紙金泥經卷也。已成。詔空海。講讀之。疫熄。更建心經殿。貞

觀十八年。(唐僖宗乾符三年丙申) 嵯峨皇后橘氏。捨離宮。爲寺院。淳和天皇。詔第二皇子恒貞親王。爲之開祖。初親王甫九歳。爲皇太子。承和九年。(唐文宗會昌二年壬戌) 伴健岑。橘逸勢。謀反。乃辭儲位。至是。改名恒寂。賜法親王。號大覺寺。仁和元年。(唐光啓元年乙巳) 九月十日。結跏趺坐而薨。年六十。嗣後。法親王。世爲寺主。稱御門跡。至近代。二十一世。又宇多法皇。受兩部灌頂後。後嵯峨。龜山。後宇多。後醍醐。皆無不幸臨。而講法議政焉。南北朝之時。後龜山天皇。奉三種神器。自大和行宮。遷幸于此。授神器於後小松天皇。兩朝歸一。其事蹟關皇室。未有如此寺者。本堂。安置五大尊。寺什。五祖像。唐土古畫。聖德太子手持香爐。侍童捧寶蓋之圖。亦係八百年前物。光孝宇多二帝。恒寂親王御影。其筆與五大尊像。同其時云。

清涼寺　在大覺寺西三町。號五臺山。方丈。淨土宗。塔頭。眞言宗。隸大覺寺。安置釋迦佛。長五尺二寸。稱赤栴檀像。印度毘首羯摩刻。秦時。自印度入漢土。天元

五年。(宋太宗太平興國七年壬午) 叡山僧奝然如宋。汴都西花門外。有啓聖禪院。奝然拜此靈像得之。或曰。命佛工張榮。模刻之。永延元年。(宋雍熙四年丁亥) 二月。携摺本一切經論。及十大弟子畫像。歸朝。奝然奏請選擇愛宕山地。擬五臺山。創建一大伽藍。安置之。長和五年。(宋眞宗大中祥符九年丙辰) 寂。法嗣盛算。欲繼其志。奏請不止。三條天皇。勅許建堂於棲霞觀中。賜號清涼寺。棲霞觀者。貞觀中。河原左大臣。捨其別墅爲寺者。今有阿彌陀堂之處。(宋史日本傳) 奝然於雍熙元年、浮海而至、獻鄭注孝經、我史云、永觀二年、日枝僧奝然如宋、獻職員令、年代記各壹卷、太宗召見、存撫甚厚、賜紫衣、館于太平興國寺、蓋是時也、或曰、咸平中、有日本僧奝然、以鄭玄註孝經來獻之語、咸平、眞宗年號、我長保年間、僧寂照如宋、即咸平六年也、或以寂照、誤爲奝然、又古文孝經、自本朝、傳漢土、淸乾隆年間、收在知不足齋叢書中、詳載於其序跋、彌陀坐像。長五尺二寸。烏佛師刻。毘沙門立像。長六尺。弘法大師刻。皆係千貳百年前物。

新田左中將碑　在清涼寺西。小倉山麓。新田氏。出於源義家。義家子義國居上野。生二子。長曰義重。食新田郡。次曰義康。食足利郡。義康爲足利氏祖。(小野篁墓註及)

（等持院條下、間叙足利氏事、當相參看）義重爲新田氏祖。六世孫曰義貞。與足利尊氏。共奉後醍醐天皇。詔攻北條高時。滅之。是謂建武中興。既而尊氏反。天皇屢令義貞攻之。戰終不利。延元三年。（元順宗至元四年戊寅）七月。大戰于越前藤島。中矢而死。傳首京師。尊氏梟之。令義貞夫人。曰勾當內侍。乃請其首。葬往生院。削髮爲尼。祈其冥福。事詳碑文。今不復發焉。又越前藤島神社。即奉祀公之處。

華臺寺　在小倉山。號小倉山。兼天台眞言戒律淨土四宗。安置釋迦彌陀二尊。因又號二尊院。嵯峨天皇。嘗幸芹河野。親卜此地。創建此寺。後至元久中。（宋寧宗開禧元年）法然上人住焉。小倉山扁額。係後柏原天皇宸翰。二尊教院。則後奈良天皇宸翰。寺什亦不少矣。

伊藤仁齋塋　在寺後山麓。名維楨。字原佐。號仁齋。京師人。初奉程朱。後唱古學。號古義堂。爲一代儒宗。乘帷堀河。教授生徒。四十餘年。諸州士人。無國不至。唯

飛驒佐渡壹岐三國。不及門云。大學定本。語孟字義。刊行於世。後傳海外。寶永二年。（清聖祖乾隆十七年壬申）三月十二日。歿。年七十九。私謚古學先生。有子五人。幼字皆用藏字。曰原藏。曰重藏。曰延藏。曰平藏。曰才藏。各以儒成家。世稱伊藤五藏。長子原藏。名長胤。號東涯。克繼箕裘。有墓碣銘。詳記其事。內大臣藤原常雅撰文。（華山院氏）權中納言藤原俊將篆額。（坊城氏）右中將藤原英朝書。（八條氏）世以榮之。季子才藏。名長堅。號蘭嵎。仕紀伊侯。二人最顯於世。故亦稱伊藤首尾藏。後世所謂堀川學派者。是也。

欽忠碑　在天龍寺前。寶篋院址。蓋小楠公首之處。南朝第一忠臣。曰楠正成。世稱楠公。（詳叙湊川神社條下）其子曰正行。即小楠公。（又詳叙四條畷神社條下）正行與寶篋院僧默庵禪師。舊相識。正平四年。（元順宗至正九年己丑）正月。正行陣于河內四條畷。默庵往訪其營。正行大喜。且參禪。曰。白雲立峰。默庵曰。雷電斷雲。正行笑曰。吾志決矣。吾而死。願葬吾首

於貴寺。默庵曰、諾。明日、大與足利軍戰。舉族皆死。默庵竊以衣袂包其首。携回
葬之。足利義詮、爲其第二世將軍。亦尊信默庵。一日、默庵談及正行事。義詮悵然
改容。曰、楠氏實我仇敵也。然南朝忠臣。莫之過矣。我死後、宜葬其墓側也。貞治
六年。（元至正二十年丁未）十二月七日薨。默庵如其言云。碑文亦詳載其事。

天龍寺　在下嵯峨。號靈龜山。禪宗。臨濟派之本寺。五山第一也。曆應末。（元至正元年）
足利尊氏、創建。曰曆應寺。以祈後醍醐天皇之冥福。既尊氏夢金龍浮大堰河。乃
改稱天龍資聖禪寺。請夢想國師。爲開山。初名智曤。後改疎石。號夢想。伊勢人。後
醍醐天皇。崇敬之。勅賜號夢想國師。觀應二年。（元至正十一年辛卯）九月三十日寂。年七十
七。北朝天子。世賜國師號。凡七。俗呼七朝國師　本編相國寺條下註、載明宋濂夢想國師碑銘、今又抄關本寺者、曰正中二年、師春秋五十一、國主後醍醐天王、命宮使起師、領南禪禪寺、入見王、賜坐、師自言志在煙霞、出世非所願、王曰、吾必非有他、欲朝夕問道耳、師不得已、應命、王時幸臨之、相與談玄、竟日乃去、將及期、王遜位、師又引退云云、元弘元年、達官貴人、又有以建長請師者、師復辭、二年、瑞光寺援辭應故事、求師爲第一代、三年、王既復辟、召師入見、以介子都督親王之邸、更爲靈龜山臨川

禪院、命師爲其長、賜以國師之號、建武元年、秋、王妃薨、王留師宮中、二七日、罷政而聽法、因請師宣說大戒、執弟子之禮、彌謹、及還、引師再入南禪、王親率群臣、至山見、群臣入禪定、秩然有序次第、行食靜而不譁、王悅、師升坐提唱、音聲鴻朗、辭意警策、王愈喜、給腴田若干畝、以飯僧、先是、近臣有毀斥禪宗者、王舉問師、師以性三空何必強生分別、爲對、王已信之、至是、益知禪學爲貴、謗言無自而入、忽退處挽率內院、而建仁禪寺、又欲逼起之、師笑不容、曆應二年、攝州守某、革西芳教寺爲禪、僉言非師無以厭衆望、師振錫而往、羣揚達摩氏之道、聽者改容、爲建無縫閣、以水晶寶塔、安置舍利萬夥其中、他若奇勝之地、多冠以亭榭、以憩四方游士、規制燦然可觀、師夢王作沙門、相乘寶車、往靈龜山、已而卽世、征夷大將軍源公某、造天龍資聖禪寺、以助冥福、聘師住持、遂與前夢協、阿州守源公某、新立補陀院、師亦俯徇其意、爲之說法、卽還天龍、康永元年、春、太倉天王、親往受戒、願爲弟子、三年、建八幡菩薩殿廟於寺側、貞和元年、王復帥群臣、來聽法、敷宣之際、有二星降於庭、光如白日、賜以金襴紫衣、二年、春、令弟子志玄補其處、退處雲居庵、冬、召師入宮、加以正覺之號、觀應元年、春、兩宮國母、請師於仙洞、受五戒、二年、春、師詔左右曰、天龍宮室、幸皆就緒、唯僧堂猶闕、當力爲之堂、成可容七百人、廷議重師名德、復強師入天龍、師行、百丈清規、聲振朝野、王遣使復加心宗普濟之號、且遣以手書、其略有曰道振三朝、名飛四海、主天龍席、再轉法輪、秉佛祖權、數摧魔壘、國中以爲榮、師以年高、又復引退挽率內院、九月、朔、召門弟子曰、吾世壽七十又七、僧臘亦六十矣、且夕將西歸、凡有所疑、可亟叩焉、於是、集座下者如雲、師隨機開示、皆充然有得而去、越七日、示以微疾、兩宮游臨問起居、師爲陳囑心正、因精神不少衰、至二十九日、遺誡授門人作偈、別大將軍源公、囑令外護、復書辭世頌一首、三十日、嗚鼓集衆告別、儵然而逝、顏色不變、時有白氣一道、橫貫師之寢室、熏白二萬餘人皆哀慟不能勝、以某年月日、奉全身塔于內院之後、分存日所剪爪髮、瘞于雲居、鑿中祭生舍利云、(下略)今按、都督親王、謂世良親王、秋、王妃薨、王妃謂藤原氏、征夷大將軍源公某、謂尊氏、太倉天王、謂北朝光明天皇、宋濂斯文、固據國師弟子住持普福寺周信狀、蓋國師事蹟、大抵無遺、而不傳於我、却存於彼文者、亦在焉、故今略本文、

以詳其註、亦是本編之一例也、世傳國師詩云。曹源不涸直臻今。一滴流通廣且深。曲岸回塘休着眼。夜闌有月落波心。又門前一路。稱萬松洞。有詩云。萬株松下一乾坤。翠靄氛氤鎖洞門。仙境由來屬仙客。莫言此地匪桃源。

大井川　又作大堰河。發源丹波國北保津川。滙會水尾淸瀧二流。循嵐山麓。過梅津桂二村。東注淀河。有長橋。名渡月。又曰御幸橋。昌泰元年。唐昭宗光化元年戊午九月。醍醐天皇。幸臨觀楓。因有此名。時有紀貫之者。最善文章。乃作之記。世稱大堰行幸記。橋畔有酒樓。曰三軒家。詩云。一船誰領詩歌管。三居皆宜雪月花。是也。

(大井川詩)幾棹扁舟泛晩雲、滿山緻錦水生紋、何邊龍笛鳳笙起、吹落岸花聲亦燕、

嵐山　山脈一帶。臨大堰河。在昔。以霜葉。與三尾。齊其名聲。龜山天皇。最愛其山容水色。溫如瓊珠也。更又移植櫻樹。卽吉野櫻。於是。山岳吐香含色。截雲斷霧。秋情冬骨。如笑如睡。四時游客。未嘗絕蹤。而海外人士。凡晉京者。定必無不停車

繫馬。以賞其景。嵐山之名。遂遍於海內外矣。(菅茶山詩)萬樹櫻桃擁碧漣、花間無處不芳筵、風來岸岸齊飾雪、失却中流上下船、(齋滕拙堂詩)殘月斜明楓樹殿、朝無聲動梵王宮、山紅澗碧三十里、人在昌黎詩句中、

大悲閣　登山數町。卽金峯寺。屬萬福寺。安置千手觀音像。角倉了以。所創建也。了以。名光好。幼字與七。本姓源氏。近江人。五代祖德春。初居嵯峨。世事足利氏。父曰宗桂。嘗學醫術。後爲僧。從天龍寺僧策彥。踰渤海至于明。明人稱宗桂。曰意庵。歸朝。其業益進。了以生。喜工役。長事德川氏。常謂凡有水則可以行舟也。何論其寬窄險巇哉。乃請溯開大井河流。以至丹波保津川。慶長十一年。明神宗萬曆三十四年三月起工。八月告竣。民尤便之。了以乃卜居河濱。子玄之嗣。明年。春。又奉幕命。疏通駿河富士川。以便舟楫往來。後復開天龍川。十六年。明萬曆三十九年辛亥鑿成高瀨川。事載高瀨川條下十九年。明萬曆四十二年甲寅七月十二日。歿。年六十一。是歲。建大悲閣。閣前有碑。林羅山撰文。詳記事蹟。又有了以手把鏟石斧。踞坐岩頭之像。子

孫今尙存。現設了以會。以謀使其遺澤。永傳萬世之事云。(石川丈山詩)西嶽峻峭儲地禎、溪川轉滑自丹城、群源撲綱臨淵立、百丈挐舟傍岸行、氣象岩中秋水漲、蒙龜山上落雲横、翠微盤礴大悲閣、威脊鳴鐘三四聲、(那波活所詩)此處知何處、初遊忘復還、碧潭繞大井、綠樹對龜山、叡岳儲屏列、平安隱眉間、登高心更別、因念一訂頑、

温泉　在大悲閣西北山下。慶應年間。清穆宗同治年間 鑛泉涌出。至今世。蒸爲温泉。築室起樓。名嵐峽舘。供雅人騷客遊憩之處。

臨川寺　在大井川北岸。屬天龍寺。亦號靈龜山。初爲世良親王別宮。親王。後醍醐天皇第二皇子。甍後。以遺命。廢宮爲寺。詔夢窓國師。兼管理之。安置彌勒佛。號三會院。東有親王廟。西有國師塔。塔銘。係元僧東陵永璵撰。碑銘。即明儒宋濂也。僧策彥亦爲住持。天文中。明世宗嘉靖年間 與僧周良等如明。世宗賜宴於上林苑。朝臣賦詩。伶人奏樂。策彥周良亦賦詩呈。世宗和其韻。(策彥詩)今日天恩與海深、鳳凰池上洗凡心、回頭群卉花猶在、始見春來歸禁林、(世宗詩)奇哉才業與淵深、佳作一齊波瀾心、賢納所棲春色永、翰林花發又詩林、(周良詩)紫路津中船艤艤、天書早召驗吾誠、禁池再浴恩波水、弊垢袈裟影尚

淸、(世宗詩)氏姓聲名俱不輕、日邊曰策盡其誠、前來錫杖今杯渡、戒律再三如水淸、(世宗送日本使策彥詩)東夷有禮信與緇、涉越滄溟朝國彝、入貢從今應待汝、歸來勿忘朕敦儀、(翰林宋訥詩)仁義相弁日本僧、乘槎來恭孔丘曾、上林苑內赴華宴、美譽芳名高九層、(相國李恒詩)見使華知其國光、接人氣宇太煌煌、天朝恩賜櫂舟楫、錦帆向榮歸故鄉、(前翰林程詢詩)碧眼胡僧到帝城、禪心道體二如瓊、險難遙遮正其使、歸便鄉愉薦錦榮、(大監韓紵詩)正人胸字有椒蘭、言語吹香日不弭、鄉國奇哉何陋有、禪衣片片絕塵端、(金紫光祿楊森詩)釋而儒又道而墨、三教相核斯上人、天子宣言頒御宴、九夷九國絕比倫、(贈臨川策彥叟正使周老大人歸國詩)使星拱極罄葵忠、貢器舟歸海日東、萬里櫓聲搖夜月　千山帆影度晴風、授來符節酬賓禮、賜去袈裟窮道躬、還抵蓬萊倭子地、莫忘永荷聖恩濃、大明嘉靖庚戌夏日、四明七十四翁趙月川拜書、又有都察院右都御史葉寅齊等、贈專使謙齋老禪師歸日域圖序　謙齋即周良、今略其序、以抄其詩云、謙齋老師人中豪、筆底翰瀾齊晉陶、兩承王命貢中朝、鯨波萬里奚辭勞、一封遙上聖天子、龍光寵賚稱時髦、隆恩不惜千金賜、旨傳賢使宜加褒、即今帆歸不可留、崇肴餞別鄞江皐、十年再會歲月老、今宵盡飲須酕醄、今按、天文年間、爲足利義晴之時、義晴爲第十二世將軍、是時也、室町政衰、天下大亂、將軍之身、尙且不能自保、何遑遣使于明也哉、而今日專使、曰正使、蓋策彥徒、藉口使者、以便於其脩法、世宗不察焉、以爲眞使耳、

法輪寺　在渡月橋南。號智福山。兼三論宗。眞言宗。天平年中。唐玄宗開元年間 創建。曰葛井寺。貞觀六年。唐懿宗咸通年丙戌 道昌再興之。改今號。道昌事載太秦廣隆寺條中。

車折神社　車折。諱曰古魯嫣撤氣。在下嵯峨材木町。奉祀大外記明經博士淸原賴業公之處。賴業。左大臣夏野公裔。音博士祐隆子。博學宏聞。尤通典故。遇有咨議。

援引古今。辨析精覈。多被嘉納。嘗爲侍讀。每讀禮記。至大學中庸二篇。乃嘆曰。有之哉。別表出二篇。自爲之註。後閱百三十餘年。四書集註。初自宋傳。世咸慾嘆曰。東西異域。而賢者所見。如合符節也。承安二年。（宋孝宗乾道八年壬辰）九月。宋明州刺史。上書獻物。稱謂無禮。高倉天皇。下群臣議之。賴業曰。朱雀一條二帝之時。彼國牒狀。稱呼無禮。卻而不受。承曆中。（宋神宗元豐初）國書亦有賜日本國字。受之。時論非之。況今一州刺史所贈。而非彼國書邪。古昔。使聘相通。用敵國禮。今也不然。苟受非禮之信。不獨辱國體也。天下後世。果謂之何哉。文治五年。（宋淳熙十六年己酉）四月卒。年六十八。子孫建祠祀之。後有乘車不式。過祠前者。車軸挫折。後嵯峨天皇。因賜號東拆大明神。

鹿王院　在材木町南。天龍寺塔頭。足利義滿創建。開祖曰普明國師。安置佛牙舍利。世傳。源實朝贈黃金若干于宋。得之。奉安鎌倉圓覺寺。實朝。賴朝二子。爲鎌倉

第三世將軍。外戚北條氏擅權。實朝唯擁虛器耳。時有宋佛工陳和卿者。來在大和。實朝召見之。和卿自稱知實朝前生。卽育王山僧。而余爲其弟子也。實朝信之。遂欲如宋。拜育王山。命造巨船。既成。不可用。承久元年。（宋寧宗嘉定十二年己卯）正月。拜賀于鶴岡祠。爲其姪公曉所弑。自賴朝開覇府。至此三世而絕。北條氏爲執權職。後光嚴天皇。諡普明國師。諭足利氏。獻實朝所得者。移鹿王院云。

松尾神社　在葛野郡上山田村。奉祀二座。曰大山咋神。曰市杵島姬神。大寶元年。（唐中宗嗣聖十八年辛丑）秦都理自分土山。遷於此云。又松尾山下。有七社。曰松尾。曰月讀。曰櫟谷。曰三宮。曰宗像。曰衣手。曰四大神。世謂之松尾七社。

地藏院　在松尾西南三町。禪宗。屬天龍寺。細川賴之創建。開祖曰宗鏡禪師。名碧潭。本堂。安置地藏尊。及賴之像。堂南又有其塋。賴之。事足利義詮。爲管領職。義詮臨終。撫義滿。謂賴之曰。予汝一子。又指賴之。謂義滿曰。予汝一父。賴之既以

遺託輔幼主。內外望治。賴之作五箴。授將士曰。毋偏愛憎。毋修恩仇。毋枉是非。毋僥倖。毋私昵。義滿漸長。頗忌賴之。罷職就國。賴之卽日上途。尋削髮。號常久。賦詩曰。人生五十愧無功。花木春過夏已中。滿室蒼蠅掃難去。起尋禪榻臥淸風。（明宋濂夢窓國師碑銘）故管領源公賴之、特與人言曰、我從先人聽國師劇談佛法、頗達眞乘、遂能死生如一、臨事不懾、而先人竟死於忠、吾亦知委身以事君者、皆國師化導之力、由是而觀、師之道、非特究明心學、實足增夫世教之重云云、今按、源之父曰賴春、正平七年、二月、楠氏北畠氏、以兵數千人、襲京師、細川顯氏敗走、賴春死之、其曰先人竟死於忠者、蓋謂斯事也、　今世。細川澗君。建碑記之。可就見焉。

桂離宮。在桂川西。方三町許。在昔。豐太閤命茶伯千利休。經營之。亭舘凡五。園池寬濶。林樹幽邃。以爲智仁親王別宮。稱桂宮。後又有小堀遠江守者。與利休。同其流。一拳之石。一勺之水。不苟撰擇。愈極精妙。凡欲新造庭園第宅者。必取則於此云。明治十六年。屬宮內省管轄。

漉紙場　在梅津村。明治九年。創設。藉桂川水力。旋轉器械。以製紙之處。

長福寺　在東梅津村。禪宗。屬南禪寺。初天台宗。尼眞理創建。曆應二年。（元順宗至元四年辛巳）邑長梅津淸景。請大幢國師。爲開山。國師名道皎。號月林。中納言久我具房子。年甫十六。爲僧。遊于鎌倉。從高峯禪師學。元亨元年。（元仁宗至治元年辛酉）如元。爲僧古林法嗣。既歸。花園天皇。崇尊尤重。屢幸臨焉。觀應二年。（元順宗至正十一年辛卯）二月廿五日寂。賜諡普光大幢國師。

乙訓郡役所　在向日町。戶數三千七百七十六。人口貳萬零百五十四人。

勝持寺　在乙訓郡向日町。號小塩山。兼天台律両宗。俗曰花寺。開基卽役小角。安置其自刻不動尊像。初號大原寺。有四十九院云。中興祖曰佛陀上人。藤原氏。關白師實孫。本寺及日向神社額。係小野道風筆。西行法師。嘗植櫻樹。因有花寺之稱。細川玄旨。木下長嘯子等歌人。多隱居者。史云。足利尊氏。與北條氏戰。張宴于桂川西。指一佛舍。問其名。或答曰。勝持寺。尊氏哂曰。吾將勝而持之。卽

是寺也。

長岡都趾　在上羽村。俗曰御所屋敷。屋敷者。讀曰呀西氣。第宅之謂。桓武天皇。既去南都。將遷都於山城也。先居於此。凡十三年。後移今京都云。

金藏寺　在灰方西。登山數町。稱西岩倉。天台宗。屬延歷寺。岩倉事詳東山岩倉條。開祖曰隆豐禪師。名行善。薩摩人。參禪元興寺道昭等。後如唐。游于蘇州。從僧智藏。受三論。既歸朝。養老二年。（唐玄宗開元六年戊午）建寺。自刻十一面觀音像。安置之。

天王山　在山崎北。城趾二。一則文明二年。（明憲宗成化六年庚寅）山名是豐所築。一則天正十年。（明神宗萬曆十年壬午）豐太閤所築。卽與明智光秀戰之處。元治元年。（清穆宗同治三年甲子）七月。京都騷擾。毛利氏通臣等。事敗。退嬰此砦。眞木和泉守以下屠腹而死。古稱京都大坂間之要害地。故得此險者。戰必勝矣。不得則敗也。

天王神社　在天王山。奉祀素盞嗚尊。及八王子之處。養老二年。（唐玄宗開元六年戊午）再興。其創建之在上古也。可知。

寶積寺　在天王山腹。號普陀洛山。聖武天皇勅建之。庭上有石塔婆。天皇所造。世傳昔有龍神獻椎。打則出寶。稱打出椎。俗稱寶寺。寶龜中。（唐代宗大曆年間）行基菩薩創建。中興祖曰寂照。初名定基。大江氏。齊元子。少善詩文。累遷參河守。一日。削髮爲僧。世稱三河入道。長保五年。（宋眞宗咸平六年癸卯）八月。如宋。宋主延見問本朝事。寂照請紙筆以對。且獻佛像。宋主大悅。賜紫衣束帛。館於上寺。賜號圓通大師。三司使丁謂遇之甚渥。比智禮答釋成。將携回也。謂欲留之。盛說姑蘇山水之美。寂照遂留于吳門寺。使人轉送答釋於源信。謂乃分月俸給之。後言語稍通。戒律精至。三吳道俗。多歸向者。嘗贈照金水瓶於謂。且副詩曰。提携三五載。日用不曾離。曉井斟殘月。春爐釋夜澌。鄱銀雖免侈。萊石易成虧。此器堅還實。寄君應可知。

寂照又善書札。字體婉美。有二王之風。爲楊氏所賞云。（宋王珠贈日本國僧詩并序）辭符中、日本僧寂照、來朝後、求禮天台山、先中令守會稽、寂照經由來謁、寂照善書跡習二王、而不習華言、但以筆札通意、時長兄爲天台宰、中令以書導之、兼贈詩云、滄波泛瓶錫、幾月到天朝、鄉信日邊斷、歸程海面遙、秋泉吟理落、霜葉定中飄、爲愛華風好、扶桑夢自消、

右峰寺　在紀伊郡深草村。號百丈山。禪宗。黃檗派。開祖爲明國歸化僧千呆禪師。寺後山中。安置釋迦石像。而十六羅漢。五百羅漢。擁其左右。溪谷無處不石像也。又有僧若沖墓。若沖善畫。詳載碑文。今不復贅焉。

瑞光寺　在深草村。日蓮宗。屬妙顯寺。開祖爲元政法師。明曆元年。（淸世宗順治十二年乙未）創建。元政與明陳元贇友善。賦詩屬文。互相唱和。曰元元唱和集。刊行于世。元贇字義都。號既白山人。明虎林人。避亂歸化。初爲毛利氏客卿。後被聘至尾張。能通國語。元政詩云。人無世事交常淡。客慣方言譚每諧。又云。君能言和語。鄉音舌尙在。久狎十知九。傍人猶未解。元政喜讀袁中郎集。蓋以有所聞於元贇也。我邦詩

人。奉中郎者。始於元政。

藤森神社　在深草村。奉祀舍人親王。早良親王。伊豫親王之處。往古。藤樹成林。因有此稱。殿東有一大櫟樹。世傳。神功皇后。征韓之後。瘞其旗幟。及軍器等。俗稱旗塚。

紀伊郡役所　在伏見町。戶數八千九百三十二。人口四萬三千五百四十九人。

伏見町　距京都三里許。有二道。東曰伏見街道。西曰東洞院通。東西十四町。南北一里。有第三十八聯隊本部。練兵場。裁判所。郵便電信局等衙門。

伏見城趾　在伏見山。文祿三年。（明神宗萬曆二十二年甲午）豐太閤所築。公薨後。東照公亦居焉。慶長五年。（明萬曆廿八年庚子）東歸江戶。令鳥居元忠留守。既而關原之役起。石田氏兵。交來攻之。元忠拒守戰死。元忠。稱彥右衞門。德川世臣。墓在智恩寺中。

桃山　在伏見町東。以桃花與梅花。有名於世。豐太閤亦嘗築第於此。世稱桃山御

殿。前控巨椋池。山水雙美。眺望尤佳。至今。不改其觀。（賴山陽詩）萬樹桃花映碧流、豐家誰問舊金甌、春風會返東征旆、遺恨無人敎放牛、

御香宮　在城山西。奉祀神功皇后之處。第十四代仲哀天皇。即位八年。漢獻帝建安四年己卯、幸筑紫。皇后勸天皇伐新羅。謀議未決。明年。二月。天皇崩于行宮。皇后祕不發喪。令諸國。造戰艦。鍊兵甲。皇后結兩髻。爲丈夫裝。親執斧鉞。率諸軍。發和珥津。今作鰐津、屬對馬國上縣郡風順船迅。直抵新羅。新羅主波沙寐錦。惶遽不知所爲。面縛來降。誓曰。設令太陽出自西。鴨綠江逆流。無闕朝貢。不乾舟楫。獻馬梳馬鞭於天庭之隷。後世子孫。若渝此盟。天神地祇。共殛罰。將士欲兵之。皇后曰。自備降服。殺之不祥。乃解其縛。遂入其都。封府庫。收圖籍。以所杖矛。樹之國門。國人畏服。不敢撤之。傳至數十世云。（韓史）矛子枝、流傳已久、幾至朽折、後經俞泓、以錫附之、藏之木匣、得以傳於今、云云、今按、其所稱矛子枝者、焉知無爲皇后之矛也哉、新羅主使其貴臣波干岐。微叱己知爲質。獻金銀彩色。綾羅縑絹八十

一三二

一三三

艘。嗣後調貢。以八十艘爲定額。高麗百濟。亦與新羅隣。皆望風歸降。永稱西藩。不絕朝貢。於是。三韓悉服。乃置官司。振旅而還。宜與國號篇、及對照年表參看、是爲神功皇后。其所以名御香者。上古。清泉涌出。放香治病。故有此稱。

巨椋池　或作小倉池。以國讀相通也。介在紀伊久世兩郡。東西三十四町。南北二十四町。周圍實四里十一町。東方堤曰巨椋堤。豐太閤所築。是爲大和街道。池中多蓮藕。夏時泛舟。愛花者亦不少。

大石良雄舊宅　在宇治郡四宮村。又西野山村。岩屋寺不動佛像。係良雄所尊信。寺什。多良雄等遺物。良雄稱內藏之助。世事赤穗城主淺野長矩。長矩嘗怨吉良義英。斬之。不克。幕府賜死。淺野氏國除。於是。良雄等四十七人。遂襲殺義英于江戶本所之邸。以復其仇。時元祿十五年。淸聖祖康熙四十一年壬午十二月十四日也。世稱赤穗義士。語詳泉岳寺條下。

萬福寺　在宇治郡五箇庄村。號黃檗山。禪宗。黃檗派之本寺。開祖曰大光普照國師。名隆琦。號隱元。清國福建省福淸縣東林人。姓林。父名德龍。母龔氏。幼時愛父。久客未歸。請母尋父。出遊四方。遂至普陀山。决歸佛之志。從黃檗鑑源禪師學。得度剃落。時年二十又九。當是之時。明室漸衰。清國將興。會長崎興福寺逸然。招聘國師東渡。時年六十二。承應三年。（明永曆八年清世宗順治十一年甲午）六月。航海。七月。至長崎。居五年。嚴有公延見之江戶城。（是歲、明亾、有鄭成功請援兵、及朱之瑜諸儒歸化等事）旣建伽藍于此。時萬治元年也。（明永曆十一年、清順治十五年戊戌）後水尾法皇。甞詔問法。奏答稱旨。特賜佛舍利及御香黃金等。於是。朝臣幕吏。多歸依者。延寶元年。（清聖祖康熙十二年癸丑）四月三日。寂。年八十二。法嗣二十三。第二世曰木菴。第三世曰慧林。第四世曰獨湛。獨湛以下。大抵皆自漢土來住。爲例。總門。三門。天王殿。大雄寶殿。法堂。東西方丈。威德殿。祠堂。祖師堂。禪堂。鐘樓。鼓樓等。丹碧輝煌。燦然禪林。亦有勝於他者。而一入其

門。扁額對聯。可觀可誦。眞空塔題額。係靈元天皇宸翰。塔銘。卽清國中極殿大學士杜立德撰。一切藏經版。六萬張。爲卷七千餘。藏在寶藏院。世傳。木菴弟子鐵眼。甞曰。吾邦。自古建伽藍。刻佛像。不乏其人。而未甞有刊行一切經者也。於是。自期成此大業。延寶六年。（清康熙十七年戊午）秋。竣功。上表獻之。後水尾法皇叡感不啻。稱其功曰。法門功臣。遺福天下後世。孰莫京焉。天和二年。（清康熙廿一年、壬戌、鄭成功子克塽、降淸國、台灣入其版圖之歲也、）三月。寂。年五十三。寺什。張瑞圖詩畫共八幅。王振傍筆五百羅漢壹卷。陳賢筆觀音像。陳璸畫山水拾貳幅。皆爲明末淸初之人。寺中又有十二景。隱元賦詩題之。今不具載。世刊黃檗記。宜就見焉。

池尾茶園　在池尾村。凡拾貳町間。在昔。明惠上人。初植茶樹之處。上人事詳高雄山寺條下。自是至宇治一帶地方。製茶家多。世諺云。宇治者。製茶處矣。

宇治郡役所　在醍醐村。戶數貳千五百六拾壹。人口壹萬四千六百六拾九人。

宇治町 在宇治橋西。東西十五町。南北貳町餘。負山控水。風色可人。以茶有名。姓上林者。尤多。皆政重子孫也。春日賞花。夏時觀螢。遊客麕集。不敢讓他勝區矣。

宇治川 發源近江琵琶湖。經勢田石山。合太平川。兩岸稍迫。河心甚窄。西流抵田原川。爲近江山城國界。怪巖奇石。凸凹其間。急湍激瀉。泡沫飛濺。有紅葉瀨。屏風岩等勝。至於宇治漸大。遂過伏見。入淀河。昔者。源賴政之於平氏。義經之於義仲。承久延元兩役。凡有事於京師之日。必據此河而戰。每爲東西兩軍對持之地。宇治一作菟道。

菟道稚郎子墓 世稱宇治墓。在朝日山。應神天皇。立稚郎子。爲皇太子。天皇崩。太子欲讓位其兄大鷦鷯尊。弗聽。乃避之菟道。相讓三年。民不知所歸。太子知不可奪其志。遂自殺。稚郎子事。詳國體論。及文學宗教篇中。大鷦鷯尊即位。是

爲仁德天皇。

宇治神社 在橋寺南二町許。有上下二社。下社在宇治川畔。上社即是奉祀應神天皇。及神功皇后之處。延喜元年。(唐昭宗天復元年辛酉)創建。此地。昔爲稚郎子桐原日桁宮殿。故稱離宮八幡。下社。奉祀稚郎子之處。仁德天皇即位元年。(晉愍帝建興元年癸酉)創建。神官。長者氏。世爲祝史。至今不絕。

宇治橋 大化二年。(唐太宗貞觀二十年丙午)南都元興寺僧道昭。奉勅架橋。架橋碑銘。僅至于今。世以爲珍。橋北有橋寺。稱常光寺。又放生院。律宗。安置地藏佛像。開祖即道昭也。中興曰興聖菩薩。弘安九年。(元世祖至元二十三年丙戌)再架。自是厥後。每有洪水。屢失屢架。往古。唐銅擬寶珠一基。現存中村氏云。

平等院 在宇治橋南。一町許。號鳳凰山。兼天台淨土二宗。此地。初爲河原左大臣融公別業。陽成天皇詔幾行宮。稱宇治院。經宇多朱雀二朝。至長德四年。(宋眞宗咸

平五年壬寅關白藤原道長公。請爲山莊。其子賴通公。捨莊爲寺。時永承六年。宋仁宗皇祐三年辛卯三月也。佛殿擬鳳凰象。以左右高樓廻廊。爲両翼形。後廊爲尾。而左右屋上置紫銅鳳凰雌雄。高各三尺許。順風旋轉。回頸搖翼。如將翺翔者狀。殿中。安置阿彌陀坐像。長六尺許。佛工定朝刻。承塵處。描寫二十五菩薩。四壁及三方障。則淨土九品相。皆係繪師長者爲成筆。天井。每格貼紙。寫觀經文。中納言俊房筆。天蓋瓔珞等。彫鏤皆七寶法。其裝飾美麗。有古鐘。係印度鑄造。稱日本三古鐘。今不能詳記也。開祖曰行尊大僧正。中興祖曰心譽上人。初屬三井寺。又有最勝院。天台宗。安置不動尊。堂前源賴政墓在焉。賴政。世稱源三位。常患平氏專橫。奉高倉王詳載高倉宮廟條下唱義舉兵。討之不利。退守宇治。遂自殺。後人稱其處。曰扇芝。(扇芝遺跡詩)三尺古碑萬恨長、晩鴉飛盡斷人腸、莫言埋木無花發、絕命詞華千載香、賴政臨死賦和歌、言埋木無花云云、轉結故及、是爲治承之役。宋孝宗乾道七年辛丑後閱五年。源賴朝。滅平氏。遂開幕府于鎌倉。論者。比賴政於陳涉吳廣。

而以賴朝比漢高云。上林政重墓。亦在院中。政重號竹庵。有碑詳記慶長五年。與鳥居元忠。固守伏見。戰死之事。

寶林寺　在惠心院南。號佛德山。禪宗。曹洞派。開祖曰道元禪師。名希元。安貞元年。宋理宗紹定元年丁亥如宋。爲如淨禪師法嗣。既歸朝。建長五年。宋理宗寶祐五年癸丑八月廿八日寂。

惠心院　在離宮八幡南。號朝日山。兼台密淨律四宗。開祖曰惠心僧都。名源信。清原氏。大和人。登比叡山。從慈惠學。著一乘要訣。往生要集等。寬仁元年。宋眞宗天禧元年丁巳六月十日。寂。年七十六。

淀町　淀一作澱。屬久世郡。謂小橋以南街市。小橋介在久世紀伊郡界。此地。淀川桂川巨椋池等諸流滙會。故稱淀云。

久世郡役所　在淀町下津。郡內戶數貳千五百六拾壹。人口。壹萬四千六百六十九人。

淀城趾　天正中。（明神宗萬曆年間）岩成左通。始築城。與織田氏戰。後豐太閤側室淺井氏。居此。因稱淀君。元和中。（清太祖天命年間）德川氏。移伏見城于此。封松平定綱。爲城主。享保八年。（清世祖雍正元年癸卯）封稻葉正知。世稱淀稻葉。以迄明治中興。城遂墟矣。

八幡町　在男山麓。屬綴喜郡。南北二十二町。東西三町餘。西方有橋本驛。

男山八幡　在男山上。舊稱石清水八幡宮。官幣大社。奉祀應神天皇。神功皇后。玉依姬之處。世傳。武內宿禰後裔。曰紀某。爲南都大安寺僧。名行教。貞觀二年。（唐懿宗咸通元年庚辰）往筑紫。詣宇佐八幡宮。誦讀兜經。凡三閱月。卽有神託。歸京以聞。朝廷勅行教建之。神殿拜殿。盡倣宇佐宮制經營。彫鏤彩料。尤極精麗。以黃金造承霤。長十三間。別有若宮。奉祀仁德天皇。水若宮則祀稚郎子。歷朝崇尊。以至今代。武內宿禰者。歷事仲哀天皇。應神天皇。而神功皇后征服三韓之時。參預謀議。偉功尤多。（賴支峯詩）老木生雲氣、風霜侵古祠、臯䆗連澗谷、尖壁齧蛟螭、七道謳歌日、三韓朝貢時、恩波流不息、長證太平基、

達摩堂　在御原。禪宗。屬妙心寺。天明三年。（清聖祖乾隆四十八年癸卯）創建。爲禪家專門道場。安置達摩大師像。實聖德太子刻也。此像初在大和國片岡達摩寺。後轉傳此寺云。世傳。太子嘗過片岡。有飢人臥道傍。太子知其爲達摩也。後親刻其像。卽是。（明宋濂贈令儀藏主序）日本在東海、同爲震旦之國、又可分區界之內外邪、此所以同慕眞乘、而至人攝化者、亦未嘗遺之也、達摩氏自身毒西來、既至中夏、復示幻化、持隻履西歸、後八十六年、當推古女主之世、達摩復示化至其國、世子豐聰、過和之片岡、達摩身爲餓者、困臥道左、世子察其異、解衣衣之、已而入寂、遂藏焉、及啓棺、無所有、唯賜衣存、事與隻履西歸絕類、所異者、當時無人嗣其禪宗爾、自時厥後、橘妃遣慧蕚致金繒泛海、來請齊安國師、卒令義空比丘入東、其首傳禪宗之碑、信不誣、至覺阿之嗣佛海還、道元之承天童淨、達摩之宗、駸駸向盛、原大法之孳芽、寔發見於世子之時歟、嗚呼亦可謂遠也已矣云云、

高倉宮廟　在相樂郡綺田村。奉祀高倉宮之處。後白河天皇第二子。曰以仁王。源賴政奉王。舉義兵。戰敗。治承四年。五月廿三日。王走南都。過光明山。中流矢薨。平氏軍。載其屍。歸葬京師。而墜冑于途上。村人恐其爲祟。建廟納之。以祀其靈。

狛之里　有上狛下狛。狛讀閤嫣。上狛在木津川北。隔水十町。下狛在其西岸。往昔。百濟僧惠辨惠宗二人歸化。惠辨居上狛。惠宗居下狛。又上狛里中。有高麗寺趾。高麗亦讀曰閤嫣。國音相通。凡我邦祠前。刻石成狗。呼高麗犬。蓋取於神功皇后。征三韓時。以矛尖刻犬字於城門之故事。犬讀伊奴。故狛字。卽閤嫣伊奴之義。此地。自古種瓜有名。催馬樂謠云。山背狛渡頭。里人多種瓜。正保元年。（清聖祖康熙五十年辛卯）十一月。朝鮮使臣來聘江戸。新井君美。請廢散樂。以古樂代之。既賜燕樂。趙泰億問曰。有祀享之樂耶。君美曰。祀享則有神樂。國風則有催馬樂。及蘭陵王舞。又曰。奏此曲者。其先高麗人。因以貊爲姓。於其辟樂。當代第一。其假面亦數百年前之物也。貴邦猶有此舞邪。曰。勝國之音。今乃亾矣。君美事。載白石先生墓條下。

相樂郡役所　在木津町。戸數八千四百九十。人口四萬三千零四人。

木津町　距京都九里。距奈良二里。所謂大和街道之一驛也。

木津川　發源大河村。西流經八幡。入淀河。古名泉川。昔者。聖武天皇。將建大佛殿于南都。徵木材於伊賀。命僧良辨（良辨事載奈良興福寺條下）計舟楫之利。以便搬運。因改今名。

三瓶原　在木津東北。一里許。史云。天平十一年（唐玄宗開元廿七年己卯）聖武天皇。幸臨甕原離宮。明年十二月。勅右大臣橘諸兄。經營皇城于恭仁鄉。恭仁鄉宮址。在瓶原西。鹿脊山東。諸兄卽橘氏祖。

笠置山　跨木津川。在南岸者。曰南笠置。北曰北笠置。南笠置比北笠置。山高水深。道嶮徑阻。石門十二丈。絕壁數百仞。在昔。天武天皇。田獵此山。馬屈膝不肯進。天皇念佛。頃之。有鹿前導。因置笠於岩上。豫卜建寺之處。笠置之稱。起於此。後勅僧良辨。創建笠置寺。號鹿路山。刻彌勒佛於巨巖面。今猶存其影。有護摩堂。正月堂。及大石鼓石。貝吹岩等名勝。中興祖曰解脫上人。名貞慶。藤原貞憲子。

入道信西孫。後鳥羽天皇。賜號解脫上人。建曆三年。（宋寧宗嘉定六年癸酉）二月二日。寂。年五十九。史云。後醍醐天皇。將滅北條氏。謀洩。天皇御籃輿。逃南都。途過笠置。以寺爲行宮。北條氏遣兵來攻。天皇下詔四方赴難。莫復應者。天皇窘迫。適夢紫震殿南。有大樹。樹下設虛位。二童子來。泣奏曰。天下無地容陛下。獨有此座而已。既覺。自念。於文。木從南卽楠。當有姓楠者。出扶朕以定禍難。因召山僧。問之。曰。地方豪傑。豈有姓楠乎。對曰。金剛山之西。有楠正成者焉。正成父正玄。嘗憂無子。與其妻。祈於志貴山。而生。幼字多聞。長以材武名。嘗平土寇。以功爲兵衞尉。天皇曰。是也。卽使中納言藤原藤房。往召正成。正成詣行在。天皇使藤房言曰。討賊之事。朕一以託汝。因命坐問計。正成感激。對曰。天誅乘時。何賊不斃。東兵有勇無智。如較於勇。擧六十州兵。不足以當武藏相摸。較於智乎。則臣有策焉。雖然。勝敗常也。不可以少挫折變其志。陛下苟聞正成未死也。則毋復勞宸

慮。乃拜辭還。實弘元年。（元文宗至順二年辛未）八月也。笠置山之名。高於天下。童蒙婦女。能記之者。蓋以有此事蹟耳。

京都土產　西陣織。（謂綾羅錦繡類、三國志云、倭錦、是也、又稱明霞錦、）縫箔。（謂刺繡也、扁額、對聯、屛風、作鳥獸花卉者、多輸海外各國、）笄簪。（稱花簪、）紅粉。（稱京紅、京白粉）晒木棉。（謂純白木棉布、）鴨川染。（鴨川之水、善於彩施、澤色不變、鴨川染者、其一也、）粟田燒。淸水燒。（陶磁器名、就中、七寶燒者、描金施銀、彫嵌人物山水、花卉鳥獸、燦爛射人、亦擅名海外、）錫器。京都人形。伏見人形。（有塑像木偶等類、）簾子。扇子。（稱御影堂、事載本編、宋蘇轍有句云、扇是日本扇、風非日本風、明成祖賜倭扇群臣、更倣其製、以供頒與、蓋我扇子之傳于漢土、尙矣、）竹笋。松茸。（卽松蕈也、香茸之一、）茶葉。（卽宇治銘茶）蔬菜。酒。（稱桑酒、）煙草。

奈良縣

粤稽。皇祖即位于大和橿原宮而還。（參照本編國體國號二篇、）列世奠都此國。唯屢異其地方。而成務天智二帝之於近江。仲哀帝之於長門。仁德孝德二帝之於攝津。反正帝之於河內。廼不與焉。第四十三代。元明天皇。即位于藤原宮。愛其地之狹隘。和銅三年。（唐睿宗景雲元年庚戌）三月。遷都平城。即今奈良也。溯查其舊域。東至大安寺。西至西大寺。北至東大寺。南至郡山町。自一條至九條。地名遺跡。往往亦存。而平城宮址。在於今添上郡二條村。俗稱筑地之內。（筑地事載在京都御苑內條）是也。居八十餘年。桓武天皇。遷都山城。於是。稱平城曰南都。置國府。管轄之。降至南北朝。後醍醐天皇。以吉野爲行宮。五十六年。兩朝歸一。足利氏以畠山義深。爲大和守護職。足利氏末。各地豪傑群起。多武吉野山僧跋扈。紛紛亂擾。永祿天正之際。筒井順慶。松永久秀等。尤逞威福于此地方。豐臣氏起。蕩平鎭撫。封其弟秀長于郡山。後使增田長盛代之。德川氏

始置奈良奉行。而分國爲七。封水野勝重于郡山。植村家政于高取。片桐貞隆于小泉。永井直圓于櫛羅。織田長益于芝村。織田尙長于柳本。柳生宗矩于柳生。明治中興。廢藩置縣。或屬堺縣。或隸大坂府。明治二十年。（淸光緒十三年丁亥）再置奈良縣。餘詳本編各條。

大和（讀曰呀媽托）往古。作山跡。又大養德。（古文或書大倭、皆係入唐緇徒私稱、非正名也、詳載國號篇）後改今字。東界伊賀伊勢。西界河內。北界山城。南與紀伊山脈。犬牙相錯。東西十六里許。南北二十五里又半。山嶽四圍。崢嶸連續。大河二流。自東注西。曰吉野川。曰大和川。奈良郡山都邑。在其北方。田野沃饒。村落相望。全國十郡。戶數八萬五千九百七十八。人口。五十萬貳千百四十餘名。添上郡在其北。

奈良市（讀曰那拉）古作那羅。後或寧樂。在添上郡西北。袤廣壹里許。戶數。五千又奇。人口貳萬六千餘名。（太宰春臺詩）南土茫茫古帝城、三條九陌自縱橫、藉田麥秀農人度、騎道蓬生賈客行、細柳低垂常惹恨、閑花歷亂意無情、千年陳蹟唯蘭若、日暮呦呦野鹿鳴、

奈良停車場　在下三條。自京都。至於此。曰奈良鐵道。而接連關西鐵道路。今擬前往大坂。即當經郡山。法隆寺。王寺等。到大坂湊町也。更擬東行。即當經大佛。加茂。笠置等。過伊賀伊勢間。以至尾張名古屋也。更又南行。即當至櫻井驛。〔備山驛山自京都至奈良詩〕蕭風吹面濺江暖、山北山南去又來、殘碧蒼光今日好、桃花繁處菜花開、

奈良縣廳　在興福寺東。又有郡役所。而裁判所。師範學校。町役場。電燈會社等。皆盡開設於其四邊。獨郵便電信局。乃在三條通橋本町。

春日神社　在三笠山麓。官幣大社。四殿四座。一曰武甕槌命。二曰經津主命。三曰天兒屋根命。四曰比賣神。蓋天兒屋根命。實爲藤原氏鼻祖。故鎌足子不比等。創建興福寺之時。特勸請之。爲守護神。後至神護景雲二年。〔唐代宗大曆三年戊申〕十一月九日。武甕槌神。自常陸國鹿島。經津主神。自下總國香取遷座。屋葺檜皮。專倣古式。廟廊樓閣。盡用朱漆。而老杉古松。陰翳鬱葱。秋冬未會改其色。徑與丹艧相映。

亦美觀也。有鹿數百成群。彼彼其間。世傳。古者。白鹿追從武甕槌神來。蓋德至鳥獸也。其後蕃息。以至於今。世稱神鹿。殺之者刑。又有燈籠。其數千百。用銅鐵者。凡九百八十八。石製則一千七百八十九。世稱春日燈籠。好事者。摸其形以鑄之。自本殿西至大鳥居〔鳥居者、華表之類〕稱春日野。眺望甚佳。第一鳥居北東曰飛火野。和銅年間。設烽火之跡。故有此名。

春日若宮　在本宮南。奉祀天押雲命之處。天兒屋根命之子。長保五年〔宋眞宗咸平六年癸卯〕三月三日。祝史中臣連是忠創建。後閱百三十餘年。中臣祐則別起宮殿。稱若宮。是也。〔若讀曰瓦嘎、稚之義也〕

春日山　山巓三峰。一曰本宮嶽。又浮雲。一曰水谷嶺。又羽買。一曰高峯。又香山。四時碧翠如滴。所以有春日山之名也。

三笠山　又作御蓋。讀曰米嘎撒。阿部仲麻呂〔即朝衡、詳載京都篇〕嘗在漢土。不堪思鄉之情。

卽賦和歌。以遣其懷。於是。山名益顯于世。今譯其和歌曰。擡頭望蒼海。春日路悠悠。嗟是一輪月。想三笠山秋。

嫩草山　又作若草。接春日山東北。滿山皆草。如敷翠氈。與春日山。不同其形。亦奇觀也。山間有瀑。稱鶯之瀧。高五丈四尺。幅貳丈許。山下卽千手院谷。往時。刀工宗近者居焉。尤稱良冶。子孫今尙鬻小刀子類。（日本刀之名、遠聞海外、是其一也、宋歐陽脩歌、抄載本編始通漢土篇中、他如明唐荊川等詩賦、當復有所別載、）

手向山神社　在嫩草山東。手向者。報賽之義。天平勝寶二年。（唐玄宗天寶九年庚寅、）九月奉祀。有三殿。中爲應神天皇。北爲仲哀天皇。祔神功皇后。南爲玉依姬。別有若宮。爲仁德天皇。自古。斯地以楓葉名。來遊賦和歌者。甚多。菅公（載在本編京都北野神社條）詣此。亦賦國歌。今漢譯之曰。斯行無捧幣。楓葉正新紅。祈恕倉皇罪。神明錦繡中。

東大寺　在手向山神社西。土名雜司。古者。兼脩八宗。今爲華嚴宗本山。神龜五

年。（唐玄宗開元十六年戊辰）聖武天皇。勅僧正良辨創建。已成。乃賜扁額。題曰金光明四天王護國之寺。及後置國分寺于諸國。爲總國分寺。史云。聖武天皇。英邁之主也。內之則蕩平東國。外之則交通漢土。而尤信釋教。嘗幸河內。詣智識寺。親拜盧舍那佛。遂有建立大佛之志。良辨。近江國。滋賀人。年甫貳歲。從其母在桑圃。烈風捲地。忽而巨鷲來攫良辨。搏扶搖而上。不知所往。義淵僧正。時居平城。一日。詣春日社。途見巨鷲之弄小兒也。義淵大驚。將捕獲之。鳥飛冲天。人留委地。乃懷其兒而歸。覆育三年。才德絕倫。六歲爲僧。既極華嚴蘊奧。及長。爲天皇所歸依。言無不聽。事無不行。世所謂行基菩薩。是也。天平勝寶元年。（唐天寶八年己丑）十月廿四日。造佛。改鑄凡八。而告竣工。坐像高五丈三尺五寸。面長一丈六尺。廣九尺五寸。其肩五尺四寸五分。自左肩至右肩。徑二丈八尺七寸。其目三尺九寸。其口三尺七寸。其頤一尺六寸。其耳八尺五寸。其頸二尺六寸五分。其胸一丈九尺。其

腹一丈三尺。其臂一丈九尺。自肘至腕。一丈六尺。其掌五尺六寸。中指五尺。其脛脚二丈三尺八寸五分。其膝前徑三丈九尺。其厚七尺。足底一丈三尺。蓮華銅座。高一丈。週圍二十三丈九尺。石座。高八尺。週圍三十九丈五尺。脊後成放光狀者。俗呼後光。八丈三尺。螺髮。九百六十個。而其所鎔用。熟銅七十三万九千五百六十斤。白錫一万二千六百三十八斤。練金一万零四百三十六兩。鋼五万八千六百二十兩。木炭三万六千三百五十六石。四年。唐天寶十一年壬辰三月十四日。陸奥國獻黃金。乃貼塗其像上。四月九日。孝謙天皇。奉太上天皇卽聖武天皇也率百官幸臨焉。行開眼供養之儀。其鹵簿則照遵元日。最極盛觀云。銅柱。彫刻阿闍世王經。施功德經。菩薩本業經。妓樂天女奔獸等圖樣。亦係天平年製。嗣後。宋人陳和卿道在本編京都條下爲脩補之。又置如意輪觀音。虛空藏菩薩。係享保九年製清世宗雍正二年甲辰。固非舊物也。本殿高二十三間許。東西二十八間六尺二寸。南北二十五間四尺三

寸。別有廊廡。連接本殿與南大門。長二百零八間。南大門。則東西十四間四尺。南北五間又半。高十三尺許。係正治元年宋寧宗慶元五年己未、明年、朱文公卒再修。石狛犬。狛犬事載京都狛里條下稱妙工。東有密迹力士木像。湛慶刻。西有金剛力士。運慶刻。並皆鳴於世。鐘樓。在本殿東。鐘高一丈三尺六寸。口徑九尺一寸三分。厚八寸。圍二丈七尺。鎔用熟銅五萬二千六百八十斤。白錫二千三百斤。天平年間。亦鑄造之。東南院。在門內右方。是爲東大寺本坊。貞觀七年。唐懿宗咸通六年乙酉聖寶僧正創建。世爲住持之居。源賴朝嘗次于此。後醍醐天皇亦爲行宮。而至今代。辱駐玉蹕之榮矣。雖然。千年之久。不能無變。齊衡之震。治承之亂。平重衡燒大佛殿永祿之燹。松永秀久起兵大和爲其最也。而時屬戰國。不遑顧慮。山田道安。奈良人也。喜捨淨財。修補大佛頭顱。殿堂未能再建。於是。大佛。櫛風沐雨。閱百三十餘年。公慶上人者。有志僧也。平群郡高山鄉人。爲龍松院僧。院卽東大寺塔頭。一旦決意。誓欲再建佛殿。往至江戶。

公慶素有機智。終以事見將軍。乃陳其志。將軍嘉納。躬爲大檀越。補公慶大勸進職。元祿六年。清聖祖康熙三十二年癸酉 起工。寶永二年。清康熙四十四年乙酉 落成。是歲。七月十二日。寂。年五十八。蓋奈良大佛殿之名。喚海內外。公慶之力。居多矣。

戒壇院　在大佛殿西。水門町北。併號前觀音寺。下野藥師寺。稱日本三戒壇。天平勝寶六年。唐玄宗天寶十三年甲午、明年、安祿山反、 創建。開祖爲唐僧鑑真。聖武天皇。受戒于此壇。初在大佛殿前。後移於此。諸佛像及古書。寺什尤多。

三月堂　在手向山神社東。本名法華堂。又金鐘寺。俗稱三月堂。天平五年。唐開元二十一年癸酉 創建。開祖卽良辨僧正。安置不空羂索觀音。良辨刻之。東置不動尊。及地藏菩薩。皆係光明皇后御製。而大黑天。弘法大師所作云。光明皇后者。聖武天皇之妃藤原氏。不比等女。天平元年。唐開元十七年己巳 八月。爲皇后。亦尤信佛。事載各條下。

二月堂　在三月堂北。號羂索院。天平勝寶四年。唐天寶十一年壬辰、是歲楊國忠爲右相、 創建。開祖曰實忠和尚。良辨弟子。本堂安置十一面觀音銅像。長七寸。昔者。獲之攝津難波。其俯體常有溫氣。因稱肉身像。

四月堂　在三月堂西。曰三昧堂。安置阿彌陀佛等。治安元年。宋哲宗宣和二年庚子 創建。此堂未嘗罹災火等。自戒壇院。至此一帶地方。往昔。盡屬東大寺域內。亦可以見其廣大耳。

正倉院　在大佛殿西北三丁許。史云。天平勝寶八年。唐肅宗至德元年丙申、前年、顏杲卿殉難、 六月廿一日。聖武天皇崩。皇女卽位。是爲孝謙天皇。母藤原氏。所謂光明皇后。丁四十九日佛忌。勅納先皇御物於東大寺。蓋登時收藏朝廷以及祠廟寶物之處。名曰正倉。而存於今者。獨有奈良正倉院耳。其倉。南北十丈八尺四寸。東西三丈六尺。床下八丈。橫積三角形柱。以作板壁。屋上葺瓦。設門扉三。故有三倉之稱。又曰御庫。御庫三倉。國音相通。讀曰迷古拉。庫內。分爲三層。臚列御物於下層及中

層。盛夏日烈。可以避蒸騰也。霖雨濕氣。不能侵染。千年之寶器。萬種之御物。傳至今日。豈偶然哉。自古勅封。不許擅入。桓武天皇。嘗一爍之。源賴朝奏請脩理倉庫。足利義政。拜觀。且請削蘭奢待香。賜其一片。賜香將軍。始此。蘭奢待。又名黃熟。長五尺一寸。圍三尺九寸。重三貫三百五十目。別有大紅沈。重四貫六百目。手一摩之。隨卽香氣。迸於四方。又有稱鴨毛屏風者。繪畫花卉。聖武天皇。供養大佛之時。唐人來獻。其外祭器兵械。各色古物。今不能詳記之。現隸於宮內省。每秋。欽差宮臣。點檢曝晒。平時尙派弁吏。莫准閑人進門。其東南。相距數町。有博物館。以許衆庶觀覽。

奈良帝室博物館 在戒壇院東。明治二十七年。十二月開設。蒐集大和地方。古祠舊刹。所有器物書畫。資考古者。悉數難終。世刻列品目錄。可就見焉。又有平城俱樂部。（俱樂部譯歐語）明治廿二年。開設。其建築構造式樣。亦足裨益於世云。

興福寺 在登大路。又號春日寺。法相宗。南都七大寺之一。世傳。藤原鎌足。初居山城山階。建立一宇。曰山階寺。白鳳元年。（唐高宗咸亨三年壬申）移于大和飯坂。曰飯坂寺。方遷都平城之時。不比等繼父志。乃移斯地。曰興福寺。取於興國家福之義。管理春日神社。世世子孫。尊信不休。朝廷亦崇祀之。藤原氏衰。武門漸盛。天下大亂。興福寺亦養兵。屢與延曆寺戰。後人稱僧徒强暴。曰奈良法師。一乘院。大乘院。稱興福寺兩御門跡。僧徒食肉帶妻。法衣上佩大刀。寶藏院主。覺禪胤榮創造十文字槍之類。其遺俗流風也。兩院今皆壞廢。（今裁判所、及飛鳥小學校之所在、卽其址也、）

金堂 **東金堂** 古之東西食堂也。幷置釋迦藥師等像。凡此諸佛像。皆係天平年製。老松一株。稱花之松。高十四間。枝十八間。併稱唐崎松寺之松。曰日本三大松。

五重塔 在東金堂南。安置藥師如來等像。天平六年。（唐玄宗開元廿二年甲戌）光明皇后。勅創建之。

高十五丈一尺。後罹兵燹。應永廿六年。（明太宗永樂十七年己亥）再脩建立。

南圓堂　在金堂西南。成寶珠八角形。安置觀音像。弘法大師所刻。弘仁四年。（唐憲宗元和八年癸巳）左大臣藤原冬嗣創建。以祈其父冥福。金銅燈籠。在堂前。六角形。高八尺七寸。銘文係橘逸勢筆。

北圓堂　在其北。安置彌勒菩薩等像。養老五年。（唐玄宗開元九年辛酉）八月。元正天皇。勅創建之。以丁淡海公小祥也。淡海公謂藤原不比等。

菩提院　又稱大御堂。安置無量壽佛。開祖爲僧正玄昉。玄昉事孝謙天皇。叨厚寵幸者。

般若寺　在奈良町北。般若寺町。昔者。舒明天皇勅慧灌法師。築般若臺。後至聖武天皇。創建伽藍。親寫大般若經。世所謂紺紙金泥經卷。埋之地中。建石塔於其上。凡十三層。高五丈許。因號般若寺。屬眞言宗。罹兵燹等。燬矣。文明六年。

（宋度宗咸淳五年己巳、）興正菩薩。重修再建。改爲律宗。寺什。有神功皇后征韓之役。御用弓箭。及護良親王潛匿經函。史云。護良親王。後醍醐天皇第三子也。天皇將有討於鎌倉。親王常賛密謀。欲延山徒自援也。叙二品。任兵部卿。充比叡山座主。號尊雲。居大塔。世因稱大塔宮。謀泄。東兵來執天皇。天皇逃笠置山。親王走南都。入般若寺。一乘院僧好專。聞之。將兵而至。親王窮蹙將自殺。適見閣上有盛經三大函。其一去蓋。餘則不然。因跳身入去蓋函中。以經卷自覆。兵士至見去蓋者。略不經意。發他二函。不獲乃去。親王恐其復至。更竄於他一函。有頃。兵士果至。傾其去蓋函。盡翻經卷。笑曰。不見大塔。獨見大唐三藏耳。遂皆散去。親王以不可久留於南都。從僧玄尊。勝憲。英實。豪雲。及赤松則祐。村上義光等九人。爲道士裝。戴巾負笈。南走至十津川。經函。今尚存焉。（賴山陽詩）門題般若寺猶存、猶憶延秋避賊奔、貝葉應爲雲五色、眩迷肉眼護龍孫、

漢國神社　在奈良町土名漢國。推古天皇元年。（隋文帝開皇八年戊申、是歲陳亡）二月。奉祀大巳貴命。大物主命。少彥名命三神。養老元年。（唐玄宗開元五年丁巳）十一月。藤原不比等重修。治承之亂。罹兵燹。文治四年。（宋孝宗淳熙十五年戊申）四月。更建社殿。既而遷座。有東照公甲冑等寶什。

猿澤池　摸倣印度獮猴池。猿澤池月。爲奈良八景之一。釆女祉。在其西畔。釆女者。女官名。世傳。奠都平城之時。釆女投身斯池而死。元明天皇。憫之。爲建其祠。

正曆寺　距奈良町。東南一里又半。號菩提山龍華樹院。安置藥師佛。係龍樹菩薩手刻。唐僧善無畏携來獻之。正曆年間。（宋太宗淳化年間）創建。開祖曰兼俊僧正。至建保中。（宋寧宗嘉定年間）僧信圓重修。

白毫寺　在東市村。高圓山腹。天智天皇勅創建之。本堂。安置阿彌陀佛。佛工春日刻。閻魔像。菅公手刻。地藏尊。則小野篁刻。皆有名於世。而高圓山。古者。設

離宮之處。萬葉集。有高圓離宮之稱。續日本紀。和銅元年。幸于春日離宮。是也。

大安寺趾　在大安寺村。南都七大寺之一。初曰熊凝精舍。後移百濟河畔。號百濟大寺。（百濟村、在北葛城郡廣瀨）又移高市。改大官寺。和銅三年。（宋睿宗景雲元年庚戌）始移平城。天平元年。（唐玄宗開元十七年己巳）沙門道慈。上唐土西明寺圖。聖武天皇。乃勅準照之。再建伽藍。宏壯無比。與東大寺西大寺齊名。因號南大寺。嗣後坍塌。纔存一宇。昔日之觀。不能復見。獨有菅公親寫緣記。尤稱奇品。般若寺海龍王寺。輪番護保。以至今日。

法華寺　在佐保村。律宗。世傳。聖武天皇。建東大寺。嚴禁婦女出入其內。於是。光明皇后。更建此寺。亦禁男子出入云。海龍王寺。在其東北。光明皇后建立。又有隅寺及隅院等稱。史云。天平十三年。（唐開元廿九年辛巳）施與隅院食封壹百戶。是也。經藏。秘襲聖武天皇。及皇后宸筆經典。

月瀨梅花　月瀨村。在添上郡東北隅。接伊賀阿山郡。名張川。自東南。流西北。凡

貳里許。其間皆梅。寛政之末。（清仁宗嘉慶年間）田宮仲宣著書。唱道其勝。然以其地僻。探梅者鮮矣。嘉永年間。（清文宗咸豐年初）伊勢儒員。齋藤拙堂。名正謙。善文章。事藤堂氏。嘗與梁川星巖等。游于此地。刊行月瀨記勝。天下喧傳。比至今代。毎歲春仲。坐乘火車。遨遊者多。月瀨之名。於是益顯。世比之賴山陽耶馬溪記。（耶馬溪在豐後、載本篇九州條下、）

郡山町　屬生駒郡。戸數二千二百七十三。人口一萬二千七百有奇。有縣立尋常中學校。警察署。區裁判所等。又設停車場。爲大和第二繁華之地。

郡山城　世傳永祿年間。（明嘉靖年末）小田切春次所築。春次者。筒井順慶部將。天正十三年。（明神宗萬曆十三年乙酉）豐太閤討大和平之。封弟秀長。以爲大阪保障。子秀俊夭。國除。使增田長盛代之。關原役後。大久保長安居之。長安死。筒井定慶兄弟代之。豐臣氏亡。德川氏興。元和元年。（明神宗萬曆四十三年乙卯）封水野勝政。後至享保九年。（清世宗雍正二年甲辰）柳澤吉保。自甲斐來。爲郡山城主。子孫世襲。延至廢藩置縣之時。列華族。受伯

爵。吉保事常憲公。（載本編文學宗教條）尤受殊遇。爲老中職。嘗延荻生徂徠。細井廣澤諸儒。爲幕中賓。廣澤建議修理歷世帝陵。徂徠乃論更正律令。吉保皆納其議。施之天下。常憲公之尊崇儒術。蓋非無故也。世或有譏吉保擅權者。然論近代文學旺盛。則必稱元祿享保。至今不衰。吁亦盛矣。柳澤神社。在北郡山。奉祀其靈之處。係明治十三年建設。

唐招提寺　在都跡村。土名五條。又號龍興寺。眞言宗。南都七大寺之一。孝謙天皇。嘗賜號建初律寺。後改今名。開祖曰鑑眞和尙。唐揚州龍興寺僧。天平勝寶六年。（唐玄宗天寶十三年、甲午、明年、安祿山反）四月。從我留學僧榮叡來朝。獻佛舍利三千顆。以及經典。聖武天皇。勅築戒壇於東大寺。鑑眞奏請創建此寺。實天平寶字三年。（唐肅宗乾元二年己亥）八月也。本寺自古。無罹災火。歷世什寶。保存于今。獨有本寺與東大寺法隆寺耳。中興祖曰寛盛和尙。南大門址。在五條村南端。可見當時寺域廣大。（鄭谷贈鑒禪師詩）故

國無心渡海潮、老禪方丈倚中條、夜深雨絕松堂靜、一點飛螢照寂寥、餘載京都鞍馬寺條下、金堂。唐僧如寶所建。屋上兩端。置鴟尾甍。一係唐製。一補脩之。堂內。安置盧舍那佛坐像。長壹丈八尺。爲乾漆製。後光上。刻佛千體。背後畫貳千體三千佛。其左置藥師如來像。長壹丈壹尺五寸。係唐僧思託律師刻。其右置千手觀音像。」長八尺。傳云。天人造之。又有唐僧曇靜所刻大日如來。及唐匠軍法刀所刻梵天帝釋等佛像。講堂。在金堂北。天平寶字三年。賜朝集殿。建之。長九間。横四間。屋上列瓦。都爲中古式樣。安置彌勒佛等像。皆係軍法刀刻。」東室講堂。在金堂東。長三十間。而南北十三間。曰禮堂。北方十五間曰舍利殿。開山堂。在禮堂東。安置鑑眞和尚坐像。像上貼紙。髹漆設色。長貳尺六寸。係思託律師造。尤稱妙工。」經藏。寶庫。其形同於正倉院之庫。」戒壇址。在講堂西。聖武孝謙二帝。受戒之處。寺什。十六羅漢等像畫。係顏輝筆。世稱逸品。本堂前後。孤山之松。醍醐之泉。皆爲鑑眞遺蹟。

一六三

藥師寺　在唐招提寺南數丁。法相宗。南都七大寺之一。白鳳九年。唐高宗永隆元年庚辰 創建。世傳。天武天皇。憂皇后罹眼疾。召集僧一百人。念佛供養。疾漸瘥。時訴連和尚。獻伽藍圖。天皇大喜。勅建此寺。後至元正天皇。移于今地。」金堂。安置金銅藥師如來坐像。長九尺。須彌臺。亦用銅造之。高壹尺一寸。徑壹丈七尺。日光月光兩菩薩。長各壹丈壹尺五寸。壇卽大理石。長五丈四尺。幅壹丈二尺。高壹尺八寸。養老年間。百濟國所獻云。」東院堂。安置觀音立像。長七尺。亦百濟國所獻。六重塔。高十一丈五尺。方三丈。天平二年。勅建。其屋每一層。有大小。故又稱三層塔。上有九輪銅柱。刻銘。係舍人親王筆。世傳。筆力結搆。凌駕晉唐。史云。親王博聞强記。嘗奉勅撰日本紀。上之。後十五年。薨於天平中。是爲我邦中古儒宗。」文珠堂。四方四間。天平年間。行基菩薩創建。文珠菩薩坐像。係其手刻。佛足石。石盤上刻佛足形。長一尺五寸七分。幅五寸三分。建碑其傍。刻光明皇后御製和歌

一六四

二十一首。寺什。古文書多。魚養筆大般若經六百卷。其尤者也。

西大寺　在伏見村。距法華寺西八丁。又號高野寺。南都七大寺之一。天平神護元年。（唐代宗、永泰元年、乙巳、明年、貶顏眞卿爲峽州別駕、）勅僧常騰創建。伽藍之大。不讓於東大寺。衰廢三十二町。中有四十九院。三百堂宇。寺領二十一萬石。後漸衰頹。嘉禎中（宋理宗端平嘉熙年間）叡尊思圓上人重修。上人。源義仲曾孫。文龜二年。（明孝宗弘治十四年辛酉）罹兵燹。今纔存其蹟。「本堂。又稱釋迦堂。釋迦立像。長五尺四寸。興正菩薩刻。傳云。佛像最古者」。愛染堂在其西。愛染明王坐像。長一丈許。元寇之役。明王所把之箭。一桿飛入空中。既而我軍大克。觀音堂。又曰四王堂。安置十一面觀音像。用木設色。長一丈六尺。四天王銅像。係天平神護元年鑄造。長各七尺許。寺什。古書畫多。不遑枚擧。

秋篠寺　在秋篠村。古名秋篠里。號無本寺。眞言宗。光仁桓武二帝。勅創建之。號

元眞言院。開祖爲善珠僧正。有藥師堂。鐘樓等。又香水堂。世傳。常曉阿闍梨。山城小栗栖人。嘗入唐。已歸朝。詣藥師堂。將汲斯水。以供閼伽。忽見大元明王浮於水上。遂建堂封之。

法隆寺　在法隆寺村。距法隆寺停車場八丁。古名斑鳩寺。法相宗之本山。兼修八宗。又有七德寺。聖國寺。來立寺。鳥路寺。往生所寺。法隆學文所等稱。昔者。用明天皇不豫。時與聖德太子。誓佛曰。朕造藥師如來像。將尊奉之。故願疾速袪。既崩。不果。推古天皇。即位十五年。（隋煬帝大業三年戊辰）繼紹先皇之志。喜捨其斑鳩宮。創建此寺。至今壹千貳百餘年。未嘗罹災震也。稱本邦第一舊刹靈場。歷世尊崇。寺領。致十二萬三千石之多。王室式微。武臣專橫。爲其所侵掠。頗極衰廢。織豐二氏。更謀恢復。慶長九年。（明神宗萬曆卅二年甲辰）片桐且元董役。即其一例也。後至元祿享保間。常憲公夫人桂昌院。大修理之。寺域貳萬三千百四拾貳坪。七堂伽藍。屹立

其中。而古式舊樣。宛然映目曉闇。南大門在其正面。其次曰中門。樓上置百萬塔。
爲孝謙天皇宸製。樓下左右。有金剛密迹之立像。鳥佛師刻。面目如生。廊廡。起
自中門左右。縈廻鼓樓鐘樓。講堂金堂。金堂在中門內。屋上葺瓦。設閣二層。高
五丈八尺五寸。東西十二間四尺八寸。南北十一間。分堂爲二。稱內陣外陣。內
陣壁畫。皆係高麗僧曇徵筆。中央。安置釋迦銅像。長二尺八寸七分。藥王。藥上
各二尺七寸。其東則藥師銅像。及日光。月光。是等諸佛像。皆係鳥佛師鑄造。釋
迦藥師二像背後。刻銘。法興元卅一年。歲次辛巳云云。其書遒勁。類於晋唐。其
西則阿彌陀佛。後世大佛師康勝補刻。五重塔。在金堂西。高十一丈五尺。方八
間零九寸。又號現身往生塔。史云。皇極天皇。即位二年。（唐太宗貞觀十七年癸卯魏徵死之歲）大臣蘇
我入鹿。遣兵襲大兄皇子於斑鳩宮。皇子自縊而薨。即此處也。故有斯號。和銅
年間重修。元祿二年。（清聖祖康熙廿八年己巳）桂昌夫人亦修理之。塔中。有須彌山。鳥佛師用本

一六七

邦及漢土天竺土塊。造之。又安置諸佛像於其中。講堂。在金堂後。高五丈一尺。
東西二十二間二尺。南北十二間五尺三寸。鼓樓。在其西。又曰大藏經。有稱上
之堂者。高四丈五尺。東西十五間。南北七間又半。舍人親王創建。西圓堂。在其
西方。高四丈二尺。方九間四尺六寸。養老二年。（唐玄宗開元六年戊午）橘氏創建。橘氏。光明
皇后之生母。（明宋濂贈令儀藏主序。自時厥後、橘妃遣慧萼、致金繒泛海、來請寶安國師、卒令義空比丘入東、云云、今案、此文所謂橘妃者、蓋指光明皇后之母乎、）聖靈
院。高三丈六尺。東西八間五尺五寸。南北十六間五尺。保元二年。（宋高宗紹興廿七年丁丑）創
建。安置聖德太子坐像。長二尺七寸五分。係其自刻。時年三十五。左右置山
背大兄皇子。殖栗茨田皇子。惠慈法師坐像。而如意輪觀音像。則百濟聖明王所
獻云。銅封倉。在其東。高三丈三尺。東西六間又半。南北十五間許。寺什皆盡蒐
集。在於此中。上自用明天皇。下至近代。皇族諸侯。珍寶遺物。累積如山。凡用
心考古者。不論內外。拜觀嘆賞。至有獻保護資金者。寺刻寶物目錄。可就見焉。」

一六八

食堂。在其東北。高二丈一尺。東西十二間五尺。南北六間三尺。又有新堂。高一丈零八寸。方四間一尺許。安置藥師如來像。亦百濟國所獻。謹按。聖德太子。用明天皇皇子。母穴穗部間人女。生於敏達天皇。卽位二年。（五代陳宣帝太建五年癸巳）幼時喜誦論語。尤重聖教。稍長。歸依佛法。高麗僧惠慈。百濟僧惠聰。來朝按化。太子師事之。建寺于大和地方。不一而足。今特表章之。（當照本編文學宗教、及京都太秦寺條、彼此參觀、以得其詳）太子壽四十九。薨於推古天皇二十九年。（唐高祖武德四年辛巳）二月廿二日。以是。法隆寺每年丁此忌辰。施行法會。四方㕘集。最極雜沓。（唐劉禹錫贈日本僧智藏詩）浮杯萬里過滄溟、徧禮名山適性靈、深夜降龍潭水黑、新秋放鶴野田靑、身無彼我那懷土、心會眞如不讀經、爲問中華學道者、幾人雄猛得寧馨、今案、智藏者、吳人也、我推古朝、歸化、居法隆寺、白鳳元年、爲僧正、）東院。在東大門東。別成一區。亦斑鳩宮趾。太子薨後。天平十一年。（唐玄宗開元廿七年己卯）喜捨建寺。夢殿。又稱上宮王院。太子入定之處。禮堂在其前。舍利殿。安置太子年甫二歲。及七歲之木像。繪殿。列於其西。秦致眞筆。尤稱神逸。現納秘府。致眞攝津大波鄕人。延久

三年。（宋神宗熙寧四年、辛亥、歐陽修死之歲）五月。畫於本殿紙障。傳法堂。又號講堂。在舍利殿北。古佛舊像。今不能詳記之。

龍田神社　在三鄕村。屬生駒郡。南距王子停車場二十丁。官幣大社。奉祀天御柱神。國御柱神之處。崇神天皇。勅崇奉之。每歲四月四日。施行祭典。昔者。法隆寺僧來幇辦之。至今代廢。龍田新宮。在龍田村。聖德太子。別卜其地。故此曰本宮。彼曰新宮。

龍田川　發源生駒山北。經龍田町。西流過神南村。注大和川。凡四里許。自古。以楓樹名。架鐵橋于其西。曰龍田橋。龍田又作立田。國音相通。讀曰打子打。

龍田山　西界河內。史云。皇祖東征之時。勒兵。前赴龍田。山路嶮隘。不能駢行。更東踰生駒山。是也。

朝護孫子寺　在志貴山。亦西接河內。距龍田町四十丁許。聖德太子創建。安置毘

沙門天。延喜年中。（唐昭宗天復中）醍醐天皇不豫。詔僧命蓮禱之。有驗。乃賜田園。更建坊舍。且飭祈禱安朝護國。子孫長久之事。因爲寺號。楠公父母亦祈志貴山。（參看笠置山條下）是也。寺什楠公鎧袖及古銅鏡。古書畫。

下田驛　屬北葛城郡。戸數三百七十八。人口二千四百八十九名。亦設大阪鐵道停車場。

達摩寺　在王子村。距王子停車場南八丁許。世傳。聖德太子嘗過片岡。途遇餓人。脱衣衣之。乃賦和歌。餓人唱和。既死。將葬之。其衣存而人不在。太子知達摩化身。親刻其像。建寺安置。因號達摩寺。（宋濂文載京都達摩堂條下）永祿中。罹兵燹。無復昔日之觀矣。寺中有松永久秀墓。文云天正五年十月十日。筒井順慶建之。

當麻寺　在當麻寺村。距下田停車場。二十五丁。距高田停車場。五十丁許。兼眞言淨土二宗。推古天皇。二十一年。（隋煬帝大業九年癸酉）創建於河內交野郡。山田鄉。號萬法

藏院。禪林寺。白鳳二年。（唐高宗咸亨四年癸酉）麻呂皇子移於斯地。曰當麻寺。安置千手觀音佛像。中將姬者。藤原豐成女也。容貌端麗。才識絕世。一旦頓悟。薙髮爲僧。號法如尼。時以藕莖代絲。織成曼陀羅。長一丈二尺九寸三分。幅一丈三尺三寸。蓋天平寶字七年。（唐代宗廣德元年癸卯）六月也。今尚存於寶庫。而揭曼陀羅堂者。係土佐光茂摸寫。世稱文龜曼陀羅。」戒壇。黑髹螺鈿。極其精巧。源賴朝所建。」奧之院。在西方山上。安置圓光大師坐像。長二尺二分。大師手刻云。寺什。圓光大師行狀畫卷四十八本。與藕絲曼陀羅。併稱于世。（清康熙年間、刊行當麻圖記、題其緣起、曰日本大和州當麻寺化人織造藕絲西方境緣起說、黃檗四代性瑩獨湛選、東明嗣法門人道章悅峯錄、而其圖則十一、曰長谷祈嗣、曰將姬歸命、曰僧授佛經、曰觀女紡織、曰彌尼同事、曰懸掛指示、曰三聖九品、曰法尼修證、曰善神擁護、曰臨終生方、曰佛來接引、又其引云、如來教道叵測、菩薩度生無方、然佛度有緣、心淨見佛、今於悅峯諱道章、幼歲習講浙杭、壯年遊化長崎、徧探名勝、上洛遇湛老人、針芥相投、遂傳宗嵩、因詣當麻寺、頂禮藕絲西方境、夫當麻寺、亦是役小角行者家舍、當麻王子、命而爲寺、寺因得名、役公手植櫻樹于寺傍、記曰、佛法與櫻樹榮、是以日本佛法興來、自欽明帝、至今、一千一百五十餘年矣、王臣之歸敬、名山之廢布、名僧之衆多、詳載于國史傳記、並釋書中、茲不煩引、後有攝家藤公一女、來此修道、感得彌陀、蠶井染絲、觀音織出西方聖境、如是始末、彼記悉矣、悅公摸寫圖像、乃書湛老人

所著緣起說、遂屬稽居士山玉、付刻傳流、以質雲棲淨業法門、眞盛事也、不我遐棄、徵言於予、予惟說公身居異國、留念故鄕、以此大希有事、普使故國知聞、眞無盡法喜、遠沼一渡航也、康熙壬午、
浙杭東林憨雲灌頂行者緩法槃譔、康熙壬午、卽我元祿十五年也、

廣瀨神社　在河合村。屬北葛城郡。距法隆寺南十四丁。官幣大社。奉祀和加宇賀能賣命之處。白鳳四年。（唐高宗上元二年乙亥）鎭座。歷世天子。屢幸臨焉。與龍田本宮倂稱。

今井町　屬高市郡。戶數五百二三十。西接八木町。戶數五百四十二。業織帛布者多。與櫻井三輪。同其繁華。

橿原神社　謹案。我邦紀元第一年。辛酉之歲。正月朔旦。神武天皇。卽位於大和橿原宮。是其趾也。啓祚發祥之地。創業垂統之蹟。聖聖相承。無不崇重。而至今代。大孝追遠。特詔建設宮殿。列於官幣大社。時明治二十三年也。於是。擧國臣民。亦竊喜得拜跪。致恭敬之誠。嗚呼。民德歸厚。國威揚外。亦未必不由于此也。今恭紀其梗槪。正殿。東西十間。南北七間。原內侍所。內侍所者。皇宮奉安神器之

處。拜殿。東西八間。南北十三間。爲神嘉殿。二殿皆朝廷特賜其木材。自與他神社異矣。殿前植櫻橘樹。擬紫宸殿。尙有神庫。神饌所。社務所等。自第一鳥居。至第二鳥居。左右遶牆。地域凡壹万八千坪。御陵。在其北方。相距八丁。大日本史云。七十六年。（周簡王元年丙子）三月十一日。（大陽曆四月三日）天皇崩。葬畝火山東北陵。延喜式云。兆域。東西一丁。南北二丁。守戶五烟。仰見景命之照萬邦。俯察神謨之貫千載。蒼松蔽丘。鬱鬱葱葱。銀沙敷地。燦燦爛爛。足欲進而踏跙。手欲拍而抵捂。凡我臣民。一詣於此。孰不惶懼。又孰不勝恐悚之至。御陵。神宮。共在白橿村。屬高市郡。距畝火停車場。南二十丁內外。

畝傍山　突兀聳於御陵神宮之間。高三百尺。上有山口神社。世傳。奉祀神功皇后。耳無山。又天神山。高二百尺。在其北東。山中多梔樹。（梔讀古七那西、國訓與口無通、）俗呼口無山。又有天香久山。在其東方。高百七八十尺。形似富士山頂。（富士山事載本編東海道條下）天祖之時。

採眞榊於此。（漢土無榊字、饋撒嘎氣、恭神之木名）皇祖之時。取埴土於此。自古有名。三嶽鼎峙。世稱大和三山。

久米寺　在白橿村。距神宮僅貳町。推古天皇卽位二年。（隋文帝開皇十四年甲寅）久米皇子患眼疾。乃念佛。既瘉。爲建此寺。安置丈六金銅藥師佛等。十九年。（隋煬帝大業七年辛未）天皇幸臨。久米皇子者。聖德太子皇弟。後僧義淵。勤操。空海等。皆居焉。多寶塔。俗呼鍊塔。唐僧善無畏來朝。獻天竺鐵塔也。寬平七年。（唐昭宗乾寧二年乙卯）十月。宇多天皇亦幸臨。後罹雷火。現存堂宇。係萬治年中（明永曆十三年清順治十六年）再修。

橘寺　距久米寺東南三十丁許。佛頂山。或安部島山。別號菩提寺。天台宗。屬延曆寺。東西八町。南北六町。本殿。安置聖德太子三十五歲。及十六歲之坐像等。史云。推古天皇。十四年。（隋大業二年丙寅）七月。聖德太子奉勅講勝鬘經。於橘京豐島宮。後更爲寺。卽此地也。

岡寺　距橘寺東七八丁。眞言宗新義派。（畧載京都東寺係下）屬長谷寺。安置如意輪觀音塑像。長壹丈六尺。世傳。弘法大師。用和漢天竺三國土塊。造之。史云。舒明天皇二年。（唐太宗貞觀四年庚寅）十月。遷都于飛鳥岡。稱岡本宮。此地。卽其址也。或曰。草壁皇子宮址。宮門以及磚瓦。傳至於今。蓋距崇峻天皇元年。百濟國貢瓦博士麻奈父奴等四人之歲。大約四十二年。是瓦博士之所造歟。齊明天皇。喜捨宮殿。賜僧義淵創建寺院。孝謙天皇幸臨。更建如意輪堂。納小塔拾萬基。華山法皇亦滋焉。金剛力士像等。皆爲千年前物矣。

南法華寺　在高市村壺坂。俗稱壺坂寺。世傳。養老年中。（唐玄宗開元年中）元正天皇。勅僧辨基建立。賜法華寺扁額。後至天平勝寶年中。（唐天寶年中）又建法華寺於添上郡。於是。加南字別之。本堂成八角形。安置千手觀音坐像。辨基所刻。遠近皆謂有求必應。賽詣太夥。

櫻井町　屬磯城郡。戶數六百五十六。人口二千九百七十八名。有警察分署。及物產會社。材木會社等。大坂鐵道。開設停車場。市廛日加多云。距奈良町。凡五里二十丁。距八木町。一里許。又有停車場。

談山神社　在多武峯村。距櫻井停車場。南二十丁許。初至其麓。由此五十丁許。當詣神社。昔號妙樂寺。又護國院。奉祀藤原氏祖。大織冠鎌足公之處。公幼字鎌子。中臣御食子公長子。天兒屋根命二十一世孫。生於大和大原之第。皇極之朝。大臣蘇我入鹿。志懷非望。弑山背大兄皇子。（載本編法隆寺條下）築砦畝傍山東。公大憂之。密與中大兄皇子。謀討滅之。登倉橋山。即今多武峯。會議於藤樹下。後世。因號談山。適三韓來朝。獻方物於大極殿。入鹿昇殿。公即斬之。更遣兵殺其父蝦夷。以功授大織冠。賜姓藤原。居十三年。中大兄皇子即位。是爲天智天皇。八年。（唐高宗總章二年己巳是歲李勣卒）十月十六日。薨。壽五十八。葬于攝津阿威山。長子定惠和尚。夙游

于唐。白鳳七年。（唐儀鳳三年戊寅）歸朝。嘗登斯山。曰山容酷似五臺山。十一月。改葬于此。因建十三重塔。高四丈三尺。又植菴羅樹。皆自唐携回者。大寶元年。（唐中宗嗣聖十八年辛丑）建設神殿。高十六尺九寸許。方三丈。屋上葺以檜皮。殿內白木。而外則朱漆。尤壯觀也。嗣後。每五六十年。定期重修。延長四年。（五代後唐明宗天成元年丙戌）賜號談山權現。永享中（明宣德正統年間）贈正一位。至德川氏。寺領三千石。坊舍五十二。明治中興。甄別神佛。列於官幣大社。斯地負翠巒。控清溪。楓樹萬株。補綴其間。稱紅葉洞。秋色可人。名聞遐邇。俗諺云。關西有談山。關東有晃山。（日光山載本編日光條）洞東北隅。有淡海公祠。即祀公嗣子不比等之處。樓門。透樓。神庫。總社。攝社。社務所等。皆在焉。

韓人池　在都村。又稱柳田池。史云。應神天皇。即位七年。（西晉武帝咸寧二年丙申）七月。高麗百濟任那新羅諸國民人來朝。大臣武內宿禰。命其國人。開鑿池沼於輕島上。以便灌溉。既成。因號韓人池。又廣瀨郡百濟村。有滿字池及漢字池。磯城郡多村。有

阿字池。俗併稱之。曰阿滿渓之池。

文珠院 在阿部村。號阿部山。崇敬寺。又智足院。距談山北二里。世傳。大化六年。（唐高宗永徽元年庚戌）孝德天皇。勅僧道昭。創建。中興祖曰羅甕上人。本堂。安置文珠菩薩坐乘獅子之像。長九尺八寸。彫木設色。安阿彌刻。併奥州永井。及丹後切戸之文珠。稱日本三文珠。又有安部仲麻呂。阿倍晴明等遺蹟。

長谷寺 在初瀬町東初瀬山腹。初瀬。長谷。國訓相通。讀曰哈塞。號豐山神樂院。眞言宗。新義派之本山。世傳。道明上人。奉旨。鏤刻金銅版釋迦佛像二千體。建寺於此。舊誌所謂。大和國釋迦堂。是也。天平元年。（唐玄宗開元十七年己巳）藤原房前奏請勅僧德道。建一大伽藍。德道者。道明法嗣。天平勝寶四年。（唐玄宗天寶十一年壬辰）聖武天皇幸臨。由是。朝廷益加崇重。而屢罹災。頗失舊觀。然邊山臨谷。景勝奇絶。亦以楓樹及牡丹花。稱於世。寺什。長谷寺緣記一卷。菅公撰文并書。尤奇品也。宋徽宗

帝所贈虎皮屛風。及金剛。兆殿司等佛畫。多可觀者。

大神神社 在三輪山麓。距長谷寺西五十丁。官幣大社。所謂大和國一之宮。（一之宮者。最古第一宮之義也。）奉祀大巳貴命之處。三輪山。或作三諸山。上古大巳貴命居焉。故其建宮。在紀元前。本殿。勅使殿。神庫。社務所等。共二十又六宇。亦極美觀。而厥山維峻。厥林維鬱。應以掬取往古遺翠。

大和神社 在朝和村。屬山邊郡。距三輪北一里。官幣大社。崇神天皇。即位六年。（漢武帝征和元年己丑）奉祀大國魂命之處。

石上神社 在山邊村。距大和神社。東北二十五丁。官幣大社。崇神天皇即位五年。（漢武帝大始四年戊子）奉祀布留御魂大神之處。史云。皇祖自熊野。浮海而東。兵士皆病。熊野人高倉下來獻寶劍。名曰韴靈。蓋韴爲斷物聲。以劍利斷物。故有此名。皇祖獲之。大喜。病亦癒矣。後建祠祀之。是也。

高田町　屬北葛城郡。市街繁華。冠於郡中。戸數八百八十。人口四千六百四十又奇。有警察署。區裁判所等。客棧酒肆。亦不鮮少。又有大阪鐵道停車場。距御所町。壹里二十二丁。

世尊寺　在大淀村。屬吉野郡。古名比蘇寺。又有現光寺吉野寺等號。世傳。用明天皇即位二年。（隋文帝開皇七年丁未）聖德太子奏請建寺於此。曰。四神相應之地。佛法定必勃興。天皇聽之。乃與蘇我馬子謀建之。本堂安置放光樟像。欽明天皇嘗勅頁工刻者。後屢罹災。伽藍廢頹。僅存鐘樓等耳。

吉野山　我世諺云。人則武士。花則櫻樹。夫評櫻花。則說吉野。說吉野則必談南朝忠義之事。故士之於櫻花。櫻花之於吉野。不可相須而離也。吉野又作芳野。讀曰約西諾。史云。皇祖東征。踰葛城山。至于吉野。嗣後。應神。天武。持統。文武。聖武。元正諸帝。無不幸臨焉。山在吉野郡北端。下有吉野川。發源郡東溪澗。西流過

紀伊而入海。六田村跨其南北兩岸。河水至此滙會。稱六田渡。老柳數株。臨水而樹。因呼柳渡。溯流壹里。南曰下市町。北曰下淵驛。又稱櫻渡。登山不得不由斯二渡二道也。然自六田而上。經上市而下。是爲便捷。過南六田數丁。有坂。曰一之坂。既見櫻樹夾道。十五六丁。吉野神社。官幣中社。奉祀後醍醐天皇之處。明治廿二年。六月。詔設神殿。左右有瀧櫻。（贈正四位土居通增 贈正四位得能通綱）船岡（贈從四位兒島範長、贈正四位兒島高德、贈正五位櫻山玆俊）御影（贈從二位藤原資朝 贈從三位藤原俊基）四社。皆祀勤王義士之靈。第一鳥居前。有繪馬堂。繪馬者。謂扁額。（古者、我俗賻賽等時、或用馬匹、於是、後世納扁額於祠廟、定必畫馬、繪馬堂之名起於此、）二十五丁。長峰藥師寺址。路傍建村上義光碑。義光稱彥四郎。護良親王從士。親王自般若寺。（在般若寺條下）遁至十津川。既而築柵于此。北條氏。遣二階堂道蘊。率兵數萬。來攻。親王親戰不利。義光請其甲胄。詐稱親王。拒戰而死。事詳于碑文。三十丁。有千本茶店。世所謂一目千本者。是也。（一目、一望之義、本者、株也、千本、謂其數多也、）七曲坂。以山路曲折。有此名。岐曰追分。又攻辻。

（注宇臧本緝京都條）元弘之役。東軍自此來攻云。「一之橋」。銅柱刻豐臣秀賴重修。過橋入門日黑門。是爲吉野町。戸數四百又奇。多以客棧爲業。「第一鳥居」。用銅鑄造。高二丈五尺。圍一丈一尺。揭扁額。題曰發心門。係弘法大師筆。「藤尾坂」。史云。文治之初。（宋孝宗乾道年間）源義經與兄賴朝有隙。遁匿吉野。義經有妾名靜。磯禪師之女。居于京師。追至藤尾坂。爲寺僧所執。即是地也。「仁王門」。又名大門。康正年間（明景帝景泰年末）建立。密迹像。湛慶刻。金剛像。運慶刻。長各一丈六尺。有名于世。「藏王堂」。金峰山寺之本堂。天平年間（唐玄宗開元年間）聖武天皇。勅僧行基創建。安置金剛藏王權現木像。長二丈六尺。行基親刻。元弘之亂。皆罹兵燹。後至天正十九年。（明神宗萬曆十九年辛卯）重脩。堂高十一丈二尺。方十八間。即今存者。「四本櫻」。在其堂前。史云。護良親王。牙於藏王堂。躬擐緋甲。戴彫龍鐵冑。攜眉尖刀。從壯士二十餘人。逆戰不克。乃退帳於中庭。置酒訣飲。親王甲上集七矢。又受二創。臨宴。未及拔矢。立嚼三大觥。借

一八三

一八四

勝鬱乃實所藉者於刀鋒。起舞以侑之。有頃。義光至。甲亦受十六箭。血流至踵。曰我兵力盡。外城又失守。臣請代君而戰死。我公乘間。避之他國。以謀再舉。四本櫻者。即張宴之蹟也。嗚呼。老櫻已朽。然遺香餘薰。遠聞萬世。「實城寺」。古名金輪王寺。在藏王堂西。延元元年。（元順宗至元二年丙子）十二月。後醍醐天皇。潛幸吉野。初以吉水院。爲行宮。後遷于此。曰金輪寺御所。又曰黑木御所。慶長中。（明神宗萬曆年中）東照公。命僧天海重修。因改今號。移金輪王寺於日光山。「吉水神社」。古稱吉水院。開祖爲役小角。白鳳年間。創建。史云。源義經之遁吉野也。與僕辨慶等。密議於此。又元弘中。院主曰宗信。嘗助護良親王。有功。後醍醐天皇。出京師。逃大和。遣二條景繁往諭之。宗信先衆出迎。補正行間而大喜。與從弟和田正朝等。護駕入吉水院。以爲行宮。明治八年。廢寺。更爲神社。今尚存御座。及密議室。「山口神社」。在其東北。古稱勝手明神。世傳。天武天皇。未登極也。嘗居芳野日雄寺。夜

夢櫻花。問之寺僧角乘。對曰。櫻者。我邦花王也。而勝手明神。卽木花開耶姬命。尤愛櫻花。故櫻花一名木花。蓋昇天位之兆也。後果如其言。天皇乃勅植櫻。且建一寺。賜僧角仁。卽角乘子。號櫻本坊。由是。遠近士庶。詣吉野者。爭獻櫻樹。以爲報賽。至於山岳谿谷。無往不櫻樹也。櫻。國訓左久良。讀曰薩古拉。傳漢字之後。以櫻字充之。我邦獨有此花。海外各國。未曾有之。故與漢土櫻桃之櫻。固不同也。神功皇后征韓之役。祈勝手明神。遂得大捷。義經妾靜。奏法樂舞。極妙入神。動衆僧心。義經君臣。因以出山。遁至陸奧。皆斯處也。村上義隆墓。距山口神社。五丁。義隆。義光子。稱藏人。其父將出戰。義隆從之。義光叱曰。汝往爲王扞難。力竭則死之。何與我俱死之爲。義隆追及親王。將至天河。敵兵來迫。義隆拔刀奮戰。擊斃數人。親王得走入高野山。義隆躬被十餘創。計王已遠。入竹叢中。伏劍而死。時年十八。今世建碑於墓前。如意輪寺。在山口神社東。號塔尾

山。本堂。安置如意輪觀音像。開祖曰日藏上人。初名道賢。三好氏。清行弟也。清行爲文章博士。與菅公友善。延喜十六年。（唐昭宗天祐十三年丙子）二月。道賢登山。削髮爲僧。又建竹林院。園庭幽雅。世贊稱之。史云。正平之初。楠正行在金剛山。漸保聚義故。時出兵攝津。遂進逼京師。足利尊氏大懼。乃發二十餘州兵。令高師直。統諸將帥。以拒南軍。正行與弟正時。率諸宗族。詣行宮。依藤原隆資。上言曰。先臣正成。嘗以微力挫强賊。敢安先帝宸憂。及天下再亂。逆賊四襲。遂致命於湊川。臣時年十一。命歸河内。囑以收拾餘衆。報復國讎。臣年已踰弱冠。而禀性羸弱。常念不及今力戰。以有待之身。罹無虞之疾。上爲不忠之臣。下爲不孝之子。而今賊渠師。大擧來犯。是臣致命之秋也。非臣獲彼首。則授臣首於彼。臣生死決於今日。切希得一拜天顏而行。隆資入奏。後村上天皇。捲簾臨視將士。特前正行。覩勞之曰。戰日両捷。大殺賊勢。甚慰朕心。朕深嘉汝世忠。今賊悉銳而來。眞安危

之決矣。雖然。兵之進退。貴於從宜。朕以汝爲股肱。汝其自愛。正行俯伏。垂淚而出。辭訣後醍醐帝廟。題族黨百四十人姓名於廟壁。且賦和歌。用鏃刻於扉板。斷髻托之寺僧。然後上途。天皇使隆資援之。時正平二年。（元順宗至正七年丁亥）十二月廿七日也。明年。正月五日。戰死于四條畷。時年二十又三。其扉尚存庫中。髻塚碑。乃在古帝廟前。森田益撰文。益號節齋。山陽弟子。（岡松甕谷曰、余嘗聞之友人細川十洲、楠公夫人、名滋子、實藤原宣房女、宣房氏萬里小路、家宰上田兵庫、養爲己子、以妻楠公、生正行、故藤房於公、爲姻戚、藤房父子、常參密謀、欲得一武士、援中興業、然當時有未可發露者、因爲帝設謀、所謂帝夢大樹南枝甚茂、蓋假託之辭也、十洲聽之萬里小路氏子孫、古文舊牘、歷歷皆可以徵焉云、）後醍醐天皇御陵。在其山上。史云。延元四年。（元順宗至元五年己卯）八月十六日。殯疾大漸。乃遺詔曰。朕憾不滅國賊平天下。雖埋骨於此。魂魄常望北闕。後人其體朕志。竭力討賊。不者。非我子孫也。非我臣屬也。按劒而崩。（凡遊于吉野、賦詩詠歌者、自古至今、不知其幾千萬、刊行芳雲餘情等書、尙不能盡蒐錄、今獨抄所謂吉野三絕者、（梁川星巖詩）今來古往事茫茫、石馬斷休抔土荒、春入芳心萬花白、南朝天子御魂香、（篠井竹外詩）古陵松柏吼天飈、山寺尋春春寂寥、眉雪老僧時歇帚、落花深處說南朝、（河野鐵兜詩）山禽叫斷夜寥寥、無限春風恨未消、露臥延元陵下月、滿身花影夢南朝、）又有世

泰親王墓。後龜山帝第一皇子。御陵北麓。櫻樹萬株。俗呼中之千本。而小松神社東南。乃稱上之千本。分爲上中下也。（芳山偶感）嘗遇北風花亂飛、淸時更覺放春遲、至今休說南朝夢、芳魄香魂應舞威、（賦示兒泰）漫擬輕裝行脚僧、山河到處說中興、義方教子無他意、都在櫻花與御陵、更南行則有水分神社。躑躅岡等勝區。至苔淸水。西行庵。（僧西行事畧載京都雙林寺條）茅檐竹席。苔滑水滴。幽香撲戶。白雲鎖門。世比諸樂天結廬于香爐峯。蓋西行法師。武士之淸者耶。

金峰山　在南吉野山頂。號大峯山。高六千二百二十三尺。上建一大伽藍。是爲山上藏王堂。安置金剛藏王。及役行者像。（行者、又稱修驗者、道士之類、）名小角。役公氏。大和茅原人。幼敏悟。博通經典。及長。出家入山。食果衣葛。夙起開拓金峰之志。師事櫻本坊角乘角仁。苦行修法。禱神念佛。遂藏魑魅魍魎。建立堂宇。安置佛像。爲鎮護國家。濟度萬民之靈地。小角又嘗往百濟國。負藥師石像。歸朝。置之金剛山。因號石寺。文武天皇。惡其惑衆。遣吏捕之。小角坐乘草上。載母於陶盆中。浮海

不知所往。時大寶元年。唐中宗嗣聖十八年辛丑六月七日也。時年六十又八。昌泰年間。唐昭宗光化年間
醍醐寺僧聖寶。更奉旨重修之。坊舍計三十六。漸極旺盛。每歲。自四月八日。迄
九月十三日。僧俗交詣。香花無絕。延至今世。未嘗衰也。

賀名生行宮址　賀名生又作穴生。舊族有氏堀者。本姓藤原。世爲熊野別當。後醍
醐天皇之南狩也。堀信增獻其第宅。以爲行宮。及後高師直大舉來犯吉野。後村
上天皇亦幸臨焉。更建宮殿。號黑木御所。古跡舊物。存者太多。（大窪詩佛詩）北闕當年兇賊滿、九重宮殿
委塵埃、數間茅屋懸崖下、曾作金城鐵壁來、（題南天詩）實似珊瑚紅植植、高過二丈伴庭槐、至今無
恙南天竹、曾受南朝天龍來、（題小楠公所獻洪鐘詩）一箇洪鐘楠氏物、寂然無語掛崔嵬、不知當年發
聲響、破得幾多兇膽來、　賀名生。距五條僅二里。

北畠親房卿墓　在華藏院東。北畠氏。出於具平親王。本姓源氏。世爲名卿。及元
弘時。親房顯家父子。並爲南朝柱石名臣。親房父曰師重。教有義方。親房幼讀
書通大義。歷仕五朝。准三宮。聽輦車入宮。後醍醐天皇既崩。後村上天皇即位。

親房時居常陸小田城。著神皇正統記六卷。及職原抄二卷。遣使獻之吉野行宮。
一以明我國體皇統。一以便於官職陞除之儀。其盡心於戎馬倥偬之間。大率類
此。正平九年。元順宗至正十四年甲午、明年、明太祖起兵四月十九日。薨。

五條町　屬宇智郡。東西十二丁。南北四丁。肆廛櫛比。商賈殷富。戶數壹千四百
又奇。人口六千七百餘名。有郡役所。警察署。中學校。區裁判所。監獄署等。世
屈指於奈良縣之市町。奈良第一。郡山第二。而五條居其三。四方皆山。葛城金剛。
聳於其北。十津川鄉。在其南方。吉野川乃横流其間。德川氏世置代官所。近世
史云。勤王志士結黨。稱天誅組。組者、隊伍之義、襲代官所。殺鈴木源內。卽斯地也。

五條停車場　自此車站。至於紀伊和歌山市。通設鐵路。曰紀和線路。可以轉乘環
遊于大阪京都奈良等地方也。

榮山寺　在宇智村。距五條西里許。號梅室院。養老三年。唐玄宗開元七年己未元正天皇。勅

藤原武智麻呂。創建。開祖爲役小角。千年之久。堂宇頹廢。獨存金堂。八角堂。求聞持堂。弘法大師脩練之處。古鐘之名。藉甚於世。小野道風書。初在京都深草道澄寺。後移於此。其事載拾芥抄。扶桑略記。野府記等書云。今抄其文、曰、道澄寺者、從三位守大納言、兼右近衛大將、行皇太子傅、藤原朝臣、參議左大辨、從四位上、兼行勘解由長官、播磨權守、橘朝臣、爲報四恩濟六趣、合誠勠力、所建立也、貽本緣於來代、期同志於他生也、藤亞相爰命鳥匠、乃鑄鴻鐘、且將令長夜昏迷、聞妙響而知曉、苦海汨溺、驚梵刹而通津、延喜十七年、十一月三日銘之、其詞云、堂宇出甍、南北輪奐、尊像接座、前後跏趺、兩相公、宿殖香火之緣、生爲瓜葛之戚、非唯現世結契闊之情、亦欲淨刹共安養之樂、故各取其名首字、以爲此寺額題、所以僊師施治、菩提催緣、盧授必應、彌高自傳、從夕至曉、出定入禪、傍唱衆聖、遙響大仙、法喜增感、邪夢驚眠、通阿鼻獄、達有頂天、劫數億萬、三界三千、一音利益、無限無邊、武智麻呂墓。在山後。而前控吉野川。又名宇智川。或音無川。春花秋葉。眺望並佳。香魚之時。泛舟而遊者。多矣。

葛城山。介在大和河内國境。古者。總稱葛上葛下忍海三郡西方。一帶連山。曰葛城山。世傳。皇祖之入大和。有土賊稱蜘蛛者。皇軍以葛蘿捕獲之。因有此名。其最高處。爲金剛山。屬河内石川郡。楠公據千窟城等事、載河内金剛山條下、

御所町　屬南葛城郡。戶數。九百四十八。人口。四千五百八十又奇。有郡役所。警察署等。亦設停車場。戶毛驛在其西。相距僅壹里許。戶數。四百十九。人口。二千九百十餘名。

奈良土產　檜杉梅榧。即柏也、松茸。椎茸。木耳也、香蕈之一、椎讀曰西希、閩省所謂科樹、是也、猪鹿猴熊。索麵。葛粉。比糯粉、精且白、春日塗。漆器具、團扇。奈良人形。不用大小刀子、單用一刀刻之、因稱一刀彫、鹿角細工。細工者、謂手工也、用鹿角、彫鏤各種器玩、紙墨。酒。稱霰酒、餅。

滄海一粟小序

余將有浮槎之遊因著言志小錄一卷詩以爲綱文以爲目用述厥志且謂自今以後不復作詩也既而解纜橫濵以至上海爲日九日水程五百六十六里所過名山大海率不乏偉景壯觀欲不作詩得乎於是吟哦自娯凡得詩十有餘首比在逆旅茫然已忘之矣蓋不以介于懷也雖然遊蹤千里此心悄然未嘗不在於故園當是時自非賦詩咏歌無以慰其情一夕就寢意甚無聊追思腹稿尙得十絶毎首前記所歷事亦倣小錄之體嗚呼非謂海岳之美盡于此也題曰滄海一粟而可矣頃將聘師有所習脩又恐其久而忘也於是乎序以寄我師友亦冀師友勿咎余逐詞藻之末也

日本明治十七年五月二十八日於清國上海蘇州路客舍

外齋關口隆正識

滄海一粟

明治十七年。五月。余將遊于禹域。適聞三菱公司輪船廣島號者。踰海抵于上海。因約寄載焉。十四日。天大雨。午前。自家巷出。至新橋車站。來告別者。甕谷岡松先生以下三十餘人。至横濱則家大人默齋先生。幷諸父昆弟朋友。無慮二十餘人。開宴渡邊某樓。午後四時。將登舟。諸昆弟特賃小輪船。送至巨船。時風益烈。雨益猛。嗚呼。上天欲壯我行乎。抑傷我衷情而助之悲乎。三條相公亦有西京之行。同在一船。舟人以相公故。不急鼓輪啓行。待風雨少歇。夜半拔錨。滊笛一聲。四望寥廓。

大鵬一擧復離群。鼓翼滄溟萬里雲。休怪征人多別涙。天風終夜雨紛紛。

十五日晴。船仍簸蕩不已。余素不慣海行。身心懊惱。食不下咽。擁衾偃臥。忽有連呼遠州洋至者。乃起。推窓一望。富岳參天。翠色可攬。因憶月岡村居。黯然久

之。月岡事載在言志小錄。

七十里程波浪翻。船頭沒水幾驚魂。窓間認得芙蓉雪。又臥匡牀思舊園。

十六日。午前十時。至神戸。乘小舸上岸。抵專崎氏。主人曰。縣吏方往迎相公。不得受他客也。余告以名姓。且曰。吾不必主子家。將去。主人驚謝罪。更延至其莊。室屋壯麗。欵接甚至。飯罷。傭一小僮。彷徨街衢。拜楠公祠。又抵湊川。俯仰感慨。詩以遺懷。

祀典長崇世德馨。不須虛禮瀆威靈。犬羊當路今猶古。楠子墳前草木腥。

遂抵東站。將升汽車趨浪華。邂逅手塚生。聞生亦將遊于朝鮮也。與共休于茶寮。談論片時。又與升車。同至浪華。訪荻生於警察署。荻躍然出迎。有空谷跫音之語。蒼黃辭去。拜菅廟。又及豐國祠。橋上遙望浪華城。想見豐公盛時。按史。豐公嘗遊鎌倉。手拊賴朝塑像。笑曰。卿與我皆掌握天下者。然卿將門之冑。不及我起

微賤也。餘因賦一詩。以示手塚。手塚曰。噫。先生何大言至此。余曰。否。文武異途。然吾何遜讓於豐公乎。相共啞然。過建野知事。曾不在家。又與手塚。升車還神戸。方八時。脩家信附遞。與手塚別。手塚茨城人。荻東京人。幷從我兄弟遊者。十時上船。

西溟鼓楫駕長風。又過華城拜閟宮。待我他年成業後。與君撫背定雌雄。

十七日。曉發神戸。天晴風恬。波平如鏡。右仰山陽連嶽。溪澗村落。歷歷可數。左則南海諸州。島嶼港汊。迤邐相屬。呼而欲譍。疑如園池假山。托出盤上。然而風帆煙檣。颺揚往來於其間。景物甚佳。嗚呼。西人稱此處。爲五大洲第一奇觀。蓋非誣也。自發橫濱至神戸。風濤洶湧。舳艫搖動。余目眩心悸。日親枕席。不能復有眺矚。今則遇斯好時日。見斯好山水。襟懷舒暢。喜不可言。豈海神知余有煙霞癖。故特揭一大畫幅於茫渺無涯之際乎。獨不能詳某山爲何山。某汀爲何州。又無詞

藻以答山靈海若。是爲可恨耳。嗚呼。子長逝矣。摩詰遠矣。余於是乎。樂有斯勝。而悲無其人。叩舷太息。悵然久之。日暮天陰。入夜雨。

黃薇山紫似池塘。淡讃烟波匹練長。海不揚波天地靜。樓船也載畫圖行。

十八日雨。終夜不已。昧爽泊赤馬關。余欲上岸。舟師曰。船且發矣。不遑遊覽也。乃登舵樓四顧。東方將白。燈火漸滅。雲烟縹渺。但聞鷄鳴。近遠相屬。亦不能詳其曲折也。往歲。毛利侯砲擊西洋軍艦。世固傳其事。今不復贅。但丙子之亂。家君實承事於危急之際。舟中亦有談當時事者。因賦一詩。詩中强項令慈君。皆據舟客之言。

死生有命只忠勤。入撫流民出統軍。底事徒呼强項令。舟中不復說慈君。

日將午。風雨益至。舟搖撼不已。蓋過玄海洋也。余懼急入寢。午後四時。泊于平戸。三面負山。獨缺東面一峡。船從峡入。嘗讀元寇紀畧。註曰平戸或作平壺。起問

舟人。以地勢如何。皆曰。來泊于此者。今日爲始。未能知其詳也。余聞之。益知水路之險。爲之瞿然。元寇紀略。叔父訥菴大橋先生所著也。

捲起狂瀾衝雨行。飄飄載夢到天明。半函鏡影沙灣靜。應識平壼是古名。

十九日。風濤又激。海上島嶼數十。隨見隨隱。船亦左右轉移。循島而行。眺矚極佳。午前入長崎。長崎古名玉浦。不過西海一小港耳。元龜中。葡萄牙人來請互市。士族大村氏。爲拓荒蕪。開埸與市。然世有治亂。時有隆替。未知今日之盛且大也。嗚呼。因世變知得失。俯仰古今。人才固難得哉。不覺三嘆。買小舟上岸。浴且飯。訪河野撿事。其弟某出接曰。家兄去月奉命。巡察沖繩縣。與談良久而去。凡港汊街衢。幷西客舘榭之美。非倉卒所能盡。今皆不及也。夜半入船。

攢檣接舳聚中流。萬斛龍驤異域舟。燈影蘸波光碎破。欣看浦上夜珠浮。

二十日。曉過五島。自是以西。實離我境矣。盍從橫濱至長崎。凡三百六十又一里。

由長崎西抵上海。凡二百五里。攀檣四顧。浩渺無際。遠與天連。不復見寸碧。意戚戚不勝思鄉之感。夜雨。天明。風潮順利。舟行甚穩。先是。屢與船司武市等爲象棊戲。是日復戲。既而見海色黃濁。怪問之。武市曰。莫傷也。距上海七十里。海乃漸濁。吾曹之航于上海。常以是爲遠近記。故予之所以爲怪者。乃吾曹之所以爲喜也。

舟行二百里汪洋。無復山巒見翠光。遠客偏欣前路近。蒼蒼海色乍成黃。

二十二日。雨歇。遙矚楊子江口。柳灣廻曲。翠煙被之。樓閣臺樹。丹青相映。舟車依稀。行人如豆。余凝睇久之。以爲唐虞之遺風可問。吳越之山水。亦可探也。船益進。去岸益近。則屋宇頹墮。門牆毀破。殊覺荒索可歎。豈經兵燹後。尚未能復盛歟。余因憮然有間。曰世有凡物宜於遐觀。而不宜於近矚者。此類是矣。按大江自安慶。經金陵。東流入于海。而下岐分爲三。其沿岸流者。委爲吳淞江。其東即楊

子江也。鄭谷贈別詩云。楊子江頭楊柳春。楊花愁殺渡江人。是其上流也。上海則在吳淞西黃浦河上。船艦隨潮。直泊于岸。岸與船平。可步履上岸。不復須走舸。尤爲便順。昔者。楚黃歇實拓此地。鑿此河。故又名春申浦。而滬城則孫權之所築云。或曰。築於明嘉靖年間。以防倭寇。未知孰是。往歲。英人與清戰。議和後。特設互市之場于此。即通商五口之一也。厥後四方賈人。陸續來集。夤館蟬連。街衢櫛比。然亦自有分界。大橋以北。爲米人租界。而我領事館在焉。橋以南至滬城。爲英法二國之租界。蓋納租借地之謂也。即我所謂居留地。道路平坦。柳灣莎渠。蒼翠蔚然。東西賈客。往來不已。車馬旁午于路。船舶相接於岸。喧呼譁譟。天地爲震。實一大市集也。天下闤闠之盛。可屈一指。若滬城中。則糞穢載途。溲溺橫流。余掩鼻而過。未能得其詳。至其城堞參差。樓閣宏壯。猶有唐宋之遺制焉。但未必如西人舘舍之徒事潤飾也。要之。清國城闕山水。可遠望也。而不可逼視也。是日。

侵雨。初見吳碩君於領事舘。松林諸子於本願寺別院。皆一面如舊。余喜可知也。

萬國旗章飜九天。幾層樓閣鎖雲煙。千條百縷河邊柳。繫得東西南北船。

既還逆旅。燈火熒然。余素無八斗獨酌之量。而有半夜十年之感。即擇詩十首。朗吟遣懷。既而投筆。慨然嘆曰。嗚呼。我之有橫濱。猶清之有上海也。昔則爲防侮之固關。而今則爲貿貨之要港。萬國通好。東西爲親。文明之化。且洽於六合。吾蠢小民。亦得擊壤鼓腹。以終其生。蓋亦幸矣。雖然。天有風雨。人有疾病。凡禍患必生於謀慮之所不及。固自然之理也。然則國家亦安保無禍患之不至哉。且與疾病而後延醫進藥。不如豫保嗇生命之爲愈也。與風雨而後葺屋完壁。不如早綢繆牖戶之爲愈也。夫清疆土廣大。可侮也。不可侮也。俄英法米。財富兵强。可畏也。不可畏也。今以非廣大富强之邦。介立于其間。而上下恬熙。曾不知戒懼。一旦禍患交至。其終使臣民苦楚哀痛。死而後已耳。蓋世有徒裝飾門墻。而不知爲柱礎之

固者。黨能知之。常使内外無缺。雖有狂風暴雨。且奈之何。今天下之衆。有若子産其人者。余將執鞭從之。然此余特爲天下萬姓憂而已。若夫我邦明亘相遇。四方乂安。吾輩餬生。猶得帶尺一之符。彷徨乎殊域。豈非文明之餘澤也哉。初余之發家。父兄師友。所以慇懃誡我者。亦不過使余盡心乎報國之術耳。爰書以附滄海一粟之末。餘則載在海外雜著。

集古十種畧解緒言

一集古十種。八十五卷。白河樂翁公著。公名定信。實田安宗武卿第七子。出冒松平氏。爲陸奥國白河城主。幼有才名。長通和漢書史。博覽强記。年尚少壯。著國本論。具說治國平天下之理。上下喧傳。稱其卓識。旣而嗣家。會歲飢。乃免國内田租。遂放家婢數十人。獨留一女。又令夫人衣不曳地。而身服澣衣。菜一盂飯一椀。率先御下。幕府諸老。望風驚愧。爭惡衣食。於是。公之名益顯矣。天明七年。乾隆五十二年六月。天下復大飢。當是之時。太平日久。上下奢侈。政令弛廢。物情恟然。幕府奏請。以公爲執政官。任侍從。拜越中守。八月。公奉有德公之遺政。先令士家。專行節儉。嚴飭武備。勿得爲壯邸第設飲燕服帛衣等事。紀綱漸張。令行禁止。時人爲之謠曰。京都聖帝居。關東賢宰出。風俗淳亘。鼓腹不日。有德公。謂德川第八世將軍。世稱德川中興祖。聖帝。謂孝格天皇。公又崇尊儒術。徵布衣士。柴彦輔。古賀樸。

尾藤肇諸名士。皆被登庸。野無遺賢。朝多才能。故至今世。人説政法。輙稱寛政。乾隆年末論文物亦曰文化。嘉慶年初然而行政於此間者。卽公也。公老。自號樂翁。退居白河。世因稱白河樂翁公。時延儒臣。講道著書。白河政談。花月草紙等數十卷。刊行于世。葢公之功業偉績。豈止於此哉。今抄錄余所記臆者。世有近世史。及樂翁公年譜等書。可就見焉。

一余游杭蘇間。陳子德介紹蔣某。某談及我邦衣冠介冑之事。曰。予讀詩講禮。每苦其衣服飲食器皿。存至今者尤鮮矣。而其名稱不明者多也。頃聞。日本往古器物。足以供印證考據。若有是等書。幸指教之。余曰。我邦。自上古。至近代。介冑衣冠之屬。圖而傳者。悉數難終。然集古十種。前賢故實。或足應貴意乎。既別。子德先購集古十種。以余畧通甲冑沿革等事。囑以漢文。記其名物。會履行李。卽蕤新田左中將獸禱海神之圖。倣菊池容齋法。甲冑刀劍。盡有引據。自與坊間刻本。異

矣。故先就此圖。詳記名目稱謂。後於十種各條下。漢譯註明。若遇有不明難通之處。採摘下示。則當質古老。而後更詳報焉耳。請子德諒諸。乙酉仲冬。於滬西客舍。外齋關口隆正識。

集古十種

兵器類　凡例部

〔腹卷〕哈拉抹己〔胴丸〕奪勿抹魯皆甲冑之屬。應永八年（明建文三年）僧祖阿贈方物于明書目云鎧一領筒丸一領是也大凡。我邦將軍所環曰鎧。約落以十種首載義經甲冑圖。是也。中古。唐高祖年初以還。至於近代。將軍多用此物。腹卷則自將軍至部將。皆得用之。所謂胴丸者。始于北條氏末。元初年後群雄虎鬪。各主便捷。鎧制頗變。要之。鎧。腹卷。胴丸三種。其制自別。按圖可知。又中古以前。甲冑之制。詳載菊池容齋所著前賢故實。須併視之。

〔笠印〕吸撒吸督吸〔付環〕足格蛙〔高勝環〕各物吸約惡蛙皆謂胄後之環。〔天空〕礫木谷物〔息出〕以己吞吸〔天穴〕礫木格足

皆謂胄頭之圓孔。是等各種稱呼。邦人論辯甚多。未能持一說也。近世有伊勢貞丈者。論著貞丈雜記。安齋隨筆。軍用記等。其書致數千卷之多。尤可供考証。然皆用邦文。淡文譯之。殊覺不易。凡例文中。有近世稱故實者云云。蓋指伊勢氏以下諸賢歟。

卷之一

〔山城國〕今京都府。〔義經〕源義朝第八子。與兄賴朝。滅平氏。開覇鎌倉。事詳諸史。

宋淳熙年間 〔冑〕嘎伏奪

〔櫃〕喜足 或謂唐櫃。我邦收藏祭政器物之櫃。高卑大小。其制不一。今世祠司猶用之。

〔祇園〕地名。今京都府。〔楠正成〕舉義勤王。殉節湊川。元至元年間 近代水戶義公。建碑其地。文載末篇。明歸化人朱舜水撰銘。〔卿〕尊稱。或曰某公。或曰某朝臣。亦係尊稱。他倣此。

一三

〔松浦〕肥前國主。今列華族。〔足利義教〕足利第五世將軍。明史所謂足利道義之子孫。

〔腹當〕哈拉阿礫 因腹卷制。稍爲變通者。腹卷。腹當。二物。皆爲衣裏甲。國史云。平家貞裹甲而從。蓋外服直垂。直垂衣名敍下條 內環腹卷。以備非常也。至于後世。更創腹當。

〔武田信玄〕永祿間明嘉靖間 割據甲斐國。豪邁善用兵。後世談兵者。號甲州流。世有甲陽軍鑑等書。〔前立物〕抹葉答礫禾糯 冑上金屬角峙者。適在眉間。

卷之二

〔武藏國多摩郡〕今屬神奈川縣。〔赤威〕阿嘎惡奪吸 謂彌縫甲冑鐵板之組。其色渥丹。故曰赤。威者。取於威服之義。凡甲冑有鐵造者。又有革製者。他鎧中小名。眉庇媽迷撒吸 吹返夫氣嘎爺汲 等類。不勝枚舉。相應就全圖併覽之。

〔山城國〕在前卷。〔平六年六月一日〕上鈌一天字。聖武天皇。天平六年唐開元間 始用

一四

韋皮包甲。稱天平革。後世。推重不措。今尙有存者。又有正平革。後村上天皇。正平年間。（元至元間）所創製云。

卷之三

〔南都〕屬大和國。平城古都。今屬京都府。　〔春日〕祠名。〔大塔宮〕後醍醐天皇皇子。親王護良。初削髮爲延曆寺座主。居于大塔。世稱大塔宮。宮者。尊稱親王之謂。常慫鎌倉執權北條高時。肆虐弗臣。蓄髮還俗。密與帝謀滅之。（元至元間）　〔母衣〕（活羅）謂甲背所負之布。或曰。防矢之具。或曰。旗章類也。近世戰時。奉將帥之命。騎馬巡視行間。審察敵情地形者。呼爲使番。當此任者。必負母衣。用五色彩。以爲記號。　〔毛利〕姓。長門國主。今列華族。　〔鎧直垂〕環甲時。服此服。卽直垂。（喜答剌答）直垂之制。有數種。中古以降。平時皆服之。而戰時所用。稱鎧直垂。今世祭時。祀司猶用之。　〔足利義輝〕足利第十三世將軍。（明嘉靖間）

〔京極氏信〕京極姓。氏信名。　〔本談議屋〕未詳

〔出雲國〕今屬島根縣。　〔日御崎〕祠名　〔喉輪〕（糯春蛙）詳於全圖。　〔義家〕源賴義子。武幹能戰。嘗從大江匡房。受孫子兵法。奉詔。討平陸奥安倍貞任等。前後十二年。得於法兵。最多云。歷仕後冷泉後三條白河堀河四帝。（宋仁宗英宗神宗之間）

卷之四

〔橫瀨〕姓。德川將軍之世臣。　〔新田義宗〕義貞子。克繼父志。勤王殉難。（元至正間）

〔奈良〕卽南都　〔興福寺〕古刹。今猶存古器古物。我邦考證學士。必往觀焉。　〔觀修房〕僧房名。　〔義經〕在前條。　〔籠手〕（各礫）環兩腕甲也。

〔出羽國〕今屬山形縣　〔八幡〕祠名。凡稱八幡大神。或八幡大菩薩。皆祀應神天皇。天皇文德武勇。遍海內外。於是。國祀家祭。稱八幡神。勇將猛士。所用旗幟。多書八幡。降至近世。遠航海外。船舶亦用此號。遂有八幡船之稱。

〔加賀國〕今屬石川縣。〔實盛〕姓齋藤。名實盛。官別當。事平宗盛。後與源義仲戰。實盛年老髮白。即染鬚髮。以伍壯者。奮戰而死。〔胄袖〕錏也。吸哭羅〔臑當〕素捏阿礫脚甲也。

〔伊豫國〕今屬愛媛縣。〔河野通信〕伊豫右族。世勤王事。元末明初

〔信濃國〕今屬山梨縣。〔鍬形〕詳于全圖〔古代有八枚〕謂古昔清水寺藏鍬形八枚。而今僅存其一也。枚猶言片。〔大同〕平城天皇年號。唐元和年間

〔尾張國〕今屬愛知縣。〔馬嶋〕地名〔明眼院〕寺名〔景清〕世稱惡七兵衛。我俗呼惡源太之類。非善惡之惡。謂猛勇也。景清世事平氏。平氏滅。欲復其主讎。抉眼爲盲。變形潛入鎌倉府。欲刺將軍。不成被執。不屈而死。南宋中葉

卷之五

〔冑裏張〕吸伏乖勿拉哈粒用韋或布。以貼冑裏。〔弦走〕足魯哈汲粒即謂胸板。取於彎弓發矢時。弦能滑走之義。宜參觀全圖。〔射向〕以木已指左腋下。射時必左顏而向敵。故曰射向

〔裾〕素索即裔字。〔逆板〕撒吸以谷謂甲背也。〔總角〕阿格抹已結組名〔妻手〕滅古礫古言。謂右手曰妻手。左手曰射手。又木礫以握弓也。

卷之六

〔胴丸〕其制與鎧異。按圖可知。蓋雖我邦人。能知其別者鮮矣。況且今世。制度大變。後進小子。何由知古制乎。頃者。朝廷開設博物舘遊就舘。蒐集古器。以供觀覽。其裨益於考古之學。實不鮮少。

〔信貴山〕一作志貴山。寺安置毘沙門天。楠正玄嘗憂無子。祈志貴山。既生正成。即是地也。

〔半首〕哈足木粒謂額甲也。近世最多用之。

〔陸奥國〕今屬岩手縣。〔棚倉〕地名〔都都古和氣〕祠名。〔鞾〕汲谷落或作鞜。〔草摺〕谷撒素粒即胴丸下垂片甲也。環甲而坐。則草必藉其下。因名。

卷之七

〔威毛〕(惡答 汲恪)謂縫甲之組。毛。絲也。〔勾配〕(各勿 哈以)按圖可知。〔綿嚙〕(蛙答 啞迷)謂掛両肩。不使甲下落者。

〔由良〕姓。新田氏臣。〔義重〕義貞子。亦勤王殉難。〔三十六間筋〕謂三十六條。按圖可知。〔金滅金〕即鍍金也。〔啄木〕(答谷 活谷)組名。以五色等絲組之。〔菱縫〕(喜波 奴以)指本圖斜成十字。自爲菱形者。〔畦目〕謂最下横縫之處。

〔安藝國〕今屬廣島縣。〔嚴島〕祠名。夙以勝區。擅名天下。〔新羅三郎義光〕頼義三子。義家弟也。義光嘗加冠於新羅明神前。因有此稱。精通武藝。又善吹笙。(宋崇 寧間)

卷之八

〔備前國〕今屬岡山縣。〔豐原〕地名。〔佐佐木盛綱〕佐佐木姓。盛綱名。事源頼朝。屢有戰功。兄弟四人。皆以驍勇顯。近江源氏族。

〔壺袖〕(足活 索礫)上濶下窄。形似壺瓶。故名。

〔楠家〕謂楠正成後裔。

卷之九

〔中村彌太夫〕未詳其人。

〔楯無〕(答礫 納汲)堅甲之名。蓋取於臨陣無楯。敢進肉薄。矢石不能穿壞之義。世稱武田氏楯無甲云。

卷之十

〔吉野山〕在大和國。以櫻花名。元弘建武之間。(元寧 宗時)屢爲南朝天子蒙塵之地。本編所載冑。韜蓋係當時之物。

卷之十一

〔那須家〕其先事源頼朝。有那須宗高者。最善騎射。屬義經軍。屋島之役。平軍插

賣捌所

東京市日本橋區日本橋通一丁目
同　神田區表神保町
同　日本橋區通三丁目
大阪市南區心齋橋筋一丁目
同　北久太郎町四丁目
神戶市元町五丁目
京都市東洞院三條上ル町
同　寺町通四條上ル町
同　寺町通二條下ル町
滬上游英租界棋盤町

大倉書店
東京堂書店
丸善株式會社
松村三松堂
柳原喜兵衞
吉岡寶文軒
村上勘兵衞
田中治兵衞
松田村吉兵衞
江左書林
田中勘兵衞
（以上、原版上の店名）

三

扇於竿頭。宗高一發射落之。於是。其名益顯云。

〔小松內府〕平清盛長子。名重盛。累遷內大臣。居小松第。因稱小松內府。我邦人談忠孝事。必先推重盛。其事蹟。載在史冊。治承三年薨。宋淳熙六年

〔小櫻威〕謂韋皮染出小櫻花樣。以綴甲冑者。按圖可知。

卷之十二

〔大內義隆〕姓大內。名義隆。世爲山陽豪族。屢遣使于明及朝鮮。至義隆。爲其臣陶晴賢所弒。時天文二十年也。明嘉靖三十年 〔春田光信〕良工姓名。未詳其人。〔大森三郎兵衞〕〔大森盛長〕並未詳其人。然視甲冑圖。係六七百年前之製。〔佩楯〕哈以答喋古所謂膝甲。後世稍變其制。以就捷便。

安國清　著

淡海廿四勝圖記

明治二十五年（一八九二）京都刻本

據明治二十五年（一八九二）京都刻本影印

明治壬辰清和月

淡海廿四勝圖記

金粟巖谷脩題

淡海二十四勝序

琵琶偏石道人來游滋賀翫數年自著淡海廿四勝圖記徵余序是記回環湖之山不志其數千百而標七十二峯焉湖之廣袤不啻其幾百里而標三萬六千頃焉而以其勝目獨稱八景其說蓋出於中古好事者妄意以擬瀟湘洞庭瀟湘可謂狹之實矣吾嘗東踰西涉探奇攬古或圖或記遂得二十四景自謂湖山之精概盡于此而湖山之靈赤將允余言之不謬邪予謂道人也以為何

如余披覽一過指畫標映者數輒余
生長湖上何謂二十四景僅識其五六
定料百年之人能辨此錄如此載
者傳
孝靈天皇五年一夕湖水開焉
蓋瀦瀁之古雲霧四望及

皇化漸東人或始見湖水乎雲散
霧濟之日耳今有佩石芝人撰
此圖記以證前年非洞庭瀟湘之比
而泰湖面目竊旣一新亦猶雲
散霧消之一驚擧人目也呼余
寧得不代湖山而謝道人也哉於是

序

吉湖生若鏡臣撰并書

叙

海内以湖稱者不可勝數乃我琵
琶湖冠于諸州不獨悔負之大以
其為蹟勝概可騐勝地無出之
說湖中勝槩者惟知有八景乃不

知八景之外更有無八景也余未嘗
左門附好稱覧謂記以其湖之寛
船巡湖或為宗是何國或為風雨
所阻每將一二接而歸者此其
故因便作其書寄自己哉

出鄉遊乃東常以爲恨焉頃伊右
老師袖淡海廿四勝圖記屬余
序之持淡海之遊冀能自生者久之
以其所寫湖南優之將生湖風
而得其之與險乃不勝勝遊而

不暇余本觀歷者一二非遊覧詳
記使人如湖之境山川有畫之富
余憾矣柳造物既黄得為懐鉢
開懷淡程量但原之所為
者之蹟所生以其畫傳之先人於

四時名四作生意四時
吟詠鳴四興自為四句
不湖水國少而華重勢
為叙為川東南歷注
山味承宇湖川經其阪

入此國中大岳可為勝
概山靈山比良山比叡山
群南山三國岳揮無嶽
如池岳八岳名山則
其不山處識詳長等

山伊吹岳安土山長命山
鏡山荒神山太郎山
觀音寺山逢阪山沫高
山竹布山八幡山櫻山
赤神山檫山鐵尾山高

龍山金勝山旭山金龍
山岩根山野龍山望
作山瀬田川為勢多
川野洲川愛知川姉
川安曇川犬上川名水等

嵩老羅森那般玉川
氏國中之名勝古蹟
不遑枚舉爰乃八
景之選能所撰唯筆所
一偏之勝耳亭南識

焉以吾乃能全國所選
勝概乃三十六勝為
又厥後[illegible]復更選為廿
四勝云

洪石老人安國清

谷太湖云。擧全國形勢。瞭然一目。文格古。筆力勁。

江馬天江云。昔人嘗撰勝。借名瀟湘八景。強充其數耳。固不足盡湖中之勝。今所揭二十四勝。幽遐抉出。無一逃境。吁人才薦引之於道。細意羅致。若佩石道人之於山川。則亦當無野有遺賢之歎也。

中邨確堂云。總括環湖名山大川名區。一網盡之。使覽者先領大形。於圖誌序。殊得體面。

石津灌園云。先提挈全國形勝。次分叙山川勝蹟。至後總括之。而不遑枚擧句。逐與不可勝紀呼應。章法井々。擒縱自在。

淡海廿四勝圖記卷上

石山夕照　三井曉烟
鐵嶺浮嵐　叡山積翠
大碕澄月　松岬清風
長等櫻花　越溪楓葉
百如爽籟　三上紅暾
鹿瀨八潭　松山重瀑

右十二勝係明治十一年所選

谷云。古称石山秋月。未盡湖月之觀。是道人所以別開巨眼。

石山夕照

石山。在滋賀郡寺邊村。距勢多橋數町。岨岵孤立。蔚然臨勢多川。山中多奇石。狀形詭異。色澤瑩潤。迥與他石異。山所以得名也。有寺亦號石山寺。堂宇麗壯。天平勝寶元年。僧良辨所建。堂側有源氏室。即紫姬草源氏物語之處也。當時古研一枚尚存焉。有經庫。多藏古寫經。間有係唐人筆者



石云。真大觀也。

石云。必注橋名。亦所以与源語相映。

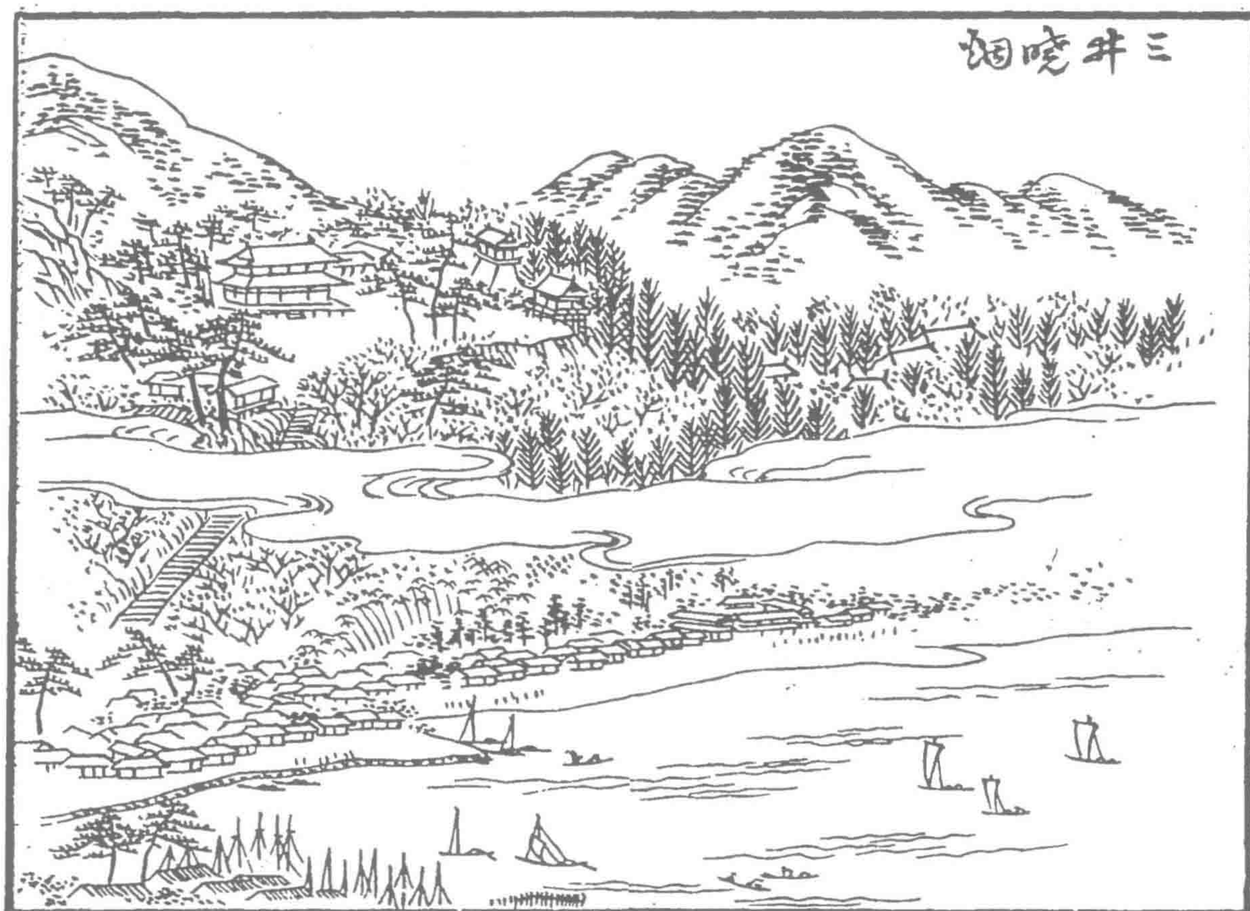
中云。一筆補螢火餘韻嫋々。

云。寶塔及諸廡縣皆數百年前所造。未嘗遭祝融。真古刹也。山之西北角有亭。稱大觀。眺望曠濶。每夕陽懸台岳良峰之際。反照湖面。瀲灩流金。而勢多一橋中斷雙架。如兩霓出没晚靄中焉。山下列僧房數棟。櫻樹成行。樹外旗亭酒樓。臨水占景。稍西有小石橋。號夢浮橋。溪流淺淺。古木蓊欝。溪多產螢。故石山螢火之觀。亦著于天下。

中云。世所傳近江八景。曰三井晚鐘。今曰三井晚烟者。盖晚鐘因湖上所望云。晚烟者在三井寺所觀也。是作者最所用意。讀者不可不知。

三井晚烟

三井寺。在滋賀郡大津西。　天智天皇。遷都於志賀。命皇太子。建寺稱崇福寺。後號園城寺。其稱三井寺者。以有　天智天武持統三帝御井也。井今在金堂西側。清冽可漱。貞觀中。以寺賜僧智證。為一巨刹。與延暦寺相比。保元以來。屢罹兵火。今所存諸堂。多係慶長後之再造。有古鐘。係蕭梁



石云。忽而云云。文亦陸離射人目。一結亦俊絶。可喜。

太平年間所鑄。青龍寺什物。智證歸朝時所齎來。又有唐人送別詩文數卷。山之南嘴。有大悲閣。香花不絶。其側有臺架崖。半湖之景攢聚目睫。曉望最佳。淡烟罩湖。如紗遮物。鐘韻微度糢糊中。忽而旭光射水。萬峰皆露。在正面屹然者。三上山也。

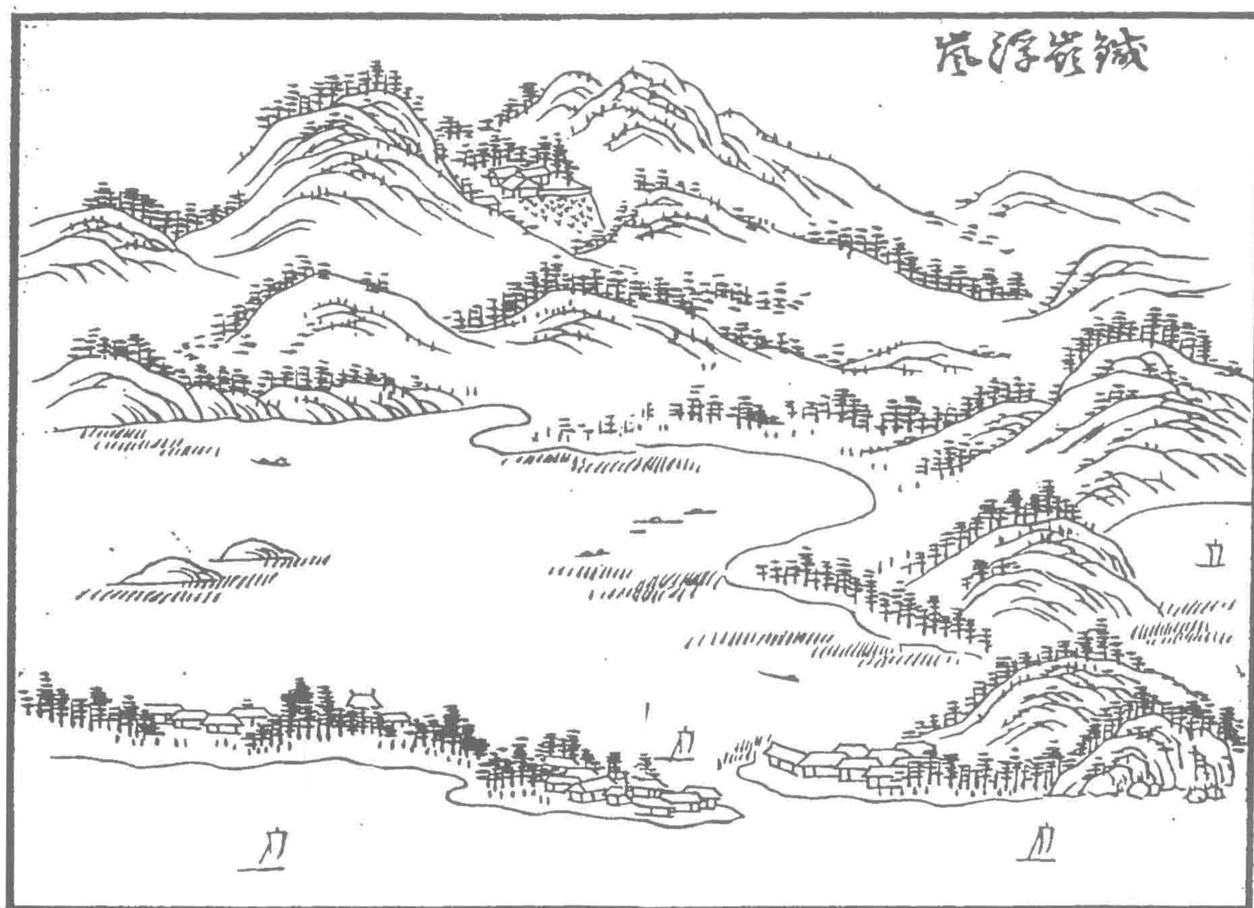
谷云。臺上望湖東。所以宜曉。

谷云。此亭據在峻嶺。所以萬象攢眼。予嘗謂鍼嶺景如大幅畫。大洞景如小幅橫圖。各有妙趣。

中云。漢人誇說岳陽樓。未知與此亭孰勝否。時無范希文。故其名不傳。可惜。

鍼嶺浮嵐

磨鍼嶺。在阪田郡鳥居本番塲兩驛間。屬中山道驛路。峻阪十町餘。嶺上有亭。號望湖堂。正德年間。韓人花庵所題。往時朝鮮琉球聘使之赴江戶。必經由此。故亭中多藏其題詞。望湖之勝。以此亭為最。近則筑摩湖如盆池。漁舟水禽送迎于蘆荻間。遠則太湖如海洋。一碧接天。竹生島孤立波間。



有洞庭君山之思焉。亭後巨嶺群峙。有時。山嵐與水烟相合。諸勝有無一色空濛。亦成一幻境矣。

石云。色即是空。然終不能空此文彩。

江云。近世行旅人。從米原直抵醒井。無一人過此嶺者。名區遂為虛矣。可恨可惜。

叡山積翠

比叡山。一作日支山。又號天台峰。在滋賀郡。北隣比良山。南接長等山。西屬城州。實為平安城之鎮焉。從阪本村至頂五十町。有寺。初稱比睿寺。後號延暦寺。延暦年間。僧最澄所創焉。嶺頂曰妙喜峰。稍西稱四明岳。四望洞豁。江勢濃越若丹城攝河和十州之山。歴々可指。東眺太湖。如盆池。西

石云。有吳楚東南坼。乾坤日夜浮之概。



石云。与韋蘇州所謂落葉滿空山。何處尋行跡。時物雖異。而幽致則同。

望平安城。亦如掌大。山多古杉老檜。皆數百年間物。大可五六圍。鬱然參天。積翠欲滴。皆鮮敷地。不印人跡。溪聲與磬韻相和。洒然洗心。真塵外淨境也。山中有東塔西塔橫川之三區。東塔則藥師堂。戒壇院。明王堂。西塔則釋迦堂。法華堂。相輪樘。椿堂。橫川則觀音堂。龍華院也。堂宇各據峰架崕。翬飛輪奐。極土木之工。而諸堂屢罹兵火。今所在。多係天正後再造云。寺舊多古物。今不盡存。所存有最澄求法將來目錄。附唐明州刺史鄭審則跋。皆筆力雄勁。墨氣淋漓。為希世之珍。

谷云。余嘗遊睿山。有二詩曰。絶嶽崚嶒碧落間。自然天險亦仙寰。千秋遺憾延元事。龍駕匆々下此山。怪杉老檜聳雲中。幾處猶存古梵宮。想得織公鏖戰日。三千房火燭天紅。是余山上所口占者。今讀此記。追憶當

日。因記以補遺事。

大崎澄月

大崎在高嶋郡。與竹生嶋相隔可二十町。距海津二里。怪石森立。如猴猊群浴。如牛羊下飲。矮松屈盤。似鷲攫龍盤。有寺。號大崎寺。大寶二年。僧泰澄所艸創焉。崎下多巨鯉。夏月之際。千百成隊。游泳。而漁人未曾能獲。蓋以多暗礁也。地為峰高山之南嘴。斗出湖中。太湖瀰漫。極目無際。當朗月



石云。一結朴老。此句却不可略。

中天。上下澄澈。天水無間。使人有廣寒宮之思焉。故湖上觀月。以此地為最。蓋以山角向正南也。

江云。余嘗游笠嶋。命舟子抵大崎。石奇松怪。實吾邦之黄山也。恨風濤驟起。急遽回棹。不能及夜而看月。今讀此篇。不堪神飛魂往也。

中云。石山觀月臺。規模稍小。不及大崎。々々向南。領太湖全景。此地之勝。須磨明石。當避三舍。

松岬清風

松岬者。長命山麓也。在蒲生郡奥嶋。距八幡二里。山上有寺。號長命寺。聖德太子所艸創焉。寺北一峰。稱仙行峰。俗云往昔仙客住焉。山之西南麓臨湖者。即松岬也。有古松數株。或欹或盤。水中有三巨石。宜垂釣。西與沖嶼。隔一衣帶。可相呼譍。南與水莖岡相對。其間約一里。清風度水。細波皺



碧。松。皺。蕭。瑟。天。籟清耳。真。靜。修之淨境也。

石云。文有畫趣。

長等櫻花

長等山。在滋賀郡。北接比叡山。南隣逢阪山。東臨太湖。其頂稱如意岳。有巨石。特然隆起。高五丈餘。俗稱千斛岩。藤蔓絡其上。一松從其右腹旁生。高可二丈。山勢自北而南。迤邐綿亘。其嘴乃銜大津市街焉。有三寺。上號近松寺。下曰尾藏寺。稍西則為微妙寺。昂低相望。有山櫻數十章。皆數百



谷云。予寓京都。年々往觀其与湖光相映照者。最稱奇絶。

石云。好考證可以備掌故。

年之物。老幹數圍。蒼蘚斑點。當清明開花之候。滿山如雪。與湖光相映照。較諸嵐山。各有佳趣。未易軒輕。按志賀宮都之址。見在錦織見世兩邨間。距此不甚遠。乃所謂志賀花園者。雖今不得而詳。然此山所存之櫻樹。蓋或其遺種也。

中云。志賀朝文物之盛。歌咏其勝者必多。而今皆不傳。獨平薩州之咏。後世傳唱。此篇他日與之共傳于世。花神必當感其知已。

中云。越溪之妙。在地幽而雅与樹老而多。無他所無也。

越溪楓葉

越溪。南屬神崎郡。北屬愛知郡。南岸為山上邨。北岍乃高野村。々東有一溪橋。號極樂橋。石磴數百級。逶接寺門。寺即永源寺也。元應年間。僧寂室所創。負峰臨水。境界幽閒。唯聞鳥觳磬韻相應和耳。水為愛知川。淺灘深潭。縈紆而流。沙白水碧。瑩澈如鏡。危岸斷壁。出入擁流。老楓與松柏。繡錯。



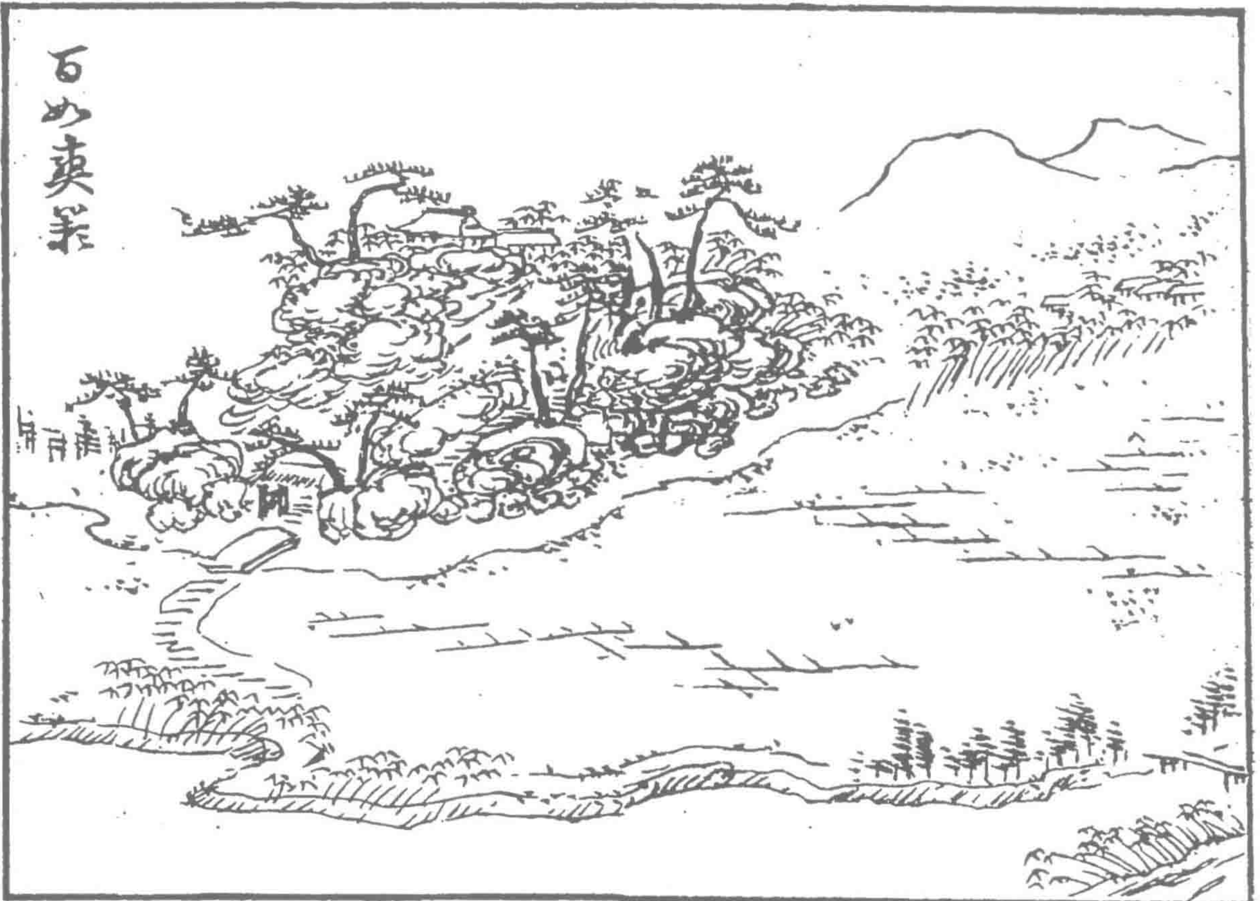
石云。越溪之幸。奚翅永之愚溪。

高閣重樓點綴其間。境幽景麗。使人在董巨畫圖中焉。城之高雄。攝之箕面山。泉之牛瀧山。皆以丹楓稱。予嘗歷觀其勝。佳則佳矣。而未及越溪之最奇且妙。予有句曰。高雄箕面秋光在。不歷越溪無說楓。蓋非溢美也。此地勝槩。從南峙相谷郡口。望之為宄。

谷云。結語殷勤。好遊者之南車也。

百如奭籟

千界山百如庵。在阪田郡能登瀨村。距長濱二里。一山皆石。孤立臨天川。高可半町。周三町許。菴乃居其頂。寬政年間。僧百如所創。因名焉。古松數株。點綴上下。蒼髯赤鱗。或欹或盤。石皆雲頭皺。如臥牛。如奔馬。如蟠龍。如怒虎。小徑盤折。或上或下。宛如觀黃鶴山樵畫。有小渠繞山。々前即天川



也。風起則松濤瑟々。與水聲相和。清爽絶塵。恍有箕潁之思焉。

石云。語亦冷然。

三上紅暾

三上山。或作御神山。俗稱蜈蚣山。在野洲郡直徑約十八町。山容温秀。肖冨岳。因又稱近江冨士。翠松蓊欝。望之若堆藍凝黛。山不甚大。然以其秀峙湖東。所在可得而望焉。而自大津望之為最佳。方曉霧纔散。乃突然浮空。紅暾緣山而昇。光彩映波陸離射目。何啻畫圖。

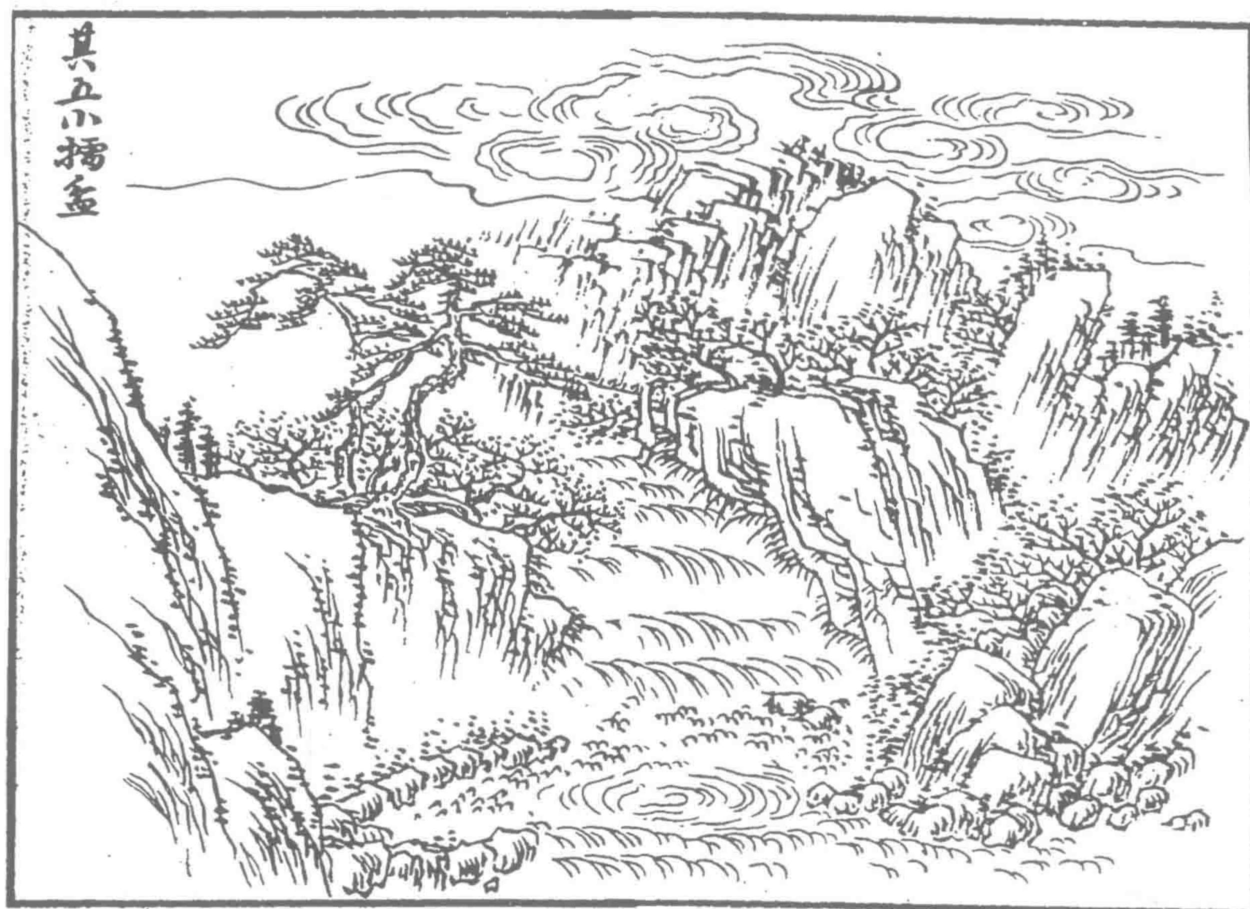


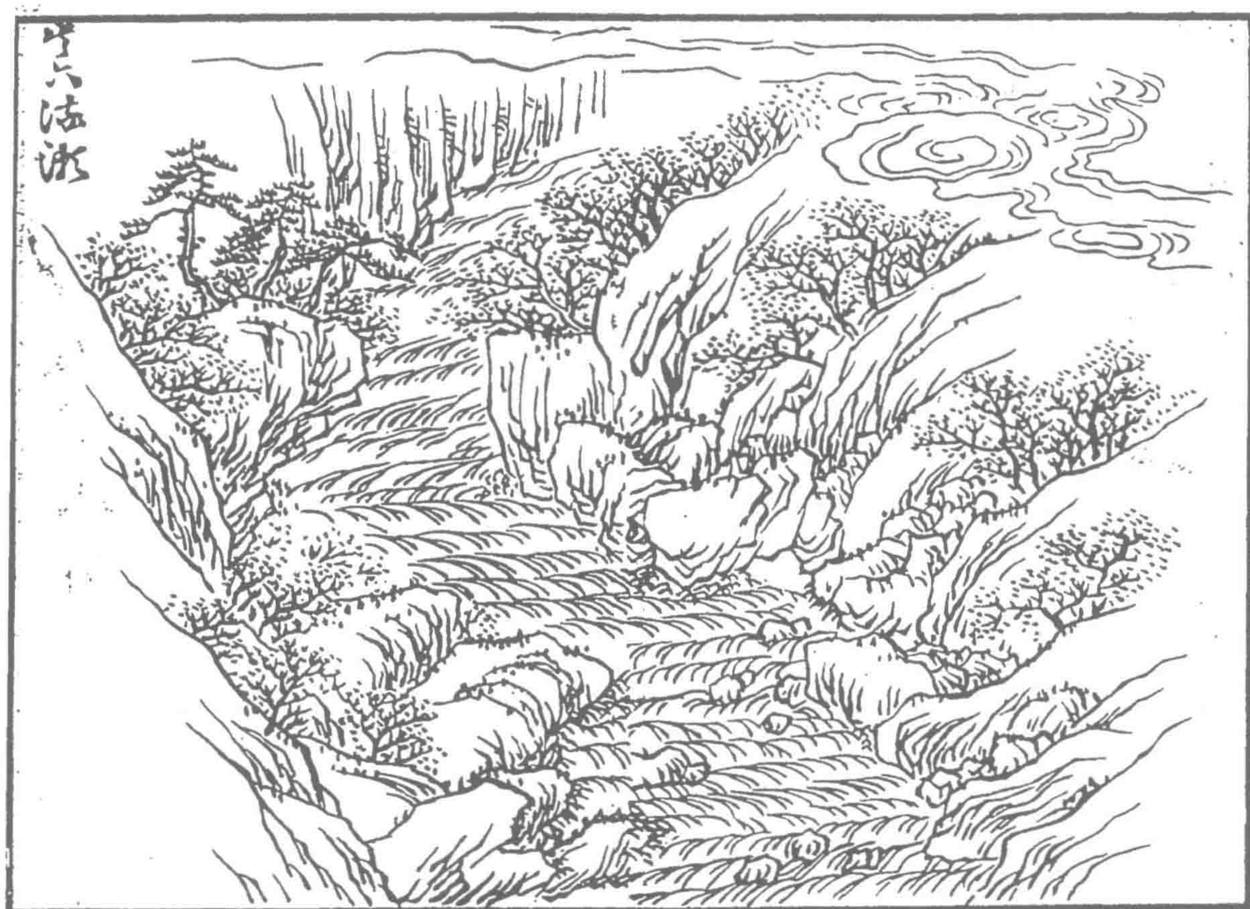

其一 魚止
茗瀬八潭


二陣子


其三雲石


其四大擂壺


其五小擂盃


其六法洑


其七屏風


其八七返回

鹿瀨八潭

鹿瀨村。在高嶋郡距大溝三里。郡西沿鴨川里許。有溪々間有八潭。其名係俗稱呼焉。巨石挾水側立。如猛獸奇鬼。古樹蔚翳。晝亦昏暗。水懸喦石。直瀉二丈許。下成一潭。曰魚止。蓋魚至此不能復溯。故名焉。兩岸壁立。屏翳如障。蒼樹蔽天。激水奔注。若雷雨驟至然。下又成一潭。曰障子。一條小瀑懸右壁。有石跨之。成石梁之狀。激流從左奔注。相合成巨瀑。瀉入洞中。而又成一潭曰空戶。亂石出沒水面。水石相搏。奔濤作盤渦。又成二潭。下大上小。曰大擂盆小擂盆也。水擊石則翻雪。潴凹則湛碧。潺々然。淙々然。右曲左折。其深者至數仞。淺僅沒脛。支流分派。又成一潭。曰流瀨。削石峻峭。高可二十尋。曲折類屏風。石楠交絡。苔蘚點綴。右隅懸瀑十丈許。如匹練懸屏障。下又成一潭。曰屏風。巨石重疊。茂樹暗黑。凝霧不散。地不受晷。風氣凄冽。雖盛夏粟生膚。巨瀑懸正面。勢如舞雪。響如奔雷。下成深潭。曰七返回。蓋試以物投潭中。七回不沈。因名焉。八潭至此而窮。而是潭絕壁危險不可着脚。手攀樹枝。足踏樹根。蟬抱蟹行。纔得以至。故自古好奇之士。雖慕其奇。而往々不果至。間有至。亦至屏風潭而止。其至七返回者蓋罕焉。而其奇實為八潭中之冠矣。

谷云。八潭之勝。江人如予者尚未脚到。而為道人著鞭。中云。鹿瀨之勝。得佩石道人。而後其名著于世。可謂幸矣。因謂幽僻之地。或有隱德之士類焉。安得道人飛錫遍訪以著于世。不亦幸乎。

石云。兩層形容水石處。往々神似坡翁石鐘山記。苦心可想。

石云。其奇實為八潭之冠矣。乃可謂作者之得虎子矣。可不謂豪傑之士哉。



松山重瀑

小松山。在滋賀郡比小松村西。有瀑號楊梅瀑。為近江第一大瀑。折成二級。上級為雄瀑。高可十丈。下級為雌瀑。長三丈許。斷崖牆立。矮松與古苔。彌縫竅隙。激水直瀉。響如百雷鬪空。轂聞數里。濆沫如大霧。迸散及數町。遠望之則如曳布帛。俗稱布曳瀑。

上卅四

谷云。舟過湖上。往々望素練于蓬窓間。

淡海廿四勝圖記卷下

伊崎石壁　大洞水禽

撟殿啼鵑　雄松歸鷺

膽吹早雪　安土餘霞

沖嶼微燈　鎧巖巨浪

唐碕松影　笙嶋波音

賤岳宿雲　勢多驟雨

右十二勝係明治十二年所選



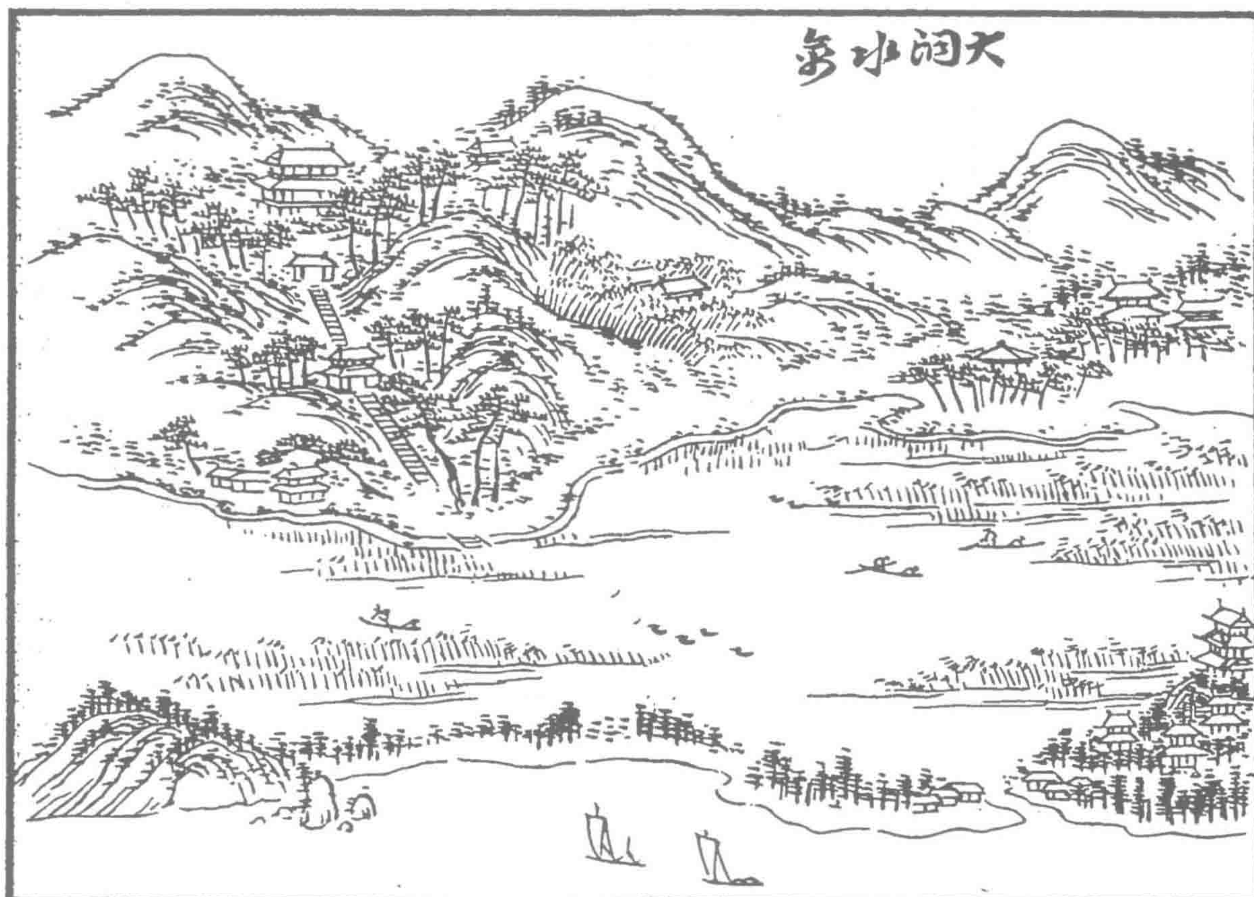
谷云。黄州赤壁。恐不如此奇。

伊崎石壁

伊崎山。在蒲生郡奥嶋。距八幡三里。是地為近江中央。距州境。南北各約十四里。東西可九里。山勢北向。三面臨湖。其西北角。高崖絶壁。嶄喦突兀。崇可三丈。至水底五十尋。巖頭有寺。號伊崎寺。役小角所創。危樓架壁。古松攫喦。々嘴横揷大木。長三丈許。離水亦可三丈。蓋小角練行場之址也。里中少年。以毎歳六月一日。競走木上。躍入湖中。俗云棹飛。

石云。如讀荊楚歲時記。

中云。余舟過湖上。望伊崎寺於古松間者數矣。欲一遊未能。今讀此記不堪神往。



石云。倘使柳州覩之。不知更得何等佳句。

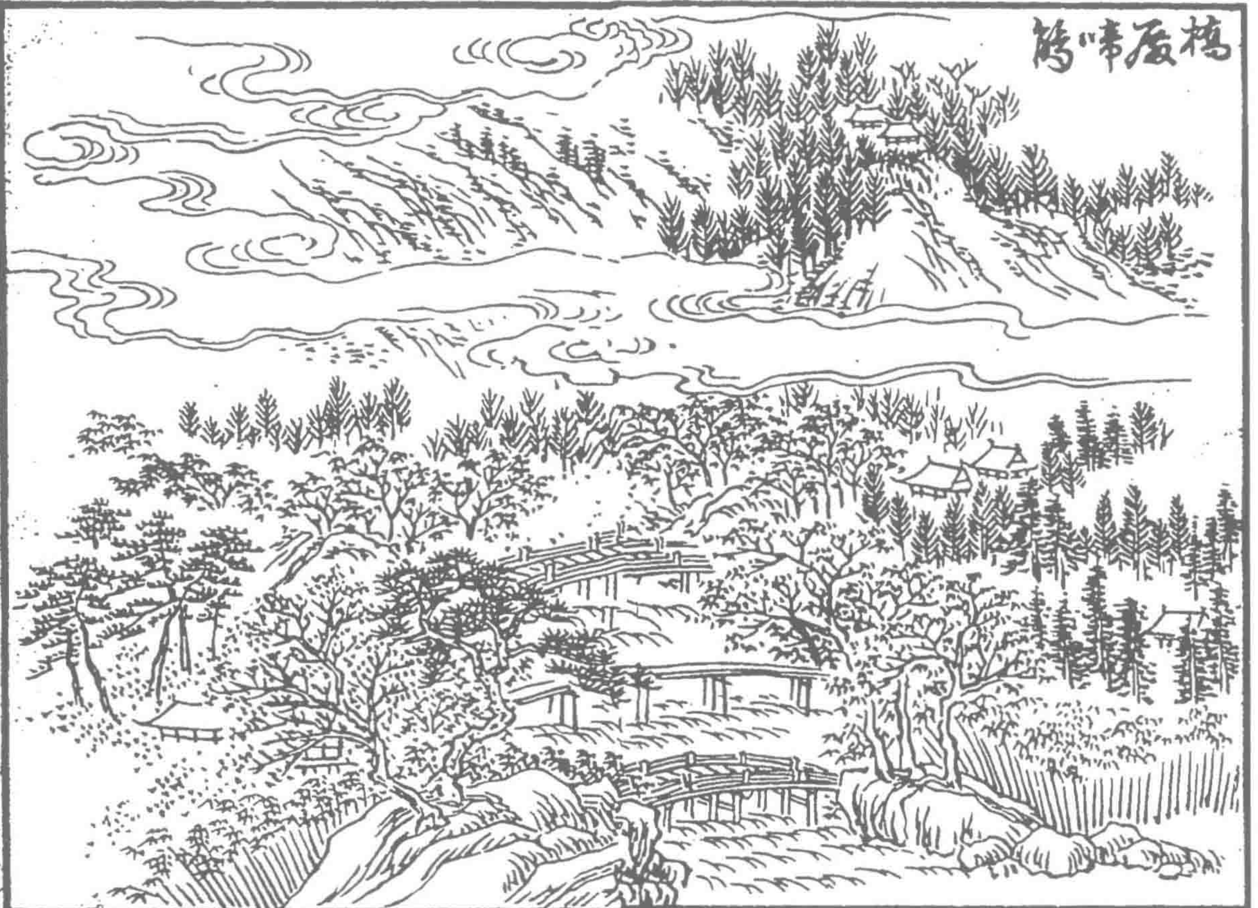
大洞水會

大洞。在犬上阪田兩郡界。距彥根十町餘。臨裏湖。高數町。石磴數百級。有天女祠。畫薝朱棟。翬飛輪奐。與金亀城相映照。山下有龍潭清涼二寺。堂宇巍然。寺前蘆荻連浦。水禽成群。與漁歌櫓聲呼應于淡烟中。風致可畫也。

谷云。予彥根人也。居距大洞數町。每晨夕登眺。以領其勝。後東徙西遷。不到數十年矣。及讀此記。覺鷗鷺待我之久。

江云。余亡兄梅泉喜此地。暇日則必腰一瓢以遊焉。余少時屢陪從。維舟蘆葦叢中。吹火温酒。賦詩極歡。今讀此篇。追憶往事。悵然久之。

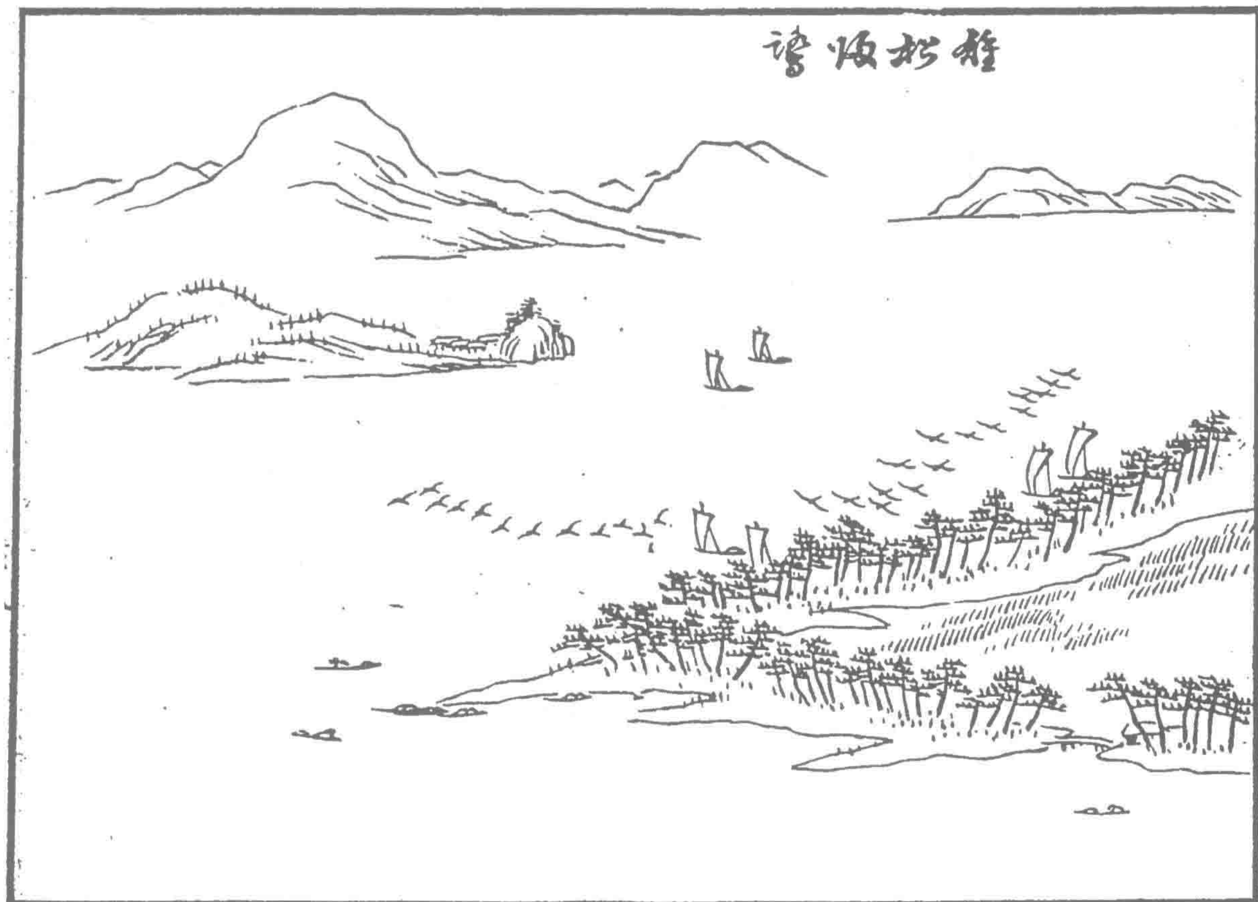
中云。余亦嘗記彥根近傍可游之地。以大洞為勝。京都東山。而畫薝朱棟。漸屬荒廢。實為可惜。



橋殿啼鵑

橋殿。在滋賀郡阪本邨日吉祠傍。距大津西北二里也。老杉古檜。蓊然蔽溪山。幽暗深奥。尤宜於聽鵑。遠近相喚。有千聲一飛之概。神祠佛宇。隱見樹間。溪流一帶。號大宮川。源發于比叡山。紆徐流注。潺潺然。淙淙然。有三大石橋架焉。溪上多楓樹。霜後秋色亦可觀。

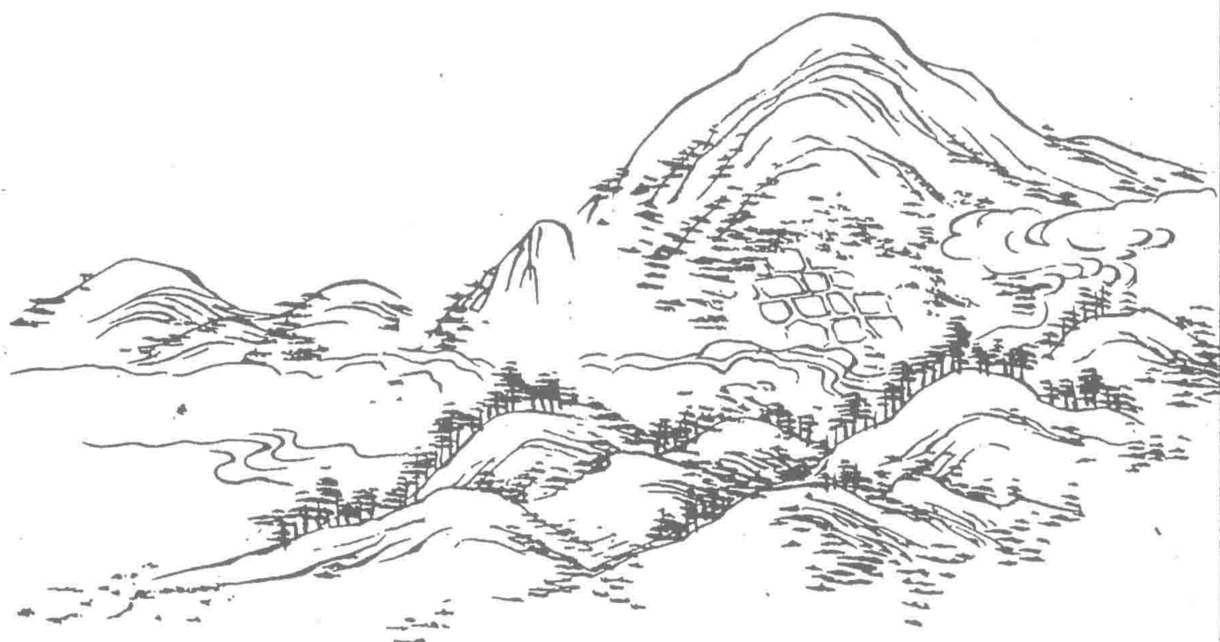
谷云。此地亦宜避暑。



雄松歸鷺

雄松崎。又稱赤松崎。屬滋賀郡南小松村。有小湖。東西約七町。南北十町許。周回一里。産蓴味極甘美。沙堤包之。以界斷太湖。砂白水綠。纖鱗可數。堤上多松。翠色如染。幹皆赤鱗。或屈蟠。或怒攫。或欹或偃。沖嶼穩卧波上。仙行峰秀峙雲間。夕陽將沒。風波漸收。白鷺數千。南北群歸。如雪片舞碧空。

中云。蓴美既食之。如其勝。未能目擊之可恨。



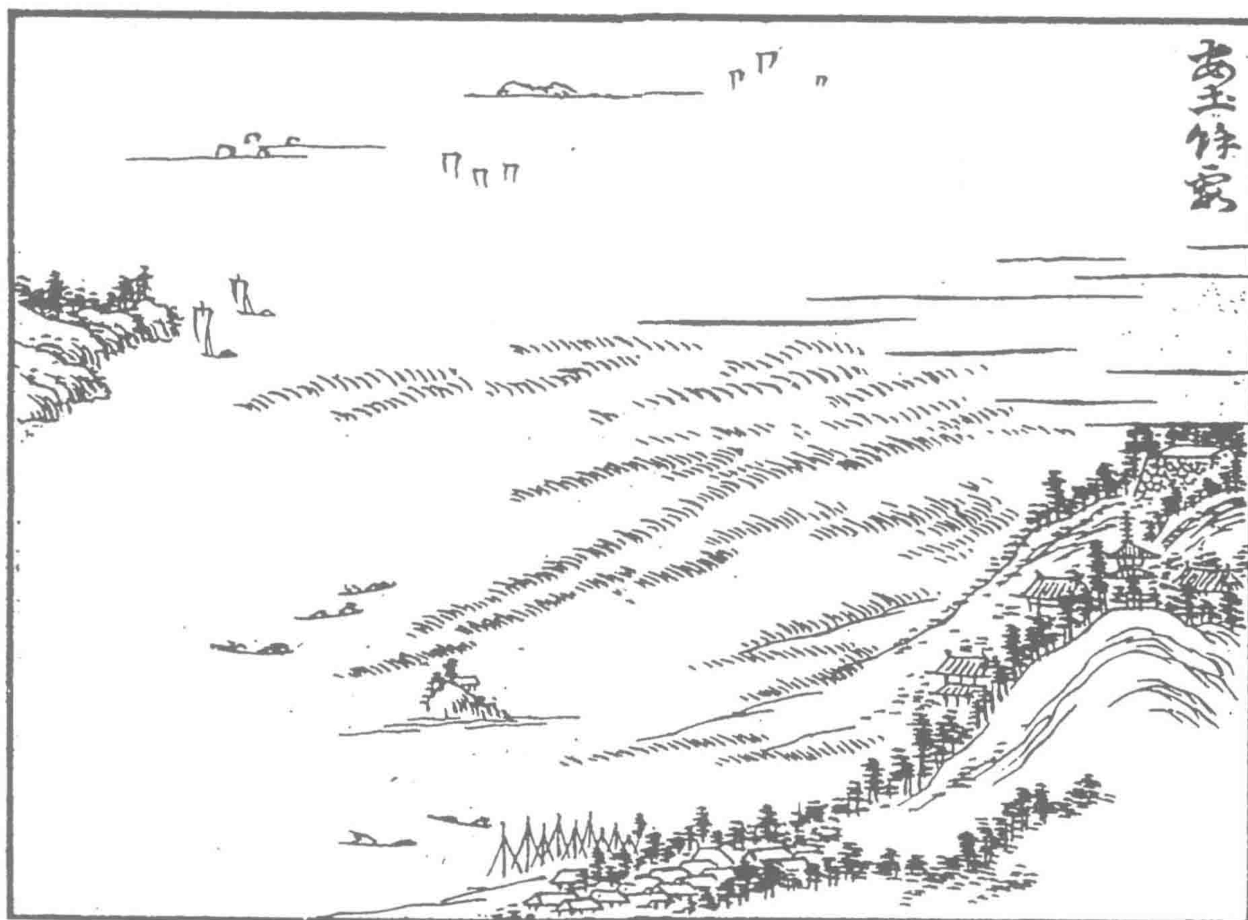
谷云。予曾秉秋晴上絶巔。望冨峰於東北天際。其大如所謂白扇倒懸。

膽吹早雪

膽吹山。或作伊吹山。在阪田郡。直徑二里餘。峰頭望見駿之冨士。信之御岳。加之白山。越之立山等。往昔役優婆塞。三朱沙門。行基等。練行之地云。山頂方四町許。有池方可六丈。側有石室。安佛像。古有堂宇。今不復存。有千仞巖懸一條瀑。有自然泉。清洌可掬。山腹掎卜治原。蓬艸叢生。不雜他種。世所稱伊吹艾者。蓋採諸此也。此山居本邦七高山之一。而為江州四高山之冠。巋然秀出於七十二峰。秋際已戴雪一角。衝天。如玉簪插碧霄。

中云。膽吹在七十二峰中最高。近江人物。誰與之比肩者。吾不得不推蒲生氏鄉中江藤樹。而今則亡。

石云。可以揭藁矣。江云。伊吹山頂降雪最早。已見微白。而後始及下方。余少時在鄉里所目擊。



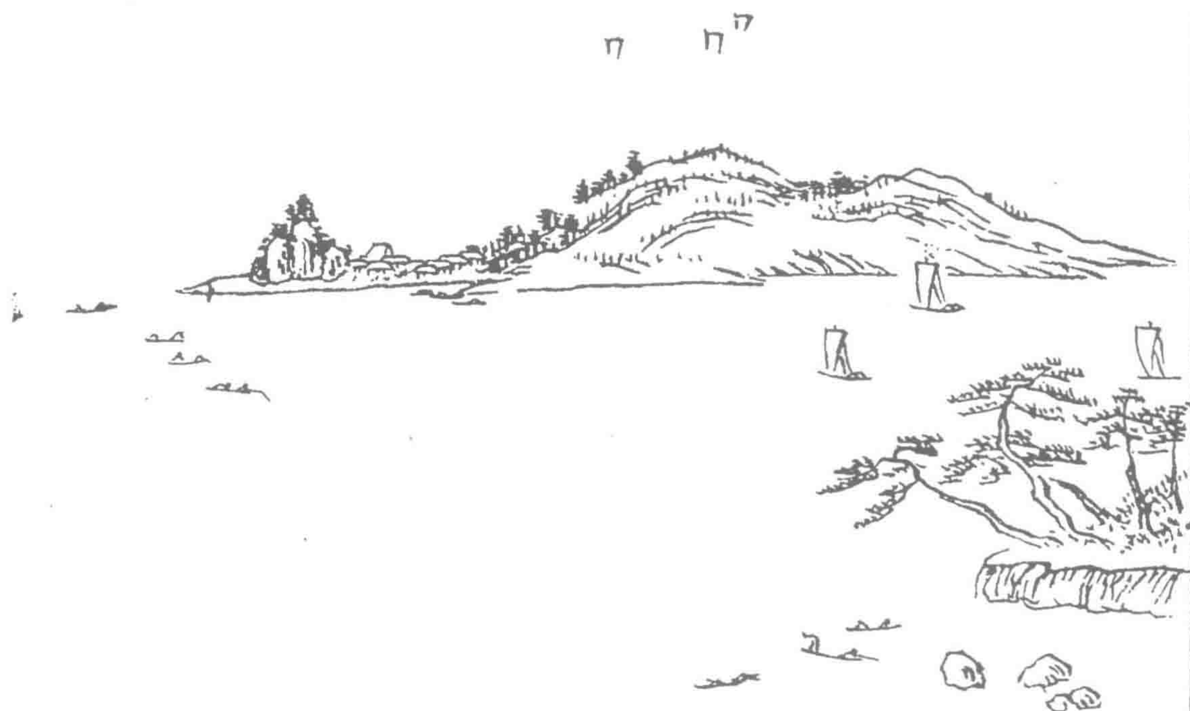
安土餘霞

安土山。在蒲生郡。距八幡一里。山勢蟠屈周約二里餘。東隣觀音山。西北臨湖。山即織田氏城址也。有寺號總見寺。天正中。城陷後。僧正仲者。所創焉。佛堂浮圖樓閣僧房。點綴林際。麗妍如畫。夕、日、已、傾、光、彩、四、射、山、霞、與、水、烟、相、接、群、山、欲、浮。据頂眺望幡山突拔。奥嶋偃蹇。下多蘆洲。屈曲似盤

龍。洲嘴與伊崎山相接。其間僅通一帆往来洲內成小湖。外則太湖瀰漫。竹嶼白石隱見波間。舟木崎左連。膽吹峰右聳。望湖之勝。亞於磨鍼嶺。

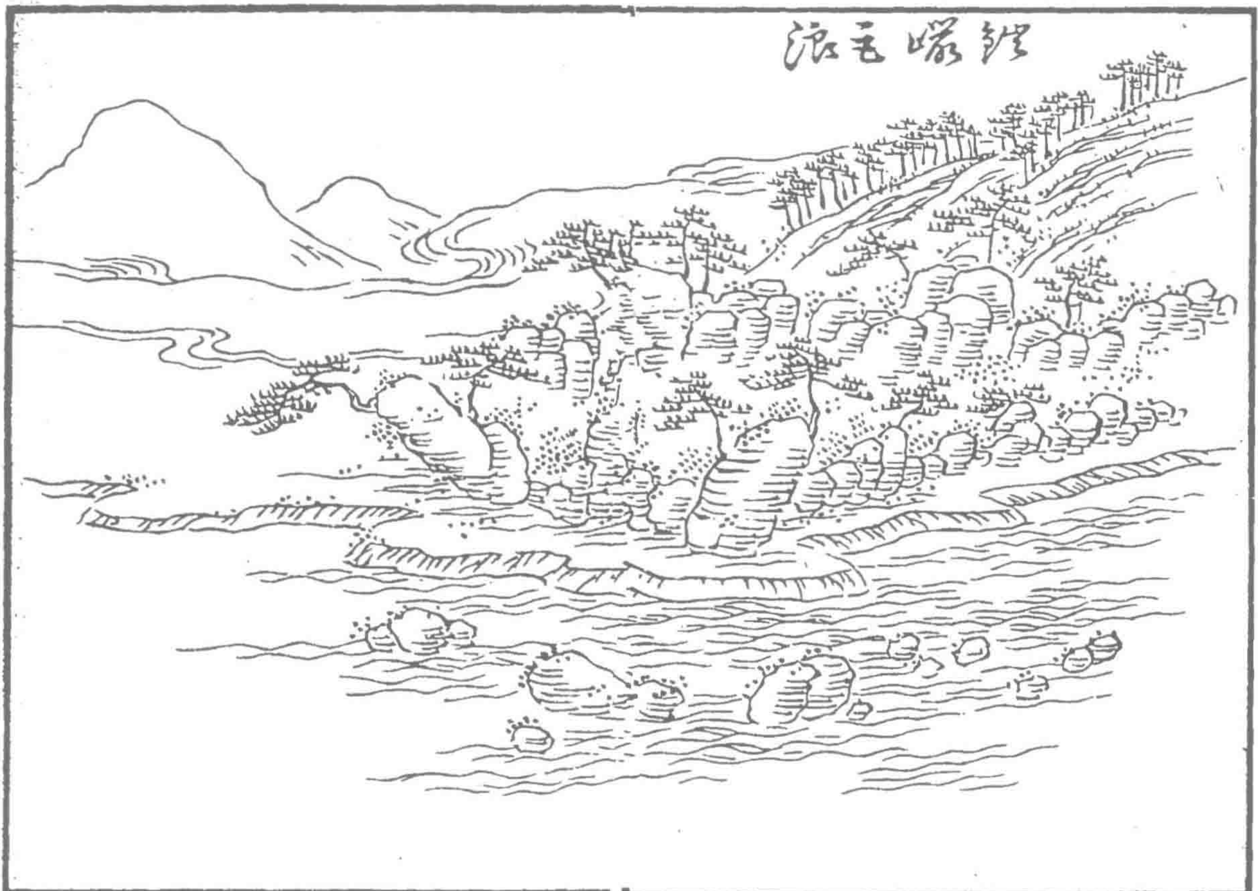
石云。文則踰鍼嶺數等。

中云。織田右府。城此者。蓋在防上杉謙信之入京。然豐臣秀次亦欲城八幡舞鶴山。然則此際形勝。自足霸于一方。而如其勝槩。近畿不多有也。



沖嶼微燈

沖嶼。屬蒲生郡。為湖中一嶼。東西狹南北廣。周圍二里餘。嶼成二山。北大南小。堆沙接其間。容如卧牛。西向雄松崎。南對水莖岡。東與長命山。相隔一里許。亦湖中之一小蓬嶋也。舟帆之往來於大津長濵者。必取路於此間。嶋中民戶數十。皆業漁。每夜漁燈數點。浮細波。望之如小星在東。中云沖奥二嶼有村落。而奥較近陸地。如沖者。實可謂一蓬嶋也。

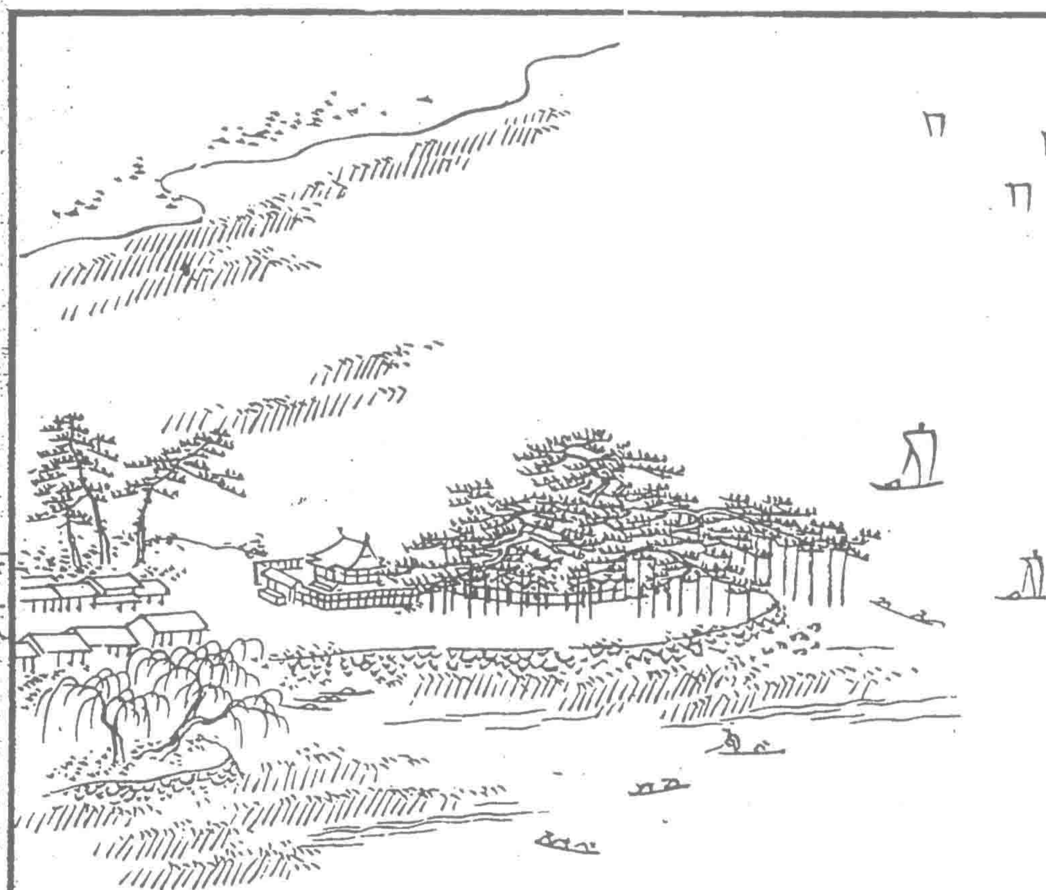


鎧巖巨浪

鎧嵒。在滋賀郡北小松鵜川兩邨間。巖石欹倚。有欲崩壓者。有欲墜落者。有如橫裂者。有如直拆者。其色淡赭。橫理成紋。巨浪拍岈、觸石、吞吐、騰沫、殆數丈。有路一綫。負崖、沿湖、屈曲、纔通。過者必奔。俗稱親不知子不知。蓋謂其危險也。

谷云。風水之文到此亦一改觀。

中云。一讀驚奇。再讀驚險。湖汀亦有此奇險處。



中云。風帆波聲二句簡而盡。

唐崎松影

唐崎。或作韓崎辛崎。地屬滋賀郡下阪本郡距大津一里餘。磯上有一大松。志賀朝所植。而今所在者。天正年間再栽云。復成巨幹。々圍三丈餘。枝蔓葉茂。而樹不甚高。偃臥盖水。東西三十步餘。南北可四十步。可庇數百人。崎磯斗出湖中。故宜賞月。宜聽雨。風帆送迎松影中。波聲與松籟相和。殊有清曠之致。

谷云。予嘗遊碕。驟雨適至。即走避於松下小半時。而衣袂不濕。可見其葉蔭之茂盛也。

石云。松得此品藻。殊增價格。五大夫之爵。何足歆羨。

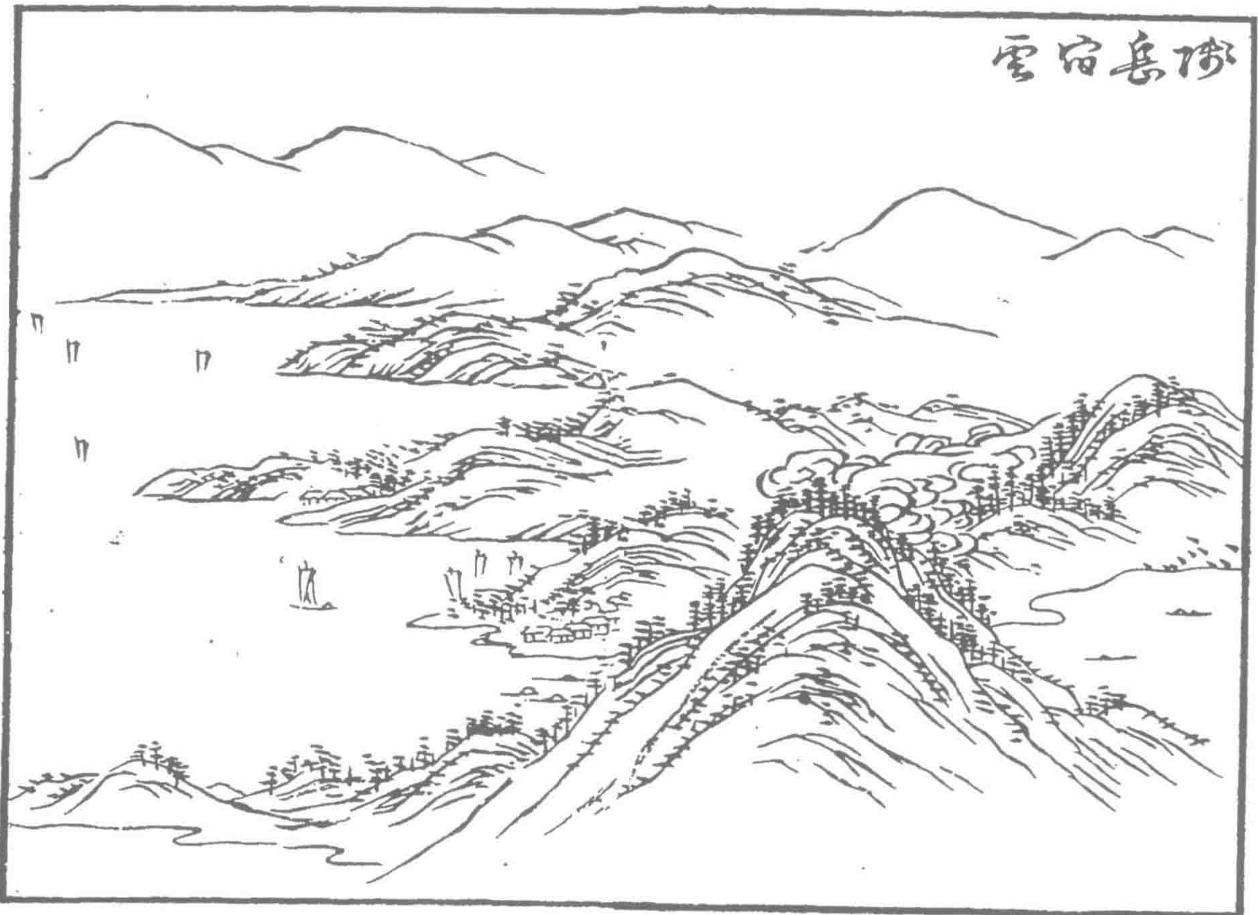


谷云。有東坡不如金山去清風半帆耳之想。

笙嶋波音

竹生嶋。一作笙嶋。笙即竹生之併字也。屬淺井郡。距早崎二里。海津今津各三里。嶋周田約二十町餘。四面削壁。無處泊舟。但東南有一小灣。可容小舟。嶋中竹樹雜生。鷺鸞群棲。粲如著花。有寺號寶嚴寺。天平三年。僧行基所創焉。有大悲閣。及天女祠。寺中多藏古寫經等。有空海求法請来目錄。楷法端正。墨光如漆。山頂冨眺望。東南則金亀城雉白堊映日。竹嶼白石隱見波間。沖嶼如卧牛。白髭如象鼻。舟木如長蛇。北則大碕旭山等。皆在眸中。嶋之沿岈有洞。可容二三人。月清。風輕。細波拍岸。自然之宮商也。又有小嶋。距笙嶋五六十步。峭拔突立。高可十丈。嵒頭有小祠。俗稱維嶋。

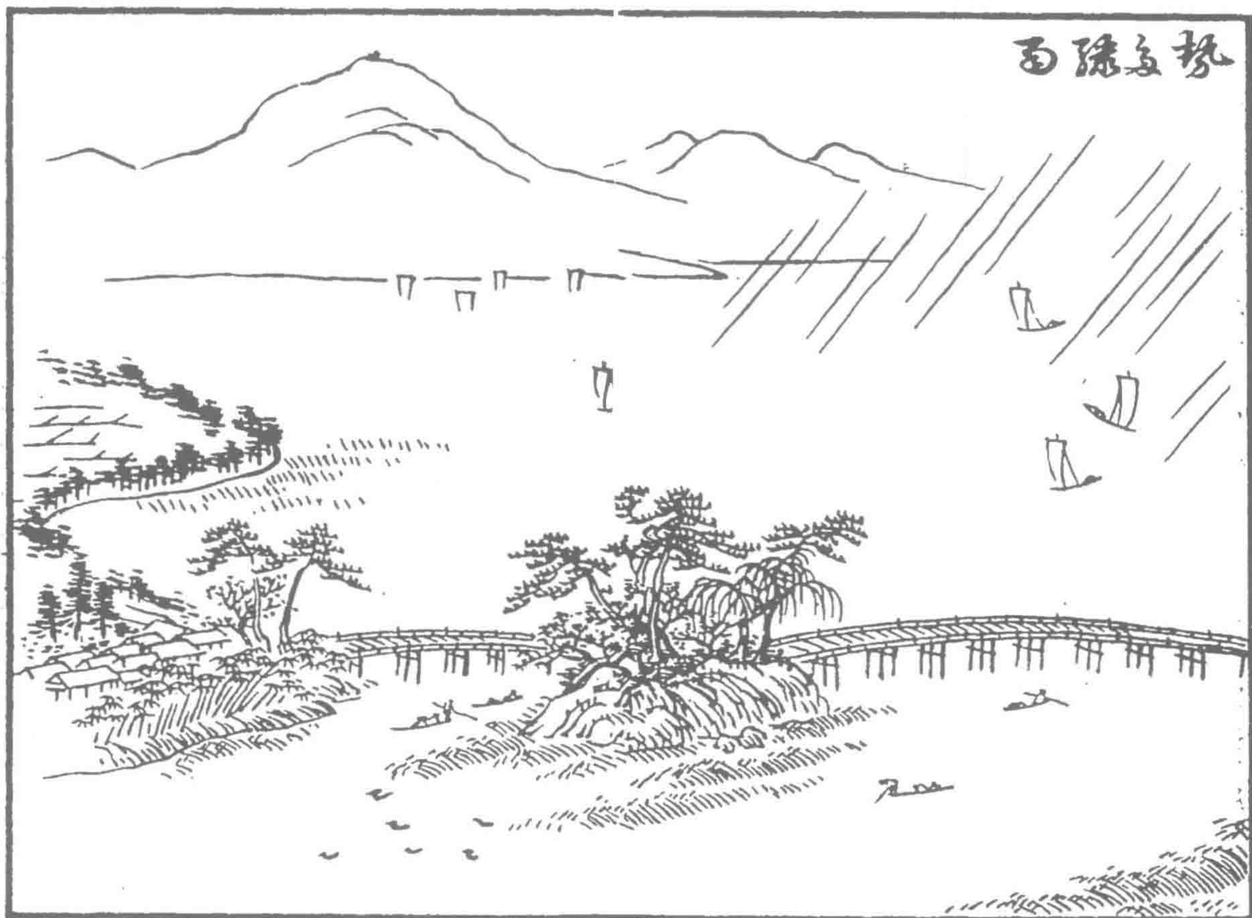
石云。點題輕妙。



賤岳宿雲

賤岳。在伊香郡。距飯浦一里。直徑十町許。即豐臣柴田之戰跡也。山不甚大而峻。當時苦戰可想焉。左右群山崢嶸。勢欲相擠。每有宿雲。夏時必興雷雨。觀之益可想見當時争雄之状也。南則太湖浩渺。北則餘湖一泓如盆池。亦壯觀也。

中云。余亦嘗登覧。想豐公自上下擊勢如風雨之状。佐久間。雖雄何能得支乎。其留陣于此者。可謂入死地不悟也。



石云。奇觀定應不讓望湖樓白雨之時。誰居嗣坡仙醉書之躅者。

勢多驟雨

勢多橋。中斷為二。以中嶼為界。北屬栗田郡。南屬滋賀郡。為東海道驛次。北橋長。南橋短。太湖之水。至此為一川。東南流注。水勢雄壯。為江州一大川焉。橋上西望則夕日懸台嶽。々即倒影于湖面。東望則石山蔚然蒼翠欲滴。驟雨起于山後。直傾瀉湖上。而兩橋隱見。白雨中。真奇觀也。

谷云。二橋古英雄之所爭戰。今仍儼然。見形勢之雄。

余生于湖北。少年東遊。遂以東為家。故於湖中勝槩。皆屬漠然。頃者西歸。適得此卷。將以為指南車。覽觀諸勝。受賜多矣。然咫尺而不辨。乞教于他邦之人。殊為可愧耳。文之鎔鍊至矣。諸子評論亦盡矣。耄老復何贅。

湖山小野愿

余好山水之游。々必有記。故亦好讀人遊記。況如此篇記淡海山水者。余每夕置酒。且讀且批。至快意之處。為傾數杯。酒盡而止。則呼枕一睡。夢亦在湖光山影中。古人以漢書為下物。漢書雖佳。未若此篇之喜我心之多也。

確堂中邨鼎五

跋

稲龍氏之言曰言者不知之
知者不言云々俄石道人之於
詩海二十四標既歷知焉

娛樂之矣曰詩品存非口右
而君廿四標不一云而可
也雖然世未知焉且獨知
非古者之家也豈未樂

焉且獨樂於仁者之所也
若人生于深山水之仁
智之人也不愚焉獨知而
獻樂於是乎焉廿四勝之

品題焉而標非歌之而繪
生於是乎有圖焉又錄
焉曰果以示人古出於其
不得已非人筆墨間世

也是故不爲畫乎畫唯
至矣不足文乎文唯其
寔夫唯其胸中之自然之
韻唯寔故有自然之妙

至自然見爲人所不自
知而世皆知之矣余不
可以無一言哉爲人某
之爲爲之是爲之乃耳

處氏之言不之作蘇曰坡
爲何當爲畫不然然等之
飛千言語出世四節之
文爲題云云者

不言雖云不無而吾不
後寫

湛園先生原津跋

明治廿五年四月二十日印刷
同　年同月廿七日出版

著作者　福岡縣平民　安國清
京都市下京區花屋町新町西入
東松屋町十二番地寄留

發行兼印刷者　京都府平民　北邨四郎兵衛
京都市上京區柳馬場御池下
八幡町七番地

塚本廣吉刻

鈴木鷲湖 畫 林信充 題詩

飛鳥山勝景

安政五年（一八五八）清音閣刻本

據安政五年（一八五八）

清音閣刻本

安政戊午鐫

飛鳥山勝景

清音閣藏梓

飛鳥山十二景詩并序

飛鳥山在武州豐島郡滝野川其為境也豁爾茫〻乎氣象萬状不可勝數也其東則遠之房總近〻平冡其南則遠之東叡近〻滌井西原其西則遠〻富士秩父近之板橋練間其北則遠之二荒筑波近〻王子及豊島川其餘則鵠臺中里隅田川瀧野川梶原村歷然在目下也是唯舉千之一二而已其左右則為官家游豫之地尚矣六七年前有命芟夷其荊棘削平丘阜并更栽櫻木千株既而其木長茂蓊鬱如雲今茲癸丑之春千株花木一時而開又

有
命凡百官僚日往而見之各莫不莅
恩而既醉也且夫庶人農工賈販之
徒亦相往来而樂也多莫不蒙周
文之澤也孟夏之月余與二三子偕
往而遊之則緑陰連雲平蕪似煙詩
景萬状在一瞬之間於是取其可稱
述者十二景而賦詩亦略而推之而
已恐未盡其善者也其詩如左

享保癸丑四月上澣日

國子祭酒朝散大夫林信充題



筑波茂陰　林信充

突兀筑波雲霧開晴明依
髣髴蓬萊深知　君德光
輝遍飛鳥山頭掩映来

田沼主殿頭

[illegible]

意行

秩父遠影

遠山繚繞晩風寒
影入西溪滿樹端
多少遊人歸去處
悠然又作一時看

[illegible]木春[illegible]

[illegible]

雪溪



瀧野川夕照

川水潺湲落照
中寒鴉飛盡望
無窮更知此地
桃源近流得残
花映碧空

松平傳次郎

[illegible]

[illegible]



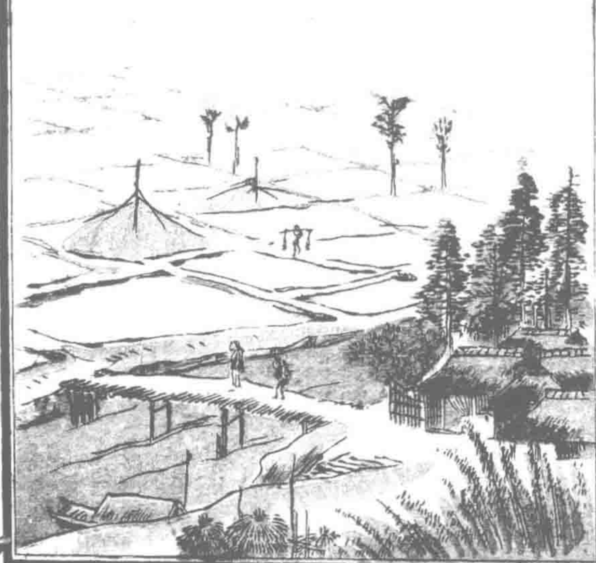
梶原村田家

郊路人煙野色
多農時餘樂有
高歌又看隣舎
相迎處社鼓聲
中載酒過

松植傳兵衛

[illegible]

知清





王子深樹

雲樹深々本欝中
巍然祠宇映蒼穹
百年知是有僊氣
鶴影聯翩日午風

[illegible]

耕成

[illegible]

平塚落雁

數行歸鴈下
浮雲遠影成
羣々望兮平
塚邨邊細流
水旅人馬上
最先聞

[illegible]

良時

[illegible]



鴻臺秋月

遠天雲盡月光新風露凓生入白蘋
前路東連碧流影清輝千里送行人

成島道筑

作廼

[illegible]



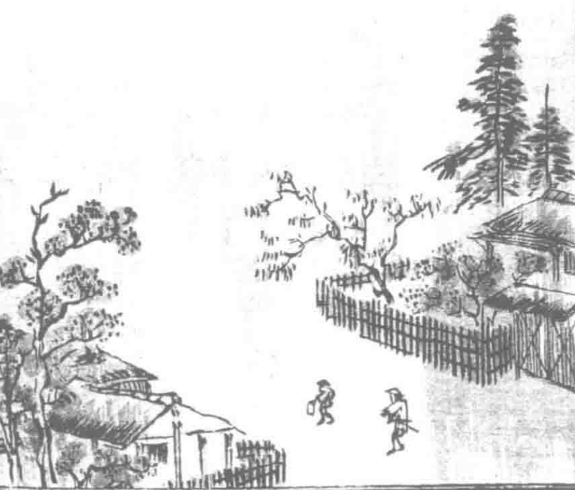
滌井夜雨

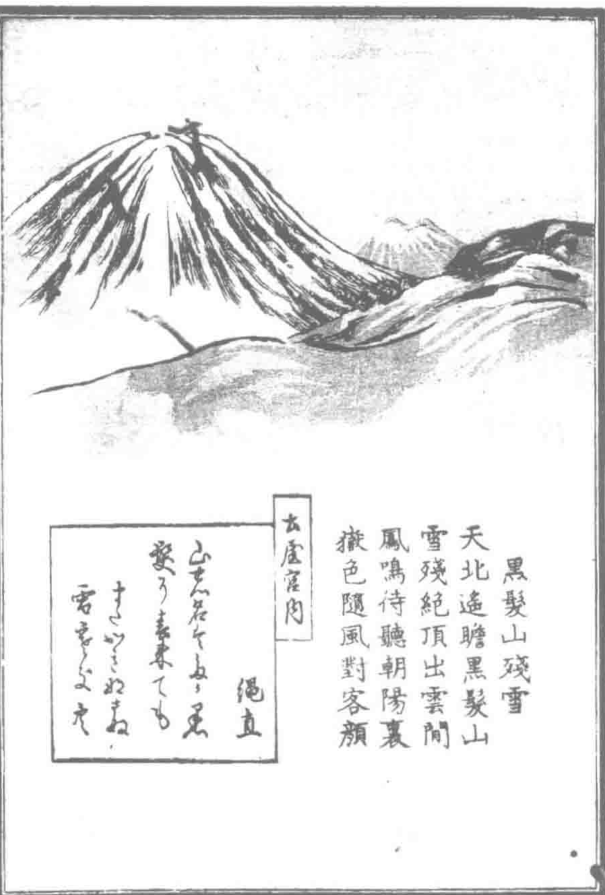
平蕪斜接大原
邊徹雨夜來更
可憐明月迷窮
千里目農郊幾
處作晴烟

[illegible]

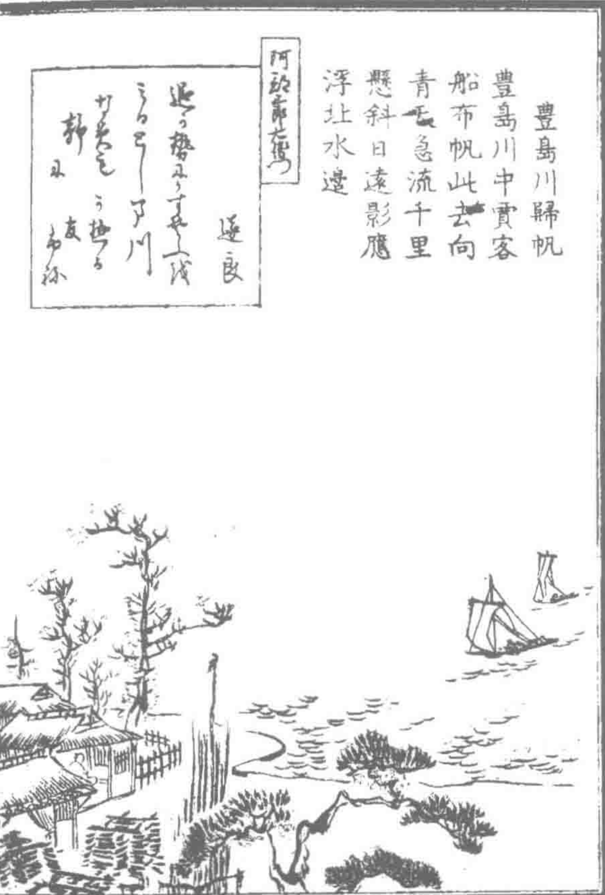
利植

[illegible]




黒髪山殘雪
天北遙瞻黒髪山
雪殘絶頂出雲間
風鳴待聽朝陽裏
撤色隨風對客顔


西原晴嵐
遠望西原緑水開
晴嵐幾處擁林来
可憐駕馬吏翔集
人亦岳鞭信馬回


豊島川歸帆
豊島川中貫客
船布帆此去向
青玉急流千里
懸斜日遠影隱
浮扯水邊


中里晩鐘
梵寺鐘鳴起晩雲郊原十
里各應聞更将牛背牧童
笛併入林風不可今

又題一律結名
園之餘情云
東遊聞奇景村老
語今明餘引萬年
樹更栽千本櫻江
山知聖代禽鳥唱
昇平爲愛林巒美
遠程豈厭行
林信充誌

七

飛鳥山碑

惟蓁國之鎭曰熊埜之山有神曰熊埜之神實　伊弉冊尊也紀祀
伊弉諾尊事解王子武彌之三神事解別爲飛島之祠三狐神副爲
語有神史中別錄藏焉誌曰在昔元亨中武之豐島郡豐島氏甾兆
豐島郡爲熊埜神座地之曰王子山之曰飛島蓋自此始也熊埜之
川曰音無川流象爲爾來四百有祀土人以昔祀之如一日奎祀典
曰熊埜之神春以花祀鼓之次之旗之歌之舞之令之王子祀以鼓
吹旗歌舞者其來也尚矣而世之顯祠字流壞風日不敢封野寵示
中有司奉　命祇飾祠事乃閔故北新之遂遷飛鳥祠於木祠飛鳥
之山有名無祠昔由島三狐祠游在北叢云今詠丁巳春三月己亥
我　后省畊之次規土封飛島之山獨給祠無所與永屬奉祠者衛
等旅奉祠乃蹈舞捧手警首敬凡之曰於樓我　后事神以識治人
以明措則凡祀則行以謀樂部爲神之鄉神其不歆明德惟馨初飛
鳥之山蓬顆蘚瓖雉鬼徑馬　專駕之肇從紀蕃來也有司行邑吏
密谿谷道泉瀑嚳皓磬碉洄而旋乃植花木數千株内成游觀外使
萬莚層設數千人二紀之文纓大爲美土宜木亦爲林每春嘗蠲壇
馬豈惟種藷種乎祀典所謂春以花祀者寘梁會之奇非祁神亦
國家之符也遂鑱于石以爲經銘曰　綿邈洪流有神明國永附
峯紀東土是祀明明我　后欽封其域神之者祜豐浪萬不來支
繁衍其蘐豈德八埏懷仁神禄饗德于家繼絶之古是掌
元文丁巳之秋
奉祠金輪寺住持權大僧都宥衛立
東都圖書府主事鳴鳳卿代撰并書

裏

飛鳥山四至牓示
自艮至坤七十三歩
自巽至乾二百二歩
加藤忠郁刻

飛鳥山十二景倭歌跋

飛鳥山。距東都郊行六七里。其爲地也。周回數百千歩。登斯山也。則不啻一瞬千里。遠山長江郊野田里。碁布星列。至若。春則櫻花燦爛白雲埋山。夏則綠陰納凉。薫風透衣。秋則紅葉飄零錦片滿地。冬則千樹枯瘦。松篁增色。可謂四美具矣。若夫雨奇晴好之佳興。四時風雲之變態。不知其幾千狀。寔武州之絶境也。來往東都者。必無不遊觀斯勝者。騒人唫客。述志之所之。未曾有箝口而歸也。白丁亦曰佳哉山矣。癸丑之夏。國子祭酒赤城林先生。取十二景作絶句以稱述之。皆是一時之所見也。於乎。山上之景何止乎茲哉。況景中之風致哉。誰得而盡其美焉。元文二年。圖書府主事鳴鳳卿。撰飛鳥山碑。刻著于石。而後斯勝益彰。方今芥寸草。遊于斯。惟以倭歌之無題咏。爲遺憾。遂使東都之善倭歌者大夫士庶凡十二人。各倭歌一首咏之。亦請大中大夫捨遺補闕藤君。資親書其題於短册。藏諸熊野祠。共垂于無窮。亦不奇乎。嘗聞本朝邃古。陽神陰神之唱和者。倭歌之權輿也。爾來詞花言葉。愈出愈茂。彼詞所謂二神是也。神如爲靈。必有感乎其志。屬余以記其事。讀林祭酒十二景詩序。鳴鳳卿飛鳥山碑。則業已盡。余何費詞。然後乃今可以觀。國家承平文物之盛。而東都風月之有人也。美矣哉。是爲跋。

元文己未秋九月穀旦

魯庵龍常義友賢甫識

飛鳥山之勝略約得十二名享保中國子祭酒杰城林公名有詩蔵之我寺元文中艾寸草者憾其有詩而無和歌也使都下冠帶白衣之徒詠之龍嵜友賢為之跋於是前住宥衛命畫工寫其景以剞之而令書肆某上梓以公諸世唯林公之詩則不刻蓋以秘蔵之不敢輙示人也然歴年之久書肆烏有鏤版亦從而佚矣先師宥欣將併以之詩而改鐫之未果而崦嵫予欲繼其志者有年矣頃日熊坂蘭齋乃能代予任其勞且取其他題詠及鳴島先生所撰碑文校訂命工彫刻告竣丹青燦然文字明了以諸舊本則光黻殆加焉文矣予喜先師之志有成也為記其由者如此

安政戊午蒲月

金輪寺第十二世宥秘識

高橋桂書

跋

飛鳥山自其爲游宴眺望之地。騷客韻士之輩。唫咏圖畫以賞之焉。而如享保間。祭酒林公十二景詩。并序文。元文間鳴鳳卿先生之碑銘。及諸彥國歌。狩野某圖最盛者也。蓋山係于金輪寺管轄。故當時住持宥衛上人盡取秘藏之。但碑立之山。圖歌上之梓。雖然一秘不公。一忽焉爲烏有。故世唯知碑而無知其他矣。及前住持宥欣上人慨然惜之。遂欲復盡併刻以公之。問事於建。然上人仙化不果。今之宥秘上人又命建。欲以繼志。嗚呼夜光遺相玉者而卒不暗者。於是乎有焉。可不謂快事乎。建嘗大蒙知於二上人。因有此命也。刻成附事于末。

安政四年初冬中澣

松前　蘭齋熊坂建謹識

附録

飛鳥山碑帖序

飛鳥山碑立都下傳稱焉事其所
代撰鳴陽德文名日隆盛爲之貴而又
其篆并筆楷高古絶無後世軽俊之
跡陽德亦不自克其所得已所自稱此
且有神助者也且碑體高大石理堅密
青瑩光潤信僅成奇美閲之陽德所在
碑之摹固詳其文則世論陽德矣
宥公遭遇萬古不朽然石不可將而
帖則將傳之萬國矣豈不亦盛哉
竊惟今時人之所好典厚成俗雅賞
瑜古固亦
昭代文德之化也乃此事雖小可以推知
其大宥公使人原余序余乃聲節
宥公好尚文雅亦爲陽德喜之其事
采擇獲之
德苑云故都人士賞觀其側如仍爲
摩而不可得雖墨寫王子金輪寺僧都
宥公有志於遠傳之世乃一二寺坊之士
戮力於此爲之打若干本且装作帖善
蔵以待其人者之需也其帖亦大佐寺
觀之古墨本無異於是都之益於傳
稱焉蓋夫飛鳥山隷王子境宥公莫
如此

元文三年春王正月

南郭服元喬

石齋縮臨

飛鳥山碑帖跋

此碑也天或假之筆耶其文煥然固矣何其書之古雅出歸徳手指進乎歸徳矣乃為一片石堪共語豈唯二三兄弟乎且也飛鳥山璽時邀矣孰識所由今其探墜緒明如觀火歸徳自以為神助也然而無有乎爾則無有乎爾管子不云乎思之思之神其通之歸徳有焉抑精氣之致盛云延宥公繕寫為帖子還併之序余亦不可默聊共頌盛事敢一言于其後

元文戊午之春

江忠囿

石齋縮臨

中島棕隱　著

鴨東四時雜詞

文化十三年（一八一六）序刊本

據文化十三年（一八一六）
序刊本影印

鴨東四時雜詞

鴨東四時雜词序

秦淮風月。西湖煙水。彼土文人。以多少綺辭。抒其情景者。歷〻可觀矣。我鴨東之勝。媲美於彼。繁華風流。亦足以誇盛世之樂境。然而無竹枝词曲之可唱。無煙華録志之可傳。人亦褒然不問。取關其故。何也。稅近文士。拘〻予毀譽之間。不能放膽以做此等好事。雖有一二染指者。猶自守其套陳〻腐〻。竟非切于事情之警词。豈不慊予。畫餅居士。鼻東禊咏一百廿首。其作出于少年慷慨之餘。著眼本在人之所不得言。乃奮而闢此香色界。取以字〻奇峻。句句流麗。於行樂冶遊之情態。毫末莫所不盡。而其巧緻亦在假彼土之事類而敘之。手段可謂高矣。甲戌歲刻其半。已行于世。夫〻嘗一臠。不得不思全鼎。但以其撰係狹邪。人或病居士。居士卓犖雖不介意。而同社每替為和辭之泣。有某生。携其原稿于長崎。以示清客。清客一見大稱曰。茲詩不啻格調超逸。可親攬倭土都會之時樣

者莫過焉。特憾殊俗事状。吾儕推知其概
至詩中有寓意之秘玅。則不能不搔隔靴
之痒矣。某生為寄書于居士。勸毎詩自注
之。居士感其言。再潤色之。注成。達長崎之
日。某生罹病。故于客寓。其事不遂而止。今
玆栖原綾洲生。偶遊京師訪居士。談及于
此。大以為可惜。懇請其稿。更加考据若干條。
繕修殫力。終能成此美本也。嗚呼居士奇
筆。於是得見其全。我鼎東之勝。亦足以增
光彩。獨柰此等撰。筆〻皆脂香粉氣。必知
不免輕佻淫靡之誚。其取不免。即是采以
為奇筆歟。要取例於彼。以為一種板橋雜
記。則居士亦固不恥為今日之余澹心矣。

文政九年丙戌花朝峨眉山人題

鴨東四時雜詞序

人生幾何魏帝當歌而慷慨。木尚如此桓公撫柳而留
連。黄鵠翼成而腸斷。青衫涙下而魂消。雖彼實大度龍
顔隆準然。所未免。況僕本恨人。蒲質柳容。何以能堪。庾
子山憔悴而哀江南。潘安仁悲嗟而感秋興。北徴瑶臺
之女。青雀未通消息。南邀湘水之娥。水夷久絶微詞。明
月難圓。彩雲易散。空約菖蒲花開之日。徒看華表鶴歸
之時。伏惟帝畿之地。可謂天府之都。鼎麓東環。鴨河南
轉。雍容閒雅。挾琴之客比肩。香艷羣嬌。分帖之姬接袂。
何必峨眉之鍾秀於長卿。太白不唯濯錦之清流於卓
文。薛濤祇園廟頭。最知羅綺之叢。靈山寺畔。雅是神仙
所宅。臙脂村從昔而存。響屧廊於今尚在。金鎖瓊鋪。珠
簾繡箔。枇杷門畔。半扇微開。鸚鵡架前。低聲細語。緑錦
蔽泥之馬。鈿轂載菓之車。月殘風冷。嬌聲度曲。未終鴛
睡鴦眠。慣夢濕衾猶暖。我始東游。君方北走。壇上盟孤
獻雉。未修相見。江頭楓落。聞名已識其才。黠翠施紅。近
接王昌之宅。怨媚羞容。久攀宋玉之牆。鳳梭折齒。謝混
吟嘯何妨。綺席回頭。杜牧狂言忽發。競罪大觥。剪秋水
於雙眸。爭持半臂。削春葱於十指。於是擘魚箋於琥珀
之匣。揮象筆於珊瑚之架。詞皆窈窕。情悉綢繆。霏霏咳

唾明於珠玉。蠻觸鶯簧諧以宮商。窻左紅墻題字唱酬
可喜。梨園名部齊歌甲乙。足誇籠以碧紗裝之寶軸。開
時薰蘭麝之香。讀者嗽薔薇之露。勿譏異正始之音。又
當續元和之什。氷叩珠拌徐陵宮體自衰。艷濃綺麗韓
偓香奩頓盡。嗟情之何癡。而性之甚惑。雲繞陽臺離醒
而猶夢之時。雨淋劍閣縱死却如生之日。恍有惚無飄
來飄去爐上餘煙凄凉自滅。帳中殘影髣髴徐行。市頭
洗器臨邛之游已倦矣。棹下發謳汾水之感將生焉。今
也重繙。昨猶在目。阮氏夢春之句迺陳釋門懺悔之文
或似。窻也遠陬固陋之民。窮海魚蝦之族。敲牛叱犢萊

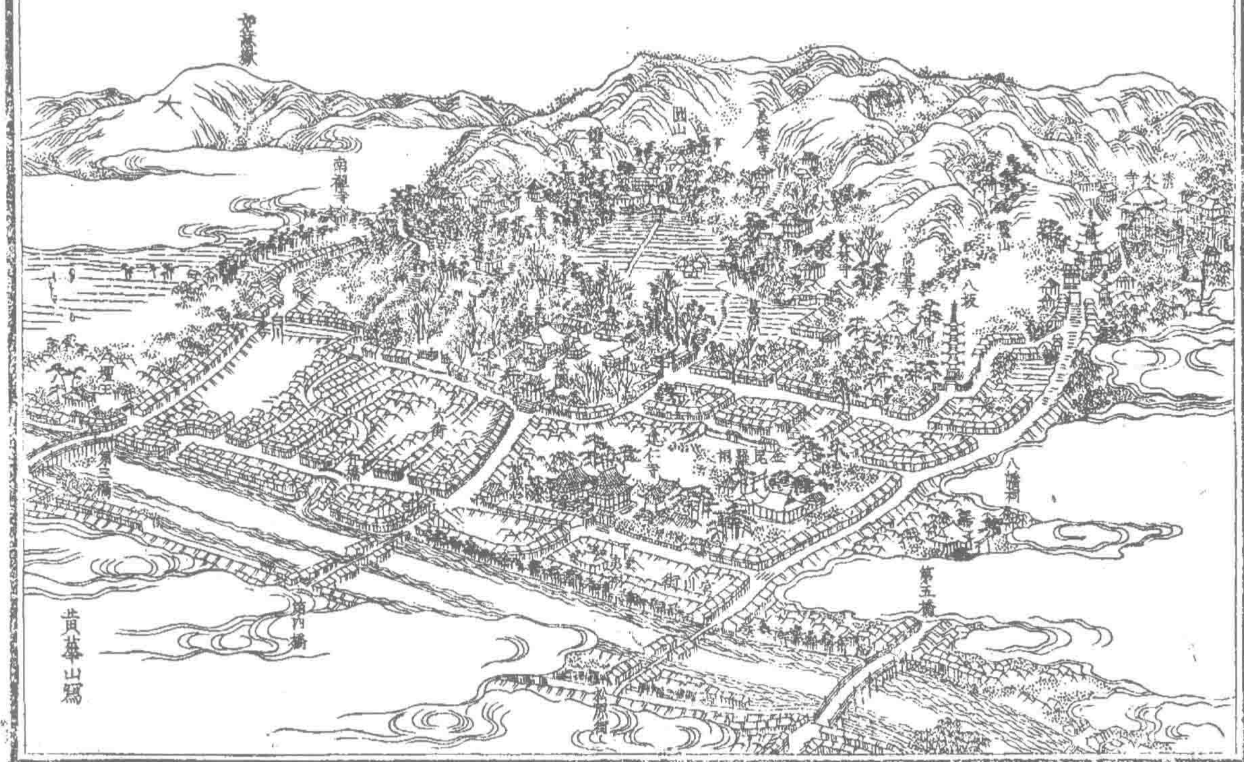
甲一畦。拖綳扳督蘆花牟渚。仰中州而路絕。望狂浪而
眼穿。爰授鱗素。以責蕪辭。固有同病相憂之誼。曾無殊
途按劍之猜。共立程門尺餘之雪。又分曾爪一瓣之香。
辭何敢固。技亦隨癢。漫叩兩端。叨敷數字。更想天涯淪
落之間。久依地角荒凉之處。黃蘆苦竹地同湓浦。芳草
落花景似江南。寧無商婦之歌。定有龜年之遇。請期他
日。以弘流傳。

文化十三年丙子春三月南豐竹田花竹幽窻主人撰

鴨東四時雜詞序

邦人賦竹枝體者。祗南海江南詞。爲其鼻祖。猶唐之有
劉夢得。近時狄貫池五山樹幟于江戶。賦湊川竹枝。其
名藉藉。關以東人以當今楊鐵崖稱之。一時才子靡然
嚮風。賦咏百出。有某竹枝某竹枝。莫論吉原之花。朝兩
國之夏晚。雖潮來銚子窮陬。悉裝飾其土風。以作我邦
虎邱秦淮矣。特京師山姸水明。花態柳情。別有一種婉
柔。諸境之俗萬萬不可及者也。豈可無竹枝詞乎。吾友
畫餅居士奇才子也。錦心繡腸。罵之京師文妖。其誰爲
不然。嘗賦鴨東詞若干首。與五山湊川竹枝同時而成。

當時已膾炙人口。五山編詩話。亦採其二三首。以爲話
資。世之所知也。頃日居士捜閱舊稿。參訂斟酌。總爲六
十五首。以謂輕佻浮泛之語。不可入正集。因別作一冊。
予只將博同臭味之一笑。社弟癡蜆遂請上梓。徵序于
余。余細翫其語。悉皆寫出銷金鍋中之秘趣。可說不可
說之事。言外有意。意外有味。讀之者讀了。後掩卷瞑目。
而始會其妙矣。此編之出。不啻爲之貴。併增鴨東花
柳之聲價。寔不媿爲昇平風調也。吾願學五色絹箋。倣
洛神賦小楷錄之。裝以雲鶯縹帶。更桂之鴨干水樓。口
授絕代名娃。風清月白夜相歌。以響多少被底鴛鴦蘭



薰透骨雲闌雨容一顰一笑恍乎不知所歸依之蕩神亦一奇事矣蓋居士少年不拘名節偎紅倚翠豪誕自分近棲遲林下日欲寡過而翰墨業障未除動則感想贖昔幻夢發此懺悔也凡人當其夢時誰知其爲夢及夢始覺方始悟是夢居士既悟夢之爲夢名亦自此清遠矣

文化十一年甲戌中秋前一夕古漁鷗史題於大和橋北春夢樓

我邦地名雅馴者十居一二是以近時操觚士動輒命其私號強欲施之詞藻支離附會至不辨是爲何處可笑之甚畫餅居士詩精審不苟如此諸篇地名一由古今相沿者華頂鷲嶺祇園葛原之類是也其他不可直指道者運思婉辭無不中肯綮人讀其詩便知爲其地亦作家老手段也然鄙邊隔域未及觀京華者播傳吟誦徒服其警拔而至勝概區別之不可審則不能無所憾因另揭略圖一張爲之指南我輩區區婆心觀者不斥其贅幸甚

綾州山人識

鴨東四時雜詞

畫餅居士著

綾洲山人增注

彝堂野夫挍閲

水明山媚夾名區一帶煙嵐入畫圖也是銷金鍋上景
不妨呼作小西湖

自注云鴨水本稱賀茂川北出自雲畑經水上村通
上下賀茂其間有石川蟬小川等名而到糺林之南
與高野川合直流過第二第三橋當大和橋之西與
白川合又經第四第五第七小枝等諸橋與桂川合
歷澱橋出浪華入于海○七修類藁云吾杭西湖盛
起於唐至南宋建都則游人士女畫舫笙歌日費萬
錢盛之至矣時人目爲銷金鍋相傳到今然未見其
出處也昨見一竹枝詞元人上饒熊進德所作乃知
果有此語詞云銷金鍋邊瑪瑙坡爭似儂家春最多
蝴蝶滿園飛不去好花紅到剪春羅

不著荷花不受舟樓樓住在岸東頭只應萬斛臙脂水
瀉作潺潺一道流

鴨水古來不用舟楫以深淺涸漲隨時月之雨暘洲
沚亦不定也○徐哲西湖竹枝詞云賸拚萬斛臙脂
水瀉向銀河一帶秋

板橋以北石橋南箇箇簾櫳水影含紅袖倚春殊有色
起樓何問背煙嵐

第四橋凡二中洲平廣東西近岸處各有板橋共稱
四條橋 鴨水東隄古稱大和大路到和州之道也
今稱繩手而第三第四橋之間白川自東北來入鴨
水街路中斷架石橋因亦稱大和橋○李商隱雜纂
殺風景之一云背山起樓

平撫群巒不藉笻嵐光一一撲眉濃前人道破全都景
軟翠連東有臥容

鴨東諸山陂陀列翠絕無峻峭之狀相傳云其峯有
三十六朵望之于第四橋左右鬱然撲眉優美不可
言 元祿年間淡州人服部嵐雪以俳諧鳴于世東
山譬詞膾炙人口

已過芳草碧波瀕漸入六街妖麗春不向茲間醉煙月
何稱都下韻流人

鴨東煙華祇園廟下通衢爲最即是祇園街其北有
六街次之又板橋南北沿岸之諸樓各盛矣○以上
五首賦鴨水第四橋景致

華山雪盡萬松高韶吹徐徐弄碧濤名刹例修開士忌

上番春事屬方袍

華頂山智恩院古屬延暦寺。元亨釋書云。釋源空。承安四年。出黒谷居洛東吉水。盛說專修念佛。及圓頓菩薩大戒。所謂吉水院即是。又稱大谷寺。爾後以源空爲開祖。每歳正月。自十九日至廿五日。僧徒大張法筵。修其忌辰。○杜甫詩云。會須上番看成竹。又元稹詩云。梅憐上番驚。因依上番樓。皆從去聲。然楊萬里詩云。出城趁月上番涼。今從楊作平聲。　釋法照詩云。避暑著方袍。注云。僧迦闍衣爲方袍。又楊巨六帖補云。高僧法肇師。制四論。呈劉遺民。遺民歎曰。不意方袍復有平叔。

寶幡高映半天霞一吼華鯨度霧際皂帽莎芻紛作禮
怔於木末亂飛鴉

本院有巨鐘。高一丈三尺。周圍二丈八尺。厚九寸六分。日常不撞打。唯於此法會七日間用之。○字彙云。海岸有獸名。蒲牢。聲如鐘。而性畏鯨。鯨躍輒鳴。故鑄鐘作蒲牢形。其上爲鯨形。又班固東都賦。發鯨魚鏗華鐘。注云。謂刻作鯨魚形也。　善覺要覽云。僧曰莎芻。莎芻草名。體性柔軟。引蔓旁布。馨香遠聞。不背日光。故以喩出家人。

香火爭來訂勝因散投十地弄芳辰鞭絲帽影春如錦
多是佛邊隨喜人

都下士女。相競觀此法會。袪服靚粧。以鬪其美。爲例習。○劉禹錫詩云。香火有因緣。注陸法和云。與梁元帝於空王寺佛前。訂香火因緣。　決定經云。不舍初地。入于二地。乃至十地。今假作十方之義。王維詩云。竹徑從初地。此其例也。　司空圖詩云。應是佛邊猶怕鬧。　以上三首。賦知恩院法會。

輕暖輕寒二月時櫻花最早是垂絲欲知春色繫情處
先問福庭纖艶枝

知恩院中櫻花甚多。佛堂前垂枝櫻最早發花。○福庭猶福地。溫庭筠詩云。福庭回首莫相忘。

杏園桃塢自相隣看遍軟紅嬌紫春栩栩寧知在塵世
無非蝴蝶夢中身

葛原菊澗之間。名園頗多。

芙蓉秀與碧雲侔最好東山第一樓扁榜各觀時彦筆
筆歌墨舞鬪風流

芙蓉樓。碧雲樓。東山第一樓。皆在圓山安養寺。近時文士龍草廬。大江玄圃。永田觀鵞。輩書其扁額。

自將鐘磬換笙歌精舍隨緣迓綺羅半夜人歸芳樹月

衣香巾影拂蹊多

圓山數院古昔皆屬延暦寺。中世紛亂別立宗門。昇平二百年竟化成繁華行樂之域。都人每僦其樓院。作行酒糾觴之遊者晨夕不絶。住僧又貯妻孥理酒肉。以讌客爲事業。香火經梵蔑然如不曾知者。

鴨曲絲簧人競魁。故登山館一場催。欲觀押尾名媛伎。須向闌更後伴來。

鴨曲諸伎每借東山諸樓館。大肆歌舞。曰之歌會舞會。人爭聚觀焉。

山亞花梢花亞山。相躋石陛不嫌艱。試看紫闕金城景盡出香雲艷雪間。

長樂寺在圓山安養寺南。古亦屬延暦寺。開祖爲釋印誓。中興爲國阿彌。今纔有一佛堂。登上方處疊石數十級。都下衆景皆具于一矚。○亞廣韻云。就也。相依也。又都敬讀書通云。歷通作亞。杜甫詩云。花亞欲移竹。花蘂亞枝紅。千朶萬朶亞枝低。包佶詩云。多年亞石松林逋詩云。粉竹亞梢垂宿露。此類皆是。

西公陳跡足苔痕。行樂三春客壓門。滿院風花香萬斛誰拈一瓣吊淸魂。

金玉山雙林寺在長樂寺南。又有數院與圓山同古昔僧西行住焉。其墖及所愛櫻樹猶存。○以上七首賦東山諸勝區。

一部搊彈錦作裀。追陪不厭渉煙塵。邀花延月無非便録事巷從山下分

東山舞妓與六街樂部別種者。皆各住于葛原僧寺之前巷。諸酒樓每有遊客召之于其家。無有總司之監主。所以異六街之例也。○搊彈謂弄絃絲也。出教坊記。老學庵筆記云。相藍之東有録事巷傳以爲朱梁時名妓崔小紅所居。又夢華録云。寺東門大街。即録事巷妓館。

謝安一去薜蘿閒。自分芳埃浣玉顔。學舞按歌尋故事風流何敢出東山

○假用謝安事。以下多此例。

香衫細馬競嬉春。門外林坰嫩草勻。笑揭青簾招不得衆中奈箇意中人

○白居易詩云。香衫細馬誰家郎。　以上三首賦東山舞妓。

彩箭雕弧春興長。誰家小姐每開場。笑言柔手爭相及枉失一籌輸客郎。

祇園葛原間有揚弓舖。近側女兒日出當其場延客

勸射每乘矢收錢四孔不論貴賤緇素相過弄之○揚弓之制弓材用紫擅長二尺九寸二分離爲四靶濶七分長三寸半彩絲纏之兩頭飾以銀或鍮銅上下有孔含弰弰在靶上者二以銀或鍮銅爲雌雄筍相接長通一尺七寸七分在下者一長八寸淵上大下小矢長九寸二分幹以木羽則白鷺朱鳥晨風鶺鴒其品亦不一象括鐵尾平其尾而尾豐倍于括的徑三寸繫之乏中央候道二十七弓射之者並坐定輸贏進退亦有其儀

勝事追時誰著鞭花茶坊裡鬪嬋妍請看林下新風景

日暖金籠孔雀眠

近日有儇子於葛原西側開一大茶肆經營殫美屋後園榭畜孔雀鸚鵡之類供客遊玩遞茶佐酒者莫不絕色佳人一時翕然相傳稱孔雀茶屋○夢梁錄云大街有三五家開茶肆樓上專安著妓女名曰花茶坊

林間行竈細煙颺茶媼待人供短床另有青甌點香屑一春花下解酲湯

東山諸祠刹之間往往有浮舖搆竹柱懸蘆笛迎客進茗飲者都謂之水茶店近側婦女當行竈而賣之朝出夕去專接行樂人士以足營其生又祇園廟下通衢有四五家鬻呼香煎者其製合研大唐米薏苡仁蜀椒之類作粉屑人喫湯時點少許於撓面奇芬頗可喜所謂水茶店皆必進其香湯祇園香煎之名所以藉于四方也○品字箋云物兩分曰另俗謂他日異日曰另日今按另音令非别字省文又與另字異不可混用

傑閣南邊地小平菜花夾路夕陽明隔林也識多遊客時聽隆隆調馬聲

祇園林莽中有調馬場廝養奴每來待遊客借其鞍馬地與華頂山閣相接○李賀詩云馬蹄隱隱聲隆隆　以上四首賦諸場舖之待遊客者

祇園香願六街人咫尺恒欽威福均將謂亦能憐曼睩故爲今日白眉神

祇園廟本祀上古神聖素盞烏尊中古浮屠氏與其祭祀遂託言佛經以爲祀北天竺吉祥天國王牛頭天皇澆季俗更訛稱午頭天王○瞿佑西湖竹枝詞云南高峰頭有香願早買湖船出湧金　宋玉招魂云蛾眉曼睩謂容色曼澤也　白眉神娼家所祭之神出小說王翠翹傳

向夕下方乜暖煙歌樓舞館想遊仙世間誰跨揚州鶴
這裡來抛十萬錢
○蘇軾詩云。世間何有揚州鶴。注云。昔有客各言其
志。或願爲揚州刺史。或願貨財。或願騎鶴上昇。其一
人曰。腰纏十萬貫。騎鶴上揚州。蓋兼人之所欲也
以上二首。賦祇園廟下。通衢及六街諸樓之豪華。
一刻千金眞是眞滿樓花影月。如銀無爲兩兩爇椽燭
照盡青樽綺席春
○春秋傳范武子曰。無爲吾望爾也。韓詩外傳云。僕
夫則無爲死也。猶飲食而遇毒。按無爲猶無益。古書

間有之。王勃詩云。無爲在歧路。兒女淚沾巾。亦同。
東軒筆錄云。宋子京晚年知成都府。帶唐書于本任
刋修。每宴罷盥漱畢。開寢門。垂簾爇二椽燭。媵妾夾
侍。和墨伸紙。遠近觀者。皆知尚書修唐書。爇古燃字。
香衩當筵火色烘妃頭嬌態暖春風座間偶有東來客
指道京華一種紅
妃頭陪宴。皆著紅縐綃蔽膝。除京攝妓館外。無有此
裝。○李商隱詩云。裙衩芙蓉小。注釋名云。婦人蔽膝
曰香衩。又呂渭老詞云。衩衣吟露。　品字箋云。妃頭
雙髻之別名。妃音杷。

燭底先延三兩姬一盤綸布佐杯時輕抽蔥指情何急
結作合歡連理絲
諸樓偶然得客。先問其所聘。排燭進酒之初。以細切
綸布爲下物。蓋補塡不能咄嗟辨肴核之間隙而已。
○綸布。時珍曰。按吳普本草。綸布一名。昆布。則爾雅
所謂綸似綸。東海有之者。卽昆布也。綸音關。青絲綬
也。訛而爲昆布耳。
院曲紛華想教坊詼師狎客趕歡場無端打座踈狂甚
痛飲先傾三大觥
曲中幫間。皆善吹彈幷口伎。每趕妓團。佐歡飲。舊制

有兩箇肆。挂其名籍。客之召之。無異娼妓。但以不如
曼睩之寵。故連日不售者亦不尠。漫請諸樓懇客之
左右打座。以前不虛其日。○院曲煙華總稱也。板橋
雜記云。舊院人稱曲中。又云。曲中女郎。多親生之女。
可以證也。又品字箋以劇場中蒼頭爲院子。輟耕錄
謂院本雜劇其實一也之類。皆稱演劇家爲院。今日
幫間之屬兩肆者。雖非同等。而扮戲舞曲專倣劇家
諸伶之風。據居處亦不相遠。所以有此語也。　南史
陳后主紀云。江總孔範等十人預宴。題曰狎客。　瑯
邪代醉編云。宋時京師歌者。不招而前。謂之打座。

鬭酒呶呶甲當乙。豁拳參差趁聲出。料知蹲鴟銜我來
急。飲五峰欲呼一。

諸樓宴飲之間。嬉戲不一。最多作豁指頭。○六研齋
筆記云。俗飲以手指屈伸相博。謂之豁拳。又名豁指
頭。蓋以目遥覘人爲已伸縮之數。隱機闘捷。余甚厭
之。以其啓遷坐嘵號之漸也。然唐皇甫松手勢酒令。
五指皆有名。大指名蹲鴟。食指名鉤戟。中指名玉柱。
無名指名潛虬。小指名奇兵。其掌名虎膺。指節名私
根。呼五指名五峰。則當時已有此戲。又冊鉛録云。五
代史弘肇與蘇逢吉飲酒。酒令作手勢。按唐人酒令

曰云云。謂之招手令。其亦手勢之類歟。又板橋雜記
云。豁拳各盡三四斗而別。可見古來宴席間多作此
戲。

京洛少年多易狂。平生賣錦識紅粧。癡心誤被春雲引
好夢樓前未夕陽。

都下商家子弟。其主不許暮夜出門。所以覓歡買笑。
皆在晝間。

戸幌風柔燕尾開。懷春吉士爲誰來。笑延亭子先相問
可進鴛衾進玉盃。

鴨東煙華之定制。其間置幾箇大肆。統司家家之諸
娼妓。娼妓有親生之女。有外來典身于其家者。共懸
名籍于各大肆。稱爲某肆之某。客過遊諸樓。則主人請
其所命。俾娼奴召之。各肆肆奴即趨報而催粧束。遂
携送之其樓。詢遣席之早晩而去。或半晌多時。或全
日竟夕。隨樓主所斟酌之定限。再來而促其歸。客留
之。則仍前。既遣之。則辭去而就他樓之所請。往來周
旋不一而足矣。而肆頭有一監奴。臨簿點撿。以香炷
爲刻限。毎出娼妓一枚。揷炷盤香一條。飲酌枕席間。
奉承客意。能延晷刻者。續至數十條。席已散而諸姬
歸其家者即止。彩轎赴別樓之招者。奴趨歸告之肆

監。又新炷香一條。大畧自午届酉。自酉届子之間。各
定爲香炷十二條。子後午前又有別限。是以名娃仙
媛。聲價踴一時者。至一月炷香千條。盛之極矣。而毎
月晦。肆監募諸樓聘招之資。各分而輸送養娼妓之
家。征利苛嚴。皆以炷香若干條算之。一炷原價銀一
錢。客之所辨二錢餘。雖客不辨之。而樓主不得不給
之。若愆其期限。清算未全者。肆監不容爾後之聘招。
客必先其期而措辨之而已。○杜甫詩云。可愛深紅
愛淺紅。又陸遊詩云。可愛南枝愛北枝。　以上七首
賦諸樓讌席及遊客之情致。

輕拂羅裙鬆展忪。朝雲暮雨去無方。不知多少巫山夢
殊使誰人比楚襄

娼妓常著漆黑短齒屐。褊面或脩方。或埰圓。以五色天鵞絨為繩糵。

絃寂歌終蠟炬微。隔簾嬉笑尚依依。蠛蠓慢臉應相媚
不使泊然飄客歸

○岑參詩云。慢臉嬌蛾纖又濃　類書纂要云。飄客言輕身于花柳之中。如物之飄流而無定也

曲屏方枕夜三更。宴散無端獨見迎。被底鴛鴦非有舊
同床各夢奈天明

娼婦接客。如有所厭忌。則絶不作人情。○天寶遺事云。五月五日。明皇避暑遊興慶池。與妃子晝寢於水殿中。宮嬪凭欄倚檻。爭看雌雄二鸂鶒戲於水中。帝時擁貴妃於綃帳内。謂宮嬪曰。爾等愛水中鸂鶒爭如我被底鴛鴦。

神娥日夜歷家徂。縹渺妙姿常有無。督促空煩海山使
倦待儇郎夢覚孤

娼妓既在他樓。舊所相熟之客。強欲招之。懇其肆奴。竊寄書。以待其辭他樓。奴雖允喏。通客意其來與不來。在娼妓之見時宜。如不喜相遇。則使奴以不得其音容辭之。益謂自他樓更遊遠處也。或有其席寔不可逃稱。將來見而不能來者。○歷家暗用蘇訓事。所以比神娥也。　陶侃嘗得奴。不喜言。常默坐。侃一日出郊外。奴執鞭隨。胡僧見而驚禮云。此海山使者也。侃異之。至夜失所在。

洞天縱小娉瑤姬。自有高燈照八維。背影整衣將伴睡
仙梯登已引希夷

樓館最賤小狹隘者。入門則有廚竈。其甚者一室一廚。樓梯在其間。客多不須絃歌盃酒。只買枕席之歡而已。凡諸樓館。廚中皆懸八方燈。其形坐繩于梁間。

繫小燈架。以八角紙罩如笠者蓋之。光輝射下無所不及。俗謂之八方或八間。○陳摶字圖南。居華山雲臺觀。每閉門獨臥。或旬不起。人或稱睡仙。宋太宗賜號希夷先生。

曉樓未足海棠睡。已是從奴催歸至。唯操彩約供雪纖
不學扶醉高力士

娼妓之從奴。送來邀去。事頗匆匆。縱立客前。非有故相認。則不致一語。固有所憚。○太眞外傳云。明皇沈香亭召妃子。時卯酒未醒。鬢亂釵横。上曰。眞海棠花睡未足爾。　從奴。出于比魏爾朱文略傳。　約字彙

云。求於切音渠履頭繩。履飾也。呉澄詩云。落花香撲青絲絢。又揚萬里詩云。萱草行間過履絢。唐書李白傳云。白嘗侍帝。醉使高力士脱靴。力士素貴恥之。

以上六首。賦娼婦接客之事狀。

象撥梨擸川字。絲輕挑低攏故遲遲上。都無復王之渙慽使嬌嗔。仍舊詞。

大抵酒妓上筵。抱絃之初。相詢而唱舊曲一二解。都下游冶。徒最貴酒妓。鴨東家家。女兒纔有姿色。則教之以三絃并歌舞。趨座佐飲。飽射其利。擇富豪欲結情者。而暱之。其初常價之外。另收定情聘金若干

兩。奸黠最甚者。至各樓同時。帶十數箇。情客如要購取終身。則其家莫論親生與養主。非得幾百金不允。妓亦自恃姿色。不以青春歸良爲榮。落籍僅半年或期年。擄出其主。生厭心之計。放遣如意。再趁煙華者。曲中相尊。爲有伎倆。所以有名色藝。皆屢出入狹邪。竟能積多財。然及姿色既衰。門戶客少。而不免爲失歸之妖物。艱苦種種。受惡報者。亦復不尠。其他或嫁博徒惡漢。或溺梨園少伶。朝奔夕匿。狂蕩誤身之類。固不可枚舉焉。畢竟酒妓雖徇不羈情之舊例。其實無與娼婦異。只以歌撥佐酒。情態灑落最可愛玩。

故人每不厭招聘。其勢自出娼婦之右。糚束之美。亦難相比。列錦繡綺羅玳瑁珊瑚之類。相競逐時樣。一件動直百金。可謂甚矣。此皆雖因昇平安逸之習。而奢侈殆敵妃嬪。豈可不歎哉。○象撥梨擸川字。絲。謂三絃。其製詳于下。　攏。集韻云。曾孔切。鞏上聲。持也。掠也。白居易詩云。輕攏慢撚抹復挑。唐開元中。王昌齡高適。王之渙齊名。時風塵未偶。而游處略同。一日天寒微雪。三詩人共詣旗亭。貰酒小飲。忽有梨園伶官十數人登樓會讌。三詩人因避席隈。擁映爐火以觀焉。俄有妙妓四輩。尋續而至。奢華艷曳。都冶頗

極。旋則奏樂。皆當時之名部也。昌齡等私相約曰。我輩各擅詩名。每不自定其甲乙。今者可以密觀諸伶所謳。若詩入歌詞之多者。則爲優矣。俄而一伶拊節而唱。乃曰。寒雨連江夜入呉。平明送客楚山孤。洛陽親友如相問。一片氷心在玉壺。昌齡則引手畫壁曰。一絶句。尋又一伶謳之曰。開篋淚沾臆。見君前日書。夜臺何寂寞。猶是子雲居。適則引手畫壁曰一絶句。尋又一伶謳曰。奉帚平明金殿開。强將團扇共徘徊。玉顏不及寒鴉色。猶帶昭陽日影來。昌齡則又引手畫壁曰。二絶句。之渙自以爲詩名已久。因謂諸人曰。

此輩皆潦倒樂官所唱皆巴人下俚之詞耳豈陽春白雪之曲俗物敢近哉因指諸妓之中最佳者曰待此子所唱如非我詩吾即終身不敢與子爭衡矣既是吾詩子等當須列拜牀下奉吾為師因歡笑而俟之須臾次至雙鬟發聲則曰黃河遠上白雲間一片孤城萬仞山羌笛何須怨楊柳春風不度玉門關之渙即揶揄二子曰田舍奴我豈妄哉因大諧笑諸伶不喻其故皆起請曰不知諸郎君何此歡噱昌齡等因話其事諸伶競拜曰俗眼不知神仙乞降清重俯就筵席三子從之飲醉竟日事出集異記

銀釵玳笄影縱橫自是風流全盛名人道山東萬金容
欲沽一笑未曾成

媿他雲雨送浮生流水落花非我情請看一張渾不似
去來竊得自分明

酒妓最恥與娼婦相齒其所自託專在三絃之一器每以為口實○三絃之製以花梨鐵刀木紫檀櫧樟之類為槽方六寸許兩面張以貓皮柄長二尺許其首所繫絃四寸許合三尺強或離為三段臨用而接之收時折之可納尺許方匣包以彩袱提携頗便曲中無不如此者樓肆往復之間肆奴挈之從其後人見其有匣絃即知為酒妓矣○渾不似三絃之古名席上腐談云王昭君琵琶壞使胡重造而其形小昭君笑曰渾不似今訛為胡撥四胡不思三絃之名始于元時即渾不似之遺製也

儘帶春風非太輕養嬌偏抱愛花情夜深繡匣收絃子
觸枕金釵獨有聲

擇耦之酒妓如有中意之客則竊許伉儷多在子夜之後事頗不容易所以異娼婦也○院曲舊稱以客賞優伎之物料為花蓋避謂錢物漢土所謂纏頭也其習混娼妓之常價又呼做花有賣花若干技之目

凡娼妓應客招出門則肆監炷香一條次第相續因亦稱賣線香若干條曲中吉利總在花一字第二句暗指之○儘與縱任等字義同李攀龍詩云儘道彊場懸節鉞猶能書札滿漁樵

一擲千金須盡情絃歌何必惜娉婷為知潛伴諸郎宿
水性念奴尤得名

上注所謂同時各樓帶幾箇情容者名亦噪一時○娉婷美好貌杜甫詩云不嫁惜娉婷○念奴唐天寶中名妓白居易詩云力士傳呼覓念奴念奴潛伴諸郎宿

酣飲何知迫曉天粉香脂膩和衾眠遊郎畢竟猥花蝶
抵得芳心非偶然
俊俏少年多不聘娼婦喜與諸酒妓飲其欲結情者
煩樓主及女奴輩之媒舌是常格也必另出定情金
若干更預辨五日或十日之常價又有自恃風流不
假媒妁欲相得而結情者多託言徹明之飲深夜與
諸妓同被而眠曲中稱之為雜臥其妓所喜者竊狎
而不使他妓知不相喜者雖親擁之決不許情事或
有再三而可之或有引年時而猶未可雜臥一夕即
竊得伉儷者風流遊冶之所最誇耳

糚罷黃昏歡未來偷間暫佐別筵杯囑人預謝相辭速
前約在他將有催
客已為前約本日未來之間其妓赴他樓則肆奴從
送之初具其由于樓主前客不來則止已來則肆奴
促歸妓乃相辭而去了娼婦亦然客不得留之○郭
茂倩樂府云江南人謂情人為歡
呼成姊妹不同家上席全然並蒂花笑道掠梳非昨樣
知教誰手綰頹鴉
雛妓懸名籍于其肆之始各就先輩有聲價者請其
指揮相結為姊妹娼婦亦然　大抵妓女之習貫心

殫意以糚梳為務遊客招飲之間苟非風流俊俏中
其意者則侮慢不顧與女伴嬉笑啞啞相話笄釵梳
刷之可否而已○王廷相詩云旋綰頹鴉抹絳唇
樓深夜靜大絃鳴裂帛走珠多少聲劇部羞君能顧曲
嬌紅上面不勝情
酒妓一種專奏大絃子者應好劇部詞曲之客其風
釆不同他妓以淡糚耿介為本色蓋其初妓家以非
十分姿色另教成劇部曲挾其伎以趕宴席者也○
三絃有兩種常制者度新舊歌謠絃撥槽柄差豐大
者為唱院本戲文之絃音又重濁　呉書周瑜傳云

瑜少精意於音樂雖三爵之後其有闕誤瑜必知之
知之必顧故時人謠曰曲有誤周郎顧
垂髻雛妓已嬌糚慧舌又能譜調腔更結鄰家第三妹
樽前軟舞自成雙
曲中逐利之急有雛妓僅八九歲而既侍歡宴者皆
能歌舞其價半尋常酒妓或結同輩並前而進軟舞
以兩人當一人故相喚作兩箇一兒
玉纖拍鼓遮紛紛妍月兩團偎袖分新曲清嚵自開左
翻來亦遏鴨千雲
近來東都名部伎人多來都下鴨千之妓雛亦學其

風能進兩鼓節歌之曲。其狀左手把一小鼓。架右肩
上。更以一鼓較大者挾左脇下。肱頭與膝相撲。不教
顫脫。右手掌頷頰連拍而節歌。謂之二打鼓。廿年前。
都下未聞有此伎。今者盛行。人爭召之。風俗之歸東
可以見矣。○據言云。張祜客淮南。幕中赴宴。杜牧同
坐。有所屬索骰子賭酒。微吟曰。骰子逡巡裹手拈。無
因得見玉纖纖。祜曰。但知報道金釵落。髣髴還應露
指尖。　元稹詩云。徹聲巉絶何清峭。　博物志云。薛
譚學歌于秦青。自謂盡之矣。辭去。秦餞於郊。撫節悲
歌。聲振林木。響遏行雲。譚乃謝。終身不敢言歸。　以

上十一首專賦酒妓之情狀。

小娃一昨換童裝。舞袖輕盈已不長。況染瓠犀媚初足
千金春色上脣香

娼妓二八前後。皆服長袂曳地之衣。及染齒更糚而
不復服之。更糚之慶。其儀頗盛。情容為之捐貲措辦
焉。○一昨猶謂昨日。王逸少帖云。一昨得安西六日
書。又杜甫詩云。一昨陪錫杖。

碧玉分瓜最嫩芳。上頭狂伴白頭郎。警詩有例君知不
一朶梨花壓海棠

娼妓初薦寢席。皆必擇老實過壯強者而屬之。○分
瓜與破瓜同。或云瓜字。年益將瓜。縱橫破之成二八
字。作十六歲解也。段成式詩云。猶憐最小分瓜日。李
群玉詩云。碧玉初分瓜字年。此其證矣。輟耕錄云。今
世女子之笄。曰上頭。而倡家處女。初得薦寢於人。亦
曰上頭。花蘂夫人宮詞云。年初十五最風流。新賜雲
鬟使上頭。又板橋雜記云。初破瓜者。謂之梳攏。已成
人者。謂之上頭。又隨園詩話引南史孝義傳華寶之
事云。是上頭者。男子之事。今專稱女子。心頗疑之。讀
晉樂府云。窈窕上頭歡。那得及破瓜。則主女說亦可。
堅瓠集云。浙中有年六十三。娶十六歲女為繼室

者。人嘲之曰。二八佳人七九郎。婚姻何故不相當。紅
綃帳裏求歡處。一朶梨花壓海棠。

染成香飯似桃花。方盒盛來饋幾家。青春落籍多名部
遍謝舊情辭狹邪

娼妓遂情願從良善終者。贖去。而其家炊赤豆硬飯
遍贈曲中親故。以張慶儀。或副摺扇巾帕等。以所賑
最厚為榮。其他女兒有染齒。更裝。入籍。上頭等喜事。
則亦皆相贈以赤豆硬飯。此舊例也。○杜甫詩云。軟
炊香飯緣老翁。

薄命可憐張少娘。老將歌舞倚新糚。哭餞亦醉渠應媿

還使五奴常守房

大抵娼妓之所相喜多是輕薄無頼之徒雖巳為私耦而窮窶不自勝猶為之鬻色藝者或年垂四十未得落籍亦可恨矣○教坊記云蘇五奴妻張少娘善歌舞亦姿色有邀迓者五奴輙隨之前人欲其速醉多勸之酒五奴曰但多與我錢雖喫䭔子亦醉不煩酒今呼鬻妻者為五奴自蘇始　䭔字書云都回切音堆餅也通作䊚餡䭔

身塡情海任翻波縱得脱離無幾何昨日投簪今再買鬟雲鬢綠未鬖鬖

娼妓身上勞碌種種不一或失佳耦于青春或厭眷匹乎末路百折千磨到雉剃成尼然而習氣難除數月期年之後再出而售倚門之媚以養髮猶短戴水碧紗帽為挾色之尼姑汙穢固無論但於其身有所不得已故耳○山海經云發鳩之山有鳥名精衛炎帝女溺于東海精衛常取西山木石以塡海

錦妹繡妾自良家名紙傳言落挾邪多是章臺再栽柳青春定不嫩枝花

娼妓之懸名于各肆也其初肆奴為之持名紙遍街家至而投之請勸客而一迓焉凡娼婦有三品稱二八前後未染齒猶著修袂者為新品四五前後春色十分者為中品自五五屆五六前後淡粧剃眉如巳嫁人者為本品是以娼婦名紙首大書其品名字之旁加肆名如有常家婦女經世路艱難誤墮挾邪者則其名紙雖不顯載原家姓而亦併記出于良家婦女婢妾或孀尼之數字又有舊生長娼家飽諳風情一旦被人贖出輕蕩猶未定無幾而辭之再倚花柳者以青春稍過再瀆可恥故改名更格佯設根脚稱近來始出于良家客或據其名紙召接則彼自不得不露風流老爛之故態蕩子遊漢之受欺侮大抵此

類矣而酒妓名紙則首書藝兒二字本名旁加肆名年紀固莫論三絃外挾他伎胡琴箏二打鼓輩者亦必副記之○釋貫休詩云錦妹繡妾何紛紛

欲取端端為愛名怪渠鸞座亦能行崔涯嘲謔果難免鼻似煙窻耳似鐺

娼妓或乏姿色而叨同花名于一時絶艶者客誤聘之莫不呆然失望實可一笑○唐崔涯有詩名每題詩倡肆聲價為之增減曾嘲妓李端端曰黃昏不語不知行鼻似煙窻耳似鐺獨把象牙梳插鬢崑崙山上月初明端端得詩憂之乃拜涯于道左求之涯復

贈詩曰覔得黃騮韍繡鞍善和坊裏取端端揚州近
日渾成差一朶能行白牡丹于是豪富之士復臻其
門或戲之曰李娘子纔出墨池便登雪嶺紅樓以為
笑樂　漢陳遵字孟公三為二千石哀帝朝封嘉威
侯時列侯有與遵同姓字者每至人門坐中震動既
至而非因號其人曰陳驚座

春風簾外賣花聲惱損佳人睡起情急袖金錢却停佇
殘粧不奈出門行

○奈猶堪揚孟載詩云曉來一陣東風雨吹得梨花
不奈看

容纈紅綃壓翠鬟霏霏沈麝欲薰顏粧成裙帶猶慵換
姑步前汀春草間

凢娼妓纚鬟髻以彩纈繒半幅或攢金綫一辮其他
新裁奇飾趁時屢變不可悉述焉○通鑑德宗紀胡
三省注云撮繒以線結之而染色既染則解其結處
皆元色餘則入染色矣其色斑斕謂之纈

不妨徃徃試鉛脂粧袋綈將一辮絲寶隆應爭入時様
細腰皆佩玉孩兒

○鉛脂出于梁簡文帝筝賦　寶隆懸鐘也　玉孩
兒出于五雜組

粉黛易消紅易殘每懷照子座間看一揮眉掠含輕潤
彷彿芙蓉露未乾

娼妓常携粧具一依酒席間侍客猶屢理脂粉公然
不知羞避曲中之賤習也　時俗所用眉掠非畫眉
之具只依古稱而已其製兎毛竹管蒙茸如水墨筆
婦女施粉後輕蘸水掠掃滿面其粉自瑩滑不使粘
滯為斑其管長一寸許圍二寸許而携齎在袂裏者
皆用銀管小大隨便其他有脂盒脂筆併謂之三具
皆純銀製之雕鏤極美○本草古鏡釋名有照子又
聖惠方有銅照子　眉掠抵子也本草五倍子條下
烏鬚方云以眉掠刷於鬚髮上

蘭湯浴罷午攙風當面春山抹翠濃眉黛抵愁被渠妬
嵐光來在鏡光中

諸樓在六街東邊者不與山相遠　六街中有四箇
混堂娼妓日就而浴之大館巨肆置浴場者非其例

南社燒香趁曉烏紫藤花上露方濡拜歸小睆猶垂箔
阿妹貪眠不受呼

祇園西南有金毘羅祠娼妓多奉香火以晝夕無暇
故發起而詣拜焉祠頭有紫藤一架花時頗美

瑞龍新樹綠初肥好伴情人踏落暉衆醉猶尋林下路

流螢故拂茜裙飛

瑞龍山南禪寺在華頂山北寺前酒店亦有聲價遊客每携娼妓嬉娯于其間

一雙蝙扇掲霜濃情意慇懃付此中盛夏何添班女涙為君長守合歡風

大暑大寒兩節諸樓主及妓婦輩貽舊顧佳客以摺團華扇及菓糕諸品問起居乞眷顧之意也○班婕妤怨歌行云新裂齊紈素皎潔如霜雪裁成合歡扇團圓似明月　以上十五首賦娼妓身上榮枯進退及雜事

畫幕猩氈客壓欄千家社會極娯歡炎熱无應異今日渾成富貴看

都下神會之盛莫祇園會若焉六月七日迎神十四日送神儀衛最繁盛先期四條坊及左右巷上設山棚山車陸船弄摻鼓吹喧闐動鬼旋魄過街燈燭煒煌如晝戶戶金屏猩氈軸簾褰幕張飲盡雖會日神輿及棚車過門之家賓客蟻會鱗萃士女塡街溢巷袂雲汗雨不啻○祇園廟下通衢即四條坊分鴨水東西異其名耳神會之盛觀一道相接殆無分界所以有此詩也如山棚山車等皆在四條坊非鴨東諸街之所干焉

更番扮戲喚呼頻品得妙年殊色人後隊旋隨前隊去幾雙團扇拂炎塵

祇園神會本日前後熱鬧亦甚矣五月晦及六月十八日在鴨河四條橋東洗淨神輿謂之御輿洗是日也鴨東茶坊娼戶結彩醵錢斂翠裒香演雜劇戲文故事其人物則扮娼妓為淨旦諸装又綴結為棚押其首尾樂則有三絃胡琴提鼓鉦鼓細腰鼓每隊珠翠錦綺香紈白紵豔装濃抹觀者每嘖嘖要不過勾引無賴子弟為奇貨耳○扮正字通云通患切班去

聲今俗以裝飾為打扮演劇者飾其面謂之扮戲品字選云妙精微也又小年也杜甫詩云明公獨妙年　輟耕錄云舁一殊色小鬟至前

越羅蹙積銀麟蹙鑾錦團窠紫鳳翔拙東戲衣嬌明甚香肌汗滴玉生煙

○杜甫麗人行云繡衣羅裳照暮春蹙金麒麟銀孔雀　陸游詩云聞將西蜀團窠錦自背南唐落墨花

圓大高燈一丈強神輿行處爍飛光兩宵汎洗人何鬧却起紅塵滿鴨塘

御輿洗兩夕都人各結籠燈于竹竿頭擎持而詣社

下謂之獻燈。某街一夥例獻圓大龍燈。長一丈許。最輝耀矣。

納涼時節併迎神。赴宴名姬馳涉頻。情急輕鞋何厭賤。煙華聲價貴於春。

御輿洗之前後。娼妓以歡謙侍客。無虛日。為其榮。本月前。每對諸樓客。約某日某夜。預請侍宴席。最甚者到本日踐數十客之約。帶奴奔走。廻歷其忙不可言。所以皆踏輕草屩。不用平生之彩約漆屐。樓客慣其例。不以速去為意。○以上五首。賦祇園社會及前後熱鬧。

豪華萬種付潺湲。即是我都銷夏灣。恰恰連宵無一雨。綺紈絡繹不知還。

鴨水納涼之夜遊。自六月七日。至十四日。為最盛矣。相繼至晦日。夜夜四條橋南北。涼棚茶店。鱗次櫛比。兩岸一帶。皆妓館。分茶。酒舖。羹店。雜錯其間。小脚店則有泥鰌。團魚之羹。紅鬣青鱗之鮓。諸色海味。諸色素食下酒下飯。零碎作料。不托。水引。河洛。合羹。胡餅。鋏子。牢丸。包子。糖糕。糍糕。諸色糖果。西瓜。甜瓜。林檎。杏。桃。楊梅。諸色水菓。琉璃店則魚餅。葫蘆。鼓鐺。鐵馬。燈碗。各色盞碟。雜貨則煙管。煙袋。各色摺扇。團箑。扰笓。髮朶。釵朶。香囊。彩勝。水上浮。紙畫兒。遠視畫。凡兒戲之物。泥孩。陶犬。惜千千。纇叫子之類。名件甚夥。不可畢數。伎藝則走索。戴竿。呑刀。弄丸。藏擫觔斗。傀儡。角觝。口伎。影伎。獮猴。猫鼠之戲。演史。學鄉談。說諢話。種種無所不有。竟夜火炬燭天。絃歌鼓吹。嘈嘈鼎沸。驩笑海湧。遊者不覺達旦。○范石湖集注云。銷夏灣。吳王避暑處。平湖循山一灣。雲水勝絶。　楊萬里上元詩云。恰恰連宵雨脚垂。天風為我掃除之。

一簇涼燈映碧山。最看東岸百弓間。任他蓮歩弄清淺。結栅不容人往還。

東岸諸樓前一路。自板橋至石橋之間。每歲六月。結竹栅于南北兩邊。不使行人涉過。各樓故設低棚于門路及水上。又各架略彴一條。遊客送迎專自河心。且樓後各有小弄。通繩手街。所以便出入也。

短彴歌棚覩碧流。香團色陣早涼浮。夜絃有禁宮商少。月露徒為膝上秋。

樓之在隈岸者。夏月別構涼棚。供客之夜遊。而此間有私禁。不許鳴絃子。客坐妓圍。轟飲酣歌而已。若夫門內樓中。平日所延客之處。不拘此禁。○薛能詩云。十指宮商膝上秋。七條絲動雨修修。

曲曲清波月近牀紅羅白苧坐吹香冰肌寧怕人間熱
只爲風流趁夜涼
窈窕釵梁攢玉蘂俠豪佩具繫銀繩陡爾相過覺些數
轉身一喚有衣稜
涼遊喜弄響葫蘆夜夜過橋私自沽冰管只須加玉抝
臙脂口氣不勝麤
女兒弄鼓璫之狀。指抝挿其細管竪横錯合雙掌容
握中自使含氣隨緩緊之勢以鳴之如口銜之吸嘘
成聲差過强則其底破裂〇日下舊聞引倚晴閣雜
鈔云琉璃廠原爲燒殿瓦之用瓦有黄碧二種瓦之

外所製曰魚瓶。曰琉璃片。曰胡盧。曰響葫蘆。小兒口
銜吸嘘成聲俗名倒掖氣顏山堂雜記云爲鼓璫先
得葫蘆旋燒其底而凹流之以均其薄欲平而不平
使微抗焉。以隨氣之動乃得鳴鼓璫響葫蘆也。　事
物紀原云臙脂草出西方葉似薊花似茜土人以染
粉爲婦人面色故名臙脂後人效之以紅花染粉爲
之非彼草染者也秦宮中悉紅粧當是其物自秦始
也。
轟鼓繁絃徹五更戲臺擠比駐人行相逢只道捜涼去
滿耳何知有水聲

納涼之時河身洲背賤伎搆棚臺爭獻百戲其他籠
珍禽擒怪獸奇機異工之諸件以延看人者甚多。
弄珠銜狹般般巧踏索吞刀一一奇看客投錢空嘖嘖
不憐艱險不嗔欺
〇弄珠戲事也。大藏一覧。宗鏡録云。又如弄珠鈴者
不住空中。不落地上。不在手裏。不在三處。亦不住一
處。又文獻通考有弄挽珠伎。　文獻通考又云漢世
巻簟席以矛挿其中。伎兒以身投從其中過之張衡
所謂燕濯胸突鋒鋩也。後世攢劍爲門伎者裸體擲
度往復不傷亦銜狹之變歟。　又云絙戲或曰戲繩。

今謂踏索。　法苑珠林。北涼録云。玄始十四年七月。
西域貢吞刀嚼火秘幻奇戲
酣暢移筵亂未撓擊鮮烹膩遣餘豪咄嗟辨得咄嗟喫
水店[illegible][illegible]侍快刀
鴨厓東西別有數箇水店。各搆簗栅養鯽鯉鰻鰷之
類待客來飲而斫其鮮新膾炙羹臛莫不極旨美蕩
客妓闌餘興相携就焉庖丁調饌之妙爲都下第一
〇蜀志云賓有餘豪可以至醉餘豪猶言餘興劉子
暈詩云村沽得微醉猶足張餘豪　咄嗟字彙云易
度也。猶言呼吸之間。世説云石崇作豆粥咄嗟而辨

滿盤冷鱠斫金鱗一盌清羹進嫩蓴倘使張翰知此味
秋風甘作異鄉人

夏秋之交。人最遊水店。所饌莫非時新。○張翰字季鷹。翰為羽翰之義。當從平聲。然杜甫詩云。扁舟不獨如張翰皂帽應兼似管寧。劉須溪評翰不音平據之其他唐宋詩。又皆從去聲。明揚基詩云。黄金何用鑄范蠡紫蓴本自足張翰。此獨作平聲。今從之。

驟雨夜來過大塘沸騰人散納涼場今朝試倚紅樓看
新水上橋三尺強

鴨岸東西相距百弓許。平常細流横斜劃沙磧兩抜

橋中斷之處最平谿。納涼諸棚及酒舗。戲臺。瓜菓餻餌百遊玩之浮舖。皆張燈于其南北。光焰爇空喧闐徹明。盛觀不知可比焉。然夏秋之間多驟雨。急漲衝洲。則萬人争避。收棚撤床。鼎沸不啻一瞬之間。許多繁華。倏變為冥漠之域。明日橋塌水高。雖對岸可相呼者。而往復迂路于第三第五大橋而已○以上十一首。賦納涼夜遊之光景。

新瓜上市入清秋剩暑殢人猶未收盤中剖得蒼龍卵
幾片紅氷凝不流

半彎新月小樓涼稭籠鳴秋紡線娘情約已成星夕近
願絲挂得待兒郎

今日良辰娼妓必預請樓客。約其歡宴。客一許之。阻事不得來游者。亦猶償本日之定價。雖平日而前約者皆然。○袁宏道促織志云。一種似蚱蜢而身大。京師人謂之聒聒兒。亦捕養。南人謂之紡線娘。稭籠懸之。餌以瓜之穰。

酸漿秋熟軟珠勻撚去撚來看作皴欲和紅衣剔瓤子
嬌痴屢祝恥傍人

女兒總愛酸漿實。口咒手撋。候其軟。抉去瓤。置之舌上。吸嘘成聲。○酸漿草一名紅姑娘。見元徐一夔故

宮記。又有燈籠兒。挂金籠。絳囊。諸名。時珍云。按楊愼危言云。本草燈籠草苦耽。酸漿。皆一物也。修本草者。非一時一人。故重複耳。燕京野菓。名紅姑娘。外垂絳囊。囊中含赤子如珠。酸甘可食。盈盈遶砌。與翠草同芳。亦自可愛。盖姑孃乃瓜囊之訛。古者瓜姑同音。孃囊之音亦相近耳。此說得之。　皴字書云。七人切音親。皮細起也。又云瓤。瓜中犀也。

別連樓子起涼臺露坐終宵飛玉杯只怕擔牙觸雲鬢
手遮銀鈿上筵來

六街諸樓。與鴨水相遠者。不便納涼。因更於樓檐外。

起板棚一兩弓供客夜飲。

士女蘭盆送鬼時相拵薄夜傍前涯且觀如意峰頭火
大字劃雲收焰遲

七月既望都人士女來河上送于蘭盆會之鬼僧徒又各設水陸道場此夜東北如意峰村人舉火峯面舊有坑穴。其數四百八十餘相去各五尺許縱横連成大字樣每畫長百五十間。本日前山下村夫積柴其坑至期而點火光焰赫烈映帶翠微相傳云昔相國寺僧景三以其筆意作之蓋亦為招冥者也

白川斜入鴨川流夜雨殘燈南北樓多少情人歸不得

翠蘋紅蓼枕邊秋

白川經新橋到大和橋之間。兩岸亦有一帶墻壁欄格。屬諸樓後面

一曲清歌一曲秋臙脂坡上水雲愁最憐橋北兩株柳
漸卸鵞黃露半樓

大和橋北側第一樓。舊種柳二株毿毿低水。

樓燈無影水聲饒一片殘蟾照寂寥少女十三能慣客
不辭風露送過橋

○以上八首賦鴨曲秋景及雜事。

玉露金風情正濃亦將清景惹遊蹤青腰為織楓梨錦
秋美東南四五峰

○青腰青女也王士熙詩云青腰霜下蟾房冷

紺苑靠山苔磴幽胡枝花拆屬風流糟情肉思寧嫌鬧
不爾尋常冷淡秋

舊志云高臺寺在雙林寺南文慶年間豐太閤正妃創建此寺佛堂前多胡枝花每秋遊人詣觀焉。○胡枝花俗名萩花救荒本草云胡枝花俗亦名隨軍茶生平澤中有二種葉形有大小大葉者類黑豆葉小葉者莖類蓍草葉似苜蓿葉而長大花色有紫白結子如粟粒

鷲嶺秋寒結夕霏登高勝事近來稀唯懸一片藤蘿月
長照禪樓卧佛衣

靈鷲山正法寺通稱靈山。在高臺寺之南舊屬天台宗中世國阿彌住焉為一遍上人之宗派事跡同闕山堂有卧佛一像。

繁柯中斷葛原西林店深深相對齊破卯醉人來最早
露葵猶傍葦簾啼

祇園廟南兩筒飯酒店舊有名。俗呼二軒茶屋。鴨東諸樓酣讌徹明之客多挈娼妓投此店喫卯酒又店後林[illegible][illegible]最清亮異他處。○黃庭堅詩云破卯扶

頭把一盃又鮮于樞游高亭山記云時已破午。
纖手鳴刀各慣忙店頭菽乳照紅裳輕輕茀得稜稜整
三尺泥爐炙雪香
兩店同賣豆腐弗女奴各著茜布蔽膝。有邀客遞杯
盤者。有當几斫豆腐或炙之者。割切方正手逐刀移
几板隨鳴如有擊節咄嗟辨出之捷。皆成于女手。兩
店以之得名。○類書纂要云。淮南王名安。始磨豆為
乳脂。名之曰豆腐。品字箋云。俗以麻豆之經磨者名
腐敗爛之義。事物異名云。豆腐一名豆乳。又名淮南
佳品。表異録。亦名菽乳。錦字箋云。晉人以其名不雅

改曰菽乳。類書纂要。又有豆炙。蓋今豆腐弗耳。　以
上五首。賦秋景。再及東山葛原之際。
名院相鄰萬竹青笙歌每湧落禪扃誰知夜夜眞如月
竊妬鶯鶯上繡屏
祇園街南側諸樓後面與建仁寺相接。寺內多竹叢
焉。建仁年間。榮西禪師。創建本寺。因有此名。今為都
下五禪刹之一。
霜老東山凍霧横寒鐘半夜暗飛聲北風不管金閨淚
吹落者中催別情
建仁寺。子夜撞梵鐘一百八聲。振于鴨東諸街之間。

大抵樓客夜游。以鬧此為限。有已歸者。有猶宿者。皆
任其所決。此本煩惱滅除之梵音。此間相假為寵紅
嬖翠之定準。亦可笑。
言是當年神禹祠何關風水已清夷六街六道今如此
恰換煙華能化師
祇園街之西。與建仁寺街成十字處東南彎角。有地
藏堂。相傳云。古昔鴨河屢洪水。居人不勝其患。因建
夏禹廟。以禱風水靜和。中世事換物變。地勢非舊。貫
浮屠之俗。改飾其像。遂稱為地藏堂。後又有宗圓者。
患目疾。祈願得應。人亦傳其靈異。相徇曰目疾地藏。

香火益盛。莫知其始為神禹像者云。○佛教稱地藏
尊為六道能化師。
兩座勾欄十字街綺群羅勝不任排放場各各衝埃去
一日悲歡夢已皆
板橋東舊有三座劇場。今廢一座。○南宋市肆記云。
如北瓦羊棚樓。謂之邀棚。又有勾欄甚多。北瓦內勾
欄十三座甚盛。　蘇軾詩云。苦熱誠知處處皆。
急鼓鳴空拂曉寒諸伶發已列鶯鸞纏頭助采誰尤盛
紅幟題名撐峭竿
劇場南北相對。三都名優常聚獻妙伎。每歲十一月

最盛。富戶豪子。各以錦緞氈布米炭酒肉等諸物贈其所嬖愛。壓門塡街。殆阻人行。或懸數丈紅幟。揭題其名。以賑勾欄。喧闐紛拏。傾都競觀。此則歲冬之一熱鬧也。凡劇場皆不用甍瓦。以板竹葺之。門擔上更構小棚。格四面張布幕。建兩小竿。竿上各結條截紙片。團圞如疊雪。此標望也。每曉開場之初。一奴上棚挌擊桶似小鼓。雙撥修細。繁點急節。聲徹萬戶。宛轉極工者。作走珠鳴盤之妙。薄晚放場時又如此。其節昏曉有小異云。○纏頭助采。謂優伎之利物。唐王元寶富而無學。嘗會客。明日人問必多佳興。元寶曰。但費纏頭耳。助采出于板橋雜記。

欲觀新劇各相爭　女伴嬌痴訴熱情　客寓官人多豁達
酒間火速買邊棚

娼妓輩。喜觀演劇。以不過開初兩三日。為相勝。讌席間每勸遊客。請共觀焉。

細弄迴樓通兩坊　急行取便也何妨　蹈紅攜紫無朝暮
自是佳人響屧廊

北戲場西隣比屋之間。有小弄。入門而歷各樓下。轉灣抹角。遂出于大和大路。人每取便相往還焉。娼妓多以紫色縐絹為衣。衣必一身有半。行步每無尤手撮攝衣之兩緣。不使裙末拂地。○祝枝山前聞云。今人呼屋下小巷為弄。南史蕭諶接鬱林王。出至延德殿西弄。弒之。已有此語。蘇州圖經云。吳王宮中有響屧廊。以楩楠板藉其地。西子行有聲。因名。

南街又看小煙華　優子弗童交作家　何物神仙偏愛護
帽紗故翦紫雲遮

第四橋南小街沿岸者。為宮川街。又有許多樓肆。煙華之品。差屬下等。演劇優伶。嬖色孌童。亦雜居其間。與六街樓肆專屬娼妓者。大同而小異云。凡優童脂粉粧束。皆類雛妓。惟頭上戴紫色縐紗。方幅四五

寸者。為帽兒。如嬖色長而為劇伶。其通習也。髮禿之徒。最嬖之。○衕字彙云。通街也。珠璣藪云。少年子弟習歌唱。而漸至于演戲者。謂之弗童。以上八首賦祇園街。建仁寺街。宮川街。及劇場左右之景致。

歡噱留連不夜城　漫言街鼓未三更　出門過水無人影
寒犬邉邉吠月明

鴨東諸街之更刻。賤奴手把小鼓。巡邏而打之。一夜一次。唯報三更耳。與建仁寺鐘相後先。○地理志云。不夜縣古有日夜出于東萊。萊子立此城。以不夜為名。古詩云。千門不夜城。

水西又宿野鴛鴦燈影照眠宵已央非是詠家佳子弟
會知商戸好兒郎
鴨西沿岸之家。亦貯娼妓。品價最卑。六街中幇間輩。
以不能聘同位諸姫。故每來買歡娯于此際。其他賤
商牙儈輩亦多來遊焉。
寶箏何許送新詞一面川霏欲雪時擁映爐紅小腮容
試拈尺八倚聲吹
酒妓。鼓箏及胡琴者最少。如用之其名特著。解音之
容春徵之。○尺八之名李唐為始。出于毛晋五色線
及宋高僧傳。又洪覺範謁顏魯公祠堂詩云。尺八攛

吹入醉鄉。國柄御持與人把。　倚聲出于字典與古
所謂倚瑟。倚歌。倚曲同。皆合詠也。
急脚息息夜每過籠燈隨步影婆娑沿街催喚江南信
募得佳人錦字多
浪華者海陸之總會。米鹽之原府。而距皇京不相遠。
各地往還。諸物運搬。日夜以萬數焉。所以都下鋪行。
有以遞書信物料為業者。人各出脚錢而托之。彼輙
綜領而頒送各處。俗謂之急遞鋪。鋪主撿之奴丁致
之。通信之便莫捷焉。而鴨東繁華之域。以戸數日加
附書信者最多。故鋪奴夜夜巡行諸街。連聲自喚鋪

名。欲寄書信于江南者。召而屬之。○東軒筆記云。向
夕忽有來使。俗謂急脚子者呈狀。又宋文鑑名山藏。
書敘指南等。有急足名。　崔道融詩云。佳人持錦字。
青衣來去遞衾裯霜滑風乾閭口幽知為誰人貸春色
五更好夢入温柔
狹邪間有以貸卧具為業者。賤小樓館。每有遊客。使
丫鬟借衾褥。彼輙輸送幾雙。夕送朝收。纔貸一宵而
已。○青衣賤奴之稱。搜神記云。給青衣數十人。
女中侍詔好腰肢青衩紅襟訪衆姫笑問宿膏何未淨
先分義髻刷多時

娼妓輩。不屑手自結頭鬟。曲中有幾箇賤婦。隔日或
三四日。詣其家。梳綰諸姫之鬢鬟。此習已久矣。○待
詔謂業梳掠者。萩園雜記云。鑷工稱待詔。磨工稱博
士。師巫稱太保。茶酒稱院使。皆然。此胡元名分不明
之習也。
月高燈暗曉霜繁行竈吹煙猶過門乃是嚴冬熱河洛
欲向擔頭沽一盆
曲中暮夜有賣河漏及湯餅者。置尾竈器皿於雙局
中。相擔而叫過街上。擔頭懸小方燈。行人亦招就而
喫之。○蕎麥麵。一名河漏。一名河洛。言鯖云。山東以

蕎麥作麵食曰河洛即河漏也池北偶談曰盧氏雜說明皇射鹿取血煎酪賜哥舒翰及安祿山謂之熱河洛祿山帳下健兒名曳洛河恐因字音相近而傳會其說今亦會聞以蕎麥作麪食名河洛俚名亦有所本　以上七首賦鴨曲雜事

女兒勞碌度芳年自給朝昏脂粉錢情實若非憑一箇
風花爭了幾條緣

歡去恩恩頗可疑比來莫是抱他思丫鬟物色私相報
果向橋南有所期

○品字選云小鬟雙鬟丫鬟皆婢子之稱以良人處

子頭止一髻而若華之鬟雙鳥也俗直謂之丫鬟

情話挾嗔俄拂衣蕩郎難挽淚空飛輿丁慣送先相問
今夕緣何故早歸

街頭亦有幾箇小店轎夫相聚而待諸樓送客之令給竹兜子乍往乍還無時而止

別來消息太朦朧潛出尋過闤闠中只怕帽兒遮不盡
羅襦猶露半船紅

情容久不過遊則娼妓或裝肆奴竊出問之于其近側以多所憚避故微服御糚或蒙絮帽要同常家婦人然而奢麗艷曳之態自不可掩○古今注云闤市門也又云衣領曰船

風僝雨僽益情加破格裝歡向別家各肆原來頗苛令
揭名先禁趕煙華

娼妓如不蹈曲中定制則揭名紙于各肆頭相傳而不許與諸樓通凡客識娼妓於一樓爾後如微之他家則其從奴先趨而報前樓主此約最嚴矣蕩客或不辨債逋棄舊就新猶竊聘所相昵而其娼妓或有情實共秘不報知則主事露皆有此罰也其他及樓主幇間輩苟失戒約之舊例者皆然

話辛問苦只憑君曷捧荊釵裡茜裙券滿他年遂情願

陽臺敢作再歸雲

凡娼妓之典身年到五五始除其券去就可隨意然而輕佻飄蕩不必從定準有券未滿而見贖者有待券滿而歸所歡者有雖見贖而非其得意者又有初昵而後疎者狡惡奸黠之徒乘其隙再誘而墮苦海者往往皆是然百中二三貞淑守信者經多少辛苦從良而善其終焉○蒙求云孟光荊釵孟光梁鴻妻也然後漢書梁鴻傳云為推髻著布衣操作前無有荊釵字考事文類聚五車韻瑞等書亦皆加此二字蓋有所據　趙嘏詩云寂寞堂前日又曛陽臺去作

不歸雲。以上六首。賦娼妓有情實者。

屏上亂衣從手搭容稀寥寥送殘臘卸頭自笑同懶情
睡貓分被坐火閤

歲晚遊客不多。娼妓亦有暇。○搭字書云。附也。挂也。白居易詩云。薰籠亂搭舊衣裳。韓偓詩云夜深斜搭秋千索。　卸頭解其首飾也。顧貞觀閨情詞云。卸頭燈影昏。　火閤謂火籠。楊萬里詩云火閤香消雪尚香。陰鏗詩云。火籠恒暖脚。

俳兒打諢唱兒絃潑散殫歡共欲顛暄煥通宵無藉在
春風格是上酡顏

諸樓歲晚。集飲。俗謂之年忘。○俳兒出唐彥曾傳。打諢出避暑錄。又珠璣藪云。取笑。插科。打諢。打訌。皆戲謔之言也。　瑯琊代醉編云。淮人歲暮家人宴集曰潑散。又出韋應物詩。　暄煥如云暖熱。陸釴詩云。所嗟二三子。慰我頗暄煥。　無藉在。任放不拘忌之意。白居易詩云。白頭無藉在。醉倒亦何妨。陸游詩云。詩酒本來無藉在。　容齋隨筆云。格與隔之字義同。格是猶言已是。

衆除紅翠有餘資阿主欣欣送歲時多謝儺翁嘍囉去
祝成富貴不煩伊

曲中幾箇肆主。皆無賴遊惰之徒。然射利于夜合之資。動輙成巨産。　立春前一日。謂之節分。街上有驅疫者。兒女以紙色裹炒豆如其歲數及錢一文與之則唱祝壽驅邪之辭去。謂之疫除。都下悉然。○阿主出應諧錄。　儺翁出于秦中歲時記。　元稹詩云。富貴祝來何所遂。聰明鞭得轉無機。注。祝富貴鞭聰明。皆正旦童穉俗法。

祇園廟畔送窮情祈賽都人紛遝明似遺一年多少悶
佯嘲佯罵鬭聲行

除夜都人皆詣祇園。就廟燈而取新火。歸途各手引

火繩一條。俗例以之備歲朝之爨炊。此則鑽燧改火之意也且雜遝往還之間。彼是大聲壯語。極口嘲罵。然泊然相過。不敢尤之。古俗至于今。不知何謂。

大道漸沈衣帽塵祠燈爛漫夜過寅請看背後攢峰際
已抹紅霞一綫春

戶戶迎新新景催草繩千尺絡檐廻不消月令殊鑽燧
頒取社頭燈火來

都下。俗。歲首懸藁索於門檐。索以稻秸為之。每寸出其端尺餘下垂如條。臘末既為其設。至正月十四日。而除之。○熙朝樂事云。正月朔日。揷芝麻梗於簷頭

謂之節節高今俗用藁繩此類也　以上六首賦歲
暮之事俗

一暑一寒覩俗情繁華逐日飾昇平采風今屬潛夫筆
莫道渾非正雅聲

○總括一首。　通計一百廿首。

鴨東四時雜詞終

松下見林 著 速水常成 補

前王廟陵記

安永七年（一七七八）京都刻本

據安永七年（一七七八）京都刻本影印

松下見林先生著

増註 前王廟陵記

此書ハ見林先生の原著ニ増補あまたゝひ世ニ行されたるニ猶
近き頃山陵の事盛大ニなりしより又其考弥精細なり故ニ
今まさにこれを或人の考証によりまたく細註し其標ニ註字の上ニ
○加ふ四方の識者坐右の珎となし給ん事を欲す　四書堂主誌

前王廟陵記序

仁賢天皇聖勅曰。忍壊陵墓
誰人主以奉天之靈藤原吉
野諫言曰。山陵猶宗廟也縱
無宗廟臣子何處仰誠哉斯
訓也是以謀毀山陵處八虐
之一。律所不原志兆域陵地
陵戸守戸兆域内不得葬埋
臣庶及耕牧樵採令式之急
務也。苟前所禱之禮。其追遠
之心。可貴可法而已。如此善
政雖備盜賊發陵者不絶況

及
皇綱解紐諸陵寮廢職
至今人犂爲田圃壑無完柩
余雖微賤每思之沾涙於艸
莽袖自壯歲參考舊記幷自
訪其地或問於故老記錄之
其他懿后維城良相之九原
感遠存往不可不敬往往有
不知名字遠近古冢亦不可
不敬遵皆義然事多不遑羅
縷今舉
前王之諸陵名前王廟陵記
庶幾令覽者尊本敬始云爾

元祿九年中元日
平安城松下見林序

前王廟陵記卷之上

平安城松下見林撰

日向埃山陵　天津彦彦火瓊瓊杵尊。在日向國。◎薩摩国高城郡水引郷[illegible]后木花佐久夜毘賣命陵[illegible]

無陵戸。延喜諸陵式

日本書紀曰。可愛之山陵。可愛此云埃。

今按。可愛。今薩摩國頴娃郡陵戸。見諸陵式。依陵有陵戸守戸。有有陵戸而無守戸者。有有守戸而無陵戸者。有無陵戸守戸者。陵戸其山陵有姓也。守戸山陵守也。有陵戸而無守戸者。陵戸兼守戸也。有守戸而無陵戸者。守戸兼陵戸也。日本書紀顯宗天皇紀曰。充陵戸兼守山是也。

日向高屋山上陵　彦火火出見尊。在日向國。無陵戸。同

今按。薩摩國阿多郡。大隅國肝屬郡。俱有鷹屋郷。高與鷹訓同。蓋二郷境相接。恐此地之山。◎今薩摩国阿多郡加世田高屋社北方山上 山上峰東峰頂上大石敷並所御陵也

日向吾平山上陵　彦波瀲武鸕鷀草不葺合尊。同在日向國。無陵戸。同◎今大隅国肝属郡始良郷上名村巖洞中后玉依毘賣命陵相並

古事記曰。高千穗山之西。

今按。今大隅國始羅郡之山。

已上神代三陵。於山城國葛野郡田邑陵南原。祭之。其兆域東西一町。南北一町。同 或云太秦木嶋社之地也

今按。古日向者。今大隅薩摩日向是也。帝都漸遷東。去西海遠。故於山城國葛野郡祭之。先王報本之意至矣盡矣。今田邑陵南原不分明。余訪其蹤。粗得捷徑。田邑陵事見下文。田邑陵南有岸。岸南有平原。可方一町。今爲田。凡四方有封疆。南堅木原也。此地亦屬堅木原。田地中東南有小墳。又西北隅有小社。土人不知其始。蓋此平原本祭神代三陵之地。小築三陵。後世葬爲田。存此等物。崇其蠧乎。

人皇第一代

畝傍山東北陵　畝傍橿原宮御宇神武天皇。諱若毛沼命 在大和國高市郡。兆域東西一町。南北二町。守戸五烟。同 七十六年三月十一日崩。年百二十七。在位七十九年 ◎在山本村[illegible]字御陵其周[illegible]之田称神武田

古事記曰畝火山之北方白檮尾上
性靈集益田池碑銘序曰畝傍北峙
今按畝傍山今奈良西南六里久米寺北俗云慈明寺山是也東北陵可百年以來壞爲糞田民呼其田字神武田暴汚之所爲可痛哭也餘數畝爲一封農夫登之恬不爲怪及觀之寒心夫神武天皇繼神代草昧之蹤東征平中州闢四門朝八方王道之興治敎之美實創於此我國君臣億兆當致尊信之廟陵也澆季至於此噫哀哉

第二代　桃花鳥田丘上陵　葛城高丘宮御宇綏靖天皇　諱神渟名河耳命
在大和國高市郡兆域東西一町南北一町守戸五烟　同三十三年五月十日崩年八十四在位卅三年　◎在慈明寺村東 [illegible]
古事記曰衝田岡
今按桃花鳥田衝田和訓同
桃花鳥田丘俗云鳥田丘在久米寺戌亥
第三代　畝傍山西南御陰井上陵　片鹽浮穴宮御宇安寧天皇　諱磯城津彦玉手看命
在大和國高市郡兆域東西三町南北二町守戸五烟　同三十八年十二月六日崩年五十七在位三十八年　◎在吉田村西北字阿禰山祠廟在同村東南
古事記曰畝火山之美富登
今按日本紀御蔭作御陰和訓美富登或曰久米寺西南
第四代　畝傍山南纖沙溪上陵　輕曲峽宮御宇懿德天皇　諱大日本彦耜友命
在大和國高市郡兆域東西一町南北一町守戸五烟　同三十四年九月八日崩年七十七　◎在池尻村北字麻名子山東谷之山之上祠廟在畝火村之東北平林之中
古事記曰畝火山之眞名子谷上
今按纖沙溪眞名子谷和訓近或曰久米寺

東南
第五代　掖上博多山上陵　掖上池心宮御宇孝昭天皇　諱觀松彦香殖稻命
在大和國葛上郡兆域東西六町南北六町守戸五烟　同八十三年八月五日崩年百十四在位八十三年
今按葛城山東菅山多據上博多山不知何山益御所邊或云三室村　◎[illegible]
第六代　玉手丘上陵　室秋津嶋宮御宇孝安天皇　諱日本足彦國押人尊
在大和國葛上郡兆域東西六町南北六町守戸五烟　同百二年正月九日崩年百三十七在位百二年　◎在玉手村字宮山側在八幡祠

今按玉手丘。玉手村是也。在室村西北河京。

第七代 片丘馬坂陵 黒田廬戸宮御宇孝靈天皇在大和國葛下郡兆域東西五町南北五町守戸五烟。諱大日本根子彦太瓊 同七十六年二月八日崩 年百二十八 在位七十六年

古事記曰。片岡馬坂上。◎在王寺門前村之西馬瀬坂之上字奉垣戸

或曰。片丘馬坂今馬瀬坂是也。片丘在奈良西南五里餘。

第八代 劒池嶋上陵 輕境原宮御宇孝元天皇在大和國高市郡兆域東西二町南北一町守戸五烟。諱大日本根子彦國牽尊 同五十七年九月二日崩 年百十六 在位五十七年

古事記曰。劒池之中岡上。◎在石川村東劒池中山

或曰。劒池在高市郡難波池中有靈劒。

第九代 春日率川坂上陵 春日率川宮御宇開化天皇。在大和國添上郡兆域東西五段南北五段以在京戸十烟毎年差充令守。諱稚日本根子彦大日日尊 同◎右在同所漢國社記念佛寺境内

或曰。春日率川坂上陵今在奈良林小路。韓國社與念佛寺境内。六十年四月九日崩 年百十五 在位六十年

第十代 山邊道上陵 磯城瑞籬宮御宇崇神天皇。在大和國城上郡兆域東西二町南北二町守戸一烟。諱御間城入彦五十瓊殖尊 同六十八年十二月五日崩 年百十九 在位六十八年

古事記曰。山邊道勾之岡上。◎在柳本東別所村字仁賀財益御陵之轄南与景行陵南北並

或曰今東山乎。俗云宇和奈利山。亦云。玉身墓。

第十一代 菅原伏見東陵 纏向珠城宮御宇垂仁天皇在大和國添下郡兆域東西二町南北二町。陵戸二烟守戸三烟。諱活目入彦五十狹茅尊 同九十九年七月三日崩 年百四十一 在位九十九年

古事記曰。菅原之御立野中。

今按菅原在奈良西一里餘。今關村中有小堂畝丘。塀残處乎。或云。寶來寺村。◎在齋音寺村字蓬來山

第十二代 山邊道上陵 纏向日代宮御宇景行天皇在大和國城上郡兆域東西二町南北二町。陵戸一烟。諱大足彦忍代別尊 同六十年十一月七日崩 年百四十三 在位六十年 ◎在渋谷村東南字向山与崇神陵相望

或曰。今在上總村。俗云。王墓山是歟。

第十三代 狹城盾列池後陵 志賀高穴穗宮御宇成務天皇在大和國添下郡兆域東西一町南北三町守戸五烟。諱稚足彦尊 同六十年六月十一日崩 年百八 在位六十年

古事記曰。沙紀之多他那美。在退昇寺郷之内山陵村字石塚山

今按。狹城郷名。續日本紀作佐貴。在奈良西。超昇寺戊亥盾列池。今没。藥師寺其跡云。

扶桑略記曰。康平六年五月十三日。發遣山陵使。是依去三月盗人發池後山陵掠奪寶物也。九月廿六日。被定山陵寶物等如舊可返納之状。紀傳明經等諸道勘文。并犯人罪名被勘法家。十月十七日。興福寺僧静範坐山陵事。配流伊豆國。縁坐者十六人。僧俗共

配流安房常陸佐渡隱岐土左等國。此日興福寺使參議左大辨藤原經家卿少納言源師賢等。爲遠流寺家僧被告其由也。

第十四代

惠我長野西陵。穴戸豐浦宮御宇仲哀天皇。諱足仲彦尊。在河内國志紀郡。兆域東西二十町。南北二町。陵戸一烟。守戸四烟。同九年二月六日崩。年五十二。在位九年。

或曰。西陵今在上原村。在今丹南郡岡村。營内字美佐武佐伊

古事記曰。河内惠賀之長江。今按。江當作野。

今按。播磨國明石郡。亦有仲哀天皇陵。此麛坂王忍熊王所興。然二王子滅。不能葬于此。

陵。

神功皇后二年冬十一月。葬於河内國長野陵。

日本紀曰。神功皇后伐新羅之明年春二月。皇后領羣卿及百寮。移于穴門豐浦宮。收天皇之喪。從海路以向京。時麛坂王忍熊王。聞天皇崩。亦皇后西征。并皇子新生。而密謀之曰。今皇后有子。羣臣皆從焉。必共議之。立幼主。吾等何以兄從弟乎。乃佯爲天皇作陵。

詣播磨興山陵於赤石。仍編船絙于淡路嶋。運其嶋石而造之。則毎人令取兵而待皇后。

第十五代

狹城盾列池上陵。磐余稚櫻宮御宇神功皇后。諱息長足姫尊。在大和國添下郡。兆域東西二町。南北二町。守戸五烟。同乙丑年四月十七日崩。年百。摂政六十九年。

今按。狹城見上盾列池上陵。俗云御陵山。在超昇寺村西北。山陵麓有鳥居。半腹敷如小壷。物周廻如車輪。此古所謂埴輪之類。立陵上者。頂石棺露。年代久。土崩自露乎。若戰鬪

賊發之乎。◎在山陵村成務陵西北五町許字五社神

古事記曰。狹城楯列陵。

續日本後紀曰。承和十年四月己未朔。楯列陵守等言。去月十八日食時山陵鳴二度其聲如雷。即赤氣如飄風指離飛去申時亦鳴其氣如初指兌飛亘遣參議正躬王加撿察伐陵木七十七株。至枯木等不可勝計。使即勘當陵守長百濟春繼亡矣。四月己卯使參議從四位上藤原朝臣掃部頭從五位下坂上大宿禰正野等奉謝楯列北南二山陵。依去三月十八日有奇異捜撿圖錄有二楯列山陵北則神功皇后之陵。倭名大足姫命皇后南則成務天皇之陵。倭名稚足彦天皇世人相傳以南陵爲神功皇后之陵偏依是口傳每有神功皇后之祟。空謝成務天皇陵先年緣神功皇后之祟所作弓劒之類。誤進於成務天皇陵今日改奉神功皇后陵。

今按。陵之在狹城者三。盾列池後。盾列池上。高野是也。今到此地見之。三陵儼然讀續日本後紀見陵之所在。今稱神功皇后之陵者在南如世人口傳承和以後亦誤乎又國史多三家之訛。北南二字相易乎。書以傳疑。

扶桑略記曰。六條天皇永保二年五月廿日庚子。奉幣石清水宮。告神功皇后山陵樹木燒失之由也。

第十六代
惠我藻伏山岡陵。輕嶋明宮御宇應神天皇在諱大鞆和氣尊亦譽田別尊河內國志紀郡。兆域東西五町。南北五町。陵戶二烟。守戶三烟。同四十一年二月十五日崩年百十一在位四十一年

譽田八幡宮緣起曰。奉葬于古市郡長野山藻伏山岡陵是也。欽明天皇二十年二月十五日。勅陵前立社。譽田八幡宮是也。

日本紀曰。雄略天皇九年秋七月壬辰朔。河內國言。飛鳥戶郡人田邊史伯孫女者。古市郡人。書首加龍之妻也。伯孫聞女產兒。往賀聟家。而月夜還。於蓬蔂丘譽田陵下。逢騎赤駿者。其馬時灌略而龍翥。欻聳擢而鴻驚。異

體峰生殊相逸發伯孫就視而心欲之乃鞭所乘驄馬齊頭並轡爾乃赤駿超攄絕於埃轍驅鶩迅於滅沒於是驄馬後而怠足不可復追其乘駿者知伯孫所欲仍停換馬相辭取別伯孫得駿甚歡驟而入廐解鞍秣馬眠之其明旦赤駿變爲土馬伯孫心異之還覓譽田陵乃見驄馬在於土馬之間取代而置所換土馬。

今按日本書紀所謂蓬蔂丘譽田陵者藻伏山岡陵乎按書紀前後文當在古市郡然則譽田在古市郡與緣起之說同據延喜式則藻伏山岡陵在志紀郡二說不同盍古市郡志紀郡相鄰陵接二郡界故爲在志紀郡爲在古市郡而已。

扶桑略記曰。治暦二年四月廿五日石清水宮司言上去三月廿八日戌刻河內國譽田天皇山陵震動放光之異也。

古事記曰川內惠賀之裳伏山岡。百舌鳥陵也。

今按藻伏與百舌鳥和訓近故後人註古事記誤混歟然和泉國大鳥郡有御廟山毛受八幡書以傳疑。或云。自毛受陵葬藻伏山。

第十七代　百舌鳥耳原中陵難波高津宮御宇仁德天皇。◎在譽田八幡宮

在和泉國大鳥郡兆域東西八町南北八町陵諱大鷦鷯尊戸五烟同八十七年正月十六日崩年百十一云百廿二在位八十七年

古事記曰。毛受之耳原上。

今按百舌鳥中陵。俗云。大山陵。在泉界東南天王寺舊記云四天王寺在難波荒陵村以俗號荒陵寺寺西南有荒陵相傳仁德天皇葬之以爲陵處其後以爲此地不可更石津原以定陵處。大山陵是也。此陵空荒故名荒陵。俗云茶臼山。◎在柚之松村。字大仙陵

第十八代　百舌鳥耳原南陵磐余稚櫻宮御宇履中天皇。

在和泉國大鳥郡兆域東西五町南北五町陵諱大兄去來穗別尊戸五烟同六年三月十五日崩年七十七在位六年

古事記曰。毛受。

今按百舌鳥南陵。今在上石津村北。俗稱揖鉢山

第十九代 百舌鳥耳原北陵。丹比柴籬宮御宇反正天皇。諱蝮瑞歯別尊 在和泉國大鳥郡。兆域東西三町。南北二町。陵戸五烟。同六年正月廿三日崩 年六十在位六年

古事記曰。毛受野。

今按。百舌鳥北陵。今楯井池是也。◎在中筋村字田出井

第廿代 惠我長野北陵。遠飛鳥宮御宇允恭天皇。諱雄朝津間稚子宿祢尊 在河内國志紀郡。兆域東西三町。南北二町。陵戸一烟。守戸四烟。同四十二年正月十四日崩 年八十在位四十二年

或曰。今在國府市野山。在澤田村字中之家

第廿一代 菅原伏見西陵。石上穴穗宮御宇安康天皇。在大和國添下郡。兆域東西二町。南北三町。守戸三烟。同三年八月九日崩 年五十六在位三年

今不詳其處。或云寶來村。◎在宝來村西城山之外字保天堂

第廿二代 丹比高鷲原陵。泊瀬朝倉宮御宇雄略天皇。諱大泊瀬幼武尊 在河内國丹比郡。兆域東西三町。南北三町。陵戸四烟。同二十三年八月七日崩 年六十二或云百二十四在位廿三年

古事記曰。河内之多治比高鸇。

或曰。丹比。今丹北郡。高鷲原陵。俗云。丸山。在鴻泉村。

第廿三代 河内坂門原陵。磐余甕栗宮御宇清寧天皇。諱白髪尊 在河内國古市郡。兆域東西二町。南北二町。陵戸四烟。同五年正月十六日崩 年四十一在位五年

或曰。坂門原陵。今平野山中。觀音堂上。大松樹之所生。◎西浦村字白髪山

第廿四代 傍丘磐杯丘南陵。近飛鳥八鈎宮御宇顯宗天皇。諱弘計又云來目稚子亦袁祁石巣別尊 在大和國葛下郡。兆域東西二町。南北三町。陵戸一烟。守戸三烟。同三年四月廿五日崩 年三十八在位三年

古事記曰。片岡之石坏岡上。◎在池田村字二見山 或云平野村。

今按。傍丘片岡同。磐坏岡今未詳。

第廿五代 埴生坂本陵。石上廣高宮御宇仁賢天皇。諱億計又大脚又嶋稚子 在河内國丹比郡。兆域東西二町。南北二町。守戸五烟。同十一年八月八日崩 年五十在位十一年

今按。埴生坂本陵。今葛井寺南陵歟。俗以葛井寺南陵謂反正天皇陵者誤也。反正天皇陵在百舌野。見上。丹比。今丹南郡。◎在今丹南郡野々上村東城字小山同郡野中村属地

第廿六代 傍丘磐杯丘北陵。泊瀬列城宮御宇武烈天皇。諱小泊瀬稚鷦鷯尊

在大和國葛下郡兆域東西三町南北三町守戸五烟。（同八年十二月八日崩　年五十七在位八年）

古事記曰。片岡之石坏岡。（在築山村　字城山）

今按磐坏丘北陵未詳其地。或云平野村。

第十七代

二嶋藍野陵。磐余玉穗宮御宇繼體天皇在攝津國嶋上郡兆域東西三町南北三町守戸五烟。（諱男大迹尊）（同二十五年二月七日崩　年八十二在位廿五年）

今按二嶋藍野陵今在嶋上郡嶋下郡界大田村俗云池上亦茶臼山（三嶋藍名上下）藍寄陵周野名。

第廿八代

古市高屋丘陵勾金橋宮御宇安閑天皇在河内國古市郡兆域東西一町南北一町五段陵戸一烟守戸二烟。（諱勾大兄　謚廣国排武金日尊）（同二年十二月十七日崩　年七十在位二年）

或曰今高屋村城山是也。（明應[illegible]）

或曰近年土民發陵得古代器物等。（按高屋村今云古市村字城山）

第廿九代

身狹桃花鳥坂上陵檜隈廬入野宮御宇宣化天皇在大和國高市郡兆域東西二町南北二町守戸五烟。（諱檜隈高田　謚武小廣国押盾尊）（同四年二月十日崩　年七十三在位四年）（[illegible]）

今按身狹地名。或作牟佐或作武遮音訓通

身狹桃花鳥坂上陵。今其處雖不明在益田池西南可以性靈集辯之。或云。鳥屋村。

益田池碑銘序曰武遮荒壟押其坤。

第三十代

檜隈坂合陵磯城嶋金刺宮御宇欽明天皇在大和國高市郡兆域東西四町南北四町陵戸五烟。（謚天国排開庭尊）（同三十二年四月十五日崩　年六十三在位卅三年）

今按檜隈地名。益田池邊。（在平田村　字猿山）

益田池碑銘序曰。水激檜隈之下。

聖德太子傳記曰檜隈寺者欽明天皇廟也。

今按不知寺之有無。

第卅一代

河内磯長中尾陵譯語田宮御宇敏達天皇在河内國石川郡兆域東西三町南北三町守戸五烟。（諱譯語田　謚渟名倉太玉敷尊）（同十四年八月十五日崩　年六十九在位十四年）

古事記曰。川内科長。

或曰。今在葉室村山。（在太子村葉室山之間西山字天王山）

第卅二代

河内磯長原陵磐余池邊列槻宮御宇用明天皇在河内國石川郡兆域東西二町南北三町守戸三烟。（諱大兄　謚橘豐日尊）（同二年四月九日崩　年六十九在位二年）

古事記曰科長中陵。
或曰今在春日村上太子御墓山辰巳五六
町。可◎在春日村平林之中字圓明上
第卅三代 倉梯岡陵。倉梯宮御宇崇峻天皇。在大和國十
市郡。無陵地并陵戸。同五年十一月三日崩年七十三在位五年 諱泊瀬部亦長谷部之若雀尊
古事記曰倉梯岡上。
今按陵地陵邊屬陵地也。所謂兆域也。
或曰今在多武峰東口。
第卅四代 磯長山田陵。小治田宮御宇推古天皇。在河内 諱額田部謚豊御食炊屋姫天皇

國石川郡。兆域東西二町。南北二町。陵戸一烟。
守戸四烟。同卅六年三月七日崩年七十五在位卅六年
古事記曰大野岡上陵。後遷科長大陵。
或曰今在南山田村。◎字高塚
扶桑略記曰康平二年六月二日河内國司
言上盗人發推古天皇山陵之由。
第卅五代 押坂内陵。高市岡本宮御宇舒明天皇。在大和 諱田村謚息長足日廣額天皇
國城上郡。兆域東西九町。南北六町。陵戸三烟。
同 今按押坂忍坂也。或作恩坂。内陵雖未詳其

地。恩釜口長岳寺西千塚邊。或云。在忍坂村 字壇々山
第卅七代 大坂磯長陵。難波長柄豊碕宮御宇孝徳天皇 諱輕謚天萬豊日天皇
在河内國石川郡。兆域東西五町。南北五町。守
戸三烟。同白雉五年甲寅十月十日崩年五十九在位十年
或曰今在山田村北山。◎在山田村大道竹内越北方字上之山
第卅六代 第卅八代 越智岡上陵。飛鳥川原宮御宇皇極天皇。在大 諱寶謚天豊財重日足姫天皇
和國高市郡。兆域東西五町。南北五町。陵戸五
烟。同白鳳十二年辛酉七月廿四日廿四月六十八在位七年
或曰越智岡在宗我川上。◎在鳥屋村越智村

第卅九代 山科陵。近江大津宮御宇天智天皇。在山城國 諱葛城謚天命開別天皇
宇治郡。兆域東西十四町。南北十四町。陵戸六
烟。同白鳳廿二年辛未十二月三日崩年五十八位十年
萬葉集従山科御陵退散之時。額田王作歌
日。
八隅知之。和期大王之恐也。御陵奉仕流。山
科乃鏡山爾。夜者毛夜之盡。晝者毋日之盡。
哭耳呼泣乍。在而哉百磯城乃大宮人者。去
別南。

江次第曰。在北山背。
今按。山階陵。今俗云御廟野。（在山科郷御陵村字御廟野中。陵前有小祠）
又按。山科陵。在鏡山麓。陵四面野名御廟野。
陵狀有八角石壇。上有六角丘。皆以碤碱築
之。壇周廻亦敷碤碱。樹木叢生。御廟野北方
廣莫清淨。小松生南方。汙萊多爲人馬往來
路。或伐木或耕犂之。遠方十四町。式條不知
何代發石棺南遷陵下。石棺蓋露在野艸間。
前設小社。有鳥居。東南里名陵村。

〈前王廟陵記卷上〉　十九

公事根源抄云。天智天皇ノ御サヾキ山城國山
階ニアリ。昔シ此御門御馬ニメサレテ山科ノ里ニ
行幸アリテ。其マヽ歸給ハザリキ。然ルニ崩所ヲ。
イヅク共知人ナシ。タヾ御沓ノ落留リタル所ニ。
御サヾキヲツ。タテケル。イトフシギナル事ニテ
侍リキ。（西宮記云。此ノ説本出本紀甲巻）
今按。沓落處築陵。所不詳。讀日本紀。輕信土
民之説。筆之于書。日本紀曰。天智天皇十年
九月寢疾不豫。十二月乙丑（三日）崩于近江宮。此

國史之明文也。可見崩所近江滋賀宮也。後
世土民混雜。行睿居士事。爲天智天皇事。元
亨釋書曰。清水寺者。寶龜九年四月沙彌延
鎭（或曰報恩）有夢事。泝淀河而行。見一支派有金
色流。鎭窮水源至瀧下。側有艸菴。白衣老翁
居焉。鎭問住此幾年。姓名爲誰。答曰。吾名行
睿。隱約此地已二百歲。持千手千眼神咒。我
待汝者久。今來也。我有東州之行。未果。汝暫
替我棲此。此地又好建練若。乃指庭前林樹

〈前王廟陵記卷上〉　二十

曰。我以是擬大悲像材。吾若遲歸。汝先營之。
言已向東而去。過期而不返。鎭出菴尋求。不
能相見。一日到山科東峯。見翁履。鎭取履而
歸。思念恐此翁大悲之應現也。遺履者示其
迹耳。云云　此遺履地山科音羽山法嚴寺也。法
嚴寺者。天智天皇所建立。故混曰天智天皇
於山科落履。不知所終。豈不大誤哉。
（第四十代）檜隈大內陵。飛鳥淨御原宮御宇天武天皇。在（諱大海人。諡天渟中原瀛眞人天皇）
大和國高市郡北城東西五町。南北四町。陵戶

五畑（同朱鳥元年丙戌九月九日崩六十五在位十五年）

或曰今在清見原村西。（在五條野村字丸山）

第四十一代 同大内陵藤原宮御宇持統天皇。合葬檜前大内陵。陵戸更不重充。（同大宝二年十二月廿二日崩五十八在位十一年 諱莵野諡高天原廣野姫天皇）

續日本紀曰。文武天皇二年十二月甲寅太上天皇崩。三年十一月癸酉火葬於飛鳥岡。壬午合葬於大内山陵。

今按飛鳥岡行廻岡今岡寺。天子火葬之始。起於持統天皇。

第四十二代 檜前安古岡上陵藤原宮御宇文武天皇。在大和國高市郡。兆域東西三町南北三町。陵戸五烟。（諱珂留諡天之真宗豊祖父天皇 同慶雲四年六月十五日崩年二十五在位十一年）

今按安古岡未詳。或云在平田。

續日本紀曰。慶雲四年六月辛巳崩。十一月丙午火葬於飛鳥岡。二十日奉葬於檜隈安古山陵。

第四十三代 奈保山東陵。平城宮御宇元明天皇。在大和國添上郡。兆域東西三町南北五町。守戸五烟。（諱阿閇諡天津御代豊成姫天皇 同）

或曰今俗云大奈閇七廷狐邊有七立石。鋳狐。

續日本紀曰。養老五年十二月己卯太上天皇崩于平城宮中安殿。乙酉太上天皇葬於大和國添上郡椎山陵。（同養老五年十二月七日崩年六十一在位七年）

今按據延喜式觀之則椎猶字之誤。猶訓奈保。（在大奈良坂村西土人称養老峯所是也今峯崩 真陵不知御陵石奈良坂春日祠辺在）

第四十四代 奈保山西陵。平城宮御宇淨足姫天皇。在大和國添上郡。兆域東西三町南北五町。守戸四烟。（諱飯高諡日本根子高瑞淨足姫天皇 同天平九年四月廿一日崩年六十九在位九年）

或曰楊梅陵北。或云在法花寺村。（在養老峯称之西字弁天山）

第四十五代 佐保山南陵。平城宮御宇勝寶感神聖武天皇。在大和國添上郡。兆域東西四段西七町南北七町。守戸五烟。（諱首諡天璽国押開豊櫻彦天皇 同天平勝宝八年五月二日崩年五十六在位廿五年）

或曰今奈良北陵森眉間寺。（在奈良法蓮村眉間寺後山）

第四十七代 淡路陵。廢帝。在淡路國三原郡。兆域東西六町南北六町。守戸一烟。（諱大炊 同天平神護元年十月廿三日崩年三十三在位六年）

或曰神宅東二十町許。（在加集中村天王森陵上在社）

第四十六代 高野陵。平城宮御宇天皇。孝謙天皇 在大和國添下郡。兆域東西五町。南北三町。守戸五烟。

第四十八代 稱徳天皇 諱阿倍 同 年五十三 在位五年

續日本紀曰。神護景雲三年八月丙午。葬高野天皇大和國添下郡佐貴郷高野山陵。

今按。御陵山西北陵。若是乎。往年有人發此陵。奪陵中財之黨。身腫苦死。觀者恐還財。于本處云。◎按西大寺東北古墳是此陵或云成務陵坤方一丘称高冢是歟

第四十九代 田原東陵。平城宮御宇天宗高紹天皇。光仁天皇 諱白璧 号後田原天皇 在大和國添上郡。兆域東西八町。南北九町。守戸五烟。

同 天應元年十二月廿三日崩 年七十三 在位十二年

或曰。今鹿野國東二里可。俗云。王墓是歟。

續日本紀曰。天應元年十二月丁未崩。庚申葬於廣岡山陵。延暦元年八月己未。遣治部卿從四位上壹志濃王。左中辨從四位下紀朝臣古佐美。治部大輔從五位上藤原朝臣黒麻呂。主稅頭從五位下榮井宿禰道形。陰陽頭從五位下紀朝臣本。大外記外從五位下朝原忌寸道永等六位已下解陰陽者合一十三人。於大和國。行相山陵之地。爲改葬天宗高紹天皇也。五年十月甲申。改葬太上天皇於大和國田原陵。◎在田原郷日笠村字家之本

第五十代 柏原陵。平安宮御宇桓武天皇。諱山部 諡日本根子皇統彌照天皇 在山城國紀伊郡。兆域東八町。西三町。南五町。北六町。加丑寅角二岑一谷。守戸五烟。同 延暦廿五年三月十七日崩 年七十 在位廿四年

今按。柏原地名。桓武天皇葬此。故號柏原帝。

江次第曰。稻荷山南野。

山槐記曰。伏見山松原中也。

拾芥抄曰。在伏見山。從東邊二町許。入在稻荷南野。◎按上古深草惣称伏見也柏原之地慶長以後爲御草山故失其田名今谷口東龜前堂原自南面望之宛然殘山而北六町在谷字曰一之谷其地悉與式文合祠于其頭因志

今按。江次第。遠謂稻荷山南野者。甚疎略也。惟山槐記指南得正傳。直路。今據此推之。越稻荷山南則深艸極樂寺。攝家代代墓所也。昭宣公建立見菅家文草 今變爲寶塔寺。寶塔寺南霞谷。爲仁明天皇陵地。在藤森東。霞谷南伏見山也。即是柏原。爲桓武天皇陵地。熟玩式條兆域。山槐記所在。而察當時地圖。則今伏見城山古御香。大

龜不從。總柏原陵地也。然則陵之所在爲城中央。恐築城時陵壞必矣。後世以城山古御香等名目滋興。終失柏原大名。今呼金家松山處似御在所

類聚國史曰。延暦二十五年三月辛巳天皇崩。癸未以山城國葛野郡宇太野爲山陵地。西北兩山有火自焚。日赤無光。大井比叡小野栗栖野等山共燒。烟灰四滿京中晝昏。上下坂登以爲所定山陵地近賀茂神。疑是神社致災乎。卽決卜筮。果有其祟。上曰。初卜山陵從

龜不從也。今災異頻來。可不愼歟。卽自所禱火災立滅。

今按。始以宇太野爲陵地。以災變終改定柏原宇太野。今紫野以北野近上賀茂處乎。

或曰。今鹿園寺西衣笠山北有寺多野。是歟。

仁部記曰。文永十一年十二月廿九日。諸陵寮頭賀茂朝臣在爲使。左大史小槻宿禰秀氏覆奏文云。實撿言上柏原山陵被掘發事。御在所巓東西一丈三尺許。南北一丈六尺。餘所掘發也。上似以石塞之。右依宣旨實撿言上如件。抑件山陵登十許丈。壇廻八十餘丈。但於陵中者不及實撿。仍雖在状謹解。

第五十代

楊梅陵平安宮御宇日本根子推國彥尊天皇。平城天皇　諱安殿　始小殿

在大和國添上郡。兆域東西二町。南北四町。守戶五烟。同　天長元年七月七日崩　年五十一在位四年

或曰。今法華寺西南有楊梅天神。其北有陵俗云宇和奈部是耶。在超昇寺鄉之內常福寺村字曰弥智山

第五十二代

嵯峨天皇　諱神野

續日本後紀曰。承和九年七月丁未。太上天皇崩于嵯峨院。春秋五十七。遺詔曰云云。夫存亡天地之定數。物化之自然也。欲朝死夕葬。夕死朝葬。作棺不厚。覆之以席。約以黑葛。擇山北幽僻不毛地。葬限不過三日。夜刻須向葬地。從者不過廿人。戊申擇山北幽僻之地。定山陵。以商布二千段。錢一千貫文。奉充御葬料。卽日御葬畢。承和九年七月十五日崩　年五十七在位十四年

皇年代私記曰。葬嵯峨院北山地。在葛野郡大覺寺北御廟山上

山槐記曰元暦元年八月廿三日己卯。被立御卽位山陵使翼日於攝政亭左大辨經房云。向嵯峨不知其所相尋邑老之處大覺寺内北方山云云向件寺之間。一町餘東小通忽騎馬向彼所拜了燒宜命歸亭。

第五十三代
淳和天皇 諱大伴謚天高讓弥遠天皇

皇年代私記曰承和七年五月八日崩。五十七。號西院帝。依遺詔火葬散御骨於大原野

續日本後紀曰承和七年五月辛巳後太上

天皇顧命皇太子曰予素不尚華飾況耗人物乎。斂葬之具一切從薄朝例凶具固辭奉還葬畢釋縗莫煩國人葬者藏也欲人不觀。送葬之辰宜用夜漏追福事同須儉約又國忌者雖義在追遠而絆苦有司又歲竟分綵號曰荷前論之幽明有煩無益竝須停狀必達朝家夫人子之道遵教爲先奉以行之。不得違失重命曰予聞人沒精魂歸天而空存冢墓鬼物憑焉終乃爲祟長貽後累今宜碎骨爲粉散之山中於是中納言藤原朝臣吉野奏言昔宇治稚彦皇子者我朝之賢明也此皇子遺教自使散骨後世效之然是親王之事而非帝王之迹我國自上古不起山陵所未聞也山陵猶宗廟也縱無宗廟者臣子何處仰於是更報命曰予氣力綿惙不能論決卿等奏聞嵯峨聖皇次蒙裁耳癸未後太上天皇崩于淳和院春秋五十五戊子此夕奉葬後太上天皇於山城國乙訓郡物集村御骨碎粉奉散大原野西山嶺上。

今按吉野奏言中宇治稚彦皇子使散骨事舊事紀古事記日本紀無之且菟道稚郎皇子墓在山城國宇治郡北域東西十二町南北十二町守戸三烟式條炳焉也抑火葬天竺之俗也皇子時佛法未入我國何散骨之有道昭和尚創造宇治橋火葬從此僧而始也詳見續日本紀是以混爲宇治皇子散骨而已

在位十年

◎在乙訓郡大原野勝持寺山西戌間峯
火葬所同郡物集村土人号廟所又在車冢

第五十四代

深草陵。平安宮御宇仁明天皇。在山城國紀伊郡。兆域東西一町五段。南七段北二町。守戸五烟。諱正良。諡大璽豊聡慧天皇。

延喜諸陵式 嘉祥三年三月廿一日崩。年四十一。在位十七年。

三代實錄曰。貞觀三年六月十七日庚申。詔定仁明天皇深草山陵四履。東西一町五段。南限紀子内親王家地。北限谷。八年十月廿二日癸巳。敕改定深草山陵四至。東至大墓。南至紀子内親王家北垣。西至貞觀寺東垣。北至谷。

古今和歌集哀傷歌深草帝ノ御國忌ノ日ヨメル。

文屋康秀

草深キ霞ノ谷ニ影カクシテル日ノ暮シ今日ニヤハアラヌ

江次第曰。在嘉祥寺中。● 在嘉祥寺今深草爲瓦造居瓦町稲東車家竹林是陵乎

中右記曰。天仁元年二月廿二日癸卯。御即位之由被告山陵使。深草仁明中納言宗忠。所相具之次官爲綱也。此外共人三四人。用網代車。向嘉祥寺。從西大門南行。更頗東行。下居山陵前。先再拜。次讀宣命。次再拜不具幣物共宣命許也了。歸路秉燭。以前歸家。

按嘉祥寺今消歇。故不可知山陵在其中。今深草安樂行院者古深草陵也云。余詣此院欲拜山陵。平地有御骨堂。此納後深草院以來火葬先王御骨處。別無山陵。境内陵隧而有阿彌陀堂。其地圓丘也。半里東南號谷口陵。谷之口也。其地有鑿穿。蓋發陵之迹乎。

第五十五代

田邑陵。平安宮御宇文德天皇。諱道康。在山城國葛野郡。兆域東西四町。南北四町。守戸五烟。同

文德天皇實錄曰。天安二年九月庚申。大納言安倍朝臣安仁。率陰陽權助滋岳朝臣川人助。笠朝臣名高等。至山城國葛野郡田邑郷眞原岳。點定山陵。年三十二。在位八年。

三代實錄曰。天安二年八月廿七日乙卯。文德天皇崩。於冷然院新成殿。九月六日甲子。葬文德天皇於眞原山陵。送終之禮皆從儉約。一如仁明天皇故事。但變於前例。只是作方相而已。十月廿三日庚戌。遣外從五位下

行陰陽助兼權博士笠朝臣名高鎮謝眞原山陵十二月十日丁酉詔改眞原山陵爲田邑山陵十四日辛丑奉充田邑山陵陵戸四烟。（在中野村北東御廟山 字茶臼山此地旧号眞原岡乎）

今按田邑鄕眞原岳今廣野是也在葉室山南村名廣野村西皆山也山下有寺號地藏院東野有陵故廣野亦號陵村余訪沈迹至此以爲嘗見在大和河內和泉諸陵皆廣大今見此陵其覺狹小然撿國史文德天皇送

終之禮儉約自崩日（八月廿七日）至第六日（九月二日）定山陵之地第十日（九月六日）葬送則不日山陵成而奉葬以此觀之陵之小其必然也

第五十六代
清和天皇　諱惟仁　在位十八年

三代實錄曰元慶四年十二月四日癸未申二刻太上天皇崩於圓覺寺時春秋三十一自遜皇位御清和院歸念苦空發心菩提朝夕之膳菜蔬在御妍狀豊姿不賜顏色嬿私寵引自斯而斷遂御山莊落飾入道是時僧正宗叡侍焉山莊即是圓覺寺也天皇寄事頭陀意切經行便欲歷覽名山佛壠於是始自山城國貞觀寺至于大和國東大寺香山神野比蘇龍門大瀧攝津國勝尾山諸有名之處經廻禮佛或處留住踰旬乃去自勝尾山歸於山城國海印寺俄而入丹波國水尾山定爲終焉之地自後不御酒酢鹽豉隔二三日一進齋飯六時苦修焦毀如削斷除業累禪念逾劇恒厭此身欲不御膳而捨之至

夫沙門修練者之所難行緇徒精進者之爲高迹雖尊居極而盡蹈之矣寢疾大漸命近侍僧等誦金剛輪陀羅尼正向西方結跏趺座手作結定印而崩宸儀不動儼然若生念珠猶懸在於御手梓宮御棺其制與以聖躬坐崩遂不頹臥也詔火葬於中野不起山陵使百官及諸國不舉哀停素服亦勿任緣葬之諸司喪事所須惣從省約七日丙戌夜酉四刻奉葬太上天皇於山城國愛宕郡上粟

田山。奉置御牀於水尾山上。（村中在社祭天皇 亦皇子□所權現）

今按。上粟田山。今北白河勝軍地藏山耶。白河屬上粟田鄉。

第五十七代 陽成天皇 諱貞明 在位八年

扶桑略記曰。天曆三年九月廿九日陽成天皇崩于冷然院。春秋八十一。同夕奉移圓覺寺。十月三日壬申夜奉葬於神樂岡東地。

今按。神樂岡東地松原。無知奉葬陽成院于此者。近年開爲寺。（在愛宕郡眞如堂門前人家後園中）

第五十八代 後田邑陵。光孝天皇 諱時康 在位三年 在山城國葛野郡田邑鄉立屋里小松原陵。戶四烟。四至西至芸原岳岑。南限大道。東限清水寺東。北限大岑。延喜諸陵式

今按。今大田邑立屋芸原等名。清水寺亦滅。非東山清水寺。小松原今稱松原。地存其名耶。在平野西。

三代實錄曰。光孝天皇仁和三年八月廿六日丁卯巳二刻天皇崩於仁壽殿。春秋五十八。

扶桑略記曰。九月二日壬申葬山城國葛野郡後田邑陵。一云。小松山陵。

皇年代私記曰。葬小松陵。號小松帝。

江次第曰。後田邑仁和寺西。大教院艮。

拾芥抄曰。後田邑。光孝天皇。在仁和寺內大教院丑寅。

今按。古仁和寺所在之地。號本寺野。其後在雙丘西。近年更造仁和寺于本寺野。大教院地不可知。今仁和寺西。行鳴瀧道上有小丘。人謂之光孝天皇陵。

江大府卿圓宗寺鐘銘序云。擇地於仁和寺勝形之在上處。於古先帝山陵之前。今按。此山陵。似指小松山陵。（今仁和寺御門跡西福王子村領畠中一封土。與古文合。宜是也。山州名跡志以下近時異說皆不足信用矣）

第五十九代 宇多天皇 諱貞省 年六十五 在位十年

皇年代私記曰。承平元年辛卯七月十九日崩於仁和寺。八月五日火葬大內山。山陵依遺詔不置國忌山陵。

山槐記曰。元曆元年八月廿三日。被立御卽

位山陵使翼日於攝政亭經房云宇多大内山於仁和寺雖相尋之無其所参御室尋申處遺詔不置陵然則無才學之由被仰空歸参。

編年集成曰仁和寺奥池尾山●（在仁和寺北宇多野土人稱天皇冢）

前王廟陵記卷之上畢

前王廟陵記卷之下

平安城松下見林撰

第六十代

後山階醍醐天皇 諱敦仁

江次第曰。在醍醐寺北曼陀羅寺丑寅。裏書云。路或自北山階東或踰阿彌陀嶺乘馬曼陀羅寺艮角也。延長八年九月廿二日崩 年四十六在位三十三年

今按踰所彌陀嶺今澁谷也。阿彌陀嶺北。[illegible]

拾芥抄曼陀羅寺作曼陀羅堂眞言傳曰。仁海僧正建立曼荼羅寺于小野。

山槐記曰。後山階治部卿顯信曰。件所醍醐也。號曼荼羅寺。其寺前有堀。仍不通於堀下拜了。自共侍入堀內。令燒宣命。寺僧等前候燒宣命于樹下者。依半歸亭。在宇治郡小野隨心院東平林中 下醍醐領

扶桑略記曰。延長八年十月十日庚子奉葬太行皇帝於山城國宇治郡山科陵醍醐寺北。笠取山西。小野寺下。依遺詔從儉約。

醍醐寺舊記引李部王記云。延長八年九月廿九日丑時曉御病大漸。右大臣承詔令藏人所於七寺修御諷誦。巳時上令英明朝臣參六條院申受給三歸戒之由。尊意法師即奉進三歸戒及三聚淨戒。尊意又奉剃御頭髮奉進法名曰寶金剛。左大臣進御所請遺詔及還啟陳上不許還陳。乃命以不可上謚號。西首左脇登霞。春秋四十有六。十月十日庚子御葬送。堯存子右大臣從御輿後皆在行障內。御前僧四十口在行障前。天台西塔院主仁照奉仕御導師。基繼僧都奉仕咒願十一日天漸明辰四刻到醍醐寺北山陵。諸寺八十六所夾路設幕擊鐘念佛。十二日山作所於山陵立卒都婆三基。是日。公家修御二七日諷誦。如初七日。

又貞信公記并淑光日記曰。十月十日庚子亥四刻奉葬於醍醐寺北笠取山西方。四面八十丈。穴深九尺。方廣三丈。校倉高四尺三寸。縱橫各一丈。一說云十一日寅二刻。令著於山陵。同日戌二刻奉入於御倉。

古今著聞集哀傷部曰、延長八年九月廿九日、延喜聖主崩御。十月十一日醍醐寺北山陵ニワタシ奉リケルニ、御硯御書三巻、黒漆筥一合、琴（青眼）箏（秋風）和琴（中宮弘徽殿御賀ニ献セラレケル）。御笛ナド入ラレケリ。内藏助良岑義方和琴ヲ調ブ。樂所預丹治良名琴ヲ調ブ。皆平調ニシラベケリ。和琴ヲバ律ノ調ニゾシラベタリケル。今ハ土ニコソ成侍ラメ。アハレナル事ナリ。

今山陵爲平地、下醍醐陵村有松原、可半町。

第六十一代
朱雀天皇　諱寛明　在位十六年

醍醐寺舊記李部王記云、天暦六年八月十五日崩。廿日御葬送。御前僧廿八人、大僧都禪喜咒願、律師鎭朝爲御導師云云。自郁芳門路東行、經東路、從七條路、渡鴨河浮橋。亥時陵所諸寺夾路設幕念佛。院殿上四五位人推迎。大候外陣邊、御輿入南門。王卿退就幄。其山作之司左中將藤原朝成、及僧二口、奉荼毗事云云。其上物并御輿等於内墻上燒之云云。

常成按、皇年代私記曰、天暦六年三月十四日出家、法名佛陀壽、年三十。同八月十八日崩。

廿一日朝、奉遷御舍利醍醐寺東、左中將藤原朝臣朝忠捧持、律師鎭朝醍醐寺座主定助法師陰陽助平野宿禰茂樹相從奉安。

又帝王系圖云、天暦六年二月十四日朱雀太上皇落飾入道佛陀寺。八月十五日崩。時年三十。葬山城國來定寺北野陵、置御骨於醍醐山陵傍。（在宇治郡醍醐山階陵南三町許）

編年集成曰、葬法性寺東中尾南原陵、置御骨于醍醐山陵。

或曰、今陵村理性院奴宅地竹林中。

第六十二代
村上天皇　諱成明

（日本紀略云、山城國葛野郡宇多野北中尾村上陵、戸五烟。）

醍醐寺舊記帝王系圖云、康保四年五月十四日天皇不豫。廿五日天皇崩清涼殿。年四十二。六月四日葬先皇於村上山陵。

山槐記曰、村上在仁和寺長尾。（在位廿一年）

源氏物語弄花曰、岩陰松崎奥也。天暦陵。

今按村上地名、歴代皇記曰村上山陵（山城國葛野郡）。觀此、則村上在葛野郡昭昭然失。村上地

名久矣山槐記以爲在仁和寺長尾仁和寺屬葛野郡今仁和寺西村名有長尾不知是否然無山陵據弄花天暦陵爲在鈴崎奥岩陰則愛宕郡也非葛野郡蓋弄花以石影混爲岩陰音義相近也石影在西園寺東北野北見拾芥抄此乃屬葛野郡山陵今猶在鏡石邊小山俗曰（今鳴瀧村北高雄道左方平岡領称大法院方林中古冢是陵）

藤原實資公記曰永觀二年十月廿七日癸卯辰時許參院巳時參御村上山陵（圓融院村上天皇第五之子）於御所道光奉仕。又公卿騎馬扈役（左右大臣兼家大納言爲光重信朝光濟時中納言顯光重光參議公季齊光伊陟三位中將義懷道隆等也）著錦壺表御袍穂芳下襲御車後候爲韓櫃御物韓櫃三合（二合御匣具御装束一合御粧物具等也）檢非違使三人候之。皆著褐壺脛巾著御山陵留御車於鳥居外仰下御余候御劔前行之置御座（鳥居中五六段許。有御在所。立幔幄其上張幄）公卿侍臣幄在鳥居外即供御手水御拜了還御余持候御劔留御車於圓融寺西大門下御（余候御劔）參給御堂（候御座）公卿

傳曰供西廊

第六十三代　冷泉院　諱憲平　在位二年

皇年代私記曰。寛弘八年十月廿四日崩年六十二十一月廿六日葬於櫻本乾原（在神樂岡東埗）

今按櫻本乾原下疑脱櫻基與在善提寺西北

第六十四代　圓融院　諱守平　在位十五年

皇年代私記曰。正暦二年二月十二日崩年三十三。三月九日葬於圓融寺北原式部權大輔菅原輔正持御骨安置於村上山陵傍

菅原爲長卿十訓抄云。圓融院失サセ給テ紫野ニ御葬送アリケルニ。二年此所ニテ子日セサセ給ヒシ事ヲ思出。行成卿カクゾヨミケル。（擲花物語亦有之）

ヲクレレト常ノミユキハイソギシヲ煙ニソハヌ旅ゾ悲シキ

或曰。今雲林院東南天皇冢御葬送之地

四十九日御願文曰。夫圓融院者當受圖所草創類脱屣而棲息。本朝文粹（在葛野郡鳴瀧村北西大法院山南埜）

（常成按御堂殿記曰寛弘五年二月九日庚子棄直中云此夜今計花山院崩去十七日戊申花山院御葬送大和寺東邊云云）

第六十五代　花山院　諱師貞　在位二年

日本紀略云。寛弘五年二月八日已亥。今夜亥刻花山法皇崩。年四十一　十一日壬寅。依遺詔

停素服舉哀。又自今日廢朝。十七日戊申。今夜奉葬花山法皇於紙屋上法音寺北。

今按。紙屋古製宿紙地。紙屋院在鷹見北野南。有紙屋川村。◎在葛野郡大北山村人家東。紙屋川西。字称脊戸田田地東北間。在冢上生菩提樹。

◎在葛野郡竜安寺北東本春日谷。號山火葬所在陵。

第六十六代

一條院 諱懷仁 在位廿五年

皇年代私記曰。寛弘八年六月二十二日崩。於一條院中殿。年三十二。七月八日葬石陰。暫安置。九日奉渡御骨於圓城寺。今按此石陰。松崎奥。

百練抄曰。奉葬北長坂野。安置御骨於圓城寺。圓城寺當作圓成寺。左經記云。寛仁四年六月十六日丙申。故一條院御骨爲避方忌。年來奉置圓成寺。而依左[illegible]頭吉平申。奉御卜可奉置御骨之處。上[illegible]圓融寺邊[illegible]天皇家

常成按。御年當作四十二。

第六十七代

三條院 諱居貞 在位五年

編年集成曰。寛仁元年五月九日崩。三條院。年四十一。十二日葬舟岡西。邊奉納御骨於北山小寺中。西峯云。北山小寺。大原戸寺。戸寺[illegible]近。小訓戸寺。東南陵是耶。

第六十八代

後一條院 諱敦成 在位廿年

皇年代私記曰。長元九年四月十七日崩。年二十九。五月十九日火葬於神樂岡。御骨暫安置淨土寺。◎神樂岡東。西俗称紫平冢地。

百練抄曰。長暦元年六月二日。上東門院供養菩提樹院。後一條院御墓所。號櫻下。長久元年十一月十日。自淨土寺奉遷御骨於此院。

拾芥抄云。菩提樹院。神樂岡東。今失其處。

第六十九代

後朱雀院 諱敦良 在位九年

皇年代私記曰。寛徳二年正月十八日崩。於東三條院。年三十七。二月廿一日入棺。二月廿一日葬高隆寺乾原。御骨安置圓教寺。

今按。圓教寺在仁和寺中。眞言傳曰。僧正成典。仁海弟子也。住仁和寺。以其有靈驗。以住坊號圓教寺。今妙心寺北門東。宇多川。留往陵墓石碑。蓋圓教寺。

在竜安寺方丈後山。称右靈所。火葬所香隆寺乾原。

第七十代

後冷泉院 諱親仁 在位廿三年

皇年代私記曰。治暦四年四月十九日崩。于高陽院中殿。年四十四。五月五日葬船岡乾原。御骨安置仁和寺。西峯按。一代要記云。安御骨於圓教寺。

第七十一代

後三條院 諱尊仁 在位四年

皇年代私記曰。延久五年五月七日崩。於但

常成按御年當作四十

馬守高房大炊御門宅。年四十一。十七日葬神樂岡南原。安置御骨於禪林寺。◎在仁和寺子院家尊壽院

今按。禪林寺。東山永觀堂是也。

扶桑略記曰。葬於神樂岡東原。

吉續記曰。文永十年七月晦日。今日依異國事。被發遣山陵使。圓宗寺參議源朝臣雅言。散位源朝臣雅範。

今按。吉續記所謂圓宗寺陵。後三条院耶。雖不聞陵在當寺。當寺蓋發敬處所艸創也。故

御廟在當寺乎。◎今尊壽院。西封土。乃圓宗寺陵歟。

元亨釋書曰。延久二年圓宗寺成。在仁和寺南。莊麗冠都下。◎西峯云。後世消散。其跡蓋圓宗寺林。今在御室尊壽院東。

第七十二代
白河院　諱貞仁　在位十四年

皇年代私記曰。大治四年七月七日崩。三條第。年七十七。葬香隆寺乾野。今按。中右記云。白河院御墓所。衣笠山之東下。

吉記曰。成菩提院白河院御陵。◎在紀伊郡竹田畠中。

今按。成菩提院在鳥羽山。槐記曰。安元元年九月朔日。院御幸鳥羽。自明日依可被始行

成菩提院念佛也。◎西峯云。成菩提院退轉。今猶竹田存其迹。

第七十三代
堀河院　諱善仁　在位廿一年

編年集成曰。嘉承二年七月十九日崩于堀河院。廿四日葬香隆寺坤原。安置御骨于同寺。◎在竜安寺界内春日谷上。

百練抄曰。天仁元年三月廿二日。先朝御骨從香隆寺奉移圓融院。

今按。香隆寺。堀河院殯斂之地。中右記曰。參香隆寺候殯殿御所是也。香隆寺。在仁和寺。

不遠。今昔物語集云。仁和寺東有香隆寺。或曰。今蓮臺寺也。圓融院之跡。今船岡東南

第七十四代
鳥羽院　諱宗仁　在位十六年

紹運錄曰。保元元年七月二日崩。年五十四。

即夜葬鳥羽安樂壽院新御塔。

百練抄曰。御塔擬山陵也。◎称本御塔。往古三層塔。今遺蹟堂下。御石棺並蓋函現存。

今按。安樂壽院在竹田。

第七十五代
崇德院　諱顯仁　在位十八年

紹運錄曰。長寬二年八月廿六日崩于讚岐

配所年四十六奉葬於白峯
今按白峯在讃岐國阿野郡亦號綾松山
清原入道常宗白峯縁起曰奏崩御之由於
京待報之間奉浸玉體於野澤井九月十八
日戌刻奉火葬于白峯寺西北石巖依遺詔
也遠江阿闍梨章實爲御菩提渡國府御所
于御廟側建立頓證寺（◎陵上建祠閣身門置源爲義爲朝父子像云）
今按石巖下名兒谷斷岸千尺泊礒吉備子
洲在目中石巖上有御廟前有橘樹西行法

（常成按海道記曰　西行法師　よしや君昔の玉の床とてもかゝらん後は何にかはせん）

師所拜跪獻歌
吉記曰壽永三年四月十五日今日崇德院
宇治左大臣爲崇靈神建仁祠有遷宮以春
日河原爲其所保元合戰之時彼御所跡也
今按春日河原粟田宮應仁之亂滅

第七十六代
近衛院　諱體仁　在位十四年
編年集成曰久壽二年七月廿三日崩于近
衛皇居年十七八月朔日葬船岡山西野御
骨安置知足院

百練抄曰長寛元年十一月廿八日奉渡近
衛院御骨於鳥羽東殿美福門院御塔本安置知
足院本堂（◎在竹田村安樂壽院今二重塔下納御骨御石櫃現存ス）

第七十七代
後白河院　諱雅仁　在位三年
紹運錄曰建久三年三月十三日崩年六十
六十五日葬蓮華王院東法華堂
百練抄曰十三日乙酉寅時法皇崩于六條
殿准仁明例可有亮陰之由被名仰了十五
日丁亥法皇凶禮也以御平生之儀奉渡蓮

（◎法住寺今不知或云元坂辺慈円和尚詠哥御心荒烟府乎）

華王院東法華堂依御遺誡不被憚重
康富記曰文安元年三月十一日辛酉被立
山陵使者云云後白河院山陵　法住寺　使四條
宰相隆遠卿次官右少將藤原成任
今按法住寺者後白河法皇舊院當爲木曾
義仲焦土其後遷居六條殿崩御後點法住
寺墟建法華堂故法華堂亦號法住寺歟

第七十八代
二條院　諱守仁　在位七年
編年集成曰永萬元年七月二十八日崩于

小野宮北對町八人所祠寺南方小松大谷現存之所稱是御陵骨三昧堂跡乎

二條皇居年二十三八月七日葬香隆寺艮
野。香隆寺旧趾今等持院小松原之地与千本十二坊蓮臺寺別也世俗爲一寺非矣
百練抄曰嘉應二年五月十七日二條院御
骨自香隆寺本堂渡三昧堂件堂以二條皇
后崩御殿左大臣渡造之
或曰二條院御墓在舟岡北麓所謂香隆寺
艮野者是耶上有五重石塔近世嗜茶千利
休取九輪爲巳塔立聚光院又塔穿竅處爲
手水鉢不幾利休逢禍

常盛按嘗依安元二年

清閑寺六條帝小堂北方中埋竹林即法華堂所火葬所東山禁

第七十九代
六條院　諱順仁
在位三年
編年集成曰仁安元年七月十七日崩年十
二廿二日葬東山邊　在洛中山清閑寺或云今称高倉帝陵所即小堂跡乎而此帝陵也
明月記曰清閑寺小堂抑是六條院御墓所
堂今按一代要記云安元二年七月十七
第八十代
日崩年十三童體同日紫栖霞寺堂
高倉院　諱憲仁
在位十二年
平家物語曰治承五年正月十四日崩年廿六
波羅池殿年廿一火葬東山麓清閑寺
明月記曰治承五年正月十四日未明巷説

云新院已崩御依庭訓不快日來不出仕今
聞此事心肝如摧文王已没嗟呼悲矣倩思
之世運之盡歟云云今夜渡御邦綱卿清閑寺
小堂抑是六條院御墓所堂云云如何如何聞
及事不幾公私出交雜人見物落涙千萬行
内大臣通親昇駕記曰カキリニナラセ給ヒテ後
ノ御事ナト仰ラレヲクトテ邦綱ノ大納言筆ヲ執
テ日ノ憚ライハス三日カ中ニカクレマイラセフタカ
リモイハズダヨリアラン所ニヲサメタテマツルヘキ仰

アリシ其夕六波羅ヨリ清閑寺ニ移レタテマツル
殿上ニテノマツノ後ノ御名ノ定アルニツケテモ高倉ナイ
カナル大路ニテ浮名ノ御カタミニ殘リ東山イツ年
ル峯ニテ限ノ御スミカト定ラルラント思フモカナシ
ク小夜モ良深ユキテ御前僧ナト參リ集リテアア
ルヘキ御ヨソホヒトモハテニレカハ常ノ御車サシヨセ
テアヘナクタテマツリノミホト近衛舍人トモタチノ毛
タテマツル粧モナク警蹕ノ聲ハ別ヲ忍啼ニカヘ朝タ
ナレツカウマツリシ人八年來ノ宮仕ヲ今夜ニ限リツヽ

巴峡ニ裳ヲ霑ス猿ノ叫ニカハラズ。鶴ノ林ニ薪盡ル烟ニ一ヘトヒテ。常ニ辛ニカハラヌアリサマ、モサスカニ、レカヘノカチヂノ道ヨリ行ノムルアトモヲホヘス。峯ノ雪汀ノ氷ヲフミワケテ。レラサリレ山ノフモトニ空蟬ノ御骸ヲラサメタテマツル。僧ノ念佛唱アヒタルモ。靈山界ノ法ヲ說レニハ。入學無學ノ羅漢ノアツマリレカト覺ヘ鉦ノ音ノコヽカレコニキコユルモ。祇園精舍ノ無常院ノ心地スル。光ヲカヽヤキレ玉ノ御車モ夜ノ烟トハカナクタチノホル。色ヲヨソヒレ錦ノ御席モ春ノ苔ニ長ク埋レ

テ。カタトキノト。タテヽツラサリレ輩モ。恩愛ノ思ハカキリナケレトモ。生死ノ界ニカハリニケレハ。妻子珍寶及王位マテモコトニ御身ニ從フ者モナク。タヽヲクリヲク山ノ中ニ御ワサノコトハテニレカハ。ゴクリナキ三昧僧ニアツケヲキタテマツリテ。法華道場ヲタテヲサメ。各ユキワカレニキ。末ノ露本ノ雫ヲクレサキタツタメレ。今ニハレメストイヒナカラ。ヲモハサリキ山ノ麓陵原ヲ君ノ御アリカトヲモヒ。北芒ノ露東岱ノ烟ヲ君ノ御カタミニナリムベシトハ

百練抄曰。建保三年五月廿五日。於天台座主吉水坊。有如法經十種供養。是奉爲高倉院御菩提。上皇（後鳥羽院）殊抽叡慮。與僧正沙汰。光院御陵以下天台山所々。可被安置云云

今法華堂退轉。御廟上有大楓樹。

第八十代

安德天皇　諱言仁　在位五年

緝運錄曰。文治元年三月廿四日。於長門赤間關。源氏兵逼。入海沒。年八。在長門國豐浦郡赤間關。或云。同郡地吉ノ里九尾山奉葬尊骸及二位尼歟。今有帝陵並二位尼墓

〇玉葉記云。建久二年閏十二月廿二日。奉爲安德天皇於長門國建一堂。彼不擬神社。無奉崇之沙汰也

第八十二代

後鳥羽院　諱尊成　在位十五年

緝運錄曰。承久三年六月官軍敗北。七月十

三日爲東夷之沙汰。奉移隱岐國。延應元年二月廿二日崩于隱岐國。年六十三。

東鑑曰。御年六十。同廿六日奉葬。

常成按。東鑑御年六十三作者是也

或曰。隱岐國海部郡葛田山源福寺有御廟。四方喬木鬱然。

百練抄曰。延應元年二月廿二日。隱岐法皇崩御。春秋六十。去承久三年以後。已及十九年。天下貴賤誰不傷哀哉。五月十六日乙酉。隱岐法皇御骨。左衞門尉能茂法師奉懸。今日奉

渡大原籠禪院云云
今按禪院勝林院也今勝林院法華堂本納後鳥羽院御骨所也事詳見後花園院下
續古今和歌集哀傷哥
後鳥羽院カクレ給フテノコロ
順德院御哥
ノホリニシ春ノ霞ヲシタフトテソムル衣ノ色モハカナシ
大原ニテサメ奉ルヨシ聞ヘケレハ
イル月ノオボロノ清水イカニシテツイニスムヘキ影ヲトムラン

春ノ夜ノミシカキ夢ト聞シカトナカキ思ヒノサムルトモナシ
吉續記曰。文永十年七月晦日。今日依異國事被發遣山陵使。大原參議藤原朝臣公孝。左近將監源頼基。
寛永年中。後水尾院命羣臣詠和歌訪隱岐御舊迹。水無瀨中納言氏家卿爲敕使。山城國山崎西南水無瀨殿者御治世時數所遊幸也。
後土御門院就其地尊奉神號宣命曰。

天皇恐美恐美毛掛畏岐後鳥羽院乃靈祠尒奏賜倍止奏久。謬氐以最尒身乎寶祚久保知於澆末世氐。聖運益拙之寤毛寐毛乾道乎祈利。且夕尒廟恩乎仰岐奉留尒抑王事乃監岐古有加留。又武政乃善止岐古無加岐近曾利與強我起氐黎民困利免當歲尒天曜變志氐地祇動勢利。水涸氐旱甚。大尒火熾氐尒之災或興留爰尒元弘建武與利以來多聖怨滿世氐亂國之給止。有記文尒依氐四海不艾須。一朝不朴

留事者。偏尒由期止留今有所思氐以坐所號氐水無瀨神止申佐牟止波。可宜之崇德院乎崇奉利氐粟田宮止勸請世留例毛存須禮波便往日乃蹤跡乎逐氐當代乃規模尒資波留何乃難加良牟。安何曾幸奈加良牟止所念行氐奈故是以吉日良辰乎擇定氐正二位行權中納言兼兵部卿藤原朝臣敎國。左近衛權少將正五位下藤原朝臣濟繼等乎差使氐恐美恐美毛奏賜者久奏。

明應三年八月廿三日

此宣命者新文章博士章長草之 菅氏家說

第八十三代

土御門院 諱為仁 在位十二年

紹運錄曰承久三年閏十月十日奉移土佐國廾四月改阿波國寬喜三年十一月十一日崩年三十七。

今按訪御葬送地于阿波國人不逢知者或曰板野郡土佐泊里浦無養村有土御門院陵平地積石相傳帝自土佐遷阿波客此地故稱土佐泊 有小祠。阿波國美馬郡伊谷山。土御門陵舊迹也。

明月記曰天福元年十二月十一日辛巳承明門院 土御門院母儀 凡來御經營金原御堂纔被終功供養聖覺 右聖覺法印為供養導師也 件所被奉安故院 土御門院 御骨被立此堂御遺誡云

增鏡曰寬元元年十月十一日於金原御八講土御門院御十三回忌也承明門院行啓上達部殿上人參集

吉續記曰文永十年七月晦日今日依異國事被發遣山陵使金原宮內卿藤原重氏故佐源則雅。

或曰金原在山城國乙訓郡西郊向日明神半里許西海印寺村南其十八町西有柳谷觀音堂金原御堂者是耶非耶 ◎寺迹或云[illegible] 在同村[illegible]

今金原村有卅堂無御堂蓋此邊別有故址耶期宅日正之 ◎法華堂在山城国乙訓郡奥海印寺村

第八十四代

順德院 諱守成 在位十一年

紹運錄曰承久三年七月廿日奉移佐渡國仁治二年九月十二日崩於佐渡國年四十六

或曰御廟在雜太郡眞野山 ◎法華堂在山城国愛宕郡大原來迎院藥師山後山

百練抄曰寬元元年四月廿八日甲戌佐渡院御骨康光法師奉懸畢渡御大原云云

第八十五代

後堀河院 諱茂仁 在位十一年

編年集成曰文曆元年八月二十六日崩年二十四。二十七日葬觀音寺。 ◎在泉涌寺界內來迎院持山

皇年代私記云同廾八日自持明院殿移月輪殿葬之。今按月輪殿在東九條。

第八十六代
四條院　諱秀仁　在位十年

紹運錄曰。仁治三年正月九日崩。年十二

類聚大補任曰。正月廿五日丙申四條院御葬送。月輪山莊我禪坊。◎九重塔石柵古物存旧址考云雲竜院南谷謂我禅坊谷按御改葬歟

今按。月輪山莊我禪坊。東山泉涌寺也

增鏡曰。葬四條院於東山泉涌寺。爲御菩提ナリ寄附御莊。時人夢。後嵯峨告曰。我起妄念受人界生。至帝位。欲助我寺。今果成我願

沙門良忠決疑抄裏書曰。必其報フ子カハサレトモ其事ニ心染スレハ其マヽニ報ヲ受也。不知幡ハアレトモ泉涌寺我禪上人或後柿ハ。四條院ト生タルト申ス人アリ。知ルニ有多故。一ニハ。上人拜後堀河院御位時。行幸深ク感タリケリ。二ニハ四條院二歲御時生。月日時ニ東ニ向テ平坐ニ居レ。前生ヲ問奉ルニ宮。我禪ト答給ヒタリケリ。三ニハ。上人モ。四條院モ大根ヲ好食玉ヘリ。依之崩御ノ後。良平大臣兼實公三男太政大臣御計トシテ。求圓坊ヲ名テ。殊ニ存スル旨アリ。御墓ヲ泉涌寺ニ可立云云

今按。地神三代以來有山陵。所以厚葬也。嵯峨天皇以來。或無或有。所以薄葬也。其後然葬於瓦舍。雖非古風。以御墓在寺中。不置守戸陵戸。免白波之難。然及禪宮消歇。御墓俱與滅。爲可惜也。幸寺全。御墓長存。如泉涌寺者稀矣。

第八十七代
後嵯峨院　諱邦仁　在位四年

編年集成曰。文永九年二月十七日崩于嵯峨壽量院。年五十三。十九日夜御葬送。

增鏡曰。十八日葬於藥草院。

紹運錄曰。崩於龜山殿別院藥草院。

皇年代私記曰。別號藥草院。

今按。增鏡曰。龜山殿寢殿戌亥有藥草院。東有如來壽量院　◎在天竜寺中旧址考云方丈北雲居菴西辺或云移仙骨于金原法華堂可考

第八十八代
後深草院　諱久仁　在位十三年

紹運錄曰。嘉元二年七月十六日崩。年六十二。◎今安樂行院南字真等藪之地旧輪御陵在近移于此稱寺中

增鏡曰。七月十六日。崩于二條富小路明夜

渡於深草殿御葬送于伏見殿

康富記曰文安元年三月十一日辛酉被行山陵使者云云後深草院山陵深草法華堂

第八十六代
龜山院　諱恒仁　在位十五年

紹運錄曰嘉元三年九月十五日崩年五十七　◎法華堂在天竜寺中後嵯峨帝同所選仏場東方相並小土壇敷地是歟

增鏡曰十七日火葬龜山殿上山建法華堂安御骨又詳見五代帝王物語

第九十代
後宇多院　諱世仁　在位十三年

皇年代私記曰元亨四年六月二十六日崩於大覺寺年五十八二十八日葬蓮華峯寺　常氏按增鏡廿五日崩云云或曰今大覺寺御陵用廿五日云

傍山◎在嵯峨廣沢西寺辯戌亥方陵上三間四面堂中五輪石御塔在之干時為八角四堂故土人今尚称八角堂

或曰今五智如來山頭安不動窟歟

第九十一代
伏見院　諱熈仁　在位十一年

皇年代私記曰文保元年九月三日崩於持明院殿年五十三四日火葬伏見　今不詳兆古深草安楽行院北竹林敷地天王又同所字十輪八幡祠在四丘平

第九十二代
後伏見院　諱胤仁　在位三年

紹運錄曰延元元年四月六日崩於持明院殿年四十九

今按御葬送之地不詳沙河西南八町許伏見以北田有陵名而不知何帝陵疑後伏見院御墓所乎　◎火葬所嵯峨野化野念仏寺辺手山納嵯峨帝遺骨若此帝御葬地乎

第九十三代
後二條院　諱邦治　在位六年

皇年代私記曰德治三年八月廿五日崩壽二十四葬北白河殿

今按北白河殿圓覺寺耶拎芥抄曰圓覺寺北白河◎百万遍知恩寺東方一丘有老松俗呼福冢

第九十四代
花園院　諱富仁　在位十年

園大曆曰慈嚴僧正記貞和四年十一月十一日太上法皇於仁和寺萩原仙居晏駕仙筭五十二日來御脚氣御長病也同十三日御葬禮先幸太子堂此內內御幸儀也御輿也雲客少少供奉於十樂院上山搆山作所奉葬之御佛事等依御遺命於彼堂被修之仍於萩原殿者無御中陰儀　◎青蓮院御構內東南土坊篁中智恩院方丈境地冢上古松四株存

或曰太子堂速成就院也本在大谷十樂院

青蓮院別號也。十樂院上山者今智恩院

第九十五代
後醍醐天皇　諱尊治　在位二十一年

太平記曰。延元三年八月十六日丑刻崩御。奉葬吉野山麓藏王堂艮林奥。

常成按御年當作五十二

延元三年北朝曆應二年也。時御年五十。

今按。山陵在于如意輪寺後圓丘方十餘丈。拱木叢生寂寞傷心。

第九十六代
光嚴院　諱量仁　在位二年

紹運錄曰。貞治三年七月七日崩於丹波國

山國。年五十二。

太平記曰。御出家往伏見與光嚴院以其近都去栖隱山國崩御。後光明院梶井宮自伏見往荷御棺奉葬於後山。（梶井宮[illegible]光嚴院皇子也。或[illegible]光明院皇子也。）

或曰。御墓在山國常勝寺。◎丹波国桑田郡山国庄井戸村

皇年代私記曰。光嚴院御菴號也

紹運錄曰。以此御菴號被擬追號依遺敕也

第九十七代
光明院　諱豐仁　在位十二年

紹運錄曰。康曆二年六月廿四日崩於勝尾

寺御草菴日來奉號光明院殿不改此號不可及別諱號由御遺敕云云春秋六十。

或曰。近大坂門奉行與力古屋新十郎見紹運錄問御草菴跡于勝尾寺僧僧時不知之歸山問一寺衆皆默然。一比丘曰。我前年結茅時得古石塔銘曰。光明院以爲几卑之石塔撤之乃我所居之地石塔亦在我居傍君是乎於是驚取彼石塔安本處云。◎在攝津国嶋下郡勝尾寺封境之内

第九十八代
崇光院　諱興仁　始益仁　在位三年

紹運錄曰。應永五年正月十三日崩年六十三 ◎在紀伊郡指月後山。號兒長老屋敷地。即大光明寺址陵存于竹林中。

今按御葬送之地不詳。或號伏見法皇。今伏見近御香宮民家後圃鐫鳳凰塔。恐是陵物

第九十九代
後光嚴院　諱弥仁　在位二十年

紹運錄曰。應安七年正月廿九日崩於柳原仙居。年三十七。◎在愛宕郡泉涌寺中雲龍院後山

第百代
後圓融院　諱緒仁　在位十一年

紹運錄曰。明德四年四月廿八日崩。年三十

六。◎在前同所

薩戒記曰。泉涌寺偏爲公家御寺。後光嚴院後圓融院兩代御陵在此寺中。又有御影。

第百一代 後小松院 諱幹仁 在位卅年

紹運錄曰。永享五年十月廿日崩于洞院仙居。年五十七。

康富記曰。文安元年三月十一日被立山陵使者。云々 後小松院山陵泉涌寺。使左大辨參議長卿。次官左少將藤原季春。在前同所

今按。泉涌寺別院雲龍院。有後光嚴院後圓融院後小松院三代御墓。南上西向御墓上各栽松。

第百二代 稱光院 諱實仁 在位十六年

紹運錄曰。正長元年七月廿日崩於土御門皇居黒戸。年廿八。

皇年代私記曰。同月九日巳剋奉葬泉涌寺。晦日御拾骨。中納言經成卿懸御骨奉納深草法華堂。◎在前同所

〔常廣按　西當作酉〕

薩戒記曰。八月十七日丁酉。被行稱光院五七日御法事。七僧法會也。其次可被供養結緣經。御布施料。或有奉行人。或付廟不同也。条安樂光院。室町北行。自武者小路經二町許町。有横小路。而行一町路北有御寺。西大路面有西門。

又曰。此御堂前能登守藤原基賴草創。其子大藏卿通基朝臣建立。于時鳥羽院御宇也。始號持明院。改號安樂光院。其後有子細。御當院御管領。于今公家進止也。御堂面九間

〔常廣按　親長卿記作十六日〕

擬淨土九品。有四十八柱。擬四十八願也。凡莊嚴微妙。然而破壞年尚。尤可悲者也

第百三代 後花園院 諱彦仁 在位卅六年

紹運錄曰。文明二年十二月廿七日崩於室町亭泉殿。年五十二。始奉號後文德院。後日改爲後花園院。

山霞曰。廿七日夜ヤウヽ五更ニヲヨヒ侍レハ。シノヒテ泉殿ヨリ聖壽寺ニ出シ奉ル。御沐浴ナトハテ供奉ノ人々退出シ侍リ。元日ハモトヨリ亂

世ノ始ヨリ節會以下ノマツリコトモナケレド年ノ始ハ公武メデタキ御祝事トモサテソワタラセ給フニ思ヒカケヌ御經營ドモ禁中ニハ諒闇ノモヨフシナリ。室町殿ニモカギリアル儀式ノ御イハヒドモ墝飯イレクモ略セラレケルトカヤ三日申ノ剋ニ悲田院ニテ御葬送ノ儀アリ。明德ノ度後圓融院ノ御時鹿園院殿供奉マシマシケル御例ニマカセテ此度准后東山殿御供奉アリ。御烏帽子直衣。前内大臣直衣。以下ノ月卿雲客直衣也。冠布衣等アヒマジハレリ。

上下ノ北面常ノコトシ。聖壽寺ヨリ御車ニテ御幸アリ。前内大臣御簾ニ候セラル。度々ノ御幸。各装束ノキヨラヲツクシテアリシヒキカヘタル御行粧。准后モ御ワラクツヲメシテ。御車ノ後ニ供奉シ給フ。ウチシホレタル。御道スガラヲ見タテマツル。貴賤トニノカズナラヌ下人マニテモ。涙ヲナガシ侍レバヤ彼寺ニヲクリツケマシマシケリ。代代泉涌寺ニテ後ノ御ワザアリシニ此度急劇ニ彼寺炎上シ侍ルニヤ。シカルベキ老僧モ侍ラズトテ。元應寺ノ長老接取院

恵忍仰ヲウケタマハル。マヅ御車ヲムカヘタテマツリテ。僧百餘人堂前ニタチワタリテ。陀羅尼ヲミテラル。又本堂ヨリ西ニムカヒテ。御葬所ヘ御幸ノ時。錫杖ヲハジムゴノホド准后南ノ方ノ庭上ニ御蹲踞アリ。カヽル御キハマデ。威儀ヲミダリ給ハヌ御作法ヲ見タテマツルニモ。イマダ御存リノヤウニテ。百官カツハ夢ノ心地シ侍レ。ポドナク煙トナリタマヘル。右ノ詞ノ間有歌數首。今略之。

或曰。當時悲田院在于京北。其後遷悲田院

于泉涌寺中。今大應寺。昔悲田院之地也。竹林中尚有封壙。

親長記曰。文明三年四月廿一日。葬大原御墓。法華堂前也。後花園院御墓。今按。後花園院御墓安于三重石塔。法華堂。異于餘人。

今按。法華堂。修明門院爲後鳥羽院所建也。

今在實光坊北。阿弥陀堂橋南。法華堂在證據。

增鏡曰。大原法華堂者。爲修明門院後鳥羽院后順德院御母御沙汰。渡故院水無瀨殿。故院臨終所持桐御數珠。尚在。

◎在丹波国桑田郡井戸村光嚴帝御陵西傍。火葬所悲田院今上京西陣扇屋甲大雁寺

余嘗於大原問法華堂。三院御舊跡有法華堂。有後鳥羽院御石塔無順德院後花園院御墓。余亦問法華堂爲何帝所建乎不詳。後閱墻鏡而後知法華堂奉爲後鳥羽院所建。乃御骨納於此堂。別不可有御石塔。蓋順德院御骨亦納于此堂矣。今俗云。後鳥羽院御石塔者親長卿所謂法華堂前後花園院御墓耶。

第百四代　後土御門院　諱成仁　在位卅六年

紹運錄曰。明應九年九月廿八日崩於土御門皇居黑戶。年五十九。十一月十一日葬泉涌寺。今日自內裏北御門東方築墻奉出御車。依無用脚。四十餘日奉置內裏黑戶。希代事也。御中陰伏見般舟三昧院

後柏原院賜後光嚴院宸翰三略祕抄於佐々木高賴。其本大外記清原枝賢奧書曰。去明應第九仲秋下八日後土御門院崩御。于時禁闕殊外依御不如意。御送葬延引之處。佐々木管領源高賴朝臣奉調進其料。依此勝仁親王（後柏原院）初冬下五日踐祚。仲冬上旬奉葬先帝於泉涌寺。爰被感高賴至忠。賜桐菊御紋并後光嚴院宸筆之三略祕抄。加之聽昇殿。敕詔曰。今度抽忠功條。至子孫不可混自餘之諸臣。

◎在泉涌寺後山。御印木插。火葬于同寺。此帝以下正親町帝迄四代御廟相並

菅原和長卿明應凶事記曰。泉涌寺葬場殿。檜皮葺也。北面有御車寄。其在所山門跡西南角也。檜皮葺殿舍一間四面也。棟寶形也

以金彩玉。其中有火爐。六角白壁。四方有門。白木作鳥居也。扉并脇壁皆檜墻也。四方有額。以金彩字。東門額發心。南門修行。西門菩提。北方涅槃。以涅槃門爲入御之御門云云。十一日辛酉。今夜御葬禮也。御車以生絹裝之。小八葉也。先例出網所準擬之賀茂祭絲毛車。云云故爲隱遁差以絹裝也路次正親町西行。室町南行。近衞東行。東洞院南行。至七條河原懸浮橋東行。柳原。法性寺南行。又東折。鍋良小路前東行。云云寺中之儀。先於摠門外稅牛。又

奉手引先經葬場殿北面東行至艮南折指寄御車於佛殿西面壇上。先後乘僧（雲龍院）退下。次御車寄大臣（華山院前左府。與禁中同役。）參進卷御簾。先立廻御屏風於壇上。有下御之儀。一向又黑衣沙汰也。奉舁御棺。諸卿（蹲踞。）於佛殿內奉乘寶輿。云云。此後僧衆行事。奉舁寶輿出御殿。至葬場殿。即入北面涅槃門。火爐三匝而下炬念誦等終。云云。寶輿居爐上之時。僧衆皆出葬場殿。即閉涅槃門。既發煙。云云。自今日於

伏見般舟院御中陰法事被始行。十二日壬戌。今朝即御收骨儀也。上卿甘露寺中納言（爲凶事傳奏）即有分散儀。一分如例。上卿持之（納筥懸頸。云云。今度如何哉。）奉籠深草法華堂。（此法華堂者安樂行院內一堂也。於本院者久退轉。此一堂相殘計也。河堂修行兼帶法華堂。云云）又一分雲龍院。又一分般舟院。皆寺僧賜之。又一分山國常勝寺被籠之。雖然寺僧不參之間無其沙汰。比丘尼御所。云云於火屋面面取給之。雖非先規不及制之。云云

第百五代

後柏原院（諱勝仁　在位廿六年）

公武相交記曰。大永六年四月七日辰終刻許崩御。（甲子六十三歲）前夜自常御所奉移小御所。以相接內侍所。奉移記錄所。北首。赤內侍所爲御跡方。不可然。

二水記曰。七日卯刻遂以崩御也。御年六十二。廷臣只悃然悲淚哭聲皆以消魂。廿七日今日御三七日也。光陰如夢者歟。御追號事可爲後柏原院之由。有其沙汰。今度依爲各

被撰申。訖九條前關白。關白近衛殿左大臣德大寺。御追號後柏原院治定了。桓武天皇號柏原帝也。五月三日天陰。今夜可有喪禮御幸也。戌刻已可有御出也。仍前左府以下雲客一列而立。（南上西面。）此時御車奉引出。（不懸牛手引也。）先是諸卿蹲居了。次第相隨於築垣（北築地亥方一間許。今日被壞之。於此懸御牛。）外懸牛歟。路次正親町西行。室町南行。近衛東行。東洞院南行。從六條河原經法性寺至御寺。（泉涌寺）警固武士在

門内外（内内藤。外外薬師寺。）御車奉寄法塔之前則奉
移御龕輿。隔人不憚見。供奉衆各北方列立。
委注頂之御幸。（僧衆前行見圖。）先是各蹲居。（此間暫時小雨。
圖下則晴。奇特也。）御龕過前。御之後皆起揚。即供奉（御車
後方。）諸門跡（御室。青門。梨門。下川原衆。）同令供奉給（各前左右。）
之先入御葬場殿之後。各蹲居少時。還本列而
立。御殿之外三帀了。奉安御龕於爐敷程遠
不見。頂之火氣揚。皆拭紅涙了。僧衆法事了
欲退之程各退散。見聞貴賤如雲如霞。前後

不分明。太以狼藉也。予不合期。仍不及乘物
兩三輩誘引。令步行歸洛了。于時卯半刻也。
後聞。爲御骨甘露寺民部卿（傳奏）勸修寺大
納言。源宰相中將等相留。四日巳刻源宰相
中將（乘輿）懸御骨於肩。奉收深草云云。僧衆請
取收之。仍不見其所云云。御中陰事。舊例皆以
爲泉涌寺。而明應度始於般舟院被修了。今
度泉涌寺再三有訴訟。雖然宥仰了。四日於
般舟三昧院。自今日御中陰被始之。午時於

泉前中納言永宣。少納言範久朝臣等。赴城
南御中陰之間。可祗候也。八月今夜可有渡
御倚廬也。先有陣儀。（遺詔奏。并御誦經使等事。）上卿廿
寺中納言移著端座。令敷軾。外記參進。有[illegible]
條儀云云。後聞。遺詔詞云。任葬司山陵國忌素
服擧哀被停止。（加御陵御印 析抹文掛）

第百六代
後奈良院（諱知仁 在位　年）
紹運錄曰。弘治三年九月五日崩。春秋三十
一。葬泉涌寺。（御陵御印ナシ）

第百七代
正親町院（諱方仁 在位廿九年）
帝王略記曰。文祿二年正月五日崩。葬泉涌
寺。（御印無之）
今按泉涌寺有後土御門院。後柏原院。後奈
良院。正親町院。四代御墓相並。南上西向。御
墓上表以樹木。

第百八代
後陽成院（諱周仁 在位廿五年）
紹運錄曰。元和三年八月二十六日崩。（四十七）
同九月廿日葬泉涌寺。

第百九代
後水尾院 諱政仁 在位十八年
紹運續錄曰延寳八年八月十九日崩御八十五閏八月八日奉葬于泉涌寺

第百十代
明正院 諱興子 在位十四年
紹運續錄曰元祿九年十一月十日崩御七十四奉葬于泉涌寺

第百十一代
後光明院 諱紹仁 在位十一年
紹運續錄曰承應三年九月廿日崩御二十二奉葬于泉涌寺

第百十二代
後西院 諱良仁 在位八年
紹運續錄曰貞享二年二月二十二日崩御四十九奉葬于泉涌寺

第百十三代
靈元院 諱識仁 在位廿四年
紹運續錄曰享保十七年八月六日崩御七十九奉葬于泉涌寺

第百十四代
東山院 諱朝仁 在位廿三年
紹運續錄曰寳永六年十二月十七日崩御三十五同七年正月十日奉葬于泉涌寺

第百十五代
中御門院 諱慶仁 在位廿六年
紹運續錄曰元文二年四月十一日崩御三十七奉葬于泉涌寺

第百十六代
櫻町院 諱昭仁 在位十二年
紹運續錄曰寛延三年四月二十三日崩御三十一奉葬于泉涌寺

第百十七代
桃園院 諱遐仁 在位十五年
紹運續錄曰寳暦十二年七月二十一日崩御二十二奉葬于泉涌寺

第百十八代
後櫻町院 諱智子 在位八年
紹運續錄曰文化十年閏十一月三日崩御七十四同年十二月十七日奉葬于泉涌寺

第百十九代
後桃園院 諱英仁 在位九年
紹運續曰安永八年十月廿九日崩御二十二同年十二月十日奉葬于泉涌寺

第百廿代
光格天皇 諱兼仁 在位卅七年
紹運續錄曰天保十一年十一月十九日崩御七十同年十二月廿日奉葬後月輪山陵

在泉涌寺後山

第百廿代
仁孝天皇諱惠仁在位廿九年

紹運續錄曰弘化三年正月廿六日崩御四十七奉葬于弘化廟在泉涌寺後山

補闕

饒速日尊白庭邑墓舊事本紀曰天照大神太子正哉吾勝勝速日天押穂耳尊高皇産靈尊女𣑥幡千千姫命爲妃誕生天照國照彦天火明櫛玉饒速日尊天祖以天璽瑞寶十種授饒速日尊此尊稟天神御祖詔乘天磐船而天降於河内河上哮峯遷坐於大倭國鳥見白庭山既神損去高見産靈尊以其神尸骸於天上斂竟饒速日尊以夢敎於妻御炊屋姫云汝子如

吾形見物即授天璽瑞寶矣亦天羽羽弓天羽羽矢復有神衣帶手貫三物葬斂於登美白庭邑以此爲墓者也

今按饒速日尊雖非繼體之君據舊事紀觀之則瓊々杵尊兄也亦先瓊々杵尊天降是以自先代有盡如在之禮社而未聞祭其墓例可謂遺憾

飯豐天皇葛城埴口陵

日本紀曰清寧天皇五年正月白髮天皇崩是月皇太子億計王與天皇讓位久而不處由是天皇姉飯豐青皇女於忍海角刺宮臨朝秉政自稱忍海飯豐青尊冬十一月飯豐青尊崩葬葛城埴口丘陵

紹運錄曰皇代曆云飯豐天皇不註諸王系圖依和銅奏聞入云扶桑略記云此天皇不載諸王之系圖但和銅五年上奏日本紀載之甲子歲二月生年四十五歲

今按和銅五年上奏日本紀載之此日本紀者非今日本書紀今日本書紀者相後和銅五年九年養老四年奏覽甲子當作丙子四十五歲當作四十八歲

大友皇子 後淡海帝諱伊賀白鳳二年年壬申七月廿三日崩年二十五在位七ヶ月

今按自天智天皇十年十二月三日崩日至明年七月二十三日皇子令乎凡八箇月

日本紀天智天皇臥病以痛之甚矣名天武天皇授鴻業乃辭讓之日臣之不幸元有多病何能保社稷願陛下擧天下附皇后仍立

大友皇子宜爲儲君臣今日出家爲陛下欲修功德天皇聽之云云天皇崩後天武天皇發兵伐皇子近江軍破皇子隱山前自殺

今按山前長等山山前今謂山上者訛歟千載寥寥不聞終焉之地可歎　御在所不詳或云北院林中圓丘称亀家者是陵乎

九條廢帝　諱懐成　在位四ケ月

今按九條廢帝順德院第一皇子諱懐成以承久三年夏四月廿日受禪未即位治天下四箇月秋七月官軍敗績逃入藤原道家九條

第文暦元年五月廿日崩春秋十七見神皇正統記紹運録葬所未詳　今按在山城国紀伊郡伏見街道家水町

後村上天皇　諱義良始憲良　在位廿九年

諱義良後醍醐天皇第五之皇子正平二十三年三月十一日崩御奉葬于河内國檜尾山觀心寺　觀心寺說

今按後村上天皇御廟所在觀心寺後山圓丘可方二丈樹木生上

後龜山院　諱凞成　在位廿四年

諱寛成後村上天皇第一之皇子元中九年十月二日被渡三種神器于後小松院即明德三年也後居嵯峨應永三十一年四月十二日崩御葬所未詳

今竊按以上六代不載帝王之系圖而不明於世然皆正統王者也故表出之以補其闕所以不明者有微意而存焉潛心于當時記而後可自得矣

前王廟陵記卷下　終

白重原陵世爲亀山帝陵非也南方與力之人々所改葬云云在河内国交野郡私市村獅子窟山寺又山城国葛野郡北嵯峨福田寺御塔口

元祿十一戊寅歳三月彫成
安永七戊戌歳五月補正

書林
江戸　須原屋茂兵衛
大坂　河内屋茂兵衛
河内屋和助
敦賀屋彦七
菱屋孫兵衛
越後屋治兵衛
京都　林　芳兵衛
勝村伊兵衛

蒲生秀實 著

山陵志

修靜庵舊刊本

據修靜庵舊刊本影印

山陵志

九志　二

九志

神祇志　山陵志　姓族志　職官志　服章志

禮儀志　民志　刑志　兵志

右九志山陵以稿先成故刊之職官亦幸尔

修靜菴蔵

山陵志之一　九志二

古之帝王其奉　祖宗之祀而致仁孝之誠也郊以配乎天廟以享乎　祖配乎天則作之靈畤至尊至嚴禮弗敢瀆（說在神祇志）享乎　祖則立之大官以置祝宰百世弗毀特報其有盛德丕烈者焉（如伊勢及賀茂八幡廟是也）而其餘各就山陵以時將常典有事而禱告於是諸陵寮之職（治部省管之）掌喪祭之禮供幣之數及陵戶名籍與其禁令而正其兆域脩其垣溝虔共所職其有儀則（延喜諸陵式謂其世之親者曰近陵疎者曰遠陵其供幣之數亦從有差歲十二月上旬寮錄之併諸國山陵使姓名及驛鈴等數以申省省申大政官然後頒幣即日遣奉乃謂之荷前之祭且陵墓之側其有原野者寮仰守戶并移所在國司共知豫除之使失人無相延燒又其兆域垣溝有所損壞者令守戶脩理而專當官人巡加檢校固不得葬埋臣庶及耕牧樵採也○按荷前之荷讀為登登成也謂年穀成熟蓋薦新以其先成熟之時故謂之荷前或讀為初穗也夫初穗之語後世雖轉將之成終也由名而求實起于薦新可知矣謂農神稻荷其取成熟之義可以徵矣）故曰山陵猶宗廟也苟無有之則臣子何仰焉（山陵中納言藤原吉野諱云淳和帝臨崩遺詔令散葬不置山陵）臣子惟仰乎此而祀焉則其禮隆矣律謀毀山陵謂之謀大逆與居八虐之一焉則其刑重矣是王者之以孝治天下所由而基也胡其可不畏敬哉上古大朴山陵之制未備　瓊杵氏炎見氏　彥波瀲武氏邈矣（三陵皆在日向國）自　大祖至乎　孝元猶就丘隴而起墳焉自　開化其後蓋寢有制及　垂仁始備下至于　敏達凡二十有三陵制略同焉凡其營陵因山從其形勢所向無方大小高卑長短無定其為制也必象宮車而使

前方後圓爲壇三成且環以溝延曆十一年以廢太子早良爲祟勅謝之其冢下置皇勿使濫穢瀆溝也因知諸陵之溝亦其故然也壇不必三成舉其率言之　夫其圓而高者如張蓋也頂爲一封即其所葬方而平者如置衡也其上隆起如梁輈也前後相接其間稍卑而左右有圓丘倚其下壇如兩輪也及至後世民睹之而莫能識焉猶稱曰車冢蓋亦以是也凡陵側之地必有三五丘冢乃視之陵頗小而班列其前後左右此蓋當時所陪葬者也其狀率皆圓則人臣墓制亦從可知然其象宮車不必爲帝陵也何者其類間有之而以其非史及諸陵式之所載莫審爲何物或是皇后皇子若重臣別勅所許或帝上改葬而其故陵尚存也自　用明至于　文武凡十陵特變是制但圓造之穿治玄室於其內而築之以壟覆之以巨石石棺在其內南面故其戶南向而累石爲之羨道其制嚴密既已如是是以不復環之以

溝也班鳩大子治壽藏于河内磯長即是制也當時大子自負聰明有才藝居作者之聖於舊章多所變替乃若山陵蓋亦然歟諸陵式載大子磯長墓大子傳曆徒然艸並言其治壽藏焉大〻者　用明帝之子而山陵變制自　用明始是大子好異欲漢唐之制而所爲然其制不惟限於帝陵下及于諸有冠位者亦用但視之帝陵必卑而小所以明等差也大化二年有詔定陵墓之度王以上之墓其內長九尺高廣五尺外域方九尋高五尋上臣下臣其內皆準于上外域上臣方七尋高三尋下臣方五尋高二尋半大仁小仁其外域長九尺高廣四尺平而不封焉大禮以下小智以上亦準大仁凡五等是因大子之所創而爲之度也其工役王以上千人七日而竣次半之五日次又其半之三日次百次半之並一日也古者棺椁之制檀弓曰四寸之棺五寸之椁又曰棺周於衣椁周於棺土周於椁喪大記曰棺椁之間君容柷大夫容壺士容甒言其巨細不過如此而春秋戰國之間諸侯强僭日甚羨道周謂之隧隧者王章也曩以晉文之功而所不見許至乎僭王者又何憚哉卬其家之高壯堅密以務其侈至秦始皇而極矣西京雜記廣川王去疾發掘魏襄王冢皆以文石爲椁高八尺許廣狹容四十人以手捫椁滑澤如新又幽王冢甚高壯羨門既開皆是石堊併考之今陵內玄室亦謂之椁歟　迨于南都更復舊制惟其所仍正南面而已矣古之大喪厥紀無傳然觀乎山陵遺制及石棺暴露者則其牆翣衣衾珠襦玉匣與夫銘旌鼓吹之儀祭奠明器之數雖一無見文獻之可徵猶足以知其禮物之有在焉而至如其用殉雖曰甚慘其所由起亦必有以矣蓋國初佐命功臣與宗社同休戚其忠誠惻怛之心曷嘗不期以死終始哉方臨大喪自刎陪葬以遂宿志者或有之而流風慕尚因仍成俗卒至於使生平所愛必例從死焉乃以　垂仁帝之齊聖仁恕也而爲之惻然不忍其臨穴惴惴無罪而就死地誕能發德音建明制代以土物置土師臣以司喪紀且石棺

之設　先朝既有而製造未有專職至是置石作連以治焉垂仁帝二十八年倭彥薨用近臣爲殉生埋之其呻吟之聲旬月不絕　帝聞之惻然乃詔羣臣曰生之所愛死而爲殉不亦慘乎此雖古之遺制安可遵用自今議止之明年皇后崩詔曰殉死之俗前知不可今是葬也爲之如何野見宿禰奏請以土物代之　帝嘉之立爲永制以野見居其官乃因官賜姓土師臣又據姓氏錄方此時武眞利根獻石棺賜姓石作連然石棺暴露　孝昭陵以下往往觀之則非始於此故曰　先朝已有　其卜塋兆程土物而與徒庸也必徵於天下諸國然民以其哀如喪考妣乃咸子來服役無以爲厲應神陵東北之隅營築未了處名甲斐阪七人傳是當時甲斐人所當役會其邦有故不得來焉而後遂不後治也又　仁德陵上凹處名尾張谷即尾張役夫不畢其功者然也口碑所存實其爾哉　孝德中興爰制其度凡陵墓高卑之等其工役之課乃有常程詳見前註及　中宗繼統慮其德之不如古深恤民隱止其役焉天智帝葬其母齊明帝于

越智以間人大后祔焉而曰我奉天皇大后之遺詔以深恤民隱不敢興石槨之役冀永世以為鑑戒○按石槨謂穿治女室於陵內蓋其營以勞民大重故工役之費乃官給之不復徙勞夫惟恤民隱是以能止其役焉故 齊明及 天智陵是其治之也無乃從儉乎然而君子不以天下儉其親而況王者乎宜 後朝不敢安之即就其陵更脩造是亦所以追思繼孝也持統帝元年皇太子率公卿百寮國司國造及百姓男女營大內山陵可見此役興其役焉 文武帝二年冬十月修越智山階二陵所謂山階是 天智陵也明其所初築皆從儉也夫古之俗其狎乎鬼神而瀆齋盟所以求福於冥冥之間固民性蒙昧之為而逮乎佛教之行擄是攪猥志獲國權舉喪祭之紀莫不咸為之所亂而自 持統之喪始行火葬其為弊也世以甚矣列子楚之南有炎人之國其親戚死朽其肉而棄然後埋其骨乃成為孝子秦之西有儀渠之國其親戚

死聚柴積薪而焚之燻則煙上謂之登遐然後成為孝子此上以為政下以為俗而未足為異也夫然則夷蠻之喪固有如是者而佛之所生身毒國咸與儀渠同俗故亦行火葬也後世浮屠氏曾不之識奉以為典章者乃不深思之過也 持統帝之時守治之僧道昭其死始行火葬矣然彼者方外之士固不足怪今至其用諸大喪不亦悲乎及皇都奠于平安則其郊野之際負山帶川不甚博其丘阜之形蓋亦宜陵者鮮矣是以其陵率皆平地之所築而遺詔依例以薄其葬最爾坏土無復如舊況其火之不必於陵所也餘燼遺骸轄于毛髮由是遷徙弗一而已既而塔擬山陵僧司喪祭不復奉謚遂停尊號其自居儉雖如是也至乃鑄造佛像經營伽藍務飾莊嚴尤極奇麗大費國用曾莫之卹嗟夫廢 先聖之禮奉異端之說惑已甚矣而其弊之極以山法師富擬於 王室權威於禁

衛邪行橫作常犯其上動輒搆兵不可復制以鴨河之暴沸為患京邑氾濫衍溢民弗安處猶得與之並稱反殊劇焉白河法皇有言曰不從朕心惟雙陸采鴨河水山法師也已邦國憔悴職是之由而自紀綱不振官失其職諸陵寮廢奉幣使絕而後發陵盜藏無所畏憚戰國喪亂之際其禍何遏所在伽藍遇兵盡殘塔中所藏亦從而亡嗚乎可勝慨哉幸而其所完以存惟泉涌寺諸陵及其餘二三也已矣夫喪祭禮之大經也而天下離世多難至乃園陵廢春秋闕如此之極命也謂之何既自臨大喪而火其葬黝靈車赭梓宮堂堂禮典委灰燼幾何其不化為夷蠻哉近世國恤纔止之自 後光明始後光明帝近世聖主也幼而英明慨然有於復古不幸短命春秋二十有二以痘瘡崩

時朝議依舊將火葬有一民厲魚為業者呼八兵衛常聽命於卒大出入宮門聞之太悲慟歎曰嗚乎 聖天子何天命之革也可奈之何且夫火葬者非聖人之道也況今大行在天之靈蓋嘗疾浮屠氏之虛誕斥異端最甚而其送終尚猶從事於其所斥耶吾小人尚目不瞑不肯從朝議敢諫爭止之不能則身死之於是奔走於 仙洞及執政之門所至號哭悲泣敢請止火葬以從大行之志也朝議輒為之改而火葬止焉蓋感八兵衛忠誠也噫匹夫有志何事不成上之人不為則其可慚已甚矣以 百王之弊其所革先發乎此如其悉皆復諸禮天將有待其時而然耶今竊因古圖參覽舊記周視陵地咨問蒭蕘尚有可以考見作山陵志。

大和山陵凡三十有一所

按山陵謂帝王之墓也凡墓者以其築成曰都賀以其外蔵曰芳賀而山陵以其所尊奉曰美佐佐岐先稱以美尊之也佐佐岐奉也陵號故

大和

因陵地號之爾。即如曰畝傍山東北陵、曰桃花鳥田丘上陵是也。曰令錄之曰某陵在某地、而注其下云云、則於文不獲號陵以地。故姑改之、以從謚焉。夫謚者、自 神武至於 文武、凡四十有二世。是淡海文忠公奉勅所制。甘露寺親長日記引後花園帝之喪大納言藤原通秀所奏議云云。故其撰令也、公式平出條有曰天皇謚矣。義解云、謚者累生時之行跡、為死後之稱號、即經緯天地為文、撥亂反正為武之類也。令是大寶之初、淡海公奉勅所撰、至養老三年、公重奉勅刊脩之、而其公式云爾、則刊脩之日、謚已建、斷可識矣。古事記成於和銅四年、而其書未有謚、然則其建之當在乎自五年至養老三年凡八年間矣。四十有二世、獨不謚 帝大友、而代之以 神功后者、蓋當時以承 天武之統、而有所諱也。書紀釋引私記云、淡海三船奉勅定 神武以來謚號、然而不言其奉勅在何朝、建謚為幾世、徒以為 神武以來、則其言孟浪不足以證。是三船姓氏與淡海

公封國同名、故謬作此說也。且書紀以令之明年而成焉、則載謚固也。然先載其故號、而謚輒注其下、不敢大書之、即其故號者、假如 神武曰神日本磐余彥是也。其所以先載之者、存古也。 神武之平定中國也、以其功定于磐余、遂建為號、故古事記書曰神倭、而書紀改之曰神日本。此日本謂令畿內之倭、以倭是神州、曰神倭、神日本同焉。 天子者天下宗主也、以其所宗曰根子、其後世之號曰大倭彥、曰大倭根子、亦皆襲之也。磐余地名也。如 綏靖曰 神渟川耳、曰 武渟川耳、安寧曰 磯城彥玉手觀、耳及玉手觀、即其名、而渟川磯城、亦取於地名、而所號號以冠其名、且加之曰神、曰武、曰彥、曰大之類、是臨時所尊稱、然非世世皆有之。如 應神 仁德、直著其名、曰 譽田、曰 大鷦鷯、此純乎質也。如 孝德曰 天萬豐日、 齊明曰 天豐寶重日、 天智曰 天命開別、蓋皆頌其德配之天、而所追號、追號亦謂之謚歟。考之續紀、持統謚曰大倭根子天之廣野姬、則其類雖可知、雖其言冗長不雅、此寢乎文也。自文忠制謚、謚法章章、而王者功德斯著、此文之備也。乃寢乎文者、雖其言冗長不雅、猶以存古、亦並行之、自謚 淳和曰 讓彌、後不復

爾也。且舊典 神武之廟號 大祖、 天智之廟號 中宗。三善清行改元議云、遠履大祖神武之遺蹤、近襲中宗天智之基業。祖宗廟號、纔見於此。因知舊典多殘缺。特以其有光烈盛德、而所號歟。 元明帝臨崩、有遺詔、俾毋奉謚、而追號直用其所居國都、此蓋自謙不敢當謚也。元明陵誌石、今暴露、移在他所、其銘曰、大倭國添上郡平城之宮馭宇八洲太上天皇之陵。此蓋葬時所號者、依遺詔不敢奉謚也。然謚者所以稱君父之德、而臣子之情、安敢忍乎。以遺詔而終廢其典哉。故謚曰 元明。然其謚之也、意當及乎謚 元正、而同奉焉。故其謚皆以元冠之矣。天平勝寶八歲、太上天皇崩、聖武也。其勅云、太上天皇以出家歸佛、故不奉謚。據當時特有此勅而觀之、若二元女皇、雖乃遜位、尚非出家、非出家則其當奉謚。且 聖武之

追謚、在天平寶字年中、則二元應先是追謚。 元正暨 光仁 桓武 文德 光孝之謚、其奉之各當在其後朝。蓋皆是葬、然後謚。惟 仁明謚、然後葬。文德實錄特書曰、葬仁明皇帝于深草山陵。餘皆不然也。 聖武其初以出家歸佛、不敢奉謚也。 廢帝天平寶字二年、百官及僧綱上表、尊 上皇曰 寶字稱德孝謙皇帝、尊 皇大后藤原氏聖武后曰 天平應真仁正大后。於是追謚 先帝曰 勝寶感神聖武皇帝。本書曰、追上尊號曰勝寶感神聖武皇帝、謚曰天璽國押開豐櫻彥。今考之、所謂追上尊號、亦謂謚也。而其不言謚與下文所云謚互其言故也。 孝謙之號遂為謚焉。凡帝王謚號、蓋如此云爾。厥後追號有二焉。一取宮名也、一因陵地

也。曰平城。曰嵯峨。此類宮名也。平城帝之謚曰推國彥。然而世固其御所之宮曰平城天皇。或稱奈良帝。皆其遜位所遷御焉而遂稱之。不復奉謚。非終阼也。自淳和以下清和朱雀冷泉圓融華山一條三條鳥羽二條九條華園龜山伏見是皆上皇院名。遂以為稱。獨陽成院者。陽成所降誕宮名。此為異焉。凡人主遜位。必遷御離宮。稱之曰院。嵯峨離宮一曰嵯峨院是也。自宇多以降停謚。而朱雀以降。院代尊號。不曰天皇。蓋原乎此矣。後世其終阼者亦崩曰院。後一條為始。其後如後朱雀後冷泉堀河近衛皆是也堀河近衛皆其所終焉。而襲前號曰後某。亦後一條為始。是於一條為之子。且承之統也。非即其所終院名。至乃其餘。不必皆有謂焉。後朱雀以下皆是也。故不敢一一枚舉。惟後二條後嵯峨後龜山後土御門皆其所終焉。後深草即其所葬。而以仁明曰深草陵。故對此為後云。曰宇多。曰醍醐。曰村上。是皆陵地也。因陵地為稱。古有之。如孝謙曰高野天皇。桓武曰柏原天皇是也。後世罕矣。惟後深草然。曰白河。有遺詔稱之。然而非陵地。非所遷御宮名也。蓋嘗造浮屠大像。構院安之于白河。無乃其故乎。其餘不詳也。六條高倉土御門是也。夫停謚有說。必謂臣不敢議君。子不敢議父。曰有所諱似矣。以天子之尊。不曰天皇。此果何意哉。嗚乎。關大典。損國體。莫大焉。源親房以為非臣子之道。其言當矣。後世奉謚曰崇德。曰安德。曰順德。曰量量是已。後鳥羽其初謚謙德。及後嵯峨登極。乃改今號。然以是觀之。烏在其必停之哉。況乃天皇固至尊。所宜稱。故良史書之。不敢以院。可謂得體。且加之奉謚。定陵號。以脩祭祀。其於致孝於鬼神。庶乎有文也。

大祖為神武

相傳下鴨之祠奉神武之祀故號為御祖之神御祖猶言大祖。

神武陵

在畝傍山東北隅。諸陵式。畝傍山東北陵。北城東西一町。南北二町。○凡陵地指其地方。曰南北之類。率據諸陵式。不復多引他書而證之。蓋延喜中有議所定也。式以外否。曰白檮尾上。古事記

按

大祖之平定中國。相畝傍東南。以為土中。營王宮。曰橿原宮。蓋以其宮樹橿而所名歟。古事記橿作白檮。白檮即橿也。又稱陵所在曰白檮尾上。不是移之以宮樹。則取宮名也。尾上者山嵎如尾者之上。今畝傍山東北嵎所呼曰御陵山墳然而隆起此也。大和志以此為神八井之墳。神八井之葬于畝傍山北。雖於史有之。其所在山隅平地。未詳何處也。今妄認云爾。若果神八井之墳乎。其位已人臣。又何以傳謂之御陵乎。今呼曰御陵。是土人口碑承而不偽。凡此類可擇而采矣。大非如夫好事者以臆傳會也。但其狀不甚高莊。且不象官車。乃以上古大朴。制未備也。廟陵記。六。畝傍山東北陵。百年以來。犂為糞田。名曰神武田。猶餘數畝為一封冢。今聞其地。果有所謂神武田。然是平地。而距山嵎東北三町許。乃不合尾上之名。且所謂餘數畝為一封冢者。亦不在神武田。距神武田又東北三町許。有古墳在焉。蓋指此也。夫民之無知。惟貪地利。至乃妄犂天子陵墓。然殆及其石棺。懍懍畏怖。不敢侵之。遂餘其數畝為一封冢。是物之情也。苟輿之糞田其上。乃若是愍也。尚何更嘗一封于三町外哉。疑其古墳是當時所陪葬。或神八井之類。決非神武陵也。神武田一名美贊佐伊。是美佐佐岐所訛。即謂山陵也。山陵與廟。俗正其言。今謂神武田曰美佐佐岐。蓋以其嘗有廟焉。相傳舊嘗有神武祠廟在神武田地。昔年水潦。廟為之所漂。而後遷大窪村。大窪寺之趾有國源寺焉。又傳國源寺亦嘗自神武田旁遷于此。據多武峯記。有泰善法師。天延二年三月

十一日行畝傍東北遇一奇老人顔貌甚善謂曰爲朕講大乘法護國家榮福朕是人皇始祖言畢乃不見甚善以此瑞毎年三月十一日輙来誦法華經貞元二年大和守藤原國光爲創堂宇號國源寺云夫其説誕妄固浮屠氏之常然而其堂宇由此創造則 神武祠廟亦當在其寺中即 神武[illegible]曰塔坂内就其名而考疑是當時建塔廟處因稱美佐佐支歟其下曰洞村今居者之聚邑相傳其民皆 神武陵守戸凡守陵戸皆賤種本以罪隷没入者不齒鄉人也以故其守戸之子孫遂轉業屠者稱穢多亦勢也

環是山而有 綏靖陵在西北。諸陵式桃花鳥田丘上陵兆域東西一町南北一町 按 今呼綏善山綏善是 綏靖之訛也又名鳥田丘凡丘陵山岡並混言之依習俗從便宜不敢拘也今亦放此是即桃花鳥田丘省語也桃花鳥史一作築神武帝二年賜道臣第宅於築坂邑之古事記作衝田並讀爲鬪岐同地也然此名本非繫於畝傍西北距畝傍南可半里有舟附

村傍爲鳥谷村舟蓋後人所添附亦讀爲鬪岐因知鳥谷即桃花鳥谷之省語且 宣化陵有在焉則 綏靖陵亦當在其近地而今在畝傍西北甚無謂豈其改葬焉而仍其舊號歟夫名不虚口口碑所傳今訛則綏善省爲鳥田可以爲明證矣凡改葬雖史官失之尚有其跡之可推考焉孝昭應神反正諸陵是也仍其舊號亦然也應神陵曰藻伏山陵是也不惟是陵也鳥田丘是慈明寺村地

安寧陵在西南。諸陵式畝傍山西南御蔭井上陵兆域東西二町南北二町 按 御蔭井上陵是以井上爲陵所在然井之得名蓋因陵故爲御蔭今此陵呼曰阿禰山即 安寧所訛其地吉田村

懿德陵在南。諸陵式畝傍山南纖沙溪上陵兆域東西二町南北一町 按 今呼纖沙山以纖沙布露溪間也其地畝傍村 安寧及此陵並有祠在陵上凡陵地建祠奉祀往往有之未審其昉於何世也

宣化陵在身狹桃花鳥阪上。諸陵式身狹桃花鳥坂上陵兆域東西二町南北五町 桃花鳥乃畝傍南地 按 凡地謂之身謂高地曰高身卑地曰卑身之類是也蓋對天則地是形軀身狹之地因其介丘隴甚狹隘而名之歟乃分在南北爲大身狹小身狹欽明帝十七年置百濟人於大身狹屯倉高麗人於小身狹屯倉是也北者比之南頗廣所謂大身狹此也其地相接桃花鳥阪故號曰身狹桃花鳥阪上陵凡兩地之交不可偏擧必號之以兩地孝德陵號大阪磯長陵亦然 益田池碑云左龍寺謂龍蓋寺也世稱岡寺者是 右鳥陵

鳥陵即桃花鳥阪上陵而省其語也性靈集注鳥陵爲白鳥陵按史當在琴引原蓋今原谷村地也 陵地今爲鳥谷村自此東南即益田池故地故云右之也身狹之訛爲三瀨三瀨村乃在其東又其東[illegible]川村有劍池焉

孝元陵在劍池之島。諸陵式劍池島上陵兆域東西二町南北一町 是身狹之東 按 應神帝十一年十月作劍池然則穿此池後於築陵而陵號乃取於池池名曰劍未知其故也古事記作劍池中岡今呼其池曰劍淵陵曰中山冢

天武 持統合葬矣其陵在檜隈大内之丘 諸陵式檜隈大内陵兆域東西五町南北四町 檜隈是身狹東南所謂輕之舊都也 按 輕古時蓋廣

懿德帝都輕居於曲峽宮。孝元帝都輕居於境原宮。應
神帝都輕居於豐明宮。豐明宮趾即今之輕村。（三瀨村西有八幡祠。以此
爲宮趾。然其地甚狹。不取也。）而距境原東北數町。所謂大內之丘。當時蓋
以其在宮內名之歟。乃在輕村矣。（丘北田畝。土俗稱輕大臣宅地。疑是輕大寺之訛也。
凡舊宮地。必搆佛寺以異之。蓋中古風習。然則輕大寺。故是宮之地也。）檜隈名始見。雄畧紀。
（有檜隈民使）又其後　宣化帝都檜隈。居於盧入野宮。其趾即今
檜隈村此也。而檜隈坂合。是其少西北。今爲平田村。踰其北
丘。則益田池故地。其碑文但載檜隈。不復稱輕地。因以爲建
是碑時。或併輕以爲檜隈歟。不然。檜隈名不得冠之大內陵。
後世輕檜隈各別爲一村落。猶京之粟田。中世名改爲白河。

今又別爲一村。（白河村）一山。（粟田山）大內陵。巍然而崇。今呼爲大
山。取名其形也。欽明帝之世。檜隈人有駿駒。善超。乃越大
內之丘與谿十八丈。大內丘以高有名。已然矣。治陵蓋因此。
其高莊不亦宜乎。撿此陵。爲壇三成。而南面。其中等之上有
羨門。累石爲之隧。隧深可三丈。而有室。築之以堊。覆之以巨
石。崇廣皆丈餘。有石棺二焉。一在北南面。一在東西面。因以
爲其南面。天武也。西面。持統也。（廟陵記引或人說云。大內陵在淨御原村西。今
無淨御原村。但是陵東有上居村。土人云。上居者。淨御之音亂而謬也。）
欽明陵在阪合。（諸陵式。檜隈坂合陵。兆域東西四町。南北四町。）其南也。按平田村古
墳此也。今謂其北丘曰阪中。即阪合所訛。推古帝二十八
年。以砂礫葺檜隈陵。今撿之果然。以故或號石山。（聖德太子傳記曰。檜
隈寺者。欽明天皇宗廟也。今檜隈村道昭寺。蓋其遺構。欽明陵
尚有九層石浮屠。相傳聖德太子所建。且俗謂之
即以陵廟之稱互通也。）
文武陵在安古岡。（諸陵式。檜隈安古岡上陵。兆域東西三町。南北五町。）迺又其南也。按
以陵上孤松茂翳。今呼高松山。一名美贊佐伊。
齊明陵在越智岡。（諸陵式。越智岡上陵。兆域東西五町。南北五町。）越智乃檜隈西地。按
越智村西。則車木村也。土人傳是　齊明帝之葬。其靈車所
來止。因名曰車來。來今作木。音同也。其東岡崇數十仭。呼爲
天皇山。是蓋山陵也。又其側如所陪葬者有之。天智紀。葬
大田皇女於越智岡。或即此類也。神龜十四年五月。越智陵

崩長十一丈。廣五丈二尺。勅脩理之。遣使奉幣。今撿之果有
朽壞而易崩。又越智軍記載。置兵於越智陵。遣而守之云。茅
原之東有巒嶠。號志貴奈美伊佐羅波山。所奉藏　齊明天
皇處。因以爲志貴布也。奈美列也。謂山之形勢。施靡布列東
西也。伊佐羅波。大和方言。謂崩。明崩山指此。的在茅原之東
矣。

右十陵隸于高市郡

孝昭陵在掖上博多山。（諸陵式。掖上博多山上陵。兆域東西六町。南北六町。）按　神武帝
三十八年。巡中國。登掖上嗛間山。（今呼國見山）孝昭帝都掖上。
居於池心宮。今池內村即其趾。在嗛間山西北。又博多山在

池內西北並蒙之以掖上。掖上是此間總名可知矣。博多山今呼天皇山。上有祠奉 孝昭之祀。其地三室村。池內村西隣曰室村。室是 孝安帝秋津島宮所在。今有古墳焉。石棺一片暴露於其上。里老相傳此亦 孝昭陵。夫 孝昭之葬在 孝安之三十六年。意不應稽延至此。更據舊事記書元年八月葬之。則 孝安孝思之深。蓋初近葬其所居室地。朝夕觀望之。及晩年卜地改葬博多矣。且其曰三室。或仍陵舊蹟。三本為御者尊之之稱。

孝安陵在其東玉手丘。諸陵式。玉手丘上陵。兆域東西六町。南北六町。按蓋此間亦當隷掖上。而諸陵式不冠之。畧言爾。今陵所在曰宮山。其上有祠焉。玉手丘東南有舊冢。呼為蟻子山。取名其形也。然檢之實是宮車象。而左右有二三圍冢。蓋所陪葬者。人或以為 孝安陵非也。 孝靈 孝元二陵未象宮車。而 孝安獨先得如是哉。玉手一為玉田。是昔時玉田宿禰邑。方反正之喪。玉田宿禰職護其殯。而不共酒飲於家矣。已而懼罪殺朝使於路。而匿於武內之塋域。武內是玉田氏之祖。由此觀之。所謂蟻子山。蓋武內之丘墳。而其孫宿禰之所匿處。亦可以備考矣。

乃越智西南之地。自此其南可指芳野山。

右二陵隷于葛上郡

後醍醐陵在芳野山藏王堂東北。正統記。應仁記。年中行事。大平記。按今呼塔尾陵。昔時以陵前有如意輪塔名之也。

右一陵隷于芳野郡

崇峻陵在倉梯岡。諸陵式。倉梯岡陵。無陵地。芳野東北多武峯其東北之麓。是為倉梯。按崇峻為賊臣所虐。即日葬之。是不成葬也。意其陵不應比他。而今檢之。因其以石為玄室。呼曰巖屋山。一名赤坂山。一名御陵山。頗高壯。蓋非一朝所治。治壽藏當時已成俗。乃若

聖德太子磯長墓。蘇我蝦夷父子新漢大陵小陵是也。崇峻陵亦壽藏歟。不然。葬能得其速如此乎。地傍蹊間甚隘。不獲為之兆域。諸陵式曰無陵地。其此之謂歟。

右一陵隷于十市郡

舒明陵在押阪內。諸陵式。押坂內陵。兆域東西九町。南北六町。按今呼墶墶山。墶三成。故得斯名矣。

倉梯之北為押阪。又其北三輪。三輪而北纏向之西。是走山邊道也。

崇神陵在山邊道上。諸陵式。山邊道上陵。兆域東西二町。南北二町。曰勾岡。古事記。按今呼為向山。蓋以勾向字形近似。遂謬爾。陵旁瀧谷村。即山邊古道而西。距今道四町餘。

景行陵乃其北相並。諸陵式。山邊道上陵。兆域東西二町。南北二町。按史及諸陵式 崇神 景行二陵並但書山邊道上。而不言其孰南北也。然今以南者定為 崇神。則北是為 景行可知矣。且 景行御名忍代。而北陵呼為忍代山。即古遺言也。古者尚質。上下相名而不敢諱。乃若陵號。或因御名。不一而已。仲哀陵曰仲津山。應神陵曰譽田山。清寧陵曰白髮山。此皆仍其御名也。反正之耳原。安康之伏見。仁賢之埴生山等。亦因御名而訛也。陵旁柳本村。北隣乎釜口。

右三陵隷于城上郡

光仁陵在田原之東。諸陵式。田原東陵。兆域東西八町。南北九町。田原是寧樂東南

而寧樂之南乃山邊道也【按】諸陵式謂之東陵以其對西陵也西陵是 光仁帝之父施基皇子墓也（及帝之登極追稱為西陵今西四原村有古墳呼為君之冢此也）田原別為二村其東村之東有古墳呼曰王墓此即東陵也然其就荒穢侵耒耜所象以為宮車不可復見更考之今京郊諸陵惟 文德獨象宮車其餘蕞尒圓丘而平地之所築無復如舊矣此自 光仁既有然歟不必其殘也

開化陵在寧樂春日鄉率川阪上（諸陵式春日率川阪上陵兆域東西五段南北五段）【按】今奈良念佛寺地有古墳焉此也率川其源發春日山經此南而西兆域方面纔五段昔時蓋以郊于京邑逼於市廛而

致如此之陜陋

聖武陵在春日之北佐保山南曰南陵（諸陵式佐保山南陵東四段西七町南北七町）【按】今為眉間寺地為之所殘削無完也然猶撿其跡則後溝圓而前溝方所象宮車尚有存焉無北陵何以謂之南凡地偏處必稱以其所偏一方不必取對也（仲哀陵曰惠我長野西陵然無對）而為東是也佐保又有西陵東陵東陵是 聖武皇后藤原氏西陵是 文武皇后藤原氏（文武后之陵今呼為大黑芝其火葬處云[illegible]尊為大后大黑其音訛也其邊有刻石而如狐者七枚或云狗形也非狐古時隼人職守宮門為狗吠故臨大喪亦以狗形置梓宮旁）（聖武后之陵今喪其所）

元明陵在奈保山曰東陵（諸陵式奈保山東陵兆域東西三町南北五町）元正陵並

在其西曰西陵（諸陵式奈保山西陵兆域東西三町南北五町）奈保乃佐保之西所謂平城舊都北郊也【按】距今奈良之西十八町為法華寺村是皇居趾也二陵即其北今呼在東者為大奈閇在西者為小奈閇奈閇奈保之訛也大小以言前後之世次

平城陵號楊梅陵（諸陵式楊梅陵兆域東西二町南北四町）當時蓋栽以楊梅而所號歟乃舊都少西【按】廟陵記云法華寺西南有楊梅天神祠即其北陵此也（元正陵西北有大冢或安謚為平城陵今撿之其形象宮車而南面且環以溝二陋蓋 仁德陵以外其高莊無復如此其以為帝陵也宜矣然觀 光仁及 桓武 仁明諸陵當時蓋皆造陵卑小獨平城而得然乎此殊可疑矣更考之 仁德皇后磐之姬葬於奈良阪或此歟史及諸陵式所載古之后妃惟[illegible]功與 磐之姬也已蓋其他墓制率皆卑小艸野之間[illegible]焉後世不可得而識獨若奈良阪墳即以其高莊世世所[illegible]）

（也史及諸陵式安取諸蓋無他亦以其高莊）

右六陵隸于添上郡

垂仁陵在菅原伏見曰東陵（諸陵式菅原伏見東陵兆域東西二町南北二町）安康陵乃在其西曰西陵（諸陵式菅原伏見西陵兆域東西二町南北三町）是舊都西郊【按】今伏見菅原分為二村伏見村西有古墳呼為蓬萊山因其環溝池樹松柏俗以為仙島而所稱焉（垂仁帝之世但遣麻守使于異域及則帝已崩守不堪其哀乃復命陵前遂哭而死史謂其墓存也今陵北圓冢豈其此歟世妄認之為 安康陵然安康陵當在西則此其非是）此即 垂仁陵則其西數町又有呼為西蓬萊山今已墾為田惟其溝未埋處環殘陵若半月然蓋方其未毀與東陵屹乎相望也西蓬萊之名於是乎得此蓋 安

康陵也。呼為保天堂。安康御名穴穗。穗音保。省穴字呼之。則保天堂。即穗天皇訛也。

成務陵在狹城盾列池之後。諸陵式、狹城盾列池後陵、兆域東西一町、南北二町。是舊都西北郊野也。按狹城崎也。言山阜陬隅。今超昇寺村西北為山陵村。實是山阜陬隅。而有四池焉。池皆南北縱列。里老相傳。故七池。其三已作田。所謂盾列池。即縱列池也。盾縱音借也。

東南則　神功后之陵在池上。諸陵式、狹城盾列池上陵、兆域東西二町、南北二町。按陵旁有鳥居。土人歲時奉后之祀也。廟陵記引史曰、承和元年、以盾列山陵有異。開圖録觀之。北則神功后。南則成務帝之陵。北因。疑今所指亦承和以後更復傳其誤也。雖然諸陵式是延喜

中所論定。豈有誤也。蓋承和所聞及是有誤。而當時未深考之爾。

西北則　孝謙陵在高野。諸陵式、高野陵、兆域東西五町、南北三町。按史作佐貴高野山陵。佐貴狹城也。式不冠之。略言爾。孝謙。史稱高野天皇。正統記稱高野姫。按其文則高野陵。若壽陵然。

右五陵隷于添上郡

孝靈陵在傍丘馬阪。諸陵式、傍丘馬阪上陵、兆域東西五町、南北五町。傍丘是舊都西南。而其西並葛城山。延池乎南者。里所因。號傍丘馬阪。其西北。而葛城之麓也。按大和西偏。古葛城國也。後世分為二郡。曰葛上葛下。葛下即傍丘。西地所謂片岡莊也。片岡葦田池。及片岡氏之墟。並在下牧片岡。即傍丘。則其墟與池。所在牧地。果是傍丘也。馬阪。今之馬瀨阪。在達磨寺西。獨其地西山。是麓。而與傍丘隔離數町。因知傍丘非西山。而其名泛蒙此間。或指西山。曰傍丘。謬也。孝靈帝。孝元之六年葬。此稽延二何爾。或其改葬而然耶。然則其故陵何在也。黑田。孝靈所都。其地陵墓之類。累累有在。亦可備考。

顯宗陵在傍丘磐杯。曰南陵。諸陵式、傍丘磐杯丘南陵、兆域東西二町、南北三町。磐杯。傍丘南隅也。　武烈陵乃其北相並。曰北陵。諸陵式、傍丘磐杯北陵、兆域東西二町、南北二町。按磐杯之名久喪之。今傍丘之間。以磐字尋磐石之處。卒無有之。更因音考索。几磐祝假音通用。磐樟船之類祝而神之也。古事記。石作連作石祝作連。祝字是衍。即石之音注混入其本文者也。磐杯蓋壽藏。取其名於祝而築之。今傍丘南隅為岡莊。即片岡別莊名

也。有築山村。其南為陵家村。而南北各存古墳。因以為築山是磐杯省盤。而杯更為築也。陵家以嘗宅陵戶名之。今撿之。則北陵甚高莊。武烈之壽陵。其侈可想。而南陵乃平地之所築頗卑小。　顯宗之有天下也。躬仁儉。不亦其驗乎。史記酷吏傳。張湯調為茂陵尉。治方中。漢書音義曰。方中陵上土作方也。蘇林曰。天子即位。豫作陵。諱之。故言方中。由是觀之。占時本朝亦嘗有然者歟。可以考備矣。○大和志。以北陵為茅渟皇子墓。諸陵式茅渟皇子墓在葦田池。是即傍丘北隅也。非此也。

右三陵隷于葛下郡

河内山陵凡十有三所

仲哀陵在惠我長野。諸陵式、惠我長野西陵、兆域東西二町、南北二町。惠我長野濱石

川而南北長矣陵居其西偏故曰西陵 按 呼為仲津山古來所傳仍　仲哀御名也

允恭陵乃在其東北曰北陵 諸陵式惠我長野北陵兆域東西三町南北三町 按 呼為市野山此地故是所謂餌香市邊也 餌香即惠我 今為國府村

或以為市邊王押磐墓然他無所徵不取也

應神陵當西陵之南所謂惠我藻伏山陵也 諸陵式惠我藻伏山陵兆域東西五町南北五町 按 呼為譽田八幡山併用其御名與神號也因廟而祀焉地南隣古市故其緣記曰葬於古市郡長野山 緣記又曰欽明天皇二十年二月十五日勅陵前立社奉此祀焉 長野明是此間總名也今西北二陵皆繫長野而此陵獨不言長野南陵何也蓋藻伏之名

自古大閒即其地方不足詳言也藻伏古事記作裳伏注曰百舌鳥百舌鳥本是和泉地名也因疑此自彼改葬而仍其舊號遂喪陵地之故名故名曰蓬藁丘見於　雄略紀且百舌鳥八幡神祠相傳有改葬之說如今所疑也其八幡之山巍然而象宮車者蓋其故陵也書紀不言葬古事記云葬于裳伏山陵而闕其年月蓋追筆之未詳改葬否也古史之遺亦從可知

右三陵隸于志紀郡

雄略陵在高鷲原 諸陵式高鷲原陵兆域東西三町南北三町 是長野之西 按 嶋原村有古墳其形圓而環以溝此也呼為丸山以今所觀也然從遠眺之其地勢隆然所謂宮車象可以想見矣耒耜殘餘纔覩其圓悲夫高鷲之名久喪之但陵南有僧寺取以為寺地山號

其南埴生阪 埴生今訛為羽曳

仁賢陵在埴生阪本 諸陵式埴生阪本陵兆域東西二町南北二町 按 今呼牡計山其御名所訛御名於計也

右二陵隸于丹比郡 今分為南北二郡高鷲丹北也埴生阪本丹南也

其南阪門也 埴生阪門也和名抄鄉名尺度尺度即阪門今有阪田村蓋其訛也又有阪門池

清寧陵在阪門原 諸陵式阪門原陵兆域東西二町南北二町 按 呼為白髮山仍其御名也其地西浦村

而其東古市即惠我長野之南

安閑陵在古市高屋丘 諸陵式高屋丘陵兆域東西一町南北一町 按 明應亂畠山尚慶城據焉故今呼高屋城墟諸陵式　安閑春日皇后高屋墓 兆域東西二町南北二町 與山陵自別兆域史謂之合葬以地相隣謬之爾今祀八幡之神此也

右二陵隸于古市郡

古市之東南磯長

敏達陵在磯長曰中尾陵 諸陵式磯長中尾陵兆域東西三町南北三町 按 葉室村西有古墳此也其形象宮車據史初殯于廣瀨 廣瀨郡有仁基山酸山皆帝陵形也疑其一是敏達初葬之陵而史誤以初葬為殯亦不可知也 崇峻之四年祔其后

妃廣姬磯長陵 廣姬以敏達之四年薨 因知帝王后妃陵制故皆同

用明陵在其東北曰原陵 諸陵式磯長原陵北域東西二町南北三町 按 春日村古冢此也古事記以此謂中陵蓋西南則中尾東南則山田東北則大阪磯長西北則聖德太子墓屹乎相望也

推古陵在其東南曰山田陵 諸陵式磯長山田陵北域東西二町南北二町 按 山田村古冢此也古事記以此謂科長大陵以殊高莊也 科長即磯長

孝德陵在其北曰大阪磯長陵 諸陵式大阪磯長陵北域東西五町南北五町 大阪磯長地相接而陵介其際故取名於兩地 按 山田村古冢稱北山者此也大阪是葛城山自河內踰大和處

右四陵隸于石川郡

後村上陵在檜尾山觀心寺地 鳩嶺雜事記 觀心寺記 檜尾磯長之南也 按 寺後山中有圓墳廣可二丈寺僧歲時奉祀焉

右一陵隸于錦部郡

和泉山陵凡三所

仁德陵在百舌鳥耳原曰中陵 諸陵式百舌鳥耳原中陵北域東西八町南北八町 按 仁德帝六十七年冬十月幸河內石津原卜陵地方其營陵時有奔鹿入役所而斃乃異之而探其瘡痍則有百舌鳥從耳中出去耳已為之啼傷因命其地曰百舌鳥耳原遂又為陵號蓋壽藏自此始矣凡營陵因山然其高莊魏魏可仰未有如此其大也 帝之理天下以仁儉而其自營壽藏獨何以侈也蓋山陵所以奉祖宗表祀敬伸孝之誠而聖人建制垂訓不以天下儉其親乃以厚待其子孫不敢自薄於其葬至於今土人仰之號曰大山陵後世國恤率火其葬或以塔擬山陵僧司喪祭雖曰居儉禮由此亡夫喪祭禮之大經也仰大山陵而謂之侈者愛羊之類也不足與議禮意也天平寶字二年割河內置和泉國百舌鳥隸焉古事記百舌鳥作毛受毛受村石津村隣也

履中陵在西南曰南陵 諸陵式百舌鳥耳原南陵北域東西五町南北五町 按 呼為美賛佐伊在石津村北

反正陵在西北曰北陵 諸陵式百舌鳥耳原北陵北域東西三町南北二町 按 今呼其溝曰盾井之池盾井丹治比之訛仍其御名也在和泉界邑東郊 河內藤井寺西南古墳象宮東土人傳是反正陵夫反正以允恭之六年葬於耳原也則初葬或在於彼而史謂之殯蓋其所謬矣

右三陵隸于大鳥郡

攝津丹波阿波淡路讚岐隱岐佐渡凡七國山陵各一所

繼體陵在攝津三嶋藍野 諸陵式三島藍野陵北域東西三町南北三町 按 太田村古冢此也呼為茶臼山以其頂有凹處名之也然而象宮車環之以溝依舊焉 三嶋今割為上下二郡曰上島曰下島藍野陵乃在其交而所隸是下島郡

光嚴陵在丹波桑田郡之山國 太平記初居伏見光明院以其去京甚近去隱於山國遂崩焉 按 山國村有常勝寺即其火葬處今塔廟存焉

土御門陵在阿波板野郡之里浦（紹運録・東鑑・増鏡・要記・保暦間記・百錬抄並云承久三年遷于土佐尋遷于阿波寛喜三年十月十一日崩于阿波然皆不載其葬於里浦畧之也明月記天福元年十二月母后承明門院為帝營金原御堂移藏御骨焉故増鏡寛元元年十月修十三忌之法會於金原吉續記文永十年七月遣山陵使於金原金原蓋乙訓郡西郊所謂御堂今亾）按板野縁海洲嶼之間今稱無養莊里浦是洲中一村落有石塔土人莫知誰墓也但歳十月十一日父老齋於其前以通夜焉古来以然矣十月十一日即是　土御門之御忌蓋方其喪也民之悲哀何如哉至於今尚猶置齋奉祀不失其遺跡此僅可徵已

廢帝陵在淡路三原郡（諸陵式淡路陵北域東西六町南北六町）按和名鈔三原是國府所在　廢帝以　孝謙之雄猜降封淡路公而幽于其府既而公不堪憤踰垣而逃國守佐伯助掾高野並不等率兵邀之公還厥翌暴崩則其葬當去府不遠府趾今距洲本之治西南可三里曰市村其中稱國司館趾此也乃其西可三町有古墳在焉其方二十歩森如也　廢帝陵即此而其祠曰野田宮在旁焉

崇德陵在讃岐阿野郡之白峯寺（白峯寺縁起・紹運録）按白峯寺縁起山陵所在是其寺西北隅云其寺西北隅今撿之孤墳據岩壁之上封土高八尺石牆以環之其前有廟安　帝遺像以奉祀焉又左有　母后廟（待賢門院藤原氏）右有山神廟讃岐守源公世能致堂宇之脩嚴然可畏敬（他陵在阿波及薩摩封内並欲其國君亦能效焉）嗚乎亦異哉僻陬有陵寢其生也嘗有幽辱氐土而死也長見靈威祭則授福比之他就荒穢可謂幸矣

後鳥羽陵在隱岐海部郡之苅田山（百練鈔・増鏡・東鑑・要記〇増鏡云北面藤原能茂收遺骨歸京藏於大原西林院仁治二年二月造法華堂于大原還置焉藏於西林以下要記亦同之）按苅田今勝田山是也勝田山源福寺有塔廟即其火葬處

順德陵在佐渡雜大郡之眞野山（陵中記・平戸記・正統記・増鏡・紹運録・要記・百練鈔並云帝崩於佐渡百練鈔紹運録要記又載收遺骨還于大原法華堂然皆闕葬地）按諸書並皆闕葬地以其收骨歸京也雖然眞野山至於今奉陵寢之祀不敢弛廢云若讃岐隱岐阿波諸陵亦皆為其國人畏敬則邊鄙惇朴之風此大可愛矣

卷之一終

關東後學　蒲生秀實　稿

京郊山陵除泉涌其餘凡三十有八所按京師號平安其四郊是山城之郡鄉蓋自　桓武之奠都于平安而累聖山陵以香刹名藍布列於郊其麗曷嘗數十而已哉然喪亂之後已嘗毀兵火侵耒耜而殘暴荒穢其跡幾盡至於今所完以存蓋無幾焉且其地名亦變所在不諦曠野之間不可指定自史官之廢其所參考諸書率皆是家乘私記其說紛挐而難適從將何以徵惟妙法王家所藏而京古圖推步其地頗有可證足以為左券矣而至其所難悉乃俟有識

中宗曰　天智　天智陵在山科鄉是爲山科陵諸陵式山科陵兆域東西十四町南北十四町背鏡山面京路萬葉集額田王去山科陵時所賦歌中有鏡山之語按鏡山前是陵地而其右旁有小祠有鳥居焉土人歲時奉祀幸無所荒穢雖世有汚隆道有盛衰天之顧於有道特如是然陵之四野號御廟野廟之與陵俗言互通又東南有村落曰陵村乃隣大津大津是　中宗所都也廟陵記云山科陵石棺㨿而其蓋離棄於外今撿之不然其陵狀圓者此用明以来制也然則其內應有玄室其制嚴密苟陵不殘毀則石棺之蓋不得外出於陵尚無所殘毀則棺獨何以暴哉陵前有方石其上平而廣長若于尺呼爲饅石蓋奉幣使宣命之處也人或云此石嘗在於外後移致於此以復其初嚮以爲石棺蓋謬認指此

京之東郊曰粟田鄉此古鄉名也中世其稱更爲白河因水名也白河名亦廢而今三條有粟田口淨土村北有白河村其遺僅存矣其繼之而東即山科鄉而京路之南岐走伏見由醍醐　醍醐陵在醍醐寺北笠取山西畧記貞信公記○貞信公記云四面八十町牢深五尺方三尺校倉高四尺三寸縱橫各一丈校倉蓋其壙中所藏而安梓宮者四面八十町是擬爲兆域則似甚廣恐乃八町而衍十字也著聞集李部王記並稱醍醐寺北山陵故小野寺地也畧記○江次第以陵所爲醍醐寺地曼陀羅寺丑寅山椒記號陵所曰曼陀羅寺也更據真言傳仁海僧正建曼陀羅寺小野併觀之所謂小野寺即曼陀羅寺是也以山陵在其寺中故要記永正年代記並稱小野帝也是爲後山科陵拾芥抄山椒記按今陵地平坦草莽穢蕪然而從撿之固非塋傷而然也蓋嘗塔其上而塔爲兵亂之間所除去歟　朱雀陵亦然李部王記云山作使立卒都波三基於陵地知是卒都波以擬山陵而其理之不必高封朱雀陵乃其少南畧記要記帝王系圖大鏡裏書並云安遺骨於醍醐陵側然其火葬處所記不一

畧記爲愛岩山大鏡一說爲鳥部野編年記一說爲法性寺東中尾南原今從帝王系圖大鏡裏書要記以火葬于来定寺爲得其實也而醍醐寺東李部王記按距醍醐陵南可三町在家人屋後地名陵町也

右三陵隸于宇治郡

桓武陵在柏原諸陵式柏原陵兆域東八町西三町南五町北六町加丑寅角二岑一谷醍醐而南也其地乃通深艸山爲伏見按柏原名久廢其地難認廟陵記引山槐記指南云稻荷山南則極樂寺趾今是爲寶塔寺其南則霞谷是　仁明帝陵所也又其南伏見之山有柏原焉是　桓武帝陵所也據式條兆域及山槐記所載閱當時地圖即今之伏見城山古御香大亀谷等地總是皆柏原則

陵之所在想當在城之中央蓋築城時爲所毀壞又按仁部
記文永十一年以盜發柏原山陵諸陵寮上言其狀曰御所
之巔東西一丈三尺南北一丈六尺發掘上似塞以石又云
竹陵登十丈壇圍八十餘丈明是全體必不卑小而今問其
所終于難認則云壞於築城果然也廟陵記今呼曰金冢松山恐其所葬處噫
其城亦已墟桒海之感又奚耐焉

仁明陵在深艸山是爲深艸陵諸陵式深艸陵北城東西一町五段南五段北二町醍醐
而西柏原而北故嘉祥寺地也中右記江次第號霞谷古今集文屋康秀深艸陵
忌日歌中有艸深霞谷之語按嘉祥寺趾即今谷口村也谷霞谷之谷省
語也據古圖山陵果在焉其西有貞觀寺趾貞觀八年改定

深艸陵四至云西至貞觀寺東垣北至谷此二方足以取證
近世妄人榜於此陵側曰桓武天皇御陵甚哉欺物也
乃其西有法華堂以堂擬陵也是爲　後深艸陵康富記伏見中陰記
伏見　後伏見同祔焉伏見據中陰記皇年代畧記並云火葬深艸中陰記又云祔遺骨於
後深艸帝之法華堂後伏見據皇代記皇年代畧記並云火葬嵯峨野安遺骨於深艸法華堂按深艸安
樂行院中庭有小堂傳云是法華堂趾以其內安　先帝遺
骨稱爲御骨堂據古圖　後深艸　伏見　後伏見　後柏
原　後奈良同祔焉名五帝之陵更據泉涌寺說　後柏原
後奈良後遷之於泉涌寺云故除之
自此其西爲京之南郊曰鳥羽

鳥羽鄉有塔三基以擬陵　白河陵其西塔也故成菩提院地
編年集成火葬香隆寺西邊中右記以此爲衣笠山東麓而云安遺骨於香隆寺夫衣笠東麓即香隆寺所邊也皆丘
言舉其一百錬鈔天承元年遷於鳥羽三重塔乃謂成菩提院也故吉記壽永二年所遣山陵使其於成菩提院則注曰
白河院是也皇年畧記葬神樂岡不取也成菩提院三重塔是據百錬抄蓋天仁二年所建時未言其級者也更考長秋
記及中右記要記皇記天永二年及三年相非建塔於鳥羽皆稱曰多寶塔則天仁所建明是三重塔而成菩提院也
按地今已開墾尚謂其田曰成菩提院其中有圓丘蓋塔之
基也里老相傳以爲近衛陵誤也
鳥羽陵其中塔也愚管抄百錬鈔要記皇記編年紀皇代記並云葬安樂壽院塔單言塔者其畧之也
帝王系圖稱言本御塔是也近衛陵其東塔也要記皇記編年紀並云火葬船岡之西權安遺
骨於知足院常行堂百錬鈔長寛元年遷鳥羽之東殿美福門院之塔此也並是安樂壽院地安樂

壽院其僧相傳保延三年所創也按山槐記　鳥羽皇嘗創二塔於鳥羽之
東殿以其一令藏御骨一充之女院女院謂　美福門院也
安樂壽院相傳以中塔成於保延五年謂之本御塔東塔成
於保元二年謂之新御塔所謂本御塔是　鳥羽皇所最尊
焉故其落成也詔禪衆謂遷化之夕可托遺身於塔下安樂壽院
今尚藏此詔書此其明證也紹運錄葬新御塔来由記葬安樂壽院地就其上建五級寶塔莊飾巖麗准本
御塔其內安彌陀像稱新御塔此皆妄說也今不取今就其趾構堂焉相傳此塔以大文[illegible]火燬所
謂新御塔是　美福門院遺令使別葬已於紀之荒河高野
山高野平野村有一丘上建五輪塔其高三尺銘曰奉爲美福門院御菩提此也則其內空虛是
以　近衛遺骨藏焉爾

右六陵隸于紀伊郡

淳和陵在西岡鄕物集村。（史、葬於物集村、粉碎御骨、散於大原野西山嶺上。皇年代私記亦云、散御骨於大原野。）【按】諸陵式、淳和陵不載、以遺詔齏粉其骨而颺之。野也。物集村有圓墳焉。曰車家、里老相傳、淳和帝靈車火於此。猶可擬山陵、蓋帝王薄葬、以嵯峨為始。（嵯峨帝遺詔曰、夫存亡天地之定數、物化之自然也。欲朝死夕葬、宜作棺不厚、覆之以席、約以黒葛、擇山北幽僻不毛地、其葬限不過三日、夜刻行葬地、從者不過二十人。）然至于淳和、其所為亦已甚矣。當時中納言藤原吉野諫曰、不起山陵、古無有之。山陵猶宗廟也。苟無有之、臣子何仰。弗聽、遂致其葬若是其慘也。夫嵯峨、淳和兩帝、中古明主也。其遺風、後王則焉。而獨於薄葬者、誠為

可憾。（仁明帝遺詔、以布帛代綾羅、停鼓吹方相、而文德之葬禮、乃謂皆從儉約、一如仁明故事、而變其前例、惟有方相而已。清和、宇多亦遺詔依例、以火其葬、不起山陵、令百官及諸國不舉哀、停素服、而其停誄辭亦從。宇多、始故醍醐帝遺詔有使不奉誄也。）所謂荷前亦廢而不舉、惜哉。（淳和帝遺詔又云、國忌雖在追遠、反苦有司、歲終荷前、煩而無益、並停之。宇多帝遺詔亦停國忌荷前、於其後世例也、不足後道。）夫喪祭禮之大經也。是而崩壞、宜國亦從衰也。吉野中納言言不納、千載遺憾。

西岡鳥羽之西也。其北田邑鄕為京之西郊。

文德陵在田邑鄕眞原。（諸陵式、田邑陵、兆域東西四町、南北四町。）【按】眞原今名廣野。其陵狀前方而後圓、以象宮車、環之以溝、京郊山陵此特為然。然其廣狹纔不過十餘步、視之大和河內諸陵、可謂兒孫

已實録、八月乙卯崩、以九月甲子葬之。其間僅十六日、旦平地之所築、不因以山、宜其不如古也。

光孝陵在其北鄕立屋里小松原、是為後田邑陵。（諸陵式、後田邑陵在田邑鄕立屋里小松原、四至、西至芸原岳岑、南限大道、東限青卞寺、東北限大岑。畧記、皇年代私記、或作小松山陵、因稱小松帝。）仁和寺西南地也。（江次第作仁和寺西大教院、是拾芥鈔作仁和寺內大教院丑寅大教院。今亡、所謂立屋岳原諸名、亦皆失之。清水寺趾不知其處也。幸獨仁和寺所在與古不異、據古圖芸原岳岑、是小松岑、大岑即宇多山、大道當三條路。諸陵式所載頗合。）【按】今仁和寺西南有古墳、在焉。里老相傳以為光孝陵、據古圖果然。

北、爲宇多野、京之東北郊也。

宇多陵在宇多之大內山。（皇年代私記、畧記、大鏡裏書並云、火葬大內山、依遺詔不置山陵。）仁

和寺西北陬也。（古圖）【按】依遺詔、不置山陵、然已云火葬、則其火葬處猶足擬山陵。大內山是其火葬處。帝王系圖云、在仁和寺西、據古圖、即仁和寺西北丘頂、果有。宇多陵今呼為九山、因形而命之、此也。御室相承記、寬平法皇陵在神倉上。今九山而東北谿間有方地、圍之以小溝、其廣長東西四步、南北七步。此蓋神倉趾、亦可以備一證矣。（編年集成、宇多陵在仁和寺之奧。池尾之山、池尾山是山北幽澗邊也。與諸書不合。又九山而東北之丘、有大石、或謬為宇多陵、名勝志引三僧記曰、是一條左大臣雅信墓。據古圖果然。）

後朱雀陵（古圖、此間有陽明門院陵。）後冷泉陵乃列其側焉。（後朱雀據畧記、百鍊鈔、皇代記並火葬香隆寺、藏遺骨於圓教寺。後冷泉據畧記、百鍊鈔、皇年代畧記並云、火葬船岡西野、藏遺骨於圓

教寺圓教寺今亡 按 二陵是圓教寺安遺骨處也據古圖圓教寺在仁和寺東隅而二陵乃列於 宇多陵側不知或嘗改葬于此歟抑圓教寺安遺骨處固離在焉也

其西隔一溪鳴瀧川曰中尾村村之北丘隴迆邐乃其上方是北中尾村

村上陵在北中尾村紀畧葬田邑鄉北中尾一云宇多鄉北中尾陵○按宇多即田邑鄉地其地廣故或稱曰宇多鄉 按 長明發心集云仁和寺之奥有僧二人一稱西尾聖一稱東尾聖聖者法師尊稱也 因其所居也據古圖 村上陵在東尾西尾之北當其兩間也謂之北中尾不亦宜乎今之五智山即其地呼為御廟山山槐記村上陵在仁和寺北花長興中音近訛也源氏物語淸

花云岩陰松崎與也 天暦陵所在當時蓋其地有 天暦廟以廟稱陵也

圓融陵乃列於其側是為後村上陵紀畧畧記百錬鈔皇年代私記並云火葬圓融寺北安遺骨於村上陵側左經記寬仁元年遺使於四陵其一為後村上陵注曰圓融院是也 一條陵堀河陵又次焉一條據紀畧大鏡裏書並云火葬北山長坂野榮華物語皇年代私記並作石蔭小右記作岩陰即其同地也紀畧小右記左經記大鏡裏書並云避方忌權安圓成寺左經記又云寬仁四年遷於圓融寺邊堀河據要記皇記編年記皇代記皇年代畧記並云火葬香隆寺坤原安遺骨於香隆寺長秋記百錬鈔並云天仁元年還於仁和寺圓融院皇代記獨云醍醐寺不取也 按 一條陵左經記以為圓融寺邊 堀河陵長秋記百練鈔以為圓融院據古圖二陵皆列於村上陵側而 圓融獨否別在圓融寺圓融寺是仁和寺東南衣笠之麓也蓋其中有廟遂謬為陵歟 村上陵側不得重圓然葬已云村上陵側又稱後村上陵則其次當列一條 堀河然則云圓融寺邊或云圓融院並當改作圓融陵側恐是傳者之疎也

又其西愛宕之山其麓曰嵯峨

嵯峨陵在嵯峨大覺寺北皇年代私記葬嵯峨院北之山麓山槐記元暦元年以 天皇即位故遣山陵使是日山陵使左大辨經房遣于攝政府曰至嵯峨莫能得陵所問之里老則曰大覺寺北方山大覺寺舊是嵯峨離宮也 按 遺詔云擇山北幽僻之地以三日葬之不封不樹長絶祭祀諸陵式由此無載然今大覺寺北山麓幽僻之間有一丘呼為御貌山此蓋山陵也陵或稱廟廟之言貌也其音近聖德大子磯長墓上人稱御貌山以訛徵訛古蹟可考

自茲循山而東北 後宇多陵所在故蓮華峯寺地也皇年代私記葬蓮華峯寺傍山 按 寺之殿堂蓋自應仁亂已焦土里老猶識陵所曰大覺寺東北山麓呼為八角堂此也舊是八角堂而金玉其飾今者纔板屋庇焉

大覺寺之南其為亀山 亀山陵所在故淨金剛院法華堂地也增鏡火葬亀山殿上山建法華堂而安骨焉 文應帝外記分遺骨藏於淨金剛院法華堂及南禪寺金剛峯寺也 後嵯峨蓋同祔焉增鏡葬於藥艸院藥艸院是亀山殿別院蓋其火葬者帝王物語皇年畧記並云藏遺骨於淨金剛院吉續記文永十年遷于法華堂法華堂不書地蓋以其在淨金剛院內也然增鏡謂亀山帝之葬而建法華堂則似非與文永之法華堂是同或以其脩復謬為建之歟一院中理不容有二法華堂焉故知是同祔 按 亀山天龍寺是亀山殿趾相傳以其後林數畝之間為

窀穸所。蓋法華堂址。

登愛宕。其逐有僧院。號福田院。　後亀山陵所在。按陵上安塔。院僧奉祀。古来所傳。是已無復他證。

清和陵在愛宕西南水尾山。（實錄。火葬粟田山。安遺骨於水尾山。因稱水尾帝。）按水尾山本丹波國地。今隸于山城葛野。此山村極陋。有寺號圓覺圓覺寺者。舊是京東粟田道場也。　清和帝自遜大位。乃御清和院。遂遷御山莊。落飾入道。山莊即圓覺寺也。後歷覽名山佛攏。乃卜水尾之山。為終焉之地。既而歸京。崩於圓覺寺。故取其寺號以奉祀焉。有遺詔。不置山陵。諸陵式由此無載。然水尾山安遺骨處。里老相傳。以指圓覺西北山隅。為陵所。

其間隔一溪。此也。

後三條陵在仁和寺之南。故圓宗寺地。（畧記。百錬鈔。編年記。要記。皇年代畧記。並云。火葬神樂岡南原。藏遺骨於禪林寺。然而其後當還于圓宗寺。吉續記。文永十年。遣山陵使於圓宗。則圓宗是為陵所無疑。元亨釋書。延久二年。圓宗寺成。乃在仁和寺之南。莊麗冠都下。）按花園妙心寺西叢。是圓宗寺址。　後三條塔廟存焉。

仁和寺東丘曰衣笠之丘。丘之東。故香隆寺地。　二條陵所在。（編年集成。火葬香隆寺艮野。百錬鈔。嘉應二年。自香隆寺本堂遷于三昧堂。三昧堂不書地。蓋以其在寺内也。）按香隆寺址今小松村此也。攄古圖。　二條及其　后妃高松院陵。並在焉。今亡。

其東北山隅曰鏡石。以其光可鑑名焉。隔一川。（紙屋川）而東厓斗絶。其與乎鏡石相映處。曰石影。遂稱其左右。曰石影長阪野。（此奔丹波路。所謂北山長阪亦此也。故一條火葬。紀畧。大鏡裏書並云。於北山長阪。而榮華物語作石蔭。小右記作岩陰長阪野。但岩陰石蔭用字不一。是以易惑。且因字季地道。就鏡石之傍過也。故今定為石影。取名義於其相映處也。）

華山陵在石影。（道長記。葬大和寺東邊。紀畧。葬紙屋川上。法音寺北。攄古圖。法音寺之北。紙屋川之上。即大和寺東邊也。法音寺。大和寺今亡。）　三條陵乃列其側焉。（紀畧。大鏡裏書。榮華物語。並云。火葬于[illegible]。編年集成。葬於舟岡西邊。舟岡西邊即石影。皇代記。編年記並云。藏遺骨於北山小寺。北山是為此間總名。則所謂小寺亦或在石影地矣。）按二陵並皆壞。難得其所。攄古圖。推問其地里人云。百年前有一農呼甚兵衛者。開墾之地。號甚兵衛開。今其樹梅。圖相傳以為御墓所。疑是陵地矣。

後華園陵在京北之正親町小川西岸也。故悲田院地。（山陵。火葬悲田院。當時以泉涌寺方遇兵火。而不能葬也。悲田院今遷在泉涌寺地。親長記。文明三年。詣大原御墓。注曰。法華堂前是後華園御墓。觀於是。則嘗致遺骨於彼也。其塔廟今存。）按故悲田院址。今為大應寺。陵是圓冢。在寺東林。

右二十陵隸于葛野郡

陽成陵在粟田鄉神樂丘東北。（畧記。紀畧。）　後一條陵乃其西。而地傍丘。號櫻下。故菩提樹院地。（皇年代私記。火葬神樂丘。紀畧。火葬淨土寺西原。淨土寺西原即神樂丘東也。二書並云。藏遺骨於淨土寺。今鏡。安置於菩提樹院。百錬鈔。長久元年。自淨土寺還遺骨於菩提樹院。注曰。後一條御墓地。號櫻下也。菩提樹院。攄紀畧。拾芥抄。是神樂丘東地。古圖作菩薩壽院。是謬也。）　冷泉陵又其西北也。（紀畧。大鏡裏書。並云。火葬櫻本寺前野。要記。編年記。皇年代畧記。並作櫻本。乾原。紀畧。藏）

遺骨於山側。後二條陵又其西而左丘隅面吉田右日輪川矣。要記皇代記並云葬北白河殿北白河昔時此間總名也據古圖山陵有在 按 今真如堂前有佛院自此傍丘而西北當是櫻本地然失櫻本之名已久故陽成。後一條亦喪所在 自吉田東踰神樂丘未盡觀其北林有圓冢此有據於山陵據古圖是在原業平墓也曉筆記業平以元慶四年卒而葬東山吉田之奥而廟焉此即其廟之址 冷泉陵是丘北之畝呼冢圓處此也既被壟傷惟 二條陵獨見存焉

呼福冢。

神樂丘而東如意岳之西今其間而有山焉曰中山乃其南黑谷是故十樂院地也。 華園陵所在 園大曆華十樂院之山蓋大曆目錄十樂院在黑谷古圖亦然 按 陵今失其所古圖闕之華園妙心寺有廟曰玉鳳院妙心寺僧云其側即安遺骨處。

粟田而南鳥部鄉。

高倉陵在鳥部鄉東山清閑寺地 百錬鈔編年記皇年記平家物語盛衰記 六條陵乃其南隅也 明月記清閑寺小堂即六條御墓是也要記葬栖霞寺不取也 按 清閑寺相傳。 高倉陵是堂北丘墳植樹處。 六條陵乃堂之西園。怪石所伏俗謂此怪石曰要石要取其名揖扇軸處也處此觀京地其形勢宛然若開扇然而自顧即扇骨所輻湊可以喻矣

後白河陵在蓮華王院法華堂 玉海百錬鈔編年記盛衰記紹運錄○蓮華王院舊是法住寺地法住寺為木曽義仲所火就其據而所創也故康富記謂此陵在法住寺 按 今三十三間堂故蓮華王院地法華堂乃在其東以內安聖容呼為御影堂其右側相傳火葬處。

後堀河陵在今熊野觀音寺地 要記編年記百錬鈔編年集成並云葬觀音寺是也皇年代私記云葬日輪峨地不取也 按 泉涌寺來迎院北觀音寺東丘是陵所據古圖當矣。

法華堂自清閑而東南也觀音寺自法華堂而東南入山陂也今熊野而南乃謂之我禪房谷是泉涌寺地

右九陵及泉涌寺隸于愛宕郡

四條陵在泉涌寺地 自此以下不敢引證 泉涌寺齊衡三年左大臣藤原緒嗣所創始號之曰法輪厥後更之曰仙遊建保六年大和

守中原信房以法師俊芿居焉芿又更之曰泉涌當時以堂宇荒穢芿上疏以請理之 元曆上皇為之降施甚渥貞應三年秋七月敕中納言藤原通方昇以為官寺也 元亨釋書 自四條帝之葬也而經十三世至 後光嚴又以為陵所而後後圓融 後小松 稱光 後土御門 後奈良 正親町相尋乃爾 後陽成以降世世併與其 后妃皇太子之喪蓋亦皆倒以葬焉 官家固已存圖錄是以今不須考正而所考正皆在乎遠陵矣欲不徒豐昵而孝祀 百王 祈天永命焉

卷之二終

關東後學　蒲生秀實　稿

津久井清影　撰

陵墓一隅抄

明治元年（一八六八）京都府林芳兵衛刻本

據明治元年（一八六八）
京都府林芳兵衛刻本影印

陵墓一隅抄序

邈焉尚古。淳化于記。上張彬之治教。下濡皞之之王澤。礼楽刑政。志典大高於堅中也。

皇威不振。太阿下移。歸乎武人。及足利氏掌國命。列郡來峙。豪雄雲擾。延至應仁。京師焦土。朝廷古今之國史誌録。自至名家巨室之秘書旧記。概不免烏有之禍。中原欲蕩。斯時以為至天文之會。真人安降生。民来蘇。王道再懋。百物稍集。武成既定。文教運興。乃政事日以揚瑞。今慶典月以復之。標之戊寅。山陵撿討之

命始出。比之前。諸陵園倶成就。記録當時内秘。蓋字数者。自是先於下見林逞前王廟陵記以發。結其為甚嚆矢也。蓋時義文集陵載寡矣。海内未聞有唱出。故之學者搢紳先生。雖間蔵焚滅之餘集家。斯簡未許人写之流傳。自當慶大開書局。柏龍家僕傑出覺聘。自説本陸宣長。此為古事紀傳。學者推尊稱此道之領袖。而其所載。帝居之蹟。山陵之地。多出于記聞傳説。遂使人之耳目迷岐路。爾來河田一修蔵内異地志稱。陵墓籍以定其遺佚者多矣。文政年間。又有蒲生君臧者駒冠

務以諸明國書焉已任。先出職官山陵二志。偶有禍類以一学宮之翼。後護保其天限。惜乎中学不答於也。竟今死於窮困。其誌也。於甸服之陵。可謂精鑿無憾矣。蓋甸服之陵。稱呼其等。濫物乃見植。推驗似較可易。獨如京師密屬中世之住域。當時朝野称佛氏。蓋均火化盛行。至尊之遺。歸骨之一把火。不封不樹。甚者細粉以散山巓。嗟哉其遺詔不可回。焉奉載天恩。有所不忍聞也。況乱離間制度翻覆。今歴世仙骨。置之于小堂。如今厥績何在。偶土墳有存者。多是林藪而已。田圃而已。學者果依何。特不検之論

焉。彼之美逢如蒲生氏。雖於斯定。貲一旧記之秘記云之耳。故其主說往之牽附。不免承襲也。嗟艱哉。吾志向特乎專精焦思期以年所為中。其窮究敦載。及津久井翁。變其人也。翁居帖隠。影山陵之闕缺。殆歳五十。决然謝仕籍。驗于実地。按于舊籍。從来歷尋十數家。無虚日。輙与傳呴合。此翁曰。尚未矣。自名不能鄉。自僭至卜說。以至廣翁羽田吏從。允牧望無不文字酬對。尋究推申以證。時講發丑算按。陵之命果下。翁躍然矣。旨懇於寺国動詞通辭。今讀者生共然之心。都深于一時。天人之

所叙。　皇武翁同方將趨大審焉之會。余以事赴
中道戰寢。翁即援筆曰。吾老矣。猶負於後生耳。
偶就一書。紹次題曰陵墓一隅抄。以余乃平生之欽
命以首題。余看過之。書乃諭衆曰。昔蒲生君山
大山以定一代典籍。今翁之新書定于海内諸陵
遂隱其名乃大顯。近世而諸路之史人之常主
植切者寫其事以待也。如翁者不圖寸報不悼勞
斂以盡志乎道實中。爲愛生于大八洲之德所以
爲然而其勝景蒸之不及。章可不非奪歟。余如
睇於國史書箋之其人。　陵書之繁簡於
於是又以中於蒲生君臧。至翁大成。于此畢業。
聆者嘆曰。余所叙列　陵尊以下歷世　帝陵及后
外戚之墓祠。僅二百九十余所。是以　皇統聯以
御諱。歷年在位之筆日。今條數碩歷之所記圖
翁之述作賦篇刊以爲圖表。有所據。簡録有所
詞采。有所考證。應不易簡著實。皆所以通古昧
耳。今后之所窺一端也。余惟讀此篇者卒謂翁之苦領
書於此。周記後來所闕。及其係甚歟。然於是以懷未意。
嘉永七年甲寅夏日　山城文欽　武田子順撰

陵墓一隅抄序

戊申春。余觀花於芳野。過上市村。偶見一古謄本於店頭。引而檢之。乃具載一帝陵。顧備焉。但不記著人姓名。購歸。雜之史籍。他日閲之。宿昔疑之。未能質明者。渙然氷釋。其爲喜何如歟。于嗟　山陵之頽廢也久矣。彼大和河内之諸地。有其物而名或不正。若我京郊。其物既亡。名亦隨亡。悲哉。繇是前賢往々覃思極力。各就所見。樹一家之私議。彼松下見林廟陵記蒲生君臧山陵志等。雖頗益後生。務主閎博。一從一違。同異混淆。不免葑菲勞采也。顧茲瑣々冊子。未足窺作者全力。然而精鑿的實。較諸前書大有徑庭。余倍珍重。以示之於老友水嶋永政。々々亦奇之。反覆數四。謂余曰。今熟玩其辭意。非淺者之所能辨。其或成於若宮水枝之手。水枝者濃國郡上之一祝。氏白步慨。山陵及式社之荒涼。著書有數種。嘗與同列不合。逃居京師。終赴和泉。沒於龍門土神之祠官。惜哉。大禄不長。名亦不顯。斯書必係其遺篋之物也耶。余深然之。後屢誘永政。拜　聖蹟。每挿之行囊。苟有所見。輒加私註。題曰陵墓一隅抄。另作圖副之。頃者但謀更校訂。以傳之世。覧者留意於茲一隅。庶幾三隅可以反矣歟。時

嘉永甲寅春王月　平安後學津久井清影撰

槩例十言

一 本編原據諸陵式其都趾及山陵現存者一々分註地名要在昭明　聖蹟不湮滅但都趾註文已可略者略山陵所在之郡名也

一 延喜以降至近朝綱羅紹運録或雜載家乘之書國内志等苟渉陵事者采用之以爲附録

一 曰今按者皆係余輩同社之私說曰詳干其考者當時識者之定論也省不云々者厭其繁碎而然

一 省註從簡約若御諱贈等及崩薨皆代以・印

一 [illegible]以諡[illegible]年号等多不收録

一 [illegible]於某宮葬於某陵或於仙院或於離宮不出本都者今不必詳言但其崩行在殯葬亦於他土者特載[illegible]

一 齊明帝[illegible]書在位幾年者係於在位中之崩略記、幾年者皆讓位後之殂落也

一 諡法—者法皇也至法諱不悉記

一 女帝后妃皇女屬者施黑圈以別于他項

一 歷代山陵者不拘存亡前後列敘擧之后妃以下諸墓存者記焉不存者闕焉惟示其誌霊地使人便拜趨早良太子之八嶋廟櫂林皇后之長明神班子女王之福王子社等乃此也

一 抄中杜撰不自覺者極多博雅君子幸審其真僞見正便將喜而改之

以上

本朝帝號歌

原伊藤東涯所述後高祖龍溪補次今再改補南朝及文化帝已下以正順序云

神武綏靖安寧始　懿德孝昭孝安嗣
孝靈孝元開化後　崇神十代實祚熾
垂仁景行及成務　仲哀神功攝應神
仁德履中反正崩　允恭天皇二十世
安康雄略與清寧　顯宗仁賢武烈建
繼體安閑宣化帝　欽明繼之三十代
敏達用明崇峻皇　推古舒明皇極尊
孝德齊明天智帝　大友天武至四十
持統文武及元明　元正聖武又孝謙
廢帝稱德授光仁　桓武定鼎五十添
平城嵯峨淳和世　仁明文德清和傳
陽成光孝宇多後　醍醐天皇六十延
朱雀村上冷泉院　圓融花山一條迨
三條後一後朱雀　後冷泉院七十朝
後三白河堀河帝　鳥羽崇德近衛續
後白河又二條院　六條高倉數八十
安德後鳥羽土御門　順德後堀四條院
後嵯峨後深草龜山　後宇多奕葉九十屢
伏見後伏後二條　花園後醍醐光嚴興
光明崇光後光嚴　後圓融帝一百羨
先是後醍醐復位　後村後龜稱南朝
後小松時歸一統　稱光後花後土後柏原
後奈良正親町後陽成　後水尾明正百十孫
後光後西靈元皇　東山中御櫻町帝
桃園後櫻次後桃　光格百廿謚號復
仁孝孝明真陵成　今上踐祚萬々歲

首註陵墓一隅抄　五刻

天照大神之孫　天忍穂耳尊御子
瓊々杵尊　天降筑紫日向高千穂峯　今霧島山是也　皇居吾田長屋笠狭宮址　薩摩國阿多郡加世田高屋社之地

日向埃山陵

天津彦彦火瓊瓊杵尊在日向國（今薩摩高城郡）無陵戸（薩摩國高城郡水引郷宮内村亀山新田八幡宮本社下　或曰亀山者神山之訛乎）

彦火々出見尊　皇居高千穂宮在位六百八十歳宮崇稱島山麓扶野神徳陵後廣野原

日向高屋山上陵　古事紀高千穂山日本紀異説同

彦火火出見尊在日向國（今大隅國肝属郡内之郷國見嶽陵上在社）無陵戸

下野方高屋明神是景行帝遥拝之地

鸕鷀草不葺合尊　皇居同上崩于西洲之宮

日向吾平山上陵

彦波瀲武鸕鷀草不葺合尊在日向國（今大隅国肝属郡始良郷上名村巌洞中鵜戸明神　一説同所南一里中之嶽頂上蔵王権現是御陵云云）無陵戸

彦五瀬命　後出

已上神代三陵於山城国葛野郡田邑陵南原（今其古址不知云云　太秦木嶋社之地歟）祭之其兆域東西一町南北一町

人皇第一代諱若毛沼命
神武天皇　七十六年三月十一日崩　年百二十七
神八井耳命

畝傍山東北陵　按神代三陵各在陵及社山陵志所謂洞村上御陵山可考

畝傍橿原宮（古址高市郡畝火村）御宇神武天皇在大和国高市郡（山本村領田間字御陵　其間通之田称神武田）兆域東西一町南北二町守戸五烟

二代　神渟名河耳
綏靖天皇　三十三年五月十日、八十四

桃花鳥田丘上陵　一説慈明寺者祠廟之址而眞陵在畝化陵桃花鳥坂之北云云

葛城高丘宮（葛上郡森脇村）御宇綏靖天皇在大和国高市郡（慈明寺村東　俗説稱主膳塚）兆域東西一町南北一町守戸五烟

三代　磯城津彦玉手見
安寧天皇　三十八年十二月六日、五十七

畝傍山西南御蔭井上陵　西字日本紀旧事紀无

片塩浮穴宮（葛下郡三倉堂村）御宇安寧天皇在大和國高市郡（[illegible]）[illegible]町南北二町守戸五烟

四代　大日本彦耜友
懿徳天皇　三十四年九月八日、七十七

畝火山南纖沙溪上陵

輕曲峡宮（同郡軽村坤方旧址存）御宇懿徳天皇在大和國高市郡（池尻村北字[illegible]山東谷九山之東北平林之中）兆域東西一町南北一町守戸五烟

五代　観松彦香殖稲
孝昭天皇　八十三年八月五日、百十四

掖上博多山上陵

掖上池心宮（同郡池内御所二村之間）御宇孝昭天皇在大和國葛上郡（三室村[illegible]山陵在天皇社）兆域東西六町南北六町守戸五烟

六代　[illegible]
[illegible]

玉手丘上陵

室秋津嶋宮（同郡室村）御宇孝安天皇在大和國葛上郡（[illegible]村字[illegible]八幡[illegible]村）兆域東西六町南北六町守戸五烟

七代　大日本根子彦太瓊
孝靈天皇　七十六年二月八日、百二十八

片丘馬坂陵

黒田廬戸宮（城下郡宮古黒田二村之間社之森）御宇孝靈天皇在大和國葛下郡（王寺門前村之西馬瀬坂之上字孝垣戸）兆域東西五町南北五町守戸五烟

八代　大日本根子彦國牽
孝元天皇　五十七年九月二日、百十六

劔池嶋上陵

輕境原宮（同郡大軽村大道西[illegible]）御宇孝元天皇在大和國高市郡（石川村東劔池中山）兆域東西二町南北[illegible]町守戸五烟

九代　稚日本根子彦大日々
開化天皇　六十年四月九日、百十五

春日率川坂上陵　上日本紀旧事紀作本

春日率川宮（今奈良[illegible]小西町南子守町率川社之地）御宇開化天皇

十代、御間城入彦五十瓊殖
崇神天皇
六十八年十二月五日、百十九

在大和國添上郡（河内村、漢國社西、念佛寺境内）兆域東西五段南北五段以在京戸十烟毎年[illegible]令守

山邊道上陵（古事記云山邊道勾之岡上、舊事紀與式全）
磯城瑞籬宮（城上郡三輪村東、南御縣神社之西）御宇崇神天皇
在大和國城上郡（柳本、東別所村字仁賀[illegible]、鶴語字景行陵南北立）兆域東西二町南北二町守戸一烟

十一代、活目入彦五十狭茅
垂仁天皇
九十九年七月三日、百四十一
五十瓊敷入彦命 後出

菅原伏見東陵
纏向珠城宮（城上郡穴師村西、字長者屋鋪）御宇垂仁天皇
在大和國添下郡（寶來寺村、字寶來山）兆域東西二町南北二町陵戸二烟守戸三烟

十二代、大足彦忍代別
景行天皇
六十年十一月七日崩于志賀高穴穗宮、百四十三
日本武尊 見小碓 後出

山邊道上陵（日本紀、古事紀、舊事紀與式全）
纏向日代宮（同郡穴師村北）御宇景行天皇在大和國城上郡（渋谷村東南字向山、字景行神陵相坐）兆域東西二町南北二町陵戸一烟

十三代、稚足彦
成務天皇
六十年六月十一日、百八

狭城盾列池後陵
志賀高穴穗宮（近江國志賀郡北太村、即皇居跡）御宇成務天皇
在大和國添下郡（超昇寺郷之内、山陵村字石家）兆域東西一町南北三町守戸五烟

十四代、足仲彦
仲哀天皇
九年二月六日崩于筑紫橿日宮、五十二
皇居列今長府二之宮、在住吉明神之北
續壽之聖蹟同城下西北在大寶山日頼寺山中寺者慶喬創寺公所建也

惠我長野西陵
穴門豐浦宮（長門國豐浦郡府中）御宇仲哀天皇
在河内國志紀郡（今丹南郡岡村管内、字美佐其佐伊）兆域東西二町南北二町陵戸一烟守戸四烟（[illegible]）

十五代
神功皇后
仲哀后攝政、六十九年四月十七日、百

狭城盾列池上陵
磐余稚櫻宮（十市郡池内村）御宇神功皇后
在大和國添下郡（山陵村、成務陵西五町許、字五社神）兆域東西二町南北二町守戸五烟

十六代、大鞆和気、又誉田別
應神天皇
四十一年二月十五日、百十一

惠我藻伏崗陵（諸本誤作藻伏、山岡古本及古事紀作薄伏崗、[illegible]）
輕嶋明宮（大和國三瀬大輕之地。為二字也、古事記作輕嶋豐明）御宇應神天皇
在河内國志紀郡（誉田八幡宮與陵、字長野山）兆域東西五町南北五町陵戸二烟守戸三烟

十七代、大鷦鷯
仁德天皇
八十七年正月十六日、百十（イ百二十三）
菟道稚郎子 後出
稚野毛二派皇子
太良子
彦主人王

百舌鳥耳原中陵
難波高津宮（攝津國東成郡[illegible]、寺域北在小[illegible]地）御宇仁德天皇
在和泉國大鳥郡（[illegible]）兆域東西八町南北八町陵戸五烟

十八代、大兄去来穂別
履中天皇
六年三月十五日、七十七
市邊押羽皇子 [illegible]

百舌耳原南陵
磐余稚櫻宮（前誌）御宇履中天皇
在和泉國大鳥郡（上石津村、字[illegible]鉢山）兆域東西五町南北五町陵戸五烟

十九代、瑞歯別
反正天皇
六年正月廿三日、六十[illegible]
丹南郡北黒山村[illegible]之地

百舌耳原北陵
丹比柴籬宮（河内國丹北郡松原庄植田村廣場神祠之地）御宇反正天皇
在和泉國大鳥郡（中筋村字田出井）兆域東西五町南北五町陵戸五烟

二十代、雄朝津間稚子宿禰
允恭天皇
四十二年正月十四日、八十

惠我長野北陵
遠飛鳥宮（大和國高市郡飛鳥村）御宇允恭天皇
在河内國志紀郡（國府村、字市野山）兆域東西三町南北二町陵戸一烟守戸四烟

二十二代 安康天皇 穴穗 三年八月廿日、五十六

菅原伏見西陵
石上穴穗宮（山辺郡田村）御宇安康天皇在大和國添下郡（宝来村西城山之内字保天堂）兆域東西二町南北三町守戸三烟（續日本紀類聚國史共云和銅八年四月充守戸肆烟）

二十一代 雄略天皇 大泊瀬幼武 廿三年八月七日、六十二

丹比高鷲原陵（今堺縣大石表日高鷲原界府与力上條某勤土人建焉）
泊瀬朝倉宮（大和國城上郡黒崎岩坂二村之間）御宇雄略天皇在河内國丹比郡（今丹北郡嶋泉村字丸山）兆域東西三町南北三町陵戸四烟

二十二代 清寧天皇 白髪 五年正月十六日、四十一

飯豊皇女 後出

河内坂門原陵
磐余甕栗宮（大和國十市郡池内御厨子村）御宇清寧天皇在河内國古市郡（西浦村字白髪山）兆域東西二町南北二町陵戸四烟

二十四代 顕宗天皇 弘計又曰来目稚子 三年四月廿五日、三十八

傍丘磐杯丘南陵
近飛鳥八釣宮（高市郡八釣村）御宇顕宗天皇在大和國（諸本訛作和泉國今改之）葛下郡（池田村字二見山）兆域東西二町南北三町陵戸一烟守戸三烟

顕宗兄 二十五代 仁賢天皇 億計又嶋稚子 十一年八月八日、五十

埴生阪本陵
石上廣高宮（宮字脱今補之大和國山辺郡嘉幡村）御宇仁賢天皇在河内國丹比郡（今丹南郡野々上村東坂本字牡計山同郡野中村属地）兆域東西二町南北二町守戸五烟

二十六代 武烈天皇 小泊瀬稚鷦鷯 八年十二月八日、五十七
手白香皇女 継體后欽明母 後出
橘仲皇女 宣化后 合葬于身狭桃花鳥坂上陵
春日山田皇女 安閑后 後出

傍丘磐杯丘北陵
泊瀬列城宮（城上郡長谷出雲村）御宇武烈天皇在大和國葛下郡（築山村字城山）兆域東西二町南北二町守戸五烟

應神五世孫彦主人王子 二十七代 継體天皇 男大迹 二十五年二月七日、八十二

三嶋藍野陵（或云從近江至若狭路傍大陵在是太良子彦主人王子之墓也乎）
磐余玉穗宮（大和國十市郡今不知）御宇継體天皇在攝津國嶋上郡（今嶋下郡太田村字茶臼山）兆域東西三町南北三町守戸五烟

二十八代 安閑天皇 勾大兄 二年十二月十七日、七十 後以皇后春日山田皇女及天皇妹神前皇女合葬是陵

古市高屋丘陵
勾金橋宮（大和國高市郡曲川村）御宇安閑天皇在河内國古市郡（古市村字城山）兆域東西一町南北一町五段陵戸一烟守戸二烟

二十九代 宣化天皇 檜隈高田 四年二月十日、七十三
石姫皇女 欽明后 後出

身狭桃花鳥坂上陵
檜前廬入野宮（同郡檜前村）御宇宣化天皇在大和國高市郡（鳥屋村之内舩附村字吴佐武佐伊山）兆域東西二町南北二町守戸二烟

三十代 欽明天皇 天国 三十二年四月十五日

檜隈坂合陵
磯城嶋金刺宮（城上郡金屋村西南初瀬川南）御宇欽明天皇在大和國高市郡（平田村字猿山）兆域東西四町南北四町陵戸五烟

三十一代 敏達天皇 譯語田 十四年八月十五日、四十八 初葬于廣瀬郡二基山後與其母皇后磯長陵

河内磯長中尾陵
譯語田宮（大和國十市郡太田村）御宇敏達天皇在河内國石河郡（太子村葉室村之間西山字天王山）兆域東西三町南北三町守戸五烟

三十二代 用明天皇 大兄 二年四月九日、六十九 初葬磐余池上陵
大伴皇女 後出
櫻井皇子
吉備姫女王 仝
穴穗部皇女
石前皇女 後出
舎人皇女 仝

河内磯長原陵
磐余池辺列槻宮（大和國十市郡安部長門村）御宇用明天皇在河内國石河郡（春日村平林之字園明土）兆域東西二町南北二町守戸三烟

厩戸太子 推古天皇之 後出
山背大兄王 今
三十三代 崇峻天皇 泊瀬部
五年十一月三日 七十三
崇峻天皇四年…推古天皇…

倉梯岡陵

倉梯宮 古址不詳或云同郡下居村之辺 崇峻天皇在大和國

十市郡 倉梯村今不詳 或云多武峯東口 無陵地并陵戸

按下文云磯長原墓在敏達天皇陵内古事記敏達天皇陵在河内科長又云用明天皇陵後遷科長中陵以未視之似頗可疑者

三十四代 推古天皇 敏達后 額田部
三十六年三月七日 七十五
竹田皇子 母推古
押坂彦人大兄皇子 敏達

磯長山田陵

小治田宮 大和國高市郡豊浦村 御宇推古天皇在河

内國石河郡 南山田村字高家 兆域東西二町南北

二町陵戸一烟守戸四烟

三十五代 舒明天皇 敏達孫 田村
十三年十月九日 四十九
初葬于滑谷岡

茅渟王 敏達

三十六代 皇極天皇 敏達曾孫 舒明后
空居飛鳥板蓋宮 三年

押坂内陵

高市崗本宮 高市郡岡村 又百済村 御宇舒明天皇在

大和國城上郡 忍坂村字 鳥山 兆域東西九町南

北六町陵戸三烟

三十七代 孝徳天皇 軽
白雉五年十月十日 五十九

大坂磯長陵

難波長柄豊碕宮 摂津國西成郡本庄村 御宇孝徳天

皇在河内國石河郡 山田村大道竹内越北方字上之山 兆域東

西五町南北五町守戸三烟

三十八代 斉明天皇 皇極重祚
白雉十二年七月廿四日崩 六十八
…

越智崗上陵

飛鳥河原宮 同郡岡飛鳥二村之間 御宇皇極天皇在

大和國高市郡 鳥屋村越智村東… 墓二所… 是間人女王太田皇女墓而

似陵在即帝之薛所… 兆域東西五町南北五町陵戸五烟

三十九代 天智天皇 葛城
在位十年 …
同十二 …

山科陵

近江國大津宮 滋賀郡錦織村字御所跡清水在 御宇天智天皇

在山城國宇治郡 山科御陵村字御廟野中在陵前小祠 兆域東西

十四町南北十四町陵戸六烟

○九

四十代 天武天皇 …
朱鳥元年九月… 六十五
…皇女 孝徳后 …

檜隈大内陵

飛鳥浄御原宮 同郡上居村 一作浄御原 御宇天武天[illegible]

在大和國高市郡 [illegible] 兆域[illegible]

南北四町陵戸五烟

大友天皇 …
四十一代 持統天皇 天武后 …
…年十二月廿二日 五十八
…

同大内陵

藤原宮 高市郡高殿村 御宇持統天皇

在大内陵陵戸更不重充

草壁皇子 …
朱鳥四年四月 二十八
…

舎人親王 …
天平七年十一月 …
…崇道尽敬天皇

真弓丘陵

岡宮 同郡岡寺観南嶋庄村 御宇天皇在[illegible]

郡 越村 … 兆域[illegible]

北二町陵戸六烟

四十二代 文武天皇 天武孫 珂瑠
慶雲四年六月十五日 二十五
火葬於飛鳥岡

檜前安占岡上陵

藤原宮 御宇文武天皇在大和國高

市郡 野口村字王之墓 兆域東西三町 … 南北三

町陵戸五烟

四十三代 元明天皇 天智女 草壁皇子妃
養老五年十二月七日 六十一
火葬于椎山陵

奈保山東陵 一作椎山 …

平城宮 今奈良町西二條村之地 御宇元明天皇在大和

國添上郡 … 兆域[illegible]

西三町南北五町守戸五烟

四十四代 元正天皇 文武姉 飯高
天平廿年四月廿一日 六十九
…

奈保山西陵

平城宮 御宇浄足姫天皇在大[illegible]

國添上郡 養老… 兆域東西三町南[illegible]

五町守戸四烟 …

○十

四十五代　聖武天皇　[illegible]　法諱勝満

淡海公不比等女孝謙母　御聖武皇后號原安宿媛　法号光明子　天平宝字四年六月崩、六十　孝謙知大皇太后藤原氏故事

佐保山西陵　平城朝太皇太后藤原氏在[illegible]上郡眉間寺西北、大皇后々原、今呼大黒之芝所乎　兆域東西[illegible]南北十二町守戸五烟

佐保山南陵　平城宮御宇勝宝感神聖武天皇在大和國添上郡奈良法蓮村眉間寺後山也　兆域東四段西七町南北七町守戸五烟

佐保山東陵　平城朝皇太后藤原氏在大和國添上郡眉間寺東北古冢老松七株在隔路相對南陵是乎　兆域東三町西四段南北七町守戸五烟

四十七代　廢帝　天武孫　大炊　天平神護元年十月廿三日崩　[illegible]

四十六代　孝謙天皇　[illegible]　十年

四十八代　稱徳天皇　重祚　[illegible]

井上内親王　後出

子光仁父　施基皇子　霊亀二年八月薨　[illegible]　追号田原天皇

[illegible]大臣諸人公女光仁母　施基妃紀橡姫　[illegible]皇太后

淡路陵　廢帝在淡路國三原郡加集中村天王森陵上在社　兆域東西六町南北六町守戸一烟

高野陵　平城宮御宇天皇在大和國添下郡[illegible]　兆域東西五町南北[illegible]東北古墳是此陵或云成勢陵坤方一丘称高冢是歟町守戸五烟

田原西陵　春日宮御宇天皇在大和國添上郡同郡白毫寺村宅春日之地[illegible]矢田原村西[illegible]　兆域東西九町南北九町守戸五烟

吉隱陵　皇太后紀氏在大和國城上郡[illegible]　兆域東西四町南北四町守戸五烟

四十九代　光仁天皇　白壁　[illegible]　号後田原天皇

孝謙異母妹廢太子他戸母　光仁皇后井上内親王　[illegible]

贈太政大臣乙継女桓武早良母　光仁皇太夫人高野御生　延暦八年十二月崩　明年[illegible]　[illegible]

田原東陵　平城宮御宇天宗高紹天皇在大和國添上郡田原郷日笠村宇家之本　兆域東西八町南北九町守戸五烟

宇智陵　皇后井上内親王在大和國宇智郡御山村今日御廟冢　兆域東西十町南北七町守戸一烟

大枝陵　蔵堂西一町許路傍俗云酒顛童子首冢　大皇太后高野氏在山城國乙訓郡[illegible]　兆域東一町一段西九段南二町北三町守戸五烟

五十代　桓武天皇　山部　延暦廿五年三月十七日[illegible]　大同元年十月[illegible]　日本根子皇統弥照天皇

内大臣良継女平城母　桓武皇后藤原乙牟漏　延暦九年閏三月崩[illegible]　[illegible]　陵號高畠陵

光仁太子桓武同母弟　早良太子　延暦[illegible]　[illegible]

栢原陵　平安宮今之京係愛宕葛野二郡之間實為萬代不易之地御宇桓武天皇在山城國紀伊郡伏見山松原中今不知近年[illegible]　兆域東八町西三町南五町北六町加丑寅角二岑一谷守戸五烟

高畠陵　皇太后藤原氏在山城國乙訓郡向日町北三町許[illegible]　兆域東三町西五町南[illegible]町北六町守戸五烟

八嶋陵　崇道天皇在大和國添上郡八嶋村御社也陵今失所在　兆域東西

五町南北四町守戸二烟

贈太政大臣百川公女
平城妃藤原帯子
帝在儲宮納爲妃延暦十三年[illegible]
追贈皇后

河上陵

贈皇后藤原氏在大和國添下郡[illegible]兆域東西四町南北四町守戸五烟

百川女淳和母
桓武妃藤原旅子
延暦七年五月[illegible]三十
追贈皇太后

宇波多陵

贈皇太后藤原氏在山城國乙訓郡[illegible]
中間云小畠川東一町許路南荒丘是陵
兆域東西四町南一町[illegible]町守戸五烟

桓武女平城同母妹
淳和妃高志内親王
大同四年五月[illegible]
[illegible]

石作陵

贈皇后高志内親王在山城國乙訓郡[illegible]兆域東西三町南北六町[illegible]戸五烟[illegible]

贈太政大臣清友女仁明母
嵯峨皇后橘嘉智子
世俗称檀林皇后
嘉祥三年五月[illegible]六十五

嵯峨陵

太皇太后橘氏在山城國葛野郡[illegible]
之島居西二町許水尾路南今不審其所在
兆域東西六町南二町北五町守戸三烟不入領幣之例
一説小倉山二尊院[illegible]明神祠所祭檀林后落髮也

五十一代、安殿
平城天皇
天長元年七月七日[illegible]五十一
崩於平城宮[illegible]
五十二代
嵯峨天皇
五十三代
淳和天皇
伊豫親王

楊梅陵

平安宮前註以下准之御宇日本根子推國高彦尊天皇在大和國添上郡超昇寺郷之内字稲寺村字日称習山兆域東西二町南北四町守戸五烟

[illegible]陵

[illegible]

右大臣三守女
女御藤原貞子
貞觀六年[illegible]
[illegible]

郡嘉祥寺今廢爲瓦造居是町南称東家東城之地陵今別在考兆域東西一町五段南七段北二町守戸五烟
按三代實録貞觀三年六月十七日庚申詔定仁明天皇深草山陵四履東西一町五段南限純子内親王家地北限峯八年十月廿二日癸巳勅改定深草山陵四至東至大墓南至純子内親王家北退西至貞觀寺東垣北至谷

五十五代、道康
文徳天皇
天安二年八月[illegible]

田邑陵

平安宮御宇文徳天皇在山城國葛野郡中野村北東御廟山上字奈良山此地旧号真原岡乎兆域東西四町南北四町守戸五烟
[illegible]東限嵯峨大路按可作東丹波路嵯峨大路子在考

[illegible]陵

太皇太后藤原氏在山城國宇治郡[illegible]陵戸五烟

[illegible]
[illegible]
以下詳于附録

中尾陵

贈皇太后藤原氏在山城國愛宕郡鳥部郷今小松谷東蓮觀寺上石掛墓露迹生小松所即陵陵戸五烟山四町五段四至東限谷南限田西限隍北限谷

五十八代、時康
光孝天皇
[illegible]

後田邑陵

光孝天皇在山城國葛野郡田邑郷立屋里小松原今仁和寺御門跡西稲王子村領畠中一封土与古文合眞陵也山州名跡志以下走時異説皆不足信用矣陵戸四烟四至西限芸原岳岑南限大道東限清水寺東北限大岑

[illegible]
皇太后藤原胤子
[illegible]
[illegible]勧修寺

[illegible]陵

贈皇太后藤原氏在山城國宇治郡小

野郷（勧修寺村西山　今称鞍岡）陵戸五烟四至東限官道西限檀尾山峯北限松尾山尾并白口分并勧修院山南限小栗栖寺山并姓口分（京本作猫尾山、寺剣本作擅尾山、未知孰是、貞享本作檀尾、按今勧修寺道中之茶屋西岡上在称龍神松老大木土人今為陵也、北松尾山者松影両南小栗栖寺山者因村西山上尚□□□□□、即柏原今之御草山境相接山嶮名勝志所謂大谷口山者南□□路也）

（太政大臣良房女清和母、入道后藤原明子、称染殿后、昌泰三年五月・七十二）

白河陵

大皇太后藤原氏在山城國愛宕郡粟田郷（今田中村北称大后森俗訛呼園子森神乎）陵戸三烟四至東限勝隆寺東谷南限自御在所南去十一丈西限贈正一位源氏墓北北限白河

（一本□□）

（一大臣良見女母清和母　円和皇后藤原高子　於二條后有故廢退復本位　延喜十年三月・六十九　按此墓今存於寺陵中、諸僧徒、密宗、開祖之顯、或如大宗帝陵、僧徒後堀川院及上東門院等皆是也、猶今尚供香華、所以王道佛法並行也乎）

後深草陵

中宮藤原氏在山城國紀伊郡深草郷（今真宗院後丘関山、僧圓空廟塔之地乎）守戸三烟東限禅定寺南限大墓西限極楽寺北限佐能谷（大墓又指柏原也）

（景行第三皇子仲哀父　小碓尊、又名日本武尊　二十八年薨于伊勢國・三十）

能褒野墓

日本武尊在伊勢國鈴鹿郡（庄野駅東白鳥冢或云従藭野下山中間木原村在武備宮是墓□）兆域東西二町南北二町守戸三烟

（履中孫女仁賢顯宗姉　飯豊天皇、又号飯豊青尊、忍海部女王、歴代不以在位九箇月　甲子年十一月崩・四十五）

墳口墓

飯豊皇女在大和國葛下郡（今市村或為顕宗帝陵二□、八幡祠記云應永三年陵□□、勅使持节千此、三歳者昊去々發也）兆域東西一町南北一町守戸三烟

（仁賢女　安閑后山田姫　又号赤見皇女）

古市高屋墓

春日山田皇女在河内國古市郡（古市村□、閒陵字□、山前見）兆域東西二町南北二町守戸二烟

（仁賢女山田皇女対手配母　継體后手白香皇女）

衾田墓

手白香皇女在大和國山邊郡（中山村字□□□）兆域東西二町南北二町無守戸令山邊道勾岡上陵戸兼守

（神武同母兄　彦五瀬命　元年五月薨于軍）

竈山墓（竈諸本誤作竃、日本紀古事紀田事紀共作竈）

彦五瀬命在紀伊國名草郡（宮郷和田村西南□町許字九山竈山明神社存焉、祀彦霊乎）兆域東西一町南北二町守戸三烟（京良亨□□作南北参町、本作南北貳町、按剣本似是）

（宣化女敏達母　欽明后石姫皇女）

磯長原墓

石姫皇女在河内國石河郡敏達天皇陵内守戸二烟

（一本無）

（息長真手王女押坂彦人母　敏達后廣姫　四年十一月）

息長墓

舒明天皇之祖母名日廣姫在近江國坂田郡（大原庄村井田村字皇后冢）兆域東西一町南北一町守戸三烟

（敏達子舒明茅渟王父　押坂彦人大兄皇子）

成相墓

押坂彦人大兄皇子在大和國廣瀬郡（平尾村称王子冢亦是相村）兆域東西十五町南北二十町守戸五烟

（同帝女舒明母彦人皇子妃母姫為妃　糠手姫、更名田村皇女）

押坂墓

田村皇女在大和國城上郡舒明天皇陵内（忍坂村字鐘々山西南二町許天神社後古墳乎）無守戸

五十瓊敷入彦命

宇度墓

五十瓊敷入彦命在和泉國日根郡（自以田村）兆域東西三町南北三町守戸二烟（東字度川上玉田山土人建小祠于墓上）

菟道稚郎皇子（應神子仁德弟）

宇治墓（墓所今在寺曰奥聖寺正保年永井信濟者削平兆塋所建旧名神明山墓即奥聖寺上方當）

菟道稚郎皇子在山城國宇治郡（朝日山）兆域東西十二町南北十二町守戸三烟

欽明女
大伴皇女

押坂内墓

大伴皇女在大和國城上郡押坂陵域内（忍坂村櫓々山東北半町許字云不見子）無守戸

敏達孫皇孫孝德父
茅渟皇子

片岡葦田墓

茅渟皇子在大和國葛下郡（上牧村字[illegible]世俗曰[illegible]）兆域東西五町南北五町無守戸

（䒑）

欽明孫右同帝母
茅渟妃吉備姫王

檜隈墓

吉備姫王在大和國高市郡檜隈陵域内無守戸

用明第一子
厩戸皇子（推古廿九年二月廿二日四十九）

礒長墓

橘豊日天皇之皇太子云聖德在河内國石河郡（叡福寺境内御墓山）兆域東西三町南北二町守戸三烟

舒明夫人鏡女王

押坂墓

鏡女王在大和國城上郡押坂陵域内東南（忍坂村櫓々山東南二町許字[illegible]）無守戸

天武帝子 草壁最後立為太子
高市皇子（一品大政大臣淨廣持統十年七月・四十三）

三立岡墓

高市皇子在大和國廣瀬郡（大垣内村三立山）兆域東西六町南北四町無守戸

葛城襲津彦女 履中反正允恭母
仁德后磐之媛命（三十五年六月崩于筒城宮三十七年十一月葬于那羅山）

平城坂上墓

磐之媛命在大和國添上郡（超昇寺郷常福寺村當内字比志夜氣山）兆域東西一町南北一町無守戸令楯列池上陵戸兼守

上総守當麻眞人老女廢帝母
舎人妃正三位大夫人山背

淡路墓

當麻氏在淡路國三原郡（廣帝陵天平寶字七八町内小丘字馬目土人云昧之地）兆域東西二町南北二町守戸正丁五人

桓武外祖父
贈正一位高野朝臣乙継（本姓和氏出百済武寧王子純陀太子宝亀中改姓為高野）

牧野墓（ヒラノ）

太皇太后之先和氏（キサキ）在大和國廣瀬郡（大垣内村西北十町今称莫野冢）兆域東西三町南北五町守戸一烟

（䒑）

同帝外祖母大枝朝臣眞妹
乙継夫人贈正一位（本姓土師宿祢又示知）

大野墓

太皇太后之先大枝氏在大和國平群郡（高安村土人称御墓後樹均土残所墳高四尺周十八歩計）兆域東西六町南北四町守戸一烟

宇合之三子平城嵯峨外祖父
内大臣藤原良継公（神護八年五月・六十二）

阿陀墓

贈太政太臣藤原朝臣良継日本根子推國彦尊天皇外祖父在大和國宇智郡（南阿陀村称大冢山）兆域東西十五町南北十五町守戸一烟（諸本脱字今補之）

皇継夫人

村國墓

贈正一位安部命婦同天皇外祖母在大和國添下郡（在所不詳、或云勘木村円山家）兆域東西四町南北五町守戸一烟

用明孫聖德子
○山背大兄王
皇極二年癸卯冬十一月與子弟妃妾遷入斑鳩寺俱自經薨

平群北岡墓
山背大兄王在大和國平群郡（法隆寺墓上有寺曰法積寺）兆域東西三町南北二町墓戸二烟

用明庶妹鳥石、厩戸來目皇子等母
○穴穗部間人皇女
一說天智妹間人皇女、如墓之地可考

竜田清水墓
間人女王在大和國平群郡（竜田村南小吉田村清水山吉田寺）兆域（八幡祠後冢墳存）東西三町南北三町墓戸二烟

●山背大兄王妃

竜田菀部墓
石前女王在大和國平群郡（竜田村北俗呼和爾山）兆域東西二町南北二町墓戸二烟

右三墓不入頒幣之例

○内大臣大織冠鎌足公
天智八年十月十六日薨年五十六葬城州山科陶原地而火葬、瘞骨於攝州安威山、九年閏九月六日改葬于和州倉橋山

多武峯墓
贈太政太臣正一位淡海公藤原朝臣在大和國十市郡（淡山權現即墓、元亨釋書云、僧定慧改葬於此、建祠廟於墓上是也）兆域東西十二町南北十二町無守戸

不比等男
○左大臣藤原武智麿公
天平九年七月

後阿陁墓
贈太政太臣正一位藤原朝臣武智麻呂在大和國宇知郡（小嶋村栄山寺之北）兆域東西十五町南北十五町守戸一烟

宇合第八男
○右太臣藤原百川公
寶龜十年七、四十八

相樂墓
贈太政太臣正一位藤原朝臣百川淳和太上天皇外祖父在山城國相樂郡（吐師村今称長冢、墓畔圓冢三ヶ在）兆域東西三町南北二町守戸一烟

●百川夫人

後相樂墓
贈正一位藤原氏同天皇外祖母在山城國相樂郡太政太臣墓内（所前同）無守戸

桓武第四子
○三品中務卿伊豫親王
大同二年十二月座事於川原寺幽死寺、在乙訓郡菱川村

巨幡墓
贈一品伊豫親王在山城國宇治郡（六地藏村）（大善寺上方字金冢、土俗称皇冢）兆域東一町西一町南二町五段北三町守丁一人

奈良麻呂子
○從五位下内舍人橘清友

加背山墓
贈太政大臣正一位橘朝臣清友仁明天皇外祖父在山城國相樂郡（旧鹿背山村古寺近郊[illegible]）兆域東西四町南北六町守戸一烟

●清友夫人

小山墓
贈正一位田口氏同天皇外祖母在河内國交野郡（田口村）兆域東西三町南北五町守戸三烟

左太臣正二位冬嗣公
天長三年七月薨五十二、葬後號閑院大臣、深草判官謚云、贈正一位、藤原草山、在深草山大化之所所埋骨於木幡山也

後宇治墓
贈太政太臣正一位藤原朝臣冬嗣文德天皇外祖父在山城國宇治郡（北木幡村林山称赤冢二ヶ所之内）東西十四町南北十四町守戸二烟

○冬嗣夫人從三位藤美都子

次宇治墓
贈正一位藤原氏同天皇外祖母在山

城國宇治郡贈太政大臣墓内〔前同所〕

嵯峨第十四皇女
●正三位源朝臣潔姫
贈太政大臣藤原良房公室
齊衡三年六月薨擇神楽
岡白河建為葬地

愛宕墓
贈正一位源氏清和太上天皇外祖母
在山城國愛宕郡〔田中村東〕北域東二町南一町西一町五段北一町五段守戸一烟

右大臣是公女伊豫親王母
●桓武妃藤原吉子
大同二年坐子廢廃承和六年
九月贈従三位十月以有崇
贈正三位

大岡墓
桓武天皇夫人従三位藤原氏在山城國葛野郡大岡郷〔今岡村擬木原辺在一村号岡野或云此村村南一丘世俗謂為又徳寺陵者此墓也〕
守戸一人

清和外祖父号忠仁公
○忠仁公藤原良房
貞観十四年九月、六十九

後愛宕墓〔雍州府志考云忠仁公墓在法性寺薬所後白河帝影堂東称是公為火化之地致〕
太政大臣贈正一位美濃公藤原朝臣
在山城國愛宕郡〔一条寺村地名奈良舊址考五舞楽寺子蔵里村之中間〕守戸一烟

此経廿一條后及照宣公母
●長良夫人藤原氏

深草墓
贈正一位藤原氏陽成太上天皇外祖母在山城國紀伊郡〔深草極楽寺舊址畬神山俗称昭宣公冢實昭宣公母之冢乎母則陽成帝外祖母也〕守戸一烟

桓武第十二子宇多外祖父
○仲野親王
貞観九年正月、七十六

高畠墓〔拾芥抄天慶九年四月廿六日記九墓中載曰葛野仲野親王様葛野當宗氏〕
贈一品太政大臣仲野親王在山城國葛野郡〔太秦村西中郷村管内高塚之地土人呼曰稚子辻皇笑山〕墓戸一烟

宇多外祖母
●仲野室

河嶋墓
贈正一位當宗氏在山城國葛野郡〔西大寺村〕
〔今称御墓或云俗呼天皇森一丘乎〕墓戸一烟

光孝外祖母
●総継夫人藤原数子

八坂墓
贈正一位藤原氏在山城國愛宕郡八坂郷〔法観寺塔北金園町人家裏稲荷小祠俗称朝日冢之地〕墓地十町墓戸一烟

同帝外祖父
○贈太政大臣藤原総継公

拜志墓
贈正一位藤原朝臣総継在山城國愛宕郡鳥部郷〔清閑寺西方山上在大石所乎〕墓地四町墓戸一烟

朱雀村上二帝外祖父
○昭宣公藤原基経
寛平三年正月、五十六
於深草山火化見于
古今集僧勝延歌

次宇治墓
贈正一位太政大臣越前公藤原朝臣
在山城國宇治郡〔木幡村東北一丘俗呼執冢所乎〕墓戸一烟

醍醐外祖父
○小一條内大臣高藤公
昌泰三年、六十三

小野墓
贈太政大臣正一位藤原朝臣高藤在山城國宇治郡小野郷〔勧修寺村称御陵〕

同帝外祖母
●高藤夫人宮路氏
山科大領弥益女
今勧修寺南二所明神社
祭弥益夫婦云也

後小野墓
贈正一位宮路氏在山城國宇治郡小
野郷〔同村今称櫻冢〕

昭宣公嫡子
○左大臣藤原時平公
延喜九年四月、三十九

又宇治墓
贈太政大臣正一位藤原朝臣時平在山城國宇治郡〔北木幡御林山西麓三十番神冢是乎〕墓戸一烟

以上
陵墓総百二十箇所

津久井清影謹校

首註陵墓一隅抄

附録

三十九代　後後後帝　〇天武天皇　天智長子　諱伊賀　在位七箇月　白鳳元年七月廿三日戰不利登長山前以自刎年二十五

長等山陵　在近江國志賀郡園城寺　二御在所不詳或云北院林中一圓丘称亀塚者是陵乎

五十二代　〇嵯峨天皇　神野　十四年　承和九年七月十五日五十七

嵯峨院北山陵　在山城國葛野郡大覺寺北御廟山上

五十三代　〇淳和天皇　大伴　十年　承和七年五月八日五十五　火化碎御骨散西山嶺上　遺詔不置國忌陵戸

大原山陵　在同國乙訓郡大原野勝持寺山西戌間峰　称経塚　火葬所同郡物集村土人号廟所家又在車家　一説非此帝之御也

五十六代　〇清和天皇　惟仁　十八年　元慶四年十二月四日三十一　於粟田山莊圓覺寺　法諱素真

水尾山陵　土民指御陵称清和之口穂原山中此辺古木繁茂従昔栖黒鹿白鹿各一雙時々出遊云　在同國葛野郡水尾村西水尾岡　村中在社祭天皇其児子四所権現　火葬所同國愛宕郡上粟田山　今不知禅林寺後山在御灰塚又疑揚神明坂中間或云一町許山上在称御家所即其地乎

五十七代　〇陽成院　貞明　清和第一子　八年　天暦三年九月廿九日八十二　落飾

神楽岡東地　在同國同郡真如堂門前人家幾圃中

五十九代　〇宇多院　定省　十年　承平元年七月十九日六十五　法

大内山陵　在同國葛野郡仁和寺北宇多野　土人称天皇冢　火葬所同寺奥池尾山　拠前同所乎

六十代　〇醍醐天皇　敦仁　三十三年　延長八年九月廿九日四十六　法

後山階陵　在同國宇治郡小野隨心院東　下醍醐村領　平林中

六十一代　〇朱雀院　寛明　十六年　天暦六年八月十五日三十　法

醍醐陵　在同國同郡後山階陵南三町許　醍醐陵町人家裏御骨堂路経古木在　火葬所来定寺北野　今依晃街道一之橋案方一町在柿木出称畫塚是乎

六十二代　〇村上天皇　成明　二十一年　康保四年五月廿五日四十二　法

村上山陵　在同國葛野郡田邑郷北中尾　今謂字寺北東字春日谷原山頂叢石築固之処

六十三代　〇冷泉院　憲平　二年　寛弘八年十月廿四日六十二　落飾

櫻本寺山側　在同國愛宕郡神楽岡東麓　今白川街道南名曰字九田家之西之山中此之陵但田字叫器今不知　為陽成陵非也山陵志所謂台北之訛呼家田處既被毀乎　火葬所櫻本寺前野　今不知

六十四代　〇圓融院　守平　十五年　正暦二年二月十二日三十三　法

村上山陵傍　在同國葛野郡村上山　前註陵傍　今謂廿寺北東峰原中央之地　火葬所圓融寺北原　今不知　古跡在竜安寺等持院之間　又紫野雲林院邊　載于栄花物語以下諸書尚可考

六十五代　〇花山院　師貞　二年　寛弘五年二月八日四十一　法

紙屋川上法音寺北　在同國葛野郡大北山村　[illegible]

六十六代　〇一條院　懐仁　圓融子　二十五年　寛弘八年六月廿二日三十二　法

圓融院陵邊　在同國同郡龍安寺界内　前註于圓融陵相並　火葬所石蔵　[illegible]

六十七代　〇三條院　居貞　冷泉子　五年　寛仁元年五月九日四十二　法

北山小寺中　在同國同郡　今小北山村妙徳寺中在八幡小祠之位　船岡山西辺一條帝御葬地傍　[illegible]　火葬所

六十八代　〇後一條院　敦成　二十年　長元九年四月十七日二十九　法

菩提樹院　在同國愛宕郡神楽岡東麓今東北院　[illegible]　西北隅築上置浄土寺天神　火葬所浄土寺西原　神楽岡東[illegible]称茶毘家地　置御骨浄土寺後廷于菩提樹院　旧地今真如堂北山新寺之様称芝野林叢之地

六十九代　〇後朱雀院　敦良　九年　寛徳二年正月十八日三十七　法

仁和寺中圓教寺　御陵号円乗寺　在同國葛野郡北山龍安寺方丈後山　火葬所香隆寺乾原　今不知

七十代　〇後冷泉院　親仁　在位二十三年　治暦四年四月十九日四十四

仁和寺中圓教寺

在前同所後朱雀陵並火葬所船岡西北（大徳寺西大野今岡邑迎一家見予等親覧）安御骨於仁和寺山（仁和寺山前古寺廟也）

○七十一代 後三條院 延久五年五月七日 法 四十

同寺中圓宗寺

在同國葛野郡龍安寺中（方丈西北宜春院庭叢山即陵）
火葬所神樂岡東原（今説諸王子到鹿谷路傍三條家子）安御骨於禪林寺（移葬于圓宗寺今向御灰冢存）

○七十二代 白河院 大治四年七月七日 法 七十七

鳥羽成菩提院御塔

在同國紀伊郡竹田村西畑中（二字浄菩提院也）
火葬所香隆寺乾野（後朱雀同迎）置御骨於同寺後遷于成菩提院

○七十三代 堀河院 嘉承二年七月十九日 二十九

圓融院三重石御塔（御灰冢後圓融寺）

在同國葛野郡龍安寺界内（今不知）
火葬所香隆寺坤原（一説東迎今等持院村與四角冢又安置御骨）
同寺後今渡于仁和寺（前同所陵記云）

○七十四代 鳥羽院 保元元年七月二日 法 五十四

鳥羽安樂壽院御塔（以塔擬山陵蓋奉遺詔也）

在同國紀伊郡竹田安樂壽院

○七十五代 崇德院 長寛二年八月二十六日 四十六 于讚岐國

白峰陵

在讚岐國阿野郡綾松山頓證寺
火葬所白峰寺北石巖

○七十六代 近衛院 久壽二年七月二十三日 十七

鳥羽安樂壽院新御塔（鳥羽東殿美福門院御塔也後奉渡于此帝御骨）

在山城國紀伊郡竹田村安樂壽院
火葬所葛野郡船岡西野御骨暫安置知足院

○七十七代 後白河院 建久三年三月十三日 法 六十六

法住寺法華堂（今不知或云瓦坂迎接慈円和尚詠御茶毘之烟乎）

在同國愛宕郡蓮華王院東（今法住寺小堂御木像存堂下四尺土中石槨納）

○七十八代 二條院 永萬元年七月二十八日 二十三

香隆寺三昧堂（按香隆寺旧趾今等持院小松原之地寺本十二坊蓮臺寺別也世俗為同寺非矣）

在同國葛野郡松原村（寺正親庵即三昧堂趾六陵並存一所高松院予往年掘出二人骨壺為祀）
（寺開祖及如大法之遺骨置于同寺）

○林五

○七十九代 六條院 安元二年七月十八日 十三 於葬禮東山第壹輪

東山清閑寺小堂

火葬所香隆寺艮蓮臺野奥奉納船岡山（長寛平家物語云於蓮臺野柏野在古墓号曰陵之上异于）
在同國愛宕郡歌中山清閑寺（或云今称高倉帝陵所即小堂跡云而此帝陵也）

○八十代 高倉院 治承五年正月十四日 二十一 於六波羅池殿

清閑寺法華堂

前同寺六條帝小堂跡北方中壇竹林即法花堂趾
火葬所東山麓（今不詳按法花堂趾東丘林上之山神林墓是陵乎）

○八十一代 安德院 壽永四年三月廿四日於門司關入水 八

阿彌陀寺御影堂

在長門國豊浦郡赤間関（或云同郡地吉里九是山奉葬数及二位禪尼歟今在帝陵並二位尼墓）

○八十二代 後鳥羽院 延應元年二月廿二日 法 六十 於隱岐

守貞親王

大原法華堂

在山城國愛宕郡大原勝林院中實光坊後山（十三重御石塔）
火葬所隱岐國海部郡葛田山（今源福寺之地）

○八十三代 土御門院 寛喜三年十月十一日 法 三十七 於阿波

金原法華堂（又云金原御堂）

在山城國乙訓郡奥海印寺村南七八町計金原（寺已廢而為土在同所民居）
火葬所阿波國板野郡無養村

○八十四代 順德院 仁治三年九月十二日 四十六 於佐渡

大原法華堂

在同國愛宕郡大原來迎院藥師堂後山（是陵乎）
火葬所佐渡國雜太郡竹田村眞野山

歴代不入 ○九條廢帝 文暦元年五月廿日 十七 於安養院御所九條殿

廢帝社下圓丘

在同國紀伊郡伏見街道家本町（世俗訛為淡路廢帝冢）

○八十五代 後堀川院 文暦元年八月六日 二十三

東山觀音寺北邊（又曰新熊野觀音法華堂塩臺出為路外今熊野奥）

在同國愛宕郡泉涌寺界内來迎院持山

○八十六代 四條院 仁治三年正月九日 十二

月輪山莊我禪坊（九重御塔石櫃古物存舊址考云雲龍院南谷謂我禪坊谷按御改葬次可考）

在右同寺御廟所中

○林六

八十七代
〇後嵯峨院　邦仁　四年
文永九年二月十七日　五十三
法

亀山殿勅御堂浄金剛院 此寺載二尊院古圖同院宝塔納御骨事見于実隆公所業縁記
在同國葛野郡嵯峨天龍寺中 今方丈北亀山帝同所新堂建 或曰移仙骨于金原法華堂
火葬所亀山殿薬草院 同寺後山林之中

八十八代
〇後深草院　久仁　十三年
嘉元二年七月十六日　六十二
法

深草法華堂 但以堂號陵也 旧址今真宗院之地
在同國紀伊郡深草郷 今安楽行院南字真寺藪之地 五輪御塔石存近程于地福寺云
火葬所伏見 不知 或云伏見街道四丁目西方田地東冢及陵所在可考

八十九代
〇亀山院　恒仁　十五年
嘉元三年九月十五日　五十七
法

亀山殿法華堂浄金剛院 又御分骨東山南禅寺 又紀州高野山金剛峯寺
在同國葛野郡嵯峨天龍寺中 云後嵯峨帝同所浄仏塔東方 相並此所法華堂之地乎
火葬所亀山殿後山後嵯峨帝龕穸所並 西方此帝御葬地乎 為鎌倉中書王御墓

九十代
後宇多院　世仁　十三年
正中元年六月廿五日　五十八
法

蓮華峯寺傍山
在同國同郡上嵯峨大覚寺東北山云 稲荷田町[illegible]方陵上一間四面堂中五輪石御塔[illegible]八角堂

〇廿七

九十一代
伏見院　熙仁　二十六年
文保元年九月三日　五十三
法

深草法華堂
在同國紀伊郡 後深草院御同所
火葬所深草 今不詳 或曰深草安楽行院北竹林数地天王 又同所字十輪八幡祠在圃丘乎可考

九十二代
後伏見院　胤仁　三年
延元元年四月六日　四十九
法

深草法華堂
在同國紀伊郡 後深草院 伏見院 御同所
火葬所葛野郡嵯峨野 名蹟志云在之野念仏寺辺平山納嵯峨帝遺骨 若此帝御葬地乎

九十三代
後二条院　邦治　在位六年
徳治三年八月二十五日　二十四

北白川殿
在同國愛宕郡白川村領畑中 百萬遍知恩寺東方一丁 有老松 俗呼福塚

九十四代
花園院　富仁　十年
年十一月十一日　五十二
法

十楽院上山
在同國同郡粟田青蓮院御構内東南上坊堂中 知恩院方丈境地 冢上古松四株存

九十五代
後醍醐院　尊治　二十一年
延元四年八月十六日　五十二
崩於吉野山行宮

吉野山麓塔尾陵
在大和國吉野郡吉野町之東如意輪寺後山

南朝二代
〇後村上院　初憲良 後改義良　在位二十九年
正平二十三年三月十一日　四十一
崩於摂州住吉行宮

檜尾陵
在河内國錦部郡観心寺後山谷之間 陵上生檜樹及樁等雜木

南朝三代
〇後亀山院　初熙成　二十四年

百重原陵 世為亀山帝陵非也 南方興力之人ヲ所改葬云
在同國交野郡私市村獅子窟山寺 又山城國葛野郡北嵯峨 小坂 愛宕郡 福田寺御塔是為北方陵

九十六代
〇光厳院　量仁　二年
貞治三年七月七日　五十二
崩於丹波
法

常照寺後山
在丹波國桑田郡山國庄井戸村
火葬所常照寺後山之麓

九十七代
〇光明院　豊仁　光厳帝弟　十二年
康暦二年六月二十四日　六十

勝尾寺東谷 七重石御塔及宝篋印塔相並 陵前云云 記阿闍梨観専墓誌遺記 以仙骨葬于此乎
在摂津國嶋下郡勝尾寺封境之内

九十八代
〇崇光院　興仁　三年
応永五年正月十三日　六十五
崩於伏見殿大光庵
法

伏見大光明寺 按廸陽記正月廿三日御葬礼 今即成院内大石塔徒仙石谷 於同寺御茶毘佛亥云云 近傍此帝之御印十三層云
在山城國紀伊郡指月後山 彩兒長老屋敷地即大光明寺址 陵存于竹林中

〇廿八

九十九代
〇後光厳院　弥仁　二十年
応安七年正月廿九日　三十七
法

雲龍院後山 又深草法華堂 今安楽行院中家小圓丘 蓋以下至正親町院御骨納云
在同國愛宕郡泉涌寺中 火葬于同寺
分蔵御骨於深草法華堂及天龍寺中金剛院 難波天王寺 高野山泉涌寺中安楽光院等

百代
〇後円融院　緒仁　十二年
明徳四年四月廿六日　三十六
法

雲龍院後山 又深草法華堂 今
在前同所 火葬于同寺

百一代
〇後小松院　幹仁　三十年
永享五年十月廿日　五十七
法

雲龍院後山 又深草法華堂 今
在前同所 火葬于同寺
按建内記云 諸于雲龍院葬後光厳院後円融院両代御塔及称光院御塔云 然則今雲龍院後山三陵一者称光院御而後小松帝者為別所乎 寺僧説 称光院御茶毘所称小松 或疑此小松 即此帝之御葬所也乎 又称光帝先自此帝崩 御後世以御歴代之順次 誤而為後小松廟 又不可知 尚俟識者識実

栄仁親王
貞成親王　後出

百二代
〇称光院　実仁　十六年
正長元年七月二十日　二十八

泉涌寺中 今不知尊牌安置 御位牌殿第一位 又深草法華堂 今
在前同所 火葬于同寺

百三代
○後花園院 崇光曾孫 後小松猶子 三十六年 彦仁
文明二年十二月廿七日・五十二 法

山國常照寺後山 又大原法華堂前御墓 洛北般舟三昧院御分骨塔旧址月輪院之地
在丹波國桑田郡井戸村光厳帝御陵西傍 印
火葬所悲田院今上京西陣扇屋町大應寺 御餘燼奴于伏見者即般舟院而後茫洛北

百四代
○後土御門院 在位三十七年 成仁
明應九年九月廿八日・五十九

泉涌寺後山 御印木 樫 又伏見般舟三昧院 深草法華堂今亡
在山城國愛宕郡火葬于同寺此帝以下正親町院迄四代御廟相並 南上西面寺僧曰北上未知孰是各表以樹木廟側四方又有枯木松樫及拜石或云是後小松帝御印千

百五代
○後柏原院 在位二十六年 勝仁
大永六年四月七日・六十三

泉涌寺後山 御印杉株 又榊樁 又伏見般舟三昧院 深草法華堂今亡
在前同所火葬于同寺

百六代
○後奈良院 在位二十二年 知仁
弘治三年九月五日・六十二

泉涌寺後山 御印木 サクラ 又伏見般舟三昧院 深草法華堂今亡
在前同所火葬于同寺

百七代
正親町院 在位二十九年 方仁
文禄二年正月五日・七十七
誠仁親王 後出

泉涌寺後山 御印木 松 又伏見般舟三昧院 深草法華堂今亡
在前同所火葬于同寺

百八代
○後陽成院 在位二十六年 周仁
元和三年八月廿六日・四十七

泉涌寺後山 九重石 御塔 又洛北般舟三昧院 深草法華堂
在前同所火葬于同寺
另在御室堂荒廢彼樹院寺欽今安樂行院者寛文年中再建也

百九代
明正院女帝

百十代
○後光明院 在位十一年 紹仁
承応三年九月廿日

泉涌寺後山 八重石 御塔
在前同所以後御火葬止御代々同之 按元行遺事曰後光明帝賓天之時迄夫八兵衛者上言以來朝議改爲御土葬或云猶弄儀詣山明

百十一代 後西院
百十二代 靈元院
百九代 後水尾院
百十四代 東山院 光格御曾祖父

後桜川父
○後高倉院 守貞 太上法皇
貞応二年五月十四日・四十九

後光明帝賓天之時迄夫八兵衛者上言以來朝議改爲御土葬或云猶弄儀詣山明
天保十二年諡号御再興奉称光格天皇 後月輪山陵 仁孝天皇 弘化 實平安城以來之盛典也

北白川殿
在同國愛宕郡 聖護院村北竹林中

後花園父
○後崇光院 貞成 太上天皇
康正二年八月廿九日・八十五 法号道欽

西方寺堂下 称王冢
在同國紀伊郡伏見風呂屋町

後陽成父
○陽光院 誠仁 贈太上天皇
天正十四年七月廿四日・三十五

泉涌寺後山 後西院御廟傍 無縫塔
在同國愛宕郡東山

●[illegible]皇后
今上古年朝作御墓 代始又献若干

狭木寺間陵 土俗訛曰神功皇后陵 陵頂石槨蓋露
在大和國添下郡佐貴郷超昇寺村 陵

吉城入彦皇子孫
●應神皇后仲姫命 今陵頂石槨蓋露 仁徳帝母

中津山陵
在河内國志紀郡澤田村

●孝徳皇后間人皇女
天智十年二月

小市岡上陵 即越智岡上齊明帝合葬
在大和國高市郡

嵯峨帝二女
●淳和皇后正子内親王
元慶三年 寿年七十

嵯峨圓山陵
在山城國葛野郡大覺寺東南二町許

仲野親王女宇多母
●光孝皇后班子女王
昌泰三年四月・四十八

頭陀寺邊
在同國同郡鳴滝村 今稱王子社地是陵乎傳云所祭后爲仁和寺鎮守此辺地主神也

太政大臣基經公四女村上母
●醍醐後中宮藤穏子
天暦八年正月・七十

宇治陵 延喜式第五宇治三所一大后宇治陵二中后中宇治陵三母后今宇治陵
在同國紀伊郡木幡村 地藏山中圓丘數處未知孰是

右大臣師輔公女冷泉圓融母
●村上中宮藤安子
康保元年四月・三十八

中宇治陵 火葬于愛宕郡東南野 一説神樂岡西北

朱雀帝女
●冷泉中宮昌子内親王
長保元年十二月

在前同村五百山藥師院境内東竹林中 五輪石塔土人曰

比叡山下觀音院
在同國愛宕郡岩藏村 寺院六字 昔已廢

太政大臣兼家公二女一条母
●円融皇后藤詮子
号東三條院 女院号始于此
長保三年十二月・四十

鳥部野陵
在同國同郡火葬于鳥戸野塔在神樂岡東元眞如堂前山 此地雖宮址故建塔 一説在小墓屬本寺

関白頼忠公長女
●同帝後中宮藤遵子
号四条宮又東北院后
寛仁元年六月・六十一

般若寺艮地
在同國葛野郡鳴瀧村泉谷西北

関白道隆公女
●一条皇后藤定子
長保二年十二月・二十五

火葬於鳥部野
在同國愛宕郡沐石路北山 西 鳥谷

摂政道長公女
●同帝中宮藤彰子
号上東門院 門号始于此
承保元年十月七日・八十七

火葬于大谷本院
在同國同郡知恩教院正堂西 或曰阿陀陀堂北今五輪石塔在爲禪思道實墓

一条公二女 ●三條中宮藤妍子 號枇杷后 上東門院母 萬壽四年九月、三十四

火葬于大谷

在前同所（舊址考云、祇園東林今双林寺門前北畠中一丘在、崇石字女御田、世俗称祇園女御）

贈太政大臣濟時公女 小一條院母 ●同帝皇后藤娍子 號宣耀殿女御 萬壽二年三月

葬西院

在同國葛野郡西院村（今春日森東一丘、稲荷小祠在之地乎）

道長公三女 ●後一條中宮藤威子 上東門院同母妹 長元九年九月崩、三十八

圓城寺北櫻本（出大鏡裏書）

在同國愛宕郡（今不知）

三條帝女 後三條母 ●後朱雀皇后禎子内親王 号陽明門院 嘉保元年正月、八十二

後朱雀院陵傍（中右記云、御葬送山作所鳥部野）

在同國葛野郡仁和寺山（北山龍安寺方丈後丘乎）

道長公四女 後冷泉母 ●同帝妃藤嬉子 贈皇太后 萬壽二年八月、以疱瘡、十九

火葬于船岡西野（榮花物語、葬地為岩影、一條三條帝同所）

在同國同郡（今蓮臺野夙村之西紙屋川以東似陵一丘、皇后陵乎、或為二條帝陵）

宇治関白頼通公女 ●後冷泉皇后藤寛子 大治二年四月、九十二 於宇治剃髪

皇后陵

在同國久世郡小倉村東折居川（[illegible]）

関白教通公三女 ●同帝後皇后藤歡子 称小野皇太后、号常寿院 康和四年八月、八十二

常壽院傍

在同國愛宕郡市原村（今尚小堂存）

贈太政大臣能信公女 白河母 ●後三條后藤茂子 称滋野井女御 康平五年六月

今宇治陵

在同國宇治郡木幡村廃浄妙寺界内（字地蔵山圓丘之中）

関白師實公養女 堀川母 ●白河中宮藤賢子 應徳元年九月

醍醐山圓光院（火葬于鳥邊野、建當院藏骨云）

在同國同郡

後三條四女 ●堀川中宮篤子内親王 永久二年十月、五十五

雲林院尚侍堂

在同國愛宕郡雲林院村（字天王家）

贈太政大臣實季公女 ●同帝妃藤苡子 鳥羽母 贈皇太后 康和五年正月、二十八

後宇治陵

在同國宇治郡木幡村（東北弥山神廟、冢上存古松）

白河猶子 崇徳後白河母 大納言公實卿女 ●鳥羽中宮藤璋子 号待賢門院 又仁和寺女院 久安元年八月二十二日、四十五

法金剛院三昧堂（台記曰、還令葬法金剛院三昧堂）

在同國葛野郡法金剛院村

関白忠實公女 ●同帝妃藤泰子 号高陽院 久壽二年十二月、六十一

福勝院護摩堂

在同國愛宕郡白河地（今不詳其地）

贈左大臣長實公女 近衛母 ●同帝妃藤得子 号美福門院 永暦元年十一月二十三日、四十四

高野山往生院谷

在紀伊國伊都郡（今菩提心院東北一町許御墓存）

贈左大臣時信公女 高倉母 ●後白河妃平滋子 号建春門院 安元二年七月、三十五

蓮華王院側新法華堂

在山城國愛宕郡（今不詳）

鳥羽五女 ●二條中宮妹子内親王 号高松院 安元二年六月、三十六

香隆寺（或云葬于雲林院）

在同國葛野郡松原村

太政大臣清盛公女 安徳母 ●高倉中宮平徳子 号建禮門院 建保元年十二月十三日、五十七

大原寂光院

在同國愛宕郡草生村

後深草女 ●後宇多皇后姈子内親王 号遊義門院 徳治二年七月、三十八

今林法華堂

在同國葛野郡上嵯峨（大聖寺宮御抱、清涼尼院竹園中）

内大臣信實公女 後土御門母 ●後花園妃藤信子 号嘉樂門院 實和氣氏

伏見陵

在同國紀伊郡伏見元栈木町松林院（伏見殿下御所、又称舟戸御所）

贈左大臣晴秀公女 後陽成母 ●陽光院妃藤晴子 号新上東門院

泉涌寺後山（無墳墓）

在同國愛宕郡東山

神武第二子 ○神八井耳命 綏靖四年四月薨

畝傍山北墓

在大和國高市郡山本村林中（称小祠曰若井耳）

孝霊女 ●倭迹迹日百襲姫命 崇神十年、葬於大市

箸墓

在同國城上郡箸中村路傍

崇神皇子 ○倭彦命 垂仁二十八年十一月

身狹桃花鳥坂墓

在同國高市郡（北越智鳥屋二村立合塚字桝山、今[illegible]、在午頭天王社、元禄改為考陵）

景行三子 ○日本武尊 骸葬于前、今補之

白鳥冢（又河内丹南郡野々上村東伊岐谷古墳上有祠、今在于古市村墓尚存）

在同國葛上郡富田村（今称天王山、琴弾原是乎）

○大山守命 仁德兄 四十二年謀反沈于菟道川

那羅山墓
在同國添上郡猿澤池東（鬼岡山又名鬼冢）

履中皇子 ○市辺押磐皇子 為雄略帝被殺

蚊屋野墓
在近江國蒲生郡御薗郷妙法寺村（詳于長野某考）

用明二子 厩戸太子弟 ○來目皇子 推古十一年二月於筑紫軍中薨 依葬于此

埴生山岡上墓
在河内國丹南郡伊賀村管内羽曳山（称冢穴）

欽明女 ●當麻皇子妃舍人姫王 推古十一年七月皇子為征新羅將軍從到赤石薨

赤石檜笠岡上墓
在播磨國印南郡（自曾根越大塩村五日 日笠山墓今不知）

用明孫 皇極前夫 ○高向皇子

長野墓（世称仲哀陵、然一封國家河内志以為皇子墓似是矣）
在河内國錦部郡長野庄上原村（字宮山、惰在仲哀天皇陵 社 或云此地古高向庄之内也）

天武帝二子 ○大津皇子 朱鳥元年十月伏誅

二上山墓
在大和國葛下郡二上神社東

○同帝四子 一品舍人親王 後謚崇道盡敬天皇 天平七年十一月、六十

藤尾社（藤森記云葬于山背國添草山麓 藤尾即今藤森也）
在山城國紀伊郡稲荷社地（或云木社後丘陵中推古木所是乎）

○同帝六子 一品新田部親王 天平七年九月 後讀親王旧宅為唐招提寺戒院

兵庫山墓
在大和國添下郡伏見東陵北六十歩許（冢上在小村民祭焉）

同帝女 ●大友妃十市皇女 天武六年四月

赤穂墓
在同國廣瀬郡赤部村

●天武妃氷上夫人 同十一年正月

赤穂墓
前同所（共今不知）

●天智妃伊賀采女 山田郡司女大友母宅子姫 伊賀
○同阿閉皇子 大友同母弟、後母子山居于伊賀國
●同阿賀皇女 和銅四年五月廿六日於于杉坂驛 六月廿六日葬伊賀國賜封田如例
在伊賀國伊賀郡上野城北其之地、三墓相並

天智帝女 ●同帝妃太田皇女 天智六年二月、碑日春秋五十有六

越智崗上前墓
在大和國十市郡鳥屋村（俗呼石冢）

同帝御子啞而不語 ○建王皇子 齊明四年五月、八

今城谷上墓
在同國吉野郡今木村（今日法具良冢）

聖武太子 ○基王親王 神亀五年九月、二

那富山墓
在同國添上郡佐保山眉間寺之西

舍人親王子 ○左大臣正二位長屋王 天平元年二月薨 妻二品吉備内親王 夫人 葬生駒山

雙墓（一称長墓、一称宇郡墓）
在同　國平群郡梨木村

御原王子 ○和氣王 天平神護元年八月坐事流伊豆國、至此絞之、埋狛野

石冢
在山城國相樂郡下狛村

光仁四子 ○他戸親王 立太子、後被廢、同母后井上内親王 寶亀六年四月卒

庶人墓
在大和國宇智郡三在村上方

桓武五子 ○一品葛原親王 仁壽三年六月薨、六十八

親王墓
在山城國乙訓郡圓妙寺村（字葛原竹林中、土人呼親王冢、一云西古松下在小祠）

同帝七子 ○三品明日香親王 承和元年二月

別所墓
在同國久世郡廣野村東

平城子 ○贈一品阿保親王 承和九年十月

打出墓（又河内國大冢村在称此親王墓者、延暦以前之制造土人之符會而已）
在攝津國菟原郡打出村（傍在寺号曰阿保山親王寺）

桓武女 又桂内親王 ●同夫人伊予内親王 貞觀三年九月、

小塩山墓
在山城國乙訓郡上羽村（土人称業平母塔）

嵯峨女 ●綏子内親王 天長三年七月、

愛宕寺以南山
在同國愛宕郡五條若宮八幡域内（良陽小丸是乎）

淳和帝第二子 中務卿 ○三品恒世親王 天長三年五月、二十

鳥部寺以南墓
在同國同郡汰石路北山

同帝二子 ○廢太子恒貞 嘉祥二年出家法名恒寂、大覺寺開祖 仁和元年九月薨、六十

嵯峨圓山陵傍
在同國葛野郡大覺寺東南（圓山陵左方石冢 俗称入道冢）

文徳第二子 ○上野大守惟喬親王 寛平九年二月、五十四

小野山墓
在同國愛宕郡大原郷上野村東山下
又葛野郡小野郷東河内村安樂寺（号金龍山小野院、親王社在同村）

親王墓

○淳和帝三子
四品貞元親王、
延喜九年十二月・四十一
在上總國周准郡貞元村

同帝五子、陽成同母、号南宮
○二品式部卿貞保親王
延長二年六月、五十五
宮峯山四宮權現
在信濃國小縣郡称津鄉戌亥山上

同帝六子
○常陸大守貞純親王
延喜十六年五月・四十四
薨于北釜龍住千桃園之池
葬于圓覺寺、藏遺骨於水尾山
在山城國葛野郡水尾村（今同村圓覺寺古之水尾山寺旧跡而堂前在清和帝御塔其傍石佛疑親王納骨之処、又日四所權現一所者斧親王霊云）

白河皇幕
○實仁親王
應德二年十一月、
鳥邊野
在同國愛宕郡汰石路北山（西隅）

後白河二子
○高倉宮以仁王
治承四年五月廿六日赴南都於途中斃、三十、
光明山麓
在同國相樂郡綺田村

同帝皇女
●准后
宣陽門院
建長四年六月十八日・六十
醍醐山中直谷西麓
在同國宇治郡從上醍醐行炭山道上

後鳥羽皇女
●一品昇子內親王
号春花門院
建暦元年十一月八日・十七
鳥羽殿
在同國紀伊郡竹田村（今不詳）

同帝皇女
●禮子內親王
号嘉陽門院　出家後
文永十年八月・七十三
龍翔寺森
在同國葛野郡安居村西林中（今五輪御塔存）

聖武孝謙二帝外祖父
○右大臣藤原不比等公
養老四年八月三日・六十二
奈良岡墓
在大和國添上郡佐保山之西南（今眉間寺之坤方在老松五株丘子）（公卿補任曰葬佐保山推尚從遺教也）

鳥羽帝外祖父後閑院
○贈太政大臣藤原實季公
寛治五年十二月廿四日・五十七
後宇治墓（山神祟之古家、去皇后陵凡九間）
在山城國宇治郡木幡村（地藏山北之界、称土公所在大石）

九條殿又称月輪
○前關白藤原兼實公
承元元年四月・六十二
我禪房谷（雍州旧址考云雲龍院後山西藤兼實公墓、其西毘沙門谷其西北月輪云云）
在同國愛宕郡東山泉涌寺之境

九條廢帝外祖父後京極
○關白藤原良經公
元久元年三月・三十八
小松谷

一　苎

四條帝外祖父
○關白藤原道家公
建長四年二月、六十一
光明峯寺（元光東福在毘沙門谷）
在同國同郡（今鳥辺山要法寺墓地入口南崖上）

後一條殿又曰圓明寺
○關白藤原實經公
建治七年七月、六十二
長家
在山城國紀伊郡東福寺界內（今山門東辺十二頭中納言實歟旧址等）
在同國乙訓郡圓明寺村

補遺

西園寺太政大臣實兼公女
●後醍醐中宮藤禧子
元弘三年十月、三十五
鳴瀧之北梅畑
在同國葛野郡（今不知）

贈左大臣公廉公女後村上母
●後醍醐妃藤廉子
号新待賢門院
正平十四年四月廿八日、五十七
川上西陵（按川上陵在同郡神野谷村石塔、日長禄元年十二月是忠義王墓乎土人称南帝陵者非也今省之）
在大和國吉野郡高原村（陵起如小山陵上有社）

准三后北畠親房公女
●後村上中宮源顯子
正平八年六月入長谷寺為尼号新陽明門院
同十四年四月廿八日、二十七
白川陵
在同國城上郡笠間村笠間山

後醍醐第一子
○一品中務卿尊良親王
延元二年三月六日、二十七
於越前金崎城中
禪林寺
在山城國愛宕郡永觀堂道南畑中（今人家垣際御冢印樹之木）

○ 补二

同帝皇子信濃宮　征東將軍
○一品入道宗良親王
元中二年八月十日於井伊城・七十三
葬于南面八幡社林中
冷湛寺毀墓（印塔知久氏之土人祭堂称二宮大明神）
在遠江國引佐郡井伊谷龍潭寺境內（又河内石川郡山田村六谷寺址十三重石塔塞與存）

同帝子　大塔宮
○二品兵部卿護良親王
建武二年七月廿三日、二十八
於藥師堂谷窟中
淨光明寺（理致光院憎火化持妃齎御首上京云又一説本國寺日静上人弟子日献者為王遺骸于萬父墓于故離千鎌倉妙法寺在之云云）
在相摸國鎌倉郡二階堂村（冢上建石塔矣）

同帝子阿蘇宮　征西將軍
○一品式部卿懷良親王
元中六年三月十六日、六十
於高田御所
麓山悟眞寺
在肥後國八代郡宮地村

後村上皇子
○三品兵部卿師成親王
應永廿一年九月
於防州山口　法名惠梵
法泉寺（今廢）
在周防國吉敷郡山口

後亀山第一子
○一品太宰師世泰親王
天授三年七月十日・十八
如意輪寺
在大和國吉野郡金峯山

以上

陵墓御火葬地共凡百七十九箇所　津久井清影謹校

上官長論山陵牋

洛西野人津久井某謹獻書　官長閣下恭以
閣下文武英果忠厚寬恕來莅茲都之日首拔民間
疾苦通究滯賑貧困早朝晏退夙夜匪懈嘗惻上都
之損景勝去年春出令重禁毀傷高雄嵐峡之楓櫻
廷吒僧徒糾責不法都人士女同然庶嘉功美績繼
出某草莽鄙生殘喘棄物幸生盛明遭逢非常之大
君子俯喜時會之難仰感恩養之優遂有區々之志
情不可嘿而已　閣下幸擴言路無拒其狂直某雖
今日奏而明日黜纖芥無憾寅告上如左某少小最
耽典籍特注心　皇朝史乘偶閲山陵志中言
帝陵頹壞之狀未嘗不掩卷而泣下也竊自謂方今

○卅七

聖上撫運百廢興發獨山陵一議未足飽人情也饒
教　官家不暇修之苟食其土者何不盡尊崇焉乎
哉欲試以此于諸侯顧職非其人加以吏道之倥偬
未公語人矣居諸荏冉空抱素志某昔以蔭補蚤塵
吏曹末而於材無可取於德無可議况亦天與疲弱
不欲永塞賢者之路屢移病乞休退職以來周流畿
甸歷拜　累聖山陵因記其摸制以備異日之采要
越壬子春山陵點檢之命下不圖以賤息充奉役某
喜出望外私於使者曰凡墳陵事蹤躅紛埜茫亡確
據者不特爲少矣參稽咨謀不積以日月未輒易決
定古今論者騁說互出彼此抵牾大都雖傳故家之
筆札藉父老之口實要之不過聽度偏見之二今觀

元祿享保之論定似少有粗漏試言其一夫　寬平
凶宮奉于仁和寺大内山蓋下火所在于其山後宇
多野衆之所御瞻和州適有同名以故至遂謂大和
國宇多陵所在不知夫審決正僞必無遺憾也識者
猶艱之而况其他哉宜召學問淵博通曉今古者以
捕之行間兩府故事凡審實機密悲田院垣外屬例
任之今亦踵襲旧制以　至尊陵墓付之乎捕虜賤
人恐非所以副　國家恭順之意也爾曹其心之庶
依學士柴野氏採訪和州故事分差使臣於四方撿
討陵地嘗薦其說祭酒林君時以儒官無堪其任者
弗錄用某甚失望然守志彌堅專尋扳援之路矩意
閣下誤聽不以某駑下訪以當世某喜懼交荷具陳

○卅八

帝陵頹敗之狀　閣下每言稱善當是之時某心竊
誇寵榮以爲　帝陵事必成於　閣下之手亡幾果
有撿陵之令躬親巡視近郊特簡僚屬中縝密純良
者讃協其議包容不舍於是好古篤志之倫爭獻所
見僉願爲　閣下用某領命以來感戴罔鄂刮目以
望事成仄衆　大朝重發令曰當今以國用叢挫庶
績蝟毛姑因循　元享旧制補理從前之垣墉又聞
坂府奉令既就祗役矣然者山陵志已降諸家所述
作當寘不問是非某之所大望乎今日也恭以
聖子神孫臨御宇内奕葉累世宰制生民河山之固
六服來同帶礪之誓九州奔走可謂　皇統億載天
下一家者而山陵之典饗未備具某竊爲明時惜之

比年蠻夷並進民情不靖　朝廷大有事于群神於
斯時也決行檢陵重禁禦之法於將來實足荅上帝
之眷相清邊陲之祲氛愚民之貪利　帝陵后墓不
識那物有盜土石斬樹木暴露斂具至甚者起亭榭
窮宴佚於其上某偶覩之不覺汗洒透衣今擧狀其
近以仰遠方之思察坊祈　閣下少垂鑒念伏惟近
京如深草木幡諸地　桓武以下中葉妃嬪勲戚之
壟壤相望郊野歷年之久遺址存者無幾耳近時陶
瓦多取材此或往往墾闢田圃林藪山丘漸作平野
封陵奄爲稲麥嗟取陵上一杯之土葺民間棲息之
屋巨罪章々齏粉其軀何以足慰神威謹按畝火山
之　神武陵柏原之　桓武陵此　帝陵之尤者冝

○卅九

超他顯異崇禮今此二陵實滅厥所　國家之闕典
莫甚之某不量其分先以檢尋　柏陵爲已務或勞
力履歷或覃思舊志其事雖細微勤苦不敢讓故人
概昔之論者皆依準僞陵費嘴辨此即所以不得其
真也一云今伏見城山古御香大亀谷總柏原之地
也然而陵之所在爲城中央築城時陵壞必矣一云
小栗栖管内一丘称大塚者即是也一云谷口人家
之東左傍俗呼山伏冢即陵也　帝滔龍時称山部
山伏盖山部之轉訛也以上紛紜不決其徒殆倦摟
索遂泥執於山槐記中柏原者伏見山松原中也又
入伏見柏原内等之章句雷同於松蒲二氏者有之
按城山古之木幡山巨幡墓及関址今現存焉陵壞

之說乃不取也仍憶雄略紀載深草埴器條曰山脊
國内俯見古者深草都稱伏見三峰稲荷社今称伏
見稲荷此其類也然則山槐記之伏見山恐非城山
矣以愚見論之山伏冢此爲初葬之陵冢畔有溪流
一帶常史載大同元年十月御陵葬事註云是歳大
水或山陵壞損以故有還築之擧者此邪又其東南
有稱龕前堂原地豊公居伏見時穿其丘後通道山
階自是遂失其位置惟南面存巍々之狀恰與延暦
年間之制合又其東方有小丘呼曰御塚冢以右此
等人之指斯地爲葬所不亦宜哉是爲其一證陵本
名柏原今偏称擬陵不唱他以故世俗莫知谷口之
爲柏原者而其邊總稱御草山廣袤東西六百十六

○四十

弓南北千九十八弓中有深草管地之犬牙焉東踵
于向原頂上西踵于大亀谷内大谷町此所上古和
州之官道南踵于小栗栖道右北踵于瓦町東北峰
四疆俱十一町乃合於兆域之古法而陵固倚西被
置域内亦以有山谷經界不釐正故式云東八町西
三町又云加丑寅角二岑一谷今其北方有谷呼一
之谷其爲域内可知也又古記載柏原陵從東邊二
町許入五稲荷山南野今之御草山古之爲柏原是
爲其謬大嶋武好山城名勝志云大谷口山右向原
者是恐柏原旧跡也又並河永山城志云柏原野在
大亀谷北土人呼乞丐原類聚国史曰延暦十四年
八月遊獵于柏原野又僧白慧山州名跡志云柏原

地名曰谷口同所但此號今不稱中比轉云癩病原
其故地在御陵土人不知之登穢者問爲癩病依而
號也谷口之爲柏原此丘之爲眞陵是爲其證其佗
參證數柄今不煩條陳另欲具一書鳴痛哉　聖王
之山陵名實兩癈至雖父老田竣朝夕來往者不認
辨之所以然者何請姑援他辨之隆治以還　帝陵
頽圮相踵如上演而大和地爲尤甚　獻廟時寧樂
府進奏云大和國　帝陵蕪之元祿頃京兆尹松平
源公謂曰前年寧樂以何術隱伏其難隱伏者有司
猶如此下情奚足怪往昔喪亂不失巍々之姿却失
於昇代檢陵之日者亡他檢吏之所臨視驅役下民
推究口狀來往繹尋不一而足土人不堪勞擾相争

○四五

匿真欲以免其苛督也草山志有云深草山者東西
十町餘南北十八町餘旧爲深草任士秦氏之私德
慶長頃其家獻馬糧於　烈祖歷朝定以爲貢草地
京兆府世下制章禁侵犯山中原谷凡可五十皆古
跡也此記蔵匿數多之古跡或亦指擬陵地曰柏原
僉匪徒之欺騙同和州其便遣人于秦氏後長谷川
某乞貸御草山圖其家秘惜不出强請閲之曖昧罔
標某爽然自失于旹偶閲山本院秀建者語遂獲其
驗左傳者道曰山本院實淨藏之冐淨藏嘗以業力
安法觀寺塔　天子賞以深草山之地嗣法相傳任
于龕前堂原中屬坊宇文書悉付兵火子孫遂襄世
臣秦某幸之擅棄賜地獻諸公所閑原役以功已爲

其頭目遡古谷口全村本　桓陵之守戸諳今彼家
有凶禮闔鄉來會葬事秦某亦佐執紼因示以正嘉
二年諸陵雜事記一道中有云柏原陵下司大進阿
闍梨其子永秀世又稱元祿檢陵時秦某怖奸詐之
露與里人長三相謀指点他山爲　帝陵併沒柏原
之稱呼爾後其家崇厲並臻子孫不祀餘殃之所延
他人有室者亦皆死于狂癲癩疾乞丐原之名未不
浮今也龕前堂原及山伏冢壹爲野棋鉅竹只古什
數株財不失旧裝會泉涌寺土木之功興山伏冢古
松亦所充用嘗聞伐此樹時役夫有蒙傷害者假令
不真陵一且神明之所憑決不可行凌辱如右毒躁
草木幡或仁和寺諸地之陵墓被剥蝕也由於伏見

○四六

聚樂之營築至此上來之諸說一一脗合龕前堂之
爲　桓陵山本院之爲守司又秦氏及長三等之爲
隷屬判然而定竟乃多日之疑曠澒洗斷乎自得因
不自揣恭欲作聖蹟圖志一編以頒告四方成稿有
日續富繕寫進呈鳴乎汚　陵者之病癩秦氏之絕
祖饗實天誅灼々者可不悍畏哉今夫傭夫臺奴逢
住時令日猶獲上墓塋壠布香火陳酒菓以慰其先
於地下赫々　皇祖橫遭犯濫失威靈之所託某恒
念之痛息慨嘆殆忘起臥方今財路日繁蠲租之地
需貢賦封外之土羅金穀其下不堪誅求罪逆相[illegible]
往々而出焉　陵墓之塋實根乎此犯者固雖不[illegible]
於誅上之人重設共恪之章誰敢識之使之仰[illegible]

閤下傷　陵所湮峨如彼恕愚忠賛直如此掎摭典
故参畫公卿併與　閤下向來所自考定仔細収録
輸送　大朝載之簡冊納之秘府設必依旧制不許
所告訴先簡抜　眞陵顕著者宣喩國侯邑主厚行
奉護又其羅織辱者覆土石禁芻牧柵埒皆如初以
蕆異日之裁今其小國無祖廟及係寺觀之封内者
所轄官署便宜共給吏者常以歳時按部専察奸民
不法且　後村上　後亀山二陵本在攙㕝中請從
令列之于諸陵遠諭其郡國同加葺理兼者苟有人
心皆驩欣順皆若夫　寛平之於仁和寺　弘仁之
於大覺寺兆域崇修時饗不闕并非今日考問之例
也但有司録之巡視勿失其時則長免可傷之患今

〇四三

也中外多事度支告急之時雖然　閤下少留慮以
討事宜則不至多耗錢穀労吏民矣在古　兼應帝
之崩也賈人魚屋某畫傷　天子火葬之違祖制感
奮鳴志有司廟廊善之葬禮遂復古典又河尻氏吏
五條日加禮管内之　山陵令民知其可敬畏以塋
千載不遷之法後以善政多改任松前嘗請造巨艦
攻山丹其忠勇凡知此時人録其著者傳之乎世惟
修　陵一事遺而不載為可深惜況公侯有士之君
於封地之陵墓闕其崇禮而可邪願　閤下襲茲嘉
謀服茲令聞聽某上稟則天下大幸也狂冒至愚不
知所置惟　閤下寛其罪其誠愨以聞
安政二年二月十七日　翁之上此書時乙卯春官長即淺野中書君也

安政己未夏余致仕遂執咎時年六十六乃[illegible]思
嘗歴襄日撿山陵筆記其中譲抽繹旧書及至讀國
志以遂之後世必獨譯之草稿故加一且歎水災
付烏有又為譲陶陳人或悍之搆貸助志遂文
欲佑其人秘之于休生島神社以為身後之頒布而
未果其事也文久壬戌歳宇都宮侯請任諸陵修
補職其族戸田和州代侯奉大小臣僚入京適余嘗
遭赦免罷尋命充撿　陵奏之謀
朝廷賞下褒章拝命之榮也乙丑之秋修　陵功成
宇都宮侯及和州以下重得褒賞焉勸云今也百[illegible]全所

明治紀元龍次戊辰歳十二月
官許
發行
書林
大坂　河内屋茂兵衛
京都　菱屋孫兵衛
村上勘兵衛
勝村伊兵衛
井上治兵衛
林芳兵衛

日本漢文史籍叢刊

第五輯

地理

[General Information]
书名=14664129
SS号=14664129